FL 13-8 64

BL
2217
M8
v.5

Murakami, Senshō
Meiji ishin shinbutsu
bunri shiryō

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

文學博士 村上專精
文學博士 辻善之助
文學博士 鷲尾順敬
共編

明治維新
神佛分離史料

續編
下卷

株式會社
東方書院

BL
2217
M8
v.5

LIBRARY
MAR 25 1968
UNIVERSITY OF TORONTO

明治維新神佛分離史料 續編卷下

目次

挿入圖版目錄

目次（終）

明治維新神佛分離史料 續編巻下

村上専精
辻善之助 共編
鷲尾順敬

京都府下人民神葬祭聽許

〔太政類典〕第一編第百三十五巻 教法 葬儀僧尼

三年七月

京都府下童仙房新村ノ人民ニ神葬祭ヲ許ス、

京都府伺 辨官宛

京都府ニテ、今般開拓イタシ候童仙房ノ地ハ、新ニ村落ヲ成シ異端ノ教佛寺等モ

無之、先達神祇官へ相伺候處十禪ノ社一字ノミニ御座候、此地ニ土着セシメ候人民ハ、神葬祭申付候テ可然候哉、御差圖奉伺候事、京都

（朱書）「可爲伺ノ通、」

若王子神社本地佛

〔實驗〕佛教藝術の鑑賞〕（松田福一郎氏著　同氏所藏藝術品寫眞集并說明）

私の藥師如來坐像は、天平弘仁過渡期の作品として、私かに推奬するを憚らない、顏面筋肉の引締れる、兩頰の豐滿にして、而も過肥に墮せざる、堅く深く結んだ口に、其兩端を著しく凹ませて、慈悲の泉をたゝへたあたり、凡刀の決して及ぶ所でない、生氣に滿ちて、觸れば彈き返さんばかりの筋肉、天下の聰明を集中せるかの如き明眸、理智の閃く蛾眉の美しさ、寫實に墮せずして寫實より遠ざかり、而かも忠實な寫實の中に精神を包んだ行き方、卽ち寫實の心核を包むに、非寫實の皮相を以てしたる敏感、一點一劃を忽せにせざる注意、靈手妙腕、何の辭を是に挾みて非を打つべきか、（中略）



本藥師如來は、維新の當時、神佛分離問題の厄に遇うて、京都洛東若王子社より、民間に傳はつたものである、傳說を尋ぬると、桓武帝延曆奠都の際、勅願によつて、都の東西南北に四佛を安置して、王城鎭護を祈らせ給うた內の一佛であるとの事で、併し記錄によれば、後白河法皇熊野より十二權現の一なる若一王子社を京都に勸請せられた時、此藥師佛を神體として、熊野より移安せられた事となつてゐる、由來熊野は、三所權現、五所王子、四所の宮とを併せて、十二所權現と稱し、若王子は五所王子の一にして、證誠殿、早玉宮、結宮の主要祭神たる三所權現の次に位する、而して、若王子は、十一面觀音本地にして、藥師にあらず、藥師は早玉宮の本地なれば、何故に若王子社に藥師佛を奉安したかは解釋に苦しむ次第であるが、兎にも角にも、維新以前迄は、本藥師が若王子の御神體であつた事は、確定の事證であつて、疑を容れ得ないのである、

此熊野權現は、早く奈良朝より史上に現はれ、平安朝の初期には、宇多法皇御幸の事あり、奈良朝の末期から、佛敎と結びて、行者の道場とした形跡があり、從つて白鳳天平諸寺の、殆ど主佛たる藥師佛の造立が、此地にもあつた事と思はれる而已ならず、信者が競うて佛像を寄進した事は、推古佛が時々熊野から發掘せらるゝ事によ

つても想像し得らるゝ、本像も當時寄進の一に外ならない、

本像は一木彫成であつて、座下の蓮肉も同一木で出來てゐるが、普通の蓮肉より少しく短かく薄いのは、中世に切り取つたもので、其形跡が明らかに殘つてゐる、最初は佛として造られたのであるが、神體として安置するには、蓮花座の必要がないから、蓮片を取はづし、且つ安定を得る爲に、蓮臺下部の蓮片を挿す部分も切り取つたものと思はるゝ、

西京大佛寺內恭明宮安置佛像位牌等の件

〔中山家舊家臣香渡氏所藏文書〕

西京大佛寺內ニ恭明宮ト唱へ、御一新之際、御建造御所御黑戸(クロト)ニ從來被祭候佛像御位牌之類ヲ被移候、此義中御門從二位經之專商量候、右御品數御位牌ノ御名號等定メ、中御門ニ書記有之事と存候、所勞中ニ候へとも、息朝臣取調ニテ相分り不申哉、一應ハ聞合御賴申候、實ハ御沙汰之義も有之、先件承知致度存候事ニ候、內々右御談申度如此候也、

二月廿五日　　忠能

香渡殿

奈良縣平民神葬儒葬願出の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

四年

奈良縣下平民神葬（祭脫カ）或ハ儒葬祭願出ノ者處分

奈良縣伺　辨官宛

當縣下平民之者、是迄寺葬祭致來候得共、間ニハ神葬祭或ハ儒葬祭ニ致シ度旨願出候者モ有之、如何取計可申候哉、此段至急御答有之度候也、四年四月九日

指令闕

內山永久寺の神佛分離

〔神社諸願伺屆〕〇內閣文庫所藏

奉窺候口上書

一今般私初一山一統布留社ニ相附、復飾神勤仕候ニ付而者、在來之儘、山內ニ住居仕候儀、神佛混亂仕、兼而被　仰出之御趣意ニ悖相振候次第与奉存候ニ付、自今山內者社地ニ相改、永久寺伽藍諸堂等、境外ニ伽藍附之山林ニ而相應之地御座候、不[illegible]此所に轉遷仕、猶亦持僧之儀ハ、同流之內ゟ人撰仕、上乘院爲院代差置、佛祭勤修爲仕申度、右等之儀ニ取計仕不苦御座候哉、奉窺度、此段宜御沙汰奉願候、以上、

元和州內山永久寺山務
上乘院前大僧正事
復飾
布留社々務
高塚藤原亮珍

慶應四辰年
九月十三日
辨事
御役所

〔社寺取調類纂〕一三八　〇石上布留社 內山亮珍　己巳年指出書類取調書

一己巳年五月十九日差上ル
奉願上候口上書

一私共儀、元內山永久寺山務上乘院住職罷在候ニ付而者、法眼ヨリ相進、大僧正迄

蒙　勅許候事ニ御座候處、昨年蒙　御沙汰、布留社ニ相附、復飾仕、於神祇伯家ニ唯一神道之祭祀方并作法向等預相傳ニ、同神社々務神勤仕候儀ニ候得者、奉恐入候願ニ御座候得共、何卒神社与被爲對、相當之官階拜任叙之儀伏而奉歎願申度、格別之御憐愍ヲ以、願之通蒙御許容候者々冥加至極深難在仕合ニ奉存候、此段宜御沙汰奉願上候、以上、

和州
布留社々務
鷹司故入道准后猶男
內山藤原亮珍

同家嗣
花山院前右大臣家厚男
內山藤原亮愼

明治二巳年
五月

神祇官
御役所

一同日差上ル

乍恐奉願上候口上之覺

一當境内ニ御鎭座被爲在候　正産守護之神、又者生産守護之神寶与奉尊稱來候
御靈璽者、神功皇后三韓御征伐之砌、於對馬國ニ御産御催被爲在候節、
皇軍之御事被爲遊　御遂、御目出度　御歸朝迄、皇子御降誕御引延被遊度候段、
住吉三前大神江御祈誓被爲在候御時之御靈璽ニテ、則御願御滿足ニ相成候ニ
付、住吉大神与被爲齋祟候御物實ニ依テ、
皇居ニ奉齋、嚴ニ御納被爲置候御寶璽故、御箱之儀者、七重ニ纒御包藏御座候趣、
尤　勅封ニテ御辛櫃ニ奉鎭納在之候、右御靈璽者永久寺始祖亮恵上人江、鳥羽
皇帝ヨリ永ク奉預リ候樣蒙
勅詔、則神輿ニ奉迁、其後養和年間、新ニ神庫造立付、神靈璽ヲ奉納、　正産守護神
与奉崇候以來、乍恐御降誕之事被爲在候節ハ、神靈璽被爲遊　御迎、御祈願被
爲在候、其節々金銀幷縮緬猶御辛櫃御簾御繪附御紋御挑灯其外神輿ニ相附候
御品々御寄附被爲在、神納相成御座候、然ルニ右神庫近年顚大破ニ及、神慮之程
茂奉恐入候ニ付、修理仕度心得居候處、今般
大政御一新、別而神佛混淆御廢止被　仰出、於亮珍茂、在留社ニ附、復飾神勤被仰

付奉畏候折柄ニ御座候得共、右神庫相改、社殿ニ造營、御生産御安平天下泰平五穀豐饒之御祈禱抽丹誠申度志願ニ御座候ニ付、出願仕候儀茂深奉恐懼候得共、不顧恐、奉懇願候、如前段、鳥羽皇帝ヨリ奉預御曆(歴カ)代厚御由緒茂被爲在候神靈璽之儀、殊　王政御復古恐悅之御時節ニ被爲在候得者、出格之御沙汰ヲ以、右社殿造立之儀願上之通被仰付、重々之願奉恐入候得共、御寄附物之儀唯菅(只管カ)奉願上候、

右之趣幾重ニ茂御採用之程伏而奉願上候、以上、

大和國山邊郡
石上布留御靈神社名神大月次相嘗新嘗別當神宮寺永久寺山務上乘院復飾改名
社務　內山藤原亮珍

明治二巳年五月

神祇官
御役所

一同日差上ル

御届奉申上候口上書

一私共儀、昨辰年八月蒙　御沙汰復飾仕候ニ付而者、高塚亮珍与相名乗候趣御屆
奉申上置候處、此度內山亮珍与相改、御屆奉申上候、此段宜御沙汰奉願上候、以上、

明治二巳年

五月

和州布留社別當神宮寺
永久寺山務上乘院事
復飾改名　內山藤原亮珍

同　家嗣　內山藤原亮愼

神祇官

御役所

一同五月二十二日差上ル

奉願上候口上書

一私共儀、元內山永久寺山務上乘院住職仕罷有候ニ付而者、總テ堂上方同樣幷殿
被　御付、參　朝仕來候處、昨年蒙　御沙汰、布留社ニ付復飾仕、同神社々務神
勤仕候儀ニ候得者、奉恐入候願ニ御座候得共、何卒神社ニ被爲對、於此後ニ茂、堂
上方同格御取建之儀、伏而奉歎願申度、格別之御憐愍ヲ以、願之通蒙　御許容候
者々、冥加至極深難有仕合ニ奉存候、此段宜御沙汰奉願上候、以上、

明治二巳年　和州

五月

布留社々務
鷹司故入道准三后猶男
內山藤原亮珍

同家嗣
花山院前右大臣家厚男
內山藤原亮愼

神祇官
御役所

此願書壹通九月五日奈良縣御廻シニ相成御掛紙左ニ

願之趣難聞屆事
但位階願ニ候ハヽ別段之事

一巳七月十二日差上ル
奉願上候口上書

一舊永久寺一山一同、昨八月蒙　御沙汰、布留社ニ附、復飾神勤仕候ニ付而者、職

名之儀左之通取定申度、

元學侶方復飾之輩一同職名

新　神　司

元行人方復飾之輩一同職名

宮　人

但黄衣着用

右邊之儀御差支之筋不被爲在候得者、御許容之程奉願上度、此段宜御沙汰奉願上候、以上、

明治二巳年　　　和州

七月　　　石上布留社々務

內山藤原亮珍

神祇官

御役所

一同七月十八日差上ル

石上布留社祭日

內山永久寺ゟ神佛分離

一四月　中卯日神祭
一六月　晦日大祓
一九月十四日　宵宮祭 夕祭　十五日例年祭當日
一十一月　中卯日神祭
一十二月　晦日大祓神事
一元三五節　例月朔日、十五日、二十八日等、別段祭祀仕候、尤日並御祈禱天下泰平五穀豐饒之抽丹誠ヲ、神勤仕居候事ニ御座候、且內山境內鎭座社頭幷正產神社神勤方之儀者同樣ニ御座候、右正產神社例祭之儀者、五月初卯ノ日神事執行仕候、此段宜御沙汰奉願上候、以上、

巳七月　　　　布留社々務
　　　　　　　內山藤原亮珍

神祇官
　御役所

一同七月二十四日差上ル
乍恐奉窺候口上覺

一今般當社年中祭日巨細御改ニ付、去ル十八日祭日書附奉差上候處、猶從來社人
并年預共ヨリ茂奉差上候趣ニテ、齟齬仕候ニ付、昨二十二日蒙御尋奉恐入候、
此儀今般布留社年中祭日、巨細書取ヲ以至急（脱アラン）可仕申樣御書下ケ頂戴之趣、近
社ニおゐて傳承仕、當惑何之儀茂不存奉、自然社務無念ニ而延日相成候樣達
御聞候而者奉恐入候ニ付、早速從來社人東右衛門方江、代永井式部ヲ以、去ル
七日尋（間カ）向之上示談爲仕候處、右衛門申答候ニ者、巨細祭日書取之儀者、畢後ニ
而茂社人方ヨリ可差上候間、社務方ニ者勝手ニ可致抔与申聞、一切頓着仕不
申、至急御趣意ニ茂相振、當惑、猶茂色々申談候得共、一圓取敢不申、剩御書下ケ
一應之許（拜カ）見茂爲仕不申、存外之儀ニ乍存、不及是非ニ次第ニ御座候ニ付、私共
始配下一統、復飾以來之年中祭日書并御斷書相添、早速當御官江御届可差上
心得ニ而、去ル九日奈良御府江御届奉申上候處、一社之儀、格（各カ）冊ニ相成候而者、
御不都合候間、合冊一紙ニ仕可差上樣蒙 御沙汰候ニ付、前段成行篤与申上
候處、則卽日社人御召出、嚴重ニ御利解之上、社務社務（衍カ）名前ニテ一紙ニ仕可差
上旨、社人江被仰聞候處、何就古格之儀抔与申立、從來社人一同ニ而差上度、押
而申上候ニ付、乍恐數度御府江御苦勞奉掛、色々社人共蒙御呵ヲ候得共不相

用、強(情カ)乘ケ間鋪儀申居候ニ付、不止得、猶當　御官直御支配之御趣意茂在之候事ニ付、先神祇官ゟ双方ヨリ可差上樣蒙御沙汰ヲニ付、右之通取計仕候事ニ御座候、然ルニ今般猶一紙ニ仕可差上候樣蒙　御沙汰ヲ奉許(弁カ)承候、乍去從來社人之者共、萬事ニ相附、前願心得方之者共故、所至(迄)熟談無覺速(束カ)奉存候得共、今日ニ茂定而上京之儀与奉存、旅宿夫々尋向(問カ)爲仕候得共、未タ上京無御座候由、早々歸國仕、示談可仕本意ニ御座候得共、一社ゟ之御書下ケニ而茂差押ニ、一統ゟ拜見爲仕不申、社人一同之了簡ヲ以、諸事取計仕候ニ付、迚茂一社一和難仕候間、乍恐夫々御召出シ之上、御利解被仰、乍恐祭日巨細一紙ニテ可差上樣急度被爲仰付度奉願上候、此段宜御沙汰奉願上候、以上、

巳七月廿四日　　布留社々務

内山藤原亮珍

神祇官

御役所

一己巳年八月二日差上ル

乍恐奉窺候口上書

一去ル七月十八日、至急御用召ニ付、同廿三日參　官仕候處、當社祭日之儀蒙　御尋、翌廿四日巨細書付ヲ以御斷奉申上候處、則書附御預リニ相成候而、從來社人參　官迄、於旅宿ニ扣居候樣蒙　御沙汰奉畏候、然ルニ今日ニ至リ社人參　官不仕申趣、私共滯留之儀ハ不苦候得共、至急御用之段々延日何共奉恐入候儀ニ御座候、右仕合ニ付、恐縮之至ニ御座候得共、從來社人之今一應　御沙汰可被爲成下候哉、且者　私共ヨリ爲呼登可申候哉奉伺度候、否早(急カ)給御下知之程謹而奉願上候、以上、

明治二巳年　布留社々務

八月二日　內山藤原亮珍

神祇官

御役所

一同日差上ル

乍恐奉伺候口上書

一去ル七月十三日、私配下復飾之者共、職名之儀書付ヲ以奉願上候處、則書付御預リニ相成有之候事ニ御座候、乍恐何卒早(急カ)給御下知之程謹而奉願上候、以上、

明治二巳年　　　　　　　　　布留社々務
八月二日　　　　　　　　内山藤原亮珍
神祇官
御役所

一八月四日差上ル

奉差上候口上書

一大和國山邊郡石上布留靈神社奉仕人之儀者、是迄從來社人与唱勤來候家筋、當時三軒御座候、然ルニ無綠(緣)之事ニ候故、何ぞ義農業仕候而相續仕罷有候、猶亦於用途向ニ者、年中諸入費悉皆氏子中ヨリ之寄附物ヲ以取賄仕候事ニ御座候、右ニ付、氏子共之內ヨリ頭立候者、年預与呼、出頭仕、社人共立會ニ而萬端世話取締仕、寶庫鑰等迄右年預之者共仲間江預り居候事ニ御座候、然ル處、昨年八月永久寺一山桃尾山一山中筋寺等神社ニ付、復飾可仕樣蒙御沙汰、則一同復飾仕候ニ付而者、双方合一ニ而職掌方相定、神勤仕中度相心得、一社昨(作カ)法向神勤職役并役名座席等之規則取極仕置度段、從來社人并年預之者共始双方江追々示談仕候得共、何ぞ義自儘勝手之事而已申立、示談相整不申、別而於社人共ニ者、　御一新

之御趣意篤与奉戴仕不申事哉、新古之儀而已申爭、從來之簾（廉）ヲ以、惣体之差配仕可申心得ニ茂御座候、就當今ニ而者一旦示談行届相極候事件茂、取崩候樣之振舞仕、双方共私曲自由之事共計申張、聊之儀共異論故障ヶ間鋪申立候樣之振合ニ候而、於下方ニ示談ヲ以取究仕候儀者難出來、此儘等閑ニ差置候節ハ、自然神勤向茂不行届ニ相成候譯柄、別而當今恒例之神祭等茂、前條私論ニ依テ延引仕御座候樣之次第柄ニ而、神慮之程茂實ニ恐入奉存、種々心配仕候得共、行届不申、奉掛御手數候儀茂、寔ニ以奉恐入候得共、前段之次第ニ付、不得止事奉歎願候儀ニ御座候得者、何卒格別之御憐愍ヲ以、双方御闘糺被成下候上、一社一同之者共、和熟合一仕、大切ニ神勤可仕樣被　仰付、猶亦神勤向職役幷役名座席等之儀、各相當之事ニ御取定御下知被成下候樣奉願上度、格別之御憐愍ヲ以、願之通御許容被成下候者々、莫難有仕合ニ奉存候、則一社神勤仕候從（マヽ）工細別紙書取ヲ以奉申上候、此段宜御沙汰奉願上候、以上、

明治二巳年　　大和國山邊郡石上

八月四日　　布留社々務

内山藤原亮珍

神祇官
御役所

一同日別紙差上ル
布瑠靈神社奉仕之輩

一社務職
元永久寺山務
上乘院大僧正復飾
鷹司故入道准三后政熈末男
内山藤原亮珍

一祠職
上乘院附弟法眼復飾
花山院故從一位家厚男
内山藤原亮愼

一
元永久寺々中ニ而上
乘院配下之僧侶復飾
亮珍配下
神勤輩　廿一人
但四人隱居御座候

一
元桃尾山寺中
僧侶復飾
神勤輩

元中筋寺之内
僧侶復飾
當時內山亮珍配下

一　　神勤輩一人

布留神社

一　　從來之社人

布瑠神社氏子之内
舊家之者ニて年預与
唱從來神役勤來候

一　　年預之輩

但、寶庫御鑰等此者共仲間ニ預リ居候事、

右之通リニ御座候、以上、

明治二巳年　　社務

八月四日　　內山藤原亮珍

神祇官

御役所

一巳九月二十七日差上ル

口上之覺

一
右元中筋寺復飾之者ニ御座候處、此度職號之儀奉出願度趣申出候ニ付、東京江出願可仕之處、遠路難澁ニ付、御憐愍ニ而於　當官御採用相成候樣奉願上度、何卒相當之職號被仰付度、此段宜奉願上候、以上、

日野　炊(欣カ)吾

巳九月

布留社
內山社務藤原亮珍

神祇官
御役所

一同日差上ル

口上之覺

一
日野　善輔

右之者、此度別紙之通奉出願度候趣申出候ニ付、東京江出願可仕之處、遠路難澁ニ付、御憐愍ヲ以於　御當官ニ御採用相成候樣奉願上度、乍恐得与御糺明之上御沙汰ニ相成候樣宜奉願上候、以上、

布留社

巳九月　　内山社務藤原亮珍

神祇官

御役所

一同九月晦日差上ル

奉願上置候口上之覚

元内山永久寺山務上乗院配下寺院ニテ布留社ニ付復飾仕候

神職共

右神職共之儀、是迄配下續ヲ以、私共差配仕候ニ付而ハ、諸事不都合無之様取示仕置候事ニ御座候得共、万一心得違仕、一分之心得ヲ以、不束之儀直々出願仕候抔之輕俺成事共御座候而者、深奉恐入候間、何卒不奇(寄カ)何事、私共調印之添翰ヲ以出願仕不申儀者、御取上不被成下候様、偏而奉願上置候、此段宜御沙汰奉願上候、以上、

明治二巳年　　布留社

九月　内山社務藤原亮珍

神祇官

御役所

一同日差上ル

奉願上候口上之覺

一去ル五月十九日奉願上候當境内ニ鎮座ス正産寺護之御神御靈璽、是迄神庫ニ奉鎮座御座候處、右神庫近年頗及大破候ニ付、加修理申度心得ニ御座候折柄御一新別而神佛混淆之儀御廢止被仰出、於亮珍茂　布留社ニ附復飾神勤被仰付、深畏候御時節ニ御座候得共、右神庫修理之便宜ヲ以、社殿相改、長日天下泰平五穀豐饒之御祈禱　抽丹誠申度志願ニ御座候ニ付、何卒神庫社殿ニ改メ候儀、願之通蒙御差許候得者、深奉畏候、御沙汰相待不申、再應奉願上候儀茂、實ニ恐懼仕候得共、右神庫追々破損相增、神慮之程茂恐入候ニ付、至急修理ニ取掛リ申度、依之不顧恐再應奉願上候儀ニ御座候得者、格別之御憐愍ヲ以、早(急カ)給御許容之御沙汰被成下候樣、伏而奉願上候、此段宜御沙汰奉願上候、以上、

明治二巳年　布留社

九月　　　　　　　　　内山社務藤原亮珍

神祇官

御役所

一巳十月九日差上ル

御届奉申上候口上書

一先月晦日奉願上置候配下之者、何等之儀ニ不寄、出願仕候節ハ、私共添翰仕、左之印形テ以調印仕差出申度候間、以來不都合之儀無之樣、兼而印鑑奉差上置候、宜奉願上候、以上、

明治二巳年

十月　　亮珍印　　布留社　内山社務藤原亮珍

神祇官

御役所

一同日差上ル

乍恐奉伺候口上書

一私共配下之輩、舊永久寺山務中寺法定ヲ以、萬事隨先規ニ、今日迄取締仕來候處、

御一新以來神職之事ニ御座候得者、隨舊儀ニ取計仕居候而者、不都合之儀多分御座候ニ付、今般舊定ヲ以改正仕、別紙之通取定メ仕度候間、御差支之儀不被爲在候哉、此段奉窺候、宜御沙汰之儀奉願上候、以上、

明治二巳年

十月

布留社

內山社務藤原亮珍

神祇官

御役所

一同十一月二十八日差上ル

石上布留社鎭座年月由緒之事

一當社ハ南向ニテ鄯靈大神一座　相殿六座

一中座ハ建布都大神、　左座ハ布都奴斯魂神也、

右座ハ布留御魂神也、

建布都大神ハ武甕槌命ノ神氣ノ御名也、此神劔ヲ號メ鄯靈申ス、

一左座東方ノ布都奴斯魂神ハ素盞烏尊ノ天上ヨリ帶テ降レル十握ノ劔ノ神氣ノ御名也、

一右座西方ノ布留御魂神ハ、宇摩志麻治命ノ先老（考カ）饒速日ノ命天上ヨリ受來ルノ天爾（璽）瑞寶十種ノ神氣ノ御名也、

一左東宇摩志麻治命

一右西五十瓊敷命

一右西木事命

一右東白河天皇

合七座

一石上ハ地名、布留ハ神寶ノ尊稱、御劔ハ即チ武甕槌命ノ荒御魂也、因テ布留御魂ト申奉ル、神昔高天原ニ坐ス時、天照太神高皇産靈ノ尊及ヒ衆神等ノ選ニ依テ、遂ニ豐葦原ノ中國ニ天降リテ、大己貴命ノ權威ヲ摧キ、橋（猾）狂ノ荒振神ヲ挫シキ、香香背男ヲ天ニ誅シ、建御名方ヲ信濃ニ追、風塵ヲ八極ニ攘ヒ、四海ヲ治メ國土ヲ鎭ム、於此ニ天孫初テ日向國ニ降臨座シテ、百王永ク日祚ヲ傳ヘサセ給フモ、偏ニ此神ノ武功ニ賴ル、神武天皇東征ノ時ニ至テハ、奇シク異靈ヲ熊野ニ現シ、夢ニ入テ高倉下ヲ曉シ、天劍降テ官軍蘇醒ス、是レ所謂韴靈即チ當社ノ神體也、

一定天社國社祟神天皇七年十一月ニ、伊香色雄命ニ勅シテ、天神地祇八十萬群神ヲ祭、神地神戸ヲ定ム、此時師靈ノ神劍ヲモ禁裡ヨリ始テ當社ニ遷シテ祭ラシメ給ヘリ、

一若宮神殿　一座

左神宮前岡頂　但西向

石上振若宮ハ出雲建雄神也、此神ハ日本武尊帶ル八握ノ劔ノ神氣ノ御名也、舊名ハ天叢雲劍ト申、三種ノ寶物ノ内神器ノ一也、尾張國愛智郡熱田祝部尾張連等掌神是也、人皇三十九代天智天皇ノ御世、新羅ノ僧道行件ノ寶劔ヲ偸逃、本國エ向シカドモ、境ヲ出コト不能、攝津國難波ノ浦ニ棄テ歸シカ、又外ニ説モ有、此由ニテハ、國人寶劔ヲ取テ近江之大津ノ宮ニ献上ケル、人皇四十代天武天皇、都ヲ大倭淨見原宮ニ迁サル、其時本ノ伊勢ヘモ又熱田ヘモ送ラレズ、共ニ迁給ヒ、大殿ノ内ニ留座マスガ、朱鳥元年丙戌六月ニ、寶劔之祟ニ依テ、天皇ハ病給フ、鎰トニ知シメシカハ、十日戊寅ニ尾張國熱田ノ神宮エ送遣ハサル、其夜石上振神宮ノ神主布留宿禰邑智カ夢ニ、東ノ高山ノ末ニ八重雲カ立騰、其雲中ニ神劔有、光ヲ放テ國ヲ照、其劔ノ本ニ八津ノ龍並ベテ坐、明旦邑知(智)彼ノ地ニ到リテ見レハ、

靈石八箇カ出現ス、邑智ノ小童ニ託シテ曰ク、我ハ尾張連カ女祭レル神也、今是地ニ天降リテ、帝都ヲ保テ諸ノ氏人カ守ラン、宜ク敬ヒ祭ヨ、此石ハ八雷神ノ變身也、仍而神託ノ隨々神殿ヲ皆谷ニ造リテ神ヲ祭リ奉テ、出雲武尾神ト申奉ル、彼ノ八箇ノ靈石ハ、俗ニ日谷ノ八龍王ト申テ今ニ鎮座マス、貞觀五年癸未閏六月二日癸亥、神宮南ノ前ノ岡ノ上ニ、五色ノ雲カ靄ケリ、昨夜神主布留宿禰邑常カ夢中ニ、布留川上日谷ヨリ神劔一振下レリ、前後左右ニ小刀子八首扈從テ流ル、石木ニ當ルト、皆鉄(缺カ)損シカ、神宮ノ後北ノ川ノ邊ニ止リ給ヲ、美女飛來リテ其神劔ヲ取上テ、神宮ノ前岡ニ逆シマニ植立テ祭リシカハ、神劔ハ光リヲ放ツ、彼小刀子八首ハ小蛇ト變化シテ扈從ヒ、岡ニ來テ五色ノ雲ヲ起ス、美女邑常ニ語テ曰ク、八劔神ノ分身出雲武尾神ナリ、我ハ熱田ノ祝部尾張連カ女ト云テ躰ヲ幽ス、夢サメテ神宮ノ前岡ヲ見レハ、誠ニ五色ノ雲カ靄ク、仍テ事ノ由ヲ奏聞ス、勅シテ新タニ神殿ヲ造テ、出雲建雄神ヲ敬ヒ奉ル、今ノ若宮殿是也、

元慶元年丁酉九月廿五日ニ、大嘗會ノ祭ノ官幣ヲ獻ラル、

別社

一天神御祖殿　一座　在二神宮前岡上一但西向、俗ニ云二八皇子殿一

高皇產靈尊
加ヘ祭神
天照大日孁尊
攝社七座
神皇產靈尊
魂留產靈尊
生產靈尊
足產靈尊
大宮賣神
御氣津神
天靈嚴事代主神
當社大祭日之事
一九月十五日
今此日年中大祭日ト謂モ、纔ニ幣供ヲ捧テ祭禮ニ拜趨シ、氏人子等群參スル而已、

一中比ヨリ以來、四方干戈ヲ事トシ、利慾ヲ貪リ神地ヲ押領シ、神社ヲ發キ神物ヲ竊盜ス、神官共擾々ニ不堪、分散逃亡シ、寧處ニ遑ナシ、於此式法ノ祭禮モ年々ニ廢シテ、故實多クハ取失ヘリ、就中當社十種神寶禁裡鎭魂ノ御祭ハ、宇摩志麻治命ヨリ傳ヘテ、國家殊ニ重シ給ヘキ神事ナリト云、今者絶テ其沙汰ナク、唯空シク名耳殘レリ、但纔ニ蘋蘩溪(溫藻カ)亡ノ幣供ヲ捧ケ、祭禮ニ拜趨スル而已、社頭寂寥トシテ、其歎嗟骨體(髓カ)ニ入ルト云ヘモ、布留高橋高ケレハ渡リテ告ン縁モナシ、今也四海太平ノ化ニ歸、治敎文明ノ運ニ中レリ、廢レタルヲ興シ絶タルヲ繼、望秩ノ禮ヲ擧テ、彼御神德ヲ新ニセン事、今ヲ除テ又何レノ時ヲ期センヤ、

一當社神領之事

拾三町四反一畝十八分　丹波市村

貳拾四町七反九畝　永原村

七町四反七畝　布留村之事　馬場村

惣計社領四拾五町六反七畝拾八歩

右昔有之處

人王百七代正親町院天正十三年乙酉年、大和國武變依テ、一圓押領セラル、

今有當社境內山

東西　七百三拾三間

南北　百五拾間

今此外神領社領絕テナシ、

當社神職交名之事

別當神宮寺永久寺山務上乘院大僧正事復飾
菊亭前大納言尙季男
內實鷹司故入道准三后政熙末男

內山藤原亮珍

元永久寺山務上乘院附弟法眼事復飾
花山院故從一位家厚男

內山藤原亮愼

同寺中ニ而上乘院配下僧侶復飾內山亮珍配下

成瀨大炊

同　遠江

前田彈正

植嶋中務

水野主殿

仲林主計
三浦石見
德岡帶刀
藤井兵部
牧野民部
木林左門
宮崎修理
芳本采女

同寺元行人方復飾之者

北　權之進
松井良之進
福岡廣之丞

右今ニ復飾仕候者同人身ニ候得共元ヨリ隱居ニ付略之

神宮寺
元桃尾山寺中從僧侶復飾

鳥見越後
忰壹人

葛原勇
　悴壹人
神宮寺
元中筋寺之内復飾　日野炊（欣カ）吾
從來神勤社人之者　東右衛門
森數馬
向治部

右之通ニ御座候而外ニ
田村之住ニ而市川臣末（マヽ）葉ト申候而九月十五日神事ニ携候者　十五人御座候
當社氏子之内舊家之者ニ而年預与唱從來社人与立會年中諸入費采女皆世話仕來候者　十九人御座候

右之通御座候、宜御沙汰之程奉願上候、以上、

明治二巳年　布留社
十一月　内山藤原亮珍

神祇官
御役所

一同日差上ル

添而奉窺上候

一當境内ニ鎮座ス　正産神社又ハ生産守護之神實与奉尊崇守護仕來候御神ハ、神功皇后三韓御征伐之砌、於對馬國ニ御産御催被有候節、　皇軍之御事被爲遊御遂、御歸朝迄　皇子御降誕御引延被遊候樣、住吉之三前大神ヘ御祈誓被爲有候御時之御靈璽ニ而、則御願御滿足相成候ニ付、住吉大神与被齋崇候御物實ニ依テ、皇居ニ奉齋嚴ニ御納被爲置候　御寶璽故、御箱ニ纒、御包藏御座候、最勅封ニ而御辛櫃ニ奉鎮納在之候、右神靈璽ハ遇(偶)々永久年中永久寺始祖亮惠ヘ、從鳥羽皇帝永ク奉預可奉仕候蒙　勅詔、當境内ニ奉勸請齋請奉仕來リ、其後養和年間、新ニ神庫造立仕、神輿ヘ神實(寶)ヲ奉鎮、則新殿ヘ奉遷宮、正産神社与奉尊崇守護仕來候、鳥羽帝ヨリ奉預リ候以來、當今ニ至迄、聊變易之儀無之、於朝廷ニ御産御事被有候節者、則伏原家執次ニ而、右正産守護神靈璽ヲ御迎被爲有、御祈禱被爲有、其節々御寄附金銀縮緬等、猶御辛櫃御紋御簾御繪附御挑灯總テ神社ニ相

附候御品々御奇(寄カ)附被爲有、社納相成御座候、右如件、

鳥羽皇帝ヨリ蒙　詔候以來、御歷代厚御由緒被爲有候御事、然ル爾、今般　王政御復古被仰出、殊ニ神佛混淆御廢止、悉ク　御一新之御布令謹而奉拜承、復飾之上、一ニ神勤可仕蒙　勅許、恭仕合、彌以古道純粹之神事祭尊(奠)奉仕、　神功皇后神誓如ク、生產守護神之御稜威ヲ、朝夕奉祈、御安產守護神幸ヲ一向抽丹誠奉仕度、只今迄聊兩部習合言蜜(密)之拜式布留大神幷枝宮枝社、殊ニ正產神等祭尊(奠)仕來候舊幣ハ　朝廷御布告ニ隨、速ニ石上布留川ニ禊秡仕、以來永久寶祚無窮御生產安平ヲ奉治、天下蒼生五穀豐饒奉祈禱度候事、最社領錄(祿)物等無之、或ハ勸化或ハ有志之者ヨリ寄附物等ヲ以、殿宇修理供物備進等止來候、前件之次第不顧恐、書面ヲ以テ御窺奉申上候、何卒出格之思召ヲ以、何ト(マヽ)就蒙勅下度奉願上候、恐(誠脫カ)誠惶謹言、

大和國山邊郡
石上布留御魂神社別當神宮寺
永久寺山務上乘院復飾
內山社務　亮珍印

正產神社守護人与稱奉仕候人躰

明治二巳年
十一月

前嶋藤原利正印
清水藤原利好印
永井藤原義英印
梅枝紀　春昌印
前嶋藤原利保印

神祇官
御役所

一庚午二月十日差上ル

奉申上候口上書

一當社別當由緒之儀、證據之品物有無可申上旨、去月廿五日蒙　御沙汰奉承知畏候、有ハ往古ヨリ別當職勤務仕來候儀ハ相違無御座候得共、奉尊覧備候樣之證據之品物者無御座候、乍恐萬端蒙　御賢察、宜御沙汰之程謹而奉願上候、以上、

明治三午年　布留社
二月　內山藤原亮珍

神祇官

御役所

一庚午二月十二日差上ル

奉歎願口上書

一當社ニ相附長者總括之儀者、於　御官ニ相當之者に御沙汰被成下候儀ニ者御座候得共、私共懇願之儀者、是迄神宮寺管轄、且永久寺々務總括永ク仕來候譯柄、何卒冥加ニ相叶候儀ニ候得者、長者總括之儀、私共に被爲仰付度奉願上候、自然配下內山神職之者迄、外方に支配相替り候樣之事ニ相成候而者、忽惑亂之儀出來候儀ゟ可有之樣愚察仕候、猶又御一新後、於一社ニゟ麁忽之儀多分有之、彼是混亂兎角一和平定難相成、神慮ニゟ難叶、且奉對　天朝恐入候次第与奉存候、私共ニゟ實ニ忍がたく奉存候ニ付、願之通り長者總括之儀、私共に蒙　御命令ヲ候得者、深難有仕合、正實ヲ以一社諸事細々之儀者取締仕、廉立候於事件ニ者、一々　御官に伺之上取計仕、格別盡力仕、一社一同合一神勤可仕樣取締、精潔(清)ヲ以御奉功(公)仕度心底ニ御座候得者、猥ニ歎願仕候儀深恐入候得共、何卒萬事御賢察之上、私共に長職被仰付度奉願上度、此段宜御沙汰之儀、兼而奉歎願置候、以上、

明治三午年　　布留社

二月　　　　　　　　　　　　　內山藤原亮珍

神祇官

御役所

一午三月十七日差上ル

奉窺候口上書

一昨巳十月九日、私共配下內山神職規定條目幷舊定條目等ヲ以奉伺候處、追而御沙汰可被成下樣被仰付候ニ付、差扣居候處、爾今何等之御沙汰茂不被成下候儀、然ルニ內山社中復飾後萬端變革相成候事故、右永久寺以來管轄仕來候規定條目改正仕、伺濟之上、規程ニ基惣括取締仕度心底ニ御座候而、右伺中諸事緩々仕居候場合ヲ見込、配下內山神職之者共、昨年來逆心仕、種々奸計ヲ取企候ニ付、彼是惑亂相成、於奈良御縣ニ、數多奉掛御苦勞候處、從元配下一同申立方甚不都合之儀ニ御座候而、則去ル三日尙又八日御縣江一統御召出シ之上、配下之者共嚴重御呵蒙　御利解ヲ、諸事如是迄、當家支配者相請、一和可致樣被仰付、當家ニ茂一同平定可致樣盡力取計可仕樣蒙　御沙汰深奉畏候事ニ御座候而、何卒早々平定取計仕度候得共、配下一統無辨者共、當今者諸事恣之振舞仕居候ニ付、右社

中平定之儀ニおゐてハ、掟規無御座候而者、取計仕兼心痛仕候、何卒右伺條目不都合之儀御座候得者、乍恐被仰聞、別段御差支之儀不被爲有候者々、御許容御沙汰被爲成下度、乍恐此段奉願上候、以上、

明治三午年　三月十七日

布留社　內山藤原亮珍

神祇官

御役所

一同日差上ル

口上書

一今般

奉幣祭典御再興被仰出候ニ付、古例取調可差上樣御沙汰ニ付、取調仕候處、左ニ御座候、

一貞觀元年八月、掃部頭藤原貞敏ヲ勅使トシ、奉幣有而、雨ヲ祈、卽日雨零故ニ祈雨ノ神八十五坐(座)ノ內ニ例(列)レリ、

一康保三年八月ニ、止雨ノ奉幣ヲ獻ラル、是十二社ニ例(列)ナル根元也、上代ハ高庭ノ

地前ニ神門ヲ立テ、勅封ニテ其鑰匙ヲ神祇官ノ庫ニ納ラル、祭ニ臨テ官人遺（遣カ）シテ開門掃除シテ祭供ス、

一白（河）川天皇永保年中ニ勅シテ、改テ拜殿ヲ作ラル、毎年ノ仲冬中寅日鎭魂祭雨ノ妨ヲ遠慮リ坐ト也、並臨時祭ノ奉幣並歌舞ノ十例走馬ヲ行ナワル、勅使ハ參議藤原俊明卿トカヤ、毎年九月十五日祭禮ノ始也、

一若宮

元慶元年丁酉九月二十五日ニ、大嘗會ノ祭、官幣獻ラル明年戊戌二月四日ニ新年ノ祭、小官幣ヲ預カレリ、

右之外見當不申候間、御賢察之上、宜御沙汰之程奉願上候、以上、

明治三午年　　布留社

三月十五日　　內山藤原亮珍

神祇官

御役所

一午五月二十三日差上ル

奉願上候口上書

一今般一社交名可差上樣被仰出奉承知畏候、早速取調可差上之處、當內山社中元空院之儀ニ付、當今取調中ニ御座候而、今一段奉仕交名不治定ニ御座候ニ付、深恐入候得共、交名書之處、暫御猶豫伏而奉願上度候、尤至急取究仕、早々交名書可奉差上候間、何卒此段宜御沙汰奉願上候、以上、

明治三庚午年五月　布留社

內山藤原亮珍

神祇官

御役所

一午七月二十七日差上ル

奉伺口上書

一私幷家嗣亮慎、元內山永久寺山務上乘院住職仕罷有、同院之儀者、代々法眼ヨリ相進大僧正迄、蒙　勅許候事ニ御座候處、一昨年蒙　御沙汰ヲ、　布留神社ニ附、復飾神勤仕候ニ付而者、相當之官階拜任叙之儀、昨年五月歎願仕置候處、百官之儀者御廢止ニ相成候事ニ候得者、位階拜叙之儀計ニ相改、更出願仕可申上候哉、且是迄總テ同樣御取扱罷有候同列ニ御座候而、復飾仕候南都元興福寺中喜多

院空晃昨年從五位蒙　勅許候、右等之傍例ヲ相添、位階拜叙之儀、小折紙ヲ以奉願上候而者不苦候哉、何卒ニ者格別之　御憐愍ヲ以、早(マヽ)行位階蒙　勅許候樣幾重ニ茂歎願仕申度、此段宜御沙汰之程偏奉願上候、以上、

庚午　　布留社

七月二十八日　　内山藤原亮珍

神祇官

御役所

（朱書）此書面ハ御下ケ置ニ相成候、

一八月二十八日差上ル

一石山社内山住社中交名取調奉差上候、

内山管轄　内山藤原朝臣亮珍

同家司　内山藤原朝臣亮愼

成瀨眞治容執

前田民夫爲知

植島敏維積政

水野忠雄重昌
中林健治良盛
三浦慶治勝虎
德岡　環重政
藤井堯雄光潜
成瀬速見忠熈
永井　浩義英
梅能木計尾春昌
牧野民治伸款
木村榮治良直
宮崎勝江盛久
芳本倉治宗里
鈴木豐治喜眞
北　良治宗里
松井勇治良水

福岡廣悦貞元
三浦萬治宗智
宮崎勝治昌盛
前田常夫良忠
小野義雄經治
牧野喜幸光信

明治三庚午年　　布留社
八月　　内山藤原朝臣亮珍印
惣代　前田民夫印

神祇官
御役所

大和金峯山藏王權現神社改定の件

〔太政類典〕第一編第百廿五卷　教法　神社四

元年十一月

奈良府下金峯山寺藏王權現ヲ神社ニ改定處分

　神祇官意見

別紙金峯山寺ヨリ(申脱カ)出候藏王權現等ノ儀ハ、當夏差出候書面并附紙ノ寫御廻シ申入候、篤ト御勘考可給候、抑藏王權現胡佛ニ相成候テハ、所々ニ同名ノ社モ有之事故、不都合ニ可相成候間、佛躰ニ候ハヽ取除キ、神社ニ立置候樣致度候、尤境內ニ地主神ノ社モ有之ヲ以相考ヘ候ヘハ、元來神地ヘ寺院造立致候事ハ顯然ニ候也、元年十一月十二日各縣

　社寺掛辨事意見

神祇官ヨリノ付紙ノ通ニテ別段異論無之候也、

　奈良府ヘ通達辨事

前顯ノ通ニ候間、金峯寺歎願書三冊相廻シ申入候、可然御取計可有之候也、元年十一月八日別冊欠

〔社寺取調類纂〕四七七

今般就御復古、神佛混淆之御改正、御布告之通可相守筈ニ付、末派修驗共、式内神社氏神大社於別當者速ニ變革、神職ニテ可相勤儀者勿論之事ニ候、其他何天何明王龍王神抔佛家之神モ不少候ニ付、心得違之族モ有之候得共、急速取調モ難行屆、大態修驗之儀者余(ママ)宗ニ事替リ、兩部神道習合之宗風ニ付、有髪剃髪肉食妻帯不嫌、常帯劔仕、大峯山共余高嶺大嶽修行仕、

(朱書ノ分)中出之通、俗躰ニ均キ宗風之事故、速ニ復飾仕、純粋之神道奉シ可申事、

皇國衛護人民豐樂惡摩(魔カ)降伏等之於祈禱者、神祇道之秘法言摩供等勤修仕、中ニハ我慢勇壯之輩モ有之候ニ付、近來於諸侯モ多分武役ニ被相用、信甲羽之三州越後等ニハ、尚以數多之末派有之、殊更甲州之地ハ、舊幕旗下之族モ有之、强氣之場所柄ニテ、既ニ於甲府者、臨時式武役ニ被召遣候旨、請印迄被仰付、一致勤王之旨屆越候輩モ有之候折柄、神佛混淆

(朱書ノ分)武役モ相勤候程ニ有之、且勤王一致之旨一段之事ニ付、復飾勿論之事、

不相成旨、御達驚歎承仕、今日之業躰ニ係リ、當惑仕、兩部修行之宗體、今更廢止仕候テハ、元來貧困之山伏共、迚モ相續難相成候ニ付、妻子ニ至迄、必死之場合悲歎血涙仕、殊ニ東國戰爭之地ハ勿論之儀、追々難澁申立無據次第甚不便ニ存候上、江州甲賀郡

朱書ノ分
奉仕之社有之上ハ復飾仕候迚相續方難澁有之間敷事、

飯道權現社僧之內、岩本院梅本院之義ハ、從往古大峯當山正大先達職ニテ、諸國袈裟下之修驗夥敷有之候處、今般復餝被仰出候ニ付、從前之袈裟元本寺宗滅ニ相成候哉、山內立退、外方ニテ相立候哉之旨、是亦追々伺出、大ニ混雜仕、數多之山伏共、

朱書ノ分
宗滅ニテハ無之旨、從共方觸達、疑惑不致樣可仕事、

一時之制止モ難行屆、御平治之上ハ、御趣意之通、屹度取調改正可申付候間、貧窮之山伏共、當分暫飢渴之愁苦ヲ爲相凌度候ニ付、何卒御憐愍ヲ以、此儘暫時之御猶豫被願上度候、將亦今般和州吉野山金剛藏王ヲ神號ニ轉シ、一山之衆徒復飾願出、御聞濟ニ相成候旨、大峯先達共拜承仕、驚入、右之趣屆出候ニ付テハ、吉野山內之儀ハ、同國多武峯一山抔トハ格別相違之場所ニテ、堂舍神社々人寺院民家入交合混雜之所ニ有之、大峯開祖役行者幷當山大祖理源大師、吉野山ヨリ逆峰修行之規則被立置候以來之恩澤ヲ以、民家ニ至迄相續仕來、此度復餝仕候テハ、一日モ難立行、山內之儀ハ顯然之事ニテ、

朱書ノ分
民家立行難澁中立無之候事、

如何ニ相心得候哉、難相分、尤大峯山之儀ハ、皇國最第一之靈場ニテ、吉野金峯山ヨリ

紀州熊野迄行程七拾里之行場靡筋左右八町宛者不申及、所々禁伐場所ニテ、則當本兩山支配ニ有之、山上權現之儀ハ、吉野一山之預リニハ候得共、

（朱書）山上權現、社號ニ難相改候ハヽ、可破却事、

復飾神勤ニ相改候儀ハ、迚モ難相成場所、且役行者之奉仕神職ニテ相勤候儀モ不都合、其上藏王

（朱書）役行者社號ニ相願候ハヽ、可被聞屆候事、

權現之儀ハ、吉野山緣起ニ有之候通、全佛躰顯然之處、或書ニ安閑亭(帝)尊靈ナルカト云所ヲ以、神號ニ相成候テハ、却テ混淆ニ相成可申、且大峯奧ニ篠本堂之儀ハ、兩山

（朱書）尊靈ト可相心得事、

修驗秘密道場山籠之場所ニ候得ハ、山上權現之儀ハ、往古之通、兩山先達ヘ致返却、大峯山上ニ無拘之、乾度被仰付度、夫是以諸國散在之修驗共、御趣意之旨奉戴不仕、修驗宗滅ト心得、唯騷擾仕、万一不慮之徒粗暴之擧動有之テハ、

（朱書）御趣意柄精々相諭シ暴動無之樣可致事、

御時節柄深被恐入候間、於修驗道、當分暫之處御猶豫御願被成度、何分御幼稚之宮、都テ難行屆候間、願之通暫時御猶豫之段、被爲聞食候樣、宜御賴被存入候、以上、

（朱書）奉仕之社其儘ニテ復飾被仰付候御仁惠之御旨趣不相辨、不都合之願不被及御沙汰候事、

（慶應四年カ）七月十三日　三寶院易宮（マヽ）內

吉村主殿

辨事傳達

御役所

吉野藏王社之儀、祭神ハ何分相分兼候、或說ニス（ハカ）安閑天皇御靈又ハ金峯神ナト申候トモ、未タ確證無之候、然レ𪜈神社タル事別紙之通ニ候間、右之邊ニテ御達有之度存候也、

明治四年正月十四日　神祇官

辨官御中

藏王權現ノ事

金剛藏明王大權示現ノ略語、釋迦牟尼佛大權聖者忿怒降魔ノ身相ヲ現ス、故ニ權現

ト云フ、以上書類中所見、　慶應四年五月、寺院願書中ニ白鳳中役小角祈請ニ因テ大勢忿怒ノ
身相出現ス云々、又或書ニ、此書ハ本朝神社考、神社啓蒙等ヲ指ス歟、又三才圖會歟、安閑天皇ノ尊像也ト云フ云々、
小角ノ時今ノ藏王權現ノ身相ニ變化シ給ヘルナランカ、
右之通由緒ニ御座候間、神號ニ相改可申哉、又在來通ニ可仕哉、此段奉伺候トアル處
ノ付紙、
一(朱書)「御布告之通神號ニ可相改事」
トアリ、又說關三法(寶)院願書中ニ、安閑天皇尊靈ナル歟ト云フ所ヲ以テ、神號ニ相成候
テハ、却テ混淆ニ相成可申云々ノ處ノ付紙、
一(朱書)「尊靈ト可相心得事」
トアリ、此ヲ其後ノ寺院ノ詫願、三寶院願書、當省奈良五條縣ノ往復書、明細書、一山ノ
圖佛躰ノ圖面等ヲ以テ、元亨釋書、本朝神社考、神社啓蒙、神名帳考證、同叢說、同覈錄、大
和志、大和名所圖會等ニ參考スルニ、安閑天皇ノ御事全ク無稽ニシテ、根據トスヘキ
者更ニ無シ、然ル處、右ノ二所ノ付紙取調行屆カス、甚疎漏ニシテ、後日混雜ノ基トナ
レリ、然ルニ、神地ト決議ノ上、他所同名ノ地ヘモ固ク差圖アリ、全體佛法渡ラサル以
前ハ、神地タル事勿論タレ共、今ハ無双ノ佛山タレハ、今日復古ノ施行容易ナラス、然

レモ柏崎縣ノ同像ハ、佛ニ付可廢トノ差圖アリ、其本タル吉野ノ同像ヲ差置テハ、不都合ト云ヘシ、然レモ、柏崎ハ神躰ヲ改メ、社號ヲ替フ可ケレハ、其實以後ハ吉野ニ關係セス、且ツ實ニ神佛混淆アリテ、其趣異ナル事アリ、吉野ハ寺院、社人、奈良縣共、皆佛タル由ヲ訴フ、五條縣ノ疑惑尤ノ事ナリ、畢竟吉野山ノ一名金峯山ニテ、諸寺院ヲ金峯山寺ト稱スル趣ナレハ、金峯神社（名神大月次相嘗新嘗）ヲ混シテカクノ如クナルヘシ、金峯神社ハ藏王堂ヨリ七丁許リ南ニアリテ、今金精大明神ト稱ス、別當復飾シテ菅原若佐ト號ス、此地ヲ藏王堂ノ奥院ト稱ス、不可然、其他藏王堂ノ此社ニ關係スル事アラハ一切停止タル可シ、

藏王權現祭神及御問合候處、神體之事ト御汲取ト相見ヘ候趣之御答ニ候ヘトモ、右ハ一昨冬、其御縣ヨリ辨官ヘ御申出有之候金峯山寺惣代歎願書ニ對シ、別紙寫シ通、神社ト確定之見込ヲ以及差置候間、今日迄（マヽ）致居候義ハ無之篤（筈カ）ト存候、尤御申越之趣ニテハ、祭神不分明ト存候間、相應之社號ニ相改可然ト存候、此一條是迄御縣掛リ之事故、右之（マヽ）五條縣ヘ御掛合（マヽ）神社ト決（定カ）言候樣御取計有之度候也、

明治（マヽ）年六月七日　　神祇官

奈良縣廳

當縣管下吉野郡吉野藏王權現之儀ハ、先管轄奈良縣ヨリ神祇官ヘ再三申立之義有之處、其未相應之神號ニ革メ候樣達相成居候趣ニ御座候、處（然カ）ルニ先達テ來段々取調官員出張見分等爲致候處、別紙圖ノ如キ佛像有之、神躰トハ不相見樣奉存候、然レ共、先般神祇官之達書ニ依リ相考候得ハ、他ニ同號之佛更ニ神社御改祭相成雖モ有之候テ、斷然神號ニ革候樣ニト申御趣意ニ御座候哉、猶別紙相添此段相伺申候、以上、

明治四年五月晦日　五條縣印

辨官

御中

（コ上貼丁）シヨリ浮居氏異像ヲ摸シテ傳ヘタルモノト相見ヘ候條、左之通御指令相成事カ、

奈良縣ヘ指令案

白鳳以前ニ復古致シ、地主神金精明神ヲ以本社ト定、金ノ峯ノ神社ト可稱、尤藏王堂幷佛具佛躰等悉皆取除可致事、

但、社僧修驗ハ復飾可任望事、

柏崎縣ヘ指令案

往古吉野山地主神金精明神勸請致居候事ニ付、吉野同樣、金ノ峯之神社ト可稱、尤佛軀佛具ハ取除可致事、

但、社僧等復飾可任望事、

附紙

藏王權現ヲ廢シ、金峰神社ノ號ニ復スルハ、的當ノ確說ナレド、愚民信向ノ藏王ノ事ユヘ、一旦斷然處置相成リテハ、若シヤ民心ノ居合ニ關係シ候テハ、方今布敎ノ障碍ニモ可相成カ、奈良縣官員ヘ篤ト打合セ、地方官ノ見込モ閒糺シノ上、斷然ノ處置ニ左祖候ハヽ、本文見込ノ通、若シ民心ニ差響クノ懸念アラハ、一山ノ內ニテ境界ヲ立、神佛混淆セサル樣ノ處分アルヘシ、

吉野山藏王權現書類之儀ニ付申上候書付

吉野山藏王權現之儀ニ付、書類差出方之義、先般御達有之候處、吉野山之義ハ、昨五月中五條縣取建、其節吉野山事件同縣ヘ引渡書類不分明ニ候得共、取調候處別紙書付

壹綴（見カ）是當候ニ付、差出申候、猶右ニ付御取調之儀モ御座候ハヽ、五條縣管下之儀ニ付、同縣ヘ御達相成候樣仕度、此段申上候以上、

明治四年十月廿三日　　奈良縣

神祇省

御中

吉野山藏王權現之儀ニ付伺

當縣管下吉野郡吉野山藏王權現之儀ニ付、先管轄奈良縣取調以來之手續書、且繪圖面等相添、今五月元五條縣ヨリ相伺置候處、未御下知無御座候ニ付、早々御指圖相成候樣仕度、再志（應）奉伺候、以上、

明治四年十二月十四日　　奈良縣令　四條隆平

同權參事　津枝正信

神祇省御中

（受）明治六年六月廿四日　（回）三十日　（濟）七月三十一日　（丞）三島　（議）常世長胤　（補）宍戸、黒田、

大和金峯山藏王權現神社改定の件

(出仕)鈴木　(課)社寺

奈良縣管内吉野山藏王之儀ニ付再伺作

議按

當藏王堂之儀ハ、設令金峯神社ヨリ一里餘ヲ相隔、中古以來僧侶ノ建立ニシテ、佛躰ヲ安置スルト雖、本社ハ峯ニアリテ、人里ニ遠ク、不自由ナルカ故ニ、人里ニ近ク離宮ヲ建立セシ事論ナク、所謂口宮トモ申スヘキモノナリ、大抵高山ノ峰ニ鎮座候神社ニハ、必ス人里近キ處ニ離宮ノ有事、今勝テ數ヘ盡シ難ケレト、其一二ノ例ヲ以云ハヽ、富士山ノ須走口兩吉田社、日光二荒山神社等、各里數ヲ隔テ、離宮ノ有ヲ思フヘシ、サレハ考證課之論モアリトイヘトモ、畢竟神社ニ紛レナキガ故ニ、既當一月モ復古ノ指令ニ及ヒタリ、然ルヲ今更考證課ノ指令ノ如ク爲サハ、偏ニ本省ノ威權ニ相障、甚以不見識ト云ツヘシ、依テ断然神社ニ改正セシムヘシ、

指令案

書面藏王堂ノ儀ハ、全ク金峯神社ノ離宮ニシテ、佛像ヲ置事ハ僧徒ノ常也、依テ本舎ハ不及取除、佛像佛具ノミ取除、本社ノ離宮ト可致事、

但、境内ノ區別等ハ、地方ノ適宜ヲ以テ可相定事、

再議　　小中村清矩

吉野山藏王一件ハ、戊辰以來難決ノ按ナルヲ、本年一月斷然指令有タルハ、素ヨリ至當ノ事ト思フニ、猶又奈良縣ヨリ伺アルヲ熟覽シ、事情ヲ推究スレハ、伺之狀件ニ理アリト云ヘシ、抑吉野山ノ神地ナル事、素ヨリ論ナシ、然レトモ、藏王ニ限ラス、滿山ノ寺院佛閣如意輪寺吉水院ヲ始トシテ、其幾計(許)ナルヲ知ラス、然レハ、藏王堂ノミヲ神地ノ佛刹トシテ廢スヘキニ有ラス、但シ元來權現ト稱シテ神社ト紛ラハシキ嫌ヒ有ルハ、旣ニ神祇官以來取調アリテ、佛躰ニ相違無キ由顯然タレハ、縣ノ伺之如ク區域相定メ、藏王ハ佛閣トシテ舊ノ如ク差置カレ可然歟、但鳥居等ハ取除キ、一切神社紛ハシキ事ハ改メサスヘキ也、又先般柏崎縣ニ指令シテ、藏王ヲ金峯神社ト改メタルニ牴牾セント云論モ有ルヘケレト、素ヨリ藏王堂ハ白鳳以來神地ニ在テ權現トモ稱シタレハ、自ラ金峯神社ニ紛レタルヲ、今般諸國ノ分ハ改正スルノ條理ニ當レハ、差支有ルマシクヤ、

追書

見込之通ニ相成候上、向來若諸國藏王社ヨリ伺出候ハヽ、悉ク金峯神社ニ改サセ可申候、若不得心ニ候ハヽ、藏王菩薩ニ改メ、荼枳尼天辯財天同樣ノ佛刹致シ可然、

但シ、氏子有之候ハヽ、取放、旁近ノ神社ニ附可申儀、嚴ニ申付可然ト存候事、

三議　　　　鈴木七等出仕

伺之趣難聞屆候事、

但、先般及指令候藏王堂取毀之分ハ取消候條、自今金峯神社口宮ト相心得、社僧ハ相當之者候ハヽ、任望復飾之上、神官申付不苦、地所ハ本社ヘ接續候樣適宜ヲ以區域相立可申事、

右之通ニテハ

當管内吉野郡吉野山藏王堂之儀ニ付猶又伺書

當管内吉野郡吉野山藏王權現之儀ニ付、舊奈良縣ヨリ、別紙甲印之通辨官ヘ申立有之候末、神祇官ヨリ朱書之通被達、其後舊五條縣ヨリ乙印之通實地取調繪圖面、且其以前手續書類寫共差添、辛未五月中再相伺候處、御下知無之ニ付、同年十二月、當縣ヨリ丙印之通御催促申出候處、本年一月ニ至、白鳳以前ニ復古致シ、地主神金精明神ヲ本社ト定、金ノ峯ノ神社ト可稱、尤藏王堂幷佛具佛躰等、悉皆取除、社僧修驗ハ復飾可

任望云々、御指令之趣致承知候、然ルニ右吉野山金峰山寺之儀ハ、既ニ辛未五月中、舊五條縣ヨリ申立之通、別紙之如キ佛像三躰安置有之候藏王堂ヲ以本堂ト致シ居、舊朱印地高千十三石餘モ、右藏王堂幷寺僧ヘ被宛行候儀ニテ、方今金精明神ト稱シ候式內金峯神社ハ、藏王堂ヨリ大凡一里餘巳午ノ方ニ自往古鎮座、於實地ハ區域判然ニ付、神社ハ神社、佛閣ハ佛閣ト、如故被差置、且從前之社僧戊辰年復飾神勤罷在候ニ付、今般改テ神官ニ被任候カ、或ハ更ニ相應ノ人躰撰擧奉仕爲致、寺僧ハ依然佛閣属置候方可然、左モ無之、藏王堂取除、神社ニ改候時ハ、金峯神社新舊並立之形ニ可相成、又藏王堂ヲ取除、金峯神社ヲ舊地ニ差置候節ハ、社寺現在之境內ヲ除ノ外、一般上知云々之公布ニ照準取調候ヘハ、前件金峯神社ト藏王堂トノ距離凡一里餘計モ有之候儀ニ付、社域十分ニ相立候共、藏王堂跡地ハ無論境外上地ニ属シ可申、旁何レニモ於實際不都合、加之神佛混淆御改正之御主意ニテ、現在ノ佛閣ヲ故ニ神社ニ被改候御主意ニテハ有之間敷哉ニ被存候條、今般別紙總山之略繪圖差添、猶又相伺候間、今一應篤ト御詮議、至急御差圖被下度候也、

明治六年六月十五日　　奈良縣權參事　小池　浩輔
　　　　　　　　　　　奈良縣　參事　津枝　正信

奈良縣令　四條隆平

教部大輔宍戸璣殿

（朱書）
『伺之趣難聞屆候事、

但、先般及指令候藏王堂取毀之分ハ、取消候條、自今金峯神社口宮ト相心得、社僧ハ相當之者候ハヽ、任望復飾之上神官申付不苦、地所ハ本社ヘ接續候樣適宜ヲ以テ區域相定可申事、

明治六年七月三十一日』

（朱書）
『甲印』

御詑旁奉歎願口上覺

先般神佛混淆無之樣、御布告之趣奉佩戴候ニ付、去ル五月中吉野山藏王權現由緒書幷僧侶共願書辨事御役所ヘ奉差上候處、六月十三日、藏王權現之儀ハ神號ニ相改、僧侶共復飾御布告之通相心得可申旨蒙御沙汰、奉恐承候、然ル處、先般卒爾狼狽仕、不取調之儀奉願上候ニ付、右兩條之奉蒙御沙汰候儀ニ可有御座哉ト、誠ニ以奉恐入、何共申譯無御座、畢竟平生不物馴者共忽爾之調方仕、其故不束之儀奉願上候儀ハ、出格之御垂憐ヲ以、御取消被仰付度奉歎願候、猶逐々御布令之趣意モ被爲在候ニ付テハ、神

佛明分之儀取調方自然等閑之儀御座候テ、後日蒙御咎候テハ、彌以深奉恐入候處、藏王權現ト唱來候儀ハ、全ク金剛藏明王大權示現之略語ニテ、本躰者眞言密說胎藏界悲曼荼羅中金剛部所攝之忿怒形ニ御座候、尤權現ト相唱候事モ、是又佛經ニ原キ候ト相見ヘ申候、右本像安置之場所、往古ヨリ藏王堂ト唱來候處、近來間々不心得之者共、藏王之社抔ト申誤候儀ハ、自今謬傳不仕候樣相心得可申、勿論山內ニ勸請有之候神社ニ相違無御座候向ハ、神佛混淆無之樣此度取計方可仕候、前件金剛藏王明王之儀ハ、素ヨリ佛像ニ御座候間、神號ニ相改候テハ、乍恐奉對朝廷、恐入候儀ニ相當リ可申候哉ト奉存候、且僧侶共復飾之儀、是迄野僧之者共現存仕居候儀ニ御座候間、格別之御仁惠ヲ以、僧家ニテ本分勉强勤王從事仕度、此段幾重ニモ奉歎願候、右五月中不取調之儀奉願上候御詫旁、前段御採用被成下置度、一山一同只管奉懇願候、前顯之通、去月晦日辨事御役所ヘ御詫歎願書奉差上候處、大和國內之像ハ、奈良府御役所ヘ可奉願旨被仰渡、則願面當御役所御差向ニ相成候儀蒙御沙汰候ニ付、當御役所ヘ奉歎願候、右辨事御役所ヘ奉願候儀ハ、去ル六月中、於御同所ニテ奉蒙御沙汰候手續ニ御座候故、奉出願候儀ハ、宜敷御憐察被成下度奉願上候、尤吉野山之儀ハ、當御役所之御附屬之場所ニ御座候間、格別之御慈悲ヲ以、前條御詫歎願之旨趣御聞屆被爲成下候

樣伏テ奉歎願候、誠恐誠惶謹言、

明治元年辰十一月七日　　國軸山金峰山寺總代

竹林院印

東南院印

奈良府

御役所

別紙之通詫歎願差出候ニ付御乞合(マヽ)ニオヨヒ候也、

十一月七日　　奈良府

辨事

御中

奈良府ヨリ

金峰山寺復飾御免之儀詫歎願書、

十一月九日　　府縣掛

(朱書)
一別紙金峰山寺ヨリ中出候藏王權現等之儀ハ、當夏差出候書面幷附紙之寫御廻シ中入候、篤ト御勘考可給候、抑藏王權現、胡佛ニ相成候テハ、所々ニ同名三社モ有之候

事故、不都合ニ可相成候間、佛躰ニ候ハヽ取除、神社立置候樣致度候、尤境内ニ地主三
社モ有之候ヲ以、相考候得ハ、元來神地へ寺院造立致シ候事ハ現前候也、

十一月十二日　　神祇官」

（朱書）
「乙印」

當縣管下吉野郡吉野山藏王權現之儀ハ、先管轄奈良縣ヨリ神祇官へ再三申立之儀有之處、其末相應之神號ニ改候樣達相成居候趣ニ御座候、然ルニ、先達而來、段々取調官員出張見分等爲致候處、別紙圖ノ如キ佛三像有之、神躰トハ不相見樣奉存候、然レハ先般神祇官之達シ書ニ依リ相考候ヘハ、他ニ同號ノ佛更ニ神社御改祭相成廉モ有之候テ、斷然神號ニ革候樣ニト申御趣意ニ御座候哉、尚別紙相添此段相伺申候、

辛未五月　　五條縣印

辨官

御中

（朱書）
「丙印」

吉野山藏王權現之儀ニ付伺

當縣管下吉野郡吉野山藏王權現之儀ニ付、先管轄奈良縣取調以來之手續書、且繪圖

面等相添、今五月元五條縣ヨリ相伺置候處、未御下知無御座候ニ付、早々御指圖相成候樣仕度、再應奉伺候、以上、

辛未十二月十四日

奈良縣令　四條　隆平印

同權參事　津枝　正信印

神祇省

御中

（朱書）

「一白鳳以前ニ復古致シ、地主神金精明神ヲ以本社ト定、金ノ峰ノ神社ト可稱、尤藏王堂幷佛具佛躰等悉皆取除可致事、

但、社僧修驗ハ復飾可任望事、

明治六年一月十八日　教部省印」

河内丹南藩廢合寺伺

〔太政類典〕第一編第百三十四卷　教法　寺院三

丹南藩伺辨官宛

當藩管轄所内ニ、從來同宗ノ寺院數ケ寺有之、或ハ宗派打混、壹小村ニ二三ケ寺モ有之候テ、普請其外無益ニ雜費相掛リ、難澁ノ村方モ御座候間、向後差支無之分ハ、最寄同宗ノ寺々ヘ合併爲致、可然御座候哉、且又當時無住ニテ、廢寺相成リ候分ハ、斷然取毀チ、開墾爲致或ハ神葬祭願出候者ノ葬地等ニ取建候テモ不苦儀ニ御座候哉、右ノ段奉伺候、可相成ハ早々御差圖被下候樣奉願候、以上、三年十一月二十二日、藩

（朱書）「本末法類檀家共故障無之分ハ、合併爲致、廢寺跡開墾又ハ神葬地ニ致候條、被聞屆候、追テ開墾地反別並神葬地取設候ケ所共、詳細取調可伺出事、」

四年六月

丹南藩管内、法眼寺廢却ヲ許サス、鎮守板倉神社ノ境内ヲ區別セシム、

丹南藩伺辨官宛

當藩管轄所

下野國足利郡板倉村

古義眞言宗
法眼寺

同國同郡粟谷村
正蓮寺末

右法眼寺儀、往古ハ別紙繪圖面掛紙ノ通、除地境內ニ御座候處、本田木陰ニ相成候ニ付、延寶年中、同村鎭守板倉神社境內借地引移シ、寺跡除地ノ反別五反五畝十九歩ノ所ハ、悉ク新田相成、高三石壹斗九升六合私有仕來候義御座候、然ル處御一新後、御主意ノ通、神佛混淆不相成、殊ニ法眼寺ハ無檀ノ義ニ付、當藩見込ニハ、同寺廢却、本寺へ合併爲仕度、且既ニ開墾相成居候舊地ハ、是迄ノ通、寺持ニ仕候共、年貢ハ百姓並ニ爲相納候積ニテ、本寺正蓮寺へ爲及示談候處、何分難相整、本寺ノ情願ニハ、寺號存在ノ儘、差置度旨ニ付、猶追々爲及示談候得共、兎角合併廢却等ノ義相拒候哉、今般法眼寺看主知定ヨリ、願書ヲ以テ社地ニ罷在候テハ御主意ニ相背候間、借地ノ方ハ退轉、舊地ノ方へ寺坊引移シ度段申立候、乍去舊地ハ前顯ノ通、數年來田面ニ相成居候處、今更境內ニ復シ、堂宇建立仕候樣ニテハ、四隣田畑ノ妨ニ相成、往々故障相生シ可申ハ勿論ノ事ト甚心配仕候、右ハ如何所置仕候テ可然御座候哉、寺地繪圖面相添、此段奉伺候、何卒早々御差圖被成下候樣奉願候、以上、

四年六月十二日　藩

指令並圖面欠

丹南藩神葬處分宗門改葬地等伺

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

丹南藩伺　辨官宛

一當藩士族卒、並支配地ノ者共、自身信仰ヲ以、自今神葬ニ改度旨願出候節ハ、知事聽置ニテ差免候テ宜御座候哉、又ハ其都度々々御差圖可奉伺儀ニ御座候哉、

（朱書）「可爲伺之通事、

但、葬祭差許候分、戸數人別可被届事」

一右願ノ通、神葬祭相成候上ハ、宗門改方ノ義ハ、如何相心得可申哉、

（朱書）「宗門改方ノ儀ハ、其藩見込ヲ以テ伺出候得ハ御差圖可有之事」

一從前ノ佛法ヲ以、永年寺內ヘ葬置候等ハ、縱及離旦候テモ、其儘寺內ヘ差置、祭事ノミ其式ニ改候テ宜敷御座候哉、又改葬可仕儀ニ御座候哉、

（朱書）「不及改葬事」

一神葬祭ニ相改候上ハ、今後葬地ノ義如何相心得可申哉、居屋敷等所持無之者、並信仰ノ者多人數相成候上ハ、相應ノ地所有之候ハヽ、伺ノ上新ニ葬地取建不苦儀ニ

御座候哉、又ハ居屋敷等所持ノ者ハ、其構內ヘ葬地取建ノ儀不苦御座候哉、

（朱書）「居宅ヘ埋葬ノ儀不可然、最寄不毛ノ地ヲ見立、葬地ト相定可申事、

但、葬地相定候共伺ニ不及事、」

右ノ件々奉伺候、何卒速ニ御差圖被成下候樣奉願候、以上、三年六月二十日　藩

丹南藩管內農神葬祭埋葬地の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

三年十一月

丹南藩管內野州板倉村農神葬祭執行ニ付埋葬地ヲ定ム

丹南藩願　辨官宛

當藩支配地野州足利郡板倉村百姓二十七人者共、是迄同村臨濟派養源寺佛葬受來候處、今般御一新ニ付、神葬祭ニ相改申度旨願出候ニ付、右養源寺ヘ及示談候處、聊差支無御座旨申出候ニ付、去ル六月中、別紙ノ通リ神祇官ヘ伺濟ノ上、右二十七人ノ者共ヘ、神葬祭願ノ通差免申付候、然ル處葬埋地ノ義ハ、佛法相離レ候上ハ、別

ニ取建候樣仕度奉存候ニ付、同村字金丸耕地マミ穴ト申所ハ、從前ノ村高外不毛ノ地ニ御座候ニ付、同表出張ノ役人共、見分取調候處、岩交リ砂地ノ場所ニ御座候得ハ、此所ヘ葬埋地取建候樣仕度奉願候、何卒御聞濟被成下候樣仕度、此段奉願候、以上、三年十一月十三日 藩
指令並別紙欠

民部省意見 葬官宛

書面丹南藩願出候神葬祭埋地ノ儀ハ、從前村高外全ク不毛ノ地ニ有之候上ハ、坪數不相當ニモ不相聞候間、申立ノ通御聞置被成候旨被仰渡可然存候、依之別紙返却此段申進候也、三年十一月

河内道明寺神社分界並寺號の件

〔太政類典〕第一編第百廿五卷 教法 神社四

四年

堺縣下道明寺中神社分界處分

堺縣伺 葬官宛

當縣管内河州志記（紀）郡道明寺一條ニ付、昨午三月來元小河知縣事ヨリ、別紙ノ通京都留守長官マテ御伺申上候處、同年四月四日附ニテ、神祇官ヨリ御下知ニハ、先從前ノ通可差置旨、御沙汰ニ候得共、何分右道明寺而已其儘ニ相成候テハ、都テ外々ヘ差障リ、神佛混淆不相成御主意ニモ相悖リ、甚以政度難相立候ニ付、右ハ相當ノ處置仕度ト奉存候間、此段御伺申上候ニ付、早々御差圖可被下候、以上、同年二月九日

（朱書）其縣見込ノ通、天穗日命社及天神社ト、佛堂伽藍ト堺（境カ）界ヲ相立、尼僧ノ中ニテ復飾神勤致候樣、縣廳ヨリ篤ト說諭可致事、

但、老尼隱居ノ向ハ、弟子復飾ヨリ爲養可申候、尚（猶）尼僧復飾不致候ハヽ、寺外ヨリ相應ノ人撰ヲ以神務可爲致事、

堺縣問合　留守長官中御門殿宛

河州道明寺中ニ勸請有之候天神宮神佛混淆居候事故、賓主先後ヲ糺、主ヲ存、賓ヲ取除可申ハ當然ニ候間、相糺候處、右道明寺ノ地所ハ、元天穗日尊ノ社地ニ道明寺ヲ移候テ、其道明寺ニ天神宮勸請致シ候順序ニ御座候、然ル上ハ道明寺ヲ取除可申條理ノ處、右寺モ數坊有之、容易移轉モ難申付、猶天神ハ道明寺在テ後ニ勸請ニ御座候得ハ、天神宮ノ爲、道明寺轉移ノ譯ニモ至リ不申、依之佛堂伽藍ト天穗日命

社及天神社ト分堺ヲ立、奉祀ノ者ヲ置其外有之間敷相考、猶奉祀ノ者モ齋宮ノ神ニ仕ヘタマヘシ例ニナラヘ、尼僧ノ内復飾ニテ相難（勤カ）候樣有之候歟、然ラサレハ別ニ神職ヲ立候歟ノ内ニ及說得置候處、御內々同寺ヘ御達ブリ有之、神祇官ヘ御引合中、其儘罷在候樣被仰通候哉ニテ、彌決著致シ不申候テ、於當縣モ御主意貫透不致、甚困リ居申候、實以寺中ヨリ申出候通、御內沙汰モ相成候事ニ候ハヽ、右邊ノ處ヲ以、御說得相成度、左候ヘハ速ニ御主意貫通相成可申、乍去外ニ宜敷御見込モ御座候ハヽ、無御遠慮當縣ヘ御申越相成候樣致シ度、前件寺中ヨリ申出候儀、實否相分リ兼候間、爲念一應御尋申上候、以上、三年三月八日

堺縣ヘ通牒　神祇官

御管轄內道明寺天滿宮混淆引分ノ儀、追テ御掛合ニ及候マテ、先從前ノ通被差置候樣存候、依テ此段申入候也、四年四月四日

追テ、福羽少副書狀差添候間、可然御取計給度候也、

神祇官ヘ掛合　堺縣

過日堺縣ヨリ道明寺天滿宮神佛混淆云々ノ儀ニ付、書類相回シ申入置候處、猶又別紙ノ通申來候間、御廻申入候、早々御回答可有之候、仍テ申入候也、四年六月十日

堺縣伺辨官宛

河州道明寺天神社分界ノ儀、別紙ノ通本廳ヨリ申越候間、早々御下知被下候樣、此段奉伺候、以上、四年六月

堺縣掛合東京出張所宛

一管內河州志紀郡道明寺天滿宮神佛混淆分界取調云々一條、當未二月九日再達仕置候處、未タ御沙汰無之、就テハ取調必多物延引ニオヨヒ、當（マヽ）建ノ事ニ候間、早々其筋へ御催促有之度候也、四年五月

神祇官意見

堺縣見込ノ通、天穗日命社及天神社ト佛堂伽藍ト境界ヲ相立、尼僧ノ內ニテ、復飾神勤致候樣、縣廳ヨリ篤ト說諭可致事、

但、老尼隱居ノ向ハ、弟子復飾ヨリ爲相養可申候、倘尼僧復飾不致候者、外ヨリ相應ノ人撰ヲ以神務可爲致候事、

辨官附箋

見込ノ通早々可及差圖事、

(受)明治五年二月九日 元神祇省　(回)四月廿三日　(済)四月廿四日　(卿)嵯峨　(丞)門脇　(議)戸田玄成
(輔)福羽　(出仕)浦田　(課)社務

堺縣覺壽尼木像菅公社ヘ合祀之伺

掛合案

一昨年來元神祇省ヘ追々伺出相成候道明寺神佛分界之儀、昨未十月伺出之振ニ而可然存候處、當今同寺ニ罷在候尼僧老若數多可有之、右處分夫々其所ヲ得、困難ノ儀無之哉、今一應聢与見込相立、申出可有之候也、

壬申四月　　教部省

堺縣

堺縣道明寺處置之儀ニ付、別紙之通、可相達存候、從前及御相談候廉モ有之候ニ付、一應及御打合候、御異存有之候ハヽ、被申越候樣致シ度、此段及御掛合候也、

壬申四月廿二日　　福羽教部大輔

河内道明寺神社分界並寺號の件

坊城式部頭殿

道明寺一件ニ付、堺縣御回答拜見候、異存無之候、宜申入候也、

壬申四月廿二日　坊城

福羽殿

道明寺神佛分界之儀ニ付、昨年中、先小河知事伺之末ヲ以テ、當春及再伺候處、云々御達之趣承知仕候、然後愚考仕候處、社地內佛堂与申ハ、本尊ハ例ノ彌陀歟觀音ヲ安置有之候得共、重モ所祀ハ菅公之伯母君覺壽尼公ヲ祭タル事与相見へ候、尼公ノ木像本尊脇ニ安置、元來菅公ヲ祭リ候由緣ハ、太宰府へ御遷行之砌、伯母君へ御離別ノ爲御立寄被爲在、俗ニモ申候啼ケハコソ別ヲ急デノ御詠モ、當時之事与申傳へ、薨御後、神靈ヲ崇祭致候筋ニ相見候へハ、菅公ハ賓、伯母君ハ主与申譯ニ相當リ候、然ルニ右佛堂ヲ神地ト區別スル時ハ、賓主倒置ノ場合ニ相成、神慮ニ於テモ如何可有之哉ト被存候、依之今般奉伺候趣ハ、伯母君之御像ヲ菅廟へ合祭シ神號ヲ何トカ御付與有之度、左候ハヾ、神供祭典等後年ニ至疎略無之、兩公ノ神慮ニ於テモ、如何計安ンセラルへク哉ト、

乍恐愚存ノ儘再應奉伺候、可然御下判可被下候、以上、

辛未十月十九日　堺縣知事　税所篤滿（マヽ）

神祇省

御中

（受）明治六年五月廿二日　（回）同月廿三日　（濟）同月廿七日　（丞）三島　（議）田中義質　（補）宍戸　黒田

（出仕）鈴木　（課）社寺

堺縣伺寺號改稱願

右調査仕候處、土師神社儀ハ元來道明寺寺中ニ有之候處、神佛混淆御引分ニ付、右道明寺ハ他所ヘ移轉仕候事ニテ、今般寺號ヲ舊ニ復度出願之趣、地方官ニ於テハ、自費營繕之廉ヲ以テ、允許可致見込ニ候得共、公築私造之別ヲ以テ、寺號改稱致候儀ハ無謂事ニテ、且道明寺ニテ差支之筋無之、却テ舊號ニ復候得ハ、社號寺號同樣ニテ、向來又混淆之弊害ヲ可生ニ付、御允許無之方可然存候、

下ケ紙

是ノ見込通、土師寺ノ舊號ニ相復候テハ、他日又土師神社ノ縁由ヲ唱出候憂モ

有之候間、開屆無之方可然存候、

指令案

書面願之趣難聞屆候事、

當縣下河州志紀郡道明寺村ニ有之道明寺之儀、神佛混淆ニ付、追々相伺御指令ニ基、尼僧之內神勤佛勤任願聞屆置、右神社之儀者從前之地所へ鎭座、佛像之儀者同村之內へ引分ケ、夫々尼僧自費ヲ以テ一寺建設爲致申候、然處今般右寺號、別冊之通尼僧ヨリ願出候、右者全ク自費營繕之儀ニ付、自庵之姿ニハ御座候得共、其身限リ願通寺號聞置可然哉、此段相伺申候、以上、

明治六年五月十五日　堺縣令　稅所　篤

教部大輔宍戸璣殿

（朱書）「書面願之趣難聞屆候事、

明治六年五月廿七日」

寺號改稱願

河內國第十八區志紀郡道明寺村

古義眞言律宗

蓮士山

道　明　寺

當寺儀、去明治五年壬申四月、神佛御建譯（分）ニ付、祭神天穂日命天神社合テ土師神社ト號、□□寺中之内ヨリ復飾神勤仕候、當寺之儀ハ神社□外畑中ニテ、地所取定、坊舍引移シ、寺□相續御願濟ニ相成、然ルニ往古土師寺ト稱候處、中興道明寺ト改候儀ニ付、今般舊號ニ基キ、土師寺ト改稱仕度、尤本山仁和寺ニ於テモ差支無之候ニ付、此段奉願候、以上、

道明寺住職

右之通相違無御座候、以上、

戸長

山脇勘太郎

前書之通取調候處、相違無御座候、

右區副區長

松田　又造

堺縣令稅所篤殿

(受)明治六年　(回)同上　(濟)同上十一月廿五日　(丞)三島　(議)河口寬　(輔)黑田　(出仕)鈴木　(課)社寺

堺縣ヨリ道明寺々號之儀ニ付伺

指令按

書面道明寺々號之儀聞屆候事、

道明寺尼僧共ヨリ稱號之儀願之趣有之、添簡ヲ以相伺候處、御聞屆難相成段被仰渡、承知仕候、然ル處、添簡モ粗漏ニ付、猶精細取調相伺申候、

一辛未二月伺

天穗日命及神社ト佛堂伽藍ト境界ヲ相定、尼僧之中ニ而復飾神勤致シ候樣、縣廳ヨリ篤ト說諭可致事、但云々、尼僧復飾不致候ハヽ、寺外ヨリ相應之人撰ヲ以神務可爲致事、

右之通御指令有之、神務佛勤之者夫々分別致置候處、社地之都合モ有之、且ハ從前尼僧共佛勤而已ニテ、其中一兩人復飾神勤之者モ、是カ爲メ迷惑之內情モ相聞、往々紛擾可差起ハ必定之義ニ而、殊ニ數畝之社地へ神佛兩置、神務佛勤連甍候モ如何敷候

ニ付、佛堂寺家ハ勝手ニ社外ヘ引移候樣相達候處、尼僧自力ヲ以テ、佛堂寺家ハ引移再建、近頃落成相成候義ニ而、道明寺ヲ被廢候義ニハ無之、現存之姿ニ御座候間、寺號ハ御聞置被下候方ニ可有之哉、乍然道明寺之稱ハ、一山之汎名ニ而、元山中ニ五坊有之、其住持二人神勤致シ、各々寺名モ有之候間、元々之寺號相名乘候樣御許可可被成下哉、別紙粗圖相添、再應相伺申候、以上、

堺縣參事　藤井　千尋

堺縣令　税所　篤

明治六年九月廿九日

教部大輔宍戸璣殿

（朱書）書面道明寺々號之儀聞屆候事

明治六年十一月廿五日

［太政類典］第一編第百三十四卷　教法　寺院三

河内古市郡寶壽寺廢合の件

堺縣伺并官裁

當管內河州古市郡西浦村黃檗宗寶壽寺儀、無祿無檀此上寺務相續難相成候ニ付、右境（內脫カ）九畝貳拾九步ノ土地開拓農相營度段願出候ニ付、本寺同州丹南郡今井村法雲寺並法類村方等ヘ取糺候處、故障無之旨申答候間、願ノ通廢寺歸農爲致候テ可然哉、此段御伺申上候、以上、四年五月十九日

（朱書）「書面廢寺歸農ノ儀ハ、伺之通可取計、地所開拓ノ儀ハ、庚午九月御布告ニ基キ更ニ可伺出事、」

堺縣下寺院廢合伺

〔太政類典〕第一編第百三十四卷　教法　寺院三

三年

堺縣下寺院合併廢撤等處分

　堺縣伺辨官宛

當縣管內寺院頗多、凡千ヶ寺餘有之候處、各若許ノ良地ヲ占、徒無用ニ屬罷在候儀甚不都合ニ被存候ニ付、合併廢寺ニ仕度、則左ノ通御伺申上候、

一尼寺

　右ハ元ヨリ無檀家ノ寺ニ候間、當時在住ノ尼輩各生家懴ニテ可歸處有之分ハ還俗相勸、其元ヘ送屆、其可歸ノ家無之分ハ、各其所ヲ得セシムルノ樣、世話致遣、其本山本寺ヘ相達シ廢シ可然歟、

一無住無檀家ノ寺

　右ハ其旨本山本寺ヘ相達廢シ可然歟、

一有住無檀家ノ寺

右ハ當住復飾ノ志有之候ハヽ、建家什物等産業ヲ得シ(マヽ)基ニ被下之、其旨本山本寺ヘ相達廢シ可然歟、

一無住有檀家當時他寺ヨリ兼ル者

右ハ檀家ヲ以テ其兼ル處ノ寺ヘ附シ、其旨本山本寺(ヘ脱カ)相達廢可然歟、

一檀家少々拾軒以下ノ寺

右ハ其最寄同宗同派ノ寺ヘ合シ、住僧ヘハ、其合スル處ノ寺ヨリ、相當ノ出金爲致、且見計ヲ以テ、建家什物等ヲモ被下之、産業ヲ得ルノ基ニ爲致廢シ可然歟、

一無本寺

右同斷、

一管内ニ本寺在テ夫ヨリ分支ノ寺

右同斷、

一寺中幷塔中

右同斷、

右ノ通御伺申上候、以上、三年十二月十二日各縣

(朱書)「書面ノ趣、人民ノ適宜ニ出、本寺法類ニ故障無之、僧侶共授産ノ道モ相立候ハヽ、

見込ノ趣其時々伺之上可取計、尤合スル處ノ寺院ヨリ出金致サセ候儀ハ不相成候、其餘境内除地等之儀ハ、今般被仰出候御布告ノ通可相心得事、」

堺引接寺廢寺の件

「社寺取調類纂」五〇九

(受)明治五年五月十三日 (回)同上 (濟)同月廿日 (承)門脇御用掛 (議)山本道夫 (輔)宍戸 黒田 高崎

(出)島本 三田 (任)渥 丸岡 (課)寺務 社務

堺縣ヨリ廢寺之儀ニ付伺

堺縣管下和泉國大鳥郡堺寺町引接寺廢寺取計方之義申出候處、元來住吉社之舊地之趣、將本寺檀越共故障無之上ハ、断然廢寺之伺御聞屆有之度奉存候、

指令按

伺之通、

廢寺之儀ニ付伺

當管內和泉國大鳥郡堺寺町引接寺儀ハ、神佛混淆ニ付、再三及取調候處、元來同所甲斐山口町住吉開口社之舊地ニシテ、凡六町計相隔ル、貞和三亥年僧知演蒙住吉之神託、住吉社務國夏ト申者、敷地ヲ寄附シ、寺院ヲ建立、佛殿ヘ住吉明神ヲ勸請、開口社內宮ト稱シ、松風之硯神秘ト唱、神札配當仕來、實以神佛混淆不都合ニ付、本山京都金蓮寺ヘ掛合、社地之有無取調候處、彌社地ニ無相違、引接寺ヲ廢シ、佛躰檀家等、末寺金光寺ヘ相讓、本山眞末ニ仕度、證書差出、且檀中ニヲイテモ聊故障無之、廢寺取計、神事祭式關係之分、開口社ヘ合祭シ、右地所千五百三拾壹坪餘上地御規則之通取計可然哉、奉伺候、以上、

明治五年五月十三日　堺　縣

敎部省

御中

（朱書）「伺之通、

明治五年五月廿日」

堺縣合寺廢寺歸俗の件伺

[社寺取調類纂] 五〇九

(受)明治六年一月廿二日　(回)同上　(済)同一月廿四日　(丞)三島　(議)永坂潜　(輔)黒田　(出仕)鈴木
(課)寺務

堺縣合寺廢寺歸俗之儀ニ付處分伺

指令案

書面之趣難聞届候、三ケ條共其時々可伺出候事、

泉河兩國大小寺院總計千八百餘有之、一小村ニ兩三ケ寺或ハ七ケ寺ニ至、其中無檀有住之向ハ、從來托鉢又ハ村中ヨリ扶助相請、漸永續致シ來候所、今日ニ至テハ、其扶助茂不行屆、去迚自力ニテ終身糊口之目的茂無之折柄、今般僧侶托鉢御禁止、且無檀無住廢止之御布令モ有之、僧侶モ亦我職ヲ盡ス能ハサル而已ナラス、方今開化進歩スルニ隨ヒ、力ニ應シ候業ヲ始メ、獨立活計之途相立度處ヨリ、歸俗廢寺之出願追々可有之趣、然ル時ハ其時々伺ヲ經候テハ、時間ヲ過ス而已ナラス、願主始業之機會ヲ失スル場合ニモ立至可申、依テ合寺廢寺歸俗等出願之節ハ、其次第篤ト取糺、本山ハ

中ニ不及、隣家ニ至迄故障之筋無之儀ハ、、開閉所分之上、年末取纏御届申候様取計
御差支無之哉、何分御差圖被下度候、以上、

明治六年一月十五日　　堺縣參事　藤井　千尋
堺縣令　税所　篤

教部卿大木喬任殿

（朱書）「書面之趣難聞屆候條、三ヶ條共、其時々可伺出候事、
明治六年一月廿四日」

和泉神鳳寺寺號廢止についての伺

〔社寺取調類纂〕五〇九

（受）明治六年九月廿七日　（回）同月三十日　（濟）十月五日　（丞）三島　（議）澄川拙三　（輔）宍戸　黑田
（出仕）鈴木　（課）社寺

堺縣管內律宗神鳳寺々號廢止之儀ニ付伺

指令按

伺之通處分可致候事、

但シ、佛像等之儀ハ從前通リニ光明院へ合附可致候事、

當縣管下

和泉國第壹區

大島郡赤畑村

神鳳寺

右者大島神社別當坊ニ而、末寺二拾五ケ寺有之、律宗眞言三學兼內律宗大本山ト唱、末寺之內ヨリ輪番相勤來候處、前堺縣知事小河一敏在職中、神佛混淆不相成御達ニ付、大島社奉仕ハ夫々神官差向、神鳳寺儀ハ末寺之內赤畑村光明院境內へ引移、寺號立置度旨願之通聞屆置候趣之處、併未堂宇建立ニモ不相成、佛像等ハ光明院堂內へ合附有之、當時光明院住職淺野湛道兼勤仕居候得共、別派獨立本山等之向ハ、總本山所轄被仰出候ニ付、當今末寺ニ至ル迄、高野山金剛峯寺之所轄ニ相歸シ居、神鳳寺無檀無堂無禄之處へ、湛道寺務兼勤致居候得共、全ク有名無實之儀ニ付、廢寺可申渡候哉、此段相伺申候、以上、

明治六年九月十九日

堺縣參事　藤井　千尋

堺縣令稅所篤

教部大輔宍戸璣殿

（朱書）「伺之通處分可致候事、

但、佛像等之儀ハ從前通リニ光明院ヘ合附可致候事、

明治六年十月五日」

南宗寺鎭守八幡宮撤廢前後の事情

附妙國寺の神佛分離

曾根研三氏報

明治維新は、凡ての社會制度の變革であつた、堺に於ても、奉行は廢止され、新に堺縣が置かれたが、此の時代の初期は、極端な敬神思想から、神佛分離寺院破壞の運動を惹起した結果、南宗寺も其の渦中に捲き込まれた、

一體維新前後の南宗寺は、本山大德寺さへかなり荒れて居つたので輪番もなく、僅に寺內に起居する僧侶や、長慶寺住職等の手で維持せられて居つたから、彼等は

廢佛棄釋を喜んで、明治元年に鎭守八幡宮を主にして神社に改め樣と、旣に願書をも當局へ提出した、所が此の話を耳にした表具屋淺井某は、南宗寺信徒の日野屋又七に知らしたから、又七は寺内には恩義を受けた奉行駒井相模守信義の墓もあるので、今更神社に變更せられたらば、其の供養も出來なくなるであらうと、非常に殘念に思つて、反對運動を起した、彼は先づ當局に向ひ、八幡宮は山本琳昌の個人的寄附に懸るもので南宗寺の本體ではないとの覺書を提出し、一面寺内に神社があるから、かゝる問題も起るのであるとて、もと開口神社にあつた辯才天を買取り、之を八幡宮へ納めて辯天堂に變更しやうとした、此の方法はかなり波瀾を惹起したやうであつたが、結局又七の誠意は認められて、同年十一月僧侶義朝・宗扶・宗堅・宗松等の四名は、大德寺の高桐院以下北派の塔頭へ、謝罪狀を差出して一件は落着した、宗堅等は翌二年三月本山に呼ばれて注意を受けたが、又七の好意によつて、再び南宗寺に復した、斯くて南宗寺は、危くも破壞を免れ、八幡宮の御神體は又七方に移され、四月七日其の跡へ辯才天の遷座が行はれて、盛大な供養が營まれた、

　此の事件が機緣となつて、本山の自覺が呼び起され、從來の放任的な輪番制度を廢して、今後一定の住職を置く事となつた、そして先づ儀山和尙が据はり、次いで明

治三年には牧宗和尚が住職になつた。(南宗寺史)

奉伺口上覺

今般

王政御一新之折柄、自餘之宗旨ニ而茂、神佛混淆不相成旨ニ付、由緒書可差出樣之御沙汰候故、則差出候由緒書之儀、拙僧共甚タ麁忽之取計仕候而、　御輪住奉始、諸先方に御高配相掛候段奉恐入候、乍然先平穩之濟方ニ相成候上者、其御表奉始、當寺內一同安襟之至奉存候、依之拙僧共前々ゟ之爲御中譯、退身之儀被仰付被下候樣仕度、此段宜御深察之上、御下知可被下候、恐惶以上、

明治元戊辰年十一月

義朝

宗堅

宗扶

宗松

御掛

高桐丈室

看松丈室
大源丈室
　各侍史御奏達

口上

時下暖和之節御座候處、增御安泰被成御座珍重奉賀候、隨而昨日歸寺仕候、本寺表も都合能相濟、叁御陰ニ而御免相成、早々御禮旁罷出可申筈、少々不快ニ付、不取敢愚書を以如此御座候、何れ共中推參萬々可申述候、早々頓首、

二月十日　（端書）長慶寺

日野屋又七様

差上置

尚々此品打箇任到来奉進上候、御笑留被下候ハヽ、雖有奉存候、乍憚太田様にもよろしく御序之節御傳言之程奉願上候、

一新春之御吉慶目出度申納候、先以御家内様御一統愈御揃被爲遊、御越年之段、珍重

之御儀奉存候、然者舊冬は不成一方御厚配被成下、拜謝筆頭ニ難申盡し、先々御影を以無異ニ越年仕候而難有奉存候、然處此頃に相成、南宗寺内之ものゟ一日もはやく退身致し可申樣之趣ニも被相察候故、下拙事も元ゟ承知ニは御座候へ共、今少し勘定邊之處も御座候ニ付、彼是延引致し罷在候、左候へとも何分ニも内外色々と都合之處も御座候間、何卒近々之内、當地引拂上京仕度存寄ニ付、一應何角と御禮旁參上之筈ニ御座候へ共、何を申も引籠り、其上長髮ニて甚タ失禮之儀と奉存候間、不取敢乍略儀手紙を以御暇乞奉申上候、何れニも上京之後、身上相定り申候上ニ、一應御禮旁下向も可仕存寄ニ御座候間、何卒此以後之處は不相替、是を御緣として御心安被成下候ハヽ難有仕合奉存候、此段宜奉願上候、先ハ早々右用向迄亂筆如此御座候、頓首敬白、

正月十二日

尙々先晩は瑞森氏ニ而も甚タ失敬、此段御高免奉願上候、尙又自然御用透も被爲有候ハヽ、乍恐極内々ニて御來駕之程奉相願度、拜眉之上緩々御物語奉申上度候、早々以上、

（端裏書）

默傳院ニて

日野屋又七樣　　侃首座

口　陳

此中ハ大無沙汰申居候、然ハ先達御願申上候當寺鎮守辯財天御遷座、七日可仕筈申上置候得共、近日本寺ゟ兩三人下津被致候間、其節迄延日仕度、此段不惡御承引可被下候、尚又不遠中推參仕、萬々可申上候、先ハ不取敢御斷迄如此御座候、早々頓首、

四月五日

（南宗寺カ）寺宗ニ而

長慶寺

日野屋又七樣
差上置

御手紙致披見候處、春暖之砌愈御安康被成御入、珍重奉存候、然者南宗寺輪番持之者、舊冬不行屆之義有之候ニ付而は、不一方御奔走、且御手數ニ相成、萬端程能相濟、誠以難有存候、宜御禮申上候、然處宗堅義法用も有之旁、暫上京在山申付置候處、今度御心切ニ被仰付候ニ付、任其意可差下候間、乍此上不束者故萬端宜御願申上候、且又太田樣當節御不在之由承之、仍而欠愚書候間、猶御歸宅之上、宜御禮被申上可被下候、何れ拙僧も不遠致下津、其節萬々御禮可申上候間、不能詳、不取敢貴翻旁御禮申上候、右之

段宜得貴意如斯御座候、以上、

三月廿六日

覺

一當寺儀者三好修理太夫長慶公、開山普通國師に、禪法御歸依ニ付、當寺を建立被遊共砌ニ者寺領知行等茂附被置候得共、其後星霜相重リ、石高等茂相分、豐臣公以來先幕府ニ至、御朱印百拾石ニ御座候、全ク大古長慶公開山普通國師に御歸依ニ依而、亡父元長基公之法號ヲ以、南宗寺と汁稱古來建立之次第者如斯御座候、

一寺內小社八幡宮致鎮座候由緒与申儀者、一切無御座候、將又八幡宮儀者、長慶公軍中守護之神を、當寺に被致鎮座候等之事、且八幡宮を爲地主祭行抔与申儀者、當寺舊記に茂無之、且本山表ニ而篤度取調候得共、且而左樣之由緒等ハ一切無御座候、尤當寺小社八幡宮鎮座之儀も、延寶四丙辰年五月山本琳昌申者之寄附而外ニ御座候深キ由緒無之次第御座候、是迄年々重立候神事祭禮等茂無之、誠ニ當寺限リ小社之儀ニ候得者、私ニ而如法祭奠等相勤候而已之事御座、決而深キ由緒与申儀更ニ無御座候、猶又東照權現靈屋之儀者、先幕府代々御朱印茂頂戴仕候儀、且先幕

府當寺東照權現被致參詣候事茂有之、方々以御靈牌を別殿に被致安置、朝暮致勤行來リ候儀御座候、尤東照權現當寺ニ而從最初御位牌被安置致候事故、諸人之如知、例年四月十七日御年忌佛事執行祭奠相勤中候儀ニ御座候、以上、

南宗寺殿善室宗慶大居士
俗名三好筑前守長基公　長慶公之父
天文二癸巳年六月廿日卒
聚光院殿前匠作眠室進公大禪定門
俗名三好修理太夫源長慶公　長基公之子
永錄（祿カ）七甲子年七月四日卒
道光院殿左京太夫源善繼公
俗名三好左京太夫源善繼公　長慶公子也
天正元年癸酉十一月廿六日卒
爲父長慶於テ本山聚光院

永代萬覺帳

明治二巳年四月七日納

一辯天木像、弘法大師作、大寺ゟ退靈、南宗寺奉納、于時入用左ニ記ス、

金貳百疋　奉納

金百疋　道(導)師布施

五十疋ツヽ

金百五拾疋　門弟子三人布施

金壹朱　門弟子小僧一人

金貳朱　男士貳人へ

一　御神酒壹升五合奉獻

一　貳升御鏡三重

一　饅頭五十

右奉獻南宗寺ゟ御酒饌共頂戴仕、其入用左ニ客(マヽ)、

又七、綿三、松佐、淺井、子供共貳人、五人(マヽ)、錦三、松佐貳人ゟ金百疋奉獻ス、

其後諸入用として金壹兩壹歩御禮に差上候

巳六月廿五日　世話人河仁並泉安

一金壹兩壹歩　初瀨觀世音開帳寄捨

一金壹兩壹歩　　世話人宿院大長
宿院御輿大ぼんぼり寄進

六月廿六日
一金壹兩　　南宗寺祥道ニ付寄進

辰十月廿日　堺縣役所　妙國寺

王政復古更始維新之折柄、神佛混淆之儀御廢止(被脱カ)仰出處、於其宗者、從來三十番与稱シ、皇祖御神を奉始、其他之神祇を配し、曼陀羅与唱候內へ、　天照皇大神八幡大神等之御神號を書加へ、剰死體ニ相著セル經帷等ニも、神號を相認候事、實ニ不謂次第ニ付、向後御禁止被　仰出候間、總而神祇之稱號決而相混不申樣、吃度相心得、宗派末々迄不洩樣、可相達旨御沙汰候事、　但、是迄祭來候神像等、於其宗派設ル者も、速ニ可致燒却候、若又由緒有之往古より在來之分相祭ル類は、夫々取調神祇官江可伺出事、

十月　行政官

行政官ゟ、日蓮宗本寺江別紙之通り御達有之候ニ付而も、自餘之宗旨ニ而茂、奉得其意、彌以神佛混淆不被樣可相心得候、依之寺內具ニ相改、神社神躰等有來も候ハヽ、其由緒相知レ候丈取調、認取候而、來ル十日迄ニ屆出受指圖取扱可申事、

攝津住吉舊社僧勤仕書

〔社寺取調類纂〕六七　住吉舊社僧勤仕書

正月元日

一卯之刻本坊に集會之上、祝賀仕、夫ヨリ社參、次ニ辰上刻社頭御讀經所に出仕、神主以下者神前ニ出仕、御饌奉幣之間ニ、於御讀經所ニ、天下安全之御祈禱相務申候、次ニ直會殿ニ於テ神酒白散頂戴仕候事、

但シ、一之神殿、南北ニ供養法所御讀經所ト稱シ、舊神宮寺社僧之候所有之候處、右兩殿享和年中燒失後者、假供養法所假御讀經所ニ於テ法務仕來候得共、事煩鋪候ニ附、凡而社頭御讀經所供養法所ト相記シ申候、

四日　撰定吉日

一年中御祈初酉之上刻、於御讀經所ニ、仁王會之法式ヲ以相務申候、

但、神主出仕有之候事、

同日

一星宮祭社僧陰陽師泰山府君之修行仕、則御札貳枚神主に相納申候事、

九日

一御弓習禮ニ付、射手淨衣貳具、並ニ白小袖任先例、神主袖判ヲ以射手方に差出申候事、

十一日

一巳之刻、於正印殿構壇場、寶祚長久天下安全之爲懸祈ト、大般若經轉讀仕、法務終而御祈禱之札、神主以下夫々に分賦仕候、

十三日

一御結集御神集社僧壹人、於神館神主之淸秡相勤申候、夫ヨリ社僧者御讀經所に出仕、神主以下神前ニ出仕、第一之神殿に神供獻備、終而預方金屏之前ニ構壇場、香華莊嚴調備之上、社僧申上、表白等勤之、終而客殿ニ至リ、社務氏人大海社司ト對席ニ着座仕、夫ヨリ經營有之、尤配膳者伶人神人相勤申候、次ニ射禮終而直會相濟一統退下仕候、

但シ、當日權神主之饗膳舊神宮寺ヨリ相營候事、

十六日

一於正印殿ニ構壇場、 玉體安穩天下泰平之爲御祈禱、般若心經千卷讀誦、神主以下

祇候有之候處、中古以來社家社僧分席ニ而相務申候事、
　但シ、大麻者神主家ヨリ御內裏ヘ奉獻候事、
　　廿三日
一社頭於御讀經所、爲天下安全之懇祈、五部大乘經轉讀之法式修行仕候、
一同夜ヨリ翌朝ニ至リ、於正印殿、御日待之式、陰陽師務之、尤神主出仕々候事、
　　廿五日
一於社頭御讀經所、御神樂御祈初之、祈禱仁王講修行仕候事、
　但シ、當日御酒御饌等者、神樂所方ヨリ差出候事、
一天神講ト相稱ヘ、奥天神境內於本地堂ニ、法務修行仕候事、
　二月
一彼岸初日ヨリ中日迄、四日之間、社頭於御讀經所、八講之法務修行仕候、尤社務以下出仕有之候、但シ中日放生會之式有之、次ニ當山境內今主靈社ヘ神主ヨリ手向之歌有之候事、
　　廿三日
一於社頭御讀經所ニ、爲天下安全之懇祈、五部大乘經轉讀之法式修行仕候、

廿五日

一天神講如前月、法務修行仕候事、

三月七日

一預方御神輿四基莊嚴仕置候、且又舊神宮寺下方役ニ而、石舞臺邊に大幡十貳流ヲ建、蓋高座ヲ構置候、其外御假殿樂器具等者、社中ヨリ相營候事、

八日

一一切經會、御神祭、社僧壹人於神館神主之淸秡仕候、夫ヨリ社僧廣前に出仕、尤神主以下社役人出仕之上、神輿遷宮畢而神幸供奉ニ而、御假宮に着御之後、社僧者廻廊ニ着座仕、神主以下供奉之面々着座、次ニ伶人奏樂ニ而神主奉幣、宣命畢而預方兄部役トメ、神前ニ構壇場、香華莊嚴之具ヲ相調に、靑黃白之御供六器獻備之、尤伶人樂ヲ奏シ、社僧舞臺ニ登、法式相始、講師讀師登高座、法則高貴講式等相務、衆僧者讃伽陀四箇之法用等修シ、終而散華大行導(道下同シ)、先右士左士(神人勤之)、伶人、次ニ獅子、次ニ引頭、左右預方役之、次ニ社僧伶人奏樂ニ而行導、終而伶人着座之上、入樂ヲ奏シ、衆僧退下着座、次ニ舞樂相濟、伶人入樂ヲ奏シ、講讀師下高座、次ニ僧中脇奉行ヨリ、神主に當日之會式書差出申候、次ニ伶人入調、還御ニ御座候事、

但シ任古例、堺大寺之衆徒に召狀遣シ、則共ニ出仕仕候、尤社僧之花籠賦徹（撤カ）者、勘定司ヨリ相勤申候事、

且又傳供米三計（斗カ）、赤花青花華平片折等、神主家ヨリ相渡リ御饌用ニ仕候、

當日之會式書左ニ相記シ申候、

住吉大神宮

一切經會當日式

一神輿出御事

先於北中門發亂聲、

次神幸（音取）春庭樂、

行列次第

猿田彦　神人　戸帳方

神寶所　勘定司　左士右士神人勤之

雌雄獅子　社僧　神官

齋　大海社司　津守氏人

權官　惣官　八乙女

奏樂伶人　　神馬

神輿四基

着御集會亂聲

振鉾

奉幣宣命

讃衆僧登舞臺　胡飲酒

伽陀

講讀師登高座承和樂

散華式中ニ勤定司花籠ヲ賦ス、

行導　調子鳥向樂、

行列之次第

左士右士神人勤之　奏樂伶人　獅子二頭

引頭左右頭役之　社僧

行導一匝畢而　伶人入樂屋

衆僧著座　遶河樂

行事舞

萬歲樂　延喜樂

天神樂　納曾利

陵王　地久

講讀師下高座　長慶子

入調

五常樂　喜春樂

萬秋樂　太平樂

次還御　奏還城樂

右如件

年號何年　僧中

三月八日　脇奉行

實名

右者中古以來之會式ニ御座候、乍併大永年中之舊記ニ者、殊之外嚴成儀式相見申候、

九日

一法華會、本坊ニ集會、當山境內、今主社神前ニ壇場並ニ構階高座ヲ、大幡等ヲ相建、神主出仕、連歌之式有之、於石舞臺、法式相勤申候、尤伶人奏樂、法務、終而會式書神主ニ差出、一統退散、法式者粗昨八日之如ニ御座候、　但シ花籠賦（撒カ）徹ハ勘定司勤之、

當日會式書左ニ相記シ申候、

法華會當日式

先寅一點神分亂聲

次辰一點集會鐘

次獅子出臥舞臺邊

次打鐘

次振鉾

次傳供

次打鐘

次菩薩供舞　　鳥舞

蝶舞

次讀衆僧登舞臺ニ　五常樂

次導師登高座　承和樂

次散花式中ニ勘定司花籠ヲ賦ス

行導次第

左士右士神人勤之　奏樂伶人

引頭左右預リ役之　社僧

行事舞

萬歲樂　延喜樂

梵音　調子天人樂

賀殿　地久

導師下高座　千秋樂

入調

五常樂　喜春樂

承和樂　太平樂

右如件　僧中

年號何年

三月九日　　　　　　　　　　　　　　　　脇　奉　行

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　實名

十五日

一孝謙天皇御奉納之舍利講、社頭於供養法所、一萬舍利供修之、衆僧法華讀誦囘向伽

陀相勤申候事、

廿三日

一於御讀經所、爲天下安全之懇祈、五部大乘經轉讀仕候事、

廿五日

一天神講如例月、法務修行仕候事、

四月

一初卯御神祭、前日ニ預方、御神輿壹基莊嚴仕置候事、

一當日社僧於神館ニ、神主之淸祓相勤申候事、

廿三日

一於御讀經所ニ、爲天下安全之懇祈、五部大乘經轉讀仕候事、

晦日

一后土祭社僧神主館后土神木之本ニ於而、酉之下刻法務有之、神主ヨリ賽卷之御供獻備仕候、尤御饌配分之事、

十四日

一田樂師方ゟ御田植御神祭召狀、兄部役トメ持參ス、

召狀寫

來ル廿八日、御田植御神事如先例致參着、御神役可被相勤者也、仍而執達如件、

五月廿八日　頭奉行

某印

德阿彌殿

藤田右近殿

十六日

一於正印殿ニ構壇場、玉體安穩、天下泰平爲御祈禱、般若心經千卷讀誦、神主以祇候（下脫カ）有之候處、中古以來社家社僧分席ニ而相勤申候事、

但シ、太麻者神主家ヨリ御內裏ゟ奉獻候事、

十七日

一兄部役ニ而御田植之花笠五蓋造進之仕候事、
但シ、絹糸麻糸薄樣半紙黑米神主家ヨリ相渡、笠造用ニ仕候、
廿三日
一於御讀經所、爲天下安全之懇祈、五部大乘經轉讀仕候事、
一同夜ヨリ翌朝ニ至リ、於正印殿ニ、御日待之式、陰陽師務之、尤神主出仕有之候事、
廿五日
一天神講如例月、法務修行仕候事、
同日、本坊に集會、御田植御神祭出仕之面々經營有之候事、
一廿六日、前日同式ニ御座候、
廿七日
一前日同式ニ御座候、次ニ御前之濱ニ於解除仕候事、
廿八日
一御田植御神祭、午之下刻本坊ニ集會、社僧爲末座役ト於神主家ニ植女ノ淸祓致シ、即刻社僧六人並ニ預方三人甲冑ヲ着シ、出仕之面々經營相濟、僧中奉行預方行列ニ而順行仕、僧中奉行幣殿ニ着、會式書神主に披露仕、終而僧中奉行御田之側棧鋪

江着、次於　神前、東田樂之式、次ニ預尻卷之風流、次ニ西田樂之式、次ニ預リ尻卷之風流、終而僧中雜卒三拾人ヲ牽（率）ヒ、一之風流有之、次ニ神主以下御田之側棧鋪江着次ニ御田植之式、夫ヨリ東田樂之式、次ニ尻卷之風流、次ニ西田樂之式、次ニ尻卷之風流、終而僧中二之風流、次ニ三之風流、終而神主ヲ始祇候之面々退散仕候事、

但シ、舊例上ケ具足ト唱江、社僧出仕之人數ニ應シ、甲冑之雛形ヲ神主家江差出シ置候事、

當日會式書左ニ相記シ申候、

東田樂職衆之事

權大僧都法印　實名

一尻卷　實名

一田邊社御幣笛吹上座　實名

右如件　頭奉行

年號月日

西田樂職衆之事

權大僧都法印　實名

一尻卷　　　實名

一開口社御幣權上座　　實名

右如件

年號月日　　　脇奉行

右者中古之合式ニ御座候、古式トハ變格有之候ニ就、舊儀式左ニ記載仕候、

御田植式神事式

田樂搭本、次ニ見參田樂、御讀經所北妻戸前、

一御前

先植女渡、次ニ猿樂囀、次僧中奉行御判尻卷、末壹人、兄部壹人、次御幣參、次東田樂、　次尻卷、本社貳人、末社貳人、　次御幣參、　次西田樂、　次尻卷本社貳人、末社貳人、　次僧中一風流、　次本田樂、　次猿樂風流、　次呪師、　次翁面、　次供奉人等渡ル御田棧鋪、

次御田次第、

壹番ニ猿樂長四人大鼓ニ而祝言申、　次植女渡、

次東田樂、　次尻卷本社貳人、末社貳人、

次西田樂、次尻卷本社貳人、末社貳人、
次ニ僧中二風流、次本田樂、次猿樂風流、
次植女渡御殿、次東西田樂遊、次僧中三風流、
次田樂返遊、次呪法師、次翁面、
次呪師返遊、次猿樂返遊、
次呪師猿樂等祿給也、次供奉人等退散、
年號何年
五月廿七日
東田樂職衆之事
頭奉行位實名　大將位實名
轎差位實名　長刀位實名
位實名
一尻卷
位實名　位實名
一開口社御幣　笛吹上座位實名頭奉行

年號
五月廿八日
西田樂職衆之事
當奉行位實名　大將位實名
幣差位實名　小太刀位實名
位實名
一尻卷
位實名
一田邊社御幣　脇奉行笛吹權上座實名
年號
五月廿八日
六月十五日
一社頭於供養法所ニ、蓮花會法事勤之、御池之蓮ヲ折取、神前神樂所其外伽藍ゟ供養之、
廿三日

一於御讀經所、爲天下安全之懇祈ト、五部大乘經轉讀仕候事、

廿九日

一夏越大祓御神祭ニ就、御輿預方莊嚴之仕候、

一同日夕景、社僧於御前之濱、解除仕候事、

晦日

一夏越大祓御神祭、社僧於神館ニ、神主之淸祓仕候、夫ヨリ御讀經所ヘ出仕、御神輿遷宮終而神幸、社僧六人馬上ニ而供奉仕、尤神主始、夫々供奉、宿院御頓宮ヘ着御之上、神主奉幣、宣命之後、社僧法務饒鉢上段相勤申候、尤當日預方御神輿出御ヨリ還御迄、莊嚴役ニ就、供奉仕候、

但シ、陰陽師ヨリ茅輪貳組管人形土器三ツ入洗米同三ツ、右祓具ト〆神主家ヘ差出シ、尤津守家司ヨリ、白米二合計片折壹帖土器六組茅輪用ニ持來ル、且亦當日小預リヘ饒鉢渡シ、宿院ニ持來仕候、

七月七日

一第一之神殿御內陣御寶物虫拂ニ就、神主以下出仕、社僧者御讀經所ニ出仕、神饌獻備、終而佛舍利經卷佛器之類、社僧中ヨリ改封仕、次ニ神主拜終而內陣ニ納申候事、

但シ、享和年中、社頭燒失後、各御寶物類者、舊神宮寺ニ相預リ、當日佛舍利而已社頭ニ社僧持出、神主之拜終而權正祝ニ相渡シ、正禰宜權禰宜正祝權祝等之拜終而、舊神宮寺寶藏ニ相納申候、且亦於御讀經所ニ、御酒御饌頂戴ス、配膳神人方務之、

十五日

一盂闌(蘭)盆會、未之刻神主以下出仕、一之神殿於庭上構壇場、階高座、社僧讃伽陀等終而、奏樂ニ而導師登高座、表白之式等終而、衆僧散華大行導、先右士左士(神人勤之)、次ニ伶人、次ニ獅子、次兄部、次ニ社僧、尤伶人奏樂ニ而行導終而伶人入樂ヲ奏シ、退散仕候事、

但シ、衆僧之花籠賦徹(撤カ)者勘定司相勤候、

廿三日

一於御讀經所ニ、如前月法務修行仕候事、

八月

一彼岸初日ヨリ中日迄、四日之間社頭於御讀經所、八講之法式相勤、神主以下出仕有之候、但シ中日放生會之式有之、次ニ今主靈社ニ神主ヨリ手向之歌有之候事、

八日

一花頭之御神事第一之神殿御饌終而、神人方ヨリ疊ヲ庭上之左右ニ敷、神官北面、社僧南面ニ而對席仕、金屏之前ニ預方、構壇場香華莊嚴之具調備之、導師登壇中上、表白等相勤、衆僧唄散華等之法式終而、双方退出仕候事、

但シ、於御讀經所ニ、經營神人方ヨリ配膳仕候、且亦供米三升筥子ニ入、御供所ヨリ來リ申候、

廿三日

一於御讀經所、如例月法式相勤申候事、

九月九日

一相撲會御饌之供蓋四拾八本、預方並兒部造進之仕候事、

十二日

一神輿四基預方莊嚴仕置候事、

一同日宿院ニ社中之人夫舞臺ヲ鋪理仕、且亦神宮寺下方役而、蓋高座相構、舞臺之邊に、大幡十貳流ヲ建置申候事、

十三日

一相撲會御神祭、社僧於神館神主之淸祓仕候、夫ヨリ社僧一統庭上ニ出仕、尤神主以

下出仕之上、　御神輿遷宮終テ、神幸供奉ニ而、御行宮に着御之後、社僧者北之方廻廊ニ着座、其外供奉之面々着座、先奏樂ニテ傳供獻備、次ニ奏樂ニテ神主奉幣、宣命終而神前ニ構壇場、香華莊嚴之具、預方調備之、次ニ出樂ニテ社僧舞臺ニ於法式相始、講師讀師登高座、衆僧者讃伽陀等修之、導師者法則高貴講式等相勤、衆僧者四箇之法用等修シ終而、散華大行導、先右士左士（神人勤之）、次ニ伶人、次ニ獅子、次ニ引頭（左右預り）役之、次ニ社僧伶人奏樂ニテ行導、終而着座之上入樂ヲ奏、衆僧退下、着座仕、次ニ僧脇奉行ヨリ神主に當日之會式書差出、次ニ伶人入調還御候事、

但シ、社僧之花籠賦（撒り）徹者勘定司勤之、

當日會式書左ニ相記シ申候、

住吉大神宮

相撲會當日式

一神輿出御事

先寅一點於宿院發亂聲

次神幸　　春庭樂

行列次第

猿田彦　　神人　　戸帳方

神寶所　　勘定司　　左士右士神人勤之

獅子貳頭　　社僧　　神官

齋　　大海社司　　津守氏人

權官　　惣官　　八乙女

奏樂伶人

神馬　　神輿四基

着御集會亂聲

次打鐘

一傳供　　十天樂

奉幣官命　　出樂廻盃樂　入樂北庭樂

菩薩供舞

供養舞

萬歲樂

次打鐘

讃衆僧登禮盤ニ	天人樂
講讀師登高座	鳥向樂
唄師	壹弄樂
散華行導（式中ニ勤定同花籠ヲ賦ス）	鳥向樂
行列次第	
左士 右士 伶人	獅子（貳頭）
引頭（左右衆僧）之社僧	
行導一匝（畢而）	伶人入樂屋
衆僧着座	溢河樂
次講讀師下高座	竹林樂
打鐘	
入調	
古鳥蘇	喜春樂
萬秋樂	五常樂
次還御	長還城樂

右如件

年號何年

僧中

九月十三日　　　脇　奉　行

實名

右者中古以來之會式ニ御座候、大永年中之舊記ニ、殊之外嚴成儀式ニ相見ヘ申候、

十六日

一於正印殿ニ構壇場、　玉體安穩天下泰平之爲御祈禱ト、般若心經千卷讀誦仕候、神主以下祇候有之候處、中古以來社家社僧分席ニ而相勤申候事、

但シ、太麻者神主家ヨリ御內裏ヘ奉獻候事、

十七日

一星之宮御掃除仕、御酒御饌獻備仕候事、

廿三日

一於御讀經所、如例月法務仕候事、

一同日星宮ノ祭御酒御饌種々獻備仕、陰陽師法務仕候事、

一同夜ヨリ翌朝ニ至リ、於正印殿御日待之式陰陽師務之候、尤神主出仕有之候事、

廿九日

一北祭御神輿預方莊嚴仕置候事、

晦日

一北祭御神祭於神館社僧神主之淸祓相勤申候事、

十月廿三日

一於御讀經所、如例月法務仕候事、

十一月朔日

一朔日ヨリ十五日之間、社頭於御讀經所、爲天下安全之御祈禱、御事會ト稱シ、法式相勤申候事、

廿三日

一於御讀經所、如例月法式相勤申候事、

晦日

一后土祭社僧神主館神木之本ニ於テ、酉之下刻法務仕候、神主ヨリ貫卷之御供獻備仕、尤御供配分之事、

十二月八日

一新大般若會御神事、未之刻神主以下出仕、一之神殿於庭上階高座、金屏前ニ構壇場、香華莊嚴之具ヲ相調ヘ、青黄白之御供六器串柿貳百、串白物貳百八器エ入、預方ヨリ獻備之仕、伶人樂ヲ奏シ、社僧讀伽陀等之法式、畢而導師登壇中上、表白之式等畢而、社僧散華大行導、先右士左士神人勤之、次ニ伶人、次ニ獅子、次ニ引頭左右、次ニ社僧伶人奏樂ニ而行導、終而入樂ヲ奏シ、退散仕候、式中社僧之花籠賦徹(撒カ)者勘定司相勤、尤右御神祭古式者殊之外嚴ニ相見ヘ申候、

但シ、神主家ヨリ黑米壹斗五升、杉原片折半紙等、亦津守家司ヨリ黑米壹斗相渡リ、御供用ニ仕候事、

一陰陽師ヨリ以撰日正印殿御煤拂相濟、社僧正印殿神前ニ構壇場、歲末之仁王會修行仕候事、

一於御讀經所、如例月法式相勤申候事、

廿五日

一天神講ト相稱ヘ、奥天神境內、於本地堂ニ、法務修行仕候事、

一節分夜、於御讀經所ニ、爲家門安全之懇祈ト、日數般若心經之法務仕候、當日陰陽師

ヨリ祈禱之杉札貳百枚、神主家ゟ差出申候事、

大晦日

一神主出仕之砌、御讀經所ニ於テ、社僧年中旦夕參詣之書表ゟ袖判有之候事、

一社僧之中、陰陽師ト唱候者、社頭ヲ始、神主家ゟ相抱(拘)リ、年中卜撰日等之儀、殊更當社御造營御修覆上遷宮之砌、種々之卜撰日等之儀者、總而陰陽師之職務ニ御座候、

以上

右之外、御讀經所並ニ供養法所ゟ出勤ヲ始メ、舊神宮寺伽藍ニ於テ、神主社家伶人等出仕ニ而、法式修行之廉、且又社僧而已之法務者勿論、數箇度在之候得共、凡而佛部三昧之法務ニ御座候ニ付、御頻覽如何之儀奉恐入候間、此度者記載不仕候、依而此段宜敷　御聞置被下度、伏而奉懇願候、誠恐誠惶頓首頓首、

住吉神祀惣代

庚午七月　　梅園儀雄㊞

梅園貫雄㊞

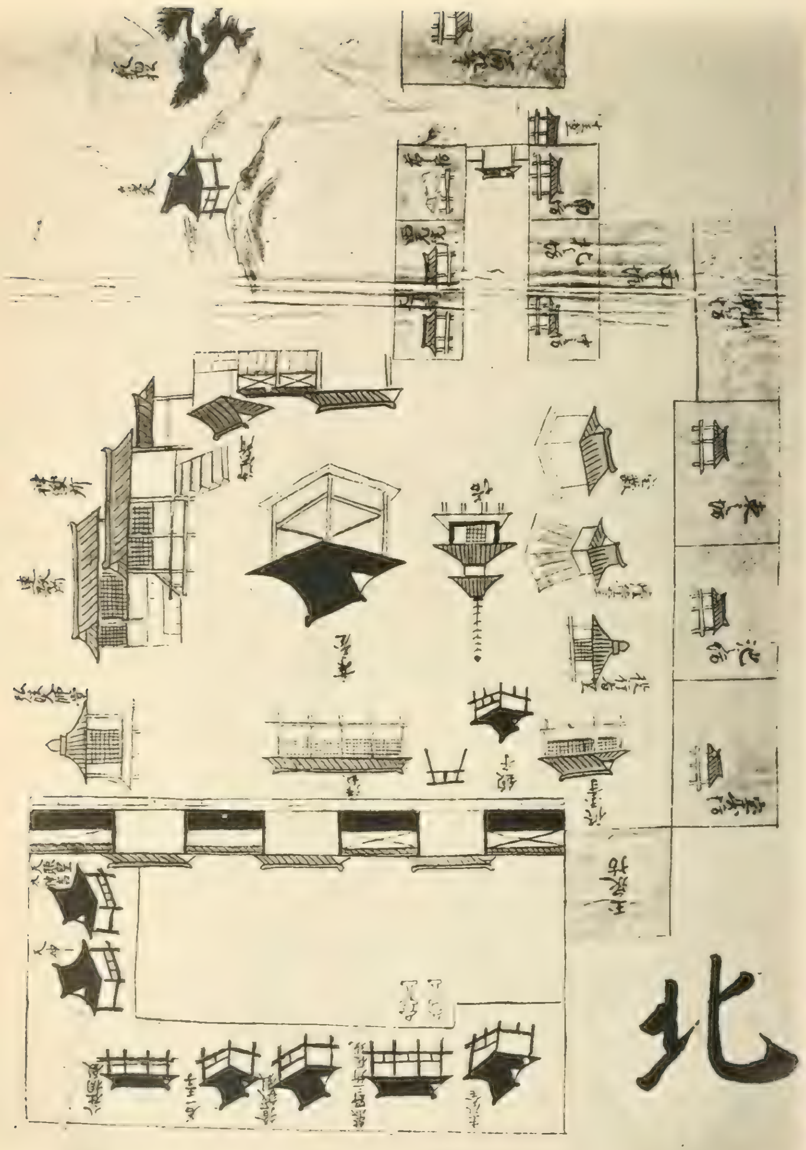
神祇官

御役所

杭全神社神佛分離一件

曾根研三氏報

杭全神社は大阪市住吉區平野宮町に鎮座する神社である、其の御祭神は素戔嗚尊であるが、明治維新まで牛頭天王として崇敬され、別に熊野權現、證誠殿、若一王子、八王子等の諸殿が本殿の向つて右側に建てられてあつた、そして神社としての信仰生命は其の中殿に當る熊野權現の信仰に生き、今猶杭全神社といふよりも、熊野權現と云つた方が、土地の人には分りよいのである、何れにしても、此の神社が幕末まで神佛習合の神社であつて、社内に神宮寺十二坊があつて社僧の奉仕を見た、別に同地に存する全興寺の本尊藥師如來を本地佛として、奥院と云ひ、又長寶寺を神社と對立的に取扱つて同地豪族坂上一族が共に支配して居つた、然るに明治維新の廢佛棄釋は當社にも影響し、明治三年二月牛頭天王の社號を廢して、杭全神社と復稱し、之を本社と崇敬するに至つた、之と同時に熊野權現信仰を退けて熊野神社、證誠神社、若一王子社、八王子社と稱した、然し長年月の信仰惰力は一片の形式によつ


北

て實現されるものではない、熊野神社も明治三年十二月神社取調ヶ條書上帳には杭全社の次に列記するにはして居るが、本社と稱し、杭全社を惣本社と稱して、曖昧な態度に出てをる、次いで翌四年の神社取調ヶ條書には、熊野大神社を先に記し、次に杭全神社を記して、其の信仰の輕重の迹を示してをる、明治七年九月の神社取調帳に至つて、初めて熊野神社を雜社と記して、杭全神社の末社たるかの如き記載方になつた、之は明に明治四年以後、此七年迄の間に於て熊野權現信仰の斥けられた事を證するものである、今より十數年前、予が年少の頃、仲秋の月を此處に訪はむとして、此地に道を聞くの時、杭全神社として敎へられず、熊野權現かと稱して其到るの道を敎へられた事があつた、從つて土地の人の信仰の內容には、大正に入つても前代の信仰によつて當社を崇敬した事が察せられる、

かく廢佛棄釋が本社の根本信仰に大動搖を與へたのであるから、其の佛法による諸堂の改變も又免れぬ運命である、其慶應四年(明治元年)の神社寺院書上帳には觀音堂、十王堂、鐘樓堂、行者堂等の名が見えてをるが、明治三年十二月の神社取調ヶ條書上帳には、何れも元の字が冠してある點から察すると、既に廢佛棄釋はするにはしたが、形の上だけで、實際境內からは取り去つてをらぬ事を證する、然るに翌四年

の神社取調ヶ條書には、明に是等諸堂の名前が見えぬから、此の年には既に撤廢された事が知られる、其の十王堂の如きは、幸くも現在境內に存する大樟樹の西側道路を隔て、更に西に存する禁輪寺墓地との間に漸く命脈を保ち、昨年迄人家として現存し、本年に入つて餘りの荒廢に悉く破壞せられて今は面影もない、其の境內にあつた大師堂は長寶寺境內の田村神社と互に建物を移さず、本尊と神體とを取換へた、從つて今日神社境內の田村神社は一見佛堂の感じを與へ、長寶寺の大師堂は神社の如き感じを與へる建築物に見えるのは、右の如き事情に基くのである、右の如き事情は、比較的神社を中心とした平野鄕の社會組織の中心をなした坂上一族によつて、比較的穩和に事が行はれたやうである、然し神宮寺撤廢に就いては、かなり大變動があつたと思はれるものがある、神宮寺は宮方堂方の二つに分れ、宮方とは最初から神宮寺についた六坊を指し、堂方とは元氏寺として建立せられた修樂寺(一記主樂寺)附六坊が、應永年間本堂と共に神宮寺に合併せられて以後生じた名前である、其の十二坊とは、玉泉坊、寶壽坊、池之坊、東之坊、乾之坊、西之坊、中之坊、北之坊、南之坊、大門坊、西光院、前之坊等を指すのである、此の十二坊が、維新の際多くは荒廢に歸してをつた爲め、廢佛の手は容赦なく加はつた、元來神宮寺十二坊は神社の事には

興つてをつたけれども、寺本と云つて、坂上一族の末吉、辻葩、三上等七名幷に奥野家等によつて支配されてゐた爲め、案外新舊思想の衝突の犧牲になつて、手ひどく破壞されたらしい、そして最も勢力のあつた東之坊は、社僧が神職とならず、他所から迎へた神職の住居とし、それも憚ありとて、在來の連歌所を社務所として之に住せしめ、坊は杢興寺に移して庫裡とした、明治十年頃には東之坊の外に寶壽坊、池之坊等も西光院と共に災厄の手は免れたとはいへ、其の後全く荒廢して現存してをらぬ、僅に西光院のみは、同地素封家末吉氏が寺本であつた關係上、先々代勘四郞氏が別莊として舊地に存せしめる事に苦心したから、舊形を保つて今日に至つた、從つて今日杭全神社の傳臭の殿堂にして舊風を其の儘に傳へたものは、僅に西光院一坊のみである、

如上は杭全神社神佛分離の事情であるが、他の神社のやうに深刻なものゝ少いのは、神社組織の上から來たものといふべきである、卽ち神社組織とは、平野鄕の古來からの支配階級たる坂上一族が崇敬する氏神杭全神社は、被支配階級の崇敬する熊野權現信仰の一部なる家都御子神としての信仰を合有せしめてをつた事である、然も此兩階級が崇敬してやまぬ祇園信仰としての牛頭天王は、又杭全神社によ

つて遺憾なく表現する事が出來たからである、此の信仰の表現は、他の神社が屢々嘗めた在來の支配階級と特殊の關係ある神社なるが故に、加へられたみぢめな改革の手から救ふ事が出來た、其の兩階級の信仰に生きず、支配階級の信仰のみに生きてをつた神宮寺十二坊の改變に、比較的深刻なものを導いたのも此の經過に基くといはねばならぬ、然のみならず、此の穩和な改變は、神佛習合時代の餘風を存せしめて、他の地方稀に見る奇風を存するに至つた、卽ち杭全神社を中心として、習合時代には、同地の全興寺藥師如來を牛頭天王の本地佛とし、是亦同地に存する長寶寺も坂上氏の氏神に對する氏寺たるかの如き關係に置かれてをつたので、行事共の他に種々の交渉があつた、從つて廢佛棄釋と共に表面其の關係は斷たれたけれども、選擧せられた杭全神社氏子總代は、直に兩寺の信徒惣代を兼ねるの不文律を存し、毎年七月九日から十四日に渡る渡御祭には、古來の如く必ず神輿は兩寺境内に暫く御留りあつて、祭典を受けさせられる例を續けてをる、

（包紙）
此手紙ハ、杭全神社、明治五年の頃神佛分離せし時の相談書也、七郎兵衛ハ土橋氏、次郎左衛門ハ三上氏、勘四郎ハ道一、筆ハ三上、

（本文）

口　上

今日社檀中物語相改申候處、本社熊野三所之前脇ニ觀音藥師兩佛是迄之通致し置候而者、當時神佛混交之御趣意ニ相振申候旨、長寶寺田村堂之兩脇ゟ移替申上候而者如何御座候哉、御相談申上候、もし憚否哉御答奉願上候、恐々謹言、

未（明治四年）三月十二日　　永五郎

七郎兵衛

次郎左衛門

勘四郎様

（此時ノ相談ニヨリ社内ノ大師堂ト長寶寺内ノ田村堂トハ取替ラレタリ）

御紙面致拜見候、然者當郷社内東之坊ゟ此程御立寄ニ相成候所、當時西光院ニ住居致居候ニ付、御尋此儀左ニ御答申上候、

一去ル巳年（明治二年）二月、御一新ニ付、神佛混交之義其筋ゟ被仰付（ママ）候ニ付而は、東之坊意門社地ニ住居難相成、退身申出、其段相願候、然者同郷全興寺は、眞言宗ニ而當社奥院之由緒書候、右方へ轉任致度段申聞、無據事故任其意、尚又相願、右兩脇

共筋ニ而御守深ニ相成候義ニ御座候、然ル所右全興寺は當時普請中差出候付、不取敢内分合を以、西光院ニ假住居爲致度候通義御座候、

一東之坊義者、當二月ゟ、社務坂上家御居宅ニ相成、他人へ用貸等之義、始末ニ而は決而無之、表立其筋へ相達煩計中候事ニ在之、

一此度慈門方へ御立寄之節、勝手廻りニ女人居候爲體、御見留ニ相成候樣、當御時勢政府ゟ御手入無御座内、異見加候（へカ）追拂可申樣御申越し致承知候、自然不入用候へ者、時宜ニ寄、御配慮ニ預り度候、此段御含置可被下候、右御答申上度如斯御座候、已上、

○此書狀ハ綠ヲ闕クガ故ニ年代差出人宛名等ハ知ルベカラズ、サレドモ明治三四年頃ノ書狀ナルハ察セラル、

攝州住吉郡平野郷

勸請元　阪上　鍋麿

宮本七名

一杭全社但惣社號ニ而御座候

一本社熊野大神社〇註略
一攝社
一證誠殿〇註略
一末社
一若一王子社〇註略
一八王子社〇中略
一元觀音堂〇註略
一元多寶塔〇註略
一元鐘樓堂〇註略
一元行者堂〇下略
明治三庚午年十二月　日

宮本七名
惣年寄
末吉永五郎
土橋七郎兵衛

三上次郎左衛門
末吉增五郎
末吉勘四郎

〇慶應四年(明治元年)ノ神社寺院書上帳ニヨレバ、猶混淆ノ殿堂アリ、然ルニ此調書ニハ、既ニ廢セラレテ殿堂ノミ殘ルヲ示ス、而シテ翌四年ノ神社取調ケ條ニハ、全ク殿堂ノ名スラ見エザルハ、悉ク斥ケラレタルガ爲ナラム、今日殘存スルハ西光院ノ一坊ノミニシテ、此ハ當時末吉勘四郎氏別邸トシテ破却ヲ免レタリ、

攝津國住吉郡第一區
郷社　祠官
阪上　廣慶

大阪府管下攝津國住吉郡第一區平野郷鎮座

杭全神社　式外　當時郷社〇註略

雜社　熊野神社〇下略

右之通相違無御座候、以上、

明治七年

右祠掌

九月

樹　福　教　印

三　上　正　義　印

右祠官

阪　上　廣　慶　印

右戸帳

福井次左衛門　印

藤岡治左衛門　印

平野郷社杭全神社内年暦記　明治十九年度改

氏神

杭全神社　元牛頭天皇（王）祭神素盞嗚尊

明治三年年二月社號改（下略）

熊野大神　元三所權現ト云

明治三年改〇下略

同證誠殿〇註略

若一王子宮○註略

八社○下略

前書年歷舊記ヲ以調之、

明治十九年　月

三上　正義 印 花押

三河大濱騷動の餘波

〔闡彰院の死〕 伏見西方寺闡彰院空覺傳　佐々木月樵述

（上略）是より先き菊間藩の事生じて、三月二十四日、三河十二藩は、大濱に會合して、それ〴〵善後策を協議したのである、會議は翌日に亙るも、何の決する所なかつた、そこで先づ以て御本山より、使僧の出張を求めることゝなつて、本願寺では種々詮議の末、遂に本願寺よりは、護法場總轄闡彰院師が、護法場の所化渥美契縁師を祕書として、長覺寺無量寺磯邊眞勇美等と共に出張せられたことである、一方民部省からしては、民部大丞渡邊清氏が、わざ〳〵出張せられた、そこで服部少參事（參）は、とりあへず先づ闡彰院師宛にて、次の意味の書面を出すに至つた、

一、朝日を拜する事は固より無之事、

一、神前の呪文は、祝詞の文なり、此儀宗旨に背く儀ならば、相止め可申事、

一、寺院廢合之事中間敷事、

右件々の外、西方寺、光輪寺並に當壽までを、耶蘇と申觸し候故、此儀を凡俗へ御諭し被下候樣致度事、

そこで、一方岡崎の方にては、すべての關係者を、城内の大廣間に集めて、それ〳〵審問が開かれた、護法の趣旨にして、既に徹底したる上は、何れも潔く服罪すべしと、罪は互に我身に引受けて、四月開廷、五月末取調は結了して、民部大丞は六月末宿屋の壁に、一首の和歌を殘して、歸省せられたのである、

法の道あれにし野邊に枝をりせん
　ゆけやもろ人ふみなたがへそ

當時闡彰院に隨從したる渥美師の覺書の日記の紙片、この頃伏見西方寺より出づ、それによるに、

五月廿二日（十カ）、岡崎專福寺え着、
同十三日晴、朝飯後、嗣講威力院來、闡彰院師、朝廷の宣狀を威力院に授け、今般法主の命を奉じて、當國說諭の旨を民部大丞え告げしむ、
○巳上刻、威力院嗣講の侍者德成來、○吉濱正林寺役僧來、謹愼の由を宣て、來り訪はざるを謝する、
同十四日晴、朝飯後、威力院師を導、民部省出張所に出、時尅遲れ歸、申上刻再參省、小關庶務少佑對面、說諭の旨趣を訊問す、依て五ヶ條を認む、闡彰院師案文、契緣筆

之、○此日慧燈來、○野寺役寺松韻寺來、

同十五日晴朝闡彰院參省、五ヶ條を捧ぐ、第一ヶ條不分明の由こ付、再び删補、申刻呈之、小關收之、民部大丞へ伺出由を述ぶる、黄昏皆演坊、東京より專福寺へ着、○針崎役寺來、

同十六日陰、新大法主の御直書を捧て、民部省に出、小關預之、尙再應呼掛可申趣をのべる、

同十七日晴、申牌驟雨、朝觀岳、超梁兩僧發程歸京、申上刻、民部省より闡彰院師、威力院師、皆演坊三人をよぶ、依て三人參省、大丞對面、編民の法をのべ、戶籍表等の雛形を貸す、

同十八日雨夜大風、朝佐々木嗜東京へ發す、○午後威力院師來、昨日の趣を談ずる、

同十九日陰、朝闡彰院師參省、規律を定め、方向を改可申趣、小關より申談ずる、○同日申刻、皆演坊參省、西京へ罷越、直に東京へ出張の由を達す、又小關より方向の儀を談ず、

同二十日晴、皆演坊發程、○申牌闡彰院參省、規律を定め候に付、手控書を以て相伺候事、人選差出可申との事に付、闡彰院師威力院師を訪ひ之を談ず、

同二十一日雨、磯邊眞勇美殿發程歸京、朝無量寺參省、(乃至)〇此日大丞殿巡藩に出る、

同二十二日晴、朝闡彰院師民部省へ出づ、無量寺歸京の由をのべる、此時人選名前書持參、但威力院師より差出候寫とも持參、小關へ預置く、大丞かへられ候まで、闡彰院威力院逗留可致旨、小關より申述ぶる、〇順成寺來る、幽閉人の名前書持參、

同二十八日晴、申後驟雨大雷、二十六日出、御納戸より闡彰院宛一通、無量寺長覺寺宛一通、此方にて金策相整候樣、郵便にて申來る、〇晝後靑野本光寺來り、護法院よりの書面、香山院師より威力院師に被贈候書面、闡彰院師持參、右之文體大抵同樣の趣、大丞殿巡回先にて探索被致、就右、庶務少令史光田正意、岡崎へ遣、本光寺に內密探索申付、表にて相調候而は、大事に付、密々搜索可致旨被申附候由申來る、依之、闡彰(專脫カ)福長覺三人連名にて、威力院出頭申遣候處、岡崎藩より出役も有之、勝手に出拔候事難成、其方より御出懸にては如何と申返書來る、此夜本光再來り、威力へも探索人參候所、初は右等の書なしと陳じ、遂に問答の後、寫をみせられ候故、疑心益深きの由談之、〇是日田貫唯心寺歎願差出度旨申來、右は不宜

旨長覺契緣申遣す、

同二十九日晴、契緣昨日之義に付、上野淨願寺に至り、威力院師に談じ、香山院師書面寫遣、黃昏威力院より東京へ護法院書面不都合の樣申遣候書面を被遣、使願正寺所化也、右に付、明日中威力院出頭なる樣申遣す、右に付長覺寺より安休寺呼掛候樣談じて、明三十日早天一色へ態使遣し、本光兩度來る、

同三十日晴、早々本光來り、東西京書面の義内訴可然旨申來る、(後略)

六月朔日晴、早天闡彰院、威力院、民部省へ出、闡より内訴歎願文差出し、小關に相渡、尙又人選書差出す、七つ時、威力院民部省より呼掛に付、出頭候處、說諭の義は、各藩に相談の上、取扱申度、其迄延引可致樣、小關より被申聞、安休寺九つ出頭、護法院來狀披露の義相尋る、但威力院へ小關より護法院書面、正休寺惠覺寺へ參候由、右爲と相調、本書伺上可申樣被申聞、

同二日晴、安休寺出頭、早天闡彰院民部省へ出頭、正休寺專覺寺呼掛の義相屆候事、

同三日晴、

にて日記は終つて居る、かくの如くにして、闡彰院には、先に少(參)贊事の申出に對しては、民部省へ正しく說諭手續五箇條、即ち(一)巡廻之節、國內僧侶人選の上、兩三輩補致

申付候事、(二)三ヶ寺を始めとして、組々へ巡在可仕事、(三)組々に於て、一兩輩人選を以て取締方申付、鎭靜可爲致候事等の義を申入れて置かれた、それ〳〵許可もありましたから、闡彰院師は、擾動後に於ける碧海幡豆の寺院を巡教して、朝廷は勿論の事、諸藩にても廢寺合寺の意志なきことを門信徒の人々に傳へられた、六月二十五日には、同國安休寺晃耀を三河の取締に、唯法寺觀順等をその助勤に命ぜられ、茲に三河に於ける廢寺合寺の問題は、一先づその結末を告げしかば、我闡彰院師は、七月二日教命をはたして歸洛せられた、一難去つて一難また起る、此時我本山にては、先きに王政維新の刺激をうけて、護法場を中心に、何とはなしに起りし所の本山弊政刷新の聲は、やうやく事實となつて、所內至る所に、新舊思想の大衝突を起さんとしつゝある最中であつたのである、

高倉學寮の『上首日記』によつて、私は學寮を中心として、歸洛後の闡彰院師を紹介することゝする、

七月十七日晴、護法場より至道(私註――桑門至道師にて、當時護法場の會計でありしときく)申來り候て、今晩乎又は明晩乎、御本山の御人減に付、闡彰院、伏威、秀山に目かけ、打果に被越候樣子、用心可爲至樣知せ呉、此趣寮內先觸置候、

八月十八日晴、蒸、講後講堂集會、闡彰院、念覺寺、明圓寺、伯東寺出席、御本殿一條也、夜同、海藏、覺了、觀榮寮司、大惠擬寮司、訪筑後柳川卽善寺宿所、會議而歸寮、

八月二十八日晴、副講闡彰院擬講「玄義分」云云、

九月十二日晨朝參詣、御手道具御捐入札於大宴殿、同得雄公顯融公入札、得雄公寒山拾得、茶湯重落札、其餘勞謙公、慈鎮和尚懸歌、我懸波松遠志久禮乃會寶加根天之短冊一幅落札、

一夜於泉亭、明圓寺、伯東寺饗應、講師香山院師、闡彰院、瑞麟院師及上首映勞公得雄、

同十九日、香山院御學寮改正寮舍に觸示文、

先規前大衆に聞す、專學黌開設の基本は、學問の至要たる所以を識知し、宗規を研磨せしむるに在り、夫學也者、顯密教禪權實聖淨、廣を厭はず、深は要するにその邊際を盡すべからず、之を約すれば、禮羅朋扶して、生徒を陶成するの具也、然るに日を涉り年を累ね、流弊なき事能はず、之を督せずんばあるべからず、今や大政維新の盛運に徇て、高祖師開宗の古に復するを以準據とし、自弊をして一洗せしむ、學校室改整の議なからんや、

凡そ學徒の中に於て、學長じ德高き者、之を講者と號す、衆の模範たるべき事、其名分正しからずして、奈何か衆を領し策を加へんや、拙誤て講僧の列に伍す、自から譾劣を恥て措く所を知らず、況復方今人黠にして暴、朽索の六馬を御するよりも殆し、提撕效なく、登庸允らずんば、罪を國家に獲、罪を法君に受ん、以故速に改正を企てんと欲す、然るに予老齡下情に疎し、焉ぞ其功當を得ん、於是乎各無忌憚其所思を呈露して、以て拙が志を佐けよ、

明治四季龍集未季秋　　講師　香山院龍温啓

本黌闔衆中

十月一日、久しく懸案でありし所の本山寺務所の改革は、遂に九月十日の御親定の事務章程に基きて、全然坊官制度を廢して、以て玆に新しく本山寺務所の開局を見るに至つた、その時初めて任命せられた人々は、卽ち次の人々であつた、

議事　法因寺　養源寺　永順寺
幹事兼納戶　淨慶寺　等觀寺　圓重寺
同　寶受寺　本福寺　本龍寺

このうち法因寺とは渥美契緣師、永順寺とは石川舜台師、等觀寺とは阿部慧行師等

の事である、その翌々日の夜、卽ち十月三日我護法場主闡彰院東瀛師は、劍先の闡講寮に於て、刺客の爲めに暗殺されたことである、享年六十八歲であつた、

十月四日晴、

詣是朝、々煙霧氤氳、護法場伏成公之扉を叩く有り、眠難覺風情也、何人叩扉乎、不分明、遂往本堂御影堂、勤行過半頃、歸寮、煎茶之所、伏成公突然來告闡彰院師横死、而劍先闡講寮に至る處、香山院師瑞應院師、早至、予死骸一見之上、年間町下京十七番學校に至り、右之趣口上書之通相認、右之小學校に差出候、

一伏見西方寺隱居闡彰院東瀛義、昨夜八つ時頃、何者共しれず暗殺致し、立去候は三人にて、一人袂落しの提燈引下げ、侍者の小僧を呼起し、嚴敷申付、若高聲にも及候時は、打殺し候樣被申候に付、恐怖致し、曉天迄控罷居候、此段御達申候、

學寮上首役

豐前永照寺伏成判

京都府

御役人衆中

一、我宗ニ崇ムル所ノ本尊ハ、彌陀如來ト申テ、乍恐皇國天祖ノ尊ト同體異名ニシテ、智惠ヨリ現レテハ天ノ御中主尊ト稱シ奉リ、慈悲ヨリ現レテハ彌陀如來ト申シ候、サレバ佛法ハ元來我國邦ニ起ル教門ニ非ズトイヘドモ、內地ニ傳播スルコト既ニ一千餘年、舊史古記ヲ按ズルニ、貴賤上下愚夫愚婦ニ至ルマデ、皆其教ニ從フニ似タリ、今日ニ及ンデ、之ヲ外視スルヲ得ベケンヤ、但シ今日ノ僧徒無學懶惰ニシテ、尸位素餐ナルハ、德川氏二百餘年、僧徒ヲ安逸ニ放棄シテ、之ヲ用ユルノ術ヲ得ザルナリ、

朝廷モシ臣等ヲシテ、末寺ノ僧徒ヲ督責スルノ全權ヲ得セシメ給ハヾ、冀クバ釋氏ノ面目ヲ一洗シテ、愚夫愚婦マデ國恩ノ國恩タルヲ知ラシメントス、

一、皇國ノ萬國ニ傑出スル、ソノ一ヲ論ズレバ、萬國ハ人民アリテ而後、强ハ弱ヲ欺キ、弱ハ强ニ敵セズ、モト定レル君臣ナシ、タヾ酋長アリテ制スルノミ、今ヤ古ノ何奴獯鬻ノ類ニ非トイヘドモ、亦主僕アルノミ、君臣アルニ非ズ、我皇國ハ天神降臨シテ、君トナリ師トナリ給ヒテ、衣食住ヲ始メ、コト〳〵ク產出シ、今日士農工商其業ヲ安ジテ、水火盜賊ノ備ヲ成サズ、主ニ政府ノ保護ニヨル、而シテ中古已來、世祿ノ弊農商ニマデ傳染シ、遊手ノ民、無稅ノ地ヲ私ス

ルモノアリテ、(助)稍モスレバ私ヲ以テ公ヲ誹ル、更ニ一身ノ安ヲ謀テ、國家ノ憂ヲ憂ヘズ、臣等今日マデ、ナホ舊習ニ泥ンデ惟マズ、稍萬民子視ノ聖恩ヲ知ル、教導ノ次、コノ政府ノ御政體ヲ說テ、愚夫愚婦マデ、所謂大日本魂ヲ擴充スルヲ以テ、萬分ノ一ノ

聖恩ヲ報ヒ奉ン、

一、海外ノ御交際盛ニ行サセラレ、人々文明開化ノ域ニ向フ、マコトニ喜ブベシ、タヾ利ノアルトコロ、害隨ツテ生ズ、往々異教ノ萠芽アリ、近年西陲ノ一事以テ證スベシ、或ハ謂ヘラク洋教我ガ國ニ來ルモ、之ヲ禁ジ之ヲ戮ス、果シテ其害ナカルベシト、此論タヾ今日ニ言フベシ、決シテ後日ノ患ナシトスベカラズ、

皇國ニ生ルヽ者、此間ニ在テ、

皇國後來ノ利害得失ヲ考ヘ、早ク國基ヲ維持スルノ計ヲナサズンバ、遂ニ芟レトモ盡キズ、攘ヘドモ去ラザルノ時ニ至ツテハ、神教ノ純正ナル、儒學ノ謹嚴ナルヲ以テ、之ヲ排闢セントスルトモ、士君子ニ於テハ善ク其理ヲ得ベシ、億兆惷愚ノ民ニ至テハ、決シテ其命ヲ奉ズルノ心ナカルベシ、今國家耶蘇ノ

教ヲ豫防センニハ、佛教ヲ以テ愚民ヲ諭ス、頗ル捷徑ナルガ如シ、法律ヨク之ヲ外面防グベシ、コレヲ人心ニ防グ能ハズ、夫レ愚民ノ心ハ、賢人君子ノ心ヲ以テ測ルベカラザル者ニシテ、其宗旨ヲ信仰スルノ心、嚴律苛法モ禁ジテ變移セシムベカラザルハ、天下ノ知ル所ニシテ、佛教ノ愚民ニ於ル、耶蘇ノ洋人ニ於ケルト同一理ナリ、而モ耶蘇教ノ誘導スル、佛教ヨリモ巧ナルニ似タリ、今佛教ヲ以テ彼ヲ防ガンニハ、獨リ僧徒ノ力ヲ以テスベキニ非ズ、政府ノ保護ヲ得テ、而シテ能ク行フベシトス、

謹ンデ各國ノ政體ヲ按ズルニ、未ダ宗旨ナキノ國ヲ見ズ、我邦モ亦遂ニ之ヲ定メザルヲ得ズ、夫レ神ト儒共教高シト雖、洋教ヲ防ギ、愚民ヲ諭ニ至テハ、之ヲ用ルコト頗ル難シトス、宜ク之ヲ憲律トシテ、政體ニ合セ、以テ士君子ヲ教育スベシ、敢テ我教ヲ主張スルノ私見ニ非ズ、我佛教モ士君子ヨリ之ヲ論ズレバ、其教モ亦弊ナシトセザルベシ、然レドモ其小利害ヲステヽ大裨益アルヲ採用セリ、後來國體ヲ維持スルノ益豈少シトセンヤ、マコトニ洋教朝タニ蔓延セバ、國體夕ニ土崩センコトハ、臣一人ノ私見ニ非ズ、天下共ニ知ル所ナリ、

一、今日ノ僧徒遊惰素餐ニシテ、一己ノ安逸ヲ甘ジ、因循ノ旧弊ヲ脱セズ、コレヲ以テ稍（[illegible]）モスレバ、排仏ノ説行レテ宗教ノ礎トナリ、下民或ハ疑懼ス、随ツテ邪教蔓延ノ萌芽アリ、臣等切歯慷慨スル所コヽニアリ、今ヤ諸末寺ヲシテ郷校トシ、僧徒ヲ策勵シテ書算ヲ授ケ、農桑ヲ勧メ、神儒ノ二教ヲ講求シ、往々西洋各邦ノ文籍モ通覧シ、文明開化ノ域ニ向ハシメ、釈氏ノ面目ヲ改メントス、抑我宗祖ハ、モト大活眼ヲ開キ、出家中ニ在ツテ、身ヲ同肉同妻ノ際ニ處シ、皇国ノ道ト釈氏ノ道トノ冥契スルトコロヲ以テ宗旨トス、但シ愚夫愚婦ハ其日ノ聞ルヽ所ニ拘泥シテ、習深（業カ）ノ汚俗ニ安ンズ、臣ノ持論ヲ目シテ、コレヲ過激トセバ、實ニ其説ノ行レザルノミニ非ズ、却テ民心ヲ煽動スルニ近シ、仰願クバ

朝廷ノ覆蔭ヲ蒙ツテ、臣等ヲシテ宗教宣布ノ寵命ヲ受ケシメバ、諸門徒臣等ヲ疑ハズ、更ニ大道ノ大道タルヲ知ラシ、愚夫愚婦ノ賤キモノミナ

国恩ヲ報ジ、民心合一シテ、

国家ヲ維持スルノ地ニ至ラバ、邪教何ヲ以テカ潜入セン、皇道何ヲ以テカ光

被セザラン、臣等マタ

皇道ヲ宣布シ、邪教ヲ防禦シテ、萬分ノ一ノ
皇恩ニ報ントス、宗教コノ外更ニ無御座候、敢テ財施等ヲ貪ルニ非ズ、最モ檀越ノ布施ト雖モ、コレヲ安逸ノ具トセズ、凍餒ヲ防グノ外、
朝廷ニ獻納シテ、微志ヲ表セン、前許
威嚴ヲ瀆冒シテ、敢テ妄議ヲ呈ス、僭越多罪、

臣光瑩　誠惶誠恐頓首頓首

三河大濱騷動處刑寺院後住の件

〔社寺取調類纂〕五一〇　(受)明治五年七月廿五日　(回)同廿七日　(濟)同三十日　(卿)嵯峨
(丞)天野　(議)勝浦鞆雄　(輔)宍戸　黒田　(出仕)高木　鴻　(課)寺務

額田縣管下專修坊以下二ケ寺後住之儀ニ付伺

議案

去五月、從同縣、元三州云々之趣ヲ以伺出候節、情實不得止義ニ付、伺之趣御聞届ニ相成候事故、第九號布達之通リ、於地方取計可然儀ト存候、但シ專修坊後住深悟儀、

未タ若年之事故、傑出非凡ノ人才ニ無之候ハヽ、住職難開届儀ト存候、仍テ左之通リ御指令相成可然存候、

指令案

伺之通、

碧海郡眞宗專修坊外二ケ寺後住之儀ニ付伺

當縣管下碧海郡高取村專修坊外二ケ寺儀、昨辛未年、當國鷲塚村暴動連累ニ有之候處、先般寺名從前之通被立置候樣相伺、御聞屆相成候ニ付、今般後住之儀、別紙之通願出、始末相糺候處、申立之通相違無之候、因テ別紙三ケ寺願書相副此段相伺候、以上、

明治五年七月十五日　額田縣

教部省

御中

（朱書）
「伺之通、

明治五年五（七カ）月三十日」

後住願書

碧海郡高取村專修坊元住持法澤儀、昨辛未三月、同郡於鷲塚村ニ及暴動候僧侶ニ相加リ、既ニ處刑幷眷屬共轉籍被仰付候、然ル處此度御寬大之御仁恕ヲ被爲持、寺院建被置、眷屬共舊寺院ヘ相歸候共不苦候趣、御達ヲ蒙リ、猶法類檀中熟議之上、後住願出候ハヽ、御聞屆之趣難有仕合奉存候、右ニ付、愛知縣御管轄尾州海東郡八十八區北一色村八百九十四番屋敷眞宗東派永教寺鬪教次男深悟當申年十七才人性篤實學行入精之者ニ付、右之者ヘ後住之儀被仰付候樣奉願上度、法類檀中熟談仕候、御聞屆只管奉願上候、以上、

壬申七月

專修坊法用預
圓福寺皆住

檀家總代
神谷喜代助

同斷
深谷民藏

法類
東端村

箕輪組取締
西釜村
念空寺慶演

眞宗一派取締助勤
西岸寺了響

吉濱村
正林寺浩然

第二小區
戸長御中

右之通相違無之候、

副戸長
深谷七右衛門

第二大區副長
木村琢磨

額田縣
御廳

愛知縣御管轄
尾張國海東郡八十八區
北一色村八百九十四番
眞宗東派永教寺閒教次男
深悟
壬申十七才

先住法澤鷲塚村擧(暴カ)動ニ付徒刑
一滅罪檀家　八百五拾五軒
一寺格素絹
一舊朱印地有之候、
一元治二歳丑三月六日西京於本山得度仕候、
一眞宗東本願寺學寮所化ニテ尾州海東郡蟹河村願塵寺舍中ニ御座候、
一天性篤實行狀脩整
一佛乘漢籍修學勉勵中ニ御座候、
一檀越中ヘ王法教諭致シ候、

右之通相違無御座候也、

法類
念空寺
慶演

副戸長
深谷七右衛門

第二大區副長
木村琢磨

額田縣
御廳

後住願

碧海郡城ヶ入村城泉寺元住持了順義、昨辛未三月、同郡鷲塚村ニ於テ及暴動候僧侶ニ相加、既ニ處刑幷眷屬共轉籍被仰付候、然ル處、此度寛大之御仁恕ヲ被爲持、寺院（被脱カ）建置、眷屬共舊寺院ヘ相歸候共不苦趣蒙御達、猶法類檀中熟議之上願出候ハヽ、御聞屆

之趣キ雖有仕合奉存候、右ニ付同寺隱居玄了儀當申五十三才人性篤實學行入精之者ニ付、右之者へ再住之儀被仰付候樣願上度、法類檀中熟議仕候、右御聞屆只管奉願上候、

法類
碧海郡米津村
龍讃寺
圓鏡

明治五年七月

箕輪組取締
福釜村
西岸寺了響

右相違無之ニ付奥印仕候、

第二大區内二小區
戸長御中

副戸長
榊原吉人

右之通御座候、以上、

第二大區副長

木村琢磨

額田縣

御廳

第二大區内第二小區

三河國碧海郡城ヶ入村

眞宗東派

城泉寺

玄了

壬申五十三才

先住了順鷲塚暴動ニ付徒刑

一滅罪檀家　六拾八軒

一寺格　飛擔

一元除地境内　三反拾八歩

一弘化元年十二月九日眞宗東於(派カ)本願寺得度仕候、江州大津唯泉寺澄玄闡講師弟子ニ御座候、

一京都眞宗東本願寺高倉學寮所化ニ御座候、

一性質行狀　篤實神妙之者ニ御座候、

一佛乘ハ勿論、漢籍モ勉勵可仕候、
但皇洋學無御座候、
一檀越中德望有之、王法教諭致シ候、
右之通相違無御座候、

明治五年七月

法類
米津村
龍讚寺
圓鏡

箕輪組取締
福釜村
西岸寺
了響

第二大區內二小區
戶長御中

右之通御座候、以上、

副戶長

榊原　吉人

第二大區副長

木村　琢磨

額田縣

御廳

後住願

碧海郡榎前村信照寺元住持宏流儀、昨辛未三月同郡鷲塚村ニ於テ及暴動候僧侶ニ相加、既ニ處刑幷脊屬共轉籍被仰付候、然處此度寛大之御仁恕ヲ被爲持、寺院建被置、脊屬共舊寺院ヘ相歸リ候共不苦候趣キ、蒙御達、猶法類檀中熟議之上願出候ハヽ御聞屆之趣、辱仕合奉存候、右ニ付同寺舍弟德隣儀（當申年廿七才）人性篤實學行入精之者ニ付、右之者ヘ後住之儀被仰付候樣願上度、法類檀中熟談仕候、右御聞屆只管奉願上候、

第二大區内第六小區

三州碧海郡榎前村信照寺兼帶

眞宗東派箕輪組取締福釜村

明治五年六月

西岸寺
了響

檀中代
加藤利平

檀中代
加藤東七

同
齋藤勘市郎

村總代
加藤吉平

同組取締
箕輪村
光明寺
了諦

前書之趣相違無御座候ニ付奥印仕候、

戸長御中

右之通相違無御座候、以上、

副戸長
神谷小八郎

第二大區長
市川一貫

額田縣
御廳

第二大區内第六小區
三州碧海郡榎前村
眞宗東派
信照寺
徳隣
當申廿七才

先住雲流鷲塚學(暴カ)動ニ付徒刑

一滅罪檀家　百二拾軒

一舊朱印除地等無御座候、

一慶應三年丁卯八月廿日於本山得度仕候、

一眞宗東本願寺學寮所化御座候、
一佛乘ハ勉勵中御座候、
一檀越中王法教諭致シ候、
右之通相違無御座候ニ付調印仕候、

明治五年六月

第二大區內第六小區
碧海郡和泉村
眞宗東派
法類
本龍寺
祐惠
右區副戸長
神谷小八郎
第二大區長
市川一貫

額田縣
御廳

三河豐川吒枳尼天神佛區別の件

〔太政類典〕第一編第百廿五卷　教法　神社四

四年

西大平藩管内三河國豐川村妙嚴寺境内豐川明神神佛區別

　西大平藩伺

當藩管内三河國寶飯郡豐川村妙嚴寺境内ニ、豐川明神ト申習、鎭守堂ニ安置有之混淆ノ體ニ付、取調仕候處、右ハ吒枳尼天ノ像ニテ、全佛躰ニ相違無御座候、尤同境内ノ（二カ）三光明神ノ社御座候、近世右神號ト混淆仕候儀ト奉存候、依テ右明神ノ社境界相隔、兼寄神職ニテ神務仕、混淆無之様爲仕候者、不苦儀ニ御座候哉、此段奉伺候、以上、四年五月廿四日

　神祇官中辨官宛

西大平藩ヨリ、豐川稻荷ノ儀ニ付、伺書面難解廉有之候間、本官ニ於テ、同藩大屬ノ者呼出相尋候上、申開置候儀有之候間、右書面委取調認替候様御達有之度存候、依

テ此段申進候也、四年二月九日

西大平藩伺 辨官宛

當藩管内三河國寶飯郡豐川村妙嚴寺境内ニ有之候吒枳尼天ノ儀、神名申唱、混淆ノ儀ニ付、取調仕候處、別冊調書ノ通、佛躰ニ御座候、然ル處近來諸人信仰ヨリ豐川明神ト申唱、華表並神酒壺眞鍮幣等寄附候テ、自然混淆仕候ヘ共、全吒枳尼天ノ佛躰ニ御座候、乍併神名等申唱候儀ニ付、右神佛如何區別可仕哉、依之別冊取調書並妙嚴寺境内繪圖面相添此段奉伺候、以上、四年三月十三日

豐川吒枳尼天由來取調書

一 妙嚴寺鎭守吒枳尼天濫觴ノ儀ハ、文永年中寒岩儀尹(嚴義下同ジ)和尚入宋ノ後、淨慈寺ノ虛堂ニ參シ、歸國ノ節、觀世音、吒枳尼天ノ兩像ヲ授傳、夫ヨリ相傳ヘテ、六世ノ孫義易今ノ妙嚴寺ヲ創草(草創下同ジ)シ、觀世音ヲ以テ佛殿ノ本尊トシ、吒枳尼天ヲ鎭守トス、右像ハ天女ノ容貌ニテ、首ニ寶冠ヲ戴キ、左手ニ寶珠ヲ捧ゲ、右肩ニ束禾ヲ擔ヒ、白狐ニ跨リ、

二 岩上飛行ノ畫像ニテ、大破磨滅ハ仕候ヘ共、今ニ相傳罷在候、右寫木像ニテ、製造ノ年代ハ聢ト相分リ兼候ヘ共、當今鎭守堂ニ安置有之候、且開山東海義易ノ親(眞カ)蹟ニテ、

鎮守吒枳尼天大菩薩
東海義易（花押）

右古筆一軸珍藏罷在候、同寺開闢ハ嘉吉元辛酉年ニ御座候、日々ノ祈願行法等、大般若理趣分又ハ大般若轉讀等ニテ、往古ヨリ混淆ノ法式相用不申候、例年十一月十六日ヨリ廿二日迄、大法會ト唱ヘ、國家安全五穀成就ノ爲、一七日ノ間、祈念仕候ヘ共、混淆ノ行法等ハ無御座候、且又古來ヨリ信心ノ者ヘ授與候札守モ、右畫像ヲ寫シ彫刻致シ差出申候、然ルニ六七十年以來、世俗地名ニ原キ、豐川明神又ハ豐川
三 稻荷ト相唱ヘ、華表等寄附候ヨリ、混淆仕候儀ト奉存候、勿論是迄神位ノ御用等相受候儀モ無之、伏見稻荷社ノ屬下ニテモ無御座、全ク本尊ハ傳來ノ佛躰ニ御座候、近世諸人信仰ヨリ、自然混淆ノ儀ハ、土地古老ノ者ヨリモ傳聞仕候儀、右之外種々ノ傳習モ御座候得共、正説ノ向取調申上候、以上、（圖面缺）

辛未三月

昨日西大平藩ヨリ豐川稲荷ノ儀ニ付、伺書ニ妙嚴寺境内繪圖面相添ト有之候へ共、御廻シ有之候内ニ無之候間、此段御尋申進候也、四年三月十四日

神祇官附紙

一「寒岩義尹和尚入宋ノ節、吒枳尼天畫像授傳ノ由來可申出候事、神祇官意見

二「義易ト申者、嘉吉年間豐川村へ妙嚴寺創草ノ由來、并寒岩義尹和尚從畫像授傳ヨリ義易ニ至ル凡百七十餘年間、吒枳尼天像何處ニ安置致候哉ノ事、

但、妙嚴寺創草前、今時ノ寺地原野ニ候哉、有民家等有之候哉ノ事、神祇官意見

三「六七十年前士俗地名ニ依、豐川明神又ハ豐川稲荷ト稱シ、華表等寄附ニ付、東海道筋へ私ニ華表建立致シ候哉、或ハ其筋へ願出相建候ハヾ、其時ノ願面並差圖ノ振等都テ詳細ニ可申出候事、神祇官意見

西大平藩願　辨官宛

當藩管内三河國寶飯郡豐川村妙嚴寺境内ニ安置有之候吒枳尼天ノ儀、是迄神明（名カ）申唱、混淆ノ儀ニ付取調仕候處、右ハ全佛躰ニ御座候へ共、近來諸人信仰ヨリ神名等申唱候儀ニ付、神佛區別如何仕哉ノ段、去月中伺書差出置候儀ニ付、何卒右御差圖至急御座候樣、此段奉願候、以上、〇四年四月三十日　指令無ト云

（受）明治五年六月廿九日　（回）七月三日　（済）同月九日　（朱）櫟崎
（主）小野　（議）桃井之主 藤田顯蔵　（補）宍戸　生田　（田）（任）青木　鴻　（課）社寺

額田縣ヨリ部内寶飯郡豊川村妙嚴寺吒枳尼天之儀ニ付伺

右ハ既ニ舊神祇省ニ於テ、検査相成居、妙嚴寺中立通相違モ無之儀ニ付、左之通指令相成可然存候、

指令案

書面妙嚴寺中立之通可取計候事、

壬申七月

寶飯郡豊川村妙嚴寺吒枳尼天之儀ニ付伺

管下寶飯郡豊川村妙嚴寺ヨリ、別紙之通願出候ニ付、一ト通相糺候處、中立之通相違無之候間、別紙相添御指揮相伺候、以上、

明治五年六月廿五日　額田縣

教部省

御中

（朱書）「書面妙嚴寺中立之通可取計候事、
明治五年七月」

拙寺境內ニ安置仕來候吒枳尼天之儀御一新之後御布令之趣モ有之、神佛混淆之姿ニテハ無之哉之旨、再三御尋ニ付、其都度詳細書取ヲ以、其筋ヘ奉申上置候通リ、全ク佛躰ノ吒枳尼天ニテ毛頭紛舗儀ニ無御座候得共、今以是非之被仰渡モ無之、痛心罷在候、乍併素ヨリ佛躰ニ相違モ無御座候事故、別段御沙汰無之候トモ、是迄之通リ相心得候テ宜敷御座候哉、此段奉伺候、以上、

額田縣管下
三州寶飯郡豊川村
妙嚴寺靈龍

明治五壬申年五月

拙寺境內安置仕來候鎭守吒枳尼天之儀、其像稍稲荷ニ類似スルニヨリ、土俗之傳習ニテ、稲荷或ハ明神ト申唱ヘ、殆神佛混淆之姿ニ相見候ニ付、三河裁判所三河縣舊西大平藩ニテ、詳細取調可差出旨御達有之、別紙寫之通、來由其外書類差出、於神祇省專

ラ御取調中之處、昨辛未十月中神祇省ヨリ御呼出ニテ、右證據ト可相成古筆一軸并舊記等可差出旨、長村權中錄殿ヨリ御達ニ付、同十二月中、御縣東京御支廳ヘ差出、御添書頂戴御同省ヘ差出、同月廿五日御檢查濟ニテ、御下渡相成、其後何等之御沙汰無御座候ニ付、引續在東京罷在候故、當五月中、尙東京御支廳ヘ伺書一通差出置申候、何卒格別之以御憐評、從前之通佛躰ニ被差置候樣仕度、今一應御添翰被成下候樣仕度、此段偏ニ奉歎願候、恐惶頓首頓首、

三河國寶飯郡
第六大區內第三小區
豐川村八百四番地所
妙嚴寺
靈　龍

明治五壬申年六月廿三日

額田縣
御廳

前書之通相違無之候也、

第六大區長

竹本四郎左衛門

同副區長

伊東喜右衛門

第三小區副戸長

小野藤次郎

(受)明治四年七月　(同)明治五年六月廿二日　(丞)門脇　小野　(議)戸田芝成　(輔)宍戸　黒田　(出仕)浦田

千田　高木　(課)社寺

額田縣元西大平藩豐川吒枳尼天之件

議案

吒枳尼天之儀、浮屠氏曹洞家之說ニ、是狐王菩薩トテ、天部ノ內ナル由、元西大平藩中立通、寒岩歸朝之節持歸、今ノ妙嚴寺ニ安置セシ佛像ニテ、神體ニハ無之處、六七十年前ヨリイツトナク、地名ニ依テ豐川明神ト唱、信心之者共所轄役員ヘ願、華表等モ造立致シ候由ニ就テハ、華表其外神社ニ類シ候建物取拂被仰付外、西大平藩同樣吒枳尼天ヲ以、豐川明神又ハ豐川稻荷ト唱候分ハ、都テ停止被仰付可然歟、

豐川稻荷處分之儀ニ付、本日額田縣官員呼出右所置振及打合候處、元來住僧妙嚴寺ニ於テモ、從前之通佛道ヲ以奉仕致度旨再應願出モ有之候條、檀家其外民情ニ於テモ、佛ニ御決定之方却テ居合モ宜シカルヘクト相考候旨申答有之候事、

六月廿三日

先般豐川吒枳尼天之儀取調奉伺候處、御附紙ヲ以御尋御座候ニ付、右廉々取調仕候處、別紙之通御座候間、御屆申上候、何卒至急御差圖御座候樣仕度、此段奉願候、以上、

辛未七月廿日　西大平藩

神祇官御中

豐川吒枳尼天之儀取調書

吒枳尼天傳來之由來、法祖寒巖義尹和尚ハ順德帝第三ノ皇子ニメ、建保五年ニ誕ス、幼ニメ叡山ニ登リ、菩薩戒ヲ受ケ、後宇治興聖寺ニ到リ、宗祖道元ニ隨事シ、禪意悉ク悟リ、文永元年ニ入宋メ、淨慈寺ノ虛堂ニ參シ、東歸ノ日、虛堂曰、我ニ佛法擁護ノ靈像アリ、今既ニ佛法東漸セリ、依今汝ニ附與ス、子々孫々ニ至ルマテ、佛法興隆ヲ祈ルヘ

シト云テ、觀音ノ像ト吒枳尼天ノ畫像ヲ授ク、義尹和尙歡喜メ受ケ、東歸之後、筑ノ博多聖福寺ニ寓メ、虛堂敎示ノ如ク、兩像ヲ拜禮供養シ、後肥州飽田郡大度津大梁山大慈禪寺ヲ建立シ、開山トナリ、滅度之日兩像共ニ法弟之士安ニ傳ヘ、又至遼ニ傳ヘ、義東ニ傳ヘ、又義曇ニ傳ヘ、又義易ニ至リ、代々守護仕來リ候、妙嚴寺草創之義ハ、嘉吉元年義易三州ニ至リ、豐川村ニ一宿ス、近隣ノ男女道德ニ歸依シテ、村續ニ本野ケ原ト云フ廣野アリ、其地先ニ豐川林又圓福原ト云ニ、草庵ヲ結ヒ、諸人ヲ化度ス、其後今川義元歸依シテ、伽藍建立シ、地名ヲ用ヒ、豐川林圓福山妙嚴禪寺トシ、義易ヲ開山トス、授傳ノ觀音ヲ佛殿ノ本尊トシ、吒枳尼天ノ畫像ヲ鎭守トス、義易亦鎭守吒枳尼天大菩薩ノ一軸相添、鎭守堂ニ安置シテ、今ニ存在仕候、六七十年以來、近國ノ男女群參、日々ニ增シ、道路ニ相迷候ニ付、目印トシテ東海道御油宿ヨリ分レ候場所ヘ、華表建立イタシ度旨、信心輩ヨリ御油宿役人ヲ相賴ミ、代官所遠州中泉長役岡崎兼三郎ヘ願出候處、道中奉行所ヘ伺之上、嘉永五年子六月、聞濟ニ相成、建立仕候、吉田下地口華表之儀モ、右同樣ニテ嘉永七寅年八月下地村役人ヨリ、豐橋藩地方役所ヘ願達仕候處、是亦道中奉行所ヘ伺ニテ、聞濟之上、造立仕候、右村役ヨリ願面左之通ノ趣ニ御座候、

乍恐以書付奉願上候

一當國寶飯郡豐川村妙嚴寺儀ハ、嘉吉元酉年東海義易和尚草庵ヲ結ヒ、閑居ノ地ト定メ給フ處、其後今川義元公伽藍御建立被下、義易和尚ヲ開山トナシ給フ、其節所持之尊躰鎮守堂へ安置被下候テヨリ、諸民蒙感應叓廣大ニテ、祈願有之候ニ付、往古ヨリ參詣多ク御座候處、別テ近年日増ニ繁昌仕、諸國ヨリ群參仕候得共、豐川道ト申目印モ無之候ニ付、諸國信心講中ヨリ、當宿分レ道豐川道目印相立度旨、度々願出候ニ付、追々取調仕候處、本阪道入口ニ場所有之、往古ハ豐川道標有之候處、年暦相立朽果候儘ニ相成候テ、只今ニテハ目印モ無之、參詣之者過半行過立戻リ、旁甚以難儀仕候ヘハ、諸民參詣之順路案內ニモ相成、廣大之助ケ共奉存候、尤海道筋差障リニハ一切相成不申候間、何卒願之通華表建立御聞濟ニ相成候様、乍恐御筋へ御伺被仰達被成下置候得者、一同難有仕合ニ奉存候、以上、

東海道御油宿

嘉永五子年六月

年寄格　權左衛門

同　孫八

年寄見習
總代　久左衞門
同　善十郎
名主　半左衞門
同　惣四郎
問屋　與左衞門

岡崎兼三郎樣
御役所

右差出候處、同月御聞濟ニ相成、最寄宿村故障筋無之上ハ、願之通聞屆候、都テ猥リケ間敷儀無之旨、所役人へ被仰渡候、

一嘉永七寅年八月、下地村吉田下地口華表願之儀モ、前文同樣ニテ御聞屆相成申候、

其節豊橋藩地方役所役人宛名幷下地村願人名前左之通、

下地村長百姓代

庄兵衛

藤助

金七

平六

彌吾七

組頭

佐吉

源七

平助

庄屋

三太夫

三藏

嘉永七年寅八月

吉田郡

御役所

佐藤才治様

三浦源右衛門様

木村勘助様

御役人衆中様

右者支配所三河國寶飯郡豐川村妙嚴禪寺吒枳尼天傳來セシ由來、其外御附札之趣取調候處、前件之次第御座候、以上、

辛未七月　　　　　　　　　　　　　　　　　　西大平縣

元西大平（藩脱）管轄三河國豐川村妙嚴寺豐川明神御調ニ付御屆

三河國寶飯郡妙嚴寺有之候豐川明神取調奉伺候處、當十月中右證品古筆一軸、其外共差上候樣御達ニ付、今般左之品々差上申候、

鎭守吒枳尼天大菩薩　　　　　　　　　　東海　義易（花押）

同壹軸添書一紙

文永元年寒巖尹老入宋時自虚堂和尙授傳觀世音一像幷吒枳尼天菩薩一軸、先師

傳來到吾、經幾星（霜脱）晝軸磨滅不分明、後人恐懺焉、故書添尊號納于鎮守堂、子々孫々守護之、永勿令失却也、

東海　義易（花押）

文安甲子年十一月吉旦

吒枳尼天大菩薩儀規

具一切功德慈眼視衆生
福聚海無量是故應頂禮
唵摩訶伽嚧尼佉娑婆訶　百返
南無大金光明最勝王經　百返
唵誌羅曒吒尼理吽娑婆訶　百返
理趣分眞讀　一座
般若心經　百返
消災吉祥呪　百返

願以此功德普及於一切我等與衆生皆共成佛道
朝暮無怠慢可令祈念者也、

長祿二戊寅年十一月廿一日　東海義易叟

授與

現住性慶

右之通御座候、此段御屆申上候、以上、

明治四年十二月廿三日　額田縣

神祇省

御中

舊職中參州豐川稻荷勸請幷位階等相授候儀無之候、仍此段申上候也、

壬申正月十三日　正三位　白川資訓

本省

御中

貼紙

吒枳尼天ヲ豐川稻荷ト稱居、右ハ稻荷吉田兩方ヨリ勸進之事、有無篤ト取調、（脫アラン）

舊職中參州豐川稲荷勸請年月有無、並位階等相授候年月有無共、詳悉取調、當月限可差上旨被仰下、則西京舊邸へ取調方申遣シ候處、先達テ諸記類不殘奉差上置候事故、差掛リ取調兼、尤右豐川稲荷社ハ、多分私家へ關係之儀ハ無之樣覺悟仕候旨申越候間、此段奉申上候也、

壬申正月廿八日　吉田良義

本省御中

鳳來寺神佛混淆引分の件

〔社寺取調類纂〕五一〇　明治五年　（受）五月廿九日　（回）同月三十日　（濟）六月九日

（卿）嵯峨　（大丞）門脇　（議）松本正凝　（輔）宍戸　黒田　（出仕）高木　濟田　濱　（錄）社寺

額田縣管内三河國設樂郡鳳來寺村鳳來寺一山神佛混淆、引分之儀ニ付伺

右寺面之邊、篤ト取調候處、神佛混淆引分之儀ハ、去ル戊辰之公布ニ有之、疾クニ區

域可相立管之處、管轄廳之變替ヨリ、自然取調方モ疎漏ニ打過、依然今日ニ至リ候儀ニ付、左之通指令可然被存候、

指令按

書面伺之通可取計候、尤東照宮社格幷奉仕人等之儀ハ見込取調、更ニ可伺出候事、

神佛混淆寺院之儀ニ付伺

額田縣管轄
三河國設樂郡
鳳來寺村

天台眞言兩宗　鳳來寺一山
學頭　松高院　天台宗
衆徒　不動院　同
岩本院　同
般若院　同
增通院　同

同　等覺院

同　寶泉院

同　元藥師堂承仕　杉本坊

同　吉祥坊

同　茶所　圓藏坊

同　圓龍院

眞言宗　學頭　醫王院

同　衆徒　藤本院

同　一乘院

同　圓林院

同　法華院

同　月藏院

同　日輪院

同　元藥師堂承仕　中谷坊

同　尊教坊

同　　長順坊

右ハ本尊藥師如來ニテ、當時東照宮ヲ專ラ奉祀(祀カ)仕、神佛混淆罷在候處、舊三河縣管轄、其後伊奈縣管下ニ相成候得共、今以依然依舊、僧侶ニテ祭事都テ取扱來候ニ付、今般僧侶ハ悉藥師ニ屬シ、東照宮社地ト區域相立、祭事ハ新任之祠官祠掌ニ兼務爲致、僧侶ハ更ニ關係不仕候樣相達可申、此段一應相伺申候、以上、

明治五年五月廿三日　　額田縣

敎部省

御中

(朱書)『書面伺(ママ)之通可取計候、尤東照宮社格幷奉仕人等之儀ハ、見込取調、更ニ可伺出候事、

明治五年六月』

三河鳳來寺に於ける神佛引分

秋山謙藏氏報

曾つては三河第一の靈場として、德川幕府を始め多くの人々から崇敬せられてゐた鳳來寺も、明治維新の變革に遭つて、全く見る影もなく滅び盡してしまつた、その際のことを說く前に、先づ簡單にこの寺の沿革を述べることゝする、

寺傳によれば、この寺は文武天皇の大寶二年、山城國端西郡二葉の里高賀茂の老翁間賀之介都岐麿の子と稱する利修仙人が勅を奉じて建立し、煙巖山鳳來寺と號したもので、其の後聖武天皇、勝寶年中に御惱みありて、光明皇后この寺の本尊の靈告に依りて、施湯除垢の御願を立てさせられてより、天皇の御惱平癒せしことによつて、皇后は恩謝の爲自ら御參拜ありて、鳳來寺の三字を御染筆御寄附せられたと傳へてゐる、

爾來幾變遷、德川家康は父廣忠がこの寺の本尊に信仰祈願した感應に依つて誕生し、宗門再興せよの佛恩に報ひんが爲、寺領八百五十石を寄附し、それと共に附屬

方三里の山林を寄進したのであるが、更に家光は、家祖廣忠崇信の感應に報ひ、且家康に對する熱烈なる信仰を以て、慶安元年より四ヶ年間に亙つて、藥師の大伽藍及び鐘樓、樓門其他三十餘宇を改築し、その境內に新らたに東照廟を建築し、神領として五百石を附し、舊領と併せて一千三百五十石、十九ヶ村の寺領を寄進したのである、この東照廟は、曾つて家光が日光に參拜した時、日光山東照宮緣起に、家康の母が一生每月代參として岡崎甲山定光房を鳳來寺峰藥師へ遣して、報恩の誠を致したと云ふことのあるのを見て、直ちに老中阿部豐後守忠秋に命じ、その建築に着手せしめ、彼はその落成を見ずに薨じたのであるが、家綱は彼の志を繼ぎ、正保四年九月に至り落成し、神靈を江戶紅葉山より遷し、同月十七日鎭座式を執行し、將軍名代小笠原壹岐守、奉行太田備中守が登山して盛大莊嚴なる祭典を行つたのである、其後承應元年、家綱は重ねて鎭守社、鐘樓、樓門、寶藏等を增築し、明曆二年東照廟領として朱印地四百七十一石六斗七升一合を寄進し、其後恒例の祭祀及び小修繕等は鳳來寺に任かし、天台派の學頭である松高院の住職を以て、東照廟の別當となし、之を日光輪王寺の配下に屬せしめ、柳之間獨禮格の優遇を與へたのである、

萬治三年七月十七日に至り、朱印は更に改められ、鳳來寺領一千三百五十石の中、

五百四十六石七斗餘を以て社領と定められた、

かくして鳳來寺は壯大なる伽藍と、幕府の優遇とによつて、非常に繁榮なる姿を續けたのである、然るに明治維新は、これ等の總てを根底より覆し、先づ寺領及び山林は悉く土地奉還を命ぜられ、その上に明治八年五月の火災は本堂及び諸堂宇を灰燼に歸し、その後屢々起つた火災は一山の殆ど總てを滅亡に迄導いたのである、

これ等表面上に現れたことのみではなく、東照廟の別當を日光輪王寺の配下に置き、藥師堂を高野山の配下に置いた事は、延いて天台、眞言兩宗の騈立となり、その間自ら軋轢をなし、維新の後に於ても尚一致せず、益々衰亡の勢を强めたのである、(然しこの點は、其の後兩派の管長の協議によつて兩宗合一して、眞言宗高野派に專屬することゝなり、明治三十九年十一月十二日に允許せられた、)

かゝる激變を與へたる明治維新の前後に就て、その建物、行事、寶物の上から、その變遷の跡をたどることゝしよう、

(一) 建物の變遷

その頃迄はまだ次の樣に多くの堂塔が存在してゐた、

一 三重塔婆

二　常行堂本尊阿彌陀如來
三　若宮社
四　天神社
五　八幡社
六　大神宮
七　荒神社
八　岩倉社
九　藥師堂
一〇　鏡　堂
一一　辯天堂
一二　毘沙門堂
一三　弘法大師堂
一四　元三大師堂
一五　二王寺
一六　法花堂

一七　求聞持堂
一八　觀音堂
一九　如法堂
二〇　地藏堂
二一　鐘樓
二二　食堂
二三　浴室
二四　僧坊

般若院	寶泉院	松高院
不動院	岩本院	法華院
藤本院	圓林院	日輪院
等覺院	一乘院	尊教坊
杉本坊	吉祥坊	中谷坊
茶屋坊三ツ		

これ等の中、僧坊はこの山に上る道の兩側に並立して壯觀を呈してゐたのである

が、他の總ての建物と共に、この時を境として滅亡し僅かに次のもののみを殘したのである、

一、東照廟

明治五年額田縣の命によつて、別當社僧は停止せられ、員外社となり、明治八年九月に至り、愛知縣より門谷村に引渡ふれた、その頃既に社殿は全く衰頽し、見るに忍びない程であつたから、同年十月縣廳へ具申し、遞減祿を下賜せられ、本社修理を加へ、翌年八月三十日鄕社に列せらるゝことゝなつた、境內は一町三反であるが、最早往年の盛觀は偲ぶべくもない、

二、樓門

慶安四年の建築で、桁行四間、梁行三間、兩脇に仁王力士があり、正門の鳳來寺なる三字額は光明皇后の御染筆と傳へてゐる、

三、奥の院

本殿は九尺四面、拜殿は二間に三間である、

四、勝岳不動堂

勝岳窟中にありて九尺四方の建物である、建設の時は分らない、

五、僧坊

醫王院

本堂より二町ばかりの下にある、維新前一山兩宗の當時は、眞言宗の學頭寺であり、その建物も尾張德川家貞照院殿の寄附に係るものであつたが、今は單に眞言宗鳳來寺の塔中の一である、

増通院

今は改めて松王院となつてゐる、松王院は東照宮の別當職を掌つてゐたのであるが、維新の際の神佛分離によつて、この事は廢せられ、天台宗の學頭寺であつたことも止められて、たゞ鳳來寺の一塔中である、本堂より五町ばかり下に位してゐる、

(二) 行事の變遷

鳳來寺の行事は、維新前迄年中殆ど絶え間なく行はれてゐたのであるが、維新後は一山の維持さへも危かつたのであるから、これ等の行事も到底續けることは出來なかつた、今は僅かにたのものを殘すのみである、

一、田樂會

之は舊正月三日、十四日の兩日大般若轉讀、國家安全、諸人快樂の祈禱をなすのである、この日萬歳樂、獅子舞等を行ふが、それは「利修仙人の山に入りたる時、青赤黑の三鬼有りて、此の山をトしてゐたから、仙人は先づ鬼形を近づけて汝等滅度せば、當來の苦を拔き安樂ならしめんと懇ろに告げたから、彼等は謹んで應諾し、仙人入寂の時、三鬼の髑髏を藥師堂の石礎の下に埋められたのである」と云ひ傳へて、その鬼魂を追福する爲に行ふものであるが、維新の後は到底維持することを得ず、遂に一時廢止するの止むなきに至つたのであるが、小笠原忠作（峰村）丸山平七（門谷村）玉井彌平（黑瀨村）等の盡力によつて再興したのである、當時の世話人は、この他に小笠原慶吉、八卷梅次郎、加藤平作、伊藤政吉等であつた、維新前は、垢離とり料として、よぼし級及びはやし方には一人に付米一斗、小役には一人に付四升、獅子役二人に四升を年貢米より差引して給與してゐたものであるが、このことも止んだ、

此處では田樂と稱して「鶯の舞」「佛の舞」「萬歳樂」「獅子舞」「松竹のはやし」等、二十數種を傳へてゐるが、これ等の多くは『田遊』の類で、眞に田樂と見るべきものは、「シテテン舞」「總田樂」位のものであらう、然し此處の田樂が田樂歌謠を傳へてゐ





るのは、非常に珍らしいことで、奈良、日光、那智にも紀州の天野社にも保存せられてゐないものである、而もそれ等の歌謠は「田樂次第」によつて委しく遺し傳へられ、總田樂の如きも那智のものに比して遙かに古雅掬すべきものである、

鳳來寺は德川氏の特別の崇拜を受けてゐた爲に、檀家は少しも持たなかつたのであるが、維新の後寺が全く荒廢に歸した後迄も、危くこの行事が傳つたのは、藥師に對する熱烈なる信仰が、村人をして之を傳へしめた唯一の理由である、

二、涅槃會

舊二月十五日、釋尊入滅追慕の爲に今も尙行はれてゐる、

三、降誕會

舊四月八日に行ふ、

四、東照忌

最早到底維新前の壯觀は見ることが出來ないが、新四月十七日德川家康を始め各代將軍追善の法會を行つてゐる、

五、奥の院祭

舊六月十七日、十八日の兩日、奥の院白山大乘坊權現の祭典法會を行ふ、

六、勝岳不動祭

舊七月朔日に行ふ、

七、藥師如來祭典

新十一月二十二日、二十三日の兩日行ふ、

其他養蠶祈禱、五穀成就の祈禱が行はれる、

(三)　寶物の變遷

鳳來寺の什寶としては、維新迄種々の珍寶があつたと云はれてゐるが、その際の激變の爲、今僅かに左のもののみを殘す程衰亡してゐるのである、

一　勝岳不動尊　傳利修仙人作　木像一躰

二　利修仙人像　作者未詳　同

三　鳳來寺額　傳光明皇后御染筆

四　源氏物語

冷泉黃門爲相卿、二條亞相爲世卿兩公の筆、烏丸光廣卿添書付金梨(地脫カ)蒔繪金具

の篋筒外箱付のもの、文化十四年丁丑讃岐守従五位下大江朝臣政時の寄附、

五　鳳來寺蔵本　妙法院宮二品教仁親王御筆

六　不動八大童子畫像　傳弘法大師眞筆

七　阿彌陀如來畫像

八　中將姫曼荼羅

九　愛染明王畫像　傳興教大師眞筆

（昭和二年二月四日）

三河西端藩離檀神葬祭宗門改處置伺

〔太政類典〕第一編第百三十五巻　教法　葬儀僧尼

西端藩伺　辨官宛

士族卒平民中ヨリ、爾來ノ檀那寺離檀仕、神葬祭執行仕度段願出候ハヽ、承屆候テ不苦御座候哉、

一異宗門改ノ儀ハ、氏子帳ニテ取調可然御座候哉、

右ノ段奉伺候、以上、四年四月十八日藩指令神祇官意見

（朱書）「第一ヶ條

邪宗門ニ無之哉、篤ト檢査ノ上、可差許、離檀ノ儀ハ地方官ニテ差支無之ハ不苦事、

第二ヶ條

異宗門改ノ儀ハ、追テ一定ノ御規則相立候迄、藩ノ見込ヲ以取計置可申事、四年六月二十五日」

秋葉山神佛分離の件

〔社寺取調類纂〕四八六

（課）考證

遠江國秋葉寺願

議按

秋葉神社之事ハ、當四月社務課ノ議按ニ詳ニシテ、原來神ナルヿ明カ也、然レトモ今般願書ノ尾ニ、教部省ヨリ審細教諭ヲ請フノ文アリ、故ニ條目ヲ立テ、願者ノ非ヲ辨スヘシ、秋葉寺ハ大古元正帝ノ御宇、養老二戊午年依勅願、行基菩薩草創云云、各社寺ヨリ創立ノ事蹟ヲ云フハ、多ク無稽ノ説ニテ怪ムニ足ラスト雖モ、勅願又勅使下向ナト稱スルハ、殊ニ其本所ヲ僞飾セル也、此願書ニ云フ處モ、又其類ナルヘシ、按スルニ此寺往古ハ修驗道ニテ、事務ヲ行ヒ來レル由ナレハ、行基ノ開基ト云ヒ、恐ラクハ附會ナルヘシ、嵯峨天皇ノ御宇、弘仁年中御造營、此時御製ヲ被下候以來、秋葉寺ト相唱候由來モ御座候云々、御製ノ眞物ヲモ傳ヘス、其寫シモ出サスシテ、カクノミ云フハ妄ナリ、秋葉三尺坊ト尊稱候ハ、薩陀（以下同ジ）ノ眞言云々、秋葉ハ元來

神山ナルヲ、秋葉寺建立以來、其寺ノ鎭守神ト申ナシタリ、故ニ秋葉事記ニモ、祭神大己貴命也トアリ、三尺坊ハ後ニ合祀セル者也、然ルヲ、寺ニテハ合祀ノ方ヲ主張シテ、秋葉觀音三尺坊守護所ナト守札ニ記シタル者ナレハ、此ヲ以佛地也ト云フ證ニハナリ難シ、正德元年之頃ヨリ、秋葉權現ト申成、俚俗流言一體ニ相成候由、俚俗ノ流言ヨリ、權現ト稱シ來レリト云ハ信シ難シ、正德元年ノ頃ヨリトキハヤカニ云ヘルモ如何、慶應三年臘月ニ當テ神階正一位ヲ賜候儀ハ勿論、其節御執奏之御次第等、秋葉寺始法類之我々ニ至迄承知仕候者、更ニ無之云々、此ノ儀ハ壬申八月十日問合セノ書ニ、史官ヨリノ附札ノ文曖昧ナレハ、定メテハ答難カルヘシ、元來行基草創之地ニシテ、世々住職之者、鎭守三尺坊神階正一位ヲ賜リ候御宣旨之跡モ無御座云々、先般靜岡藩ヨリノ糺書ニ、享保八年寶鏡寺宮ヨリ被下置之、正一位秋葉大權現ノ額面、累代此社ニ傳來之由記シ有之、願書ニ此事ヲ述スシテ、安永ノ綸旨ノミヲ擧テ、神階無キ證トシタルハ如何、右ノ如クナレハ、今般ノ願意ハ立難シ、然レトモ秋葉寺ハ古刹ニテ、三尺坊ヲ祀リ奉レルモ久シケレハ、各所神佛引分ケ之例ニ傚ヒ、經界ヲ區別シ、秋葉寺ハ存シ置、三尺坊ハ其寺ニテ佛例ヲ以奉仕致サセ可然歟、

秋葉寺願書ニ付伺

當縣管下遠江國周知郡犬居秋葉寺法類上嶽寺高林別紙願書差出候、御指圖有之度、此段相伺候也、

壬申十月八日　　濱松縣七等出仕　川西德化

濱松縣參事　岩崎長武

嵯峨教部卿殿

周知郡領家村
秋葉寺代同寺法類
上嶽寺　高林

謹而哀訴歎願申上候、抑秋葉寺者、大古元正帝之御宇、養老二戊午年、依勅願行基菩薩草創、本尊聖觀音脇士十一面觀世音(勝)將軍地藏菩薩及四大天王彫刻勸請、其節者寺號靈雲院ト相唱、其後人皇四十五代聖武天皇之御宇、神龜年中、依勅願御再建被爲在、勅使御下向在之、天平年間住僧圓明住職、則行基之跡相續ニ御座候、爾來星霜

ヲ經候上、嵯峨天皇之御宇、弘仁年中御造營、此時御製ヲ被下候以來、秋葉寺ト相唱候由來モ御座候、以後數百年間、前條之姿ニテ相續仕來、就中諸人信仰仕候秋葉三尺坊ト尊稱候者、薩陀之在現迦樓羅身、又曰金光明最勝王經中之正了知大將ヲ勸請故ニ、山ヲ最勝闕、又金明嶺トモ申傳候、尤世々住職之者、神佛混淆之道理無之哉ニ奉存候、諸國信仰之人々へ授與仕候守札等モ左之通ニ御座候、

丸　奉祈念秋葉觀音三尺坊守護所

右之譯故別段神トハ混合候謂モ無之候得共、正德元年之頃ヨリ、秋葉權現ト申成、俚俗流言一體ニ相成候由、雖然別段修事寺法ニモ不相拘事故、衆口相斷候譯ニモ無之、世々寺務相續罷在候處、戊辰御一新ニ付、部下寺務等ニ召使修驗之內、自分勝手ニ致復飾、無謂神佛混淆抔ト種々之儀申立奉掛(脫アラン)御役人、靜岡藩廳之頃、理非被相糺候得共、識者之後難モ恐レ候事故、管轄御廳ヨリ御添簡申請、觸頭可睡齋代相兼秋葉寺弟子湛玄ヲ以、御辨官へ出願仕候處、書面御預リ之上、後日御沙汰在之迄、放望(任カ)罷在候樣被仰渡、謹奉放(敬カ、下同ジ)承、只今以滯京罷在候處、慶直(應カ)三卯十二月廿七日正一位被授候事故、向後秋葉神社ト稱シ可申旨、過五月十日從教部御省御沙汰之趣ヲ以、同十七日本寺可睡齋へ御達ニ相成候條、奉放承候得共、慶應三年臘月ニ當テ、神階

正一位ヲ賜リ候儀ハ勿論、其節御執奏之御次第等、秋葉寺始法類之我々ニ至迄承知仕候者更ニ無之、元來行基草創之地ニシテ、世々住職之者鎮守三尺坊神階正一位ヲ賜候御宣旨之跡モ無御座、殊ニ後桃園天皇之御宇、安永七年八月二十九日被下置正ニ存在之御綸面ニモ秋葉權現ト而已御座候テ、正一位之文字御書載無御座候、御旨趣者全ク神階無之所以ト奉仰載候得共、如何之御次第哉、情實會得仕兼候ニ付、御明亮奉伺、一山混惑不仕樣致度奉存候、右御綸旨之寫奉備高覽候間、乍恐上件之始終、具ニ教部御省ヘ御尋問被成下、審細御教諭被下置候樣、奉歎願候、以上、

右

上嶽寺　高林

壬申十月

濱松縣

御廳

書面之通相違無御座候、以上、

第三拾五區戸長

和田　重作

同　副

河村儀平次

前書之通相違無御座候ニ付、奥書ヲ以同等奉願上候、以上、

本寺　可睡齋

私儀明廿八日歸縣仕候間、此段御屆申上候也、

壬申十一月廿七日

濱松縣十一等出仕兼同縣神官
僧侶教導職管事
近　重　八

敎部省
御中

受壬申十一月廿八日

（受）明治五年二月廿九日　（回）同上四月十五日　（判）嵯峨　（議）田中頼庸　（輔）福羽　（出仕）門脇　小野

濱松縣元靜岡縣內遠江國周智郡領家村家（衍カ）秋葉山神佛混淆之件再伺

議按

秋葉ハ內山眞龍ノ說ニ、三代實錄岐階保神ハ、和名抄ニ山香郡ニ岐階鄕アリ、即コレ岐氣ナリ、岐階ノ火神ト申シテ、今ノ秋葉權現ナルヘシト云リ、眞龍ハ土人ニシテ、地理ヲ知リ、古典ニモ通セシ人ナレハ、無稽ノ說ニハ非ルヘシ、且秋葉ハ假令岐階ノ火神ニハ當ラストモ、三代實錄ニ遠江國火山神ト云アリ、其祭神ハ詳ナラザレドモ、岐階ノ火神ノ上ニ鄕名ヲ加ヘタル文ニテ、火神ハ兩社アルコト明ナレハ、其一社ハ火山神ナラムモ知ルヘカラス、復飾者ノ說ニモ、山麓十八鄕ヲ愛宕ト云說ハ實否測リ難ケレトモ、眞龍ノ說ト合スレハ、姑ク考ニ備フヘシ、秋葉事記ニ、聖觀音（行基作）秋葉山權現（當山鎭守）祭神大己貴命（或曰式內小國神社）三尺坊（秋葉同社ニ祭ル當山ノ護神ナリ）、トアレハ、當山ノ鎭守ノ神ト三尺坊ノ靈トハ、固ヨリ各別ナルコト明ケシ、但シ式內小國神社ハ同郡ニハ有レトモ、今宮代村ニアリテ、秋葉ノ地トハ自ラ別ナレハ、祭神ノ說ハ非ナカラ、固ヨリ秋葉ノ主神ハ佛ニ非ル故ニ、斯ル說モ起リシナルヘシ、天野信景ノ神祇祭祀略記ニ、三尺坊ハ百年以前ニ、信州戶隱山ノ復飾ヲ秋葉寺ニ祭

リテ土地祠トスト云リ、祭祀略記ハ寶永庚寅七年ノ作ナルガ、此年ヨリ逆推スレバ、慶長十六年ハ百年ニ當レリ、即事記ニ信州ノ産ト云說ニ合スレバ、三尺坊ハ後世ノ合祀ナルベシ、因テ考レバ、秋葉山ノ主祀ハ神ナルコト明白ナレバ、今ヨリ權現ノ號ヲ改メテ、神社トシ、祭神ヲ伽具土神トシテ、岐階ノ火神或ハ火山神ニ當ルヤ否ノ論ハ、尙實地檢査ノ上ニ定ムベキ歟、

指令按

秋葉大權現之儀、慶應三年十二月廿七日神階正一位ヲ被授候事故、向後秋葉神社ト稱シ可申事、

再按

秋葉權現神佛ノ辨別確證無クシテ、裁決シ難シトイヘモ、去ル巳（卯カ）年神階正一位ヲ授ケラレシ上ハ、右ヲ以テ神社ト被定、左之通御指令有之可然歟、

秋葉山大權現之分、慶應三年十二月廿七日神階正一位ヲ被授候事故、向後秋葉神社ト稱シ可申事、

下ケ紙

本原ノ云々ヲ問フニ及ハス、假令佛陀ナリトモ、神國ニ來リテ神異ノ功德ヲ著ハ

シ、以テ人民ニ崇敬センハ、是卽神也、改號ノ上神ヲ以テ之ヲ祀リ可然歟、

(中略、壬申二月十五日濱松縣ヨリ神祇省ヘノ伺、庚午十月三日靜岡縣ヨリ神祇官ヘノ伺、「遠州周知郡領家村秋葉寺附屬當山修驗實相院改吉澤齡一郎外五人復飾願之儀ニ付取糺候書付」ト題スル靜岡藩ノ報告書ヲ載セタリ、旣ニ神佛分離史料上卷所收秋葉山神佛分離事件調書ニ載セタルヲ以テ略ス。)

秋葉權現神佛本末之事

右社ハ秋葉寺創建ノ時鎭守ノ爲ニ僧徒ノ勸請セシ者歟、又ハ內山眞龍ノ說ノ如ク、原來岐氣保(キケノホノ)神(三代實錄ニ、從五位下ノ神位ヲ授クル由ミユ、式外ナリ、)ナルヲ僧徒ノ取込シ者歟、本末知ルヘカラス、然リト雖モ今試ニ論スレハ、秋葉ノ地名ハ、近來ノ學者ノ火ノ燒速男(ヤキハヤヲ)神(迦具都知ノ神ノ一名、)ノ燒速ニ通ヘリト云說モ捨難ク、(此證、一)又靜岡縣ヨリノ注進ニ、復飾者ノ言ヲ載セテ、秋葉山ノ麓ヲ愛宕ト唱フル由ヲ載セタルモ、虛實計リ難ケレド、考ニ備フヘシ、(此證、二)又眞龍ノ說ニ、岐氣保(キケノホノ)神ハ和名抄山香郡ニ岐階鄕アリ、此岐氣也、岐氣ノ火ノ神ト申シテ、コレ今ノ秋葉權現ナルヘシト有ニ據テ考ルニ、山香郡ハ中古ヨリ豐田郡ニ合併セリ、地圖ヲ檢スレハ、今周智郡秋葉山ト豐田郡トハ切近ノ地也、恐ラクハ秋葉ノ地、古ノ岐階ノ鄕ナルヘク、保ノ神ハ卽火神ナルヘシ、(此證、三)カヽル證據モアレハ此社

ノ祭神ヲ迦具都智ノ神也ト云モ强タリトスヘカラス、然レバ原來神地ナルヲ、僧徒ノ取込シ者ナルヘシ、然レトモ猶縣地ヘ命有テ、愛宕ノ地名ノ有無ト、今モ岐階ト云名ノ、其邊ニ殘リ有ヤ否ヤヲ能々考檢シテ、後ニ神佛本末ノ論ヲ定ムヘキ也、

壬申正月十三日　　諸調局

（朱書）「慶應二年ヨリ明治二年ニ至ル從四位下行侍從兼大内記菅原在綱筆記」

秋葉大權現

右可正一位

中務。擁護邦國。攘除火殃。威洽遠近。名溢四方。宜奉尊位。式耀德光。可依前件。主者施行。

慶應三年十二月廿七日

別紙秋葉山ヘ神階被贈候儀、菅原在綱筆記中ニ相見ヘ申候、實否如何ニ候哉、至急御記錄御取調御回答被下度、依テ申進候也、

壬申五月八日　　敎部省

史官

御中

秋葉山神階之義取調候處、御申出之通、相違無之、此段及御回答候也、

壬申五月八日　　史　官

教部省

御中

別紙ノ通慶應三丁卯年十二月廿七日、秋葉權現ヘ神階被授候儀、實否如何候哉之段、當五月八日及御問合候處、相違無之旨、同日御回答有之、右宣旨共比如何樣之御手順ヲ以、何方ヘ御渡ニ相成候哉、拜受致候者之名前等、御記錄有之候ハヽ、爲心得承知致度、此段及御問合候也、

壬申八月十日　　教部省

史　官

御中

附紙

宣旨ハ職事日記ニ相見ヘ候得共、何樣之手順ヲ以、何方ヘ御渡ニ相成候哉、記載無之難分候事、

八月十二日　　史官

(受)明治六年二月二日　(回)同上二月三日　(濟)同二月九日　(丞)三島　(議)桃井之彦　(輔)宍戸　(出仕)

鈴木　(課)寺社務考證

濱松縣秋葉神社之儀、去壬申十月上嶽寺ヨリ出願書御下ケ願

秋葉神社之儀ニ付、去壬申十月上嶽寺高林ヨリ出願書、同縣ヨリ進達候ニ付、考證課ニ於テ調査候處、祭神火產靈(ホムスビノ)神ニ相違無之、詳細之儀有之候上ハ、神佛之區畫ヲ立、後來紛紜之儀無之樣、境內地圖爲差出取調仕度、同縣官員呼出シ、右之趣相達置候處、今般別紙之通、僧侶之擧動ニ依リ、神佛之儀判然仕候ニ付テハ、上嶽寺願書御下ケ相成、同縣見込ヲ以、更ニ爲伺出候方可然ト存候條、指令左ニ相伺候、

指令案

書面上嶽寺願書下ケ渡候條、於其縣、神佛之區畫判然相立、更ニ可申立候事、

遠州周知郡領家村秋葉山大權現之儀、神佛本據難相分、舊靜岡縣ヨリ朝裁奉仰候處、壬申二月中、右權現之儀、慶應三年十二月廿七日神階正一位ヲ被授候事故、向後秋葉神社ト稱シ可申旨、當縣ヘ御指令ニ付、一山之僧侶修驗共ヘ申渡、佛器佛具等取除方之儀トモ、本山可睡齋呼出相達、勿論祠官撰人取極候迄、村役人共ニテ、社守相心得候樣申渡置候處、秋葉一山之僧侶ハ勿論、右可睡齋ヲイテモ、安永度被下置候御綸旨ニモ、秋葉權現ト而已ニテ、正一位之文字御書載無之、右ハ神階無之所以ト心得、情實解得イタシ兼、只々曖昧之儀共申立候ニ付、一山之者共、神階之儀瞭然承知仕候樣致シ度迚、去十月中御省ヘ、秋葉寺法類上嶽寺高林ヨリ强テ差出候書面之趣ヲ以、進達致シ置、未御指令以前ニ有之、然ル處、同十一月十六日秋葉社例祭日ニ候迚、寺僧幷修驗共猥ニ社內ヘ立入、素ヨリ神事ニ可携身分ニ無之處、双方不法之取計イタシ、加之僧侶ハ粗暴之儀有之、村役人共於テモ、社守心得ナカラ、神職ニ無之寺僧修驗等爲立入候哉ニ相聞、此儘差置候テハ、如何樣之擧動ヲヨビ候モ難計、管下一般之取締ニモ拘リ、難捨置候間、右一件ニ携リ候者共、一同呼出、前書不法之始末ハ、當時吟味中ニ御座候、右ハ先年神佛混淆不相成段被仰出候以來、右秋葉權現之儀ニ付、寺僧修驗等、互ニ遺恨ヲ含、屢故障有之、殊ニ寺僧トモ品々取巧候次第モ有之哉ニ相聞候ニ付、今般篤

ト探索及候處、右御布告之際、僧侶申合、從前秋葉社鳥居ニ揭有之候享保八卯年後西院皇女尼宮樣ヨリ秋葉社ヘ御授ケ相成候正一位秋葉大權現ト有之眞筆ノ額面取外シ置、剩境內攝社末社之類迄、佛器ニ引替、其餘品々取巧是迄神佛之本據無之抔申僞、跡判然不致樣取投候義ハ乾(マヽ)然イタシ、右ハ秋葉寺法類之者迄、正一位之稱承知不仕由申立候ハ、全僞言ニテ、一山之僧侶ハ勿論、法類一同不容易所業難捨置候間、夫々呼出、右始末吟味可仕、就テハ前書進達イタシ置候上嶽寺高林願書ハ、一ト先御下ケ有之候樣仕度、此段申上候、以上、

明治六年一月廿九日　　濱松縣令　林　原　德

教部卿　大木喬任殿

(朱書)「書面上嶽寺願書下ケ候條、於其縣神佛之區畫判然相立更ニ可申立候事、

明治六年二月　日」

〔社寺取調類纂〕四七四 雜錄　明治六年

秋葉神社當省神佛區別見込書、幷右始末書相添御廻シ申候、御落手有之度候也、

明治六年二月十五日　　教部省

司法省裁判所

御中

（朱書）「神佛區別見込書并始末書等之控書無之」

濱松縣下秋葉寺之儀ニ付、前日井上賴圀殿へ及御引合置候別紙訴狀寫差遣申候、御落手有之度候也、

明治六年二月十四日

司法省裁判所

教部省

御中

〰〰〰〰〰〰〰

濱松縣下

秋葉寺傾ニ付代

千葉　湛玄

神佛混淆之儀ニ付、御伺中、昨申五月教部省ヨリ御達之文ニ、秋葉權現之儀、慶應三卯年十二月廿七日、神階正一位被授候故、向後宜稱神旨被御渡、秋葉一山覺悟不仕ニ付、名主戶長副長ノ奧印ニテ、縣廳へ數回歎願候得共、御採用無之、住持病氣故、代上嶽寺高林并拙僧、教部御省へ追訴申度ノ處、本山ヨリ種々蒙御理解、歸國仕、十月中又々御

綸旨之寫相添、錄所可睡齋幷名主戸長副長等奥書ヲ以、再三縣廳へ歎願ノ處、漸御預ニ相成、被仰渡候者、教部省伺之上、追テ沙汰ニ及候間、其迄ハ謙堪可致居トノ仰ニ候間、日夜敬望候處、十一月廿四日ニ至リ、六人脫走ノ修驗逆訴ニ依テ、秋葉寺役僧幷願書奥印ノ村役人、揚リ屋詰入牢等被仰付、一月七日ニ至リ、相改テ三尺坊ノ守護ヲ小國重朝ト申社人へ御委任ニ相成、登山ニテ、秋葉寺へ者立合無之、境界相立、二集會所御役人出張其外村役人立合、乍恐三尺坊ノ尊像相改ラレ候處、寶冠ニ舍利塔ヲ戴キ、背ニ火焔ヲ負イ、白狐ニ乘ノ像受取渡ニ相成、什具モ神官へ引渡サレ、一山廢滅ノ姿ニ相成候テハ、開山歷代始、佛躰ノ三尺坊伽藍護法酬恩ニ對シ、恐懼之至ト悲歎ノ苦情此事ニ奉存候、元來慶應三年者、未タ御一新前ニテ、秋葉三尺坊ハ、秋葉寺任梁和尙へ降下ノ御綸旨ニ有之通、秋葉權現者當山出現無比類也、因以御崇信異于他、永爲勅願所、宜奉祈國家安全寶祚悠久者、天氣如此、悉之以狀、安永七年八月廿九日ト被仰付候御旨ヲ守居候節下奉存候、然〆何人へ正一位ノ神階宣下被在哉、不審ノ折柄、數度越訴申出候處、縣廳于差置、越訴ハ朝廷ノ御主意ニ相悖候姿ニ相當トノ御理解ヲ承伏仕、歸村仕、縣廳へ歎願謙堪相待候處、今般本願ニ申立候始末、別テ神官僧侶混和ニテ、敬神愛國尊一皇國ノ二教ト被仰出候御趣意ニモ不相應、方今ノ形勢ニテハ、朝廷

ノ御仁政ト難有仕候半乎ト、一山愚昧ノ者共、惑亂沸騰耳ニテ、承伏仕兼候間、格別之御仁恕ヲ以、教部御省ヨリ明白ニ御糺之上、秋葉寺願意御採用被下置候ハヽ、申上候儀モ無之、萬一御採用ニ不相成候節者、往(マヽ)開之御綸旨御廢止之廉、尚此度被仰開候慶應度神階之事、何人ヘ被仰付候事哉、一山上下共、更ニ不存寄廉ニテ、御改易ニ相成候條共、委細ニ衆人納得仕候樣、乍恐蒙御教示度奉願上候、全背朝命候心得ニテ、再三御厄介奉願上候主意ニ者無御座候間、此段宜御賢察御愛憐之程伏奉願上候也、

秋葉寺代

明治六年一月十八日　千葉　湛玄

大教正永平寺　細谷環溪殿

大教正總持寺　諸嶽奕堂殿

前面之通申出候條、本省表宜御執達所希候也、

明治六年一月廿五日

永平寺住職

大教正　細谷　環溪

總持寺住職

大教正諸嶽奕堂代理

鳳仙寺住職
大講義　西有　穆山

前書被申出候ニ付、致奧印差上候也、

禪宗管長
天龍寺住職
大教正　由理　滴水

明治九年一月廿五日

本省
御中

濱松縣下
秋葉寺代
千葉　湛玄

本書願面ニ奉申上候通リ、敎部省ヘ奉願候處、縣廳ノ添翰無之候テハ、御採用不相成旨被仰聞、願書御差戻ニ相成候ニ付、無據當御省ヘ奉願上候、　後桃園帝樣ヨリ、秋葉寺住持任梁ヘ被下置候御綸旨之御旨謹テ奉畏罷在候處、未御一新前慶應三卯年十

二月廿七日神階正一位宣下被爲在之候趣、縣廳ヨリ被仰渡候得共、此儀秋葉寺住持始弟子法類ニ至迄、更ニ不奉存儀ニ御座候、右御降下之節、何人奉拜戴候哉、何卒出格之御哀憐ヲ以テ、御取糺之上奉蒙御明亮之御沙汰、一山衆徒及法類一同奉承伏候樣、偏奉歎願候也、

秋葉寺煩ニ付代

千葉　湛玄

明治六年二月二日

司法

御中

靜岡藩管內修驗離檀自葬の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

三年

靜岡藩管內三寶院宮末派修驗離檀自葬ヲ許ス、

　靜岡藩伺　辨官宛

靜岡藩管內罷在候三寶院宮末派修驗共ノ內、家內ノ者ハ是迄佛祭仕來候處、去巳七月中、右宮御方ヨリ、末派ヘ別紙ノ通御達ニ相成候ニ付、向後自身葬祭ニ相改、是迄ノ菩提寺ハ離檀致候旨申出候、右ノ趣聞屆置候テ不苦候儀ニ御座候哉、相伺候樣、靜岡表ヨリ申付越候間、別紙寫相添、此段奉伺候、以上、三年八月藩

（朱書）「伺ノ通不苦候事、」

　三寶院宮末派ヘ達書ノ寫

當山修驗一派引導式ノ儀、是迄國々御宗掟區々ニ候處、今般被仰出ノ次第モ有之候間、一派一定妻子ニ至迄、御法式ノ通、於其最寄申合、一派引導御規則可相守候事、

醍醐御殿

御役所(印)

明治二年巳七月

右ノ通被仰出候間、御末派一同不洩様、可令觸知者也、

韮山縣下非人神葬祭の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

四年七月

韮山縣下豆州大場村非人神葬祭

　韮山縣伺　辨官宛

當縣管内豆州君澤郡大場村番非人定八儀、今般村内一同神道葬祭相成候ニ付、同人ニ於テモ、神道葬祭相成度段願出申候、右ハ穢多非人ニテモ、神道葬祭御差許、且苗氏御免可相成哉、依之奉伺候、以上、四年四月八日　縣

指令缺

　神祇官上申　辨官宛

韮山縣伺穢多非人神葬祭ノ儀、一村一同神葬祭ニ相成候上ハ、降(雖カ)非人穢多ト同樣不苦事ト存候、依テ本紙相添此段申進候也、四年四月十五日

　神祇官上申　辨官宛

韮山縣伺非人穢多神葬祭ノ儀ハ、別紙朱書ノ通見込御廻申入置候、仍テ此段申進

候也、七月四日朱書見込缺

元三島神社境内藥師堂移轉再建勸進願書

村田正志氏報

乍恐書付ヲ以テ奉願上候

當御支配所豆州賀茂郡三島大社地元大德院檗敎奉願上候、私院本尊、乍恐人皇四拾四代聖武天皇御勅願所日本一國壹ヶ寺國分寺藥師如來、當國三島大社地內ニ安置罷在候處、御一新被仰出候之御趣意ニ付、神主矢田部式部殿ゟ、右本尊幷ニ附屬諸共急速可立退旨被申渡、他國江移候義、失舊名何共歎ヶ鋪次第、途方暮罷有、然る所三島宿木町觀音堂借請、同檀脇江直し置、本尊如來江對し且ハ一國壹ヶ寺之義ニ付、廻國之信者願拜之上者、納經據判願出候共、本尊藥師如來安置所無御座、如何共難捨置奉存候得とも、難及自力、依而舊來ゟ當御役所樣御信厚被爲有候當壹ヶ國先規之通、廻村助力賴入度候間、格別之以御隣信(簡)(マヽ)ヲ、假堂再建出來候樣奉願上候、右願之通御聞濟

被成下置候上者、舊記之通御調御印形頂戴被成下置候ハヽ有難仕合奉存候、以上
御支配所三島宿假住居
大德院
願主　榮敎（黑印）
豆州君澤郡谷田村
觸頭　敎學院
養達（黑印）
祈願旦家總代
清藏（黑印）
同
平助（黑印）
明治二巳年六月
韮山縣
御役所



[illegible]境内[illegible]

舊箱根權現神佛分離の始末

早山　茂氏報

一、幕府時代末の金剛王院の狀況

文祿三年二月伊豆國郡宅郡の内二百石と、箱根山社地不入の地二千町歩の寄進あり、社殿其の他建造物の造營修繕等、是れ皆幕府に於て建立したりしと雖も、是れを鎌倉幕府小田原北條時代の隆盛に比ぶべきに非らず、殊に寬政以降社殿佛堂の修繕は、諸國に勸化、或は富興行等をなして得たる金穀を以て漸く該費に充てたる有樣にて、以て當時の經濟狀態を伺ふに足るべく、自寬政三年、至文化十三年十二月、御修復願記帳、六十三世寺務別當觀隆の自書現に存す、而して當時の僧侶の數不明なれども、社人神樂人寺男等併せて十四五名なりし由、

箱根權現別當古義眞言宗金剛王院諦祠は、何か會計上に不都合の行爲ありしか、慶應元丑年江戸拾里四方追放申付けられし事ありしが、明治二巳年三月十五日朝政御一新主上御元服御大禮のため放免されし記事、箱根太郎か御布告其外控

帳寫左の如し、

箱根權現別當古義眞言宗金剛王院諦覩、小田原茶畑町同宗圓福寺高覩儀、慶應元丑年、江戶拾里四方追放申付候處、申渡儀有之候間、召連早々會計官訴訟所へ可罷出、死去歟、行衞不相知候へば、親類身寄之者、又は宿役人罷出可相屆、若不承に於ては、可爲曲事者也、

巳三月五日　三郞（御印）

相州足柄下郡
箱根
小田原茶畑町
名主
組頭

差上申一札之事

諦覩儀、先年不屆有之、江戶十里四方追放被仰付候處、朝政御一新、主上御元服御大禮被爲行候御赦に、此度御免被遊候旨仰渡、難有奉畏候、仍而御請證文差上申處如件、

韮山縣支配所

明治二巳年三月十五日

相州足柄下郡

箱根權現元別當

古義眞言宗金剛王院

諸　祠へ

箱根神社社役人

横山久大夫㊞

會計官

御訴訟所

二、明治初年の神佛分離及び其後の狀況

神佛分離に付ては、當神社の如き佛臭味の最濃厚なりしに拘はらず、山間僻陬の地なりし故、外部よりの暴擧は無りしも、當末世の別當復飾神主箱根太郎と云へるもの、餘りに思慮なかりしか、唯徒らに周章狼狽なし、今にも破却に來るならんと驚き迷ひ、村民に申付けて、佛像に類するものは、悉く持出して、或は塔ケ島(現在離宮の地)辯才天社に、或は元箱根村興福院に(當時の佛像現に存在)隱匿し、然かも大半は同

寺前に於て燒却烏有に歸せしめたりしと云ふ、故に現今神社に殘存せるもの皆糟粕の感に堪へず、誠に痛ましく畏き極みなりき、

明治初年の改革に甚き、神社は僅に神社境内壹町壹反參畝歩、及び神宮山二十四町歩を殘して、他は悉く地券奉還なしてより、（金剛王院は廢寺となり、所在地四反壹畝二十七歩と同院建物は復飾神主箱根太郎の所有に歸し、建物は宮の下富士屋旅館主山口仙之助に賣却、地所は轉々して現在は男爵岩崎小彌太氏の所有に歸す、）神社經濟極めて不如意となりければ、或は神社境内並に神宮山の樹木を伐採して、氏子より反對を受け、遂に其筋の知る所となり、明治六年再び境内二千八百坪に縮少され、神宮山は再び上地の止むなきに遭遇し、（但し此の上知地は近日中御料局より二萬五千圓にて拂下と成る筈、）神社の衰頽は其の極度に陷り、社人神樂人等は皆罷免され、最初の祠官は、小田原松原神社の祠官小川正義氏なりしも、名義のみにて、實際の事務は箱根太郎祠掌として專ら鞅掌、此の時貴重品什器等大方賣却せられしものゝ如し、左に箱根太郎が、小田原藩より御尋ねに付、書上控寫(現存)内銅佛賣却の始末書を擧げん、

以書付可申上候

箱根神社境内濟(賽)ノ河原ニ安置有之候銅佛ノ儀ハ、正德三年東京ヨリ有信ノ者有之建立致シ候處、追々年歴モ相立候ニ付テハ、施主家モ隨テ移換リ、近來ニ相成候

テハ、一向音信モ無之程ニ相成候處、去ル明治改元戊辰年神佛引分ケ被仰出候ニ付而ハ、舊別當金剛王院ハ復飾仕、神主ニ相轉シ候ニ付、右佛像モ神主家之己有ニ相成候、然ルニ右品ハ神家(主脱カ)ニハ不用ノ品ニ付、去明治四未年十月當驛青物町宮崎屋好兵衛方ヘ賣渡申候儀ニ御座候、右御尋ネニ付、始末申上候通リニ相違無御座候、已上、

明治六年二月十五日

箱根神社

舊神官　箱根太郎㊞

舊役人　横山左久太㊞

差添人

戸長　川井右三郎㊞

足柄縣裁判所

佐久間司法權少判事殿

明治六年七月三十日縣社兼郷社の格に列せられ、小田原在板橋より箱根に懸けての總氏神となる、

箱根親鸞聖人堂の由來

鷲尾順敬

箱根山金剛王院東福寺の境内に親鸞聖人堂があつた、これは親鸞聖人の自刻と傳ふる木像が安置せられてゐたのである、天明の頃に堂宇破損し、修覆の工事も半途であつたが、天保八年三月に箱根宿萬福寺住持、及び檀徒が東福寺住持等の承認を經て、京都本願寺に上申し、再建することゝなり、同十一年十月に落成した、當時東福寺萬福寺の往復文書等が、萬福寺に保存せられてゐる、卽ち次の如くである、

賴狀

一於當山、親鸞聖人御自作之尊像安置之儀、往昔聖人關東より御歸洛の砌、神勅を蒙

り、當社に御留錫有而、御彫刻之遺像也、然る處御堂之義、天明年中及破癖、其後再建之企雖有、不至落慶、空敷朽損畢、然るに當時雖有復古之志、御本社已下御修覆中故、御堂再建難及自力候處、兼々貴寺幷同行中ゟ、鼻祖之御舊跡尊敬之義者、御門派中之知れる處候得共、御堂建立之御取持被致度趣申被出候事、幸自山而も仰處候、殊に貴寺ハ東御門跡之御宗派ュ候得者、當山志願趣被達上聞末ュ、六條御殿之御取立ュ相成、永世御眞影御繁昌勝計御取持偏ュ賴致候、以上、

天保八酉三月

金剛王院內

横山久太夫

河井右近

福壽院

萬福寺尊納

同行衆中

以書付御願申上候

一御山內御安置之親鸞聖人御眞影、御當社御舊地之義者、本山之御傳記ュ茂有之候

義、兼々恐承仕候、右御眞影尊敬御取持仕度、兼而念願ニ御座候得共、御他山之義ニ候得者、是迄格別御取持仕候ニ茂、本山を兼、諸國講中迄、自然与御取持薄相成誠歎ヶ敷、且萬福寺幷旦家之者之義者、別而當驛乍住、無其義、不冥加之至、奉恐入候、何卒今般本山に相違、向後已來御取持申上度候得共、御當山而御聞屆無之儀者、本山に相違候義も不相成故、何卒右之段偏ニ御聞屆被下候樣御願申上候、右願之通御聞屆被下候上ハ、六條御殿之御取立ニ相成候共、御山內之御差支ニ相成候義者決而御取持仕間敷候間、願之通御聞濟被下候ハヽ、拙寺始旦家之者ハ勿論、諸國講中ニ至迄、永久冥慮相叶、一同難有仕合奉存候、以上、

天保八酉年

三月

箱根宿　萬福寺旦家惣代

岡本六郎右衛門

安藤惣左衛門

安藤次五右衛門

藤江三左衛門

夏目五郎左衛門

川田覺左衛門

萬　福　寺

箱根山内

福　壽　院殿

川井右近殿

橫山久太夫殿

一筆致啓上候、甚寒之節彌御淸福ニ被成、御寺務珍重奉存候、然者其御山御安置有之候宗祖聖人尊像之義ニ付、且又御堂再建等、悉皆萬福寺ゟ御往復中候次第、具ニ申出致承知候、就夫此上他本山ゟ如何樣申出候共、御取敢無之樣致し度候、此段爲念得御意候、猶期來陽寬々可得芳惠奉存候、恐惶謹言、

酉十二月廿三日

江戸淺草御坊

卽現寺祐貫(花押)

佛願寺賢哲(花押)

箱根山
　金剛王院様
猶以時候御尋として金千疋被成進入之候、以上、

一筆致啓上候、春暖之節彌各院樣方御清福被成御在府珍重奉存候、然者當山別殿安置有之候御宗祖聖人御眞影御堂再建之義、當宿萬福寺主より往復申上候次第、具に被成御聞濟候付、他本山より如何樣申來候共、不取敢樣御申被越致承知候、何分不日御堂再建成就偏ニ希所御座候、恐惶謹言、

箱根山
　金剛王院定寂(花押)
戊正月廿八日
　淺草御坊
　　佛願寺樣
　　卽現寺樣

猶舊冬は時候御尋として金千疋御惠被下、忝受納仕候、次ニ役僧役人迄日錄被下、是又御禮申上候、尚輕少品御座候へ共、當山產物之本桑之椀一具ツヽ、御兩寺樣へ

致進上候、宜敷御受納可被下候、以上、

親鸞聖人御堂再建入用

一金百貳拾兩三分銀三匁五分	木材一式
一金七拾壹兩貳分	工手間
一金拾八兩貳分	釘金物
一金四拾貳兩壹分	家根
一金四拾五兩	石工人足

惣〆金貳百九拾八兩銀三匁五分

右之通ニ御座候、以上、

丑十月廿七日

親鸞聖人堂は、再建の後萬福寺の關係が深くなつて、常ゝ同寺住持が聖人の木像ゝ給仕したのである、

然るに、明治の初め東福寺の本堂等を打壞された時、急に親鸞聖人堂も取除かれた、萬福寺の住持は、如何とも仕樣がなかつたとのことである、

武藏六浦藩神葬祭并宗門改の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

四年正月

六浦藩知事神葬祭ニ改メ、士族卒及管內人民ハ、隨意ニ任ス、并異宗門改ノ假規則ヲ設ケシム、

六浦藩上申辨官宛

私家族共、自今神葬祭ニ執行仕度、因テハ祖先ノ靈祭等、悉皆神祭式ニ相改申候、依之士族卒并管下ノ庶人有志ノ輩ハ、其意ニ可任ト奉存候ニ付、此段御屆申上候、以上、三年十二月二十六日藩

（朱書）「書面ノ趣不苦候、就テハ異宗門改方ノ儀モ、追テ一定ノ御規則可被仰出候間、當分藩廳ニ於テ、假規則相立可屆出候事、」

神祇官意見辨官宛

六浦藩ヨリ、神葬祭ノ屆、知事葬儀ハ屆書ノ通ニテ不苦候ヘ共、其以下ノ者ハ、御規則

相立候迄、於藩邪宗改旨ノ假規則相立候上、取計可申樣、御達有之度存候、依テ本紙相添、此段申進候也、四年正月二十八日

武藏六浦藩合寺廢寺等伺

〔太政類典〕第一編第百三十四卷　教法　寺院三

六浦藩伺辨官宛

當藩管內寺院、先般取調差上候內、小村中ニテ、從來同宗或ハ他宗ニテ、二ケ寺三ケ寺モ有之、自然普請等ノ諸費モ御座候ニ付、向後同宗ニ候者一ケ寺、他宗ニ候ヘハ最寄ノ同宗ヘ、合併爲致候テモ不苦儀ニ御座候哉、

一同斷寺院ノ內、鄉學校ニ相用置候分、一宇廢寺致シ、其儘學校ニ致度存候ヘ共、不苦儀ニ御座候哉、

一寺院當今無住ニテ、廢寺相成候分取毀チ、開墾爲致或ハ士族卒住居爲致候テモ不苦儀ニ御座候哉、

一支配所神社ノ內、先々寺院ヨリ別當兼務致候分廢止致候後、神主無之分、士族ノ內

神道修候者ヲ相補候テモ、不苦儀ニ御座候哉、

右件々奉伺候、至急御差圖被成下候樣奉願候、以上、三年十二月十八日藩

（朱書）初ヶ條ヨリ三ヶ條迄、土地人民ノ適宜ニ出、寺檀納得ノ上願出候事情ニ運ヒ、本寺法類ノ故障無之、僧侶授産ノ目的モ相立候者、其始末宗旨本末寺號共巨細取調、且廢寺境內反別開墾等儀モ見込相立、更ニ可伺出、四ヶ條氏子並組合神職等相糺、事故無之候者、可爲伺之通事、四年正月晦日」

上野山內紅葉山日光山德川廟處分の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

二年三月五日

上野山內并紅葉山日光山德川廟所處分

神祇官上申辨官宛

家康神靈東京中神社寺院內ニ社殿造營有之、來ル四月十七日ハ、沿襲之祭祀被執行候族モ可有之候ヘ共、寺院中之社ニ於テ祭祀相營候儀ハ止ミ、上野山內ニ有之

儀社殿ヘ、衆人參詣差許シ、神靈ヲ慰メ候祭典被爲行候ハヽ、府下衆心鎭撫ノ御一端ニモ相成可然哉ト存候事、

一下野國日光ニ有之候同靈廟宇ニ於テモ、神靈ヲ相慰候輕キ祭典、日光縣ヘ被仰付可然歟ト存候事、

一紅葉山ニ有之候德川氏累代之靈廟ハ、速ニ御取拂相成候樣仕度、皇居接近之御場所ニ、右樣之空廟有之候テハ、不快ノ事ニ候、殊ニ箇樣ノ場所ニハ、狐狸モ相住候者ニ候ヘハ、旁早々御取拂可然存候事、

右ノ件々御評議被下度、就中上野山內社殿參詣御差許シ之儀ハ、東京中御布告相成候樣仕度候事、二年二月廿九日 [illegible]府

〔朱書〕「一上野山內德川氏廟所之儀ハ、同氏ヨリ伺出之上、何分之御沙汰可被爲在候間、於其御官ハ、不及御關係候事、

一日光山之儀、神佛混淆ニ付、祭祀不條理ニ候間、日光縣ヨリ伺出候ハヽ可及御掛合候事、

一紅葉山德川氏廟所ノ儀ハ、已ニ同氏ヨリ引取方御下知ニ相成候間、御東幸迄ニハ悉引拂可相成ト存候事、二年三月五日」

神祇官ヘ掛合　辨官

東照宮ノ儀、元來勅許ニ候得共、全神社ニ相立可然哉、佛社混淆罷在候ニ付、至急御見込承度候也。二年十一月十三日

神祇官意見

東照宮神社名義勿論ニ付、佛具等取除、混淆ノ筋無之樣可致事ト被存候也、

浦和縣平民神葬祭式の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

三年十二月

浦和縣平民神葬祭式ノ事ヲ候ス

浦和縣伺　辨官宛

管內平民共、神葬ヲ願出候者有之候處、是迄改テ被仰出ハ無御座候ヘトモ、戶籍編正方ニ付、京都府編法書等御渡ニモ相成候ニ付、既ニ改革ノ手順ニ有之、然ル上ハ宗門寺判ハ自ラ被廢候事ニ付、宗門筋ノ義衆庶ノ適意ニ被任可然御趣意ニ奉存

候、乍去佛葬ノ義ハ從前尊卑ノ法式數等有之、不幸不常ノ者ト雖モ、普通ノ禮ニ徴ヒ、身柄相當葬祭致來候處、神祭ノ式法未タ浹洽不致、容易ニ差許、自然父兄ノ葬祭疎略可相成ヤ疑モ有之、神職ノ外ハ許容方見合置申候、右ニ付テハ、平民貧富三等ニモ分チ、葬祭式御定被仰出候樣仕度、暫差急候事情モ御座候間、可相成ハ至急御下知候樣仕度候、以上、三年十一月廿三日（各縣）

（朱書）「伺之儀ハ當今御取調ニ付、追テ何分ノ御沙汰可有之候事、」

神祇官答議　辨官宛

浦和縣葬祭伺ノ一件、右ハ祭式取調中ニ有之候間、調濟次第、早々可相達儀ニ存候、此段申進候也、三年十二月二日

浦和縣上申　辨官宛

管內神葬ヲ願出候者往々有之候處、祭式等限リニ相成、却テ皇道御興立ノ妨可相成見込ニ付、葬祭式官撰相成候樣仕度趣、舊臘言上候處、追テ可被仰出旨御附紙有之、爾來御沙汰無御座候、然ルニ今般神社御改正氏子調等ノ儀、夫々御制度被爲在候上ハ、最早神葬差押置候儀、不條理ニモ相當リ候付、早々願ノ者ハ許允致シ度、就

テハ舊職言上ノ廉ヲ以、至急御授被下候樣仕度、此段更ニ中上候、以上、

但、近來皇學者流、私撰ノ祭式ヲ以、當分縣限リ貧富ノ差等ヲ定、相授可中歟ニ候へ共、海內一般ノ御制度無之候付、不可然儀勿論ノ事候間、只今御沙汰奉待候儀ニ御座候、以上、四年七月十三日

(朱書)「神葬式ハ追テ一定ノ規則可被仰出、先夫迄ノ處ハ其縣限私撰ノ葬祭式相用可然、猶委細取調可相伺候事、」

大多喜藩の合寺減僧

［江東雜筆］三　高野山明王院增隆輯

日蓮宗ゟ上總大多喜藩へ書上寫

口上之趣以書付奉申上候、

一方今萬事改弊の時ニ相當り、諸道共漸く鼎新ニ相成候得共、唯獨り僧家のみ依違因循、實以天人之際不相濟之儀恐入候、依之昨巳年已來、別段學制相立、清規教誡、末派一同、無闕漏、嚴敷相觸都鄙、各處隨分之學校取立、維新之　御政體ニ相叶き可申旨、數度曉告候得共、何分多年之惡弊沿習爲風、唯今以何等之實效も不相立、痛恨不過之然所今般　貴藩寺院減跡之御處置を相蒙り、奉慚愧候、現今僧等之不肖ゟ、先輩多年之勤業も、一朝之泡沫、實ニ廢寺之僧等、死而有餘罪之責難免候得は、如何樣之御嚴誡も違背不可有之、而今以後僧道一新、精學勵行、吃度萬民教導之職位相立、上い王綱を補翼し、下蒼人心を協和せしめい、此擧獨釋門之多幸のみならす、抑亦國家の一大美事、所謂良工無可棄財、賢宰雖器量適之義なり、則　貴藩減寺改弊之御趣

意吃度相立、近郡隣藩之龜鑑とも相成可申、此段公論正義、天地無私之御裁斷願上候、

一凡雖教者は、卑賤頑愚之者也、然ニ、天下之衆民、大底卑賤頑愚七八分也、故ニ佛法智愚並教といへ其、卑賤之者別而佛之所憐恤也、是以其爲教也、方便誘導、人心易入を以て爲貴也、其功を成ニ至るは、人々爲善、自然刑辟を未前ニ相防き、小人をして令有君子之愼、是佛之陰ニ政化之所難及を助るもの也、又僧ニ於て、清規を以て、不可約束者ハ、王法刑罰を以て、令敢不放逸者ハ、是王政之助ニ佛法之所不及を助る者也、是古之　王法佛法不相悖して、教化を贊成する者也、然ニ今時僧道之陵夷亦極矣、不學無律亦佛之法以何爲宗之事をも不相辨、飽煖逸居、庶民之上ニ抗顏竊位する者、天下滔々として皆是也、是獨り世法之不容處のみならず、尤佛道之所擯斥也、全く學校陶冶之法、後世失其宜、流弊之至此、非祖法之然也、實ニ良藥變爲毒、深爲可恨也、是全後世僧等之罪なりといへとも、抑亦爲國家之者少數非無其責也、幸今般　貴藩滅寺改弊之御所置有之、奉敬服歡喜候、然ルニ上ハ無偏無黨議論を以て、斯民をして、晞昔世出雙美之風化を相蒙り候樣、御賢裁奉願候、

一末法澆漓住持之僧不得其人より、福田之地も鋤れて稍畦と成る、覺樹之林も伐れ

て燋路を成す、淺間敷世態、見聞ヽ難忍、實ニ僧等之行ひ、神明ニ相負き、天人之際冥罰難免、卽今此顯責を蒙り候得ハ、僧等餘恨無之、只慚愧自責、血淚交下而已、然ニ伽藍境內山林田畑等、皆是往昔寺檀丹精之所、結構都而淸淨之功勳ヽして、豫將來永善之地を成も者也、然ニ一旦忽ち無何有鄕ニ相屬ハ、神魂若有靈、則冥々之裏、非無遺憾、況や民德歸厚之善政ニおゐて、甚以似相戾、於　貴藩、專主此事者、願君子成人善之義を思ひ、廢典を振起し、舊染を洗淨し、敎導維新、僧等功過相償候樣、何卒賢明之御所置奉仰祈候、

一外夷者共用意詭譎、措謀久遠なり、先協和親睦を以そ浸潤し、無用之翫物を以そ、國財を欺奪し、新巧之器械、拆微之窮理を以て、邦民を眩瞞せしめ、終ニ耶蘇之邪敎を以て、人心を陷溺す、人心一度彼敎ニ溺るゝ時は、復　皇國之民ニ非、然後呑噬之素志を遂す、是則覆轍之明鑑彰著ニ御座候、民之質直なる、必す怪異を尙ふ、若不在于此、則　在于彼、若誘掖其方を失時ハ、斯民をしそ、水火ニ陷らしむ、彼妖敎唯一心天主ニ奉する事を知そ、其他を不知、故に宗廟を輕侮し、人倫を廢棄す、其法至簡至易、愚民之沈溺しそ國禁を犯、刑辟ニ罹て悔せさる所也、中古嚴令有之、拔本塞源相成候得共、近年法令相弛、況や方今天下革命、人心動搖之虛ニ乘し、已前と少數面目を換、又

々邀民を相誘候樣承り候得ば、　皇國將來之蠱害不可測事ニ御座候、元來僧も教諭之任ニ候得ば、是等之災を未萠ニ消除可仕之處、久安之治ニ慣れ、教示ニ怠り、古法を株守して、誠實之誠示無之、甚以奉恐入候次第ニ御座候、今般　貴藩御改弊之御趣意を奉蒙候、恐懼憤勵、舊習を一洗し、盡忠爲國、斯民をして永く妖教ニ不流、聊　皇恩之萬一ニ奉報答度存候間、御管轄中嚴敷御禁令有之候樣奉願候、僧等藩命を以て、國禁を緊守し教諭行屆候樣可仕候、此事當今一大急務故、幸御改弊之序、御禁令被下候ハヽ難有奉存候、

庚午

十一月　池上

本門寺觸頭

東京府

朗惺寺印

大多喜藩廳下

同宗より同藩管内諸寺院へ　箴規

一維新之御政體並其

主宰之命令堅相守可申事、
一本山之學則法令相辨、毎月六回、其向寄ニ而法門研究之事、
附、打寄候節、酒宴雜談制之、
一三時之勤行無懈、供花點燈禮誦讃歎可有之事、
附、道場莊嚴丁寧掃除之事、
一教導之職掌吃度相立、隨分之講演如法ニ可相勤事、
一上下之階級相糺、柔和質朴、最も自讃毀佗無之様ニ相愼事、
一萬端省略を用、對檀家、叨りニ寄進等不可賴之事、
一出往歸來晴雨ニ不抱(拘)、脱衣停止之事、
附り、平僧所化之分緒布制之、
一尼僧又ハ親族たりとも、婦人之滯宿堅停止之事、
但、實母六拾歳已上別格、
右之條々違犯之輩神速擯斥可申付也、

庚午　　　　池上
十一月　　　役者

右之通申渡之上、配下より差出候書附左之通、

改悔狀

一愚輩衣座室の法を不知、叨りに法王之室に居、色相の衣を被、高廣の座に座し、四安樂の教律をも不辨、寺職之本業を忘て、尸位素餐實以奉恐縮候事、

一苟も出家たる者、人情を離れ、佛祖之教に隨ひ、能其法を修行するを以て、釋子沙門之業となし、其教法多と雖、戒定慧之三學を出す、其中戒ハ菩提之本元、定ハ散心停調之根據、慧ハ修學契理之基元たる之處、是に戻れハ則沙門に非す、是以無始已來今日に至迄、非をなし惡を行する罪業、悉く慚愧懺悔之學業勉勵し、深信を以、佛祖之加被を蒙り、法之本理に契せんと欲候事、

一御維新已來、於本山、學則相立、法令を布告し、數回曉喩有之處、今以其實效無之、怠惰安逸、徒ニ光陰消し、今其督責を蒙り、汗顏不過之、然則自今其心志を激發し、習學ハ不申及、護法利物第一に勤務可仕候事、

一今や當國祖法衰廢、合寺減僧之令、既ニ身ニ逼る、是全ク其業之所感ニ候、然則對佛祖、先師死而有餘罪之責、今日に至誠懺悔し、則舊弊を去り、色欲之情を絶、圍碁等之勝負を禁し、葷酒肉を遮し、然而先師數百年之勤業を感(恩)應いたし、佛法興隆之忠憤を發し、

傳燈相續可仕候事、

一今般大多喜管内、各寺議僧之令有之候處、一層之策相立、同派有住之分其儘御差置ニ相成候上者、必其區押迄り可申候間、兼而爲法護、別而僧道を守り、俺緩を省き、且ッ檀家へ對し、非分之勸募不仕、教導之職掌吃度相立可申候事、

右件々吃度相辨、王法佛法兩立仕候樣可奉念願候、若於違犯者、佛祖之冥罰を蒙り、國罰之曲刑可被處候共、遺恨無之候、謹呈、

明治三庚午年十一月　何郡何村

何寺

佛祖先師寶蓮座下

大多喜藩神葬祭并宗門改の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　喪儀僧尼

同年四月八日

大多喜藩管内神葬祭執行并邪宗改規則

大多喜藩願辨官宛

當藩支配所
上總國夷隅郡
泉水寺村百姓
小高八左衞門
小高治十郎
岩瀨小左衞門
岩瀨茂七
西郡平八
岩瀨忠次郎
岩瀨伊兵衞
岩瀨吉五郎
小高庄藏
江澤文藏
猿田市平

猿田伊右衛門
岩佐平吉
小高長左衛門
猿田次郎兵衛
岩瀬德兵衛後家
猿田由藏
江澤總左衛門
小高条吉
小高七藏
小高文二
小高小平二
小高八十八
岩瀬七五郎
西郡長重郎
關仁左衛門

岩瀬庄吉

小高茂平

岩瀬吉左衛門

小高庄八

岩瀬太郎兵衛

岩瀬善藏

西部半左衛門

小高金平

小高與平太後家

岩佐多左衛門

岩佐要藏

小高喜兵衛

竹下源藏

小高茂左衛門

小高勇八

關　伊三郎
小高多重郎
同郡下大多喜村百姓
由岸伊左衛門
杉村與左衛門

右之者儀、是迄佛葬受來候所、元來神道執心ニ付、以後家族ニ至迄、永代神葬祭執行仕度旨願出候、依之相糺候處、相違ノ儀無御座候間、則邪宗改規則書二冊幷願人名前書二冊相添奉願候、依テ心願ノ儀ニモ御座候間、至急願之通被仰付候樣、此段奉願候、以上、四年三月十日藩

「宗門ニ於テ一定之御規則被仰出候迄、見込ノ通取計置可申事、同年四月八日」

邪宗改規則

一此度邪宗改規則被相設候ニ付テハ、自今規則ノ通、三ヶ年一度宛、四月限人別證印、其村長ニテ取調、藩ヘ可差出事、

一生兒有之節ハ、其土俗數日ヲ以テ、其村神社ヘ參詣爲致、神主ヘ可相達事、

一死喪有之節ハ、其神主ヘ相達、如式執行可申事、

右之條々相定候上ハ、其神社ヲ可敬禮ハ勿論、各其行儀ヲ正、心得違ノ者無之樣、爲村長者、屹度取締可有之事、

四年三月　大多喜藩

名前ハ願書ニ有之　何々
大多喜村百姓共ノ　何々
家內從者ニ付略之

合男六人
女六人

右當村淺間大神氏子

神主　石塚一郎

右此度私共村內前書之者共、邪宗相改候所、淺間大神氏子ニ相違無御座候、依之一人別調印爲仕、猶又念入神主證印毛頭紛無御座候條、仍如件、

明治四辛未年三月

伍長兼什長　山岸伊左衞門
組頭　市原佐右衞門
庄屋　黑澤小左衞門

大多喜

御藩廳

名前ハ願書ニ有之

泉水寺村百姓共ノ

家内從者ニ付略之

合 男百三人 女百八人

右當村六所大神氏子

小泉義重郎

右此度私共村内前書之者共、邪宗相改候處、六所大神氏子ニ相違無御座候、依之一人別調印爲仕、猶又入念神主證印毛頭紛無御座候、依如件、

明治四辛未年三月

什長 岩瀬庄吉

同 小高七藏

組頭 小高治重郎

川村多七

小高八左衛門

大多喜

御藩廳

神祇官意見辨官宛

大多喜藩管下ノ者、葬祭願、々之通御聞屆相成可然、邪宗改ノ儀ハ、追テ一定ノ御規則相立候迄、藩見込ヲ以取計置可申旨御達有之度、此段申進候也、四年四月五日

若森縣寺院の復飾

「明治元年より復餝願書類」（市村其三郎氏所藏）

乍恐以書付御伺奉申上候

當州筑波郡神郡村普門寺眞專奉申上候、今般王政復古神武御業之始被爲基、諸事御一新之御旨意被仰出候趣、彩彩奉敬承候、然ル所拙寺儀ハ、常陸下總七箇郡之内に、三百壹ケ寺末門所持罷在、諸藩縣支配入合御座候得ハ、御一新之御制度嚴敷被遊候寺院ハ、時々伺仕出候ニ付、品々左ニ御伺奉申上候、

一御朱印頂戴寺院之内、社領別當之御文言有之向ハ、復飾之御伺、

無據儀ニ付復餝之事

付札

但、專以神職爲寺務、滅罪を不兼者社僧と申候、御朱印社領たり共、小高又ハ配當等ニ而、五六石程ニ而ハ不堪經營、滅罪を兼候寺ハ、辨別可有之事、

一御朱印頂戴之有無ニ不抱（拘）、神社支配仕、幣帛祭事祈願相勤候寺院、南部御取分之御一新ニ付而ハ、復飾開届可申候御伺、

付札

神社之支配を相離き、寺德有之分は、支配を他に讓り候とも、弟子僧にて而も爲致復飾候事、

一御朱印頂戴寺院之內、寺堂社領是迄壹本證文ニ而、滅罪別當共相勤候常院有之ニ付御伺、

付札

寺領社領御書分願立、前同斷神職他に讓とも、致復飾候共、寺柄社柄可寄事、但、寺領滅罪而已ニ而難立分者、寺檀相談之上、何きニ而も可致兼帶事、

一本末一同境內中鎭守社何も有之、殊ニ醍醐方末派ニ而、淸龍（瀧下同ジ）權現天滿宮稻荷明神三社必勸請有之ニ付御伺、

付札

大社之分ハ引離し、他に讓り、小祠之分ハ撥遣可致置事、但、淸龍權現三社權現之類ハ、山王權現ニ准し、佛法擁護之神故、大社之分ハ可致改號事、

一本寺職ニ而、無餘儀復飾仕候ハヽ、末門之寺院如何取計可申哉御伺、

付札

末門之寺院も、少分ニ候ハヽ、隣談林ニ附屬可申、若末門多分有之候ハヽ、於中有縁之大寺を撰ひ、末門相談之上、新談林可願出、尤大本寺有之分も、大本寺ニ而支配勿論之事、

一復飾之寺院滅罪檀家離方、并百姓人別之者、神葬式之願有之候ニ付御伺、

付札

寺檀熟談之上、門末之内、或者隣寺等江譲り可申事、百姓町人たり共、邪宗門無之見定候ハヽ差許候而も不苦事、但、府藩縣ゟ寺檀双方ゟ相屆、宗門人別改正可申事、

一神社中ニ有之候本地佛并鰐口梵鐘佛具之類、都而取除可申旨、一漢ニ御觸達無之候ニ付、取計方御伺、

付札

觸頭ゟも觸達無之候得とも、附屬之府藩縣ゟ沙汰有之候ハヽ、取除可然事、

一無住之寺院寺德世話人共押領、其上當時之形勢ニ至り、無法ニ境内山林等伐木仕族有之候ニ付、提〔取カ〕捌方御伺、

付札

本寺或ハ兼帶寺ニ而、乾度取調候儀、
御一新前可爲伺前事、

一拙寺惣門徒常陸下總七箇郡之内、貳百四拾六箇寺有之、何も薄祿貧地ニ而、幣帛祭事祈願ニ而永續罷在、然ル所兩部取分ニ相成候而者、永續無覺束候ニ付御伺、

付札

最寄ニ隨ひ、無據分壹貳箇寺爲致復飾、村々より相願候共、他に讓り候共、寺檀和融事宜ニ應し可取計、尤有來候四節護摩仁王經之外、諸佛諸尊天部等、佛道祈願之儀も、御一新前可爲伺斷事、
但、神事を離れ、永續難成分者、是亦寺檀相談之上、各寺兼帶等いたし相談可致事、

一減罪を離れ、別當ニ基き、復飾仕候共、又ハ別當を止、減罪一方ニ相成候共、其寺々身上都合之宜敷樣仕候而可然哉、此旨御伺、

付札

伺之通りたるへき事、
但、本人復飾致し度存意ニ候ハヽ、弟子僧或ハ法類等に、減罪寺爲致住職、退去

之上、別宅相構神職可願事、

右伺之通、出格之以御慈悲御差配被成下置様、偏ニ奉願上候、已上、

明治元辰年

吉沼村正福寺末八幡別當玉藏院復飾願之寫

乍恐以書付奉願上候

常陸國筑波郡吉沼村惣鎮守八幡宮別當、同村正福寺末玉藏院奉申上候、拙僧儀是迄右八幡宮別當仕來候處、今般王政御一新ニ付而は、兼而御布告之趣奉拜(承カ)掌、速ニ復飾仕、神職ニ相轉し、吉沼内匠と改名、神勤仕度、尤同村之内大六天弁天神兩社とも、持閉院別當仕來り候處、先年より無住ニ相成候ニ付、拙寺ニ而是迄兼帶罷在候、然ル處右躰復飾仕候ニ付而とも、右兩社之儀、是迄之通り、神職兼帶仕度、依而は已來自分一家之男女共、神葬祭仕度、本寺ハ勿論、村内氏子村役人一同聊故障等無御座候間、何卒出格之以御慈悲、右願之通被仰付被成下置度、此段奉願上候、已上、

常陸國筑波郡吉沼村

新義眞言宗

正福寺末
同村
玉藏院
氏子惣代百姓
善兵衛
村役人總代
名主庄三郎

粥川小十郎様
御役所

右文言、同郡西高野村西光院末同郡吉沼村光藏院、熊野鹿島兩社別當仕來候所、復飾と成、西沼伊織と改名、

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

以書付奉願上候

一當村鎭守八幡宮、只今迄新義眞言宗ニ而、進退罷在候處、今般朝政御一新被仰出、欽而奉仕復飾仕候上ニ、御家之神祇道信仰罷在候間、御門下ニ被召加、神祇拜揖或御

直傳被成下候樣奉願上候、此儀ニ付、自他故障之儀更ニ無御座候、此段御聞濟之程
奉願上候、已上、

常州筑波郡吉沼村
玉藏院事
吉沼内匠
名主 庄三郎

白川殿
御役人衆中

神祇拜揖式并幣帛式、注連繩式、假免狀等、十二月廿五日大園木村稲本主膳持參
受取候事、
白川殿御取次　阿留多伎貞樹（アルタキサダキ）殿ゟ届來候よし、

○明治二巳年正月十四日、行政官ゟ御觸之趣左ニ記之、
忠孝貞節は、人々之固有する處といへ共、世汚教緩、風俗廢壞之時ニ際し、不良之心を不生、人之人たる道を盡し、世間之龜鑑にも可相成者、實ニ可感賞之至り候、幸に明

天子被爲出、大政御一新、萬機御親裁被爲遊候折柄、怱卒兵馬之事起り、上下騒擾に立至り候處、最早東北諸藩今日ニ至り候上は、愈風敎を盛し、人倫を持する樣所置不致候而者、奉恐入候次第ニ候間、支配所村々孝子義僕貞婦節女等、總而人道ニ有間敷者、巨細ニ取調、役狀を記し、來ル正月中ま當御役所に可差出旨、其筋々に不洩樣申達し可有之候事、兼而御布令之通り、十三州之內、諸寺院願伺等之儀、所部府藩縣に可被差出候、其上難決儀ハ、府藩縣ゟ東京府辨事役所に可伺出候事、

但、官位幷參內願等、朝([illegible])庭ニ關係仕事ハ、執奏に可申出候、執奏無之向は、直ニ東京辨事役所に可屆出候事、

辰十二月　　　　行　政　官

醍醐三寶院より修驗道ニ御觸之文面、修驗共ゟ檀家符品相配り度旨、御觸とハ相違ニ付、爲心得控置、

今般就御一新ニ、神佛混淆不相成旨、御布告之通相守可申儀は勿論ニ候、兩部修驗道御伺之處、修驗衰減ニも無之、神社ニ關係候條、奉仕之社譯而御差置候ハ、復飾神勤可致御趣意厚奉載し、無餘(義ヵ)條、復飾祭祀之次第ハ、神祇官に致入門、嚴重ニ致神勤、從前

之御恩澤不致亡失樣、復飾修驗幷唯修驗之輩ニおゐてハ、愈以職掌を相勵、爲國家其分を盡し、自然勤王之情實貫徹仕、一派之規模相立候樣可相心得事、

一復飾修驗裝束之儀ハ、淨衣鈴懸、且袴ハ白張袴袴取交著用致し、其寺院にても、苗字用俗名相名乘可申事、

但、府藩縣ニおゐて、寺院へも苗字差支有之候ハヽ、其後跡廢絶無之樣、二男且ハ身寄之者を以、後跡取立、舊襲之通可相勤事、

一諸社ニ關係之復飾修驗ニおゐてハ、社家神主に附屬し、當宮離末なとゝ相心得候者も有之哉ニ相聞、不謂事ニ候、元來復飾致候迚、神祇官に附屬被致仰之儀更ニ無之、心得違致間敷候事、

一唯修驗之輩ニおゐて、聊異儀無之候間、猥ニ復飾等致し、彼是粗暴之擧動無之樣可相心得置事、

一寺内鎭守佛閣廢止ニも無之、清淨ニ守護可致事、

一是迄佛供施物加持祈禱之儀も、施主之心得ニも候得共、修驗職掌勿論ニ候處、近頃社人之徒、動是差障り候趣、不謂事ニ候、愈以社人等ゟ差障り手續ヲ申立候得も、社人職掌ニ取究候事件相認メ、(姓)姓名調印取之、可差出、其上朝廷に相伺、重而可及沙

汰候事、

一巫女職之儀ハ、從前注連筋を以相承候得は、是迄之通り、相心得可申候事、

一當山修驗一派引導式之儀は、是迄國々ニおゐて、御宗掟區々ニ候處、今般之仰出次第も有之候間、諸國一派一定之、妻子ニ至ル迄、御法式之通、其最寄ニおゐて申合、一派引導御規則可相守事、

右之通就御一洗御確定申達候事、

常州筑波郡吉沼村新義眞言宗金剛院本寺金藏院祐金奉申上候、當村惣鎮守愛宕大神末社嚴島明神、諏訪明神、稻荷明神、國神、大神素盞嗚尊、右五社、金剛院是迄別當職罷在、尤御朱印御墨印等は一切無御座候、然ル處前書金剛院無住ニ付、拙寺兼（帶脱カ）ニ而、年々神祭勤務罷在候處、此度朝政御復古、舊幣御一洗与被爲在、就中神祇道之儀は、前古未曾有之御太（大）變革被仰出、而大佛氏之說を御廢止ニ相成、諸國大小之神社、僧頭ニ而別當或は社僧と相唱候輩は、悉復飾致候樣御沙汰之趣奉敬承、前顯御布令之趣、幷已來本寺金藏院弟子に相讓、佛事爲致執行、拙僧義は門徒金剛院に引移、惣社神主ニ轉し奉仕、速ニ復飾仕度、其段氏子中に及示談候處、一同故障之筋無之

候間、已來皇國之古道を以、至誠神祇ニ奉仕致、御國恩奉報度奉存候、猶亦復飾之上は、宮本主水与相改申度候、并家内一同、已後神祭葬ニ仕度、前件之次第御聞濟（被脱カ）成下置候樣伏而奉願上候、已上、

明治元辰年十二月

御支配所
常州筑波郡吉沼村
新義眞言宗
金剛院本寺
金藏院
祐全
氏子惣代
半兵衛
村役惣代
差添人
豊十郎

弼川小十郎樣

御役所

前書之通り奉願上候處、願之通被仰付候旨被仰渡、承知奉畏候、依而御請書差上候處如件、

右金藏院

辰十二月十八日　　祐　全

半兵衛

豊十郎

粥川小十郎様

御役所

前書之通御掛判懸事近藤三左衛門様ゟ被仰渡候間、此段爲心得寫差上申候、

已上、

愛宕山神體

軻遇突智尊（カコツチ）　本地佛（勝）將軍地藏菩薩

蠶山神體

保食神

大六天神　　　　大杉大明神

葬祭式

伏惟、我國殯葬之法頹敗也久、故人死則、委之淨圖手、投之荼毘坑、吁可歎哉、嘗聞伊弉冊尊生火神而崩、葬於紀伊國熊野之有馬村、是乃本邦葬儀之始也、又曰天稚彦中天死、乃造喪屋而殯之、又火々出見尊崩、葬日向高屋山陵、皆是上古神世之事而異端未入我邦之時也、又曰素盞嗚尊種草木曰、柀可以為顯見蒼生奥津棄戸將臥之具、又祭伊弉冊尊之魂、花時以花祭、又用鼓吹幡旗、歌舞而祭焉、因茲觀之、本朝自有葬祭之事、其法中為異端所亂、今稽之遺書、且加師傳、未足者、竊附己意、記其大概、庶幾本朝學者、慎之行之、則遵我邦之神法乎、夫上古質朴之昔、自有喪葬之事、況於只今文物之時乎、何假外國之法、棄我考妣乎、學者不可其不思焉、

凡人臨死、則告急親戚友、

次加新衣裳、

次聽遺言、

男子不死婦人之手、婦人不死男子之手、戒內外、子弟親戚或前或後、謹看護之、

旣沒而哭泣悲哀、

次易常服、著藤衣、不爲諸樂事、

凡子弟親族各有服限、見服忌部、按本朝稱喪服、謂藤衣、藤原朝臣道信歌、

加幾里阿禮波今日奴岐須天津布慈古呂母波天奈岐毛乃波那美多奈利氣利

能詠孝子終身慕親之意矣、

次設葬器、

比都器於保止古之類、圖見後、

次安置尸於比都器、於蓋以釘固之、

男女共不可剃髮、著淨衣、衣冠從官位、庶人著肩衣袴、大麻袋入供米與神幣及祓串一本、共入之、書中臣祓、貼比都器之內、或折本而入之、先整定靈座於比都器、而後以於保止古、覆之謂須太隣、

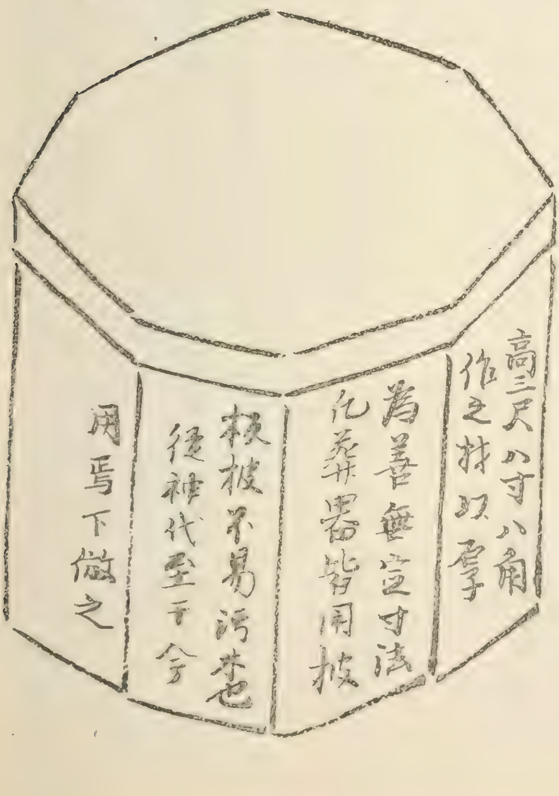
次殯于堂三日、或一日、

掲幾奴加佐於堂之中央、比都器向此、比都器前設案、案上置香爐與賢木瓶、其前設圓座、主人以下常上香灑水、凡朝夕供酒食如生時、

次相葬地、
古者有山葬、有野葬、有島葬、忌火葬及水葬、或曰、
神代所謂奥津棄戸、以死人投棄于水中之義也、蓋島葬之誤也、
次葬地既定、鑿靈坑、
靈坑貴深、淺者五尺、或八尺、深一丈二尺、或一丈五尺、疊之以石也、
次靈居之地、方九尺、建墓串張注連、掩帷幕、—制五段無物見、乳凡六十四、四方各十六、
次東西南北建四門、各四神之額アリ、
東門書阿奈太鬼神、南書阿奈御氣津神、西書阿奈太田神、北書阿奈底立神、以注連
施四門、門柱各附四手及榊枝、
次葬之、
須太陸向南収之於寶坑、而前設机有靈供、毛利毛乃、志登幾、香爐、榊葉、敷圓座、
次喪主上圓座、燒香拜法如常、
次拍手二、
次三種祓百返、
次祝詞、（本文二七四頁ニ出ス入榊葉ヨニツヽク）

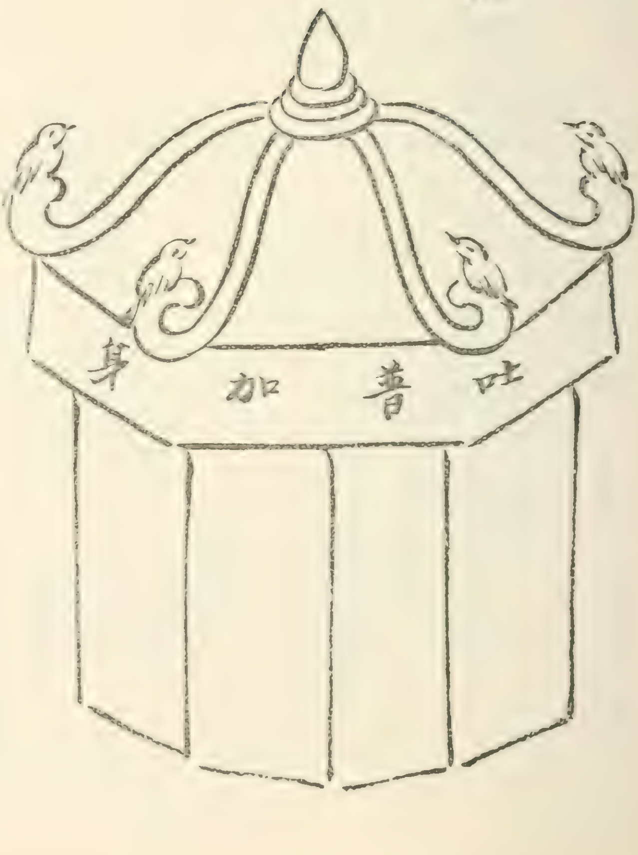
垣內地方壹丈、或一丈五尺、後若建社則掘其榊植社前、
凡葬器供物、隨家之有無、凡有司者皆著白張或袴肩衣、

比都器之圖
比都器棺字也



於保止古図

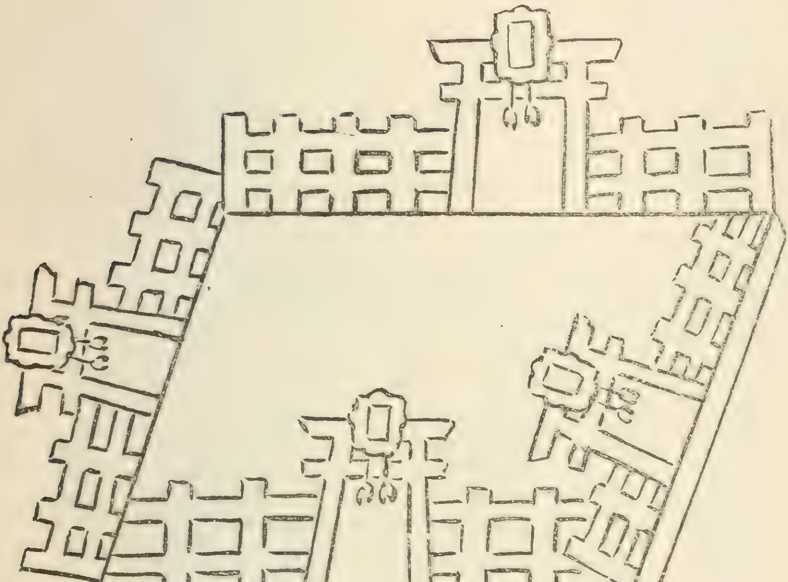
覆棺器也



稱此器者、上設寶珠形、八角有八蕨手、其端有八尺眞、各着幡、八幡書吐普加身依美女多各一字、或華幡或王幡亦用之、

[illegible]

戴北都器臺圖

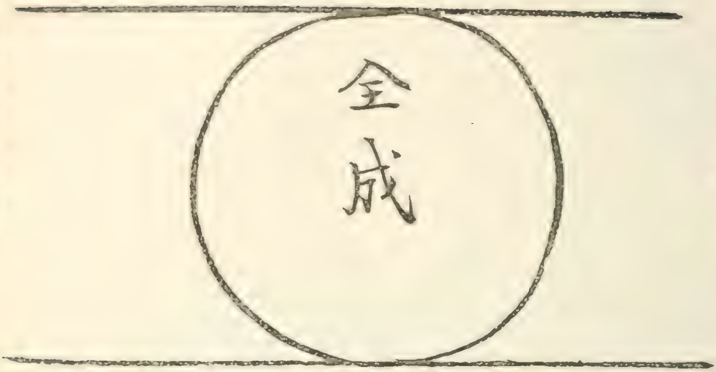


四方有鳥居、餘垪（居下同ジ）垣也、四鳥垪着五十鈴、前後各十二、左右各十三、四鳥垪有額、前額書阿奈元氣神、其姓各靈社神號、後額書人元人妙神力機

左額書天元天妙神變機

右額書地元地妙神通機

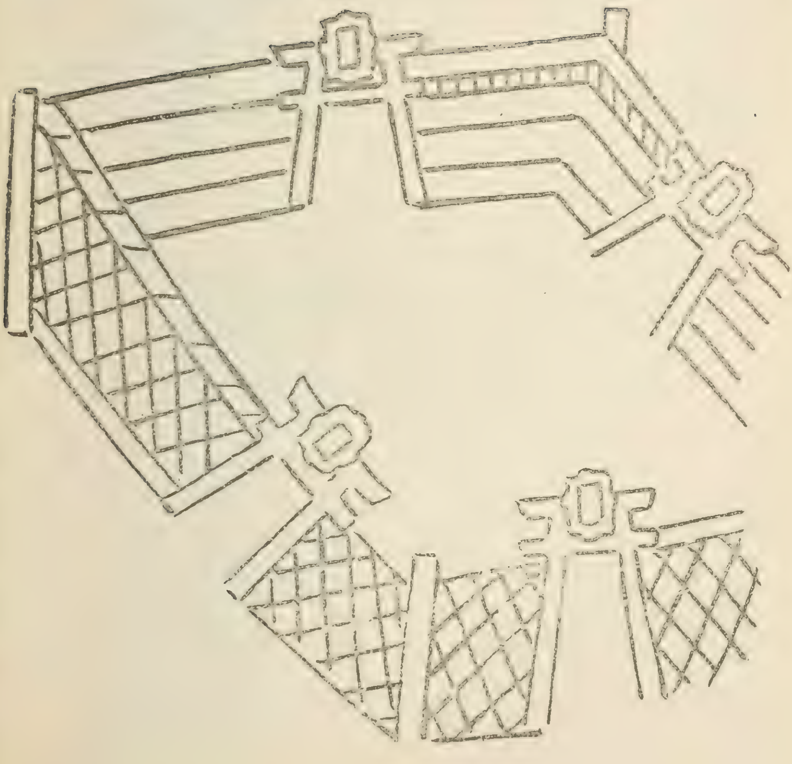
須太陪既成圖



盤定尸於比都器、而後以於保士古覆之、謂之須太陪

左右着美須奈、出須太陪、前者長五尺餘、結兩端、嫡子掛之兩肩(喪主預之、)出後者、親戚左右持之、

灵坑張幕建門圖

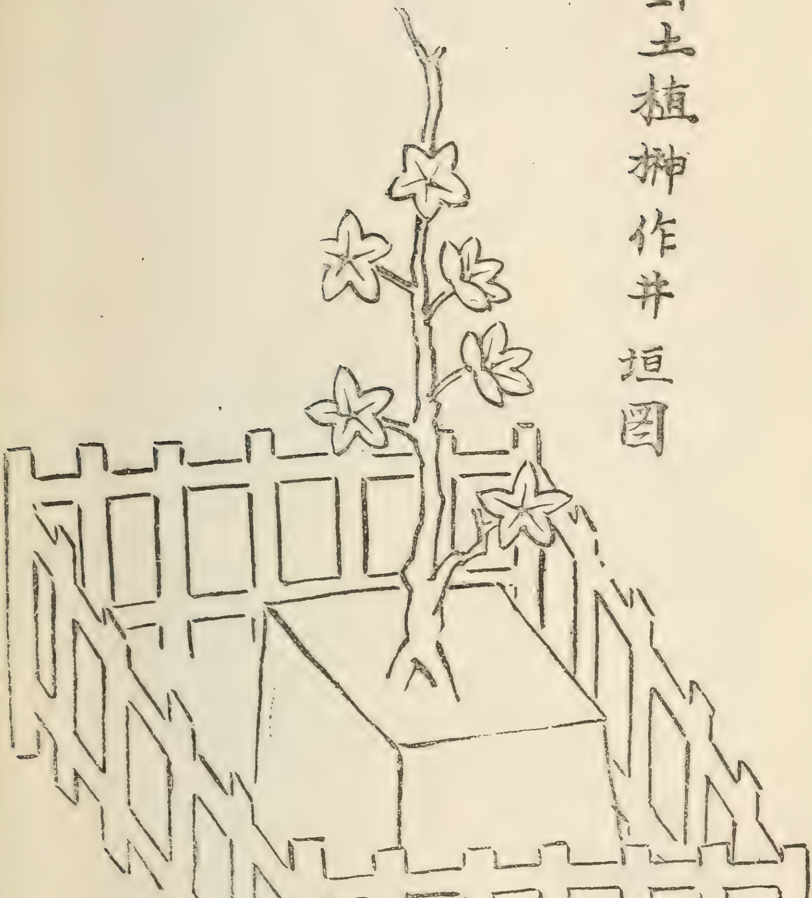


錢奴加佐圖



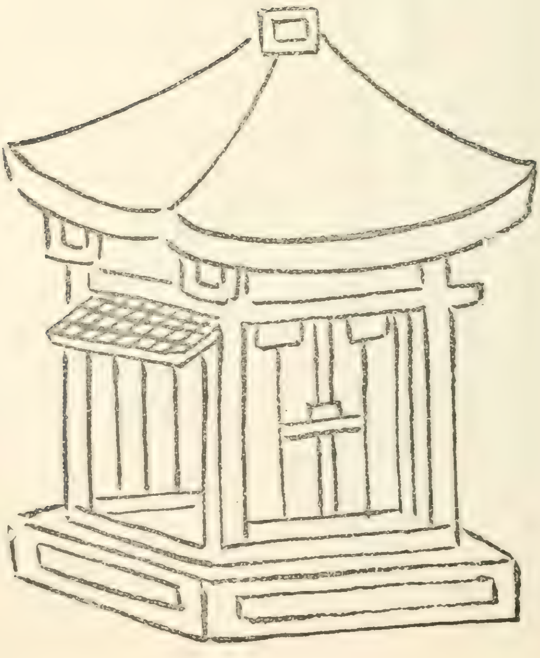
左八角作之、上設寶珠形、八角有八蕨手、
蕨手各有鐸、或瓔珞、下以絹擁之、中央有
大幡、書曰天津祝詞乃大祝詞乃事於以
天尊申乎至乎給倍

封土植榊作并垣圖



凡神廟有保古良有社有宮
有齋場所圖

保古良圖



次執入榊葉器、起至宅坑之前、而散之於寶坑之中、而行鎭座機、

此間子弟親族交代燒香灌酒、

灑水散米、拜比都器拜法如常、

次東美津奈及須太陪、下之寶坑中、

次封土植榊、

次榊外作垣、或石、或木、或竹也、擁注連、

葬送祝詞

維年號何年次〇〇〇某月某日、掛毛衆（畏）岐某國某郡某邑某社祠官姓名階位醫藥無効、生命既終、新兆域乎卜相志、越某日干支殯葬須、夫伊弉冊尊波、紀伊國有馬村仁奉葬（ヲサメマツル）留、天稚彥死世留造喪屋殯葬須、不委浮屠之手、不投于茶毘坑、有奧津棄戶之葬具、皆神世之遺法多利、人波天地灵物仁天、忝毛天御中主乃分身奈禮波、神明常仁我心胸仁留坐須、此身波則神明舍奈利、天地生氣循環復元須、萬物同根死生無差、國常立之同體奈禮波、依七情之不和、邪障忽生須、一心淸淨波、歸于高天原、苟毛有汚穢、遺念魍魅止成天、山澤仁惑布、縱比荒魂波上天志、和魂波歸泉止毛、尚灵魂乎介久安介久、此兆域仁泉津平坂志賜天、永久子孫乃祭祀乎受天、擁護賜陪止、天津祝詞乃大諄辭於以

天、導中須、請至賜暇、格賜暇、

庚午六月五日差上候書札

私儀當村鎮守八坂神社別當新義眞言宗吉祥院無住ニ御座候、今般
王政御一新ニ付而は、奉拜掌(承)復飾可仕僧體無御座差支候處、私儀往古ゟ御本社鍵
永年預り置、並ニ享保度正一位御勸爵之御綸旨頂戴、引續祭主同様之身分ニ御座
候ニ付、右八坂神社神主ニ轉身、願之通御聞濟被成下、難有仕合ニ奉存候、未熟ニて
御座候得とも、奉願度奉存候、依之御許狀頂戴相成候様仕度、此段奉願上候、已上、

當御支配所

明治三庚午年六月　　北條村新町

鎮守八坂神社

神主　市村　一學

社寺

御役所

前書神主市村一學奉願上候通、相違無御座候、奥印仕奉差上候、尤右之段民政西御

役所えも御屆奉申上候、以上、

右村

名主　仙右衞門

清右衞門

仁左衞門

右之通前文相認、西役處相屆申上候、

前書之通、社寺御役所に奉願上候ニ付、此段以寫御屆奉申上候、已上、

名主　仁左衞門

同　清右衞門

同　仙右衞門

民政

西御役所

七月二日披見、

自今僧侶官位住職等其外共、總而

御禮獻上物

杉原十帖一臺

右之通御定相成候事、

庚午六月　　太政官

右之通被仰出候間、寺方不洩樣通達可有候、以上、

庚午七月四日　　社寺役所

覺

一神武天皇御祭典之儀、海內一同遵行被仰出候條、毎年三月十一日、各地官ニ於而遙拜式可執行事、

但、當年は本日間會も無之ニ付、御沙汰到達次第、吉日を撰可執行、尤遙拜式頂細之義は、神祇官より可相達事、

辛未三月　　太政官

神武天皇御祭典海內一同遵行被仰出候ニ付、遙拜式左之通相心得可申事、

辛未三月　　神祇官

遙拜式

淸淨地ヲ撰、大和之方ニ向ひ、新薦ヲ敷キ、高机一脚ヲ置キ、机上御玉串ヲ安ス可ク、
玉串ハ榊小枝ニ白紙ノ四垂ヲ付、
拜辭、
掛麻久毛畏支
神武天皇御前乎遙爾拜美奉留、
右畢御玉串ヲ燒却スベシ、
今般別紙之通被仰出候條、得其意、郷村氏神社内ニおゐて、神職村役人、幷百姓代ニ而、來ル廿五日遙拜可執行事、尤右御祭典ニ付、小前末々至ル迄、不敬之儀無之樣、屹度取扱可致もの也、

辛未三月十八日　　若森縣廳

茨城縣下に於ける廢寺復舊

〔太政類典〕第二編第二百六十八卷第四類　教法十九 寺院二

三月廿四日　〔九年〕（朱書）

茨城縣下廢寺復舊ヲ允ス

教部省伺

茨城縣下眞宗林光寺外六ケ寺々號廢絶ノ儀、昨八年二月中、同縣ヨリ伺出、卽聞届置候處、今般右七ケ寺共、從前ノ寺號ニ復シ、立寺致度旨、夫々願書相添伺出、猶同宗管長ヨリ副願ノ趣モ有之、逐一及調査候處、孰レモ百餘年累世相續ノ者ニテ、殊ニ今後永續ノ目的モ有之、情願ノ旨趣無餘儀相聞候條、可聞届存候、依テ書類相添、此段相伺候也、二月廿九日　教部

追テ、清心寺々號廢止ノ儀、昨八年五月地方官ヨリ伺出取調中ニ候處、本文御指令次第、是亦可及指揮ト存候、此段添テ上申候也、

〔朱書〕伺ノ趣聞届候事、三月廿四日」

茨城縣伺　教部省定

當縣管下茨城郡酒門村廢寺善重寺々中

眞宗　林光寺　光圓寺

那珂郡磯濱村廢寺淨光寺々中

眞宗　光泉寺　專照寺

正徳寺　常教寺
専光寺　清心寺

右ハ於舊水戸藩、本寺相廢、寺中ノ僧ハ何等ノ沙汰無之、舊縣ヨリ引送帳簿ニ右寺號記載無之處、分方不都合ニ付、取扱方昨八年二月四日付ヲ以テ相伺、同月九日付御指令ノ旨ヲ以テ、寺號廢止相達候處、寺號復立ノ儀、別冊ノ通出願有之ニ付、篤ト取調候處、於舊水戸藩、善重寺、淨光寺相廢、境内地ハ士族等ヘ拂下相成、其後寺中ノ僧侶夫々讓受、堂宇相設、滅罪執行致居候趣ノ處、一寺一院ノ儀ニ無之ニ付、舊縣ヨリ引送リ帳簿ニ寺號相洩、不都合ニハ候ヘ共、前書林光寺等、從前ノ寺號ヲ以テ、僧侶私有税地ヘ立寺聞屆可然哉、且清心寺儀ハ、昨八年五月中、廢寺ノ儀相伺置、于今御指令無之候處、前文同樣ノ儀ニ有之候間、立寺相濟候樣致度、此段相伺候也、一月十日　教部

元林光寺住職權訓導西城大成願　茨城縣宛

本年二月十五日、寺號廢（此脱カ）ノ儀、御達ニ相成、奉恐承候、然ル處我等寺院ノ儀ハ、寛文年中當地ニ御引地ニ相成候以來、當住職マテ十一世ノ間、永續仕候事ニ御座候、乍恐寺境内ノ儀ハ、當時持主西城大成ヨリ上納差出シ可申、且又堂宇ノ儀ハ、檀中一同丹誠ヲ以テ修覆萬端永續仕候間、何卒從前ノ通リ、復寺被仰付被下置候樣、只管奉懇願候也、

八年十二月九日許可

第一大區四小ノ區茨城郡藩門村三十二番屋敷　元林光寺住職權訓導　西城大成

檀家總代　曾我伊八　同　大谷壯藏

總代檀家　増子總吉　同　渡邊吉衛門

副戶長　谷中忠衛門　戶長　江幡虎

區長　後藤重正

元光圓寺住職教導職試補藤敎令願　茨城縣宛

本年二月十五日、寺號廢止ノ御達ニ相成、奉恐承候、然ル處我等寺院ノ儀、寬文六年當地ニ引地ニ相成候以來、當年迄十三世ノ間、住職永續仕來リ候事ニ御座候、乍恐寺境內ノ儀ハ、當時持主藤敎令ヨリ上納差出シ可申、且又堂宇ハ檀中一同ノ丹誠ヲ以修覆萬端永續仕候間、何卒從前ノ通リ、復寺被仰付被下置候樣、只管奉懇願候也、八年十二月九日願

第一大區四ノ小區茨城郡藩門村三十二番屋敷　眞宗元光圓寺住職教導職試補　藤　敎令

右寺檀中總代　大森五三郎　同　佐藤富五郎

同　鈴木富三　同　早川吉衛門

右副戸長　谷中忠衞門　戸長　江幡虎
區長　後藤重正

元光泉寺住職藤皆遵願茨城縣宛

本年二月十八日、寺號廢止ノ儀御達ニ相成、奉恐縮候、我々寺院ノ儀ハ、元祿九年ニ舘山へ引寺ニ相成候以來、當年迄十一世ノ間住職永續仕來候事ニ御座候、就テハ寺院内ノ儀ハ、當今私有地ニ御座候ヘハ、我々ヨリ上納可申、且又堂宇ハ檀中一統懇志ヲ以、萬端修覆永續仕候間、何卒從前ノ通復寺被仰付被下置候樣、偏ニ奉懇願候、以上、八年十二月十一日教部

（檀家數十名ヨリノ願ハ省ク）

那珂第二大區一小區湊村　元光泉寺（住職脫カ）　藤皆遵
右副戸長　住谷厚　戸長　福地平
區長　板橋常裕

元專照寺住職櫻井般亮願茨城縣宛

本年去ル二月十八日、寺號御廢止ノ儀御達ヲ蒙リ奉恐入候、然ル處私寺院ノ儀ハ、元祿九年中當地ニ引寺ニ相成、其時玄淸ト申住僧ヨリ、當年マテ百八十年九代住職相

續仕來候事ニ御座候、乍恐寺院内ノ儀ハ持主ノ私シヨリ上納方（ロカ）仕候、且ツ堂宇修覆ノ儀ハ、檀中一統ノ丹誠ヲ以テ、萬端永續仕候間、何卒從前ノ通リ復寺被仰付被下置候樣、一向奉懇願候、以上、八年十二月欵部

檀家數十名ヨリノ聯ハ省之

那珂郡第二大區一小區湊村 元專照寺住職 櫻井般亮

右副戸長 川上啓助 戸長 福地平

區長 板橋常裕

元正德寺住職梅原宗淵願 茨城縣宛

本年二月十八日、寺號廢止ノ御沙汰ニ付、恐縮仕候、元正德寺ノ儀ハ、元祿九年館山ヘ引寺ニ相成候テヨリ已來、開山迄十二世ノ間、連綿相續仕來候事ニ御座候、宅地ノ儀ハ當今私有地ニ相成ヘハ、地券上税可仕、且又堂舍ハ檀中一同ノ懇志ヲ以テ再建修覆等仕候間、何卒從前ノ通復寺被仰付度奉懇願候也、八年十二月十二日欵書

檀家ヨリノ聯ハ省之

第二大區一小區那珂郡湊村七百七十番地 梅原宗淵

右副戸長 川上啓助 戸長 福地平

區長　板橋常裕

元常敎寺住職藤本惠鱗願 茨城縣宛

本年去ル二月十八日、寺號御廢止ノ儀、御達ヲ蒙リ奉恐縮候、然處我等寺院ノ儀ハ、元祿九年中當地ニ引寺ニ相成、其時敎山ト申住僧ヨリ已來、當年迄百八十年、九代住職相續仕來候事ニ御座候、乍恐寺院内ノ儀ハ、持主ノ私シヨリ上納方可仕候、且ツ堂宇修覆ノ儀ハ、檀家一統ノ一紙一錢ノ丹誠ヲ以テ萬端永續仕候間、何卒從前ノ通復寺被仰付被下置候樣、一向奉懇願候、以上、八年十二月十一日敎部

檀家數十名ヨリ
縣ハ省之

那珂郡第二大區一小區
湊村七百六十七番地
眞宗元常敎寺住職　藤本惠鱗

右副戸長　住谷厚
戸長　福地平

區長　板橋常裕

元專光寺住職檜山潤量願 茨城縣宛

本年二月十八日、寺號廢止ノ御達ヲ蒙リ、奉恐縮候、拙僧寺跡ノ儀ハ、去ル明治六年寺院御調ノ節詳細書上仕置候通リ、元祿九年舘山ヘ引寺ニ相成候以來、本年迄九世ノ間住職永續仕來候處、當寺院内ノ儀ハ私有地ニ候ヘハ、假堂宇有之候ヘ𪜈、稅納ハ持

主ノ我々ヨリ可仕儀、且ツ堂宇ノ儀ハ、檀中一統ノ懇志ヲ以テ修覆永續可仕候間、何卒從前ノ通復寺被仰付被下置候樣、偏ニ奉懇願候、以上、八年十二月教部

檀家ヨリノ願ハ省之

茨城縣第二大區一小區湊村七百六十九番地 元專光寺住職 檜山潤量

右副戶長 川上啓助 戶長 福地平

區長 板橋常裕

眞宗四派管長代理權中敎正木邊賢慈願 敎部省宛

茨城縣下該宗末寺元淨光寺々中光泉寺外五ケ寺、並元善重寺々中林光寺外一ケ寺、復舊開寺ノ儀ニ付、該縣ヘ掛合方、昨八年五月中相伺候處、同年八月中御指令相成候ニ付、該縣ヘ及掛合候ヘ共、何等ノ回答無之、依テ同年十一月中尚又及掛合置候處、今以復寺ノ處分不相成候ニ付、追々本人共ヨリ苦情申出候條、至急復舊開寺相成、本人共歎願ノ次第貫徹候樣、何分ノ御沙汰相成度、此段相願候也、二月十日敎部省

眞宗四派管長代理錦織寺住職 權中敎正 木邊賢慈

内務省ヘ達

別紙敎部省伺茨城縣下寺院復舊ノ儀、朱書ノ通及指令候條、此旨爲心得相達候事、三

月廿四日教部

第二科議按 大史 歷査

別紙教部省伺茨城縣下寺院復舊ノ儀、右ハ數十年累世相續ノ者ニテ、今後永續ノ目的モ有之趣、孰レモ寺檀協議濟ノ儀ニ有之、且地所ニ於テモ別段支障筋モ不相見候ニ付、伺ノ通御聞届相成可然哉、左案取調此段相伺候也、三月十七日教部

十月二十日［十年］（朱書）

常陸國天台宗元安穩寺再興

内務省例（伺カ）

茨城縣下天台宗元安穩寺ハ、境内大杉大神別當兼勤致居候處、明治二年住職獨斷ヲ以、復飾社務致度段、舊宮谷縣ヘ出願ニ及ヒ、於同縣聞届候ヨリ、遂ニ廢寺相成候趣、然處該寺ハ一百九拾有餘ノ檀家有之、殊ニ別當ハ兼勤ノ由ニ候ヘハ、復飾許可候トモ、社寺引分ケ兩立可爲致筋ニ候處、其儘廢寺處分ニ及ヒ候次第ニ付、再興ノ儀可聞届存候、依テ別紙書類相副、此段相伺候也、十月八日

（朱書）「伺之趣聞届候事、十月廿日」

茨城縣伺 内務省宛

常陸國河内郡阿波村天台宗元安穩寺ノ儀ハ、延暦十五丙子年宗祖傳教大師直弟快賢阿闍梨創立ニシテ、千有餘年ノ星霜ヲ經テ、尚連綿、殊ニ舊幕府ヨリ朱印貳拾石寄附有之候程ノ寺柄ニテ、歴世ノ住僧境内大杉大神別當兼勤致居候處、明治二年二月中、住職松永慈眞儀、神佛混淆ヲ停止セラレシヨリ、一己ノ存寄ヲ以、復飾社務致度段、舊宮谷縣ヘ願出候處、同縣（ニ脱カ）於テ聞屆、同四年三月中、同縣官員出張、社地境界相立、安穩寺自坊ヲ以テ、神官拜借邸地ニ相定候ヨリ、自然廢寺ノ姿ニ立至リ、檀中共一同驚歎候ヘ共、無餘儀葬祭等ハ同村同宗無量院ヘ致依賴置、寺名保存ノ儀願中、同縣被廢、新治縣ヘ引渡相成、尚取調中、同縣モ被廢、當縣ヘ書類引繼相成候ニ付、調査候處、舊新治縣（ニ脱カ）於テ、廢寺ノ顚末、舊宮谷縣官員取調順序、千葉縣ヘ照會セシニ、廢寺處分ノ儀、當時御規則モ無之ヨリ、其筋伺ヲ經ス、聞屆、尤諸帳簿燒失、且擔當ノ官員所在不相知、巨細ノ儀相分不申旨殘事務取扱ノ者申立書ヲ添タル回答書有之、追々檢覈候處、檀家百九拾戸餘モ有之候ニ付、縱ヒ當時ノ住僧復飾候迚、廢寺可致筋ニ無之、然ル處同寺再興ノ儀、元檀中共出京、同宗管長ヘ申立候趣ヲ以、管長權大敎正赤松光映ヨリ復立ノ儀取計有之度旨依賴申越、右大杉大神境外彌勒堂、

有之候壹畝拾六歩ノ地、幷地續勢至堂跡上地九畝六歩ノ地ハ、舊來安穩寺境內地ニモ有之候間、圖面朱引ノ通、更ニ境內ト相定、右彌勒堂ヲ本堂トシ、同寺再建仕度見込ヲ以、元檀中惣代村吏及本寺取締等奥書ヲ以願出、事實取調候處、申立ノ趣尤ノ次第ニ付、同寺再興願ノ通、御聞屆有之度、別冊願書粗繪圖相添、此段相伺候也、七月十日

檀方惣代平山長兵衛外七人願　茨城縣第〇區戶長奥印

第拾大區七小區
河內郡阿波村
天台宗
元安穩寺

右元跡ノ儀ハ、延暦十五丙子年、宗祖傳教大師直弟快賢阿闍梨創立ノ古跡ニテ、千有餘年連綿罷在、殊ニ舊幕府ヨリ朱印貳拾石寺領御寄附ニ相成居、本寺同郡小野村逢善寺末寺百餘ケ寺ノ觸頭ニ有之、檀家百九拾七戶程御座候處、大杉明神別當職兼務ニ付、明治二巳年中住職慈眞儀、本寺檀家等ヘモ一應ノ談合モ無之、一己ノ存意ヲ以、舊宮谷縣ヘ相願、社寺分際不仕、復飾致候ニ付、自然廢寺ノ姿ニ相成、檀中

一同驚歎仕リ、無餘儀葬式ノ儀ハ、同村無量院ヘ致依頼置、同縣ヘ分際寺名保存ノ儀相願居候中、舊新治縣ヘ御引渡ニ相成、雙方御呼出シノ上、御取調中、大杉明神合殿ニ有之候佛躰等、從前ノ彌勒堂ヘ遷座、御開扉ニ相成、安穩寺復古ノ儀ハ、其筋ヘ申達ノ上、御沙汰可被及旨被仰渡候折柄、亦候當御縣ヘ御引渡ニ相成、既ニ九ケ年來一同苦心懇願罷在、實以千有餘年ノ舊跡廢寺ニ相成候テハ、何分一同悲歎困却罷在、併舊坊復立ノ儀兼テ奉懇願置候ヘ共、神道事務所ニモ相成居、彼是不容易事ニ付、右願ハ更ニ斷念仕リ、今般改テ同所彌勒堂儀從來壹畝(拾脱カ)六歩ハ堂敷地ニ相成居候ニ付、致本堂ト、右堂續ノ勢至堂跡上地九畝六歩兩地トモ舊來同寺境內ノ儀ニモ御座候間、別紙繪圖面朱引ノ通、再建境內地ト更ニ御定被成下度、何卒格別ノ以御仁恤、寺號復立ノ儀御許容被成下置候樣、舊檀中百九拾七戸總代連印ヲ以懇願ノ事實、深ク御憐察被成下置、立寺被仰付度、只(帝カ)願奉歎願候、以上、四月六日

請書ノ通元安穩寺檀中一統復立懇願ノ趣事實取調候處、相違無御座候間、拙寺共ニ於テモ、此段奉願上候、

權中講義小野寺良顯外一人連署添書

本局議案

別紙內務省伺、茨城縣下河內郡阿波村元天台宗安穩寺再興ノ儀ハ、事情無餘儀次第ニ付、本年七月福島縣下舊天台宗八幡寺再興ノ儀御許允ノ例ニ據リ、左ノ通御指令可相成哉、相伺候也、十月八日

延暦寺舊に仍り日吉社を管せんことを請ふ

〔復古記〕三十六

明治元年二月十六日

延暦寺ノ僧徒書ヲ上リ、舊ニ仍リ、日吉社ノ社事ヲ管センコトヲ請フ、

延暦寺大衆等誠惶誠恐謹言

諸特蒙

天恩

日吉山王大權現社頭事、依準先例、被

勅許延暦寺大衆等之狀、

右謹按舊貫、五(吾)山

日吉山王大權現、初自從(衍カ)麓鎮座以來、年月久矣、其社元龜年間悉罹兵燹、皆爲烏有、

其後山衆相謀、戮力(脫アラン)思千辛萬苦、遂又復舊觀、且依舊仍幹社事、然則山衆之於　權

現、感應相關、其幹社事也、所由來遠矣久矣、必非適再興以來也、由此觀之、　權現靈

懷慈悲加祐、在欲令山衆幹社事歟、神慮冷鑑可貴可仰、不然豈其永年之後、到今猶尙依然如此哉、至如其鎭座靈告、山上擁護利生應驗、救世神靈等事、滿筆記溢口傳、不爲不多、伏願

皇朝儀發天聽、少垂神聽、憐山衆懷（々脱カ）之微誠、降詔、山衆之於　權現、令如來永年、則

天恩高深、厚幸之至、爲奉報之、於　權現社前、玉體安穩寶祚長久天下泰平四海靜謐之御祈禱、愈益抽丹誠、凝精勤、不堪懇款之至、誠惶誠恐謹言、

慶應四年二月　　延暦寺大衆等上

延暦寺記

日吉祭に山門の關係を絕つ

〔復古記〕六十

明治元年四月十三日

○延暦寺ノ僧徒ニ諭シテ、日吉神社ノ祭事ニ關ルコト勿ラシム、

山門へ

來ル十八日　日吉祭ニ付、是迄山門ヨリ伺、萬端仕來リ候得共、今般御一新之上ハ、更ニ於一社祭式執行候間、此段爲心得相達候事、

四月十三日　　辨事局記

近江膳所藩知事神葬祭の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

四年二月十日

膳所藩知事本多康穰、神葬祭ニ改ム、

本多膳所藩知事願　辨官宛

私始家族一同神葬祭相用申度、此段奉願候、以上、

（朱書）「願ノ通、四年二月十日」

神祇官意見　辨官宛

膳所藩知事神葬祭願御聞屆相成可然存候、依テ本紙相添此段申進候也、四年二月五日附

近江膳所藩合寺の件

〔太政類典〕第一編第百三十四卷　教法　寺院三

四年七月

膳所藩管内江州矢橋村大善寺ヲ西方寺ヘ合併、

膳所藩伺辨官宛

當藩管下江州栗太郡矢橋村大善寺義、京都府貫屬士族御陵衞士矢島(橋)子之太郎先代起立ニ御座候處、今般大津縣管下同郡蜂屋村西方寺ヘ合併致度旨願出候ニ付、本寺知恩院幷法類寺檀共取調候處、故障無御座候間、聞屆申度、依テ別冊相添、此段奉伺候、以上、藩

(朱書)「伺ノ通」

御屆口上書

共御藩御管轄所栗太郡矢橋村大善寺儀、先祖以來起立仕置候處、今般蜂屋村西方寺ヘ合寺ノ儀、本山知恩院ヘ申入候處、聞濟ニ相成候間、右ノ段御屆申上候、以上、

京都府下士族

辛未四月五日　御陵衛士

矢橋子之太郎

膳所

御藩

當御藩管轄所矢橋村大善寺儀ハ、矢橋子之太郎先祖起立被致置候處、今般拙寺へ

合併ノ儀被頼候ニ付、本山知恩院へ伺候處、聞濟ニ相成候間、當御藩ニヲヒテモ御

許容ニ相成候樣御取成被仰上可被下候樣、奉願存候、以上、

大津縣管轄所

粟太郡蜂屋村

西方寺

辛未四月十四日

膳所藩

寺院御取締中

矢橋村無住大善寺門徒

松田孫左衛門

松田宇之助

松田半右衛門
松田徳太郎
都子清兵衛
松田甚助

此度大善寺儀蜂屋村西方寺ヘ合併願出候ニ付、右檀中ノモノ遠方不都合御座候故、拙寺檀中ヘ加入ノ儀申出候、何卒此段御聞濟被成下候ヘハ、難有仕合奉存候、以上、

矢橋村
正高寺印
取締
敬願寺印

辛未四月十五日

膳所藩
御傳達所

矢橋村無住大善寺門徒
草川九平治

此度大善寺儀、蜂屋村西方寺ヨリ合併願出候ニ付、右檀中ノ者、遠方不都合ニ御座候故、拙寺檀中ニ加入ノ儀申出候、何卒此段御聞濟被成下候ヘハ、難有仕合ニ奉存候、以上、

矢橋村
清淨寺

辛未四月十五日

取締
敬願寺

膳所藩
御傳達所

矢橋村大善寺儀、此度蜂屋村西方寺ヨリ合併願出候ニ付、檀中ノ者、別冊ノ通、兩寺ヘ檀中加入ノ儀申出候、此段奉御伺候、以上、

取締
敬願寺

辛未四月廿二日

膳所藩
御傳達所

乍恐奉願口上書

一矢橋村大善寺無住ニ付、此度蜂屋村西方寺ヘ合併ニ相成候處、檀中ノ者共、遠方ノ事故、萬事不都合御座候間、同村西高寺(正)檀中ニ加入相成候樣、何卒御聞濟被成下候ヘハ、一統難有仕合奉存候、此段偏ニ奉願上候、以上、

栗太郡矢橋村

辛未四月

松田孫左衛門印

松田宇之助印

松田半右衛門印

松田德太郎印

都子淸兵衛印

松田甚助印

寺院

御取締中樣

乍恐奉願口上書

一矢橋村大善寺無住ニ付、蜂屋村西方寺ヘ合併ニ相成候處、遠路故、不都合ニ御座

候間、同村淸淨寺ニ因緣モ御座候ニ付、淸淨寺檀中ニ加入被成下候樣御願奉申上候、何卒此段御聞濟被成下候ハヽ難有仕合奉存候、以上、

矢橋村東出町

明治四辛未四月十三日　　草川九平治印

寺院

御取締中樣

其御藩下江州栗太郡矢橋村當山末大善寺儀ハ、京都府貫屬士族御陵衞士矢橋子之太郞先代起立置候處、當時從前ノ通差迯・米ノ目的無之候間、同州同郡蜂屋村西方寺儀、舊來由緖モ有之候ニ付、同寺ヘ合併致シ、外檀家七軒ノ者ハ、同村同宗淸淨寺並正高寺ヘ付屬致度段、夫々願出候ニ付、御取調相成候處、故障ノ儀無之、已ニ子之太郞ヨリ當山ヘ申出、承知ノ儀ニ候ヘ共、爲念御掛合御紙面ノ趣致承知候、依テ御報如斯御座候、以上、

知恩院役者

辛未五月三日　　福田寺印

膳所御藩

社寺御役人中

民部省意見辨官宛

別紙膳所藩部内大善寺合併ノ儀ニ付伺出候條件取調候處、夫々示談行屆、更ニ將來ノ事故モ不相見候間、伺ノ通御聞屆相成可然ト存候、依之本書返進此段申進候也、四年七月

近江朝日山藩知事菩提寺廢寺神社に改むる件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　敎法　葬儀僧尼

四年四月

水野朝日山藩知事菩提所ヲ神社ニ改メ、神道祭施行、

水野朝日山知事伺辨官宛

壬生藩支配地

下總國結城郡

山川新宿村

曹洞宗

萬松寺

住職　仙齡

當年五十三歲

右ハ先祖以來、累代菩提所ニ御座候處、古來境內ニ鎭守稻荷有之間、兼テ御布令ノ通、神佛混淆御廢止ニ付、今般菩提寺ヲ廢シ、當寺開基先祖忠元儀、文政年中吉田家執奏ヲ以、恐レ多クモ豐烈靈神ノ號下賜、其以來年々祭祀ヲモ仕來候儀ニ付、本社ニ仕、前書稻荷ヲ合祭、其餘神道祭ニ仕度奉存候、就テハ當住職儀、復籠(飾下同ジ)致シ、神主ニ相轉シ、神職勤仕爲仕度奉存候、尤壬生藩管內ニモ御座候間、及掛合候所、故障モ無之旨申聞候、此段奉願候、以上、四年正月九日藩

民部省意見辨官宛

別紙朝日山藩知事ヨリ伺出候趣、取調候處、萬福(松下同ジ)寺ノ儀ハ、同藩知事累代ノ菩提所ニシテ、幸ヒ再其(マヽ)致シ候、祖先忠元儀、文政年間、吉田家ヨリ執奏ヲ以、豐烈靈神ノ號ヲモ下賜候儀ニ付、此度萬福寺住持復職申付、神葬式ニ相復シ度旨、申立ノ條件、篤

ト勘考致シ候處、開基ノ菩提處、末法類ニ於テ事故無之上ハ、廢寺ノ儀可然候ヘ共、豐烈靈神ヲ本社ニナシ、境内ニ在來ノ稻荷社ヲ合祀致シ候等ノ儀ハ、何分當省限リ取調兼候間、一應神祇官ヘ書面御下ケ相成、豐烈神號ヲ以テ、祭祀ノ儀等差支筋無之候ハヽ、廢寺ノ儀モ、併セテ御聞屆相成候樣致度、依之別紙返進、此段申進候也、

四年正月二十三日

神祇官意見辨官宛

朝日山藩菩提所萬福寺、神社ニ相改度願、々ノ通御聞屆相成可然儀ト存候、依之別紙二通相添、此段申進候、

右書面ハ過日土方中辨ヨリ、門脇神祇大祐ヘ被相渡候儀ニ候間、此段爲御心得、申進置候也、四年正月二十七日

水野朝日山知事願辨官宛

壬生藩支配地

下總國結城郡

山川新宿村

曹洞宗

萬松寺
住職　仙齡　當年五十三歲

右者先祖以來、累代菩提所ニ御座候處、古來境内ニ鎭守稻荷社有之間、兼テ御布令ノ通、神佛混淆御廢止ニ付、今般開基先祖忠元儀、文政年中吉田家執奏ヲ以テ、恐多モ豐烈靈神ノ號下賜、其以來、年々祭祀ヲモ仕來候儀ニ付、本社ニ仕、前書稻荷ヲ合祭、其餘神道祭ニ仕度奉存候、就テハ當住職儀復飾致シ、神主ニ相轉シ、神職勤仕爲仕、尤同寺開基以來、住持ノ墳墓モ有之事故、右墓所ニ界境ヲ相立、内佛寺ニ致シ、寺號而已殘置度奉存候、壬生藩管内ニモ御座候間、及掛合、本寺龍隱（穩カ）寺幷法類檀家迄相糺候ヘ共、故障モ無之旨申聞候、此段奉願候、以上、四年三月十三日

（朱書）「願之通被聞屆候事、」

神祇官意見辨官宛

朝日山藩菩提所萬福寺神社ニ相改願、右ハ去ル正月廿七日、別紙ノ通見込相付、申進候事ニ候、依テ本書相添、此段尚又申進候也、四年四月二日

苗木藩神葬祭并氏子改の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

三年

遠山苗木藩知事、神葬祭ニ改ム、附士族卒以下神葬祭願出ニ付、氏子改ノ法ヲ設ク、

遠山苗木藩知事願辨官宛

私始家族一同神葬祭相用申度、此段奉願候、以上、三年七月二十五日藩

（朱書）「願ノ通」

苗木藩願辨官宛

神葬祭ノ儀、士族卒并庶人ニ至迄、追々願出候者不少候ニ付、支配所中、氏子改ノ法相設、庶人ノ儀ハ毎村本居社神職并名主組頭等ヘ取締申付、聊不都合ノ筋無之樣可仕候間、御聞濟被成下度奉願候、以上、三年八月七日藩

（朱書）「願ノ通」

三年十二月

苗木藩管内神葬祭處分ニ付、東本願寺歎願

中御門大納言願留守官傳達所宛

別紙之通、勸修寺家執（次殿カ）東本願寺ヨリ願出候ニ付、差出候間、此段宜奉願上候、以上、

三年十二月　寺院

東本願寺願中御門大納言宛

於濃州苗木藩、先達テ以來、管轄中神葬祭可致樣被申渡候ニ付、當寺末寺門徒共、彼是相歎候段申出候ニ付、同藩ヘ右歎ノ趣ヲ以、使僧差出候處、取（合）敢無之、猶又此頃知事殿巡村有之、佛檀佛具等二箇所燒拂被申候由、末寺門徒共又々歎出、兼テ別紙御沙汰之儀申聞置候御趣意ニ相觸候段、相歎候ニ付、何卒於苗木藩、右破佛等ノ處置無之樣、被　仰渡成下度、奉願上候、此段宜御奏達奉願上候、以上、十二月（京）別紙ノ内通ハ元年

九月神佛混淆云々ノ布告ナリ省ク

慶應四年戊辰六月御沙汰

東本願寺

先般神祇官御再興、神佛判然之御處分被爲在候者、專孝敬ヲ在天　祖宗ニ盡サセ

ラルヽ爲メニテ、今更宗門ヲ褒貶セラルヽニモアラス、然ルニ賊徒訛言ヲ以、朝廷排佛毀釋コレツトムナト申觸シ、下民ヲ煽惑動搖セシムル由、素ヨリ彼等斯好生至仁億兆一視之叡慮ヲ奉戴セサルノミナラス、則宗門之法敵トモ謂ツヘシ、依テ教旨說諭、便宜ヲ以テ民心安堵、方今(向カ)相定、作業等相勵可申樣、門末教育可致旨御沙汰候事、

門末ヨリ差出候書面寫、

奉歎願候口上覺

一先達テ以來、法中總代河野稱名寺、等覺寺上京仕、且書面ヲ以テ、追々御注進申上候濃州苗木藩神葬一條、既ニ管下一般同樣相願候樣、御布告ニ相成、則拙寺門徒惣數二百軒餘有之、就中鹽見村一村御門徒ニテ御座候、然ル處、同行共右神道自葬祭之儀、先祖代々無之儀ニ候得ハ、飽マテ御受仕兼候段相歎候趣ニ候得共、何分役場ニオキテ、種々手强ク御利解有之、迚モ難行屆勢ヒニ付、拙寺へ右之次第申歎出、共々相願呉候樣相歎候ニ付、兎ヤ角心配仕罷在候內、右藩廳役人衆出張被致、今度神道自葬之儀ハ、是非共御受可仕旨、嚴重ニ被申渡、直樣御受書差上候樣、嚴シク被申付候ニ付、同行一同、決テ入服ハ不仕候得共、何分權威ニ恐レ、無據、別紙之通リ受書

差出シ候由ニテ、實以テ其後ハ何レモ晝夜悲歎苦心仕居候、且亦拙寺ヘハ、使者ヲ以テ別紙之通リ、御達有之候間、別紙之通リ御答申置、迚モ私一分ニテハ不行屆、且不容易之大事件ニ付、直樣法中一同傳談（示カ）仕、何分御使僧御差向ケ被下、藩ヘ御懸合之儀奉願候處、則御差下ニ相成、中津川宿西生寺ニ御止宿ニテ、右苗木藩ヘ使僧御勤、日限御懸合ニ相成候處、同藩返答ニハ、神道自葬祭一件ニ付テハ、應接之筋一切無之旨ニテ、城門悉閉、幾度引合候共、右之返答ヨリ外無之、一切取合ヒ無之候ニ付無詮方、何レモ御引取ニ相成候、依テハ此儘御差置被下候テハ、鹽見村門徒始メ、夫々悲歎仕、何分御本山ヘ御縋リ申ヨリ外無之旨、追々申立相歎候、然ル處、又候去ル閏十月苗木藩知事公、村々廻村有之、廿日鹽見村庄屋宅ニテ一泊有之、同夜後見拓植謙八郎被召出、其方過日神葬御受仕申上、今以佛檀（壇下同ジ）等其儘差置候條、言語同斷之次第、如何心得候哉ト被申候ニ付、謙八郎答ニ、實ハ佛檀儀ハ私伯父七拾餘歲ニ相成、元來佛法執心ニテ、今更廢佛仕候儀、日夜相歎キ、色々ニ申諭候得共、中々入服不仕、依之無據等閑ニ差置候段申上候處、知事公大音ニテ吃（叱）リ付、右佛檀明朝庭前ヘ持參可致旨被申聞、且亦同所組頭市藏病氣ニ付、伜爲八被呼出、其方佛檀モ、明朝持參候樣ト被申聞、無餘儀翌廿一日兩家佛檀共、庭先ヘ引出シ、勿體ナクモ御本尊ヲ

始メ、御脇懸ト都合六幅、庭前泥上ニテ、一々土足ニ掛ケ、火中ヘ投込ミ、尙夫ヨリ佛檀ヘ火ヲ掛ケ、終ニ燒拂被申候、則知事公始役々之面々、階上ニテ都テ差圖見分イタシ被居候、誠ニ可申上樣モ無之、理不盡之振舞、言語ニ絶候次第ニ御座候、則其節組頭市藏妻哭泣難堪、狂亂之如クニ相成、御本尊ト共ニ燒死セント、火邊ニ立寄候得共、右ニテハ知事公ヘ有恐ト、居合候者共抱止メ申候由ニ御座候、尙其他外村方一般之儀ハ、閏月中ニ佛檀等取片付候旨被申付、萬一不相用者有之候ハヽ、役人差向速ニ爲燒拂可申トノ沙汰之由ニ御座候、前件之次第ニ付、追々人心動搖仕候間、此上ハ如何樣之儀出來可申哉モ難計候間、何卒早行御處置之程、伏テ奉再願候、此段宜敷御取成御申上可被下候、以上、

庚午十一月

濃州加茂郡
久田見村
法誓寺
靈　徹

久田見法誓寺ヘ通達　苗木藩

今般　朝廷ヘ伺濟之上、知事始藩內一同神葬祭相改申候、其寺檀方之者モ、管下ニ有之候ニ付、此由申入候也、九月十日

久田見法誓寺受書　苗木藩宛

先達テ態々御使者ヲ以テ御申越之次第、爲御受早速參廳可仕之處、折節風邪ニテ引籠罷在、依之遲々ニ及ヒ候段、御斷申上候、猶御申越之趣、早速本山へ相伺、沙汰有之候ハヽ、早々御返答可申上候、先ハ御使者御受迄如斯御座候、以上、九月

後見里正鎌（謙カ）八郎外九名受書（マヽ）郡市役所宛

今般郷中一統自葬相改可申候樣、被　仰付奉畏候、依之御受書奉差上候、右自葬之儀ハ、急度相守可申候、然ル處平田大人之書物、本願寺坊主ニテ明辨仕候ハヽ、歸宗被　仰付候樣、乍恐御含被下置候樣奉願上候、以上、九月

組頭　市　藏

重右衛門　政右衛門　藤右衛門

勇　助　五平治　仙　藏

半　十　覺　十

苗木藩の廢寺

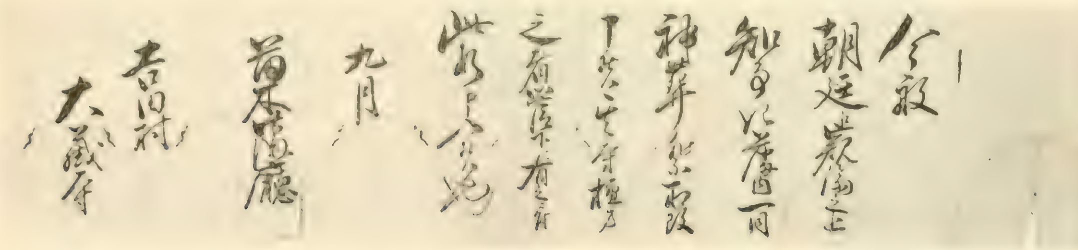
〔太政類典〕第一編第百三十四卷　教法　寺院三

三年九月廿七日

苗木藩神葬祭施行ニ付寺院ヲ廢ス、

苗木藩届辨官宛

苗木　雲林寺
同所　佛好寺
黑川村　正法寺
坂下村　長昌寺
福岡村



片岡寺

姫栗村

長増寺

蛭川村

寶林寺

切井村

龍氣寺

神土村

常樂寺

飯地村

洞泉寺

赤河村

昌壽寺

高山村

岩松寺

河合村
龍現寺
犬地村
積善寺
中野方村
心觀寺

通計十五ヶ寺

右今般知事始支配地一同神葬罷成候ニ付、廢寺歸俗申付、活計爲相營申候、此段御屆申上候、以上、三年九月二十七日藩

苗木藩屆辨官宛

先般寺院詳細取調可申上旨、御沙汰御座候處、當藩儀ハ昨庚午秋御屆申上候通、廢寺歸俗申付、双方差碍無御座、方今全ク廢絶仕候間、此段御屆申上候、以上、四年正月十三日藩

苗木藩雲林寺一派廢寺一覽

岐阜縣武儀郡上之保村明光寺住職
森牧　間氏報

惠那郡苗木藩管轄苗木村

一妙心寺派　天龍山　雲林寺

當住　剛　宗

同　上

一雲林寺塔頭　正岳院

當住　祚　田

同　上　坂下村

一雲林寺末　萬龍山　長昌寺

當住　宥　道

同　福岡村

一同　景福山　片岡寺
　當住　太嶺
同　姫栗村
一同　雲岳山　長增寺
　當住　珉州
同　蛭川村
一同　金剛山　寶林寺
　當住　義宣
同　高山村
一同　高嶽山　岩松寺
　當住　士彥
同　中ノ方村
一同　中方山　心觀寺
　當住　玄懿
同　河合村

一同　北松山　龍現寺
當住　祖哲

加茂郡切井村
一同　大雲山　龍氣寺
當住　宗義

同　神土村
一同　安泰山　常樂寺
當住　自董

同　大澤村
一同　青松山　蟠龍寺
當住　禪理

同　赤河村
一同　天桂山　昌壽寺
當住　義孝

同　飯地村

一同　洞泉寺
當住　亘　兊
右拾四ヶ寺　明治三庚午年九月藩政ニ依テ廢毀ス、
以上ノ外、恵那郡下野村法界寺、加茂郡佐見村吉田大藏寺等二ヶ寺、雲林寺末ナレ共、笠松縣管轄ノ故ヲ以テ廢寺ヲ免ル、

苗木藩虛無僧處分

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　敎法　葬儀僧尼

四年
苗木藩虛無僧處分法
苗木藩伺辨官宛
舊來虛無僧ト相稱シ、諸國ヲ行脚致シ、往々邊鄙ノ民屋ニ立入、强談暴動ニ及候事件モ有之哉ニ付、既ニ五六年前ヨリ、右本山普臺寺ヘ取締方申遣シ、毎年若干金差贈候事候得共、先般管內一同釋敎全廢絕致候ニ付テハ、爾後普化僧取締方ノ儀、本

山へ相斷申度、但管内通行次宿ノ儀ハ、異論無御座候得共、當管轄中ニ於テ、僧尼へ布施等差出候者有之間敷ト存候、就テハ右虚無僧萬一不法ノ所業有之候得ハ、召捕律ニ照準所置可仕ト存候條、此段豫テ御屆申上置候、以上、四年三月十二日 藩

（朱書）「申出ノ通」

松本藩神葬墓地分與の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷

四年正月

松本藩神葬墓地ヲ定メ士族卒ヘ分與ス

松本藩伺辨官宛

先般神葬祭蒙御許容候後、藩士族卒改典願出候者多分有之候ニ付、今般藩廳ヲ距ル乾ノ方半里餘、築（筑）摩郡蟻ケ崎村地內放光寺山ノ內鳥居山段別壹町五段廿壹歩餘、幷添山段別壹町八段三畝拾七歩餘、從來荊蕀芥蕪荒廢ノ地ヲ以、墳墓ノ地ニ相定メ、士族卒ヘ分配致置候、依之圖面相添此段御屆申上候、以上、四年正月十七日藩〇圖面欠

（朱書）「書面ノ趣伺ノ上可取計筋ニ有之候得共、此度限リ被聞屆候、以後ハ可伺出事、」

信州戶隱山社中願書

〔神社諸願伺屆〕〇內閣文庫所藏

八月二日

乍恐口上書を以奉申上候

一今般

王政復古被

仰出候ニ付、中古以來某權現与稱、佛像を以致神躰与、或者佛像を以社前ニ掛ケ、或者鰐口梵鐘佛具等之類差置候儀、取除可申、且ッ諸國大小之神社共、於僧形、別當或ハ社僧与相稱候輩、復餝可致、若可復儀無餘儀差支向等有之分者、鎮臺裁判支配等へ可申出之旨、被　仰達、謹而奉敬承候、右ニ付、當閏四月中、別當勤（勸）修院參府仕、御支配輪王寺御門主御方へ、社職進退之儀等相伺罷在候處、右伺中、東叡山表不量退轉之姿ニ罷成、誠以當惑至極仕合、元來戸隱山之儀者、守護不入之境界ニ而、外ニ附（付）囑之府藩も無之儀ニ付、支配添簡等之申請も無御座、直ニ奉申上候儀ハ甚奉恐入候得共、前件之仕合、無餘儀、直ニ當山社例之儀奉申上候、抑戸隱山ニ奉祟四所權現神社之儀者、奥院社祭神天手力雄命、中院社ニ祭神天思兼命、寶光院社ニ祭神天表春命、九頭龍王を以閣山之地主神与奉稱、奥院社之例ニ鎮座候儀ニ御座候、尤

朝廷式内ニ被爲　立候神社ニも無之候得共、白鳳年中役小角諸國靈場遍歷之節、戸

隱山に初而登嶺有之、其後人脚も相絶罷在候處、嘉祥三年開基學門行者、慕小角舊蹤を、岩窟を踏分、靈神之威應を祈り、苦修練行罷在候處、四所大權現之本躰を致感見、天神座進之爲靈山候、今依地主九頭龍權現之靈告、覺知有之、夫ゟ四所之社檀(壇)を創建し、年三ヶ度大祭幷朝暮之勤行日供獻備之式ニ至迄、惣而依九頭龍有之(マヽ)指揮、祭奠之式禮相立、開祖以來傳法相續罷在候儀、於今六十四代、時年一千有餘年ニ相成、佛像を以致神躰候儀ハ無之候得共、祭奠之式禮は都而山王一貫(實)之神道ニ而、稱大權現与候儀も、開祖學門最初ニ、四所之本躰を感見仕候而奉崇候儀より、四所之祭神を惣而奉稱權現候儀ニ御座候、且祭奠式禮等、專ら佛法を以勤行仕來候儀も、開祖學門依九頭龍王之靈告相定候儀ニ而、私ニ佛法を以祭式相立候儀ニハ無之、佛具類社前ニ差置候儀も、全右法要隨一之具而已相用來候儀ニ御座候、將又九頭龍王之儀は、他社祭神之儀共相違、古今巖窟生身現存候而、毎朝寅之刻日供獻備仕來候儀ニ而、右神窟出入之儀は、往古ゟ社僧壹人山籠(と號カ)稱し、三年交退(代)を以、精進潔齋ニ而相勤來、內陣出入之儀ハ、別當たり共差許不申、臨時見分等之儀は、是迄山籠已勤之社僧而已致出入、餘人は決而立入之儀相禁、尙窟內之樣子柄幷神變奇異等之儀有之候共、深他言を相禁候事ニ、而、萬一麁忽ニ他言仕候節ハ、忽神罰を蒙候儀故、深謹愼敬重罷在候、右日供加持等之

作法も、都而佛教祭奠之儀を相用、往古も別當社僧計ニ而、社司与申者も無之罷在候處、舊幕府より御朱印御教書被下置候砌、別當賢榮依立願、社司御取立ニ相成、夫より于今社家壹人家名相續罷在、年分祭禮之都度ニハ、神勤奉幣爲致、太々神樂獻奏之節、祭主ニ相立罷在候得共、神前朝暮之勤向等共、都而依往古之例格、社僧而已相勤來候儀ニ御座候、今般別當社僧不殘復飾被仰付、祭奠之式禮、惣而御變革被　仰渡候ニ付而は、千有餘年開祖相承、九頭龍相傳之法儀も相絶、神慮之程も難計、恐怖仕候、且戸隱山奧院社境之儀、古來ゟ女人結界ニ而、中院寶光院之兩社境ハ、男女雜居仕候へ共、社境門前之間者往古より堅肉食相禁、社頭祭奠は勿論、門前百姓さり共、地内ニおゐて肉食仕候儀、決而不仕、萬一不心得ニ而相侵候者有之節は、現前ニ蒙神罸候もの不少、夫故一同深恐愼仕罷在候儀ニ御座候、今般舊獘(弊)

御一新被

仰渡候ニ付、社中一同謹愼奉敬承候儀、聊舊執申立候儀ニハ毛頭無御座候得共、當山社例之儀而已、不顧恐奉申上候、此段宜御指揮之程奉願上候、

信州

戸隱山

八月二日　一社中
辨事
御役所

八月二日
信州戸隱山復餝交名
別當
一勸修院改名　久山理安
衆徒
一玉泉院改名　楠川祐宜
一妙觀院改名　京極興元
一德善院改名　極意豪壽
一智照院改名　富岡亮眞
一覺照院改名　大杉盛寛
一正智院改名　仁王寛量

一松壽院改名　大西寛壽
一妙行院改名　大田亮寶
一行勝院改名　武井寛信
一普賢院改名　築山祐泰
一金輪院改名　今井興覺
一遍照院改名　宮本祐昭
一常樂院改名　西條忠良
一善法院改名　山本泰信
一十輪院改名　横倉寛齋
一安樂院改名　清水亮意
一寶泉院改名　中谷宜寛
一攝善院改名　高山寛孝
一淨智院改名　福岡泰正
一福壽院改名　武井台輔
一法敎院改名　小谷祐定

一成就院改名　成瀬興信
一延命院改名　諏訪政幸
一實道院改名　落合豪實
一常泉院改名　常田寛明
一教釋院改名　岸本周靖
一妙智院改名　松井晃寛
一安住院改名　安藤寛海
一觀法院改名　蒲原良祥
一妙光院改名　武田寛周
一壽教院改名　辻　義宣
一眞乘院改名　奥田良仲
一東泉院改名　藤井教寛
一廣善院改名　越志台明
一佛性院改　渡邊
一寶藏院改　宮澤

以上

辰八月

八月二日

此度

王政復古舊徹(弊)御一新祭政一致之御制度ニ御廻(回)復被爲遊、第一

神祇官御再興、追々祭奠被爲興候儀ニ付而ハ、諸國大小之神社共、於僧形、別當或者

社僧抔と相稱候輩、復飾可致、若可復儀不相成者ハ、速ニ退去可致旨、被

仰出、社中一同恐愼奉敬承候、依之戸隱山之儀者、別紙口上書を以奉申上候通、舊來

之社例、山王一實之神道ニ相違無御座候得共、今般

王政御一新之御制令被

仰渡、深奉遵奉、別當勸修院幷一山之衆徒三十六ヶ院、別紙交名書之通一同復飾仕、

改名御届奉申上候間、此段偏ニ御濟(聞脱カ)被成下置、何卒是迄之通、社中一同社務相續相

成候様、被仰付被下置候ハヽ、難有仕合奉存候、以上、

信州戸隱山

別當勸修院
改名　久山　理安（花押）
同山衆徒惣代
行勝院
改名　武井　寛信（花押）
常樂院
改名　西條　忠良（花押）
善法院
改名　山本　泰信（花押）

慶應四戊辰年八月二日

辨事
御役所

（指令）
八ノ十日
復飾改名之儀被聞屆候間、社頭並神勤順席等之儀、是迄之通、一社中一同遂熟談、神祇勉勵可仕事、

乍恐條書を以奉願上候

一中古以來、某權現或者牛頭天王之類、其外佛語を以神號ニ相稱候神社由緒委細ニ書附可申立旨、被　仰渡奉敬承候、戸隱四社權現號儀者、先般社例書を以奉申上候處、九頭龍權現之儀者、九頭龍大神与可稱旨被　仰渡、難有奉敬承候、右ニ付、三所權現之儀も、以來奥院社は天手力雄大神、中院社は天思兼大神、寶光院社者天表春大神与奉稱、且三所都而戸隱之神社と奉稱度、此段奉願上候、

（指令）八ノ二十日「承屆候事、」

一今般別當社僧御廢止ニ相成、一山一同復飾仕候ニ付、社職名稱之儀、何卒別當には大宮司神主之稱、社僧社家に者、右ニ准し、相應之稱號被　仰付被下置候樣奉願上候、

（指令）「御規則相立候上、追而可及沙汰事、」

一當山之儀者、社僧社家神領諸役ニ至迄、往古ゟ社職進退家督繼目等之儀、惣而別當一手ニおゐて支配仕來、社中一同治り方も宜御座候ニ付、何卒是迄之通、山中支配向萬端別當一手ニ被　仰付被下置度奉願上候、

（指令）「申出候通候者、一社一同連印を以可願出事、」

一此度復飾仕候ニ付、僧位僧官も返上仕候得共、何卒右相當之位官拜任被
（指令）「御規則相立候上、追而可及沙汰事、」
仰付被下度、尤別當寺格之儀者、是迄山門日光東叡山之三山ゟ轉任仕來、代々大僧
都院家地ニ有之、於本山而も、大僧都之上席ニ罷在、既ニ先代者乍贈官も、權僧正拜
任仕候例格も御座候得は、別當一家之儀者、三位之位階迄相進候樣奉願候、社家之
儀も、從來無官無位ニ御座候得共、社僧之儀者、是迄權大僧都法印ニ任進罷在候、今
般社僧一同復飾仕候ニ付、右位階ニ相準し、社僧社司同位等伴、依年齒之長幼、位階
昇進席順違亂無之樣、被
仰付被下置候樣奉願上候、
（指令）「難聞置候事、
　　但、社人并復飾之者、位階之儀は、御規則相立候上、寄共品沙汰ニ可及事、」
一戸隱山之儀者、是迄守護不入之地ニ而、府藩縣之咐(付)囑ニ不相預罷在候儀ニ御座候
得は、何卒是迄之通、山中支配守護不入ニ被
（指令）「御布告之通府藩縣之內、共所部ニ可相屬事、」
仰付被下置、一社都而之儀并別當社職進退繼目等之儀、　太政官神祇官等之御直

配ニ被仰付被下置候樣奉願上候、

（指令）「當官直支配之儀は難相叶候事、

但、續目之儀は、所屬之印鑑を以直ニ可願出事、」

一社領御朱印配當方之儀ニ付而者、是迄格段之不同ニ相成居候ニ付、御糺之上、相當之御配當被　仰付被下置候樣奉願上候、

（指令）「申出之趣尤ニ候、其所藩之向に申出、至當之分配可仕事、」

右之條々願之通被

仰付被下置候者、難有仕合奉存候、以上、

慶應四戊辰年八月十五日

信州戸隱山元別當

久山　保

理安（花押）

同社中惣代

武井　磨

寛信（花押）

西條　渡

忠良(花押)

山本主膳

泰信(花押)

辨事

御役所

宇都宮藩寺院廢合の件

〔太政類典〕第一編第百三十四巻　教法　寺院三

三年閏十月廿七日

宇都宮藩管内無住ノ寺院ヲ廢シ、又神葬祭ヲ允ス、但自葬祭ハ停止セシム、

宇都宮藩上申辨官宛

管内無住ノ寺々故障ノ筋モ無之候間、相廢シ申候、尤檀家有之分ハ、本寺合併又ハ神葬祭自葬等夫々任望取計申候、此段御届申上候、以上、三年閏十月廿二日

(朱書)神葬祭ノ儀ハ勿論ニ候得共、自葬ノ儀ハ不相成候事、

閏十月廿七日」

宇都宮藩上申辨官宛

今般御届ノ内、自葬ノ儀取調申上候様御達御座候處、右ハ神主出家ヲ不頼、自ラ安シ候所ヲ以、安シ候場ニ葬リ又祭候ヲ、土俗自葬祭ト唱候、此段申上候、以上、三年閏十月廿五日

宇都宮藩伺辨官宛

管內無住ノ寺々相廢シ候分、舊幕朱印地税取計方ハ、先達テ奉伺、御付紙ノ通、檢査ノ上、猶可奉伺候得共、廢寺ノ儀ハ過日御屆申上候通、御聞置相成候儀ニ御座候哉、爲念奉伺候、以上、（三年十一月十五日朱印地税取計方伺租税ニ載ス）

（朱書）「無住事故無之分廢寺被聞置候、寺號更ニ可屆出事、

十二月七日」

同上　同上

此度管內無住ノ寺々相廢シ候儀奉伺候處、一昨七日以御附紙、無住事故無之分廢寺被御聞置、寺號更ニ御屆可申上旨、被仰渡候處、右ハ無住ノ寺院廢シ候儀、本寺ニ於テ故障無之ト申ハ、一般必定有御座間敷事ト奉存候間、岡藩外七藩別紙ノ通伺相濟候趣傳承仕候付、右之通本寺ヘ一應及斷置候迄ニテ、檀家事故無之分ハ、廢寺申付不苦儀ニ御座候哉、此段奉伺候、以上、三年十二月九日、

（朱書）「先般事故無之旨ヲ以テ、申出之趣、御聞屆相成候、全躰無祿無住破壞ノ寺院廢絕可致條理有之候得ハ、本寺組寺等故障可申立筋無之ニ付、篤ト說諭ノ上、故障無之上、可取計處、無其儀、威力ヲ以テ壓制候テハ、必他日ノ弊害ヲ可生事ニ付、今度御布告相成候通、更ニ可相心得事、十二月廿六日」

宇都宮縣無檀無住廢寺取調帳

〔社寺取調類纂〕四四六（宇都宮縣）　無檀無住廢寺取調帳

下野國

河內郡

下反町村

天台宗

圓光寺

川中子村

同

多門院

法性院

光西寺

持寶院

坂上村

天台宗

修善院

常照寺

谷地賀村

同　極樂寺

三村

同　地藏院

上三川村

同　眞光院

延命院

尊勝院

觀行院

法性院

常光寺

自性院

地藏院

上蒲生村

天台宗

寶藏院

小里村

同

安養寺

三軒在家村

同

仁王寺

栗代村

天台宗

西福寺
大網村
同
光明寺
佐下部村
同
持福院
芳賀郡
太田村
天台宗
松泉院
久遠院
道樹坊
谷田貝村
天台宗

大教院
上江連村
同
眞光院
鷲巣村
同
福性院
吉山村
同
藥王院
延命寺
慶藏院
境村
同
妙光院

砂ヶ原村
天台宗
吉祥寺
柳林村
同
清水寺
長田村
同
福性寺
粕田村
同
寶性院
下大沼村
同
普門院

上大沼村
天台宗
觀音寺
中村
同
一乘院
神宮寺
藥王寺
寺内村
同
千妙院
上大曾村
同
威德院
程嶋村

同　寶藏寺

長嶋村
天台宗　教王院

石嶋村
同　醫王寺

鹿村
同　天龍寺
如來寺

東沼村
同　長命寺

觀音寺
東福寺
横田村
天台宗
泉福院
物井村
同
宗林寺
大聖院
桑野川村
同
三明院
大和田村
同
永藏寺

阿部品村

同　東善寺

水戸部村

天台宗　龍光院

前澤村

同　重宗寺

山本村

同　興學寺

島村

同　金蓮寺

眞岡村

同

法光院

花光院

寶藏院

成德院

持法院

大教院

中鄕村

天台宗

實性院

下太田和村

同

觀行院

西鄕村

同
長福寺
勝泉院
上鷺谷村
同
大慈寺
龜山村
天台宗
泉藏院
堀內村
同
多門寺
下籠谷村
同
藥王寺

上籠谷村
同
吉祥寺
圓通寺
氷室村
同
妙音寺
西水沼村
天台宗
空藏寺
板戸村
同
德正寺
吉祥寺
野高谷村

同
壽福寺
刈沼村
同
藥王寺
下高根澤村
同
寶壽院
延命院
至心坊
正光寺
東水沼村
天台宗
東壽寺
東福寺

（朱書）
「廃寺取ケシ」

下延生村
同
×城真寺
東高橋村
天台宗
福業寺
南泉寺
生田目村
同
正岳寺
小貫村
天台宗
安楽院
円萬寺
槻木村

同　城國寺

宗音坊

林村

同　眞藏院

小井戸村

同　光明院

山内村

天台宗　吉祥寺

鹽田村

同　延命院

鹽谷郡
東泉村
天台宗
覺城院
那須郡
小原澤村
天台宗
不動院
明光院
大木須村
天台宗
寶藏院
谷田村
同
藥師寺

須賀川村
同　觀音寺
藥利村
同　藥王院
鷹巣村
同　淨樂寺
薄葉村
天台宗
淨覺院
奥澤村
同　寶積寺

堀内村
同　善光院
野上村
同　文珠（殊カ）院
芦野宿
同　彌勒院
河内郡
鶴田村
眞言宗
秀明院
針ヶ谷村
同

一乘院
羽牛田村
同　醫王院
雀宮宿
同　金乘院
茂原村
同　敎王院
鞘堂新田
眞言宗　地藏院
下反町村
同

普門院
御田長島村
同
觀音院
多功村
同
金乘院
藥師寺村
同
般若院
安養院
福生院
本吉田村
眞言宗
光明寺

三王山村
同　圓明寺
本吉田村
同　寶德院
上蒲生村
同　福生院
西蓼沼村
同　醫王院
東蓼沼村
眞言宗
成寶院

眞福院

下平出村

同　普門寺

上川又村

同　廣藏寺

上荒針村

同　泉龍院

定光院

古賀志村

同　弘藏院

花藏院

西善寺
飯田村
眞言宗
寶藏院
蜜（密）藏院
福岡村
同
福持院
田野村
同
華藏院
駒生村
同
寶藏院
上徳次郎宿

眞言宗

安養院　南荒針村　同

蓮乘院　東新里村　同

金照院　西新里村　同

持福院

寶持院　下猪倉村　同

慈照寺

上金井村
眞言宗
西光院
上田原村
同
明音寺
上臺新田
同
眞照寺
下ヶ橋村
同
狼膳寺
東芦沼村
同
來迎寺

中里村
眞言宗
神照寺

冬室村
同
寶藏寺

上横倉村
同
延命寺

上石那田村
同
普門院

嘉多藏村
同
地藏院

鹽野寶村
同　寶照寺
小林村
眞言宗
延萬寺
木和田嶋村
同　照明寺
上小池村
同　龍光寺
山口村
同　光照寺

根室村
同
醫王院
薄井澤村
眞言宗
寶光院
矢ノ口村
同
延命寺
芳賀郡
高岡村
眞言宗
花光院
君島村
同

千手院

青谷村

眞言宗

密教院

根本村

同

藥王院

神宮寺

竹下村

同

行德寺

下高根澤村

同

高田寺

刈沼新田

同
薬師院
与能村
眞言宗
本光寺
上根村
同
能滿寺
西光寺
赤羽村
同
宗珠院
醫王院
普賢院
塙村

同
法眼寺
生田目村
同
寶藏院
小山村
眞言宗
神宮寺
大澤村
同
神宮寺
市塙村
同
文殊院
眞藏院

藤縄村
同
醫王院
西福院
本覺院
空善坊
彌勒院

槻木村
眞言宗
持福院
不動院

天子村
同
千福院

笹原田村

同
成就院
高岡村
同
勸行院
三坂村
眞言宗
千福院
馬門村
同
照明院
小井戸村
同
光福院
神井村

同
西光院
馬門村
同
西光寺
川井村
同
西光寺
山内村
眞言宗
地福院
正德院
音膳坊
小深村
同

東城寺

飯野村　同

福性院

寶珠院

養福院

所草村　同

延命院

大瀨村　同

長壽院

九石村　同

眞如院

下菅又村
同　文殊院
坂井村
同　持明院
眞藏院
後郷村
眞言宗　養壽院
福正院
養福院
寶壽院
秀藏院
町田村

同
東光院

中根村
同
常福院
西福院
蓮藏院
地藏院

見上村
眞言宗
東福院

芳志戸村
同
寶藏院
稲光寺

上圓寺

大谷津村

同

德性寺

東光院

鹽谷郡

上高根澤村

眞言宗

正明院

寶性院

光明寺

定性寺

正觀寺

下柏崎村

眞言宗

万福寺

寶積寺村

同

福壽院

寶藏寺

平田村

同

眞正寺

中阿久津村

同

華藏寺

上阿久津村

眞言宗

東圓寺

飯室村

同
東善寺
狭間田新田
同
庭蓮寺
崇光寺
松嶋村
同
勝嵩寺
後岡村
同
安養寺
安澤村
真言宗
大乗寺

塚原村
同
正覺院
木幡村
同
長善院
土屋村
同
能滿寺
山田村
同
圓滿寺
東泉村
眞言宗
福壽院

玉生村

同　福智院

薬王寺

玉雲寺

大原村

同　千手院

那須郡

高瀬村

同　密嚴院

森田村

眞言宗

眞福院

小河原村
同　寶光院
岩子村
同　龍藏院
田野倉村
同　仙藏院
眞藏院
向田村
同　圓滿寺
圓壽院
下境村

眞言宗

寶持院

上境村

同

正徳寺

酒主村

同

寶光院

常福院

谷淺見村

同

寶性院

小木須村

同

泉福院

正學院

寶德院

橫枕村

眞言宗

勸明院

大木須村

同

長泉院

奥野村

同

善性院

寶泉院

上川井村

同

吉祥院

醫王寺
和田村
真言宗
宮星寺
白久村
同
明光院
大桶村
同
福壽院
東戸田村
同
花藏院
西光院
富田村

同　玉泉院

湯津上村　眞言宗　常福院

新宿村

同　城泉院

新善寺

恩田村

同　福性院

福原村

同　寶光院

佐久山宿
同　安樂寺
練貫村
眞言宗　福性院
阿久津村
同　秀藏院
堀內村
同　返照寺
吉祥院
見養院
須佐木村

同
泉福院
西福院
川上村
眞言宗
圓福寺
久野又村
同
普門院
兩鄕村
同
寶積寺
寺子村
同
延命院

芦野宿
同　花藏院
高林村
眞言宗　光明院
船澤村
同　法華院
河内郡
西芦沼村
淨土宗　淨蓮寺
中里村
同

龍　門　寺

今里寺
淨土宗
眞　諦　寺

原宿村
同
觀　音　寺

轟村
同
運　貞　寺

芳賀郡
大澤村
淨土宗
專　稱　寺

中村

同
事修院

深澤村
淨土宗
不性寺

鹽谷郡
小佐越村
淨土宗
道閑坊

湯本鹽原村
同
圓谷寺

河内郡
藥師寺村
禪宗

陽林寺

三軒在家村

禪宗

吉祥院

大圓院

東昌院

高松村

同

洞源寺

芳賀郡

眞岡村

禪宗

西來寺

鳥生田村

同

昌福寺

鹽谷郡

喜連川宿

禪宗

臨川寺

那須郡

堀内村

禪宗

地藏院

芳賀郡

大嶋村

眞宗

光明院

飯野村

同

淨蓮寺

正明院

芳賀郡

眞岡村

時宗

善德院

山本村

同

東光寺

那須郡

鍋掛宿

普化宗

淸嵓寺

總計三百三十四ケ寺

右之通候也、

明治六年

五月廿日

宇都宮縣令　鍋嶋　幹

宇都宮縣參事　藤川爲親

宇都宮縣七等出仕　柳川安尙（安尙印）

僧侶の復飾蓄髪について眞岡縣の伺

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

元年九月十八日

僧侶妄ニ復飾ヲ願、佛前ニテ蓄髪ヲ禁ス、

神佛混淆不致樣、先達テ御布令有之候ヘ共、破佛之御趣意ニハ決而無之處、僧分ニ於テ、妄ニ復飾之儀願出候者往々有之、不謂事ニ候、若モ他ノ技藝有之、國家ニ益スル儀ニテ、還俗致度事ニ候得ハ、其能御取調ノ上、御聞屆モ可有之候ヘ共、佛前ニテ蓄髪致シ候儀ハ不相成候間、心得違無之樣、御沙汰候事、誌

眞岡縣伺

御一新ニ付、當春以來追々神佛混淆之宿習御變革ニ付、支配所ニ於テモ、漸御趣意通及布告置候、然ル處九月中又々御布告之旨ヲ以テ、全破佛之御趣意ニテハ無之妄ニ復飾之願難被差免趣ニ候得ハ、是迄之通修驗ハ勿論別當社僧ニ候テモ、法衣着用神勤イタシ可然哉、左候得ハ右ニ准シ鰐口梵鐘佛器之類取除候場ニ至リ不申、然ル上ハ自然ト前件之御趣旨ニ相悖儀ト奉存候、就中當月柄ニ御座候得ハ、毎

村郊祭禮之式相營候ニ付、社寺ヨリ疑問沸騰ニ及ヒ、一々致差圖兼候事件而已有之候間、万一最初御布告之內、御潤色之儀モ御座候半ハ、廉々御附紙ヲ以御差圖被下度、別紙御布告書差添奉伺候、以上、元年十一月各縣

（朱書）「九月中妄ニ復飾難相成趣御布告有之候ハ、全神社ニ關係無之寺院之事ニテ、神社別當社僧修驗共外神事ニ相携候モノ復飾差止候御趣意ニテハ無之事、

共餘不殘御布告之通可相心得事、元年十二月廿三日」

福島縣下平民神葬願幷異宗門改の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

四年二月

福島縣下農商神葬祭願ヲ許シ、異宗門改方ハ、縣ニ於テ假規則ヲ設ケシム、

福島縣伺辨官宛

當管下、農商神葬祭願候者ハ聞屆不苦候哉、此段奉伺候、以上、四年二月十五日

（朱書）『伺之趣不苦候事、

但、本文ノ通被仰付候ニ付、異宗門改方ノ儀、追テ一定ノ御規則可被仰出候得共、夫マテノ處、於縣假規則相立、伺ノ上施行可致事、』

神祇官上申辨官宛

福島縣ヨリ、管下神葬祭伺、々ノ通聞屆可然、邪宗門改方ノ規則、當分權ニ相立置可申樣御達有之度、依之此段本紙相添申進候也、四年二月廿二日

福島縣下寺院再興

［太政類典］第二編第二百六十八巻第四類 教法十九 寺院二

七月二日［十年］（朱書）

福島縣管下舊眞言宗八幡寺再興ヲ允ス、

内務省伺

福島縣管下信夫郡上飯坂村眞言宗舊八幡寺ノ儀、従來同郡同村鎮（座）式外正八幡宮別當寺ニテ、檀家等モ有之候處、神佛區分ノ際、住僧復飾候ニ付、檀家ハ各自他寺ニ轉シ候ヘ共、該寺建物等ハ、猶舊檀家ノ者協力保存致シ來リ、明治八年中、全ク廢寺處分濟相成候處、今般舊檀家ノ者協議ノ上、該寺再興ノ儀、別紙ノ通願出候ニ付、篤ト遂調査候處、右ハ畢竟神佛區分ノ旨趣ニ因リ、廢寺相成候儀ニ付、其別當寺タルニ係リ候八幡寺號ヲ以テ、再興候儀ハ、難聞屆筋ニ候ヘ共、抑舊檀家百有餘名ノ協議ヲ以テ、永續見込モ相立願出、且地所建物共、廢寺ノ際拂下舊來ノ儘存在致シ居、他ニ故障筋等モ無之上ハ、事情無餘儀相聞候ニ付、寺院開設差許、寺號ハ別ニ撰定可申出旨、及指令可然哉、依之書類相添、此段相伺候也、（五月廿二日 内務）

（朱書）「伺之趣聞届候事、七月二日」

福島縣伺 内務省宛

管下信夫郡上飯坂村眞言宗舊八幡寺ノ儀ハ、過ル明治二己巳年中、當時ノ住職復飾致シ、檀家ハ各自他寺ニ轉シ、其後無住無檀ニシテ、廢寺再興ノ儀出願ニ付、取調候（處脱カ）舊檀（家下同ジ）下中手當等致シ來候故、今ニ至リ依然寺院ノ景況ヲ存シ、舊檀下人民ノ情願無餘儀次第相聞、且ツ向後維持ノ方法モ相立、故障筋無之候條、聞届不苦候哉、此段相伺候也、内務一月十五日

權少講義平林唯我願 福島縣宛

福島縣第一區岩代國信夫郡上飯坂村眞言宗元八幡寺、右ハ眞淨院元末寺ニ候處、明治八年中廢寺ニ相成、其後檀中一同歎敷心得居候ニ付、今般再興ノ儀別紙願書取調書類相副申出候、因テ事實不都合有無尋問候處、聊苦情等モ無之、願意難默止奉存候間、宜敷御詮議ノ上、願ノ通御採用被成度、右ノ段奉添願候也、九年十二月廿七日

安齋忠作外百四人願

第一區上飯坂村

元八幡寺

檀中

右私共一同依願（マ、下同ジ）仕候儀ハ、隣寺眞言宗元八幡寺住職宗順儀、復飾出願ノ儀相濟候上ハ、直ニ住職入寺無之候テハ、廢寺ノ御趣意ト相心得、去ル明治八亥年中ヨリ、廢寺御取調相成、不得止儀ト奉存候、其後檀中一同協議仕者、祖先來ノ佛事相弔候每、他宗ヘ依賴シ、加之墓所草蔓相成候迚、掃除向世話イタシ候者モ無之、月日ヲ經テ、草野ノ姿ニ形行歎敷奉存候、自今（目）相續致居候私共、祖先ヘ對シ不信ニ當リ、實ニ本意ヲ失ヒ候次第ニ付、何卒同寺再興、佛寺ノ儀、都テ從前同樣施行相成候樣仕度奉存候、當御院ハ元本寺ノ儀ニ付、前件依願申上候、右志願ノ通御採用相成候樣、幾重ニモ御執計被下度、一同擧テ依願仕候、以上、

明治九年十二月

檀頭

安齋忠作

外百四人略之

第一區福島町

眞淨院住職

平林唯我殿

戸長田邊軌外五名願福島縣宛

福島縣岩代國信夫郡福島町
西裏壹町目眞言宗新義派
眞淨院末福島縣岩代國
信夫郡上飯坂村
元八幡寺

右ハ私共元牌寺ニ候處、明治八年十月廢寺ニ相成、不得止儀ト奉存候、其後檀中一同協議仕候ハ、祖先來ノ佛寺(事)相弔候毎、他宗ヘ依賴シ、加之墓所草蔓ニ相成候迚、掃除向世話致候者モ無之、月日ヲ經テ草野ノ姿ニ形行歎敷奉存候、目今相續致シ居候私共、祖先ヘ對シ不信ニ當、實ニ本意ヲ失ヒ候次第ニ付、將后(マヽ)元八幡寺再興、佛事ハ勿論、都テ從來ニ倣、施行相成候樣仕度奉存候、就テハ別紙八幡滋三寄附ノ宅地及建物ヲ以テ本堂ト爲シ、又鈴木勘十郎外四名寄附田畑ニテ永續法(方法)方相立候、尤從前ノ通、眞淨院本寺トナシ、廢寺八幡寺再興ノ儀、元檀中佐藤傳右衛門外百四名熟議ノ上奉願上候間、何卒出格ノ御詮議ヲ以、右懇願ノ通、御採用被成下候ハヽ、檀

中一同難有仕合奉存候、以上

第一區岩代國信夫郡上飯坂村

元八幡寺

檀中總代

佐藤傳右衛門

安齋忠作

村總代 佐藤繁右衛門

什長 安藤長次郎（四カ）

用掛 堀江潔

右區戸長 田邊軌

明治九年十二月二十七日

福島縣參事山吉盛典殿

福島縣第一區岩代國信夫郡

上飯坂村ノ内

一宅地壹反壹畝歩

是ハ元八幡寺境内地明治八年十月廢寺相成、明治九年十二月十二日、八幡滋三郎拂受候貳反壹畝拾五歩ノ内、

一建物壹　東西六間　南北八間

是ハ元八幡寺本堂ニテ、明治八年十月廢寺ニ付、上飯坂村へ御下ニ相成、明治八年十月方(計脫カ)ヨリ八幡滋三へ讓受候建物壹宇、

一門　壹　東西貳間　南北三間

右同斷

右ハ今般元八幡寺檀中一同再興ノ志願ニ付、前顯宅地反別建物等親類熟談ノ上、寄附仕候、爲證如件、

明治九年十二月廿五日

岩代國信夫郡上飯坂村

寄附人　八幡滋三
親類總代　羽田與三郎
村總代　佐藤繁右衛門
同　安齋忠作
什長　安藤長四郎
用掛　堀江潔

證

福島縣第壹區岩代國信夫郡上飯坂村ノ內

一畑四畝三歩

一田六反五畝二拾壹歩

右ハ私共先祖元八幡寺ヘ寄附ノ田畑ニ候處、去ル明治八年中、同寺廢寺ニ付、右田畑官地ニ相成、明治九年十月寄附ノ縁故ヲ以、願ノ通私共ヘ御拂受候、元檀中一同再興志願ニ付、前顯田畑、爲一寺永續資本、今般更ニ寄附致シ候處聊相違無御座候、爲念一札差出申候也、

第壹區岩代國信夫郡

上飯坂村

明治九年十二月廿五日

寄附人 堀切良平

同斷 佐藤應助

同斷 安齋忠右衛門

同斷 佐藤要吉

同斷 鈴木勘十郎

壇中總代願人 佐藤繁右衛門

同斷 安齋忠作

什長　安藤長四郎
用掛　堀江潔

本局議案

別紙内務省伺福島縣眞言宗舊八幡寺再興ノ儀、右ハ事情無餘儀ニ付、左ノ通御指令相成可然哉、仰高裁候也、五月廿四日（指令欠）

一關藩人別改宗判廢止幷廢寺伺

〔太政類典〕第一編第百三十五卷 教法 葬儀僧尼

一關藩伺辨官宛

一從前人別檢正ノ節、諸寺院ノ宗判用ヒ來候處、御維新ニ付テハ、寛永ノ前度ニ傚ヒ、右押印御廢止相成、士庶分限ニ據リ、神儒佛ノ葬祭式ヲ取捨シ、何レニモ其好ニ任セ、歸依次第所置致シ可然哉、

但シ、諸宗判御廢止相成候テモ、全ク邪教等ニ信淫致ス儀ハ無御座候、

〔朱書〕「追テ御規則可被仰出候事、」

一從來無檀無住ノ寺院ハ、廢棄、佛體佛具等ハ隣寺ヘ取纏メ、墓所ヲ除ノ外ハ、農商ニ分與開拓致シ可然哉、

〔朱書〕「故障ノ儀無之候ハヽ、不苦候事、」

右ノ件々奉伺候、御付紙ヲ以御差圖被成（下脱カ）度奉願候、以上、三年二月二十八日藩

陸中江刺縣神葬祭に改むる者墳墓位牌等の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

四年七月五日

江刺縣神葬祭ニ改ムル者處分方

江刺縣伺辨官宛

一神葬祭ニ相改候者、是迄ノ墳墓寺内ニ有之、向後神祭イタシ候ニハ改葬無論ニ可有之、乍去貧民ニテ改葬難行屆分者、其儘寺地内ニ差置、石碑等相改候ハヽ、神祭ニ致シ不苦候哉、又ハ如故佛祭ヲ請、寺院へ相應ノ施物差遣可申哉、右祖先佛祭ヲ請候ハヽ、住宅中ニ神碑(牌下同ジ)佛碑混淆相成候儀、何程ニ可有之哉、尤寺外山野ニ有之墳墓ハ、其近傍ニ他人ノ佛葬墳墓有之候テモ、自分祖先改葬ニ不及、石碑相改候迄ニテ、神祭イタシ不苦候哉、右ノ段相心得罷在度、此段相伺候、以上、

(朱書)「神葬祭ニ雖相改候別段不及改葬神祭可致候、祖先佛祭ヲ受、住宅中佛牌有之向(マヽ)、神祭ニ相改候ハヽ、神牌ニ可相改候、且寺内外山野ニ有之候墳墓ハ、其儘差置石

碑相改度者ハ、可爲勝手候事、四年七月五日」

膽澤縣下社人幷庶民神葬祭願出の件

「太政類典」第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

四年

膽澤縣外二縣神葬祭願出ノ者處分

膽澤縣伺　辨官宛

當縣下ノ內、社人共並庶民ノ內、浮屠式ヲ廢止、神葬祭ニ改正仕度趣願出候者間々有之候處、願之通聞屆可然哉、此段奉伺候、以上、四年三月廿七日

（朱書）「伺ノ趣不苦候事、

但、本文ノ通被仰付候ニ付、異宗門改方ノ儀、追テ一定ノ御規則可被仰出候ヘ共、夫マテノ所於縣廳假規則相立、伺之上施行可致事、」

神祇官意見

右ハ異宗改假規則、縣ニ於テ相立候上、聞屆候樣御達有之度存候、依テ本書相添此

段申進候也、四年四月三日

盛岡藩自喪祭上申

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

　盛岡藩上申辨官宛

先達テ自喪祭ノ儀相伺候處、如何樣ノ祭式ニ候哉、巨細可申出旨奉畏候、早速支配所ヘ申越候處、右祭式ハ古川氏喪儀略ノ通、相行候旨申來候、此段申上候、以上、三年六月十七日　盛岡藩

願書欠

（朱書）「書面ノ通取行不苦候事、三年六月十九日」

弘前藩寺院廢合伺

〔太政類典〕第一編第百三十四卷　教法　寺院三

弘前藩伺

當藩諸寺院藩政改革ニ付、減祿申付候所、相續方相成兼、往々住居修覆等行屆不申、自然廢寺ニモ至可申向モ有之、右樣之分ハ、合宇ノ上、兼帶住職爲致候テ不苦儀ニ御座候哉、此段奉伺候、以上、四年正月廿二日藩

〔朱書〕伺之趣、寺院合併ノ儀、土地人民ノ適宜ニ出、寺檀納得ノ上願出候事情ニ運ヒ、本末法類於（ニ脱カ）テモ事故無之候ハヽ、本末寺號宗名等悉ク相認、更ニ可伺出候事、」

弘前藩神葬祭處分伺并神祇官意見

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

弘前藩伺弁官宛

當藩士族兼松三郎儀、自今神葬祭ノ家風ニ相改度儀申出候間、願ノ通申付候テ可

然哉、猶以後藩士並農商共右樣願出候ノ者有之節ハ、聞屆候テ不苦候哉、此段奉伺候、以上、四年三月十二日藩

（朱書）「伺之通不苦候事、四年四月七日

但、本文ノ通被仰付候ニ付、異宗門改方ノ儀、追テ一定ノ御規則被仰出候ヘ共、夫迄ノ所、於藩廳假規則相立、伺ノ上施行可致事」

神祇官意見辨官宛

弘前藩伺神葬祭ノ儀ハ、於同藩異教取調假規則相立候上、聞屆候樣御達有之度事ト存候、依テ本書相添此段申進候也、四年四月五日

山形縣の神社合併

〔社寺取調類纂〕四七八 山形縣 （受）明治六年 （課）考證

山形縣伺神社合併之件

神社合併ハ事情已ヲ得サルニ出ツ、故ニ小社ノ傾頽シテ奉仕スル者ナキカ、無氏子ニシテ參詣スル者ナキ類、祀典ヲ廢絶シテ、空ク星霜ヲ歷シ者、其原、私祭等ヨリ起リテ田圃ノ中ニ小祠ヲ存スル者等、或ハ他祀ニ合祀ス、式内ニ至テハ、傾頽及無氏子ノ社タリトモ、合祀ヲ許サス、假令其社廢シタルモ、尙其社地ニ注連ヲ延テ、舊蹟ヲ存スヘシ、或ハ外國史現在ノ舊社又然リ、山形縣ノ如キハ拾餘社ヲ廢シテ、一社ニ合スルアリ、或ハ一村一社ヲ置サルアリ、唯勉テ神社ヲ廢却スルニ似タリ、全ク敬神ノ御趣意徹底セサル者カ、方今布敎ノ秋ニ膺リ、其害神社ヲ廢スルヨリ甚ハナシ、故ニ暫神社合併御差止ニ相成、尙已ヲ得サルハ、合祀ノ始末精細書取ヲ以テ可伺出旨、御指令可然歟、

指令案

伺之趣難聞届候事、

但、事情已ヲ得サル社ハ、合祀ノ始末精細書取ヲ以テ可伺出事、

當縣管內神社取調之儀ニ付御屆旁伺書

當縣管內神社取調ノ儀ニ付、別紙寫ノ通相伺置候處、尙又左ニ、

神社明細帳　五冊

右ハ元山形縣所轄ノ分、旣ニ及進達置候得共、新置縣以來、合併相成候舊縣ノ所轄ノ分ハ、合併事務湊合、官員轉免等ニテ、一時ニ取纏行屆兼、進達漏ニ相成居候ニ付、今般更ニ取纏御屆申上候、

但、神町村慈恩寺村鎭守之儀、元山形縣所轄ノ分ニ候得共、御屆漏相成居候ニ付、別冊ニ作リ、今般併テ御屆申上候、

社名帳　四冊

右ハ別紙第一條ニ準據シ、今般御屆申上候舊縣々所轄ノ神社取調候分ニ付、兼テ伺濟之通、墨書之部ヲ以テ、一村鎭守トナシ、其佗朱書ノ部ハ、盡ク合祀セシメ候樣仕度奉存候、

鄕社取調帳　一冊

右ハ別紙第二條伺之通、各區各村鎭守ノ內ヨリ、最首タルモノ相撰候分ニ付、自今鄕

社ト相定候樣仕度奉存候、

廢社取調帳　一冊

右者別紙第一條伺濟之通廢社取(調脱カ)許可申分ニ付御屆申上候、

右之件々書類相添、御屆旁奉伺候、以上、

明治六年四月四日　山形縣權參事　薄井龍之

山形縣參事　關口隆吉

教部卿大木喬任殿

社名帳　本縣之部　山形縣

右寫畧、

社名帳　尾花澤出張所之部　同縣

右寫略、

社名帳

高島出張所之部

同　縣

右寫略、

社名帳

元天童縣所轄

同　縣

右寫略、

社名帳

元山上縣所轄

同　縣

右寫略、

社名帳

元松嶺縣所轄（同縣脱カ）

右寫略、

社名帳

元新莊縣所轄（同縣脱カ）

右寫略、

郷社取調帳　　　　同縣

右寫略、

廢社取調帳　　　　同縣

右寫略、

廢止之儀奉伺候社部

神佛檢査ノ上元來佛ナル部

一法流神社　　唱呼卽佛ナリ　　鮨洗村

一大々田神社　　不動　　關根村

一子安神社　觀音　藥澤村
一愛宕神社　地藏　山野邊村
一子安神社　觀音　南中野村
一二渡神社　同　石川村
一愛宕神社　地藏　同
一八坂神社　毘沙門　本楯村
一神明社　阿彌陀　北高楯村
一小森神社　觀音　島村
一八幡神社　阿彌陀　留場村
一金山神社　不動　水澤村
一愛宕神社　二社　地藏　同
一大日靈（孁下同ジ）尊神社　阿彌陀　吉川村
一國常立尊神社　妙見　同村
一藍婆神　卽佛ナリ　同
一高田神社　藥師　水澤村

一宮滿神社	不動	同
一明神社	地藏	同
一大日靈社	大日如來	同
一大年神社	藥師十二神	柳澤村
一愛宕神社	地藏	岩根澤村
一磐根神社	役小角	同
一櫻岡神社	觀音	同
一寶田神社	藥師	同
一雲江神社	觀音	石田村
一神明社	同	沼山村
一小山神社		入間村
一愛宕神社	三社地藏	同
一金山神社	不動	同
一羽黑神社	觀音	大町村
一大元尊	不動	荒町村

一日月社	日月燈明佛	野川村
一幸神社	地藏	沼澤村
一出戸神社	地藏	同
一七森神社	阿彌陀	同
一平野神社	藥師	同
一岩谷神社	地藏	同
一坂上神社	同	猪野澤村
一楯跡神社	聖(勢)至	同
一高岡神社	同	後澤村
一黒伏神社	地藏	同
一吉備神社		同
一義滿神社	觀音	同
一黒伏神社	同	觀音寺村
一苅田峰神社	藏王權現ニシテ役ノ小角開基ト云フ	半郷村
一松尾神社	觀音	同

一磯前神社	藥師	大浦村
一中吉太神	觀音	同
一月山神社	同	川前村
一愛宕神社	地藏	海谷村
一月山神社	觀音	澤堀村
一月山神社	同	丹生村
一岩谷神社	藥師	岩谷澤村
一月山神社	觀音	下柳渡戸村
一月山神社	同	上ノ畑村
一湯澤神社	藥師	湯野澤村
一生田太神	同	土生田村
一羽黑太神	觀音	大淀村
一荷渡太神	地藏	同
一鎭守神社	觀音	貝鹽村
一淡島太神	同	楯岡村

一荷渡太神　同　坂本村
一月讀神社　同　正嚴村
一琴毘羅神社　不動　關谷村
一八尺太神　藥師　尾花澤村
一地主神社　地藏　野黑澤村
一磯崎神社　藥師　名木澤村

社號杜撰附會等類

二渡神社（或荷渡、庭渡、ニ羽垂ト書リ、）
此社號何等ノ緣故ナルカ、地名ニ出ルニモ非ス、訝シ、ニワタリノ唱呼モ、兩端挾ムノ俗訓ニ近カレハ、社號ニ稱スル如何ナラン、所在ノ村里、

付紙
「必由緣アルヿナルベケレバ廢社スベカラス」

成澤村　山田村
新山村　杉下村

又月村　　中郷村
伏熊村　　深澤村
谷澤村　　用村
大谷村　　海味村
西里村　　島大堀村
押切村　　鶴巻田村
大淀村　　正厳村
壹増門傳村　　羽入村

藥師神社或[illegible][illegible]、[illegible]藥ナト書リ、

十二神社

是ハ神名帳所載藥師菩薩神社常陸國ニ二社アルヲ準據トシテ、神祠タラシメントスレド、其實ハ孰レモ藥師經ニ見ヘタル十二神ヲ祀レルナラン、所在ノ村里、

附錄

「藥師神社中ニハ、元來小(少)彥名命ヲ祭リタルモ有ルヘク、十二神社中ニハ俗ニ云フ天七地五ノ神ヲ祭リタルモ有ルヘケレハ、猶ヨク檢査スヘシ、」

山口村　北高橋村
楯西村　楯北村
吉川村二社　小泉村
石田村　沼澤村
猪野澤村三社　嶋大塲村
成生村

荒神社

是又皇國竈ノ神ヲ祭神トシ、或ハ火產靈神ヲ祭神ナル由附(會脫カ)スト雖モ、道家ノ稱スル三寶荒神ナリ、所在ノ村里、

附紙

「此說ノ如クナルヘシ、」

[illegible]生村　上[illegible]田村

水澤村	新南村
沼山村 但高瀬ノ神社ト云リ、	沼山村
入間村 但鮎田神社トモ云ヘリ、	入間村
金谷村	小柳村

石子明神	柳澤村
姥神社	(同カ)
瀬富子社	大町村
大門社	龍音寺村
古塚社	同
海渡幸社	同
水精社	猪野澤村
若禰子明神	上新田村
地神社	上和田村
白幡明神	鹽森村

子安明神	泉岡村
水雲明神	川沼村
武田明神	深沼村
白髭明神	竹森村
白髭明神	露藤村
清森明神	二井宿村
飯綱明神	稲森村
居合神社	林崎村
戸倉神社	土生田村
幸神社	同
御前社	深堀村
若神子神社	母袋村
田柄社	羽入村
後藤社	同

是等何等ヲ祭神ナルカ詳ナラス、社號杜撰ニ出タリ、詮スル處、悉ク佛ナラン、

附紙

「以上假綱ノ外ハ佛稱トモオボヘス、杜撰ノ社號ニアラスシテ、由緒アルカ多カルヘシ、廢スヘカラス、」

北辰宮　猪野澤村

明星社　小泉村

是等北斗ヲ祭レルナラン、道家ノ説ナリ、

附紙

「北辰明星共ニ神ニハ非ル(マヽ)、」

日月神社

此社號穩ナラス、日月燈明佛ト稱スルアリ、ソレナラン、

附紙

「此亦然ルヘシ、」

赤山社
祇園社
住吉社
北野社
竹生島社
八幡社
此六社、上荻野戸村ニアリ、何レモ方二尺ノ石祠ニシテ、六社ヲ合セテ一村鎭守ト唱ヒ(へ)、農六人各分チ領シテ社守ト號シ、是迄別ニ社人ヲ立ントスルコト（管祭日等ニ崖次測ヒ止マスト云フ、）
右社號ハ了然神祠タレモ、素ト淫祠ナレハ、六社ノ小祠悉ク廢スヘキニアラン、

附紙

「廢セスシテ近傍ノ社ヘ合祀スヘシ、
但祇園社ハ八坂社ト改ムヘシ、」

右之部類斷然御廢止相成可然哉、奉伺候、以上、

明治四年十一月　　山形縣

神祇省
御中

當縣管内神社取調ノ儀、中古信佛ノ習風僻遠之俗、殊ニ糊着、佛字ノ蔓延不可言、然ルヲ維新以來强テ神祠ト潤飾シ、混淆錯雜分判至テ難ク、古文證ノ討覈、實地ノ檢査、巡村等ノ上取調候儀ニテ、御達期限不得止事延期仕候次第、宜御照察被下度候、今般別冊取調書相添、左ノ件々御指揮所請ニ御座候、

一管内社祠ノ儀、一村里内凡テハ三四箇、或ハ小祠ト云モ十餘ケ社所在ノ村落モ有之、氏子札受サシムルニ至リ、別テ不都合ニ付、一村内固有數社ノ中ヨリ最首タルヘキヲ撰テ、一村一鎭守トシ、是ヲ村社トシテ、餘ノ數社ハ是ニ合祀セシメ、合祀セル社ト社ハ、廢却可仕哉、依テ一村鎭守ト立ヘキ分ハ、御雛形通、悉詳取調、餘ノ合祀スヘキ社部ハ、別ニ社名帳ヲ編シ、朱ヲ以テ社號ヲ連書仕候、

明、素ヨリ社祠無之村落ハ、尤新ニ鎭守社ヲ立ルニハ無之候、社祠ノ中甚立ハ佛ナルヲ神トシ附會セルノ判然タル、暨社號祭神モ詳クシテ討覈ノ據ナキハ、唯ニ合祀スル能ハス、其社號社字ニ併セテ廢斥致シ、可然歟、是又別冊ニシテ、上戴（裁カ）

ヲ所請ニ御座候、

一鄕社ハ前條一村一鎭守社トシ、而メ戸籍ノ區別ヲ以其鎭守社ノ中ヨリ、猶最首タルヲ撰ミ、別段可相伺候、

一天童鎭坐(座)建勳神社ハ、官許アリテ齋祀スル所、尤尊王ノ神慮タレハ、是ヲ以テ縣社ト可致、是ニ次クニ、山形八幡社ハ康平ノ古ヘ將軍源賴義由アリテ建起シ、其後城主々ノ修營アリテ、當縣以來又崇敬致シ候得ハ、是又縣社ト可稱哉、

一從來神明宮皇太神宮ト稱シテ、一村鎭守トスル有之、依然民庶ノ氏神ト稱センヿ尤忌憚アリ、他ノ御比例奉伺度、別冊編集仕候、

一從來ノ社人共儀ハ、兼テ御布告モ有之候得共、一躰社祠ノ廢止決定仕候迄ハ、姑ク其儘居置、社守爲致候得共、今般鄕村社上裁ヲ經テ確定仕候ハヾ、一時ニ解却シ、更ニ人撰祠官祠掌ニ充テ可申ト奉存候、

右者延期ノ次第陳情旁、所置方奉伺度、如此御座候、宜御指揮被成下度候、以上、

明治四年十一月　　山形縣

神祇省

御中

「朱書」「第一條
伺之通、
但、社殿祭神疑惑ノ分ハ附札ノ通可取計事、
第二條
取調可伺出事、
第三條
伺ノ通、
第四條
從前之通ニテ不苦候事、
第五條
人撰ヲ以テ相定可申出事」

羽前新庄藩管内復飾神職滅罪檀家神葬祭の件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

三年十二月十四日
新庄藩管内復飾神職其他神葬祭處分
　新庄藩伺　辨官（宛脱カ）
神社別當ノ寺院追々復飾神勤相願、且自分家内神葬祭ノ儀共願ノ通聞濟置申候、然處元眞言宗ノ内滅罪檀家有之分、右檀家ノ者神葬申請度段願ノ向モ有之候間、聞濟候テモ不苦儀ニ可有御座候哉、此段奉伺候、以上、三年十二月五日　藩
（朱書）「伺ノ趣不苦候事、三年十二月十四日
　但、復飾ノ神職ヘ、是迄ノ佛葬祭同樣ニ、神葬祭ニテ取置爲致候儀ハ不相成候事、」
　神祇官意見　辨官宛
新庄藩ヨリ神葬祭伺、滅罪檀家ノ者、神葬祭願出ノ向ハ聞屆不苦候得共、復飾ノ神主ヘ是迄ノ佛祭同樣ニ、神葬祭ニテ取置爲致候儀ハ不相成事ト存候、依テ本紙相

懇御伺答申進候也、三年十二月十三日

出羽神社境内照見菩薩を蜂子命と改む

太政類典 第二編第二百五十八卷第四類 教法九 神社七

十二月二十八日 六年

出羽神社境内ノ照見菩薩ヲ改メ、神號ヲ蜂子命ト稱ス、

教部省伺

出羽神社境内開山堂ヘ相祭候照見菩薩之儀ハ、崇峻天皇皇子蜂子命ニ相違無之候ニ付、更ニ神祭致度段同社宮司共別紙壹印之通願出、尚地方官ヨリモ二印之通具状致シ候、右ハ歴代皇靈御祭典モ、悉皆古式ニ被爲復候儀ニ候得ハ、願之通聞屆不相當之筋無之ト存候、此段爲念相伺候也、十二月十八日 教部

(朱書)「伺之通、十二月廿八日」

出羽神社宮司西川須賀雄同權宮司見島高光願 教部省宛

[illegible]件

官印
酒田縣管內羽前田川郡羽黑山出羽神社境內ナル開山堂ノ儀、事實取調候處、諡號ヲ能除太子トモ、照見菩薩共申シ、其實ハ崇峻天皇之皇子蜂子命ニ渡ラセ給ヒ、御容貌甚醜陋ニ座スカ上ニ、蘇我馬子讒ヲ推古天皇ニ入奉リ、北海ノ濱ニ放チ奉リシヨリ、頻リニ厭離穢土ノ佛情ヲ起サセラレ、羽黑山皇野ニ籠ラセ給ヒ、其後月山湯殿山ニモ修行祈誓アラセラレ、夫ヨリ三山ノ神德モ益赫カセラレ候由、社傳ニモ古老ノ口碑ニモ相傳候、因テ古典ト實地ヲ相考候處、蜂子命ハ崇峻天皇大伴糠手連女小手子ニ御合座テ生シメ給ヘル由、日本書紀ニ相見、今以皇野鉢子村ノ地名顯然ト相存シ、諸人ノ信仰モ拔群ニ御座候、就テハ臣等本社赴任、神佛御引分ノ御趣意篤ト相考候處、右開山堂ノ儀共儘ニテハ、社頭ノ鎭坐(座)如何ニ御座候、サリ迚引離候テハ、三山ニ功勞オハシマシヽ御事績(蹟)ニ對シ奉テ、安カラサル所候ヘハ、更ニ神號ヲ奉リ、改正仕度御座候ヘモ、何ヲ申、皇子ニ坐スカ上、先年元別當覺淳代既ニ菩薩號ノ宣下モ候ヘハ、私ニ改候儀ハ恐怖ノ至ニ候條、右宣下狀御返シ申上候上、乍恐御改正被爲在度奉懇願候、尤社號ハ別紙ニ書載仕候也、十二月二日 教部

開山堂改正神號

蜂子命

右之通奉願候也、

酒田縣上申教部省宛

二印
當縣管下羽前國田川郡羽黒山開基能除太子ヘ文政年中元羽黒山別當莊嚴院覺淳住職中、出願之上照見菩薩ト宣下相成候處、今度神號ニ御改稱ノ儀御省ヘ出願仕度旨、出羽神社神官申出候、於當縣差支ノ筋モ無御座候條、何分御沙汰被下度、此段及上申候也、（九年）十一月七日

法制課議案

別紙教部省上申開山堂ノ儀、審案候處、日本書紀崇峻天皇紀ニ、立大伴糠手連女小手子爲妃、生蜂子皇子、錦代皇女トアリテ、蜂子命ハ崇峻天皇ノ皇子ニ御相違無之候ヘ𪜈、北海ノ濱ニ放ツ云々ノコ、正史ニ不見、然𪜈其御遺跡社傳竝ニ上人ノ口碑ニ存シ、疑ヲ可容儀モ無之候間、伺之通御允可ニ相成可然被存候、仍テ御指令案取調仰高裁候也、十二月二十二日　教部

出羽三山の神佛分離

〔太政類典〕第一編第百廿三卷　教法　神社二

三年十二月

羽後國吹浦村大物忌月山神社ヲ一ノ宮ト定ム、

山形縣伺辨官宛

當管內羽後國飽海郡吹浦村大物忌月山神社神主共、先般復飾願ノ頃、由緒書上候ニ付、羽州一ノ宮神主ノ許狀御下渡相成、則右兩所宮へ羽州一ノ宮扁額奉掲、鳥海山表口ト相唱候所、右飽海郡ノ內蕨岡上寺ニモ大物忌ノ神社鎭座、是マテ羽州一ノ宮ト稱シ來リ、宮門跡眞筆ノ扁額モ有之、幷ニ元文度羽州一ノ宮奉授正一位ノ勅宣ヲ狹ミ、鳥海山表口ト申唱、從來山上道者共先達仕來候ヨリ、吹浦社人共、一ノ宮幷鳥海山表口ト相唱へ候ヲ見聞、每度爭論ケ間敷萌モ有之ノミナラス、双方ヨリ別紙ノ通、舊記先蹤ヲ引證、及訴訟候得共、已ニ大物忌神社ハ、式社ニモ有之、吹浦方ニハ往古ノ證文ヲ枚擧シ、舊書類モ所持罷在、地形宮地マテモ、或延喜式所載歟ト相見へ、上寺ハ近世ヨリモ松岳山觀音寺ト申候旨、巷說モ有之、況社地モ狹小ノ

嗣埼耳ニテ、坊耳壯觀（殿アラン）世音ト、勅宣已ニ一ノ宮ナレハ、何ヲ是何ヲ非ト難定、其上不案内ノ儀故、元酒田縣ニテモ其儘ニ差置コレ有、當縣ニテモ同樣ノ處方、今一州二所ノ一ノ宮有之甚以不躰裁、殊ニ二社爭鬪ノ憂必然ニ付、兩社舊祀別紙御詮議ノ上、何レカ正何レカ間、至急御沙汰有之度、依之別冊貳袋相添、此段奉（何カ）伺候、猶委細ノ儀ハ差立候官員ヨリ可申上候、以上、二年十二月　各縣

（朱書）「吹浦大物忌月山神社ハ可為羽州一宮事異論不可有之候、嚴閣大物忌ノ神社ハ、勧請地ニテ、正一位ノ神階幷一ノ宮ノ扁額等ハ論證ニ不相成候事」

山形縣（行脱カ）判官宛

謹按ニ、羽前羽後兩國ニ有名之高嶺四ツ、曰ク鳥海、曰月山、曰湯殿、曰羽黑也、上古靈神居焉、鳥海之大物忌、月山之月夜見、羽黑之出羽之神社是也、中古浮屠以佛習合、鳥海之頂置藥師、稱爲奥院、吹浦村大物忌月山社前講堂ヲ開ヒテ、彌陀藥師ヲ安置、本地トナス、羽黑月山亦同樣、獨湯殿山耳從前ヨリ佛一邊ニテ、諸書祭神之說不確、山上神跡之可徵ナシ、於是浮屠唯佛地ヲ主張仕候得共、之ヲ古今之書籍現在之實地

ニ徴スルニ、神山タル相違有御座間敷哉、其由ヲ考フルニ、羽黒、月山、湯殿ノ三山ヲ合セ、偏ニ出羽之三山ト唱ヘ來リ、毎歳所詣之行人、以淸淨第一トシ、三山ヲ通攀シテ後、鳥海ヲ攀、何レモ行法神道之作法ニ似タリ、況其三山ト稱スル中、二山已ニ確然神山ニシテ、湯殿其奥院ヲ唱ルキハ、二山而已神跡ニシテ、奥院ノミ獨唯佛ナランヤ、羽黒山元出羽神社一坐(座)、後月山湯殿ヲ合祭シテ三所ト號ス、湯殿若眞佛地大日如來ニシテ、三所權現ノ號其據ナシト云ヘシ、抑浮屠氏高山峻嶺ヲ開基スル者、言ヲ不思議ニ託スト雖トモ、要之上古神跡靈窟ノ緣故ナクシテ、唯佛ヲ以テ開ケルモノ甚稀ナリ、西京ノ比叡、和州ノ葛城、加州ノ白山、信ノ御嶽、皆據トスルノ神跡アリ、奥羽之高山鳥海月山亦是也、湯殿亦是類ニシテ、其初大山祇命ヲ祭レルモノ、僧徒假テ以テ開基セルモノナラン、元酒田縣嘗テ弘法開基ノ年歷事實ノ確證ヲ尋問セシニ、終ニ情實ヲ不得ト云、要之唯佛ト稱スル者モ、亦曖昧ニ屬スル歟、卽今神地トスレハ則神、佛地トスレハ則佛ナリ、然レトモ向ノ所謂四高山三神ニシテ、一山佛地タルヿ先以不可有之、況月山羽黒ノ奥院タリ、佛氏ノ奥院ト稱スル者ハ、神地ハ佛體ヲ安置シ、佛地ハ神體ヲ安置ス、本地垂跡ノ謂ニシテ、中古習合セルモノナレハ、月山羽黒神地確然タル上、今二山ノ奥院佛地タリト云モ、已ニ習合セル

者ニシテ、神道ノ管轄タルヲ不免、況其以往大山祇命ヲ祭ル由緒書論説明カナレハ、断然神地ヲ〔ニカ〕被復、至當之御儀ト奉存候、唯月山神社ハ吹浦村ニ一社、月山ニ一社、共ニ月山ヲ稱スル者、飽海郡ノ境界古月山ニ係ルト謂トモ、地勢甚異ナリト云ヘシ、但今吹浦村ニ鎮座ノ月山ハ、鳥海大物忌ノ神祠ヲ遷坐ノ頃、月山ノ神モ同所ニ遷セル者歟、然ハ現在ノ月山ハ其神跡也、吹浦村両處宮ノ叢、南朝以前ニ出テ、三代實錄延喜式等多クハ両社並稱ス、以是觀之、或ハ遷坐セル者ニモ可有之歟、聊贊儀ヲ奉進候、右ハ固ヨリ不案内ノ儀ニモ有之、管見ノ概略耳奉建議候、神祇官所論已闡自的當、本縣ニ於テ別議無御座候、以上、四年四月二十八日

月山神社湯殿山神社社格制定の件

〔太政類典〕第二編第二百五十八巻第四類　教法九　神社七

八月三十一日七年

　教部省酒田縣ヘ達各通

月山神社羽前國田川郡月山鎮座

　月山神社國幣中社湯殿山神社國幣小社ト定ムルノ件

右國幣中社ニ被列候條、此旨相達候事、

同上同上

湯殿山神社羽前國田川郡湯殿山鎮坐

右國幣中社(小カ)ニ被列候條、此旨相達候事、

教部省伺

酒田縣管内羽前國月山、湯殿山、羽黑山ノ儀ハ、別紙第一號圖面ノ如ク、(圖面略ス)月山ハ中央ニ聳エ、湯殿山ハ其左ニ立チ、羽黑山ハ其前ニ横ハリ、山脈連亘、峯嶺接續、何レモ衆庶ノ崇仰不啻候處、羽黑山鎮坐出羽神社ノミハ、辛未五月、已ニ國幣小社ニ被列候ヘ𪜈、湯殿山神社ハ、昨六年ニ至リ、始テ神佛區別、先ツ縣社ノ列ニ爲据置候處、同山ハ遠近罕比ノ靈山ニテ、萬民ノ尊崇遙ニ管内諸社ノ上ニ出候ヘハ、國幣社中第一等ノ格可相當哉ニ候ヘ共、即今大社ハ相闕居候ニ付、無止事ハ中社ニ被仰付度云々、地方官ヨリ、別紙第二三號ノ通、連々及具狀、且又今般月山神社々格ノ事ニ付、大物忌出羽兩神社神官願書相添、別紙第四號ノ通申立候、然處月山ノ儀ハ、出羽神官申立ノ如ク、羽後國飽海郡吹浦村ニ有之、當今ノ神社ハ、全ク後世遙祭ノ社殿ニテ、本社ハ即月山々上ノ祠ニ相違無之候ヘ共、本文月山ノミナラス、大物忌神社モ第一號圖面ノ如ク、吹浦村

（ナキ社殿ハ、口宮ニモ、是又本社ハ／同國鳥海山々上ノ局ニ有之候、）古來大物忌神社ト相並テ、御崇敬被爲在候ハ、兩社神官申立ノ通、歷々史冊ニ見在シ、互ニ優劣無之事ニテ、前條湯殿山ノ具狀共、何レモ當然ニシテ、今此ヲ取リ彼ヲ闕キ候テハ、殆ト偏頗ニ涉リ、實ニ不都合ニ候條、願クハ今般更ニ月山鎭坐月山神社（式内名神大）ヲ以テ國幣中社ニ、湯殿山鎭坐湯殿山神社（式外）ヲ以テ、國幣小社ニ被列而、出羽神社ト三社ヲ合シ、一社分ノ經費ニ相立候樣被仰付度、左樣（〔候カ〕）ハヽ、僅ニ小社神官ノ定員ヲ中社ノ數ニ増シ、祈年新嘗ノ幣帛二座分ヲ加ヘ候迄ニテ、上敬神ノ道ニ協ヒ、下衆庶ノ望ニ副候次第ニ付、厚ク御評議有之度、仍宣旨按等取添、此段相伺候也、五月三日

（朱書）「伺ノ趣聞届候條、三社合併一社分ノ經費ニ相立候儀者、其省ヨリ酒田縣ヘ可相達事、八月廿一日」

宣旨按

月山神社（羽前國田川郡月山鎭坐延喜式内／飽海郡月山神社）

右國幣中社ニ被列候事、太政大臣

湯殿山神社（羽前國田川郡湯殿山鎭坐）

同上文小社

地方官等ヘ御達按

今般羽前國月山神社國幣中社、湯殿山神社國幣小社ニ被列候處、一社事務ノ儀ハ、同國出羽神社ト合併取扱可爲致、此旨相達候事、太政大臣

酒田縣伺敎部省宛

當縣管下羽前國田川郡湯殿山ノ儀、今般湯殿山神社ト被仰出、社格見込更ニ可申立旨、御達御座候、抑湯殿山ノ儀、　淳和天皇天長年中、僧空海以來、佛道ノ一遍ニ執行保護來、差向社格來歷確證ヲ以可取調樣無之、試現今景況ニ寄上申仕候ヘハ、同山ノ儀別ニ宮殿ヲ設ケ、金銀裝飾スル等ノ事無之、山嶽ノ上熱湯湧沸スル天然ノ靈場ヲ以拜所トシ、衆庶群參崇慕スル、一回來賽スレハ、必ス再蹐ヲ期スルヲ以、古ヘ戀ノ山ト稱スルハ、蓋シ其信念思慕ノ深キニ取ルト申傳ヘ候、近クハ兩羽ヨリシテ三陸信越ノ間、常野ノ遠ニ至ルマテ、連ヲ結構ヲ立、陸續來詣スル者殆ト數萬人ニ及ヒ、或ハ山號ヲ石刻シ、村外又ハ田畔ニ建、稔秋ヲ祈リ、疾疫ヲ除スル等、遠國諸州ニ至ル迄、枚擧スルニ不遑、實皇國稀有ノ靈場ニシテ、人民ノ崇敬尊信スル、殆ト東北諸州ノ名山ニ冠トシテ、遙ニ管下大物忌出羽兩國幣社ノ上ニ出ルト雖モ、星霜千五十年來、專ラ佛道ヲ修居候ニ付、天長以前社格祭式ノ振（誤脱アラン）古史舊籍中所見

無御座候處、今般更ニ神祭被仰出、社格御取究ニ付テハ、現今相當ノ處ヲ以、永世ノ格式御確定相成候外御座有間敷哉ニ候條、國幣社中、第一等ノ格被仰出相當可仕哉ト奉存候、乍併即今國幣大社相缺居候ニ付、無止事ハ同中社可被仰出哉、右ヨリ相下リ候テハ、大ニ人民ノ望ヲ失ヒ、自然民心ノ歸向ニ拘リ可申儀ト奉存候條、此段見込取調相伺候也、六年八月廿二日

同上伺省宛

當縣管下湯殿山ノ儀、今般湯殿山神社ト被仰出、社格見込取調相伺候樣御達ニ付、同山ノ儀ハ淳和天皇天長年中僧空海着手、爾後星霜千有餘歳、佛道一遍ニ修シ、神式ノ儀ハ、古史舊籍所見無之、就テハ社格等ノ舊例一切難相分ノミナラス、祭神ノ儀モ、夫是諸說申唱ト雖モ、上古邈焉何等ノ據ル所有テ、其說ヲ可定哉、畢竟近世國學者淺牽強ノ說不過(過)、要スル所、無双ノ靈山ニシテ、四方人民ノ尊崇不啻候ニ付、改テ神社御確定、至當ノ御事ニ可有御座、隨テ官祭被仰出候段、異論無之筈ニ候ヘ共、國幣ニモ社格三等有之、差向右等格至當ノ見込相伺候儀ト心得、當今實地ノ景況ヲ以取調候ヘハ、遙ニ管下大物忌出羽兩社ノ上ニ出、蓋シ國幣社中稀有ノ靈場ト可申ニ付、大社ノ格相當ニモ可有御座哉ニ候ヘ共、即今大社欠居候ニ付テハ、中社

ニ可被仰出哉ト、先般相伺候事ニ御座候處、豈計ランヤ先縣社ト可定旨、御指令ノ趣、頗ル驚愕ノ至ニ奉存候、抑湯殿山ノ儀、千有餘歳、佛道ヲ以保護仕來候トハ乍申兼テ及上申候通、名山ノ聲譽皇國ニ遍ク、信越常野ノ遠境迄、陸續來詣群參スル實況、既ニ先般伺書ノ文意、新聞誌上ニ掲載、天下ニ傳播シ、衆ノ見ル處敢テ不然トスル者有御座間敷、然ル處、今般改テ神社被仰出候上ハ、同山尊信ノ者共、一層特殊ノ社格被仰出モ可有之儀ト、遠近目ヲ拭テ相望居候情態ノ處、縣社ニ御定相成候テハ、大ニ民心ノ望ヲ失ヒ、從前貴重ノ佛地一個輕卑ノ神社相成、方今敬神ノ御趣意モ如何可有之哉ト、自然疑惑ヲ生シ、往々御布教ノ障碍共可相成儀ト深ク恐入候間、彌卽今官祭ノ御沙汰難被及次第モ候ハヽ、却テ從前ノ通、當分佛道修行ノ事ニ被成置候方、神人共ニ其宜ヲ得可申哉、左モ無御座候ハヽ、一層顯乎タル社格ニモ不被仰出候テハ、先以神佛混淆引分方等御指令御座候共、頑固ノ民情分離方於テ、甚無覺束心痛罷在申候、尤御指令ノ趣迚モ、先縣社云々トノ事ニ御座候上ハ、斷然御確定ノ事共、相心得不申候間、前文ノ事情篤ト御汲取被分、更ニ國幣中社被仰出候樣、厚ク御詮議被下度、一旦御指令ノ處、遮テ彼是申上候段、如何ニモ恐入候へ共、地方ノ情狀不得止、此段猶相伺候也、二月廿二日

同縣上申 同省宛

當縣管下羽後國飽海郡吹浦村鎭坐月山神社ノ儀、別紙ノ通大物忌神社正權宮司出願ニ付、出羽神社神官ヲモ相糺候處、是又別帋ノ通申出候ヘ共、延喜式神名帳所載ハ、則吹浦村鎭坐ノ月山神社ニモ可有御座哉、兩社神官申立ノ儘差出候間、猶御鑒定ノ上、社格ノ儀何分御沙汰有之候樣致度、客歲太政官第四百二十一號御布告モ有之候ヘ共、既ニ去十月中指出置候儀ニ付、此段及上申候也、三月七日

大物忌神社宮司犬塚盛直外一人願 酒田縣宛

當御管下飽海郡吹浦村鎭坐月山神社ハ、別紙古典明證モ有之、且去ル明治四年辛未五月、吹浦村大物忌月山神社可爲羽州一宮旨御達相成、同年八月四日大物忌神社國幣中社列被仰出候處、月山神社ノ儀ハ、社格ノ御沙汰未無御座候條、上古ヨリ別紙ノ通大物忌神社同樣ノ神階社格柄ニ相成居候儀ニ付、御詮議ノ上、社格被仰出候樣、教部省ヘ厚ク御沙汰被成下度、奉懇願候、御本社繪圖面別帋ヘ附上仕候也、

六年十月(圖略ス)

羽後國飽海郡吹浦村鎭坐

月山神社

所祭　月夜見命

一延喜式九ノ卷神名式出羽國飽海郡三座

大物忌神社名神大　小物忌神社名神小

月山神社名神大

一同書二十六ノ卷主税上

月山大物忌祭料二千束

一三代實錄、貞觀六年二月五日、壬戌、授出羽國正四位上勳六等月山神從三位、正四位下勳五等大物忌神正四位上、

一同書、同十八年八月二日、丙午、授出羽國從三位勳六等月山神正三位、

一同書、元慶二年七月十日、癸卯、出羽國正三位勳五等大物忌神、正三位勳六等月山神並益封各二戶、與本並各四戶、每發軍使國司祈禱、故有此加增也、

一同書、同年八月四日、丁卯、云々、彼國正三位勳五等大物忌神進勳三等、正三位勳六勳六等月山神四等、從五位下勳九等小物忌神七等、先是、右中辨(兼脫カ)權守藤原朝臣保則奏言、此二神自上古時、方有征戰、殊標奇驗、去五月賊徒襲來、挑戰官軍、當此時雲霧晦合、對坐不相見、營中擾亂官軍敗績、求之蓍龜、神氣歸賊、我祈無感、增其爵秩、必有靈

爲國尊崇、祈禱甚懇、望請加進位階、將答神望、仍增此等級、
一同書、同四年二月二十七日、辛亥、出羽國正三位勳四等月山神、正三位勳三等大物忌神、並授從二位云々、
一同書、仁和元年十一月二十一日、辛丑、去六月廿一日出羽國秋田城中及飽海郡神宮寺西濱雨石鏃、陰陽寮言、當有凶狄陰謀兵亂之事、神祇官言、彼國飽海郡大物忌神、月山神、田川郡由豆佐乃賣神、俱成此恠、祟在不敬、　勅令國宰、潔齋奉幣、愼警
一、神社啓蒙三十四之卷、月山ハ都岐夜美ト訓ヘシ、吹浦村鎭坐、例祭月日式二名神祭二百八十五座、中一出羽國月山神社一坐、
一鎌倉修造狀　　一通
出羽國兩所宮修造事、不終其功之由、神主久永訴申之間、去建保六年十二月、爲催促被差遣雜色正家、故右大臣殿御大事出來之間、正家不遂其節歸參、然而有限修造、依不可默止、爲催促所被差遣雜色眞光也、無懈怠可終其功之狀、依前陸奥守殿御奉行執達如件、
承久二年十二月三日
散位　藤原印
散位　三善印

北目地頭新留守殿

一南朝御寄進狀　一通

奉寄進

出羽國一宮兩所大菩薩

由利部小石郷乙友村之事

右爲天下興復別而陸奥出羽兩國靜謐所奉寄進之狀如件、

正平十三年八月三十日

從一位行前内大臣源朝臣判

出羽神社宮司西川須賀雄外一名願（酒田縣宛）

當御管内舊出羽郡月山神社ノ儀ハ、從來羽黑山社務ノ儀ニ有之、則別紙由緒書ヲ以申上候通、吹浦村並祀ノ儀ハ、元慶一二年ノ頃、國司ノ計トシテ、勸請ニ相成候事ト相見ヘ、月山々上ノ社ハ、最初鎭坐ノ本社ナル事不待論ヲ儀ト奉存候、殊ニ近國ハ勿論、關八州ニ至迄、諸人ノ信仰格別ニ付テハ、去ル明治三年庚午十二月、羽前國一ノ宮　勅祭ノ神社宣下被成下置度段、奉願候ヘ共、未御沙汰無御座候間、何卒御詮議ノ上、相應ノ社格被仰出候樣、本省ヘ宜御沙汰被成下度、奉懇願候也、六月十二日

同上同縣伺

當御管内舊出羽郡月山神社ノ儀ハ、従来羽黒山兼務ノ儀ニ有之、則別紙由緒書ヲ以テ上候通、吹浦村並祀ノ儀ハ、貞觀十八年迄ハ、大物忌月山各別ニ授位シテ、元慶二年ニハ、兩社並祀セリ、此時賊亂爲平治、大物忌大神ヲハ鳥海山ヨリ、月山ノ大神ヲハ出羽郡月山ヨリ、國司ノ計トシテ勧請ニ相成候事ト相見ヘ、月山々上ノ社ハ、最初鎮坐ノ本社ナル事不待論儀ト奉存候、殊ニ近國ハ勿論、關八州ニ至迄、諸人ノ信仰格別ニ付テハ、去ル明治三年庚午十二月、羽前國一ノ宮　勅祭ノ神社宣下被成下置度、此段奉願候ヘ共、未御沙汰無御座候間、何卒御詮議ノ上、相應ノ社格被仰出候様、本省ヘ宜御沙汰被成下度、奉懇願候也、二月

羽前國田川郡月山神社由緒

月山神社

所祭月讀尊

一延喜式第十ノ巻神名式出羽國飽海郡三坐

大物忌神社名神大　小物忌神社名神小

月山神社名神大

一三代實錄、貞觀六年二月

授出羽國正四位上勳六等月山神從三位、正四位下勳五等大物忌神正四位上、

一同錄、貞觀十八年八月

授出羽國從三位勳六等月山神正三位、

一同錄、元慶二年七月

出羽國正三位勳五等大物忌神、正三位勳六等月山神並益封各二戶、與本並各四戶、每發軍使國司祈禱、故有此加增也、

一新抄格勅符ニ、月山神二戶、出羽國寶龜四年九月符

一三代實錄、元慶二年八月

正三位勳五等大物忌神進勳三等、正三位勳六等月山神四等、從五位下勳九等小物忌神七等、先是、右中辨兼權守藤原朝臣保則奏言、此二神自上古時、方有征戰標奇驗云々、

一同錄、元慶四年二月

出羽國正三位勳四等月山神、正三位勳三等大物忌神、並授從二位、從五位下勳七等裒（小）物忌神城輪神並從五位上、

教部省ヘ掛合内史

酒田縣管内月山湯殿山兩神社格ノ儀ニ付、今般御伺出ノ處、右書中湯殿山神社ハ、昨六年ニ至リ、始テ神佛區別、先ツ縣社ノ列云々ト有之、然處右區別相立候節ノ旨趣不分明ニテ、取調相成兼候付、考證可相成書類一覧致度候間、御廻有之度、此段得掛合及候也、五月八日

同省回答内史宛

酒田縣管内月山湯殿山兩神社格ノ儀ニ付、先般伺出候處、湯殿山神社ハ昨六年ニ至、始テ神佛區別云々、其節ノ旨趣不分明ニ付、考證可相成書類差出候樣御掛合ノ趣致領承候、右ハ徵證可相成書類少ク候條、當時取調ノ考證書一通御廻申候、此段及御回答候也、五月廿九日

出羽國湯殿山ノ儀ニ付考證

酒田縣管内出羽國田川郡湯殿山ハ、太古ヨリノ神山北國ニ比類ナキ靈場ニシテ、諸人ノ信仰モ他ニ異ナルコト、ヨク人ノ知ル所也、此神山ニ鎭坐ノ神ハ、正史ニ見エタルコト無シト、雖モ野乘ニ載ル處ヲ以テ之ヲ古典ニ徵スルニ、祭神大山祇命ナルコト一定ナリ、其ハ三山雅集ニ、權現ノ垂跡大山祇見ノ命也、或云大己貴命又謂彦火

々出見尊也、言ニ其中之正意、最初說大山祇神也、マタ羽黑ノ事ヲ云ル條ニモ、月山ハ月讀尊、湯殿ハ大山祇命、（一說ニ彦火々出見ノ尊、又大己貴ノ命、）ト云ヒ傳ヘタリトアルニテ、素ヨリ大山祇神鎭坐ナリシ事著シ、然ルニ靈山神地ニ攀登テ、佛龕ヲ設ケ、種々ノ妄誕ヲ取唱ヘテ、遂ニ神地ヲ奪ヒ、佛場トスルハ、僧徒ノ常ナルニ合セテ、此神山ニモ附會說ヲ唱タリト聞ユルヿアリ、同書ニ引或記曰、養老六壬戌年八月八日、行基菩薩、湯殿月山羽黑參籠アリ、一千體ノ地藏木像ヲ造立シ、荒澤ニ安置シ玉フ、湯殿靈場ニテ、祝言秘記親授リ玉フ由、古傳ニ見エ侍ルトハ、行基參籠ノ時湯殿ノ神（御大山積神）ノ教ヲ受テ、祝言秘記ヲ授リシ故ニ、佛像ヲ造立シタリト、世ヲ欺キシモノナレド、固ヨリ神ノマサヌ山ナランニハ、爭デカ如此云ハン、是ニテモ、太古ヨリ大山祇神ノ鎭坐マシヽコトヲ知ルヘシ、其後空海モ此地ニ至リツト聞ユテ、一記ニ大同元年弘法大師湯殿山ニ參籠矣トモ見エタレハ、ヤヽヽニ奸僧等カ狡意（サカシラ）モテ、能除太子ナドノ說ヲ構造セシモノナルヿ、譬ヘハ空海ガ丹生都姬ノ神教ト僞リテ、高野山ノ神地ニ金剛峯寺ヲ建テ、最澄ガ大比叡神ヲ尊崇スルニ託テ、日吉延曆寺ヲ建立セシニ思合スベシ、カノ能除太子ノヿ、如何ニシテ構造セシヿヲ知ルゾト云ニ、舊記曰、人王三十代欽明帝御宇ヨリ至崇峻帝王子參拂理（ザンフツリ）（前文ニ崇峻天皇第三王子、一名參拂理トアリ、即能除太子ノヿナリ、）

依天童請至羽州時、片羽八尺靈鳥飛來而導登于羽峯、拜生身觀世音菩薩、時讚曰、善哉聖者修勇猛行、一身善業普利于他、常感見彌陀大日所居土、則化成靈鳥、飛揚月山及湯殿山、且虛空語曰、我是羽黒神社也、永欲使汝興吾山、卽授三面寶火珠云々、太子此寶火珠以自燒之時、不動明王自臂放瑞光、加被之、則淸淨常火是ナリ、今ノ世ニ到テモ、湯殿行者コノ常火ヲ用ヒザレハ、登嶺叶ヒ難シト見エタル文ニ因テ知ラルヽヲ、次々ニ云ン、先ツ崇峻帝ノ御子ハ、蜂子皇子、錦代皇女二柱ノミナルヲ、蜂子皇子ヲ第三王子ニシテ、參拂理一名能除太子ト云リトハ、杜撰ノ妄說ナレト、（此皇子ノ出羽ニ下リ玉ヒシコ、正史ニ載ナケレド、其有足ノ蹟ハ計リ難シ、）羽黒神ヲ稻倉魂神ト云ヨリ、宇賀能賣神ト名ノ似タルヲ以テ、丹後風土記御鎭坐傳記ナドニ、豐宇賀能賣神云々、善釀酒、飲一杯吉萬病除也、トアルヲ思ヒヨセテ、能除（吉萬病ヲ除クノ儀、）ノ字ヲ充タルニハ非ジカ、欽明帝ハ崇峻帝ヨリ以前ノ君ナルヲ、此ニユクリナク、欽明帝云々ト云ルハ、僧徒ノ常言ナレハ咎ムルニ足ラス、八尺靈鳥ハ神武天皇熊野ヨリ大和ニ出マス時、頭八咫烏ノ瑞アリシヲ取リテ、熊野山伏ノコニ附會シタルモノトミユ、（羽黒ニ烏崎ト云所アリテ、烏ニ由緣アルコトモミエテ、烏ハ權現ノ使者トモ云傳へ、祭傳ニ分羽黒熊野彦山三山之品彙修驗立于左右、爲前後也、日本西三十三箇州、東三十三箇州、葬於年最之登、所司山伏者羽黒權現、一二三者熊野權現、四者彦山權現也云々トアルコヲモ思ヒヨセテ附會セシナラン、）又彌陀大日所居土トハ、月山ノ本地佛ヲ阿彌陀佛トシ、湯

殿ノ本地佛ヲ大日トシ、羽黑ノ本地佛ヲ觀世音ト云ヨリ云出セル妄誕ナカラ、三面寶火珠マタ不動明王自臂放瑞光トア云(衍カ)ルハ、大山祇神ノ御父神軻遇突智神ノ故事ヲ取レルモノ也、其ハ書紀一書ニ、至於火神軻遇突之(智脱カ)生也、其母伊弉册尊見焦而化去、于時伊弉諾尊恨之曰、云々、遂拔所帶十握劍、斬軻遇突智爲三段、此各化成神也、マタ一書ニ、伊弉諾尊斬軻遇突智爲三段、其一段是爲雷神、一段是爲大山祇神、一段爲高靇トアル、爲三段云、三而寶珠ヲ附會シ、マタ一書ニ伊弉諾尊軻遇突智命、爲五段、此各化成五山祇、一則首化爲大山祇、二則身中化爲中山祇、三則手化爲麓山祇、四則腰化爲正勝山祇、五則足化爲䨄山祇、是時斬血激越染於石礫樹草、此草木沙石自含火之緣也トアル、手化爲麓山祇、マタ草木沙石自含火ト云ニ、不動明王自臂放瑞光、加被之、則淸淨常火是ナリト附會セルニテ、太古ヨリ、此山ニハ大山津見神ヲ祭レル故ニ、土俗ニモシカ云傳へ、僧徒カ種々ノ妄誕ヲ云フニモ、又其故實ニ據リテ構造セルヿヲ知ルヘキナリ、モシ然ラズハ、彼僧徒カ云出セル荒唐不經(稽)ノ談トカク脗合スヘキ謂レアルヘキカハ、斯テ火ト日ト通音ナルヨリ、火ヲ日トシ、本地佛ヲ大日トシ、其寺ヲ大日寺ト號セシヿモ知ラレ、一說ニ彦火々出見尊ヲ祭ルト云モ、火神ノ火ト云ヨリ謬リシ傳ナルヿ知ルベク、火神ノ御躰ヨリ生坐スル大山

託神ノ鎮リ坐ス靈山ナル故ニ、登山スル者殊ニ火ヲ重ミスル例ナリシガ本ニテ、修驗等モ火ヲ慎ミテ常火堂ト云ヲ設ルコトナリシナルベシ、其常火堂ハ古縁起ニ能除太子大日如來ヲ頂禮シ奉ラントシテ、登嶺ノ御合向ニシテ、生身ノ尊像ヲ拜ミタマフニ、御身ヨリ火出テ、太子ノ膚ニ燃付キ、煩惱ノ三毒ヲ消滅シ玉ヘハ、火ハ則昇天シ、尊像御膚ノ火ハ則寶珠トナリ、此玉ヲ心ニ隨ヘテ所作セヨトノタマヒ、或ハ溫泉ノ五味ヲ涌出シタマフ、依之湯殿山ト名ツケラル、其時太子五味ヲアヂハヒテヨリ、以來湯殿別行ヲ始メ、一期ノ間別火ヲ用ヒ、群生利度ノタメニ、寶珠ヲ荒澤ニ納メ玉フ、于時大聖明王ノ左臂ヲ切タチ玉ヒテ、法火ヲ出シ、永クコノ火ヲトヾメ玉フニヨリ、萬世不退ノ常火トナリテ、三山往詣ノ行者、此火ヲ以テ行業ヲツトムト記セルモ、此故ナラン、又此文中ニ、能除太子溫泉ノ五味ヲ涌出シ玉フ、依之湯殿山ト名ツケラルトハ、今山上ニ自然涌出ル溫泉ノ靈場ヲ云ルニテ、湯殿ト云ルモ、此ニ起レリ、湯殿山トハ、湯處ノ山ト云義ニヤアラム、又箕傳ニ乙丑ノ年乙丑ノ日ハ、法身大日垂迹、和光出羽國大梵字川上五味藥湯ノ源ニ置居湯殿權現ト顯レ給フ日也云々、號湯殿山、マタ本山ノ祭神ヲ、或云大己貴命ト云說アルヲ、伊豫風土記ニ、湯ノ郡大己貴命見悔耻、而宿奈毘古那命欲活、而大分速見湯自下

樋持度來、以宿奈毘古那命、而浴漬者、豐間有治起居云々、伊豆風土記ニ、大己貴尊與少彦名我秋津州憫民夭折始製禁藥湯泉之術云々トミエ、諸國ノ溫湯ニ大己貴命ヲ祭ルガ多キヲ以テ思フニ、極メテ後ニ大己貴命ヲ配祭リシナルベシ、カヽレハ、湯殿山ハ太古ヨリノ神山ニテ、大山祇命ノ鎮坐ス靈場ナルガ、溫湯ノ奇驗モアルニヨリテ、大己貴命ヲモ合祭レル神社ナリシヲ、後世僧徒修驗等ノ恣ニ、種々ノ附會說ヲ取唱ヘテ、羽黒月山湯殿ヲ合セテ三所權現ナト申シ、遂ニ神地ヲ佛場トセシモノナル事明カナリ、

教部省回答　史官宛

湯殿山神社治定ノ節、酒田縣ヘノ達書、御入用ニ付、御掛合ノ趣致承知候、則別紙達書并關係ノ書類共、悉皆御廻申候也、六月五日

本件掛合書ノ寫差回シ候樣、庶務課ヘ申遣候處、寫無之旨返答有之、榮秀

神祇官ヘ掛合　辨官

去月廿七日湯殿山ノ儀、大泉藩ヨリ申出有之候ニ付テハ、明細御取調御申越ノ樣申入置候處、今ニ御答無之、右ハ早々否哉御報承度、此段猶又申入候也、庚午八月二日

民部省掛合　辨官宛

先般御下ケ相成候湯殿山月山羽黒山神佛混同ノ儀ニ付テハ、兼テ神祇官ニ於テ夫々取調候後、未タ畫一ノ考證不相立儀ニ有之、然ル上ハ於當省一緒ノ見込取調兼候間、何レニモ神祇官ヘ御達ノ上、神佛ノ區分確定致シ候末、當省ヘ關リ候分、見込可取調旨、御達有之候樣致シ度、依之別紙書類相添、此段申進候也、庚午十二月四日

神祇官掛合 辨官宛

羽黒山湯殿山云々事件、於當官取調見込詳細相立、舊臘其官ヘ申進置候分、何分ノ御商議ニ相成候哉、今般館藩ヨリ願出候儀モ有之候ニ付、御評決ノ處、早々御回答有之樣致度候也、辛未五月

同上 同上

羽黒山湯殿山云々事件ハ、於當官取調ノ上見込詳細相立、既ニ舊臘其御官ヘ申進置候ニ付、右兩山御處置ノ儀、今般館藩ヨリ願出候次第モ有之、旁早々御達有之候樣致度候、仍テ來紙相添、此段及御回答候也、辛未五月

同官ヘ通知 神祇官

湯殿山神佛混淆ノ儀ニ付、大泉藩伺書、左ノ通、當月四日御指圖相成候間、爲御心得申入候也、辛未五月十三日

（朱書）「湯殿山佛道ヲ以保護セシハ、中世以來ニシテ、往古ハ全ク神地タルヿ相違無之ニ付、復飾神勤可爲致事、」

大泉藩伺辨官宛

湯殿山ノ儀ニ付、兼テ奉伺候處、佛道ヲ以保護セシハ、中世以來ニシテ、往古ハ全ク神地タル事相違無之ニ付、復飾神勤可爲致ノ旨、今般御附紙ヲ以テ被仰出候ニ付早速藩地ヘ可申達候ヘ共、上古如何樣ノ神名鎭座ニテ、何レノ書籍ヘ相著シ居候事哉、判然不申、達候テハ、何分亘多愚蠢ノ僧侶共、天長年間ヨリ佛道一遍執法罷在候ヘハ、彼是中立間敷ニ無之候間、御確證ノ程何卒委詳御達被成下度、此段尙又奉伺候、以上、辛未五月十二日

神祇官ヘ掛合辨官

別紙ノ通、大泉藩ヨリ湯殿山神佛混淆ノ儀ニ付、再伺イタシ候間、確證至急取調御差出可有之、此段及御掛合候也、辛未五月十三日

同官上中辨官宛

湯殿山佛道ヲ以保護セシハ、中古以來ニシテ、往古ハ全ク神地タルヿ相違無之ニ付、復飾神勤可爲致旨、大泉藩ヘ御達ノ處、當京詰藩吏ノ心得ニテ、徴古ノ神跡確證

伺度段、申出ノ趣、承知致候、右一件ニ付、庚午十二月廿五日申進候神佛區別ノ儀、大日坊申立ノ趣、再應取調、始終手續書類ノ內、尙考證書拔別紙一冊幷本紙相添、此段申進候也、辛未六月廿二日

酒田縣支配湯殿山別當　大日寺

同　本道寺

大泉藩支配同　注連寺

同　大日坊

一湯殿山ノ儀、社殿ハ無之、溫泉澤中巖窟ヲ寶前ト崇敬致シ、弘法開基ニテ、大日如來應身權現ト稱シ、當山ニテハ、羽黑月山ニ關係無之、一山眞言宗一流神佛混合ノ儀無之、唯佛地ノ旨、顯面縷々申立ニ有之、然ル處羽黑月山ニテハ、三山一躰ト申、同所三所權現ト相唱、本國近國參詣ノ道者行人作法ニモ同樣相唱候儀、不古代ヨリノ修習ニテ、獨立ノ佛地トハ難申、則國誌奧羽觀迹老〔聞老〕闘志、出羽國略風土記等、祭神大山祇命本地大日如來ト相見エ、其外現今先達行人ノ作法法衣ヲ着セス、白衣ニテ注連ト名ケ、木綿襷ノ如キ物ヲ着ケ、道者等悉如斯ナラシメ、神咒ヲ唱シメ、形裝及溫泉寶前等所々ノ拜所幣帛ヲ供シ、大梵天ト唱候物モ、幣帛ヲ用ヒ、加之當山別

一ノ別當寺號注連寺ト號シ、一寺ハ注連掛坊ト號シ候等、唯佛地ニ於テ、注連ヲ以テ寺號ニ呼候儀等、四ケ所中立ノ處、大ニ齟齬イタシ、何分三山一躰ノ神地相違無之候、此故ニ羽黒月山ニテ、當山ヲ佛躰ト申候儀、神代舊地ノ所以ニ候處、當山ヲ以羽黒月山ノ奥院ト稱候ハ、全兩部習合ノ癖ニテ、寬政度三山道者行人入組ノ事、爭論ニ及、則舊幕ニ於テ、双方裁許ノ上、宗門區別等ノ儀モ有之候、但是等ハ、更ニ古ニ徵スル譯ニテハ無之、一時ノ裁斷ニ候ヘモ、湯殿山ヘ關係無之證據トハ可申、依之湯殿山別山ノ儀ハ、當時ニテモ四ケ寺申立通ニテ相濟可申、神佛區別復正ノ儀ニ於テハ、三山一躰神代舊地ニ一洗可致、前件四ケ寺申立ノ儀、御聞濟ニ難相成、早々御處置可有之儀ニ候、祭神異說有之候儀ハ、更ニ牽强スルニ不及、凡御一新以來神佛區別ノ趣旨、神跡ニシテ佛地トナレルヲ、區別復正爲致候譯ニテ、祭神事歷太古邈焉タル所、不可知者不知而可也、唯神佛混淆證跡確然タル者、是ヲシテ純一ニ歸セシメ候儀、則復古ノ御趣意ニ候、當山等前件ノ通、弘法開基以往ノ舊地ヲ着眼ト可致儀、勿論ノ事ニ候也、

酒田縣ヘ達　教部省

其縣管內羽前國飽海郡湯殿山ノ儀ハ、辛未五月元大泉藩ヘ御達ノ通、湯殿山神社

ト相心得、社格見込相立更ニ可申立、尤佛像佛具ハ取除、社僧復飾等ハ可任望事、六年六月十二日

但、祭神ハ大山祇神ト可心得事、

庶務課議按 式部寮在査 内務課

教部省伺、酒田縣管下羽前國月山湯殿山羽黒山、イツレモ衆庶ノ崇敬不啻候處、右ノ内羽黒山鎭坐出羽神社ノミ、已ニ國幣小社ニ被列候ニ付、今般更ニ月山湯殿山兩神社共、國幣社ニ被列而、出羽神社共三社ヲ合シ、一社分ノ經費ニ相立度趣、審按仕候處、湯殿山ノ儀ハ、天長年中僧空海開基以來、佛道ヲ以尊崇致來、祭神等ノ儀ハ古典正史ニ所見無之候ヘモ、往古ハ神地タルニ相違無之考證有之、僧侶復飾神勤可爲致旨、辛未五月中、大泉藩ヘ御指令相成、尚昨六年六月中、教部省ヨリ湯殿山神社ト相心得、社格見込相立可申立、尤佛像佛具ハ取除、社僧復飾等ハ可任望、祭神ハ大山祇神ト可心得旨、酒田縣ヘ相達候趣モ有之、既ニ神社ニ決定ノ上ハ、近國無雙ノ靈山人民尊崇ノ實況ニ對シ、縣社ニテハ不相當ノ趣、縣官具狀ノ旨モ尤ニ相聞候間、同省見込ノ通リ、國幣小社ニ可被列哉、左候ヘハ月山神社ハ式內大社ニテ、古來大物忌神社ト同樣ノ社格ニ付、是又伺ノ通國幣中社ニ列セラレ、就テハ三社經

費等ノ儀モ、中立ノ通、御許可相成可然哉、仍テ御指令幷御達按等相伺申候、七月七日

羽後矢島藩離檀につき檀那寺故障處置伺

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

矢島藩伺辨官宛

管內ニテ神葬祭願出候者、去十月伺濟ノ通、規則相設差許來候處、於檀那寺、追々離檀ノ者有之候テハ、難立行ニ付、聞屆不相成樣致度歎願候向有之候、右ヲ故障ト致候ヘハ、遂志候者無之ニ付、此外故障無之候ハ、聞屆不苦儀ニ御座候哉、此段奉伺候、以上、四年六月十四日藩

民部省意見辨官宛

別紙、矢島藩ヨリ神葬祭許可ノ儀ニ付云々、伺出候趣取調候處、左ノ通被仰渡可然ト存候、依之御差圖案取調、本書返信此段申進候也、四年六月　日

御差圖案

書面神葬祭ノ儀、人民ノ望ニ依テ願出候ヲ、無謂寺院ニ於テ故障等致シ候儀ハ無之筈ニ候條、篤ト情實ヲ糺シ、全ク事故無之ハ、歸依ノ者神葬祭差許候儀不苦候事、

辛未六月

福井藩管內僧侶を平民に歸せしむるの件

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

四年

福井藩管內僧侶ヲ漸次平民ニ歸スルノ處分方法取調更ニ伺出シム、

福井藩伺辨官宛

今般奉伺候通、人民平均ノ趣意ヲ以、廣ク敎育撰擧ノ法ヲ設ケ候際ニ當リ、獨リ僧侶ニ限リ、從前ノ通リ度外ニ取計置候テハ、藩制改革ノ條理ニ於テ不都合ノミナラズ、一視同仁ノ御政體ニモ適當仕間敷ニ付、漸次平民ニ歸シ候樣致シ度、尤苛酷排斥人心ニ關係候筋ニハ不相涉樣可仕候間、其處置ハ當藩ノ適宜ニ御任セ相成度、尙處置ノ廉ハ、其節ニ御屆可申上候、此段奉伺候、以上、四年五月八日藩

（朱書）「書面ノ趣ハ、人民ノ屆ニ依テ、漸々處分ニ運ヒ候ハヽ、其節方法取調更ニ可伺出候事、」

越前大野郡暴動一件

〔社寺取調類纂〕四六六

管下大野郡士民騒擾御届

當縣管下越前國大野郡之内、頑民共說教之趣意ヲ誤解シ、疑惑ヲ生セシヲ、姦黠ノ僧侶煽動シ、近ク所々在々集合之趣相聞候ニ付、本月五日福井支廳諸官員之内一名、及邏卒十員、大野町ニ出張、魁者五名呼出シ、懇篤慰撫、福井支廳迄召連、又更ニ友兼村専福寺住僧ヲ召呼ント罷越候處、豈計ン、既已ニ無數之鐘聲ヲ期トシ、村民各猪鎗竹槍等ヲ携ヘ、三千餘集合シ、邏卒ヲ取圍、暴舉ニ及ヒ候故、不得止拔刀シ、四面突込候竹鎗ヲ打拂ヒ、防禦中、終ニ疵傷ヲ受ケ、辛クシテ脱逃セシ由、尤其前一遍ノ請願モ無之ニ付、支廳官員派出シ、赴(趣)意取糺候積之處、既ニ大野町地番役所ヲ放火シ、同所富商布川某、敎導職敎願寺及戸長等之居宅ヲ毀壊シ、各念佛旗ヲ把リ、市在横行、毎戸壯者ヲ要募シ、其徒頓ニ增加、猖々タル勢ヒ、櫛比支廳ニ注進有之、元來佛ニ心醉スルノ頑民、容易ニ說諭了解スヘカラス、猶追々侵入之勢ヒ有之ニ付、不得止福井居住之貫屬ヲ備ヒ、土寇襲來ノ防禦ニ虞備セシ趣、本日午前第九時報知有之候、尤昨七日、其初報ヲ得、

爲鎭撫參事村田氏壽迅速出發仕候、尙巨細ノ儀ハ、追々上申可仕候得共、不取敢支廳之報告ニ因リ、此段御屆申上候、以上、

明治六年三月八日　敦賀縣權參事　寺嶋直

大藏大輔　井上馨殿

敦賀縣管內頑民暴動ニ及候段、別紙之通屆出候ニ付、爲御心得、不取敢及御照管候也、

明治六年三月十四日　大藏省

敎部省

御中

敦賀縣管民暴動之儀、稍鎭定ニ相成候旨、別紙之通申牒候間、爲御心得此段致御通知候也、

明治六年三月廿二日　大藏省

敎部省

御中

敦賀縣暴徒鎭靜之旨、別紙之通申牒候間、致御通知候也、

明治六年三月廿四日　　大藏省

教部省

御中

敦賀縣下暴動平定致シ候段、別紙之通屆出候ニ付、爲御承知、右寫御廻申候也、

明治六年四月十三日　　大藏省

教部省

御中

社寺取調類纂一五一

管下越前國大野郡動搖ニ付御屆

大野郡頑民暴動之儀、去ル八日不取敢御屆申上候通、其節取締邏卒百方及說諭候得共、何分數千之頑民、熾々タル勢力、說諭モ竟ニ行屆兼、別紙之通、元足羽縣支廳ヲ初メ、人家ヲ燒亡スルモノ五軒、高札場御布告掲示所幷屋宅ヲ破毀スル五軒、邏卒手負ノ

者四人、其他之暴動甚敷候處、官員出張、種々盡力、漸ニ一時ノ處分ヲ以テ、一先鎭靜ニハ相成候得共、頑民トモ名トスル處ノモノ、耶蘇宗拒絶之事、眞宗說法再興ノ事、學校ニ洋文ヲ廢スル事、斯三條ニシテ、彼頑民共唱フル處ノモノ、朝廷耶蘇教ヲ好ム、斷髮洋服、耶蘇ノ俗ナリ、三條ノ教則ハ、耶蘇ノ教ナリ、學校ノ洋文ハ耶蘇ノ文ナリト、其他地劵ヲ厭棄、諸簿冊悉ク灰燒(燼カ)トシテ、新曆ヲ奉セス、舊曆ヲ固守シ、種々浮說妄誕ヲ唱ヘ、兎角舊見故態ヲ脫セス、然而已ナラス、當國ノ儀ハ、宗門之弊習淺鮮ナラス、近頃說教之一件、疑惑之機ニ乘シ、姦究出沒煽動致シ、愚夫愚婦ニ至ル迄、一ツ之雷同響應セサルモノナク、人氣騷然、右ハ大野一郡而已ナラス、吉田丹生今立ノ三郡ヘ波及蔓延、竟ニ擧國沸擾之形勢有之、不容易次第ニ付、今後前件暴動之魁首タルモノ、搜索捕縛、夫々及處分候ニ付而ハ、是上再發ハ必然ニ付、不得止、兵力ヲ備ヘ、鎭壓セサルヲ得ス、依之、名古屋鎭臺ヘ至急出兵之儀申入、尚又貫屬之强壯ヲ募リ、各地保護之儀、臨時取計置申候、尤モ詳細之儀ハ、追々稟上可仕候得共、不取敢此段御屆申上候、以上、

敦賀縣權參事　寺島　直

明治六年三月十日　敦賀縣參事　村田　氏壽

大藏大輔　井上　馨殿

是迄時々申上候管下土寇蜂起之儀、大野郡ハ先ツ鎮靜之狀勢候處、又々去ル十一日夜ヨリ、今立郡村民共更ニ黨與ヲ結ヒ、暴動追々延蔓、各所寺院或區戸長或ハ豪富之居宅ヲ毀燒シ、不容易ノ形狀ニ付、去ル十二日權參事寺島直、并横池大屬等、福井支廳ヨリ直チニ出張、百方說諭致候ヘトモ、些モ聽從之體無之、是上ハ鎮定之程難計ニ付、不得止、鯖江貫屬ヲ雇募シ、中新庄村迄繰出、兵威ヲ以テ壓制セントスル處、兇徒頗ル抗拒ヲ成シ、或ハ進擊之形狀ニ付、無據及發砲候處、一時散亂候得共、彼等又地ヲ變シ、水落村ニ蝟集シ、同所區長ノ宅ヲ放火候趣、所詮姑息之處置ニテハ鎮定之義無覺束候間、彥根分營ニ引合、迅速ニ小隊出兵相成候樣申向候段、縣地ヨリ申越候ニ付、此段不取敢御屆ケ申上候、尙委詳之儀ハ、追々上申可仕候、以上、

明治六年三月十九日　　敦賀縣權令　藤井勉三

大藏大輔　井上馨殿

越前國大野郡暴擧鎮定ニ付御屆

本月廿四日御屆申上候越前國大野郡暴擧罪魁首唱之者數多就縛之末、各區戸副長

ヲ始メ、小前末々迄呼集メ、朝旨ノ正大ナル、大令ノ公明ナル所、反覆説諭ニ及ヒ、脱然從來ノ僻見ヲ除去シ、兼テ御施行之件々ヲ始メ、總テ御布告之旨、謹テ遵奉シ、毫モ違背仕間敷、且燒却破壞ニ及ヒ候地券調書類等、速ニ補圖差出可申之旨、各區戸副長ヨリ證書差出サセ申候、日今ニ至リ候而ハ、民心唯兵威ニ畏服候而已ニアラス、偏ク縣令ヲ奉體シ、悔悟順隨之實情相見ハレ、全ク平定ニ属シ候ニ付、鎭臺兵ヘ申談ノ上、去ル廿五日大野表引揚ニ相成申候、出張官員モ昨今追々引揚申候、尤其許按撫ノ儀ハ、精々戸副長ヘ申示シ、且大野勝山之屯所ヘ邏卒ヲ增加シ、取締方手厚ク申付置候事ニ御座候、此段御屆申上候也、

敦賀縣權參事　寺島　直
敦賀縣參事　村田　氏壽
敦賀縣權令　藤井　勉三

明治六年三月廿八日

大藏大輔　井上　馨殿

敦賀縣管内妄動ニ付、御省官員爲鎭撫、説諭御出張之旨承知致シ候、然ル處、右ハ昨日御通達申進候以來、稍鎭定ニ到候樣、猶同縣ヨリ屆出候付テハ、當省ヨリハ、別段官員

派出等不申付候、御省官員モ御出張等ニハ及ヒ申間敷哉ニ存候、御見込如何ニ御座候哉、一應右邊承知致シ度、此段及御掛合候也、

明治六年三月十五日　大藏省

敎部省

御中

[illegible]

敎賀縣ヘ(官)定員派出ノ儀ニ付、大藏省ヘ回答按

敎賀縣管內妄動稍鎭定ニ至リ候趣、同縣ヨリ屆出候ニ付、御省官員派出御延引之旨、了承致候、然ルニ、今般ノ妄動ハ、敎法上ノ儀ニ付、誤解等ヨリ興起シ、御主意貫徹不致候テハ不相濟儀ニ付、一旦鎭定致シ候共、一應爲念、當省ヨリハ前議通リ官員派出致候積リニ候條、此段及御回答候也、

明治六年三月十五日　省

大藏省

御中

別紙之通大藏省ヨリ申來リ候間、御回（廻カ）申候也、

宿直

藏田　國興
物集　高見

黑田教部少輔殿

敎法上ノ儀ニ付、誤解等ヨリ、愚民妄動御主意筋貫徹不致候而ハ、不相濟事ニ付、假令一旦鎭定致シ候而モ、尙爲念、當省ヨリハ前議通リ、一應官員差出候積リト、大藏省ヘ御回答有之度候事、

北代ヨリ之書狀ハ、落手ノ證御遣シ置可被下候、

璣

宿直御中

第三月十五日午前第十時參着支廳詰相馬ヨリ來翰之寫

去ル十二日權參事殿始メ、池田鄕出張之儀、及御報知候後之景況、左ニ粗申述候、十二

日夜、横地大嶋始メ、山田中村等、運卒ヲ指揮シ、村々說諭致シ、粟田部迄罷越候處、數千之暴徒區長木津郡平之家財什具取出シ、破毀致候處へ到着シ、多人數之囂々タル、說諭方迚モ難行屆ニ付、幸ヒ隣家之家根へ掛ケ有之階子ヲ見附、直ニ屋根へ登リ、大音聲ヲ以テ、致說諭候處、忽チ階子ヲ倒シ抗敵候ニ付、不得止幸クシテ潜行、鯖江迄退キ、櫟叄事殿へ相報候處、如斯キ暴戻不廷(遑)ノ徒、斷然討伐可致候御決議、兼テ募リ置候鯖江貫屬之壯是(丁)ヲ招集シ、直ニ進擊中、新庄村ニ蝟集之土寇ヲ迎ヘ、大砲二三發空放候處、各驚愕狼狽散亂致シ候ニ付、速ニ鯖江迄兵隊引上ケ相成候事、

右十三日拂曉、鯖江ヨリ報知到來、一時土寇共場散亂ストモ、何レ賊ヘ又蟻集可致ハ必然ニ付、此機會ニ乘シ、直ニ大野郡迄モ進入、奸凶之徒ヲ進捕、郡中一洗可致見込ニテ、當地ヨリ應援兵二小隊出張之手組取掛リ居候處、午前第七時頃、谷(永カ)落村へ突出シ、（鯖江ヨリ福井ノ道三十リ）、區長清水新右衛門之宅ヲ破毀シ候趣、急報有之候ニ付、右小隊出發、村田叄事殿モ出張ニ相成、此兵隊到着ヨリ前ニ、鯖江ノ兵隊出張、拔刀ヲ以テ三人ニ手負セ候ニ付、下河端村へ退キ候テ、大礮二門ヲ以テ狙擊、五六發ニ四五人打倒サル、ヘ趣聞ヘ、夫ヨリ散亂致シ候ニ付、鯖江之兵隊ニ合シ、口々進擊ノ手筈ニ相成候事、

但シ、口々配當、隊長始メ、兵士ニモ人名書等ハ跡ヨリ可相伺候事、

右士寇横越村ヘ屯集ニ付、福鯖武ノ三兵ヲ以テ、一時鎭壓ノ手續ニ候處、凶徒共ヨリ大野郡同樣ノ願書三ケ條、總代二人ヲ以テ差出候處、懇篤理解ノ上難聞屆旨申渡、猶此上彼是不條理申立、村落横行候時ハ、嚴ニ兵力ヲ以テ伐取候旨申渡候處、漸ク承伏、爾後二時前ヨリ、追々引取、薄暮ニハ凶徒掃地ヲ引去リ申候、其後河島村屯集ノ處、是モ又漸々解放ノ趣、確乎注進有之候事、

一午後二時、川北諸村土民蜂起ス、兵庫村森田村ヘ蝟集、直ニ廳下ヘ迫リ可申旨注進、楠比廳下接近ノ處故、卽刻兵隊、加賀口ニハ鈴木清門、槇ノ嶋口ヘハ大野石川出張、其（他）地要路々々口ハ兵隊ヲ置キ、或ハ邏卒ヲ配リ置候事ニ候、森田ノ處ハ、僧侶有志ノ者兩三人、頻ニ周旋、遂ニ三ケ條（大野ノ徒同樣ノ事ナリ）ノ願書ヲ出シ候處、自坊自檀ニテ説法者不苦候得共、其他願意難聞屆ノ旨指圖ニ相成、段々説諭方盡力ニ候得共、暴戾悔（侮カ）慢ノ徒、敢テ承伏不致、舟橋中央迄進來、彌不遑ヲ極メ候ニ付、不得止兵隊ヲ以テ嚴ニ打懲シ、追散シ、森田近邊ノ者一人モ居殘不申、凶徒五拾二人捕縛ニ相成申候、尤森田ヘハ、千本久信殿村田參事殿御出張ニ相成、明日ハ追々進入候、手組ニハ恐ラクハ是切リニテ鎭靜可相成ト存居候處、豈計ン、又針原村ニ屯集候報知ニ付、森田ヨリ進擊候處、散亂致候、捕縛四拾十（マヽ）人計リ、丸岡ノ方ニモ沸起ノ趣ノ處、丸岡兵隊速ニ相困（固カ）メ候ニ

付、市中ヘ侵入スル不能、何レ丸岡兵隊ニテ取押可申ト存居候事ニ候、昨夜森田ニテ散亂之殘賊、川西ノ方ヘ廻リ、六日市場中角渡等ヘ鐘鼓ヲ鳴シ相集候趣ニ付、即刻其手宛ニ相捗ヒ申候事、

一大野郡中在々勝山大野市中共靜謐ノ趣ニ相聞申候事、

追テ官員出張ニ相成、只今ノ處ハ、僕一人、他ハ舊官員而已殘居、晝夜混雜、詳細取調出來兼、支面前混亂（[illegible]カ）連續不致候得共、此段不取敢及御報知候也、

明治六年三月十四日午後三時從支廳

九等出仕　相馬朔郎

本縣

庶務課御中

管下三郡士民騷擾報知按

管下越前國諸郡士民騷擾ニ付、夫々御屆申上置候內、大野郡ノ動亂ハ、聊鎮定候得共、未其魁首タル者始捕縛糺彈等ニ至ラス、今立郡ハ既ニ鎮定、其徒數千人畢ク平身低頭、伏罪ノ體顯然、決シテ餘燼再燃ノ憂ハ無之、內人違ニ本廳ヘ果道中ニ御座候、依テ

大坂鎮臺彦根營處兵隊出張ノ義見合相成候樣及掛合候、然ルニ、又同國坂井郡河北ノ各村、前兩郡ノ蜂起ニ誘セラレ響應スルノ擧ニ及ヒ、兵庫村及ヒ森田驛等ニ雲集シ、隙ニ乘シ、直ニ支廳ニ迫リ、強訴ニ及ハント囂々タル由、續々報告アリ、乃チ官員數名忽チ福井貫屬及ヒ邏卒ヲ督シ、同所川北加賀口及ヒ槙ノ島口、其間道諸口々分配シ防備セリ、是ニ於テ、僧侶有志ノ者數名周旋奔走懇篤説諭シテ、卒ニ森田ノ衆徒ヨリ三ケ條（大野郡ト同願也、）ノ願書ヲ出スニ至ル、官吏其條願中自坊自檀ニ於テ説法スルヲ許可シ、其他ノ條件一モ許容シガタキ旨申聞ケ、且ツ懇々説諭ノ辨解スレトモ、元來川北ノ地ニ於ケルハ、九ト（分カ）ハ久シク眞宗西派ニ沈溺スルノ頑民而已ニテ、官吏ヲ視テ佛敵トナスノ勢擧（マヽ）ナリ、倨傲侮慢ニシテ少シモ服從スルノ色ナク、尙進歩シテ舟橋ノ中央ニ至ル、不得止一時兵力ヲ以テ之レニ迫テ、追テ十二人ヲ捕縛セリ、時ニ參事村田氏壽、舊權參事千本久信、適々來會シ、遂ニ兵卒ニ命シ、針原ニ聚合スルノ賊徒ヲ急擊セシム、賊潰テ逃散セリ、縛シテ四十人ヲ得タリ、又丸岡近傍ニ方テ一騷擾アリ、丸岡居住ノ貫屬其咽喉ノ地ニ據リ守防シ、依テ市街ニ亂入スルヲ得ス、憶ニ必シモ兵力ニテ鎮制スベシ、前夜森田驛逃走ノ賊、又川西ニ渉出シ、六日市及ヒ中角兩渡ノ邊ニ蟻集シ、鐘ヲ撞鼓ヲ擊、其餘黨ヲ募聚シ、再擧ヲ謀ルノ勢ヒアリ、因テ雇兵及ヒ

遷卒等追々進行シテ、之レヲ追撃セント、前書坂井郡以下昨十五日福井支廳官員ヨリ本廳ニ報知之趣申越候間、是又不取敢御届申上候、管内處分動亂容易ニ取調ガタク、因テ詳細ノ儀ハ、各郡鎮靜ノ上夫々上申可仕候也、

本廳

三月十六日　　庶務課

權令殿

闕（閣カ）下

昨十五日午前六時參着鯖江出張ヨリ來翰寫

玉島權大屬ヘ御委托ノ御用書、未曉第二時到着致披見候、右ハ今立郡動搖云々ノ儀ハ、昨十三日第八時幷同夜第一時之急信ヲ以テ、追々御承知ノ通、兇徒トモ凡二万人餘面縛伏罪、全ク鎮靜ノ姿ニ付、昨夜ノ處ハ、兵伍モ總テ休隊、今朝横地大屬以下聽訟課不殘福井武生ノ催兵ヲ引キ、夫々巨魁捕縛トシテ出張相成、既ニ縛手ノ者追々護送相成候得ハ、一般恐懼縮身、最早再燃ノ儀ハ無之哉ニ相聞候ニ付テハ、昨朝申進候彦根營處出兵ノ儀ハ、先御見合相成候樣致シ度、別紙之通リ、自當所直ニ同營ヘ急使

ヲ馳セ候間、此段御承知有之度、尤今立郡擾亂ノ儀ハ、未タ本省正院等ヘハ御屆有之間敷候間、先般大野郡動搖ノ不取敢ノ御屆面ニ比較シ、同樣御屆書大急捷御差出有之度、䅘(詳カ)委譯ノ義ハ、追テ審判理正ノ上逐次御報知可申、此段及御掛合候樣、權參事殿御差圖ニ有之候、以上、

鯖江出張

第三月十四日午後五時發　庶務課

本縣御中

破毀　粟田部村　木澤郡平

同　布屋某

同　外ニ二軒

燒亡　五箇村　小村淸朔

土藏三ヶ所門トモ

同　寺二ヶ寺

同中新庄村　妙順寺
同水落村　清水新右衞門
破毀　薊生田村　。治郎左衞門
同　小坂村　富田十郎右衞門
同　庄堺村　蒲五八郎
〆拾二軒
右ノ外未定、追々可届出候得トモ、大概如斯御座候也、
前條ノ次第、鯖江出張ヨリ報知ニ候間、及御廻達候也、
第三月十六日　本縣庶務
東京出張所
御中

本縣ヨリ書狀ノ内書拔

大野今立坂井三郡土寇擾亂ノ一條、朝廷へ對シ恐縮此事ニ御座候、併シ昨今ハ全ク致鎭定候間、此段御休神可被下候、管内士民モ漸ク致息居候、此條秋毫モ縣政ヲ怨ミ候ヨリ相起候ニハ無之候得共、只敎化ノ不行屆ニハ恐懼不少候、今日迄捕縛ノ者四百人餘、佛蠢不幸ノ民トハ乍申、誠ニ憫然ノ事ニ候、先ハ匆々頓首百拜、

三月十六日夜　寺島　直

藤井權令殿

別紙之通、本縣ヨリ昨夜報知御座候ニ付、進達仕候、以上、

三月廿三日　敦賀縣權大屬　松浦　安貞

大藏大輔　井上　馨殿

管下士民動搖報知有之ニ付上申

管下越前國郡村士民動搖之儀、追々御屆申上置候處、猶又昨夜報知有之候ニ付、本縣ヨリ差送候書類寫取、其儘上申仕候、右ニテ御承知可被下候、以上、

明治六年三月廿一日　敦賀縣權令　藤井　勉三

大藏大輔　井上　馨殿

武生區長兼學校雜務掛谷口一學ヨリ報知、

同夜八時過屆

昨十三日午前十二時御地出發、同夜十一時頃武生ヘ到着、取締出張所ヘ出頭、大谷寛等ト合議仕、御地ニテ御指令ノ趣夫々取調申候、

一　一揆ニ付、當所關係之概略左ニ奉申上候、

一　三月十二日夜、權參事殿ヨリ當所士族松本勉殿ヘ、御紙面ヲ以、兵隊豫備致置候樣申來候、貫屬ヘ一同心得申聞、爲市中取締、人員十名爲相詰、粟田部新庄等探索申付、周旋候事、

一　同十三日朝、鯖江ヘ出兵候樣申來、人員五拾名兩度出張之事、

一　清水頭粟田部ヘ爲護衛、同十二時前四十名一隊出張、同夜粟田部鎭靜ニ付、馬上免付ヘ引取、官員曾我殿差圖ニ付、夜半後武生ヘ引揚候事、

一　武生取締巡邏七十名備置候事、

一　大谷寛、淺井雅藏等ト申談、近境夫々手配リ、其他遠地ヘモ探索差出置候事、

一十一日、淺井謙藏福井支廳へ罷出候處、御達ニハ大野郡動搖ニ付、追々波及ニモ難計候間、區内豫備心得居候樣トノ事ニテ、十二日引取掛ケ、途中ニ於テ、今立郡動搖ノ報ヲ得、鯖江御出張へ罷出、打合候處へ、權參事殿横地大屬殿着ニ相成、御指令承、引取當區内夫々手配向仕候事、

一右之形況ニテ、先ツ鎭靜ノ體ニ相見へ候得共、民心今以テ不穩ニ付、無怠備テ心配仕居候、

一十四日朝、福井ヨリ早駈ヲ以テ報知、同所貫屬八十名鯖江へ出兵、池田ノ方へ繰リ込ニ相成、御備ノ由、坂井吉田兩郡モ何歟不穩候由、其他無根風說恟々申鳴シ候得共、實着見當候ハヽ、追々御報知可及候得共、先大略左之通リニ申上候、

一私歸着後相變シ候事無之、學校モ平常之通、校業（授カ）爲致候、依之區内人心驚愕不仕候、先歸着御屆旁匇々、

三月十四日朝十一時　　谷口一學

有馬典事殿

一今十四日ヨリ今立郡之内、捕縛ニ取掛リ候事、

一鯖江手ニテハ、昨朝砲發、死人モ有之候得トモ、當處手先未タ左樣ノ處ニ至リ不申

候、

記

打傷三ヶ所
打傷二ヶ所
突傷數ヶ所
突傷數ヶ所

邏卒長
上野　弘
吉田　豊
中村　信

邏卒
岩佐喜十太
岩佐　靜夫
宇野　魁介
岡本　賢
戸村敏一郎

捕亡手先之者
伊藤　善吉

右之者トモ、大野邏卒屯所ヘ出張罷在、土寇襲入亂暴ノ節、鎮壓方奮激盡力仕候得トモ、別紙御屆ケ申上候通、何分數千凶徒之猛勢、微力ノ能ク支ル所ニアラス、終ニ疵傷ヲ蒙リ、共慘毒ニ中リ候者ニ御座候、以上、

破毀之分三月六日

大野村

六十六區戶長　布川源兵衛

同所眞宗

權訓導　教願寺

同所

商法會社

六十四區戶長　佐々木修

但シ、家屋ハ破壞不致候得共、家財什器悉ク破毀棄拆ス、

同所　高札場

并　御布告掲示場

放火之分三月六日

大野町
元足羽縣支廳
同商
大坂屋七太郎
同士族
内山良八郎
木ノ本村
地券取調御用掛　杉本　弘
菖蒲池村
六十五區戸長　正津孫十郎

右之者トモ、大野邏卒屯所へ出張罷在、土寇襲入亂暴ノ節、鎮壓方奮激盡力仕候得トモ、別紙御屆ケ申上候通、何分數千凶徒之猛勢、微力ノ能ク支ル所ニアラス、終ニ疵傷ヲ蒙リ、其慘毒ニ中リ候者ニ御座候、以上、

破毀之分三月六日

大野村

六十六區戸長　布川源兵衛

同所眞宗

權訓導　教願寺

同所

商法會社

六十四區戸長　佐々木修

但シ、家屋ハ破壞不致候得共、家財什器悉ク破毀棄拆ス、

同所　高札場

幷　御布告掲示場

放火之分三月六日

大野町

元足羽縣支廳

同商

大坂屋七太郎

同士族

內山良八郎

木ノ本村

杉本弘

菖蒲池村

正津孫十郎

地券取調御用掛

六十五區戸長

金澤藩離檀幷宗旨替處分伺

〔太政類典〕第一編第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

三年閏十月

金澤藩神葬祭ノ者、離檀及檀那寺宗旨替等處分、

　金澤藩伺

一神葬祭執行仕候者、舊來ノ檀那寺離檀仕度段願出候者有之候ハヽ、承屆不苦儀ニ御座候哉、

一子細有之、檀那寺替或ハ宗旨替願出候者御座候ハヽ、承屆不苦儀ニ御座候哉、

右兩條奉伺候、以上、三年閏十月十八日落

（朱書）「伺之通」

富山藩合寺の布告

〔富山領内合寺布告之寫〕橋川正氏藏本

此度
朝廷（[illegible]下同ジ）より萬機嚴律之御布告有之、追々時勢轉變之秋、郡市諸藍（[illegible]若カ）合準而一派一寺ニ御改正有之候條、迅速合寺可有之候、尤寺號之義、是迄之通可相唱、若及違背候ハヽ規正之嚴科可被處候也、

庚午
壬十月廿七日

藩廳

聞名寺
元順

淨久寺
淨儀

金乘坊
道耀

右藩內淨土眞宗一派觸次(頭カ)中付候也、

十一月二日

從前寺格役寺等取扱有之候得共、渾而廢止、今度更ニ別紙之通被申付候、各承知配下にも可被相達候也、

十一月二日

此度

朝庭より重き被　仰出之趣も有之候間、錄(祿)制相改、百俵を上とし百一俵ゟ以上減俵申付候條、此度之御趣意篤と勘味之上可令奉戴候也、

一知事樣東京御遊學御願濟ニ付、先月廿八日此表被遊　御發駕、此段爲承知申達候也、

一當形勢ニ付、見込を以執行之義、今般相願候之處、御許容ニ付、速ニ先月廿八日此地發出、就而者御再新後布告を初、百事萬端聊ゝり共藩律ニ觸候者於有之者、嚴罰可爲處置候、士卒都市ニ至迄奉戴之御趣意、盡力有之度、此段申達置候也、

一此度諸寺院合寺御改正ニ付、他藩支配地ニ有之候檀那一切不相成候事、

十一月朔日

右之通相達候條、各承知觸下江も可被相達候也、

十一月三日

一郡市ニ有之候明き寺院至急取揚可申候也、

一諸寺院之内令歸俗候者有之候ハヽ、當月限り可願出、是迄之御讓地傷監其儘被下候也、

十一月五日　　社寺方

中堂寺

右藩内淨土眞宗一派觸(頭カ)次申付候也、

十一月七日　　社寺方

通院并元蓮華寺地建物相渡候條、一派申合、可令建議、仍而元蓮華寺門取揚通院一ト門ニ可致候也、

十一月八日　　社寺方

此度
朝庭之御趣意有之候ニ付、合寺申付候處、速ニ令奉體候段奇特之至ニ候、就者佛道探(鍛)練(錬)之輩、寺號其儘被差置候得とも、有名無實之輩速ニ可申聞、廢寺院可申付筈ニ候、併有實之者有之候ハヽ、一派人撰を以申出候得者、右後住可申付候、此段申達候也、

十一月十一日　　社寺方

富山ニ而承候ニ付寫置

當節宣教師藝州邊ゟ下向之趣ニ而、諸家ゟ難問之次第左之通、

仁(人カ)法二教

神佛本迹

佛法國益

神明歸佛

鎭護國家

生死義僕
三世因果
須彌山有無
洋教新古
二法一双
葬式益無益
法事弔勤
右十二題不答之僧を還俗之上、寺者古跡之事、
一富山府內常樂臺通院持專寺へ東西合寺之事、

富山藩合寺見聞談

泉　說　忍氏報

大正十五年一月三日付の最長年者を尋ねて聞きし談

富山縣婦負郡杉原村井田

阿部仁三郎

（本年八十一歲）

合寺の騷ぎがあつたときは、私(仁三郎)が廿五歲のときで、たしか明治三年であつたと思ひます、あなた(說忍)の御親父(流芳)さん、卽ち御講師(流芳)さま(當時助敎)の時で、その時は丁度今の十六日御まんさん卽ち開山樣の御往生なされた御正忌の日で舊曆の十一月廿八日であつたと思ひます、その御まんさんの御說敎を御講師さまがしておられました、私も丁度御說敎を聽きにいつて居りました、說敎最中に仰しやるには、皆々さま大變な事が起りて來ました、今御殿樣(藩主重松公樣)の御家來共大勢が、荻島や廣田や黑田の御寺どもを片つ端からたゝき毀して、どん／＼大筒や刀を以てだん／＼こつちへ攻め進んで來るから、早く御堂を毀して疊まなければならない、昨年建てた許りの御堂を毀すと云ふは何と云ふ情けない事だと、高座の上で泣きながらの御說敎、早くやらないと皆樣の命も危いとの事で、聽いて居つた大勢の參詣人共は、吾れや先き人やさきといそいで歸つてしまひました、その翌日であつたか、村中の人が總出をして井田の寺の御堂を毀してしまひました、そんな有樣ですから、ほとけ樣

を一時檀家の伊之助宅へ預ける事になりました、そうして御家内講師様始め皆々様は住ひに家なく、餘儀なく私の家(當時私の家は別家したばかりの時)へ御越しになりました、そして私の家に十日間程も居られました、御堂を毀してしまつた後は、役人方が調に來るでもなく、何の檢査もなく濟んでしまひました、まるで大荒れ風のあとの樣なものでありました、村の者どもも自然恐れる事もなく、各自の仕事をする樣になりました、後からこんな事なれば毀さねばよかつたと云つて、皆々再建したばかりの御堂を毀した事の餘り早やまつた事を、日々に惜みました、併しもう取りかへしがつきませんでした、八尾の明名寺や、福島の極性寺は御上に差し上げると申し上げた許りに、毀さないで助かりました、なんでも此の騒動を起した悪い人は、岡家老の林太仲とか云ふ二人であると云ふ噂でした、丁度今から考へると東京の大地震の樣なもので、餘り騒ぎが大きかつたから、皆もり／＼に恐れて前後の考へもなく毀してしまつたものです、

大正十五年一月二日城生西勝寺老僧を叩きて承りし談

婦負郡杉原村城生西勝寺住職

青山　超然師

（本年六十九歳）

合寺の事に就いて、順序よく記憶して居りませんが、何しろ私（超然）が十三の年で、慥か午年（明治三年）の十一月廿七日だと思ひます、富山藩（當時藩主重松公樣）の御家老で大參事をつとめて居つた林太仲から、嚴しい命令があつて、富山十萬石の領分（婦負郡一圓新川半分位）の各寺院の佛像を、悉く富山へ持ち出せとのことで、私も父に從うて、翌廿八日に富山常樂寺へ阿彌陀樣を持ち出す御伴をして行きました、常樂寺の近くの末寺で寢宿りして、それ以來毎日常樂寺の御堂に詣でゝ、朝夕の勤行をいたしました、眞宗の寺院の佛像（本尊阿彌陀像）は悉く常樂寺に集まり、御堂の餘間に札を張りつけ、各々陳列してありました、これは各寺の記しを存する爲めに、其他日蓮宗寺院は富山の大法寺に、禪宗は富山の金剛寺に矢張り佛像を集める事になつて居りました、かゝる暴令と共に今にも各寺院を燒き盡すとの噂さ專らで、人心恟々として安んずる暇もなく、非常に恐ろしい事でありました、こんな騷ぎが方々で起りましたから、各寺に於ても攻めくる前に、建立した許りの御堂や、其他を毀して疊み込みました處が多くありました、毀されないで殘つた處は、然るべき理由をつけ

で、廢頽した處もあります、一例を擧ぐれば八尾町聞名寺が殘りしは八尾町内で警察署所にする名義で、又桐谷村の光雲寺は煙硝製造所、福島村の長性寺は赤谷の水車場に運用するからとして毀損を免れたと云ふ事である、

當時は各藩尚ほ藩政治で、其藩主に絶對權があつて、藩命には絶對服從の有樣でした、丁度廢藩置縣の折で、武士共は至極殺氣漲ちてあつた頃で、我が富山藩は御寄大名で、石高以上の勢力があり、ときの政府は廢佛毀釋を唱へました、是れに賛するものが顏を賣りましたから、重松公(藩主)もその方へ心を引かれ、己が顏を擧げるため、家老等や儒者の言を用ゐて、廢佛毀釋を嚴命し、各寺を合せ儒道を起し、神國の威を揚げんとしたのである、當時岡田漢爾塾の門弟に原弘三、新川塚原村もと眞宗僧侶あり、富山の當久寺(當時藩の歸依厚かりし寺)あり、是等は佛教家で漢籍家、又渡邊停雲など漢學者あり、皆ときの家老林太仲と漢學の友達の間柄で、各々意氣相投合して居つたとの事、原弘三の如きは、眞宗坊主でありながら、合寺の事に加擔せしとやで、憎しみを受けました、併し中々勢力家で、後に還俗して婦負郡長澤村に第十三大區を置かれしとき、その區長(今の郡長より以上のものらしい)となり、中々勢力がありました、かゝる大事變が勃發して人心穩かでなかつたから、藩主重松公に、林太仲と共に、若

しやの危難を慮りて、江戸へ逃走しました、その以前に常樂寺に集りし信徒等は、當時常樂寺末寺妙德寺執事（常樂寺は住職なき寺、京都常樂寺の出張所のやうなもの）をして、屢々藩主へ嘆願をしたけれども、容れられなかつた、是も妙德寺執事は妙德菩薩と時の人々から呼ばれた位の德望家で、進んで言論をする樣な人でなかつた、この嚴命の觸れは、飛脚で持ち廻りの札のやうに開いて居る、今に書狀のやうなものが殘つて居るかどうかわからん、既に藩主や家老林太仲去りし後は、追々に自坊へ歸つた樣な始末で、此間約一年位であつたと思ひます、

此の合寺の騷ぎの前年に、郡内の濱ノ子村永應寺住職が墮落坊主とやらで、獄に投ぜられ、寺をも廢寺せしことあり、本山も干渉の餘地がなかつた樣でありました、又富山市在櫻谷の長慶寺（所謂妙神山櫻ある故櫻谷とも云ふ、今の吳羽山）と云つて、五百羅漢や金佛があつた寺、その寺の金佛を藩士どもが、如何なる動機か何百人も具足付きで、おしよせ金佛を引ずり出して、滅茶々々にたゝき毀した事があり、又富山藩の家老山田カゼンが、藩士に殺された事がある、非常に殺伐を極めて居つた頃の事で、藩命と云つたらちゞみあがつたもの、さういふ矢先きに、合寺の嚴命と共に恐ろしき噂さとり／＼で、グツの音も出さずに、むざ／＼と苦手前勝手に毀してしま

つたものが餘程多くあつた樣に思ふ、あとになつて誠に惜しい事をしたと悔んだものです、

舊富山藩寺院復舊の件

〔太政類典〕第二編第二百六十八卷第四類　教法十九　寺院二

九月十五日八年（朱書）

新川縣管轄舊富山藩合併ノ寺院復舊ヲ允ス、

　教部省伺

舊富山藩ニ於テ、寺院三百十三ケ寺ヲ八ケ寺ニ合併致シ候儀ニ付、新川縣ヨリ五年九月乙印申立、凡百二十ケ寺餘再建相成、其後尚合併中ノ者、再建願出候ヘ共、一且廢分講ノ儀ニ付、不聞届候處、今般同縣添書ヲ以テ、眞宗五十九ケ寺代理萬養寺住職清水巧曉外一人出京、甲印願書差出候、問糺シ候處、丙印申立候、右五十九ケ寺當時一寺ニ合併有之候共、各自寺名ハ存在致シ候儀ニ付、再建相成候ハヽ、地所ハ自費ヲ以テ買求メ被願可聞届ト被存候ヘドモ、元來寺院ハ檀家ノ共有物ニ候ヘハ

ハ、再建ノ儀、檀家ヨリ願出候筈ノ處、僧侶ヨリ願出候ハ少シク不條理ニ付、願書ハ差戻シ候上、同縣ヘ相達シ、諸宗合併寺院ノ内、檀家ノ者心得方幷其多寡永續ノ目途等取糺シ、再建ノ見込相立、更ニ可爲伺出哉、尤モ相川縣(下脫カ)佐渡、筑摩縣下松本、鳥取縣下隱岐等ハ、從前多分寺院ヲ廢シ候ニ付、右處分後陸續再建願出候モ難計候ヘトモ、這回新川縣ヘ可相達趣旨ヲ以テ、處分ノ積略相決シ置可然ト被存候、何分ノ御指揮有之度、此段相伺候也、八月廿五日　教部

(朱書)伺之通、

但、相川縣下佐渡、筑摩縣下松本、鳥取縣下隱岐等ノ儀ハ其時々更ニ可伺出候事、九月十五日

新川縣上申教部省宛

當縣管下元富山藩管内合併寺院ノ向、一昨年來復舊ノ儀頻リニ願出候ヘドモ、兼テ御指令ノ趣有之候ニ付、諭示差加ヘ置候處、今般又候數願ニ及ヒ候間、再四懇諭候ヘモ、右合併寺院中ヨリ、萬藝寺住職淸水巧嚴外一名爲總代、御省ヘ出願(二)、直ニ情願具陳仕度段願出、事情難默止ニ付、差許シ添翰相渡シ候條、出頭候ハ、(心)得ト御聽取被下、可然御僉議有之度、此段上申候也、六月四日

甲（某書）萬徳寺住職清水巧嚴外一名願歎事前書寫

去ル明治三年庚午十月、舊富山藩ニ於テ、卒然暴令ヲ下シ、諸寺院一所ニ合併相成候ニ付、懇願悲歎ノ情實、朝廷之ヲ御憫察アラセラレ、穩當ノ處置可致旨御沙汰ニ相成候ヘドモ、舊藩吏因循朝命ヲ等閑ニイタシ居候内、荏苒廢藩ノ時ニ至リ、爾後新縣ノ御處置ヲ以テ、同五年十月先ツ檀家七十以上ノ寺院ハ、開寺舊ニ復シ、其餘數十ケ寺ハ依然合併罷在候樣御達シニ相成、于今未タ其處ヲ得ス、日夜悲歎罷在候、爾來歎願數度ニ及ヒ候ヘドモ、始終下情貫徹不仕、實ニ方向ヲ失ヒ、悲歎已時ナク、依之不顧恐懼、反覆歎願候、曩ニ舊富山藩ヨリ諸寺院合併ニ相成候砌、庚午十一月十日ノ告示ニハ、佛道鍛錬ノ者ハ、其儘指置候ヘモ、有名無實ノ輩ハ、速ニ可申聞旨被相達、且又新縣ノ御處置ニ相成候テハ、去ル壬申十月二十七日ノ御告示ニハ、先般舊富山藩ニテ、其寺院合併申付候儀ハ、僧風矯正シ、宗弊ヲ洗除云々ノ御達ニ有之候、然ラハ則合併ノ主意ハ、全ク舊弊洗除ノ外無之候處、開寺ノ時ニ至テハ、只檀越ノ多寡ヲ以テ、區別ニ相成、檀家七十以上ノ向ハ開復、七十以下ノ向ハ合併罷在候樣御達ニ相成候ハ、最初合併ノ御趣意ト全ク相違仕候事、是畢竟了解難仕處ニテ、七十以上ノ檀家有之候テハ、舊弊ヲ脫却シ、七十以下檀家者ハ尚舊弊ヲ脫却セ

ザルモノト御見做シ被成候儀ニヤ、學解行狀ノ御糺シモ無之、檀家ノ多寡ヲ以テ、開令ノ御裁判ニ相成候事、實ニ疑惑悲嘆ノ至リニ不耐候、是不顧恐懼、反覆奉歎願所以ノ一ニ御座候、凡ソ廢藩立縣以來、政令多岐ナク、萬機一途ニ出テ、億兆一視、自他均等ノ公政ヲ敷セラレ、地租田法ニ至ル迄、悉ク一般ノ制ニ御改正相成候處、獨リ寺院ノ處分ノミ舊藩ノ悲制ヲ存シ、全ク一縣ノ内ニシテ舊金澤藩内ニ屬セシ者ノ如キハ、檀家ノ多少ニ拘ハラス、寺號アレハ必ス寺院アリ、舊富山藩ニ屬セシ者ニ限リ、或ハ檀家ノ多キヲ以テ、舊地歸住スル者アリ、或ハ檀家ノ寡キヲ以テ、未タ合併ヲ免カレサル者アリ、寺號アレ𪜈無キカ如ク、各々ノ住職アルモ一院ニ合所スル者、是臣等ノ了解難仕處ニシテ、均シク一朝廷ノ民タリ、均ク一縣内ノ僧タリ、若シ愛憎偏頗ノアル無ンハ、何ヲ以テカ此不同ヲナサン、是レ不顧恐懼、反覆奉嘆願所以ノ二ニ御座候、且ツ寺院ハ本寺法類檀家ノ共有物ニシテ、僧侶私有ノ物ニアラズ、是以テ營繕修築悉ク檀家ノ信施ニ由ラサルハナシ、僧侶ノ職掌只之ヲ看護シテ、門徒歸向ノ情願ニ從ヒ、有緣ノ敎法ヲ宣布スヘキノ場ナリ、故ニ檀家寡數ナルモ、崇敎信法ノ志深ク、能之ヲ維持スルニ耐ユル𪜈ハ、強チニ外ヨリ之ヲ廢滅スヘキノ理アルコトナシ、且ツ檀家ハ住職ノ德不ニ依テ歸依不歸依ヲ生シ、增

減ヲナスヘキモノナリ、然則チ去年七十軒未滿ノ檀家モ、今年ニ至テハ百軒ニ增モアルヘク、今年百軒以上ナルモ、來年減シテ七十軒以下ニ減スルモアルベシ、既ニ然レハ、檀家ノ多寡ヲ以テ開合ヲ異ニスルモノ、昔時宗判嚴重ノ時ハ格別、今日歸向勝手ノ時ニ在テハ、預シメ其制限ヲ定ムヘカラス、殊ニ檀家ノ貧富ト信教ノ厚薄トヲ問ハス、徒ニ現今員數ノ多寡ヲ以テ、開合區別ニ相成候事、是臣等了解難仕所ニシテ、而モ今日多檀ノ者必ス富ミ、少檀ノ者必ラズ究スト極ムベカラズ、少檀ノ者ニシテ頗ル學資ニ優々、相續ニ堪ユル者有之、既ニ堂舍ノ營築相望ミ居候者モ有之候ヘトモ、開寺ノ許可ナキヲ以テ、空ク素願ヲ達スルヿヲ得ス、豈悲歎ノ至リニアラスヤ、是不顧恐懼、反覆奉嘆願所以ノ三ニ御座候、去ル明治六年十月、開寺ヲ御省ヘ請願セシ砌、御指令文ニ、右ハ寺院創立ノ姿ニ相當リ、不容易ノ儀ニ付、難聞屆トノ御事ニ候ヘ𪜈、若シ寡檀ノ開寺創立ノ姿ニ相當候ハヽ、多檀ノ開寺ハ何ヲ以テカ創立ノ姿ニ相當リ不申候哉、然ルニ門徒七十以上ノ寺院ハ、創立ニ相當リ候モ、御開復ニ相成、獨リ門徒七十以下ノ寺院ニ限リテ、御聞屆無之候事、是臣等カ了解難仕處ニシテ、若シ一旦御處置濟ノ處、今復御著手ニ相成候テハ、創立ノ姿ニ相當リ候トナラハ、當時先ツ合併シ居ルヘキ旨ノ御達ハ、只一時ノ名目ニシ

テ、實ニ廢寺ノ御趣意ニテモ有之候哉、若シ爾ラハ、最モ不容易ノ御趣意ニテ、疑惑愈甚シク、深ク悲嘆ノ至リニ不堪候、是不顧恐懼、反覆奉嘆願所以ノ四ニ御座候、且舊富山藩管內ノ合寺ハ、寺號檀家ハ其儘區別シ、夫々住職モ相存シナガラ、其寺院ヲ解除シテ、境內ハ沒收同樣ノ御處置ニ相成、各寺住職ヲシテ一院ニ合居セシメラルヽ者、固ヨリ合寺統括ノ處分ニアラズ、之ヲ百方思考致シ候モ、決テ處分濟ノ名稱ヲ下シ難ク候、然ラハ則チ今後自費ヲ以テ境內ヲ買得シ、之ニ寺院ヲ構ユルモ、全ク轉地ト一般ニシテ、必スシモ新創ノ姿ニハ無之儀ト奉存候、然ルニ右樣一時非制ニ出タル殘暴名狀スベカラサルノ施設ヲ以テ、之ヲ處分濟ト御見做相成候ハ、臣等カ了解難仕處ニシテ、之ヲ制スルニ創立ノ名ヲ以テシ、其請願ヲ容レラレサル者、實ニ悲嘆ノ至リニ不堪候、是不顧恐懼、反覆奉歎願所以ノ五ニ御座候、寺院ハ暫ク之ヲ措キ、農工商ニ於テモ、家產ノ多少ニ隨テ、相當ノ家屋ヲ結構スルハ、貧富同一ノ儀ニテ、之ヲ束縛シ禁セラルヽノ理ハ決シテ有之間敷、而シテ其家屋ヲ沒シ、一處ニ混處セシムルモノハ、犯法罪民ノ外之ヲ見ス候處、獨リ寺院ノミ小(少)檀微祿ノ名ヲ以テ、永續ノ目途無キ者ト定メ、之ヲ犯法ノ罪民ト同視シ、寺院ヲ破却シ、住宅ヲ廢滅シ、以テ一院ニ合所セシメラルヽコト、臣等ノ了解難仕所ニシテ、

貧富貴賤ヲ以テ義務ノ堪不ヲ定メ、開合區別ニ相成候事、實ニ疑惑悲嘆ノ至ニ不堪候、是不顧恐懼、反覆奉嘆願所以ノ六ニ御座候、上件陳述スル處、偏ニ區等累年罪囚ニ等シキノ苦情ヲ忍ヒ、億兆一親ノ明政ヲ渇望シ、一點暴動濫訴ノ擧ナク、一向悲泣哀號スル處ニシテ、屢請願致シ候ヘ共、下情未タ通徹致サス候間、此度右合併寺院總代トシテ、清水巧巖、渡邊法秀出京爲致、伏テ歎願仕候、仰願クハ右情状深ク御憐察ノ上、公明ノ御詮議ヲ以テ、開寺ノ御處分被成下候ハヽ、生死以テ恩政ニ感黙舞踏可仕候、此段奉願上候也、六月三日 教部

淨源寺住職　義隆　龍珠
順學寺住職　桃井　學道
西福寺住職　城山　淨教
蓮臺寺住職　里村　題意
光善寺住職　佐伯　惠實
西岸寺住職　岩橋　秋榮
淨久寺住職　倡林　淨見
法林寺住職　久保　雪頂

淨德寺住職　花木　愛資
光善寺住職　武部　玄性
眞淨寺住職　永田　善入
淨光寺住職　藤岡　誘善
莊嚴寺住職　阿部　法澤
正源寺住職　松澤　惠了
回向寺住職　赤尾　住了
常照寺住職　堀井　響藏

光圓寺住職　石原　勸誘
常念寺住職　船溪　淨秀
樂入寺住職　楠　布教
善照寺住職　篁　寬道
報恩寺住職　川原　法寬
專勝寺住職　深山　正勝
祐教寺住職　清島　大慰
教圓寺住職　笹川　顯光
德圓寺住職　高原　法惠
則願寺住職　終夜　實天
雲龍寺住職　高橋　有善
圓照寺住職　清水　眞成
寶林寺住職　藤井　義證
圓福寺住職　巢山　了現
安立寺住職　杉安　了導

誓教寺住職　紫　教山
善存寺住職　森　方潤
佛號寺住職　重松　來招
圓光寺住職　慶山　秀生
西教寺住職　金龍　教淳
籠柳寺住職　杉原　淨行
珀明寺住職　白川　智
西念寺住職　片津　達十
正行寺住職　楠　正行
純圓寺住職　野神　峯月
淨德寺住職　北隅　弘宣
蜷川寺住職　壹川　賢道
教照寺住職　和泉　實淨
善得寺住職　越森　旭
善久寺住職　吉崎　靈成

圓龍寺住職　圓山　唯法
願念寺住職　藤島　霈聽
榮正寺住職　荻高　正榮
圓命寺住職　龜井　讓芳
長龍寺住職　富田　湛道
西元寺住職　神保　覺芳
萬蘂寺住職　清水　巧嚴
右合併寺受持代
専琳寺前住職　渡邊　法秀

照明寺住職　藤枝　意觀
信願寺住職　立花　自運
福恩寺住職　加藤　靈含
傳長寺住職　月見　顯淳
西源寺住職　上田　仙芳
專琳寺住職　渡邊　慈法
主寺
明德寺住職　林　龍音
萬蘂寺住職　清水　巧嚴

乙　新川縣伺（敎部省宛）

元富山縣ニ於テ、昨辛未夏管内寺院合併取計候儀ニ付、大藏省ヨリ適宜斟酌、速ニ穩當ノ取計可致旨、再度元富山縣へ御達相成候ニ付、右穩當ノ處置、速ニ取計申度、其中舊弊些理相成、元寺院へ差返シニ候部（誤ナラン）モ可有之候處、今以テ僧侶共種々苦情申出候訓、奇此後ノ處置、總テ當縣へ御任セ被成下度、去ル四月中相伺候處、書面ノ趣ハ處分ノ方法詳委見込書ヲ以テ更ニ可伺出旨、御指圖相成候ニ付、合併以來ノ形狀幷見込共左ニ申立候、

一元富山縣ニ於テ、管下諸寺院ヲ合併セシメ、當節僅ニ八ケ寺ト相成居リ申候、右合併取計候節、元富山縣ニ於テ僧侶ニ說諭シ、寺院ヲ合併セシメ、各生計ヲ遂ケ候樣、手當トシテ一ケ寺ニ付金三十兩充給與イタシ候處、右給與金ヲ受ケ、說諭ノ趣キ受書致シ候ヘ共、其中ニ自然追テ可相願段申出居候向モ有之、給與金ヲ受ケ候モノト不受者ト有之候ヘモ、何レモ一旦合併ノ儀ハ受書差出候間、當節八ケ寺ト相成候コトニ候ヘトモ、其實ハ面從ニシテ心服ニハ無之候ユヘ、其後屢々苦情申立、復古ヲ希望イタシ、或ハ諸本寺ヨリモ復古ノ處置ヲ仰願申立、大藏省ヨリモ適宜ノ穩當ノ處置相伺候樣御達有之、未タ改宗半途ノ內、新縣ヘ引渡リ相成候儀ニ御座候間、於當縣モ、大藏省ヘ追々改正ノ見込可相伺段、申上置候事、

右ニ付、當縣ニ於テ、適宜斟酌穩當ノ處置致シ度、則チ見込左ノ通ニ御座候、

一元富山管下寺院、方今ハ僅ニ八ケ寺ニ候ヘトモ、從前ハ三百十三ケ寺有之候テ、未タ改宗半途、僧侶トモ不服、種々歎願候間、都テ檀越七十家以上ヲ以テ一ケ寺ニ相建、七十家以內ハ同宗同緣ヲ以テ合併取計申度見込ニ候、尤モ今般見込ノ通リ、分合取掛リ候上、實地ノ景況ニ依リ候テハ、檀越五十家以上ヲ以テ一ケ寺ニ相立候分モ可有之、勿論無緣無檀ノ分ハ、追テ伺ノ上相廢候見込ニ候、

一前顯ノ通リ、僧侶トモ苦情申立候ト雖トモ、當管下新川、礪波、婦負三郡ノ八百七十七ケ寺ト、元富山縣管下合併ノ分八ケ寺トヲ合候ヘハ、凡テ八百八十五ケ寺ニ相成、右八ケ寺合併以前ノ三百十三ケ寺ト、當管下八百七十七ケ寺トヲ合セ候ヘハ、總テ一千一百九十ケ寺、僧侶合シテ五千二百八十八人モ有之、邊境ノ事ニテ、合併八ケ寺分、夫々舊寺ヘ爲復候テハ、却テ生計ヲ失ヒ、爲メニ僧風モ亂レ、遂ニ説教行屆キ兼候ノミナラス、從テ弊害相釀候樣可立至候ニ付、渇々活計相立、向來連綿寺職相勤候樣申付度、此上ハ右斟酌見込ノ取計方、當縣ヘ御任セ被下候ハヽ、時々處置相伺、至躰ノ基礎申出度候、

右之通リ相伺候、速ニ御指揮被下度候也、壬申九月十九日敎部

（朱書）「伺之通、壬申九月二十四日」

丙 清水巧嚴外一名申立

一當宗合併寺院凡ソ二百二十ケ寺餘ノ處、九十ケ寺餘開寺ニ相成申候、右九十ケ寺ニ地中七十ケ寺計リ有之、其分右本坊々々ヘ合併申付ラレ、寺名ハ存シ居候ヘ圧、同寺ニハ相成不申候、

一今般歎願連名ノ分五十九ケ寺ノ内、地中持ノ者四ケ寺有之、合シテ六十三ケ寺

ニ相成申候ヘ共、地中四ケ寺ノ儀ハ、先御處分ノ振合ニ準シ、本寺ヘ合併ニ相成候トモ據無之候、

一右五十九ケ寺新川郡富山町常條寺一院ニ合居罷在申候、法用ハ勿論寢食マデモ不自由ナル事ニ御座候、

一舊富山藩ニ於テ合併申付ラレ候節、請書差出シ候儀ハ、相違無御座候ヘドモ、右ハ其節ノ風習ニテ、上ヨリ申付ラレ候儀、違背仕リ兼ネ、無據受書仕候儀ニ御座候、

一其節堂宇指上候者モ有之、右ノ族ヘ爲褒賞金子給與ニ相成申候ヘドモ、只今願人ノ内ニハ、堂上(宇カ)獻上仕リ候モノ無之哉奉存候、去リナガラ數ケ寺ノ内ニハ、堂宇指上、右褒賞金受ケ候者モ有之哉、只今直ニ確答仕兼候、

一合併御解被下候ヘハ、寺院地所ノ儀ハ、銘々自力ニテ買求、上ヨリ地所等御下渡シ相願候儀ハ勿論、檀家ヘ勸財ケ間敷儀ハ決シテ仕間敷候、

但、當縣下寺院ノ儀、除税地些少ニテ、多分有税地ニ候處、元富山合寺處分ノ節、右墓地ノ外、悉皆御取上、士族ヘ被下候テ、其後當縣ヨリ檀家七十戸以上開寺被仰付候節ハ、銘々自費ニテ地所買求候儀ニ有之候也、七月

追テ、第二條申上候地中四ケ寺ハ、本寺ヘ合併候トモ無據云々ハ、右四ケ寺ヘ相

詮仕候儀ニハ無之候ヘハ、同寺ヨリ再建相願候哉難計候ヘドモ、右ハ先般ノ振合ヲ以テ推察仕候儀ニ有之候也、教部

内務課議案 内史本課歷査

別紙教部省伺新川縣寺院再建願ノ件、右ハ同省主任ノ者呼出詰問ニ及候處、該舊藩一時ノ措置宜シキヲ得サル儀モ有之趣候間、左ノ通リ御指令相成可然哉仰高裁候也、九月七日 教部

二月九日 九年 （朱書）

新川縣下寺院復舊ヲ允ス、

教部省伺

新川縣下舊富山藩中合併諸宗寺院ノ内専琳寺始外五十九ケ寺復舊ノ儀ニ付云々、見込相立、昨年八月二十五日付ヲ以テ相伺候處、伺ノ通御指令相成、依テ各寺檀家ノ心得方并永續ノ目途等、委詳取調ノ上更ニ可申立旨、同縣ヘ相達置候處、今般右五十九ケ寺ノ外三十八ケ寺ヲ増加シ、別紙ノ通寺檀協議ノ上願出候趣ヲ以テ、夫々願書類相添、更ニ處分方伺出候付、逐一及調査候處、三十八ケ寺ノ儀モ、前件同

樣ノ次第ニテ、兼テ復舊ノ儀願出有之續柄ニ付、今般當省達振ニ據リ、同縣ニ於テ諸宗一同爲申立候儀ニ有之、都合九十七ケ寺孰レモ檀家幷田畝等相應ニ所有イタシ候上ハ、今後永續ノ目途モ可有之、依テ願ノ通復舊聞屆度存候、依之書類相添、此段相伺候也、一月廿四日　教部

（朱書）「伺之通、二月九日」

新川縣伺　教部省宛

當縣下舊富山藩中合併諸宗寺院ノ內專琳寺住職渡邊（慈）玆法等九十七名ヨリ、今般檀家或ハ講中等協議ノ上、連署ヲ以テ復舊ノ儀懇願イタシ候間、今後永續ノ目途委詳取糺シ候處、別紙ニ記載致シ候通申出候、依テ本年九月三十日付ヲ以テ、御達相成候旨趣ニ基キ、願書一通ツヽ相副伺上候條、何分ノ御指令有之度、此段相伺候也、八年十二月七日　教部

高西寺住職　岡部老壽願　新川縣宛

去午ノ冬、舊藩ニ於テ合併被申渡候以來、解寺ノ儀時々哀訴奉歎願候處、遣囘七百三番ヲ以テ、御達ノ趣奉謹承候、就テハ當寺ノ儀無檀ニ有之候ヘ共、將來永續可致候方法、別紙ノ通ニ御座候、何卒出格ノ御詮議ヲ以、復舊被仰付候樣、只管奉懇願候

以上、八年十月三十日

第十一大區小三區吉作村吉祥寺合併高西寺住職　岡部　老壽　戸長　神名　太平

副　中林　嘉一　區長　中山　和平

禪宗吉祥寺合併　高西寺

一境內百貳拾畝

一祠堂金百貳拾圓　利子壹ヶ年分拾四圓

一祠堂米拾石　利子壹ヶ年分壹石五斗

一佛供米　壹ヶ年分大略壹石五斗

右之通金米ヲ以テ、從來相續仕來、今後ノ目途ニ御座候、以上、

高西寺住職　岡部　老壽　吉祥寺檀中總代　矢後嘉七郎

專稱寺住職　淺選慧法願　香川縣屯

今般第七百三番御達ノ趣、眞ニ寺檀一同難有奉謹承候、就テハ永久取續ノ儀、先般已來上申仕候ヘ共、即今寬大ノ御達ニ付、更ニ永續ノ寺法左ニ記載仕候、

一七拾貳軒　檀家

一貳拾戸　貸家

但、同區長巳町ニテ建家屋敷、町(間カ)口三拾九間三尺、奥行三間三尺、

一年中堂内聖物

右等ノ寺檪ヲ以テ、數百年間相續仕來居候、仍テ此旨深ク御諒察被成下、豫テ奉歎願候合寺復故ノ儀、速ニ御許容被成下度、此段寺檀一同協議ノ上、奉懇願候、以上、

八年十一月二十四日

第九大區五小區富山梅澤町　眞宗常樂寺通院合併專琳寺住職　渡邊慈法

同寺檀家總代　第九大區一小區砂町　大田兵三
同　同大區同小區右衛門町　水越卯三郎

同　同大區同小區寶町　金山長藏
同　同十大區五小區櫻木町　三羽義光

同　同大區同小區同町　木村善四郎
同　同大區四小區大田口町　水越喜助

同　同大區同小區星井町　森喜久次
同　第九大區四小區青田町　紺道市三郎

主寺明尊寺住職　林龍音
副戶長　井上武美

戶長　湯口光照
副區長　柳瀬邦彦

區長　佐々高柯

萬藝寺住職　清水巧嚴願　新川縣令

去ル庚午合併以來六周ノ春秋ヲ經候、然處今般第七百三番ノ御沙汰ヲ蒙リ、難有

奉蓄戴候、擁寺永續ノ目途檀家五拾貳軒幷田畑及ヒ祠堂金等有之、至テ儀緣ニハ御座候ヘ共、二百年來無事相續仕來候ヘハ、今後永續ノ儀強テ危疑ニ不及哉ニ奉存候、就テハ先年來數々歎願仕候內、別テ過ル六月委詳上申仕候通リ、今ハ累ヲ恐レ、其隙不仕候ヘ共、總テ寺院ハ人民ノ歸向ヨリ創建セシ者ニテ、合併以來苦情有之儀ハ、諸人見聞ノ通リニ御座候間、此段御洞察被成下、出格ノ御高議ヲ以テ、兩寺御區分被仰付候樣、只管奉懇願候、且ツ寺檀協議ハ勿論ノ儀ニ付、地所等ノ儀モ、豫テ用意罷在候間、今度御許可ヲ蒙リ候ヘハ、其儘移轉仕ノミニ御座候、左候ハヽ寺檀ハ申ニ不及、地方有緣ノ者ニ至ルマテ、一視同仁ノ御洪恩、如何計リカ可奉感戴候、依テ寺檀併セテ奉懇願候也、八年十一月廿四日

眞宗萬善寺住職

第九大區五小區[illegible]町 [illegible]七十二番地七番地　清水巧巖

同　清水善五郎

同　清水善三郎

同　清水佐一郎

同　清水常次郎

檀家惣代 第十二大區四小區富山[illegible]町　清水傳四郎

同　清水[illegible]助

同　清水重五郎

同　清水善次郎

同　澤井七兵衞

同　　澤井八右衛門　　主寺明德寺住職　林　龍音
副戸長　井上武美　　戸長　湯口光淵
副區長　柳瀨邦彥　　區長　佐々高柯

西源寺住職上田偲芳願　新川縣宛

先般舊藩ニ於テ合併被申渡候末、時々奉哀訴來候處、現今御達ノ趣ニ照準シ、永續日途左ニ書認申上候、

一七拾五軒　　檀家

一三千四百歩（元步）　田祿

　但、第八大區一小區新川郡田畑村等ニテ所持、

一四石七斗　　永年祠堂米

右寺祿ヲ以テ、永歲相續仕來居申候、此旨深ク御憐察ノ上、合寺御解ノ樣一向奉願候、以上、八年十一月廿四日

第九大區五小區富山權町　眞宗常樂寺酒院合併西源寺住職　上田偲芳　　同寺檀家總代　第八大區一小區田畑町　古士平助
同　同大區同小區同村　古士喜三郎　　同　同大區同小區同村　與座傳四郎
主寺明德寺住職　林　龍音　　副戸長　井上武美

戸長　湯口　光煕　副區長　柳瀬　邦彦

區長　佐々　高柯

擧入寺住職　楠布敎願　新川縣宛

今般第七百三番御達ノ趣、眞ニ寺檀一同難有奉敬承候、就テ永久取續ノ儀ハ、先般以來上申仕候ヘ共、卽今寛大ノ公布ニ基キ、更ニ永續寺法左ニ記載仕候、

一六拾七戸　　檀家

一千三百歩　　田祿

右等ヲ以テ、數百年間寺務相續仕來居候、此旨深ク御諒察被成下、偏テ奉歎願候、令寺復古ノ儀、速ニ御許容被成下度、此段寺檀一同協議ノ上、奉懇願候、以上　八年十一月廿四日

第九大區五小區雲雀町第百七十三番地七號　眞宗　擧入寺住職　楠　布敎

檀家總代　第十二大區小區上吉田村二　高橋久三郎　同　同　生田太重郎

同　市村忠治郎　同　同　吉川仁八郎

主寺明林寺住職　林　龍音　副戸長　井上　武美

戸長　湯口　光煕　副區長　柳瀬　邦彦

區長　佐々　高柯

照明寺住職藤枝慈觀願　新川縣宛

拙寺儀、今度第七百三番御達ノ趣、誠ニ寺檀一同難有奉敬承候、依テ永續ノ目途ハ、豫テ先般以來追々上申仕候ヘ共、這回ノ御達ニ基キ、更ニ永續ノ寺法左ニ記載仕候、

一貳拾戸　檀家
一百戸　歸依他檀家
一拾石六斗　永代祠堂米
一　年中堂内賽物

右等ノ寺祿ヲ以テ、往古ヨリ相續仕來候、此段宜シク御仁恤ヲ以テ、御採用被成下、速ニ御解放被仰付被下度、寺檀一同協議ノ上、奉懇願候、八年十一月廿四日 數部

第九大區五小區富山櫻澤町　眞宗常樂寺道院合併照明寺住職　藤枝慈觀
同寺檀家惣代　第十二大區二小區婦負郡下村　永井長三郎
同　第十大區二小區富山旅町　西野長五郎
主寺明德寺住職　林龍音
副戸長　井上武美
戸長　湯口光濶
副區長　柳瀨邦彥
區長　佐々高柯

西元寺住職神保覺芳願　新川縣宛

拙寺儀、今般第七百三號御達ノ御趣意、誠ニ寺檀一同難有奉敬承候、夫ニ付キ永續ノ目途取調左ニ申上候、

一六拾軒　檀家

一拾石貳斗　永久祠堂米

年中堂内賽物

右寺藤ヲ以テ、永年相續仕來居候、此旨篤ク御憐察ノ上、豫テ奉歎願候合寺御解被下度、此段寺檀一同合議ノ上、奉懇願候、以上、八年十一月廿四日

第九大區五小區富山梅澤町　眞宗常樂寺合併圓光寺住職　神保覺芳　同寺檀家惣代　第七大區四小區新川郡草島村　佐々木與四郎

同　同大區同小區同郡同村　浦島次郎作　同　同大區同小區同村　杉林市助

同　第十一大區一小區婦負郡同村　小林忠次郎　主寺明德寺住職　林龍音

副戸長　井上武美　戸長　湯口光濂

副區長　柳瀬邦彦　區長　佐々高柯

明圓寺住職　藤佐寶天順　新川縣宛

拙寺儀、今般第七百三番御達ノ趣、眞ニ寺檀一同難有奉敬承候、就テ永久取續ノ儀ハ、先般以書上申仕候ヘ共、即今寛大ノ公布ニ基キ、更ニ永續寺法左ニ記載仕候、

一五拾八戸　檀家
一千百拾貳歩　田祿
一貳石　祠堂利米歲入
右等ヲ以テ數百年間寺務相續仕來居候、此旨深ク御諒察被成下、豫テ奉歎願候合寺復故ノ儀、速ニ御許容被成下度、此段寺檀一同協議ノ上、奉懇願候、以上、八年十一月

第九大區五小區櫻澤町第百七十三番地七號　眞宗則願寺住職　終夜寶天
檀家總代　第八大區四小區安養寺村　安守七右衛門
同　安守善四郎
同　安守又三郎
同　安守又四郎
第八大區五小區今泉村　細野助三郎
同　細野助四郎
同　細野甚右衛門
同　細野治三郎
第九大區五小區鍛冶町　安森久三郎
第九大區三小區東田町　中島久治郎
主寺明德寺住職　林龍音
副戸長　井上武美
戸長　湯口光淵
副區長　柳瀬邦彦
區長　佐々高柯

眞淨寺住職永田善入願　新川縣宛

拙寺儀、今般第七百三番御達ノ趣、寺檀幷村方一同難有奉敬承候、付テハ、合寺以來

時々歎願仕候通、舊地第十一大區小一區畑中村及ヒ近郷ノ中ニ檀那寺里數遠キ者共多分有之候ニ付、佛事或ハ葬祭等ノ節不都合不少候ヨリ、一同申合、往古一寺創建セシ所以ニ御座候、依之永久取續ノ儀ハ、豫テ寺檀幷村方協議ノ上、其心得罷在居候へ共、即今寛大ノ御達ニ付、更ニ取續法左ニ記載仕候、

一三戸　檀家

一二百戸　歸依他檀家

一拾五圓　祠堂金利子

一壹石　祠堂金利米

一拾圓計　年中賽錢總計

右等ヲ以テ、從來寺務相續仕來リ居候、此旨深ク御諒察被成下、合寺復舊ノ儀、速ニ御許容被成下候樣、寺檀幷村方一同奉懇願候、以上、八年十一月廿四日

第九大區小五區根津町百七十三番地七號　眞宗眞淨寺住職　永田善入

檀家總代　第十一大區小一區畠中村　茶山新治郎

歸依他檀家總代　第十一大區小一區畠中村　山田治郎八

同　北村清六

同　富崎伊三郎

同　松岡重治郎

同　第十二大區小一區御[illegible]寺町　江本金七

同　廣瀨平治郎

同　新堂清三　同　北橋濟
同　寶喜平　主寺明德寺住職　林龍音
副戶長　井上武美　戶長　湯口光熙
副區長　柳瀨邦彥　區長　佐々高柯

西福寺住職城山淨敎願　新川縣宛

今般第七百三番御達ノ趣、眞ニ寺檀一同難有奉敬承候、就テ永久取續ノ儀ハ、先般以來上申仕候ヘ共、即今寛大ノ公布ニ基キ、更ニ永續寺法左ニ記載仕候、

一五戶　檀家
一三拾圓　祠堂金每歲利子
一百貳拾戶　村井町歸依他門徒
一貳石四斗　年中佛供米總計
一貳拾圓計　年中賽錢上リ總計

右等ヲ以、從來寺務相續仕來居候、此旨深御諒察被成下、豫テ奉懇願候合寺復故ノ儀、何卒御許容被成下度、此段寺檀協議ノ上、奉懇願候、以上、八年十一月廿四日

第九大區五小區櫟澤町百七十三番地七號　眞宗西福寺住職　城山淨敎
檀家總代　第八大區五小區大西田地方村　森宗治郎

同　第十大區二小區梅井町　河井条次郎　正榮寺住職　林龍音

同戸長　井上武美　戸長　湯口光熙

同區長　大久保秀延　區長　佐々高桐

正榮寺住職榮劫達等願書寫而事宅

第九大區五小區長澤町第百七拾三番地七號眞宗德圓寺、今般第七百三番御達ノ趣、眞ニ寺檀一同難有奉歡承候、就テ永久取續ノ儀ハ、先般以來上申仕候ヘ共、即今寛大ノ公布ニ基キ、更ニ永續寺法左ニ記載仕候、

一五拾戸　檀家

一千四百九拾歩　田地

一三千七拾八歩　畑地

一七千百八拾歩　蓮畑地

一壹萬千百貳拾歩　山林地

右等ヲ以テ、從來寺務相續仕來居候、此旨深ク御諒察被成下、豫テ奉歎願候合寺復故ノ儀、速ニ御許容被成下度、此段德圓寺儀無住ニ付、法類寺幷ニ檀家一同協議ノ上、奉懇願候、以上、八年十一月廿四日　收□

第十二大區五小區萩島村	正榮寺住職法類	榮刧　澄	
同	同	蓮　宗十郎	
同	同	中崎　善七	
同	同	林　宗五郎	
同	同	林　龍音	
戸長		湯口　光漑	
區長		佐々　高柯	

法類	第十三大區三小區栃折町	牧田　新作
同	同	寺林　太郎平
同	同	牧田　庄七
同	同	増山　喜四郎
副戸長		井上　武美
副區長		柳瀬　邦彦

以下、前文同旨趣ニ付住職姓名ノミヲ載ス、

眞宗常樂寺通院合併傳長寺住職	月見　顯淳
眞宗常樂寺通院合併榮正寺住職	荻高　慈恵
眞宗常樂寺通院合併圓龍寺住職	圓山　唯法
眞宗敎照寺住職	和泉　實淨
眞宗正行寺住職	楠　行運
眞宗祐敎寺住職	清島　大慰
眞宗善得寺住職	越森　月筌

眞宗常照寺住職　堀井謇藏

眞宗專修寺住職　深山僧靜

眞宗純圓寺住職　野上暉月

眞宗雲譽寺住職　高橋有善

眞宗淨德寺住職　北關弘宣

眞宗常樂寺專念寺住職 通陀合併　藤島霧聽

眞宗常樂寺報恩寺住職 通陀合併　川原法寬

眞宗光善寺住職　佐伯惠寶

眞宗正覺寺住職　阿部法響

眞宗回向寺住職　赤尾教了

眞宗善教寺住職　紫　敎山

眞宗寶林寺住職　藤井義證

眞宗勝養寺住職　重松來招

眞宗厚德寺住職　花木智淨

眞宗常樂寺觀聖寺住職 通陀合併　加藤靈含

眞宗常樂寺通院合併長龍寺住職　富田　湛道
眞宗常樂寺通院合併善久寺住職　古崎　知道
眞宗常樂寺通院合併圓命寺住職　龜井　讓芳
眞宗法林寺住職　久保　雪顯
眞宗善照寺住職　篁　實道
眞宗圓光寺住職　慶山　秀生
眞宗光圓寺住職　石原　勸誘
眞宗光善寺住職　武部　玄性
眞宗西教寺住職　金龍　教淳
眞宗順覺寺住職　桃井　學道
眞宗安立寺住職　杉安　了導
眞宗西岸寺住職　岩橋　秋榮
眞宗淨光寺住職　藤岡　誘善
眞宗蛯川寺住職　壹川　賢道
眞宗圓福寺住職　巣山　了現

眞宗常樂寺合併蓮臺寺住職　里村　提惠

眞宗教圓寺住職　笹川　顯流

眞宗常念寺住職　船溪　淨秀

眞宗西念寺住職　片津　達十

眞宗普存寺住職　森　方潤

眞宗珀明寺住職　白川　智了

眞宗正源寺住職松澤惠了留守心得西岸寺住職　岩橋　秋榮

眞宗常樂寺通院合併龍柳寺住職　杉原　淨行

眞宗淨源寺住職　義隆　龍珠

眞宗常樂寺通院合併信願寺住職　立花　自運

曹洞宗光嚴寺合併長慶寺住職　四本木　仙溪

曹洞宗光嚴寺合併龍江寺住職　龍口　是道

臨濟宗蓮華寺合併慶安寺住職　桃井　宗音

淨土宗守山極樂寺合併光明院住職吉水秀誠留守心得淨智院住職　吉水　含海

淨土宗守山極樂寺合併瑞證院住職　吉水　儀門

浄土宗來迎寺合併 稱名院住職	吉水	隨道
浄土宗來迎寺合併 布市來迎寺住職	白旗	義禪
浄土宗來迎寺合併 光明寺住職	白旗	廓道
浄土宗來迎寺合併光德院無住ニ付 組寺稱名院住職	吉水	隨道
浄土宗來迎寺合併 淨智院住職	白旗	義禪
浄土宗來迎寺合併阿迦寺住職無住 ニ付本寺布市來迎寺住職	吉水	含海
日蓮宗大法寺合併 長清寺住職	花岡	日諦
日蓮宗勝劣派本壽寺 合併常福寺住職	舘	日詮
日蓮宗大法寺合併 法華寺住職	神田	日哉
日蓮宗大法寺合併 經妙寺住職	池田	日慧
日蓮宗大法寺合併 利生院住職	吉田	日純
浄土宗來迎寺合併不捨院 無住ニ付組寺稱名院住職	吉水	隨道
禪宗最勝寺合併 東源寺住職	笠澄	元孝
禪宗最勝寺合併 永源寺住職	有江	愚白
禪宗最勝寺合併 任海庵住職	蜷川	電道

禪宗[illegible]寺合併大[illegible]住職　蜷川　道順
天台宗丹陀寺合併上太寺當時無住ニ付本寺丹陀寺住職　木津　行寬
淨土宗大信寺合併清光院無住ニ付大信寺住職　稻垣　圓應
眞宗常樂寺通院合併淨久寺住職　杉林　清晃
淨土宗西養寺合併無緣ニ付無住本寺西養寺　稻垣　圓證
眞言宗眞興寺合併神宮寺無住ニ付富山中野新町來迎寺住職　篠　秀學
清傳寺合併金剛院住職　金山　教道
眞言宗眞興寺合併吉祥寺住職　古川　賢瑞
妙万寺合併覺玄寺住職　小笠　需聲
禪宗自得寺本寺合併林蓮寺住職　中川　靈洲
曹洞宗光嚴寺合併報恩寺住職　竹內　玉眞
曹洞宗光嚴寺合併瑞泉寺住職　豐崎　能傳
曹洞宗光嚴寺合併[illegible]國寺住職　高橋　禪翁
曹洞宗海岸寺合併大雲寺住職　泉　鋏巖
閑名寺合併眞容寺住職　眞山　教思

日蓮宗大法寺合併本長寺住職　貫名　日啓
聞名寺合併善稱寺住職　横山　專精
眞宗圓照寺住職　清水　專成
聞名寺合併法林寺住職　林　祐敎

內務省ヘ達

別紙敎部省伺、新川縣下寺院復舊ノ儀、朱書ノ通及指令候條、爲心得此旨相達候事

二月九日　敎部

第二科議案　大史　歴査

別紙敎部省伺、新川縣下寺院復舊ノ儀、別冊書類ヲモ併テ審案候處、右ハ昨年八月中御指令ノ次第モ有之、復舊ノ各寺院ニ於テ、夫々永續ノ目途相立居候上ハ、何レモ寺檀ノ情願ニ任セ、稟議ノ通御許可相成可然哉、因テ御指令及御達案共、左ニ相伺候也、一月廿九日　敎部

越中專福寺再興

〔太政類典〕第二編第二百六十八卷第四類　教法十九　寺院二

十月十六日　十年（朱書）

越中國眞宗元專福寺再興、

　內務省伺

石川縣下眞宗元專福寺再興ノ儀、同縣ヨリ別紙ノ通伺出候處、右ハ檀家數モ相應ニ有之、情實無餘儀相聞候間、願意可聞届ト存候、依テ書類相添、此段相伺候也、十月十日

（朱書）「伺之趣聞届候事、十月十六日」

　石川縣伺內務省宛

當縣越中國新川郡富山中野町眞宗元專福寺復舊ノ儀、元檀家總代士族林晉三郎父林博道其外ヨリ、本山添書ヲ以、及出願候、右ハ元富山藩ノ節、明治三年中、當時住職伊藤深雄ナル者、有夫姦ノ犯罪ニヨリ、僧籍ヲ除シ、廢寺取計タル趣、別紙伊藤深雄書面ノ通（舊新川縣ヨリ引繼書類ニハ所見無之）ニ候、右ハ舊藩ノ適宜ヲ以テ處分ニ及ヒタル儀ニ

可有之候付、今更可及詮議筋ニテハ有之間敷候ヘ共、其當時同藩於テ（ニ脱カ）及處置候今寺ハ、分離ノ儀、元教部省ヨリ達有之候都合モ有之、願人ノ情實モ無據相聞候付、書類相添、及進達候間、何分ノ御指令被下度、此段相伺候也、六月廿八日

林博道外三人再願〇石川縣宛〇戸長連署〇最初ノ願書欠、

去ル明治九年十月廿三日附等願書ヲ以テ、富山中野町元專福寺復舊ノ儀、竟ニ御本廳ヘ出願仕候處、本年一月十九日附ヲ以テ、出願方順序ヲ失シ居候ニ付、書類指下ケ候條、本人ヘ可相渡、尤當時ノ如キハ、舊藩制中犯罪ニ因リ處分ノ末ニ付、一時ノ僉議ヲ以テ、合併等致候向トモ違ヒ候トノ御指令敬承仕候、就テハ乍恐、私共願ノ主意左ニ申上候、合寺ト右廢寺トハ、犯罪ノ有無等ニ因リ、素ヨリ其區分有之儀ニ候ヘ共、元來專福寺元住職犯罪處分ノ儀ハ、去ル明治三年閏十月十八日、御咎ノ砌、住職ヲ奪ハレ候末ニ有之候ヘハ、已ニ該寺ノ緣ヲ離レ居候段、申迄モ無之、然處同年同月廿四日ニ至リ、寺跡被廢候儀ハ、乍恐檀家一同ニオイテモ甘服難仕ニ付、已ニ寺跡御處分以來、右ノ意趣度々哀訴仕候處、或ハ廢藩置縣ノ時ニ際シ、或ハ合併寺院處分濟迄可見合旨、御內諭等有之ニ付、今日迄本山直檀家或ハ中山加賀國金澤町專光寺等ヘ、枉テ檀家ノ名稱ヲ懸ケ罷在候儀ニテ、實ハ專福寺元住職一身

上犯罪處分ノ末、殊ニ寺跡ノ儀ハ、本寺法類暨檀家ノ共有物ニテ、聊其寺跡ニ於テ關係無之筋ト存居候ニ付テハ、徒ニ先祖代々宿願ノ菩提寺ヲ失ヒ候儀、如何ニモ殘悔ノ次第ニ御座候、但合寺ト廢寺ノ儀ハ、尤其差ヒ有之筋トハ申ナカラ、前顯申上候通ノ處分ニ候ヘハ、乍恐是亦一時ノ僉議ニ出テヽ、實地廢寺ト可相成筋ニハ無之哉ト被存候ニ付、元檀家一同ノ者願心切迫ニ付、幾重ニモ深重ノ御垂憐ヲ奉蒙度念願ニ御座候、依テ永續ノ儀ハ、元檀家貳百九十戶幷ニ牧野平五郎等ヨリ、寄附致旨申出候地所六百步餘ヲ以、目途ニ相立度、住職ノ儀ハ、追テ撰定マテ、法類ノ內ヲ以テ兼務ト致度候、何卒公明盛(正)大ノ御仁恤ヲ以テ、右專福寺復舊ノ儀御許可被成下候樣仕度、依テ本山眞宗東派本願寺住職大教正大谷光勝添書ヲ添テ、再應此段只管奉悃願候、以上、五月三十一日

大教正大谷光勝願 石川縣宛

御管內越中國新川郡富山

中野町

元專福寺

該寺儀、去ル明治三年十月舊富山藩ニ於テ、廢寺ノ處分相成居候處、今般法類檀家

連署ヲ以テ、復舊ノ儀別紙ノ通御廳ヘ出願致度旨申立候ニ付、取調候處、何レモ故障無之候條、御許可相成度、此段添テ相願候也、九年九月

元專福寺住職伊藤深雄回答〇石川縣宛戸長連署

富山中野町元專福寺、富山舊藩ニ於テ、廢寺處分ニ相成候處、今度右寺號舊復ノ儀、林博道等ヨリ本寺添書ヲ以テ出願仕候附テハ、同藩ヨリ同寺處分達書面御入用ニ付、當御支廳ヘ可差出旨御達ニ候、右御處分御達書面紛失ニ付、書取ヲ以テ申上候、然ハ、去ル明治三庚午年閏十月十八日、追分茶屋村傳兵衞等ノ法用相勤、次村檀家ヘ罷越候途中ニテ、役寺ニ出合候處、今日藩廳ノ御用ノ由ニ申聞、卽御書立御渡ニ相成、拜見仕候處、小杉忠藏妻ト密通致候ニ付、入牢申付候トノ事、當惑罷在候處ヘ、兵隊被差向、捕亡被致、直ニ入牢ノ事故、法衣脫取ノ砌、法衣ニ包御取上ケニテ、如何相成候歟、唯今ノ處所持仕不申候、且又自坊ノ儀ハ、本尊等組寺ヘ御預ケニテ、同月廿四日口達ヲ以テ、役寺永福寺ヨリ檀家ノ者共ヘ廢寺ノ旨被申渡、卽門柱ニ張紙ヲ以テ標シニ相成候由、翌年三月御免許ノ上承リ申候、尤廢寺申渡ノ節、本堂庫裏其外附屬ノ建物不殘、幷佛具銅物ノ類、家財鍋釜等不殘御取上ケニ相成候事故、御達書面等、何レヘ紛失候トモ相知不申候、併右御書立書面ノ儀ハ、門柱ノ張紙ト

全ク同一ト存候、右張紙ノ寫、左ニ相記シ申候、此段書取ヲ以テ奉申上候也、

門柱張紙ノ寫

專福寺

深　雄

右小杉忠藏妻ト密通致シ、僧分ニ有間敷、釋迦ノ教ニ背キ、於國典モ重罪ノ所行、依之褫法衣、入牢申付候也、

明治三年閏十月十八日

藩　廳

專福寺

右廢寺申付候也、

明治三年閏十月廿四日

右ノ通書取ヲ以申上候也、一月十五日

林博道外壹人願（石川縣宛戸長連署）

越中國富山中野町元專福寺復舊ノ儀、元檀家貳百九十名ノ惣代トシテ、私共ヨリ出願仕候處、右願書ニ再建地名等記載無之ニ付、調書等可差出旨、御達ニ付左ニ申

上候、

一元專福寺地名ノ儀ハ、第三大區小二區富山中野町貳拾番地元住職伊藤深雄居住地ニテ、元專福寺跡ニ御座候、此度復舊奉願候ニ付、右願ノ通被仰付候ハヽ、同所拾九番地等牧野平五郎所持地反別壹反五畝十壹歩六分八厘繪圖ノ通寄附仕、再建仕度念願ニ御座候、尤元本堂共外附屬ノ建物等ハ、廢寺ノ砌御取上ケニ相成、其內土藏建物一ツ、幷地所五畝八歩、町內一同ノ依賴ニテ、元住職伊藤深雄家族ノ者ヘ御下渡ニ相成リ申ニ付、右ニ建添仕、深雄御赦免ノ上住居仕、元法類慶念寺住職藤梢鳳樹弟子ニ相成、僧業仕度旨、新川縣廳ヘ奉願候處、明治七年十二月十四日歸僧御聞濟ニ相成申候、右元專福寺地名且廢寺所(處)分後手續書上申候、何卒寬大ノ御仁恤ヲ以テ、私共願ノ通、御許可被成下候ハヽ、難有仕合ニ奉存候、以上、八月六日

本局議案

別紙內務省伺、石川縣下眞宗元專福寺再興ノ儀ハ、無餘義事情ニ付、御許允可相成哉、依テ御指令案左ニ相伺候也、十月十一日

新潟縣蒲原五郡幷岩船郡神社取調記録

〔神社廻見記録〕一　新潟縣南蒲原郡田上町[illegible]文庫所藏

明治三年度午三月晦日

神社廻見記録

本[illegible]社[illegible]方
小池巖藻 草
（二三八内閣）

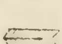
三月晦日

一澤海村蝸牛社之事、委細相尋候處、
右ハ貞享年中、舊領主新發田御分家一万石溝口帶刀殿附家老佐川佐内ト申者之奸謀ニ而、其家斷絶ニ及候間、其家中一同左内ヲ恨み悪み、遂ニ殺害ニ及候處、同人憎怒して、悪靈ト成て、澤海之人民ヲ惱す事し迪死す、其翌年ゟ尋常ゟ小き一種之蝸牛數限も無く出來而、田畠ヲ荒し、雖取盡取盡る事なく、年々百姓ヲ惱し候間、無

據惡靈鎭メ〻、八毛山ト申處ニ於而社ヲ建立し、大國主神ヲ祭り候由申傳候云々、右社會津川河原之嶋中ニ在之、石之小祠ニ而、中ニハ幣束而已、右鎭メニハ、大國主神ト書候ヶ、同神ながら大地主(クニ)神と書て祭候方可然、且御年(ミトシ)神ヲも合祭り可然由申聞候事、

一天照皇大神之木像

鎭守山王社内小祠ニ在之、先鳥居ニ張置候梵字紙札ヲ取除かしむ、

右像ハ佛師之所造ト相見え、蓮華臺ニ似たる臺(模樣牡丹華)上ニ立姿にておはしまし、厨子(ズシ)の中ニ安置、像之後ニ、如斯丸輪ヲ附置、木綿之茜染之戸帳ヲ張置、但御像ハ佛躰ニ非ず、兎も角も神躰也、依而臺ハ俗ニ云嶋臺と云形ニ改、背の丸輪ヲ除き、厨子ヲ白木之宮殿ニ改メ、戸張ハ御簾ニ替而可然由申諭候事、

右像、實ハ廢毀之方可然候得共、是迄永々祭來候といひ、愚情ニも不悖候樣、混淆之處ヲ除ク上ハ、差支も有之間敷哉ニ付、右之通申諭候也、

附タリ

山王社幷びて二座有之分、如何改名仕宜敷哉之旨相尋候ニ付、大なる社ハ、日枝社祭神大山咋神、小なる社ハ小比叡社祭神若山咋神可然由申聞候事、

四月朔日

一式内且飯野神社、中山神社之儀ニ付、宮下村八幡宮、中山村神社取調候事別記有之、

一椎岡町香椎社之事

右者元母衣王權現ト稱し、復飾社人長尾景之進進退仕來、尤祭禮之砌ハ、宮下村神主鈴木登代々奉幣仕來、祭神神功皇后ヲ崇來候事、

二日

一宮内村藤戸社之事

加地要害山之麓小山之上ニ在之、登坂貮三丁、神木森々近邊無雙之社地ニ而、往昔ハ加地庄十六村之鎮守ニ候處、唯今ハ宮内村、中嶋村、黒岩村、三日市四ヶ村之鎮守ニ而、奉幣人黒川管内寺内村中倉筑後之由、

右拔、佐々木三郎盛綱ゟ代々加地庄ヲ領知致し、加治ヲ以而家號ト致し、天正年中迄相續罷在候事、東鑑、北越大(太)平記等ニ備ニ所見有之、右佐々木盛綱藤戸嘗先陣之武功ヲ後世ニ傳候爲、系圖　宇多天皇ニ大己貴命ヲ合祭仕候物歟、社木之形容可然不存候、

一覺村千勝社之事

五六十年以前、當村地先ニ爭論有之、公事勝利之爲奉幣社人藏光村相馬伊豫に祈禱相賴候處、同人則山際ニ小社建立致し、千勝社と號し候由、庄屋五左衞門申之、

一菅谷村山王社之事

菅谷寺境內山上ニ在之、登り口ニ佛像等數多有之候ニ付、脇之小道ヲ本道ニ改メ、奉幣神主寺地ゟ出入無之樣、且山王大權現之額面書〔日枝社ト〕改メ可然由、村役人に理解申諭し候事、

付、菅谷寺境內地藏共外之佛像幷ニ石塔等ニ注連ヲ張置候分、且末院靈鷲院僧躰ニ而、門前へ注連張置候分混淆之姿ニ候故、右注連取除キ可然由申諭し候事、

四月三日

一中條驛石井神社若一王子社式內之儀取調、別記有之候事、

一羽黑村羽黑社之事

中條越前守中條邊領知之砌、羽黑村之奧白鳥山ニ要害城有之、右鎭守ニ羽黑社ヲ建立、其節之羽黑村も中條ト一村ニ而御座候處、其後領分相分り候砌、別村ニ相成申候、羽黑村ト申之、右社御鎭座以後之村名ニ御座候、依之神主榎本氏元來中條ニ於而、越前守ゟ除地給り居候由申之、

按、中條家ハ、太平記之頃官軍方ニ而新田家ニ屬し、武功有之、其後上杉家ニ隨ひ、
會津米澤等に移住ニ相成候、館腰村白鳥山兩所共、古城跡相違無之樣子ニ候事、

一小荒川村十二天社之事　奉幣社人中條驛吉田伊豆

十二天とハ、藥師之十二神將と被思候間、書上之祭神之讚ヲ取候而、山津見社と改稱可然由申諭し候事、

一柴橋村十二天社

右同斷、但社ハ退轉致し、田中ニ石牌(碑)社木少々有之、

一金子新田鎭守社之事

天照大神、八幡宮、毘沙門三座之内、毘沙門ハ佛天ニ付相除き、且菊桐之　御紋提燈十箇有之分張替、辯財天之佛像額取除、并社地内之庚申石塔觀音之木塔等、他所へ引移し可然由申諭し候事、

一長橋村七所社之事、下早安村ニも同社あり、

祭神ヲ大己貴命と書上候ニ依而考候處、日吉山王七社ヲ遷摸致候儀ト覺候間、日枝社ト改メ、大山咋神ヲ祭り可然由、奉幣人吉田伊豆へ申諭し置候事、

付、旋地村七所社ハ、元七社權現ト稱し候由、或人之話ニ聞及候、有之儀ニ而、山王

七社權現ヲ七所社ト書上仕候儀顯然ト被存候事、

一大船戸村川内社之事

右ハ田中之小祠ニ而、奉幣神職遠方ニ而、村方ニ於而判然不仕旨申之、但同社號所々ニ有之、追而取調可申事、

一本郷村、江上村、館腰村三村鎭守鷲麻社之事

右社ハ磐船郡布部村神主横山常岩奉幣ニ而、同人持宮鷲麻社ヲ遷揆致し候故、當村方ニ而ハ委敷義相辨不申、尤當村往昔布部村ゟ引越來候物(者)多く、依而鎭守と祭候由申之、磐船郡取調之節、相考可申事、

四月四日

一館村技郷鹽谷村龍藏權現之事　復飾阿部亘持

禪刹地内ニ有之、昔ハ御見捨山中ニ在之候得共、大破ニ及段々當所に遷置候、依而此節諏訪社地に引遷可申心組之旨申候、右ハ全ク申譯ト相聞え、社檀中ニ當山安全之爲抔記し置候木札數枚有之、元ハ寺地鎭護神ト覺候、神躰ハ木像三軀在之、數百歲之物ト相見、神共佛とも名付難く難決虫食罷在候、但彼等が愚情ニも不相悖樣、其中候通り諏訪社地へ遷し、祭神之號ヲ以而、大己貴命社ト改メ可然歟之由申

念し候事、

一館村黒川兩村鎭守大倉權現之事　　復飾威本眞雲持
祭神之儀、神倭伊波禮彦尊、豐田天皇、須佐之男命ニ而必後世作り設候儀ニ可有之、元來ニ而如何成神ヲ祭候哉之旨聞糺候處、
威本父子答云、私共不學ニ而、深き子細ハ不存候得共、前々ゟ右之祭神ニ御座候由堅ク申之、右之祭神惡敷ニ而ハ無之候得共、舊來之祭神ヲ不失爲、尋候而已、
又聞、下關驛ニ而ハ正一位大藏神社背上有之、當所ハ右之社ヲ遷摸致し候歟、答、左樣ニ而ハ無之、當所ハ當所ニ而、古昔ゟ祭り來候、右社地凡五百年も經候ト覺敷、老樹多く、山上ニ而佳景ニ御座候、前ニハ鳥坂古城山、胎内川之清流有之、後ニ黒川古城山有之、平原之地ヲ一目ニ見下し申候、

一同處宇賀社祭神市杵嶋姫命之儀取調候處、元ハ辯財天之改號ニ有之、依而嚴嶋社ト改可然由申念候事、

一赤谷村觀音ヲ神社ニ改候儀　　威本眞雲持
右馬頭觀音之、古昔城四郎資長勸請ニ付、此度改而鳥坂神社ト號し、祭神大宜都比賣命ト仕度旨數願達候砌、按察府大主典始メ格別之思召ニ而、御開補ニ相成候上

ハ、第一佛壇ヲ改メ神殿ヲしつらひ、御鏡ヲ神躰ト致し、幣束ヲ備へ、鳥居ヲ建、觀音像幷梵鐘ヲ除き、額面ヲ改メ、種々之佛具ヲ拂、淸淨潔白、實之神社ト可致旨申諭候事、

一熱田坂村之奥熊野社ハ、式内川合神社成由、世間流布有之、取調別記致置候事、

一坂井村多伎神社、式内之社號ニ付取調候處、

元來社前ニ奇觀之瀧有之、（巖壁嶮岨）瀧之不動社ト唱來候由申之、

此邊總而愚直ニ而、佛則神ト心得罷在、神主も同樣不動之前江奉幣致來候儀ニ付、（奉幣神主黑川管内寺内村中倉肥後）右不動佛像ハ寺院江相渡し、不動尊抔記し候紙札ハ剝除可然由申諭候事、

四月五日

一中山村日光社ハ、三四百年ニも可相成社木有之、元來下野國二荒山ゟ遷摸之體也、月光社ハ村はし之小社ニ而、是も昔ゟ月神と唱へ來、此度書上ケ之折祭神月讀命ト致し候由、村役人申之、

右之日光菩薩、月光菩薩抔云佛號ニ似而紛敷候間、日光ハ二荒社ト改メ、月光ハ祭神之號ヲ以而月讀社ト稱し可然由申諭し候事、（佛書ニ日光菩薩、月光菩薩、藥師脇士八萬四千之内上首是也抔有之、）

一河内社之儀
坂岡村、夏井村、坂井村、熱田坂村、黒股村等、胎内川近邊ニ而ハ、水波能賣命〈水伯に〉と稱して、水中ヲ守給ふ神故、筏師舟人等川中之難無之様、村々ニ而祭來候由里人申之、
金屋村、荒屋村、海老江村等も同斷、獵師等信仰致し候事、
一持倉村河内社ハ、元天兒屋根命ヲ祭來候處、中條民政局ニ書上仕候砌、御役所ゟ御差圖ニ付、水波女命ト改書上仕候由、神主内山長門父筑後申之、
右接、河内國一宮牧岡神社祭神天兒屋根命ヲ遷摸致し候社ニ而、却而舊來之通可然由申諭候事、
若松縣管内ニ而、新發田ゟ津川道中赤谷邊瀧谷村ニも随分相應之大社ニ而、河内社有之、右も祭神天兒屋根命ト申傳有之、河内國一宮ヲ摸し候故、河内社ト號し候歟、
一坪穴村七所社之儀
右ハ神明社地内ニ在之小社、神體之紙札ニ、七社權現本地佛抔書し置、其外木之燈臺ニ佛號ヲ記し候者數本有之、右等取除可然由申諭候事、
又見石ヲ數多並へ置候間、子細ヲ尋候處、庄屋云、昔ハ右七ツを神躰ト稱して上置

候處、近來小兒共、河原ゟ似寄之石ヲ拾來、數多ニ相成候由答候事、

右社祭神未詳候由、復飾威本眞雲相尋候ニ付、

答、若ハ山王七社ヲ祭候歟ト覺候間、日枝社祭神大山咋神ト改メ可然歟之由答候事、但長橋村同社號之條ニ委細有之、

一持倉村久志社之儀　神主內山長門病氣ニ付、父筑後

右ハ元藥師堂ニ在之候ヲ、前々ゟ神主奉幣仕來候ニ付、改號致し候ニ而、木像共儘ニ候ヲ取除可然由申諭候事、

一同村長鴨社之儀　同人

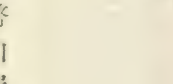
元來小社ニ而、村端ニ在之、祭神之儀鵜草葺不合尊ヲ、前々ゟ祭來候由堅申之、由緒ハ不審ニ候得共、小社之儀ニ付、强而鑿索不致、其中旨ニ任置候事、

一須卷村河內社ハ　奉幣山屋村片野右近

小社に有之候得共、物古り候而、木像二軀在之、男神ハ束帶をき、烏帽子ニ而手を拱き、所謂天神樣又內裏雛の形に似たり、古く雛に相見、女神ハ兩袖ヲ前ニ掻合せ、餘之袖ヲ垂、髮ハ百人一首之繪の女帝樣のさげ髮と云形ニ而、衣服之制樣質朴之形ニ而、いろまも數百歲之古物ト覺候、里人等ハ夫婦神と稱し、緣組ヲ祈り、又乳之不足ヲ祈るに必靈驗あり、又

犬石あり而、尋常之獅子狛犬と甚異形之古物也、是ハ河内之枚岡社天児屋根命ニ
比賣大神ヲ合祭致し候物歟、

狛犬粗圖　二箇有之
長二尺餘

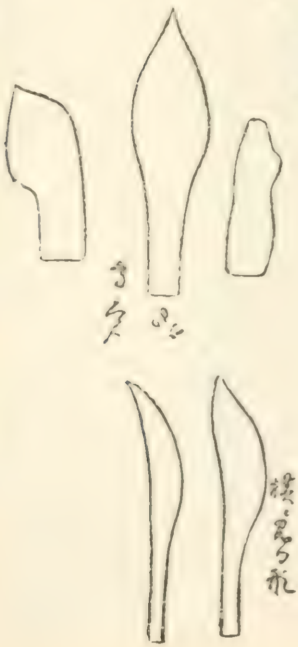


一大長谷村二頭神社之儀　奉幣山屋村片野右近

村役人云、右之守ヲ未鑄石山ゟ出候石神ニ而、數百年以前ゟ權現號ニ而祭來候、虫歯并縁結ヒヲ祈候ニ、如本百勝之寄ヲ報賽ニ可献由申則之必靈應有之候、

土人云、元三體之彌陀ニ而、彌陀、藥師、釋迦ヲ本地ニ致し候、内陣改候處、右三箇有之、

象圖



一は別段ニ無之石に候、

中なるは昔土宗彌陀佛に後に付
其頭ニ似寄候、上ノ方前へ反曲申候、

一ハ頭折烏帽子ニ
似寄申候、

右ハ社ト改候上ハ御拜之影物之中之梵字ヲ除キ、都而混淆ヶ間敷儀無之樣申諭候事、

四月六日

一鍬江村船江神社之儀

右ハ大藏神社之社地內ニ在之、方三四尺之小祠ニ而、殊ニ此邊中古迄沼垂郡ニ而、蒲原郡之式內神社之可在道理無之由申諭し候事、

一大倉社ハ、下關大倉權現ヲ遷摸致し候ニハ無之、當村方ニ而昔ゟ祭來候得共、由緒不詳候由申之、

一土澤村白山社地內久斯社之儀　神主田村土井

右ハ元藥師如來幷阿彌陀如來等ヲ居置候分、此度禪刹ニ相渡候由申之、但右社號ニ而ハ少彥名神合祭可然旨申諭し、且白山妙理大權現之額面書改メ、菊御紋付之花染之木綿戶張取除、御簾ニ改可然由申聞候事、

一勝藏村田中社之儀

昔ゟ聖德太子ヲ祭來候、社號は唯田中ニ鎭座故ニ御座候、

一猿田彥社ハ、神躰大石ニ而、元サヘの神ト唱來候處、神主下關村吉田波江ゟ、猿田彥

社と改メ可書上由申聞候故、如斯、

右石ヲ以而、サヘの神ト祭候儀、故實ニ相叶候、猿田彦社ト改候者、却而神職之誤也、元之如く塞(サヘノ)防神と稱し奉り、岐神八衢彦八衢姫三神ヲ祭り可然由申諭候事、

一萱田鳴村鮖(カジカ)谷村多伎神社之儀　神主下關村吉田波江

兩所共相應之瀧落候地ニ而、社木杁古り候得共、場所甚狹く、式内ニ無之儀者勿論、不動佛ヲ神體と致し置候間、取除可然由、拜鰐口者鈴ニ鑄改可然由申諭す、殊ニ鮖谷ニ者石地藏抔入置候分、早々寺へ持行可申旨申聞候事、ニ右兩所共鎭守之社右緣ニ候事、

一下關村大倉神社之儀　神主吉田波江

元者大藏大權現ト稱し候得共、寛政度正一位之神階奉請候砌ゟ、神社ト改申候、右位階者當村豪富三左衞門雖霸平修祈禱之報賽ニ、右雜用金差出申候、尤關谷五十餘村惣氏子之願立之趣ニ而、吉田家へ願出、夫ゟ　勅許ニ罷成候、右神階御免許一件ニ、三年相懸り候由申之、

右社口牌(碑)ニ云、往昔米澤街道ニ、折峠と云高山有之、或時盲人行暮淋敷儘、琵琶ヲ彈候處、女人來、數曲所望致し候後、盲人ニ敎而云、我者此山ニ住所之大蛇也、近日大洪水ヲ發せ、關谷平原之地ヲ湖と成し而欲住、汝速ニ遠去り命ヲ全くすべし、

是此夜弦歌ヲ聞所之報恩也、此事固ク人ニ不可語、若語時ハ、立所ニ命ヲ可失云々、盲人峠ヲ下り思慮し而、我一人之命ト千萬人之命ハ難易ト、上件之趣ヲ委敷里長ニ語候處、果而命終候、鄉中之人、鐵之杭ヲ以而大蛇ヲ退治し、其後盲人之靈ヲ祭る、依而大暗（オホクラ）權現ト號す、折峠ヵ今ニ於而蛇骨出候、

神主之說ニハ、盲人里長ニ告候後、大藏社地邊ニ而行方不知相成、則大已貴命化現也と申、

神躰之笥中ニ、彼琵琶ト杖と有之候由ニ候得共、神主家代々秘し而開事無之、開見候得ハ眼潰き候由申傳候、

四月七日

（一脫カ）金丸村大倉社之儀　奉幣羽州米澤管內小國村神主

當村ハ實ニ深山幽谷之地ニ而、其村之入口ニ社有之、相應ニ物古り、神躰ハ青石ニ白き筋數多有之生石ニ而、高サ貳尺餘、廻りも貳尺程ニ相見候、村方ニ而も由緒未詳、申傳等無之候事、

一八口村雷神社　奉幣同斷

右社も嶮岨山奥之地ニ而、荒川ニ指出候岸上ニ在之、左右ハ青淵ニ而、淋敷程之事

ニ御座候、其邊森而古木繁茂罷在候、但雷大權現之額面書改、鰐口も鈴ニ可改由申諭し候事、

右社之前乘打致し候得共、急落馬致し、又汚穢之物積入候船通行致し候得共、雷電いたし、或舟覆候由申候、

八日村ニも此邊之舊村と相見え、神明宮之社木抔甚タ物古り而有之、但一昨年之戰爭ニ燒失致し、可惜老樹數多倒臥罷在候、

一湯澤村ニも雷權現有之、額ヲ書改、鰐口ヲ鈴ニ可改由、神主吉田波江ニ申諭し候事、付、同村地内高瀬温泉場之藥師堂ニ於而、御鏡鈴等懸置候分、神佛混淆之姿ニ候間、取除ケ可然由申諭し候事、

四月八日

（上欄の）瀧原村鎮守多伎神社之儀　本帶下關村吉田波江

社地之儀ニ、荒川へ落候磯泉有之、村名旁式内に由緒有之樣子ニ候得共、神體不動ニ而、社地新敷、古木等無之候、右ハ先年荒川洪水之砌社地缺落、上之方に引遷候故如斯ト申、乍併式内トも相見不申候也、

此邊都而磐石等不動其外をも神と心得、社内に神躰ニ納置崇敬致し、神主共も

則是迄神ト心得候歟、奉幣致來候、尤其村々ニ而モ、鎭守ト崇め殊ニ社造ニ而、今更佛堂ト難致情實有之候、依而佛像取除、御鏡ヲ神體ト致し、幣束鈴等備設るきよし、それ〳〵へ申諭候事、

一小見村八幡宮神躰梵字彫付候青石取排、御鏡幣束相備可然由申聞候事、

一平内新村河内社儀　奉幣右同人

神明宮同社地ニ在之、古來ゟ祭神水波乃賣命ニ候由申之、

一上野山村子易神社モ　奉幣同人

元モ子易大權現と稱し候處、此度改號之由、右モ宮殿造り之小祠ニ而、相殿神明宮山神ニ在之候得共、子易地藏藥師佛ヲ厨子ニ納置候、依而厨子共寺へ相渡し、白木之小宮殿ヲ設ケ、祭神伊邪那美神ヲ御鏡ニ而可祭由申聞候事、

一高田村伊豆權現之儀

右モ同村字古高田ト申田中之小森中ニ在之候得共、社木古桂古杉、等之模樣、四五百年前之社地ト覺候、祭神之考別記ニ有之、右社村上管内宮ノ前村復飾長大炊社守ニ而、奉幣人下關村吉田波江

一式内小岩内村荒川神社之儀　吉田波江　下社家社守桂木出雲

古社地川縁ニ相成、近來漸今之地ニ引遷し候由、社前ニ淵も相殘居候、且社近所ニ
字宮田ト稱して、田五反程有之候處、いつの頃よや村方ニ而、誰ふろ賣拂候と相見、
今ハ字而已相殘申候、祭神始委細ハ別記有之候事、

一花立村鎭守久志神社之儀　奉幣荒嶋村長山城
社造りニ而、神（疏カ）殿中ニ久志神社ト記シ候木札有之なから、額ニ瑠璃光堂抔記し、幡
ニも藥師瑠璃光如來抔記し置候間、右額旗可改書旨申聞候事、

一下嶺治呂村木山神社之儀
元來山巓叢藪ニ在之、三月十三日縁日ト稱し、毎年群衆よゐゝへ候由、近邊之者
共申之、依而聞尋候處、
神主大矢阿度答云、元來當村地内木山ト申場所ニ、本山五社權現ヲ祭置候分、七八
十年以前ゟ山之神ト祭改候處、鳥居等も無之ニ付、近邊之人誤而虛空藏抔唱へ候
得共、更ニ證據とて無之由堅ク答候、
右社可取調候得共、一里餘山上ニ而、岩壁險阻容易ニ可到地ニ無之候間、追而相
談可申候、但鳥居建設不申候て、畢竟神職之不念ト申者、夫故世間ニ虛空藏抔唱
へ候、早速神門取立可然旨申諭候事、

一梨木村山王聖眞子ハ、元山王權現ト唱來候處、復飾藏王村片野始儀、右樣改メ書上ケ候由村役人申之、
聖眞子ハ即混淆之神號ニ有之、依而藏王村金峰社取調之砌、片野右近に談判可致候、村役人ニ而ハのみこみ兼候樣子ニ候故也、
十九日日枝社ト改メ、大山咋命ヲ可祭旨、片野へ申聞候事、

一荒嶋村荒川神社式內ト書上候儀
東御戶神主長山城、口牌(碑)中傳等證據ニ、種々地名等之由緣ヲ引而申立候得共、確證ト可致儀無之、且
西御戶神主長野(衍カ)大和ハ、右社元ハ宮山ト申地ニ在之、其山下之田ヲ、今ニ鳥居之前ト字ヲ申候、尤往昔ゟ羽黑三社權現ト唱來、荒川神社式內抔申候儀、一向存知不仕候、右社荒嶋村春木山村兩村之鎭守ニ而、長山城儀ハ、東口之御戶ゟ出入致し、私儀ハ西口之御戶ヲ出入致し候故、東御戶神主西御戶神主ト稱しをけ候、實ニ延喜式內社ニ有之候得ハ、私儀も同斷神主故、格式も直り、至而悅敷事ニ候得共、
天朝ヲ欺き奉り、祭神ヲ僞候儀實ニ恐入、有體申上候ト申、右ニ而式內社ニ無之

儀顯然ニ候事、

四月九日

一桃川村桃川神社式内之儀別記有之候事、

一同村多伎神社ハ、村ゟ半道程山奥、瀧之落候地ニ有之、是も元ハ不動ニ候ヲ、此度混淆無之樣改候ニ而、更ニ式内とハ相見不申候事、

一河内村河内社之儀

河内村ニ而、河内ト申社號故、由緒有之哉相尋候處、村上在宮下村ゟ遷摸致し來候儀ニ而、雲上佐一郎殿之靈ヲ祭り、二ノ宮河内大明神と申來候由、尤小社ニ而格別之儀も無之候事、

四月十日

（一脫カ）差合村多伎神社ハ、式内ニ在之由、昔ゟ所々ニ而申來候間、村上藩管内ニハ候得共、念之爲相尋候處、全ク瀧之不動ニ而、佛堂中ニ有之、更ニ神社之模樣ニハ無之、瀧も聊處水落候而已ニ而、樹木等も物成不申、此邊之土人等唯不動樣〳〵と唱へ候事、

一七湊村式内湊神社之儀　但村上管内

上古岩船沼大きく、此邊湊ニ可有之哉、社地ニ於而見下し候ニ、實然あるへき地形

也、依而七湊ト申地名も可有之、其岩船沼ハ、唯今大抵田地ニ相成候得共、此殘ト覺しき沼地も沖ニ有之、社地も宜敷候得も、旁此處相違有之間敷候事、

一岩澤村古四王社神體取隱し候歟、唯今相見不申、

五十公野古四王も、禪寺持ニ而、毘沙門ヲ祭り、松澤村古四王も眞言僧持ニ而、彼四天王ニ可有之候を、祭神ヲ作添候ニ可有之、元ハ混淆ニ候事、

一中新保村奥津彥社も、元荒神ヲ祭候ヲ改號致し候事、

一荒屋村雷社も、同村ゟ四五丁奥字いろつちト申地ニ在之、小社ニ而、村上管内大葉澤鎮守雷權現ニ而、修驗金剛院持之社ヲ摸し候歟之由申之、（奉幣人佐邊里村江見山城云々、）

一布部村鷲麻社之儀

元岩崩村之奥鷲之巢山ト云高山有之、右山岩壁高く尖りて、容易ニ人之可登處ニ無之、往昔も鷲之麻（巢カ）有之候故、山名ト相成、右山之神ヲ鷲巢權現ト祭候處、寛永十六年吉田家へ許狀請ニ登り候砌、天日鷲命津咋見命も木綿麻ヲ作給候緣故有之、依而鷲麻社ト號し、天日鷲命ヲ可祭申聞、夫ゟ相改申候、

今按、元山神ヲ祭候儀故、山祇神ヲ爰可合祭事、

右本社も岩崩村鷲之巢三峰之一番奥之嶺上ニ有之、社内ニ十四座之神像御座候、

角木ニため込失難ニ作置候也、古き偶像ニても決而無之、且玉等有之候ヲ珠數之殘歟ト申者も有之候得共、玉串之名殘ト奉存候、云々、

四月十一日

一同村式内多岐(伎カ)神社之儀

一里程山奥ニ布邊之白瀧ト申ス瀧、高サ凡五丈許、水幅上五六尺下三間許ニ而、其澤ヲ瀧谷澤ト稱し、御檢地帳ニも瀧谷澤ト申ス字之山畑數多有之、且當村ニ瀧谷山龍泉寺ト申禪刹御座候、此寺ハ藏光村某寺の末ニ而、古き寺ニても無之候得共、上作瀧谷澤之瀧ゟ採而稱し候所ニ御座候、但社ハ退轉、餘ハ明細書上之通ニ御座候事、

一河内大明神之儀

宮下村ニ而一宮ト稱し候ハ、本元之由ニ而、他村ニ而も數多祭來候間、紛間敷爲ニ御座候、舊幕府御巡見使御通行之砌ハ、必御拜禮有之候社ニ御座候云々、由來ハ書上之通ニ候事、

右社地物古、四五百年ニ相成可申老樹貳本有之、松杉ハ殊ニ繁茂、佳景ニ御座候、右之神杉、近年村中ニ而賣拂候者有之候處、頭取候者共忽病痾仕、或死ニ至候者

も有之、社木買取候ものハ、山荒風雨洪水ニ而、悉く海へ突出し、一本も不得而大損仕候云々、

神像ハ芦毛駒ニ被召候御形之左右ニ、六人充都合十貳人之臣さちの御姿、川獵装束ニ而、櫓棹等ヲ持、相双び在之候由、右十二人之臣ヲ十二神ト稱し、村上管内十河（ソゴハ）村ニ而、雲上佐一郎様之御館跡ト申地ニ祭り置候云々、

一猿澤村一宮河内大明神ハ御同體、雲上佐一郎殿之御靈屋ニ而、宮下一宮河内大明神ハ、元廟所ニ候處、安元三年京都ゟ一宮河内大明神之號ヲ宮下ニ下され候旨、猿澤村復飾美久月千代賀數十枚持傳之古文書見せ候得共、確證ト相成者無之候事、

次ニ爐壇藏相殿ノ事、

一檜原村鎮守一宮河内社相殿石動社之儀　奉幣　美久月千代賀

當村ハ往昔蟒蛇（ハンナン）と云化物（バケモノ）住而人ヲ惱し候ヲ、雲上佐一郎賴仁公弓箭ヲ以而、御退治被成候ニ付、村方田畠發起候故、猿澤村目前ニ相祭來候由申之候事、

一高根村鎮守河内大明神之儀　奉幣村上町江見大和

右ハ四五百年ニ可相成社杉數十本有之、其村方ニ縁起も有之、雲上佐一郎賴仁公ト申奉るハ　後白河院第三皇子ニ而、故有て越後ニ御下向、十河邊ニ御住居之處、

本庄出羽介と申者、越後探題職ニ而、平家方人故、右之宮ヲ亡し奉らむと、七度迄合戰ニ及候得共、駈負、無據和睦ヲ乞、厚ク尊敬し奉る眞似し而、遂ニ川蟲ニ事寄亡し奉る、其御子太郎君ト次郎君も、此邊ニ而御早世其御靈ヲ祭り奉る云々、

太郎君御戒名　知香院殿多明京仁

次郎君御戒名　兒正院殿明秋京仁

追腹切し相馬清右衛門戒名　通川水傳道德

社中鏡像一軀、古く煤付眞黒ニ相成、神佛決シ難く候、木像一軀、是そ左程古物トそ相見不申候得共、神共佛共分ち難く候、（兒童形、高サ各四五寸、）

一蒲萄村河内社之儀　大須戸村中山堅治

申上佐一郎殿之御骨ヲ神體ト致し候趣申傳、箱之高サ五寸程幅三寸程之中ニ相納、表書後白河院第三皇子ト有之、右箱甚タ輕ク振候得そ、からノヽト鳴り候、神體こそ御骨ニ而そ如何可有之旨、相尋候ニ付、

答、潔齋致し箱ヲ開見、彌御骨ニ相違無之候いヽ、社之後大凡十間程離し、清地へ埋め、土ヲ高ク積、標ニ松歟杉之類ヲ植立、垣ヲ廻し、人ニ踏せ申間敷、而して其神靈ヲ御鏡等ニ改め祭り可然哉之旨相答候事、

但、此邊山中ニ而、空地甚澤山故、右之如く致し候而も、田畑ヲ費し候儀無之候事、

一大川府屋町大館山神社も御同神、　山上ニ御住居之御館跡有之故、大館山と稱し來候、其後十川邊ニ御住居之由申傳候、

右社山上ニ而、府屋町ゟ五六丁、隨分佳景ニ候事、

一荒澤村、塞川村、大澤村、大須戸村、今川村、桑川村ニ而ハ、昔河內權現ト稱し候、祭神ハ同斷、

十二日

一川端村久志社之儀　奉幣鵜之澤村神主佐藤筑後

藥師之改號ニハ有之候得共、元來神ト相心得候哉、天保七年之札藥師神社祭神大己貴命ト祀し候ヲ、神體ト致し、傍ニ藥師佛ヲ置候、右佛體取拂可然旨、村役人へ申諭候事、

一俵澤村石動社之儀　復飾美久月千代賀

元虛空藏ニ有之候處、昨年中中條御局ニ而、御聞屆ケニ相成改號仕候、尤別持社ニ、石動樣二社有之分ヲ、一社ヲ遷宮仕候、相殿河內社ハ、雲上佐一郞殿之御靈屋ニ而、其御戒名虛空院殿ト申候ゟ、俗ニ虛空藏抔誤申候云々、

右社者今ニ而ハ、更ニ混淆之儀も無之、地處も神社ト致し可然場ニ而、樹之大樹
有之候故、檜澤と云字ニ相成、（古市ハ目名云々）其外老樹森々堂舍美大ニ有之候故、早速
鳥居ヲ立、七五三ヲ張り、齋清淨潔齋之上、神勤不怠樣申聞候事、

一板屋越村式内ト申多伎神社之儀　奉幣早稻田村
相應之社地ニ而ハ候得共、物古不申、式内トハ難決候、但當村十四五町山奥ニ、布瀧ト
申瀧有之、依而多伎神社ヲ唱來候ヲ、中古混淆ニ而、不動立置候得共、御一新以來佛
像取拂候旨申候事、
右瀧凡五六〔七〕丈高く落而、水細く、實ニ白布ヲ延候如成故、布瀧ト稱し候哉、布遠村
之瀧ゟ、少々高ク相見候得共、甚狹く候事、

一同村久斯神社ハ、元藥師佛有之候ヲ改號之事、

一島根村久志神社之儀　村上町江見大和
右ハ鳥居も古く社造ニ而、佛堂之類ニハ無之候得共、中古ゟ藥師と唱へ候由ニ而、
本像有之候、右像取除ケ可然由申諭候事、

一荒澤村大國神社之儀
本藏王權現ニ而、村ゟ半道程絶嶺之山上ニ在之、右金佛像壹之町御役所へ差出可

然由申諭候事、

一小須戸村（須佐之男命・櫛稲田姫命）社之儀

牛頭天王之社ニ而、双方共男體之木像ニ而、實之須佐之男命トハ難申、佛説之障礙神と云物之形ニ似寄候ハ、佛師之作ニも可有之候、却而像抔無之方可然旨申諭候事、

一松岡大國神社祭神大國主神と書上候ハ、元藏王權現之改號ニ而、其儀誤ニ候間、書上帳ニ追而附札之上可相返事、

四月十三日

一大須戸村白山社地幷藥師堂之儀、鳥居も有之、元ハ神社ニ而有之樣子ニ候得共、只今ハ佛堂ニ候上ハ、持主禪寺地内へ引取、混淆ケ間敷無之樣ニいたし可然旨、村役人へ申諭候事、

一蒲萄村式內漆山神社之儀　奉幣大須戸村

吉田家ゟ漆山神社之額御免許ニ而、掛來申候、俗ニ矢吹明神ト唱へ候ハ、源義家朝臣奥羽征伐御祈願相叶、矢ヲ以而屋根ヲ葺給故、矢吹明神とも申候趣申傳候、且吉田家ゟ祭神御傳授ニ、

諾羅御朝(ナラノミカド)乃御世に和銅五年に當山に漆山神社与定メ賜ル大山祇命雷神龍神
三柱乃神与祭利奉留

別記ニ考按致し置候事、

一大澤村、北黒川村三輪社之儀　奉幣岩崎村増子左右護
元者疱瘡神ヲ改號致候由、
右ハ祭候ニ不及神ニ付、廢止候方可然哉、若又改而可祭ハ久須志社抔稱し、大名持少彦名神ヲ祭り可然哉之旨申諭候事、

一荒川村荒川神社之儀
右村ゟ流出候細谷川之末一里餘ニ、荒川口村も有之、實ニ式内荒川神社ニも可有之哉ニ存じ、相尋候處、元白山社ニ河内社ヲ合祭致し候ニ而、神體二軀有之、白山之神像ハ女形ニ而、直垂樣之衣裳、さげ髮打笑候形ニ而、佛トハ難申候、又河内社神躰ハ、風折烏帽子、但御顏ハ、何人之所業ニ哉、深ク削り込候、裝束ハ直垂指貫樣ニ而、決而佛體ニ無之候事、
當村神明社地物古り候得共、荒川神社トハ相見不申候、其譯ハ、式内荒川神社ハ、定而荒き川水之堤を崩し、船の覆り抔致す地ニ、右等之儀無之樣、且田地へ甘キ水[illegible]

ト引用候爲、旁上代　朝廷ニ而御祭ニ相成候儀ト奉存候、然處當荒川ハ、山間之極小村、流水も細谷川ニ而、更ニ右等之由緒無之候事、

一中村雷神社ハ格別も無之、小社ニ候事、（大川寄屋町、雷之下村、其外之雷神社も右同前、）

雷村雷神社も右之小祠ニ而、鎭守神ニも無之、由緒も無之趣ニ付、廻見不致候事、

一山熊田村淺間社之儀　山道三里餘、未雪澤山故廻見不致候、元其村方始メ近邊ニ而觀音ト唱來候得共、社ハ佛堂造りニ無之、神社作ニ而、鳥居も有之、往古ゟ神主奉幣仕來候、依而右社號ニ改メ、祭神木花開耶姫命ト、社人増子左右護先考之代ゟ祭來候得共、猶不審之儘、改メ見候處、女躰ニハ無之、烏帽子直垂之御姿之樣ニ相見、尤古く相成きりとも見留難く候得ハ、猶能々拜見仕、彌男像之節ハ、祭神之御名何ト可仕哉之旨、増子左右護相尋候ニ付、

是迄淺間社祭神開耶姫命ト致來候上ハ、男體之神像其儘御父大山津見命ト二神合祭可然歟之由相答候事、右社實ニ舊社之由、其邊之もの申候事、

四月十四日

（一脱カ）中鰮村河内社之儀　奉幣岩崎村増子左右護

往昔ゟ瀨織津姫神ヲ祭來、河瀨之災難無之樣祈申候、

右ハ藏王之神ニ御座候得共、大祓詞ニ、佐久那太理ニ落瀧津早川之瀬ニ坐瀬織津姫ト云神ト有之候得ハ、是又尤之儀ト被存候事、

一荒川口大里大明神之儀

隨分社地宜敷、元ゟ山之神ヲ祭來候、

社地内地藏觀音等ハ、取除可然由申諭候事、

岩船郡ニ而ハ、村上城下ゟ、東北之地鼠之町最寄海府之村々悉ク山神ヲ大里明神ト唱來候、

大澤村、大毎村、〔註〕中村、北黑川村、堀之内、〔村脱カ〕溫出村、中濱村、芦谷村、越澤村、寒川村、荒谷村、中新保村等ニ而、元大里明神祭神大山祇命ト書上候處、中條民政局ニ而、山神社ト書改差上候樣被仰渡相改候由、

右ハ儀號ニも無之、其土地ニ稱來候儀差支も有之間敷候間、大里社祭神大山祇命ト仕候共、勝手たるべく被思候趣申諭候事、

一荒川口村多伎神社之儀

神明社地ニ在之、右之小祠ニ而、村之者ハ瀧之不動ト唱來、式内之由緒等更ニ無之相見候、但泥淸之佛像等無之候事、鵜川村瀧神社も、不動ヲ取除、改號致し候社ニ候

事、

一温（ミン）出村熊野社之儀

本體相改候所、釋迦之佛像ト相見、いが栗頭ニ有之、本ハ川ゟ流來候ヲ拾取候由ニ付取除、神鏡ヲ神體ト祭改メ可然由申諭候事、

一温出村級津彦社之儀

元杉之尾社ヲ改號仕候由申之、

右モ更ニ由緣無之候間、杉之尾社祭神大三輪大物主神可然歟、万葉集ニ、三輪之神杉又大三輪之神憑板ニ爲ル杉之、又三輪之祝之齋祭神杉抔有之候旨申諭候事、

一中濱村大國神社之儀

元藏王權現ニ在之候ヲ改號致し候旨申之、

右改號祭神不相當申諭之委細ニ、藏王村藏王之處ニ有之、

一同村秋葉權現之儀

遠州之寺號ニ付、鎭火社ト改メ、祭神火武須毘命又香具都知命、可致旨申諭候事、

十五日

一岩崎村ニ、神明宮、諏訪宮、白山社三社有之、此度改而、村鎮守相定候處、（儀ニ付）神明宮ヘ舊社ニ而、本家増子左右護持ニ候間、鎮守可然旨申之、村方ニ而ヘ、萬事都合宜敷ニ付、諏訪社ヲ村鎮守ニ仕度旨ニ而相爭罷在候處、理解申諭し、諏訪社ヲ此度村方都合宜敷ニ付、鎮守社ト相定候得共、分家増子敬護持ニ有之、神明社ヘ鎮守ニ相立不申候得共、本家増子左右護持ニ而、舊社ヘ勿論、是迄之御書上ケ帳ニヘ、筆初メニ記し來本末之混亂末々迄有之間敷爲、兩方證文爲取替いたさせ（候儀相違無之）、與熟行屆らせ候事、

一基石村蒲原神社之儀　大川町増子多久摩

元ヘ六社明神ト唱候社ニ有之、尤蒲原ト申字之地ニ祭候故、式内蒲原神社ニ候由、神主强而申之、

蒲原ト云字ヘ、社地邊之田畠之字ニも相殘居候哉之旨相尋候處、其社地而已蒲原と申字ニ候由答候得共、信用難相成、殊ニ社地之形勢、更ニ式内之跡トヘ難存候事、

一貫津駿村箱堅山八幡宮之儀（今際本ト字ニ書候得共、村名の唱之儀、假字書ニ致候事、）海邊ニ切立候岩山、實ニ筥ヲ積上ケ重子固メ候如ク、高サ凡六七町、石階數百段登り候而、社御座候、社之後ヘ土堤ヲ築廻し候如クニ而、其上ニ登見候得ヘ、海潮眼下

ニ而、一足踏迯（外）し候得ハ、數十丈下之海底ニ墮落可申形勢、實ニ屛風ヲ立候如くニ有之、且老樹森々千歳ニ餘り候哉ト覺候、松杉槻柏椿もち（黏）の木等、都而一山一圓ニ御座候而、下越後ニ無比類社地ニ候事、

式內蒲原神社成由、勝木村ニも中社有之候得共、小社といひ社地柄ト云、信用難仕候、此箱堅山八幡宮之儀、上件之通、千歳以上之舊社ト相見、山上之形勢石階之模樣、中々一村一神主之力ニ及候處ニも決而無之、必式內之神社ニ而、上古ハ國司之修理故、如斯歟ト被存候間、此社ヲ以而蒲原神社ト相定可然哉ニ存候、勝木と云村名も由緣御座候、越俗蒲ヲかづらかつぎ抔唱へ、三條（蒲原郡之村名）邊ニ蒲川ヲ嘉坪（ガノ誤）川村ト唱へ、蒲生をがりさふ抔唱へ候例も有之、箱堅山下之田地相應ニ、廣地上古蒲原ニ候故、社名ト相成村名も蒲村（ガノキ）（蒲原ヲ訛而）と唱へ候歟、愚按迄ニ候事、

一寶竈社之儀

腸川村、今川村、桑川村、新保村、馬下村、

此邊往昔鹽ヲ燒候砌か、祭來、祭神未詳候、

和漢三才圖繪（會）之說ニ依而、味鉏高彥根命ヲ祭候哉、

答、仰之通ニ御座候、

四月十六日

一板貝村守神社之儀

元行神社とも、モリノ神社とも唱來、天鈿女神ヲ巫女之祭ル社と同斷ニ而、羽前國之地ニも、數多例有之由ヲ申候事、

一吉浦村雷神社之儀

元寶藏權現ト唱來候ヲ改申候、

右之儀不相當、且祭神別雷神ト記し候も、殊ニ不相當、別雷尊も、京之上賀茂之大神ニおゐしまし候、改而意加美社ト稱し、嶽龗闇龗兩神ヲ祭り可然歟、右之神も所謂龍神之本元ニ而、雨ヲ掌り給ふ御神成由申論候事、

一吉浦村、今川村久斯神社之儀　馬下村神主

一旦昔上仕候得共、實ニ（ハ）業師佛ニ付、寺へ相渡候事、

四月十七日

一大月村月山神社之儀　奉幣村上管内布部村横山某

一里餘之山上故、遠見方七八尺程之社ニ而、神主三四里遠方、村方之百姓も祭神不存候旨申之、

月山神社ハ、羽前國飽海郡之式内大社ヲ摸し候儀ニ而、御同體ト心得可然由申聞候事、

一荒澤社之儀　同村　同人

昔々荒澤樣ト唱來、是も三十町程之山上ニ在之、貳三尺四方之小祠、祭神之儀ハ右同斷不相分由申之候事、

一柏尾鹽釜社神體之事　奉幣馬下村

右像佛體之由風說有之、相改候處、烏帽子直垂ニ而、極古物虫ハみ候得共、決而佛像ニ無之候事、

一野潟村鎭守十二社之儀　弁馬下村同社之儀

祭神天神七代地神五代抔書上候儀、定而後ニ作り設候儀ニ可有之、元々祭神ハ如何、

答、別段之申傳も無之、唯〻十二社權現ト而已祭來候處、中條御局之御差圖ニ而、右之祭神書上申候、

天神七代地神五代抔ハ、中古之誤也、祭神ニ不相當ニ候、

村上中條邊々、上越後ニ而ハ、大抵十二社ハ山之神ト万民心得居候得共、此邊ハ大

里明神ヲ山神ト祭候儀故、此邊之十二社權現も、元藥師之十二神將ヲ祭り候歟ト被思候得共、本元ニ復し二所社ト改メ、大己貴少彦名神ヲ祭り可然哉之旨申諭候事、

一岩ヶ崎多岐（伎カ）神社之儀　村上管内ニ候得共、式内之儀ニ付、内々參詣候、
右社地磯際之岩上ニ有之、其傍ニ相應之瀧落申候、近邊之者も瀧之不動ト唱へ候得共、元來神社ニ而、不動も其近隣之元眞言宗某寺之本尊ニ候處、寺院退轉之折柄、享保年中本尊ヲ社中ニ納メ候故、瀧之不動社ト俚俗相唱候、唯今も佛像取拂候趣神主之話ニ候事、
　隨分之神社ニ有之候得共、慥ニも難決哉ニ奉存候事、
　岩ヶ崎村之地内ニも無之、瀬浪川の端ニ而、瀬浪之地岩上ニ座故岩崎ト云のミ、

一西奈彌（セナミ）神社之儀　村上管内瀬波驛
今氣比大明神之額ヲ掛置候得共、此地越前敦賀ニ似寄候湊ニ有之故、混ひ候物ト被存候、社柄ト云、地名ト云ヒ、式内相違無之相見候事、

一岩船神社　同岩船驛
社地之形樣地名、旁式内聊無相違相見候事、

一牛屋村鎭守日之宮神社

元ゟ日之宮權現ト唱へ候由申之、

神體石中ニ手を拱キ候形ニ有之、鼻耳眼等も不分明ニ而、神とも佛とも難決候、



大體如是、苦ゟ塞神之御姿ニ哉とも覺候間、其儘差置候、其外



如是、何共名付難キ石一有之候事、

四月十八日

一（驗カ）大津村政寶院、修驗之身ヲ以而、其村方神社之鍵ヲ預り、出入進退致居候段、混淆ニ付村方へ鍵相返し、村役人鍵預置、社地掃除等致し可致（マヽ）由申諭候事、

付、同人日待月待等、神道ヲ以而相勤候儀、遠慮可致旨も申諭候事、

一藤澤村鎭守神明社地内、大日堂神體相改候處、圓石而已ニ付、改而塞（サヘノ）神ト祭り、大八街彦神岐神八街姫神可然由申諭候事、

一海老江村石動社前之鰐口取遊（外）し、鈴ニ鑄直し可然旨申諭候事、

一桃崎村荒川神社之儀　村上管内奉幣人當御管内金屋村

式内ニも無之旨、村役人申之、猶別記ニ有之候事、

四月十九日

（一紙カ）乙村大日堂地内辯財天之社前、鳥居ヲ除き、辯財天女ハ其儘佛堂ニ而祭り候共、不苦旨申諭し候事、

一同地内琴平小社ハ、鎮守社地内へ持遷し可然旨申諭し、且大日堂内觀音佛前ニ提置候鈴廉等ハ、混淆ニ相成候間、取はつし可然由申諭し候事、

一乙村鎮守八社權現之儀　神主山屋村野尻大隅

乙寶寺境内ト書上いたし、且大日堂山門ゟ往來致し候段、不都合ニ候間、社地ハ社地ト相定メ、社木ヲ以而境堺ト致し、柴垣等まても相隔て、社前之草藪ヲ切拂ひ、社之道ト致し可然旨申諭候處、乙寶寺も其邊様地廣之松山澤山ニ御座候故、社地入用程、勝手次第村方へ可相渡旨、心能相受、且草藪ヲ切拂、社之道ニ致し候得ハ、社ヲ外地へ遷座之雜費無之、誠ニ都合宜敷旨一同申候事、

付、八所權現之祭神、神祇官八神殿之旨書上候得共、如何可有之哉、隣村大出村八所社ハ、祭神八所御靈ト書上候得ハ、其例ニ倣ひ可然歟之由申諭候事、

又ニ市川神社八所社ト書上候儀、

里人之傳ニ、市川社ト申來、且往昔ハ大日堂、只今之經藏塔之地ニ有之候ヲ、社地山を切落し平げ、大伽藍ヲ立候ゟ、社地狹り候由申來候、

又或云、市川神樣ハ川ニ流來候木ヲ拾ひ、薪ニ用候事御嫌ひニ而、乙村ニ而ハ、右川木ヲ薪ニ不致候、右ヲ又大日如來ヲ川木ニ而作候故共申候事、

一同村末社日蔭社之儀

祭神實ハ不詳候、思し召付有之候ハヽト、差圖ヲ乞候間、日蔭頭鬘之緣ニ而、天鈿女命拜可然歟、其外存寄無之旨相答候事、

一大田村熊野社內權現之札、梵字等之札可取除旨申聞候事、

一菅田村菅田社之儀

神體之箱ニ道祖神ト記有之候上ハ、布奈度神、八衢彥八衢姫神、三座ヲ祭り可然旨申諭候事、

一長政新田紀伊國新田渡部新田黑船稻荷之儀

四五十年前ニ、右之義ニ而祭候由申之、狐ヲ黑船稻荷、天船稻荷拜稱し祭候事も有之、紛敷候間、右等之義ヲ除キ、只々稻荷社ト可稱旨申諭候事、

一相殿大沼明神之儀

當村地先ニ、字ヲ九十九池ト申處有之、往昔ハ池沼多く、中ニも大沼ト申候ニハ池

神相住候由申傳、右九十九池之地追々干上り、唯今新田開發ニ付、右之神ヲ祭り候、
今以而沼池數多有之由申之、
扨、沼地等ヲ新田開發之爲ニ候れゝ、大名持少彦名神ヲ祭神ト致し可然歟、續日
本紀之長歌ニ、大名持少彦名神之國作堅給時ニ、蘆菅ヲ生植し而、田（沼地之緣）之
地ヲ堅め、田畠ヲ闢き被遊候趣ヲ讃候歌相見、澤村ニ菅田村有之、旁由緣有之樣
登候段申論候事、付、社地ト地藏堂ト混淆無之樣、境界可相定旨申聞候事、且（龍神
ハ白龍神ト稱シ田畝ニ可祭歟、）
一開田村伊達山（神）之神社ヲ、韋駄天ト唱へ、元神主持之處、寺院へ相渡候由、寺僧鳥
居有之神社造之地へ（ニ移シ）佛體ニ而祭り候儀、如何可有之哉之旨、神主高野村藤間清ニ
申含メ候事、
一山屋村仁德稻荷之儀も、仁德之號相省き可然旨申論候事、
一十二天村土生田十二天社之儀　山屋村野尻大隅
土生田神社にて、蒲原郡羽生田村ニ可有之、此邊ハ上古沼垂郡ニ而、蒲原郡之式内社
可在道理無之ニ付、相除可然候、且十二天ト申上ハ、藥師之十二神將ニ相違有之間
數儀ニ付、上古之本元ニ復し奉り、

二所社　祭神大名持少彦名神と改メ祭り可然哉之旨申諭候事、

一八幡新村、高野村兩村之鎭守八幡宮之儀

元一社地之地、(マヽ)先年炎上之後、子細有之、各一村一村ニ宮殿造營、兩社相對而在之、別ニ鎭守ニ致し候由申之、

右社往昔ハ、社木等物古龍在候處、一本も不殘炎上致候得共、隨分社地宜敷、近隣之老夫等舊社之趣申候事、

一横道村神明宮内梵字棟札、七所權現梵字棟札等、取除キ可然旨申諭候事、

復飾神職片山右近、七所社之祭神不相分旨尋ニ付、

答、日吉山王七社ヲ摸し候儀ト覺候間、日枝社(日吉比叡同斷)、改メ、大山咋神、若山咋神ヲ祭り可然哉之旨相答候事、

一藏王村藏王ヲ金峰神社ト改號之儀

金峰神社ハ、今も吉野ニ而、地主神金勢明神ト稱候趣、古史傳ニ相見候上ハ、藏王ハ金峰社而已之混淆共難定哉、吉野ニ而ハ、金剛藏王子守勝手明神三社ヲ同體眷族抔唱ヘ、右ハ全ク金峰神社、(祭神金山彦金山祇神之内)吉野水分神社、(天水分神、國水分神二座内可然、)吉野山口神社(大山祇命御同體大水上神歟、右兩社田地ニ甘水ヲ配與給神、其縁謂觀閲式可見、)を混淆致し候儀ト覺候得

ハ、右三社之神ヲ祭リ可然哉、此藏王村之社ハ、山上一里許之地ニ在之、近邊八ヶ村之水元神ト稱來候由、旁由緣有之旨申諭候事、

一同村如意輪觀音之儀

右ハ藏王之付物ト相見、吉野ニも同佛有之、但當村ハ吉野之摸ニ可有之、且山神社ト同地ニ有之、地所堂共、寺僧へ引渡候而ハ、甚不都合ニ相見候間、右佛像幷堂舍ハ、望之寺院へ相渡し、山神之社地混淆ケ（間脱カ）敷無之樣可致旨申諭候事、

四月廿日

村々神社奉幣之儀ニ付、山屋村神職野尻大隅ト同村（[illegible]）片山右近ト內々相爭候之儀ニ付、兩人へ理解申諭し、并其村方へ理解申遣し候書面、

其村方神社祭禮之砌、春ハ野尻大隅、秋ハ修驗相勤來候處、修驗復飾ニ付、悉皆片野右近ニ祭祀向相任セ候而ハ、先例ニちがひ御神慮之程も難計、且夫が爲ニ、是迄之神職糊口ニ差支候樣相成、無據願立等致し、公事訴訟等出來候而ハ、不相濟儀、始終村方にも遺恨筋相懸り可申候、依而是迄之通、春祭ハ野尻大隅相賴、秋ハ片野相賴、神事相勤、双方共異論指支無之樣以ゑし可然義ニ被存候、爲可得其意、（如シ）可斯候也、

新潟縣社祠方
小池　巖藻印

明治三年午四月廿日
熱田坂村
夏井村
坂井村
鼓岡村
右村々役人中

四月廿一日
(一脫カ)
築地村彌彥之社之儀
隨分相應之社地ニ而、湯殿山の梵字可取除旨申諭候事、
一村松濱鎭守小鷹社之儀　奉幣社人　中條驛吉田伊豆
昔ゟ小鷹大明神ト唱來、祭神ハ不分明ニ付、書上仕候節、奉幣神職之中ニ任せ、相記し差上候由申之、
右社地甚廣く、松樹繁茂、小高キ地ニ在之、若ク者社號ハ小高き地成故ニ稱し候ニも可有之哉、舊社ト相見、昔ハ沖乘船人も、社前之海ヲ過候時ハ、かむり物ヲ脫

候由、今も二之森ト稱し而、尊信致し候、此神坐（座）故、村中ニ而鷄卵ヲ不食抔も里人中之、此小鷹ト申社號、高畠村ニ小社有之而已、其他ニ未タ見聞不致候得共、祭神難決候、高畠村ニ而も、奉幣神主之申儘ニ而、祭神申傳無之趣ニ候事、

一中村濱大國神主之儀

鎮守之末社ニ而、元ハ大黒天ヲ改號仕候、但混淆之佛像等入置不申候事、

一笹口濱須賀社ハ、牛頭天王の改號ニ候事、

一荒井濱村船玉社、祭神興魂命之儀、

神主へ相尋候處、猿田彦命之又之名ト相心得居候旨申之、猶又相尋候ハ、何レ之古書ニも所見無之、不審之由申候處、神主儀神系圖ニ有之旨相答候間、持參爲致候處、寛政年中武藏國在所社神主之板ニ影セ候掛軸ニ而、誤謬多ク有之、岐（フナト）神之一名ヲ猿田彦命ト申し、又名ヲ大田命ト申抔誤り、又外宮御同體抔、以之外之誤ニ有之、殊興魂命も、右御同神ニ而、船靈神ニましますよし記し置候、右者全ク岐神八衢彦八衢姫神ヲ誤候儀故、此三座之神ヲ祭り可然旨申諭候事、

但、船靈神ハ、住吉神ト右三神ニ候様相聞、別書ニ取調置候事、

四月廿二日

一藏光村三宮神社之儀

昔ゟ右樣唱來、祭神も書上之通申來候趣、神主等申之、

按、三之宮ハ、日吉山王七社之内ニ有之、右ヲ摸し候歟、然らハ、混淆之佛說ゟ出候號ニ付、日枝(ヒエ)若宮抔改め、若山咋命ヲ祭り可然歟、八意思兼神、稻倉魂神、少彦名神三座ハ更ニ相當り不申、且右之三座ヲ一同ニ合祭之由緣も古書ニ所見無之、又三座ヲ祭ル號ニハ、三所又ハ三社抔稱し、第三ニ當ル序次之號ニハ、三之宮ト稱して、一神さる譯等ト可相辨旨申諭候事、

四月廿三日

一藏野新村、牧野新村兩村之儀、隨分大村ニ而、村中之百姓大抵豐饒ニ候處、一向門徒宗門而已ニ而、鎭守社無之、右ハ先年福嶋沼洪水ニ而、村地ヲ水上方へ引候砌、若宮社ヲ捨置、兩村人民而已引去候故之事ニ而、右社ヲ唯今隣村山倉村ト地境之處ニ有之、依而山倉村之(マヽ)是ヲ祭り候、然處藏野新村、牧野新村ニ而ハ、佛信心故、神社無之ヲ幸ニして、却而夫ヲ譽レとして誇り居候由申者有之ニ付、其村方問尋候處、相違無之ニ付、右兩村兼帶庄屋に理解申聞候ハ、

天朝ニおゐせられ、祭政御一致之御趣意ニ而、神祇官ヲ太政官之上ニ立られ、厚ク

神祇ヲ御敬祭之儀ニ候得共、村々庄屋も戴（體カ）認し奉り、元方之鎮守ヲ祭り候共、或最
寄隣村之鎮守社ヲ共々敬祭致し、春秋恒例之神事相勤可然旨申諭候事、

一飯山村鎮守神明宮末社稲荷、其外之社中ニ、梵字ヲ書シ候神體之木札三四本有之
候分相除ゟせ候事、

一新鼻新田潟周社之儀
福嶋潟之中へ築立候新道、堤之上ニ石之小社ニ而有之、是ハ右沼干上り、田地ニ相
成候様、沼際十三村ニ而信心仕（祭之）候由申之、
右ニ依而、愚按候處沼地干潟之陸（ニ）ト相成候様ニト申社號ト相見候、夫ニ而ハ、書
上（ケ）之祭神不相當ニ可有之、大名持神少彦名神可然候由申諭候事、
但、此神々ヲ祭候譯ハ、別書ニ記し置候事、
付、社地内之卒塔婆相除ゟせ候事、

一内沼新田綿向明神之儀　新發田管内ト入交之地ニ而、社地御管内ニ無之候得
共、他ニ僞不開及、社號ニ付、子細相尋候處、村方ニ而も、唯々綿向明神とゞあり、昔方
祭来、祭神も不相分別段申傳も無之、神主ハ新發田藩管内榎木村某遣方故、只今聞
知候儀ニも難及由申候事、

一船居村天明社之儀
天照大神之天ト神明之明ヲ取候儀ニ候得共、元成神明ト稱し可申旨申候事、

一本明村石佛社之儀
當村も淨土眞宗之者而已ニ而、右社號ヲ鎭守ト心得來候、其像ハ、石面へ彫込候古物ニ而、神共佛共難決候得共、村方ニ而ハ大日之像ト申傳、聊惟敷體も有之候間、耕作之無妨別地ニ遷し、改而大名持少彥名神二神ヲ祭り、二所社ト稱し可然旨申諭候、右二神ハ、石像ニ由（脫アラン）緣國史延喜式等ニ相見、且國經營之尊神故、不相當ニハ有之間敷被存候ニ依而如是候事、

四月廿四日

一百津村客人社之儀
日吉山王泚滑七社之內之號ニ付、改而比叡若宮ト稱し、若山咋神ヲ祭可然旨申諭候事、
付、社地中佛供養塔取除らせ候事、
里人云、右社、元ハ馬頭觀音ト唱へ候ヲ改號仕候也、

一浮洲社之儀

元ゟ唯浮洲権ト唱來、祭神等不相明候處、神社取調書上仕候砌、神職棠ニ聞尋、高照比賣命ト書上仕候由、復飾社人申之、

是も此邊、上古ハ沼地之浮洲共覺敷地ニ而、田地ニ相成候爲祭候社名ニも可有之哉、依而大名持神少彥名神ヲ祭可然歟之旨申諭候事、

一境新田熊之宮ハ、熊野宮之書損ニ有之候事、

一庄之宮十二社之儀

地名ニ依而、愚考候ニ、古社ニも可有之哉ト存し相尋候處、社地ト云、廻而別段も無之小社ニ候事、

一越御堂村床浦社之儀

元疱瘡神ニ候處、先年白川家ゟ許狀受仕、右ニ改號仕、神倭伊波禮毘古命ヲ祭候由申之、

假令白川家之許狀ニ候共、疱瘡神ヲ無勿體、神武天皇ト祭替候儀、可有憚旨申諭候事、

一同村鎮守十二社中、觀音供養塔、庚申塚へ耕作無差支地へ遷し可然旨申諭候事、

一六之瀨村瀨崎社、式内長瀨神社之由、村方ニ而申傳候儀ニ付、取調候處、閑大樣現ト

記し候提燈有之、額面を取迯(外)し置候ニ付、如何致し候哉相尋候處、修覆ニ遣し候旨申之、文字ハ如何樣記し有之哉尋候處、矢張關大權現ト記し有之旨相答候、右ニ依而、愚按候ニ、全ク六之瀨ト云村名ニ依而書改差上候儀ニ而、式內長瀨神社ニは有之間敷候、關大權現之祭神瀨織津姬命甚タ不相當被存候、關明神は奥之白川之關邊ニ有之、右は石戶別命之由、平田之古史傳ニ有之、(相見)西京之逢坂關之明神も、定而御同神ニ可有之歟、或は岐神八衢彥姬神ヲ祭候障(塞)防之神ニも可有之哉ニ被存候、但當關權現社地、甚タ物古り社木森々たる中ニも、白檮之老樹は四五百年ニ可相成相見候分、數多有之、若は別之式社ニも可有之哉ト被存候得共、孰之式內トモ心當り無之候事、

一四柱社は、右關權現社地內ニ而、長堂ト唱へ、白山、熊野、諏訪、稻荷之四社ニ有之、書上ケ之祭神は不相當之分有之候事、

付、風宮も同地ニ而、右之小祠疱瘡神も同地之小祠ニ候事、

一江端村須賀社は、元牛頭天皇(王)ニ有之候事、

一保田村蒲原郡一宮八幡宮之儀　神主安田薩摩

吉田家之許狀ニ被載候共、方今舊弊御一洗之折柄、不容易、郡之一之宮號を相憚可

然旨申諭候事、

一分田村日之宮ハ

元ハ日之宮權現ト稱し、元文年中阿賀川原ツヽガ之虫ト申毒虫之鎭メ之爲祭候由申傳候趣申之、

祭神之儀大日孁貴命ハ如何可有之哉、大地主神歟、或ハ大己貴少彦名神ヲ祭り可然歟之由申諭候事、

四月廿五日

一滿貫寺村神明社ト、觀音堂ト同地ニ有之候ニ付、杉くね等ニ而、境堺相立、混淆不致樣申聞候事、

一上木津村天王社之神像、青面金剛童子障礙神（惣身朱塗）之像ニ有之候間、取拂申付候事、

一割野村神明宮之御像貳軀共、額上ニ五輪之塔ヲ載候、混淆體ニ有之候間、取拂可然旨申諭候事、

一酒屋村八王子權現之儀

神體大石二ニ而、是ハ祇園之八王子（摸し候儀ニ）ニ可有之候、其故ハ、上代ニ石ヲ以而神體ト致し、塞神三柱ヲ祭候例ニ有之候處、吉備公素盞嗚尊稻田姫命ヲ、將神之天道神、牛頭

天王、歳徳神、婆利采女抔祭られ候か、祇園之塞神ヲ、暦神之八將神八王子ト稱し候儀ニ付、此處も塞神ヲ八王子ト申來候事ト被存候、依而上古ニ復し、塞防神三柱社と額面ヲ書改メ、岐神八街彦八街姫神三座ヲ祭可然歟之旨申諭候事、

但、日吉山王七社權現之内ニも、八王子之號有之候得共、此地そ共八王子ニこそ有之間敷被存候事、

神佛混淆之儀ニ付
新潟中神社取調

新潟中神社取調記

一日蓮宗長照寺内三十番神之儀
鳥居幷三十番神之額、同神像三十軀左右隨神共可取除申入候事、

一秋山白雲靈神堂之儀
以前之如ク白雲居士ト改メ、鈴四ツかゝのを等取外すへき旨申諭候事、但鈴四引上ニ及應に差上候事、

一鬼子母神堂十六菊　御紋付候銅燈可相憚旨申諭す、幷稻荷社鳥居共可相拂旨申聞候事、

一善道寺辨天堂前之鳥井、幷稻荷社疱瘡神社鳥居共可取拂旨申諭す、

一不動院之觀音堂、菊之　御紋品相憚可取仕舞旨申入、

一瑞光寺鎭守諏訪社取拂方申諭す、

一白山宮末社稻荷社内ニ、白狐形二疋有之分、取拂可然旨、神主小林能登へ申諭候事、

一同末社天滿大自在天神之儀、大自在天トハ、天竺之佛號ニ候間、相改可然旨申諭す

一神明丁神明宮ニ船江神社之額ヲ掛置候分、由來ヲ委細承り候處、伊勢之御師某直江山城守ゟ除地ヲ給り、元新潟關屋村邊之地ニ大御神ヲ祭り候ヲ、後ニ當地へ遷し候ニ而、式内之由緒無之間、額面相改可然旨、神主行田和泉へ理解申諭し候事、

一同社末社金毘羅社ヲ金山彦命ト改號致し候ハ、不相當、金刀比良社祭神大物主神可然哉之旨申諭し候事、

一寄居村諏訪社鳥井額ニ、土生田神社ト記し候儀、式内之社ハ羽生田村ニ可有之筈ニ候間、相改可然由申諭し候事、

一林稻荷社之儀　下町小田屋平右衛門建立

兩三年以前迄、禪宗宗現寺ニ而、祭祀いたし候ニ付、同寺へ相尋候處、御一新後ハ一向携り不申、誰神主之只今奉幣仕候哉、一向存知不仕旨返答仕候事、

一本覺寺元稻荷社ヲ、吉祥殿經藏殿ト改候得共、神鏡鈴等錺置候間、本縣へ可差出旨申聞候、

鏡五面　鈴四ッ又八ッ〆十二

其外菊　御紋之燈臺可改旨申諭候事、

一寶持院不動堂之鈴、金之尾等取除させ候事、

一往生院辯財天堂中、幣束鏡取除させ候事、

一元万善寺復飾永一、秋葉社ハ三尺坊大天狗之像、白狐ニ乘候六寸程之像ニ有之、右ハ追而沙汰可致事、

一毘沙門天堂ハ　毘沙門嶋良之介建立

多門天之佛像ニ而有なから、幣三本、鈴三、太鼓一ッ、神酒德利五本、鏡二面、鳥居一基有之、

右神器取除申付、鏡鈴ハ縣廳へ可差出旨申聞候事、

一毘沙門嶋金毘羅社　元大樂院復飾一

祭神改號之儀、委敷教授致し、鰐口ニ鈴ニ鑄直、掛替可然旨申諭す、且

同社中舟玉神之神體佛像ニ付、幷不動佛共、淸地ニ而燒拂、灰ハ流水可然旨申諭す、

且船靈祭神之事も委敷教授ニ及候事、

知事　　　　　　庶務方

大小參事　　　　鑑（監カ）察

　　　　　　　　社司方

神佛混淆之儀取調候ニ付

神鏡五面　鈴十二口　本覺寺吉祥堂ニ有之候分、

神鏡壹面　　　　　往生院辯天堂ニ有之候分、

鈴　四口　　　　　長照寺三十番神ニ有之候分、

神鏡貳面　鈴三口　毘沙門嶋多門天堂ニ有之候分、

〆神鏡八面　鈴十九口

右之通差出候分、用度（會計）方に引渡可申哉、此段奉伺候也、

四月廿八日

〔神社廻見記錄〕二　新潟縣南蒲原郡加茂町養德文庫所藏

明治三年午五月朔

御管内

村々神社廻見日誌

新潟縣社祠方

小池嚴藻草

五月三日

一平嶋村三社宮之儀　奉幣人 新發田管内山田村某

神體相改候處、三尊之彌陀佛像ニ有之間、取除可然之由申聞候處、此邊佛僻ニ而、神社ト不致、佛堂ト致度旨申之、尤鳥居も無之、神社トモ難申造方ニ有之候間、申ニ任セ可然被存候、左樣佛堂ニ致し候心得ニ候ハヽ、御神燈ト彫候石燈籠モ、鎮守神明宮之地内ヘ遷し可申旨、庄屋信次ヘ申諭候事、

一同神明宮神體五倫(輪)塔ヲ頂キ候ニ付、取除、神鏡ニ改メ可然旨、同人へ申聞候事、

一大路町鎮守三座之内、稲荷神體之傍ニ有之狐形取除可然由、庄屋秀次郎へ申諭候事、

右社元奉幣神主ニて赤塚村眞田八雲、社守ハ修驗教學院ニ有之候處、修驗復飾之儀ニ付我意申募候次第有之、依而社守取放し、村方ニ而除掃(掃除)其外相勤、奉幣ハ本(舊)例通、眞田八雲に相頼候由、村役人一同申之、

一金巻村稲荷社内狐形取除之儀申聞候事、

一大潟村神明宮神體五重塔ヲ頂候佛像ニ付、取除キ、鰐口鈴ニ鑄改可然由、組頭喜左衛門へ申聞候事、奉幣人押付村玉木八束

一升潟村早鶴權現之神體

佛體ト云難定候得共、紛敷像ニ有之間、神鏡ニ鑄改、厨子香爐并釋氏之血脈等取除可申旨、庄屋貞次郎代弟ニ申聞候事、

付、祭神之儀、鶴草葺不合尊ト申傳候由、木戸新田も同樣申之、右ハ他ニ例ない社號ニ有之、祭神之儀も慥ニ難定候得共、右御神ヲ祭候も、惡敷筋ニハ有之間敷被存候、若又早尾權現ヲ唱誤候歟とも被存候、早尾之儀ハ、矢代田村之條ニ委細記し置候事、

五月四日

一曾根村湯殿山之社之儀　奉幣社人　赤塚村眞田八雲
眞言宗金剛院寺内ニ有之候、不都合ニ付、境堺相定、社地ハ社地、寺地ハ寺地と可致、厨子佛像ハ寺へ引移し可申旨、庄屋福七へ申聞候事、

一同寺内藥師堂神鏡相排(取カ)方申聞候處、右鏡元ハ湯殿社之分ニ有之候ヲ、兩三年以前藥師堂へ遷し候儀ニ付、磨き候而元形湯殿社へ相納申度旨申候事、

一富出村神明宮之儀
神體五階堂ヲ頂き候儀ニ付、取除、神鏡ヲ以テ奉祭可然申諭候事、

一機屋村諏訪稻荷兩社ト藥師堂トならび有之、尤地ハ別ニ候得共、境堺無之ニ付、早速小堀ヲ立混淆ケ間敷無之樣申諭候事、

一押付村鐙八幡宮之儀　奉幣人　玉木八東　庄屋　源八郎
本社地ハ手作田村邊大榎ノ木之下ニ、小祠有之由、其邊之畑字をよろひはなト申唱へ、神體ハ鏡之形ノ木ニ而作り、鐙八幡宮ト記し(額面ニ鐙八幡宮と相記し、鐙潟ト云地名ゟ出候歟)有之、古物ニ而何木とも定かならし、社地宜敷由來有之樣ニ相見へ候事、

一押付村稲荷之儀　社守　吉右衛門

奥殿中ニ有之候狐形三個取除ろせ候事、且社内狐之出入穴と申れ、人之風聞とれ違ひ、夫程ニも無之候間、右之すきを直させ、悪風聞無之様可心付、且いよ〳〵正敷稲荷神ヲ祭り、たとひ人之頼ミ候共、油揚赤飯等献間敷、改而御酒白米等ヲ可献様申諭候事、

一善光寺村善光明神之儀

領主之命ニ而、御封印野ト申地ヲ田地ニ開墾仕候砌、右御封印野を、十二村之持分ニ而、各村夫々社ヲ建置候處、當村分を善光寺之名ヲ以而、善光之神社ト申來候由申候、

右ハ田畑之ひらかむ為ニ祭り候儀ニ候得ハ、

二所社　大名持少彦名神ニ可祭、いましへ蘆葦を植生し國作給ひ、沼川を治メ、田畑を開墾し給候、其神徳ヲ可奉仰旨申諭し候事、

一同村菅原天神社之儀

大威徳天神と云額ヲ掛置候分、佛號ニ似候間、可書改、香爐ハ取除、鰐口ハ鈴ニ鑄改可然由申諭候事、

一同村善光寺内ニ、秋葉社ニ伊勢大神宮、御祓鏡鈴ヲ掛置候、社殿鎭守地内へ遷し可然由申付候事、　付り、　菊之御紋付之挑燈可張改旨申聞候事、

一保古野木村諏訪社之儀
神體太刀ハ佩候得共、十王或ハ焔魔羅王之頭之如き冠ニて、惣而佛躰ニ付取除、神鏡ヲ祭るべく、秋葉之石像袈裟ヲ掛獨鈷ヲ持候姿ニ付取除、和光同塵ト書し額面書改可然由、庄屋他行致し、隱居俊作へ申諭候事、

一中野興野離地五左右衛門野新田伊夜日子之儀、庄屋重平社内ニ七面明神ヲ置候間、是ハ日蓮宗之淫祠ニ候間（へこ）差除、彌彦大神一座而已祭り、日蓮宗高山村蓮久寺之納經ヲ差止、もより勝手之神職へ奉幣可相賴、然るべき旨申諭候事、

一大友村若宮大權現之儀ハ、若宮大神と改メ、辯財天大神ハ市杵嶋姫神、十二大權現ハ山祇神と書改メ可然旨、庄屋三九郎他行ニ付、奉幣神主赤塚村眞田八雲へ申諭候事、

一笠木村鎭守八幡宮諏訪之儀
社内ニ錢ヲならべて、三重之塔之形ニいたし候、本納額取除可申旨、庄屋勝次へ申聞候事、

一高山村神明宮之儀

社内香爐幷ニ又林塔石ニ、加茂大明神託宣ニ曰、釋迦云々ト記し候分文字を削り落し、寺へ相違スべき旨、庄屋五左右衛門へ申渡ス、

右社元ハ日蓮宗蓮久寺持ニ而、奉幣人赤塚村眞田八雲ヲ賴來候ニ付、以後ハ右神主一人ニ、神事向相任可申旨、庄屋申諭候事、

一内野村神明宮之儀　奉幣赤塚村眞田八雲

社内ニ掛置候鰐口幷社内地堂小堂取除候方事、上組庄屋善三郎代悴竹太郎、下組庄屋數衛へ申聞候事、

一同村無高百姓關之進宅之内、稻荷社ヲ建、店先ニ狐形石鳥居鈴金之緒等仰々敷餝置、參錢供物等有之、不審ニ付取調候處、

關之進申、子供ニ狐稻荷之神託有之ニ付、諸人祈禱相賴候ニ付如斯、

問云、何狐稻荷ニ候哉、

答云、押付稻荷樣之御悴狐樣ニ御座候、

敎云、以之外之不埒也、狐仕ひ同前也、但 Ⅲ典之御趣意ニ由キ、此度ハ不見聞分ニ許し遣ス間、以後百姓ニ不似合所業、且諸人ヲ誑

惑せしむるに於而ハ、急度可及沙汰旨、當人幷庄屋兩人へ堅申諭候事、
付、右稻荷木社ハ、元卷驛修驗持之御屋敷稻荷社ヲ預申候由ニ付、本所へ返し候歟、又ハ正敷稻荷神(社)ニ候ハヽ、其鎭守社地內へ遷祭り可申候、埒もなき品々早速取拂可申旨、庄屋へ申諭候事、
明後日卷驛ニ而、修驗相尋候處、只今復飾致し、久我速ト申ハ、其悴修驗也、右稻荷社ハ、長藩ニ而、當所ニ元陣屋有之、一万石支配之屋敷稻荷社ニ而、修驗ハ土御門家門人、越後取締陰陽師之砌、右關之進門弟ニ而七八年前、陰陽師相廢候砌、稻荷社ヲ關之進相預申候、尤關之進ハ無賴人ニ而、眞木驛ヲ始、三四ヶ所相拂ハれ候者之由驛中人申之、

一北山新田秋葉社神體、白狐ニ乘飛行シ、天狗身體ゟ火燃出候、天狗像如何可仕哉之旨尋候ニ付、
鎭火社ト改稱いたし候上ハ、奥之本殿ニ、香具都智(火武須毘)神、埴山姫神、水波乃賣神ヲ祭、川(水)苔瓢等ヲ備へ、天狗像ハ下座へおろし、使者之如致置可然哉之旨、復飾社人久我最初(マヽ)へ申諭候事、

一丸山新田九頭龍權現之社ハ、戶隱社祭神手力雄神と改可然由、庄屋へ相答候事、

一赤塚神社ハ、元伊邪那岐大明神ト稱し候を、吉田家之許狀ニ委細ニ不記而、唯越後國蒲原郡赤塚神社神主姓名某ト書違候ゟ、赤塚神社トいたし、祭神ヲ元之儘（如ク）伊邪那岐命ト稱へ奉る旨、曾根村神主外守も共ニ申之、

五月五日

一赤塚村船江神明宮之儀

舊社地無相違相見候、和（濟山管内）納村庄屋中原大作ハ、極舊家ニ在之、右分家赤塚村ニ藤藏ト申者有之、此ものゝ今ハ藤藏新田迚、一村ヲ切開、庄屋相勤（兼共村）有之、右兩家之舊記ニ和納赤塚共、往昔ハ港ニ相違なき書類慥ニ有之候事、

一赤塚村長右衛門外壹人、百姓之身分ニ而、其妻子ニ稲荷神託有之旨申觸し、祈禱等致し候義、不宜差止可申旨、庄屋志計雄へ申諭し、同人固ク承知致し候事、

一藤藏新田辯財天社之儀

宮殿作方ニ而、鳥居有之處、是迄赤塚村大慈寺ニ而、納經仕來候分、如何可仕哉之旨、相尋候ニ付、

嚴嶋社祭神市杵嶋姫命ト改メ、神職相賴み、祭祀之砌奉幣可仕旨答候事、

但、神殿作り之社ヲ、猥ニ佛堂ニ致間敷旨、
神祇官之御附紙有之候旨相答候事、
辯天面神田之儀、是迄寺ニ進退いたさせ置候分、
村方ニ而割出し候田方ニ候得ハ、則村方之田地ニ有之、依而村方ニ而預世話致し、祭祀修覆料ニ相用、出入勘定帳拵置、委細記錄いたし置可然哉之旨、相答候事、

（一脱カ）松之尾村日之若宮之儀
元ハ若宮權現ト唱來候ヲ、御一新後、右ニ相改候旨、近邊之人皆申之、神主ハ多賀之若宮之旨申之、
但、社地ハ相應ニ宜敷、古木有之、且一本之枯跡等ハ、五六百年の老樹ト相見候事、

一松之尾村枝鄉月崎村稻荷社、石狐形ヲ神體ト致置候分、取除方申聞候事、
庄屋八雄人へ　　奉幣　眞田　八雲

越前濱村鎭守神明宮內本地阿彌陀如來拆記候額面書改申付候事、
庄屋吉衛へ　　同　人

右社俗ニ鳥之子神明宮ト稱し、小兒之夜泣ヲ祈るに靈驗新也、報賽ニ鷄卵ヲ以獻す、其外神異數多有之ニ付、村中之者鳥肉及鷄卵を不食、犯せハ則御祟あり、

當時遂子ありて、行方ヲ不知、父母を初メ、村中患へたるに、庄屋鎮守神明宮ニ祈られ、必驗あらむと云、依而祈念したるに、果して一時許過て、其子何方ともなく、社地に来り遊ぶ、村中之人、且悦且神威を畏る、是五七年以前の事也云々、

一角田濱村鎮守熊野社權現號額、并清淨慈門刹と記し候額、并末社若宮大權現ト記し候木之中札等、書改可申旨申聞候事、　庄屋七右衛門奉幣右同人

一二ヶ村庄屋信次郎屋敷内三十番神堂、并ニ紙札南無妙法蓮華經下タニ　天照大神八幡大井抔記し候札、取除方申付候事、付、角田村日蓮宗妙光寺内之額ニも、右同様記し置、漆山村初メ處々之民家に、右同斷札張置候分も、神名可相除旨申聞候事、

一二ヶ村山王社地内之佛像入候石之小祠ヲ、寺地へ移し、權現號之額書改可然旨申聞候事、

一西汰上村、鎮守神明宮入口之地藏堂、混淆ケ間敷相見候ニ付、五七間（大見續キ耕作ニ不障地へ）可相離旨、申諭候事、

一東汰上村、諏訪社神體頭焔魔王或十王之頭ニ載候冠ト同様ニ而、且手にあうん（阿）之印像ニ付取除、神鏡ニ可改旨申諭候事、且同地ニ觀音堂有之、混淆之姿ニ付、境堺ヲ立テ、同道ヲ往來不致様申諭候事、　庄屋五郎左衛門へ

一横山村鎭守神明宮入口ニ、有六體石地藏有之分、都合宜敷別地へ引移し、混淆之姿ニ不相見（様脱カ）可取計旨、東汰上村庄屋五郎左衛門方、横山村へ通達可致様申聞候事、

一葉萱場村鎭守諏訪社内梵字ヲ記し候棟札取除可申旨、庄屋準一郎へ申聞候事、

五月六日

一卷村諏訪社地、幷ビニ藥師堂有之分、境堺相立、混淆不致様、且又社前之石之六地藏、便宜之別地へ引移し可申旨、庄屋九十九曾根諸代組頭共へ申諭し候事、

（一脱カ）角海村鎭守八幡宮、是迄日蓮宗之寺ニ而、誦經仕來候分、改而神職相頼、祭禮之節奉幣可爲致旨、卷村庄屋へ申諭候、右庄屋ハ角海村兼帶致し居候事、

一漆山村住吉社内、蓮華作花厨子等取除、鰐口ハ鑄改、神輿も混淆姿無之様改可然旨、庄屋九馬太郎へ申諭候事、

同人云、日蓮宗崇覺寺持之處、復飾出來兼、右社ヲ創立仕候仁之血筋ヲ以而、新規神主相立候儀、曾根役所へ願立中ニ有之旨申之、

或人云、右住吉社ヲ近年三十番神ニ改候處、祟り有之、且奉幣社人漆山江本某、長岡領之砌、夫ヶ爲ニ訴訟致し、祟光寺非分取放しニ相成候砌、腹立致し、社木ヲ切

掛、今ゝ社木まゞらニ相成候、全ク峯幣人ゝ、右江本氏ニ候處、彼地庄屋ゝじめ、日蓮宗多く我慢ニ而、別社人相立度候抔願出し候趣申之、（不歸依之旨ヲ以而）

一佐渡山村下鎮守諏訪社内、元氣水德神抔記し候木札取出させ候事、

一漆山村日蓮宗崇光寺三十番神堂、其儘鳥居等建置候分、早速可取除旨申聞候事、

五月七日

一元町村日之宮之儀

往昔ゟ　天照皇大神ト祭來り候而、更ニ大日佛之改號等ニ無之旨申之、

一都路村赤崎明神之儀

村方ニ而かふらこの命ト、往古ゟ申傳候、此事他之識者ゟ聞開候義ニゝ無之旨、

村役人百姓等申之、

一矢作村赤崎明神ゝ、元如何成神共不審、

御一新以來、神職ゟ問合候而書上仕候趣申之、

一本所村稲荷等平之社地内ニ、地藏庚申塔有之、庄屋孫四郎申、庚申塔ゝ吉田驛之分

ニ付、道向之空地へ遷し、地藏之堂も、社地外へ出し、境堺相立混淆不致樣仕度旨申之、尤可然旨申聞候事、

一同村鎭守諏訪社內、梵字大般若之札ヲ張置候分、取除せ候事、

一大保村神明宮神體御光（(後)光明）付候、彌陀之佛像幷扣き鐘（鉦）香爐之類之佛具取除方、庄屋儀八郞へ申聞候事、

一同村八幡宮神體、弓ハ携候得共、全ク佛像相違無之ニ付、香爐三ツ共取除方申諭候事、

此邊都而神社ニ、香爐線香立テ之類不入置地無之、每社々々之分記錄ニ不堪候間、以後も悉ク相省キ記し不申候事、

一野沖村神明宮社內、梵字之木札取除方、庄屋善十郞へ申聞候事、

一中野村赤坂大明神社內ニ、梵字之札張置候分剝捨可申旨、庄屋吉之丞へ申聞候事、

一法華堂村赤崎大明神社地內金刀比羅社、神體として梵字を書候不動明王之木札入置候分、取除方庄屋安六へ申聞候事、

一吉田驛鎭守諏訪之末社稻荷社內、狐形取除可申旨、庄屋代太平へ申聞候事、

一矢作村石動社之權現號之中札、書直し申付候事、

一同村十王堂は、寺地內ニ在之、鳥居も無之、其像も十王ニ相違無之候ニ付、志め繩を取除き、佛堂可爲旨申聞候事、

一同村住吉社內神號彫付候石、墓印之塔同前ニ付、神鏡ニ改メ可然旨申聞候事、

一同村諏訪社神體佛像ニ付、鏡ニ相改可然旨申諭候事、

一同村樅之木と申社之儀

今は松木二本有之而已、何神之社地跡ト云事未詳候得共、萬一聊も其地ヲ犯し穢し候得は、現罪有之旨申之、

五月八日

一大戸村稻荷社內狐形二備有之分可取除旨、奉幣人與板藩管內石瀨村三部大膳へ申聞候事、

一大田村鎭守八幡諏訪兩神社之一社、奉幣社人無之、村方百姓八兵衛ト申者、奉幣仕來候趣、組頭彌惣次申之、能々取糺候處、此邊佛齋ニ而、祭禮之節も念佛をどり抔ニ而相濟し置候間、奉幣人態ト不相賴、鏈取八衞ヲ奉幣人抔申候儀ニ付早々奉幣社人相定可然旨申諭候事、

一下粟生津村赤坂諏訪相殿社、隨分古めかしき大社ニ相見候事、

一高木村鎮守鞍掛（懸）明神之儀、隨分相應之社ニ在之、社號之字古代ニて龔と書候由申候得共、未詳候、神體改見候處、佛像ニ付、厨子共取除方庄屋志計雄へ申付候事、

付、砂子塚村之鞍懸て極小社ニ候事、

一上粟生津村鎮守三社之内、山王之神體焔魔王同様之冠ヲ頂き候、混淆之姿ニ候間、相改可然旨申諭候事、

一砂子塚村十二社之大權現號之額面、可書改旨申聞候事、

一横田村鎮守諏訪社之鰐口、鈴ニ改メ、并ニ棺ニ似さる古板造之神輿燒拂方申諭候事、

一同村稻荷社内、狐形四て取除、小鰐口て鈴ニ可改旨申聞候事、

一小池村八天狗之社之儀

鎮火之爲ニ勸請致し、祭禮之砌水ヲ獻し、其下しヲ村中家々之棟ニ酒ぎ掛候由申之、右社改號之儀ニ、追而附札いたし、村方へ可相返旨も申聞候事、

一同村稻荷社内、狐形二取除方申諭候事、

一道金村鎮守大山津見社神像、佛師之作方惡敷、混淆之姿ニ付取除、神鏡ニ改メ可然

旨申諭候事、

五月九日

一尾崎村諏訪社神體、佛像ニ付可取除、神鏡ニ改可然旨、庄屋新之助に申諭候事、

一皇木村諏訪社之鰐口、鈴ニ掛改可申旨、庄屋庄五郎ニ申聞候事、

一同村下組神明社鰐口、同前申諭候事、

一同村稲荷社狐形二、取除方申聞候事、

一鬼木新田諏訪社神體、佛像ニ付可取除旨、庄屋代長衛へ申聞候事、

一同社地内水神之神〔佛〕像、同前申聞候事、

一同社鰐口、取除らせ候事、

一稲荷社狐形二、同前之事、

一中野西村鎮守條掛八幡宮、神體ハ元八幡沼ト云地ゟ掘出、靈驗も有之由ニ付、相改見候處、



如是形之佛像ニ付、取除可然旨申聞候處、神主庄屋云、昔の



の蓋蓮華座ハ、木ヲ以而後ニ作付候品ニ而、沼ゟ掘出候ハ、全ク鐵之神像而已ニ候而、右像舊來ゟ村中信仰仕來候得ハ、其後作之蓋ト

蓮華座ハ取除き、鉄像丈ケ安置致置度旨申之、

右之鉄像實ニ古物ニ而、神共佛共難決候得共、鞍掛八幡宮ト申ス社號ニ依而、愚考候ニ、馬頭觀音佛ニ可有之哉ニ被存(候脱カ)得共、彼愚情ニも不悖候樣、暫らく彼等之申旨ニ任せ置、追而沙汰ニ可及旨申聞候事、

一猪之子場新田村神明社內、梵字書之中札取除らせ候事、

同村猪之宮ハ、榎之宮ニ而、元榎之下ニ石之小祠有之、其ヲ元ニ而榎之木場新田ト唱候ヲ、猪之子場ト訛候由申之、

一福嶋村白山社內、梵字并權現號之神體中札取除らせ候事、

五月十日

一浦新田村鎭守神明宮入口地藏堂混淆之姿ニ付、相見候間、堀向之空地田畠之差障ニ不相成處へ可遷旨、申諭候事、與頭嘉吉へ

一帶織村山王之社之儀、

今ハ日枝神社ト改號之社、隨分舊社ニ而、山王村ト云も、右社ゟ出來候村名、及小谷內村共三村之鎭守ニ有之候由申之、神體拜見候處、三座之內中ハ佛像ニ付、神鏡ニ

改メ、左右ヲ大山咋神若山咋神ト祭り可然由申諭候事、

一梅田村鎮守神明宮社内、鰐口及天人像及修験之入置候（雨乞之）梵字札等、取除方相諭候事、

一片桐村十二社神體、佛像ニ付取除、神鏡ニ改祭り可然由申諭候事、

一小栗山村龍王權現社ハ、意加美（オカミ）社ト改メ、高龗（タカオカミ）闇龗（クラオカミ）神ヲ祭り可然由申諭候事、

一大面村鹿島社之神體、佛同樣之姿ニ付取除、神鏡ニ改可然、幷菊之　御紋付候提燈張替可申旨申諭（付）候事、

一安代村八幡宮神體、有之大日佛像ニ付、蓮華臺共取除、神鏡ニ可祭改旨申聞候事、

一戸口村諏訪其外之社之梵字書付候木之札、相除可申旨申聞候事、

一茅原村庄屋内鎮守之嚴嶋社之神體、八手觀音ニ而ハ不可然旨申諭候事、

一吉野屋村石動社之神體、觀音佛同前之佛像ニ付、取除方申付候事、

付、右之社諸病ニ御利生まします由ニ而、多分參物有之處、村方ニ而修覆入用ト稱し、奉幣社人ヘ不相渡、剰祭日之參物も悉ク村方ニ而收り、神主者晝夜雨日相勤、纔ニ貳百文ヲ御初穂トし而差出候義、舊例トハ乍申、此節物價高貴ニ付、社人迷惑之旨申之、譬婦人ヲ雇候而も、此節ハ一人壹貫文位之處、初穂料貳百文ハ餘り少分ニ可有之候、以來ハ祭日之參物丈、神主ヘ相渡候歟、又ハ迷惑無之樣初穂ヲ

増候歟、兩様之内宜敷取計らひ、平日之參物ハ修覆ト致し可然旨、村庄屋藤次へ

理解申諭候事、且參物ト修覆入用ト出入帳拵置、神物ヲ私致間敷旨も申諭候事、

一俗村鎮守五社之神像、焔魔羅王十王之類ハ、佛體ニ付取除、鰐口幷蓮華牡丹等之作花取除方組頭政藏へ申付候事、

五月十一日

一月岡村津之明神ハ別記有之、立石ト十二神ハ別社ニ而、立石ハ俗ニ地獄之底ゟつゝきて有之由申之、

一片口村白山神體混淆之姿ニ付、相改可然旨申諭候事、

一東鰐田村白山社之神像、佛體ニ付取除、鰐口ヲハつし、香爐等之佛具も可相除旨申聞候事、

一曲淵村政倉社之神體ハ、近年造り立候者ニ而、何神ト申事未詳候、

付、小瀧村政倉社ハ、右之小祠而已ニ而未詳候、

指出村正倉社ハ、村方始奉幣人も祭神未詳由申之、若クハ衢之道祖神ニ可有之哉、

右曲淵村正倉社ハ、　御一新以前迄、禅寺納経之由ニ而、鰐口扣キ鉦其外佛具有之候分令取除、奉幣社人望次第可相頼旨申諭候事、（本村庄屋ニ而安寺村兼帯、）

一東保内村八幡宮ヲ、式内小布施神社ト書上候儀、別記ニ委細相辨候事、

一下保内村熊野社之神像、祭神不相當ニ付、飾復（復飾）神主宅ニ祭り置キ、本社ハ神鏡幣束等ニ而祭り可然旨申諭候事、

一下條中村鹽古保志社地内三寶荒神庚申塔、其外混淆之石塔可取除旨申付候事、

一矢立新田金毘羅大權現之額、可掛改旨申聞候事、

五月十三日

一賀茂末社稲荷神前之狐形之石取除可然旨申諭候事、

一上條村若宮社之儀

元ハ禅宗寶壁寺地内ニ有之候處、二三十年以前、今之地所ヲ買取、新規ニ大ク造營致し、賀茂町修驗實正院ヲ別當ト頼ミ、上條村字片平町之内鎮守ト祭り候處、上條村鎮守八幡宮神主小池大和末々紛ヒ行、一村ニ而鎮守兩所之姿ニ相成候而ハ、迷惑ニ付、出雲崎代官所に訴出候處、青山九八郎殿裁斷ニ而、社ハ取拂、社地ハ元

地主買返し、百姓畠ニ可致旨ニ取極り候ヲ、彼是延引相成居候、依而御一新後も、早速取拂方懸合候得共、町内之者共深ク執し、今以而取拂不申、右村庄屋政之助方も取拂方町内之者共へ申付罷在候旨申之、

右社、上條村ト狹口村之堺ニ有之、社木成長致し候而ハ、狹口村田地木蔭ニ相成、不容易迷惑之趣、狹口村庄屋寛人(八)申之、

依而右社元地ハ、寺地ニ付、鎮守八幡宮社地内へ引迁し、兼而取極り之通、社地ハ取(元カ)形百姓畠ニ返し、饒沃之地ヲ不費樣ニ致し、奉幣之儀ハ、是迄賴來候通り、春秋兩度ヲ小池大和ト寶正院復飾鈴木修理ト持分ケニ而、双方申分有之間敷旨、片平町之者共へ理解申諭候事、

一上條村鎮守八幡宮末社金刀比羅社之鳥居、大權現之板札取迯(外)し方申聞候事、

一狹口村鄕鎮守社之儀　字足出村ニ有之、

元山王社ニ御座候處、賀茂民政局之砌、御附紙ニ依而、改號致し候旨申之、祭神も大己貴小彦名神ト、

愚按、右之改號祭神共由緒有之間敷歟、

東京麹町山王社之例ニ随、日枝社ト改メ、祭神大山咋神ト可仕然歟之旨申諭、付タリ、山王權現之額而書改可申旨申諭候事、

一同村道祖神地内青面金剛供養卒土婆、梵字有之分取除方申聞候事、

一猿毛村式内長瀬神社之儀

近來或人之說ニ據而、作設候所ニ而、祭日之書上ヶ等ニ而も、日枝社ヲ遷換致し候儀、顯然ニ付、

神體相改候處、地藏等の佛像二軀有之候分相除、山王大權現之額面書改方申諭候事、

五月十四日

一赤谷村諏訪社神體之冠、十王焔魔同樣ニ付、烏帽子ニ相改、其外佛具ヲ可取除旨申諭候事、

一上條村枝鄉陣ヶ峯稻荷社内狐形六ッ可取除旨、百姓代彌藏へ申聞候事、

一茗荷谷新田神明宮鰐口取除キ、鈴ヲ掛可然旨申諭候事、

一吉田新田久志社之佛像藥師地藏二軀、厨子共ニ、最寄之寺へ渡し、神殿ヲ淸め、神鏡幣帛ヲ可安旨申聞候事、

付、鰐口ヲ改メ、鈴ニ可懸替旨申聞候事、

一山坂田村八幡宮社内鰐口、鈴ニ可懸改旨申聞候事、

并新造之本殿ニ神體ヲ不奉遷而、拜殿中ニ神體ヲ顯し置候ハ、不敬之旨申諭候事、
右村庄屋寛一郞佛癖ニ而、數年前寄進人本殿造營致し候得共、遷宮之式も不勤、
例年之祭禮も不仕旨、近郷人申之、
一川坂田村諏訪社内觀音佛像幷那智山供養札等、可取除旨、庄屋寛一郞へ申付候事、
一千苅村諏訪社地地内庚申佛塔、外地へ可遷旨、与組米吉へ申聞候事、
一賀茂新田山王社神像、佛躰ニ付取除、菊之　御紋付提燈ハ張替、權現號之額ハ掛替、
梵字之札有之護摩爐等ハ可取除旨、復飾丘山福馬、組頭傳右衛門へ申付候事、
付、右社ヲ氣多神社祭神大己貴命抔書上候儀不宜、日枝社祭神大山咋神ト可改旨
も申諭候事、
一同枝鄕諏訪之木諏訪社入口地藏堂、混淆之體ニ相見候間、土堤上五七間相迯可申旨
申諭候事、
一本地新飯田村諏訪社内梵字之木札取除申付候事、
一同鎭守神明宮神體、佛像ニ付取除方申諭候事、
一町新飯田鎭守神明宮神體、同斷ニ付神鏡可然旨申諭候事、

五月十五日

一天神林村兩村鎭守天神宮社地内石之六體地藏堂取除方、庄屋源（兵脱カ）衞幷復飾靑山越中三日市管内江申付候事、
人別

一柳場新田諏訪社、菊之御紋戸張幷佛器類取除方申付候事、

付、水損ニ而倒候社木數多有之、右ヲ以而、奥之方ニ小神殿ヲ作り、是迄厨子ニ安置候神體ヲ、新造神殿ニ安置可然候、厨子ハ佛像納候物成由も申諭候事、

一鶴田村乙子社之儀　尾張國神名帳愛智郡乙子天神

彌彥之乙子社ヲ摸し候由申之、市十郎庄屋

付、鳥居無之ニ付、水損ニ而枯候社木伐拂置候分ヲ以而、造立可然旨申諭候事、

一塚之目村大月神社白山宮之儀　神主五十嵐加賀

神社號之儀何時ゟ御免ニ相成候哉、相尋候處、

一昨辰年春白川殿ゟ御免ニ御座候、

謝禮金如何致し候哉、相尋候處、

金十五兩差上御免ニ相成候、

一非粟村式内伊久禮神社之儀
只今八幡宮ヲ是也ト稱し、社前ニ藤繁茂致し、其下ニ石牌(碑)有之、万葉歌妹之家ニ伊久理乃毛理の藤花今來牟春も常如此し見牟ト彫而、裏ニ明和年中里正松川氏建立之由も記し有之、依而右藤ハ古來より之物歟、近來之物歟相尋候處、當村地内字藤ノ木ト申田地之跡よりうつし植候由、社人熊川修理村役人等申之、田地ニ藤ノ可有道理なし、何成故ぞ相尋候處、
右藤ノ木ト申田跡ハ、村より二三丁離候而、廣キ田地之字ニ御座候而、藤木權現ト申石之小祠有之、右權現之邊ハ、當村半左衛門ト申者(但三日市藩管内之人別)之持地之由申之、
右小祠相尋候處、小野新田ト白山新田之間ニ有之、槻木一株藤一本有之、高サ一尺程之小祠中ニ、梵字等書候而、社地ハ凡八尺四方程、陸地ニ而、其四邊不殘水田、藤ノ木ト申田所ハ、北野新田白山新田等之地さへ入交り、甚タ名所ニ有之、右藤ノ木權現ハ、荒果候得共、實ハ式内伊久禮乃社の古跡ニ可有之奉存候、
一非粟村稻荷社之狐形幷佛器類取除方申聞候事、庄屋孫郎へ、
一同鎮守山王社大權現號之額掛替、梵字之木札等取除方申聞候事、

一白山村白山社神體十一面觀音ニ付、取捨申付候事、

付、權現號之額面書改可申旨申聞候事、

五月十六日

一清水澤神明御神體、佛像ニ付取除方申付候事、

一羽生田村八幡宮ヲ（式内）土生田神社ト書上候處、村方ニ而ハ、右様申傳候得共、同村別社地諏訪、金刀比羅、神明三座之小祠御座候、社地光古めき、平地廣く、四方ニ堀ヲ廻し候昔の姿も相殘り、式社之古跡ト覺候事、

付、右鎮守八幡宮内之佛器類取除方申聞候事、

一同村道祖神混淆之木札取除ケせ候事、

一同村十二神權現號木札書替可然旨申諭候事、

一原ヶ崎新田枝村西ヶ崎十二社權現號之張札、其外猥ケ間敷張紙數多剝取せ候事、

一本田上村神明宮神體五輪塔ヲ頂き候、混淆之姿ニ付取除、改而神鏡ヲ以而祭り可然旨、神主江部出雲へ申諭候事、

一上野田上村天神社内神明之神躰も、右同斷之事、

一同末社稲荷神躰も混淆、且狐形共取除可然旨申諭候事、

一湯田上山田之六社明神之社地内金刀比羅社權現神體札取除方申聞候事、

一田上谷村諏訪神社、佛體ニ付令取除候事、

一湯川村五社之儀、何國何社之遷擬ニ候哉之旨相尋候處、

神主答云、能登國石動五社ヲうつし候由、祖々ゟ申傳候趣申之、右之答ニ而、五社之祭神之根元慥ニ相分り候事、

一同村（羽生田枝郷）六社神ハ、半里餘之山上ニ而、石之小神殿而已ト申之、

一大澤村的當（タウノ）社之儀

元ハ權現號ニ而、祭神之儀、實ハ不詳候旨、復飾神主申之、愚按、社號若ハ松尾社之唱訛歟、追而能可考者也、

五月十七日

一金津村諏訪社神體、焰魔之冠同前混淆之姿ニ付、神鏡ヲ以而御像ト可祭旨申諭候事、

一（同村）天神社明（神脱カ）兩社地内庚申石塔、書影改候歟、又ハ他へ可移歟之旨申諭候事、

一朝日村式内日飯野神社ト書上候若宮八幡宮之儀、五泉驛へ通衢之出際ニ有之小祠ニ在之、其邊雖今百姓地ニ候得共、上古ハ如何有之候哉、隨分平均致候時ハ、宜敷社地ト相見候、朝日村鎮守ハ、元若宮ニ候處、新發田領之節、新發田城下鎮守之例ニ隨ひ、諏訪社ヲ鎮守ト祭候趣ニも申傳、且此五泉往來之道ヲ、俗ニ槻谷越ト申候ハ、右社地ニ無類之槻之大樹有之候ニ依而、けやき谷ト稱へ始申候、其樹凡三丈餘廻り、空中へ傘をさして出入致候、百年程以前ニ枯倒き、臼ニ作候處、枝迄臼ニ相成、臼千餘出來候由、右臼を近來掩包け見候處、主目之樹（付り）林ニ而、硯宮等ニ作り、尤見事ニ候、新津町桂新吾ハ、右槻臼之殘木ヲ以而、當若宮ヲ摸し、屋敷地内へ祭り置候、右等ヲ以而舊社ゝる事御推考可被下旨、村役人神主申之、

一朝日村金刀比羅社權現號之額、可書改旨申聞候事、

一古津村諏訪社神體、焔魔十王等之冠ニ類し候冠ヲ頂き、都而混淆之姿ニ付、取除き、神體ヲ以而祭り候方可然旨申諭候事、後當嵩山在寅、

一同社地内神倉大權現號之石塔可相改旨も申諭候事、右ハ寒念佛唱候場之由申之、

一末社稲荷社内狐形并三寶荒神像、其外混淆之紙札等取除らせ候事、

一神明宮神寶五階塔ヲ頂候、混淆之姿ニ付、取除方申諭候事、

一西嶋村大將軍社祭神磐長姫命之儀
賓ハ書上仕候節、或人ゟ問合せ候ニ而、全ク不詳候由申之、神主ハ新津町轡田陸奥、
一同村乙子社も右同斷、
一同村鎭守諏訪社之神體、焔魔同樣之冠ヲ付候混淆之姿ニ付取除、神鏡ヲ神體ト祭
候方可然旨申諭候事、
一中村諏訪社之神體も同前混淆之姿ニ付、同斷申聞候事、
一中村白山宮神體、役行者同樣、混淆佛體ニ付取除方申付候事、但復飾社人程嶋村宮嶋河藏之進宅方ニ平生納置候、是ハ土人ヲ恐候故也、
一田宮村諏訪社神體、狐ニ乘候佛體ニ付取除、古神體も蓮華座ニ乘候混淆形ニ付、取
除申付候事、
次ニ菊之
御紋ヲすかしニ切候燈臺取除かせ候事、是ハ殊ニ佛前之燈臺之姿ニ而、甚見惡候
事、
右社、元當村日蓮宗妙本寺勸請ニ付、前件之外、佛器種々有之、悉ク取除かせ、殊ニ
南無妙法蓮華經之題目ヲ唱へ、珠數を操而籠居候人數多有之、右甚タ混淆ニ付、

以來右體之儀無之樣、題目太鼓ヲ收上ケ、
新潟縣へ相送可申旨、庄屋九平太へ申付候事、
彼佛像も可燒拂旨、同人へ申諭し候事、

一新津町掘出社元と權現號、之儀
元と金津村地内ゟ掘出し候神像ヲ祭り、新津町ニ引遷候處、上杉家昔會津へ移住之砌、神像御持參ニ相成、只今神體無之旨、新津町金津村役人、神主轡田陸奥等同樣申之、

一新津町掘出社内稻（荷）利二社ニ有之處之狐取除らせ候事、

一新津本地由屋村諏訪社神體、混淆之姿ニ付、改方申聞候事、新津今之驛地ニ遷し候て、二百年來之由申之、

一柄目木村八幡宮神體、僧形燒拂方、復飾社人盛山眞大夫、庄屋茂助へ申諭候事、

一小口村鎭守神明宮之儀、觀音堂二王門ゟ通行いたし、不都合ニ付、小道ヲ本道ニ可定由申諭候事、

一山崎村鎭守諏訪神體、混淆之姿ニ付、取除方申諭候事、

一九田村鉾明神、随分舊社ニ相見候、額面ニと鉾子大明神共記し候而、同訓ニ保古明神ト唱來候由申之、

有社之式外ニ而も由緒可有之哉ニ被存候事、

五月十八日

一橋田村山王社、式内中山神社之由書上候ニ付、取調候處、寶劔二振有之、一本ハ惣長八尺程、身五尺、込三尺程ニ、丸木ヲ（二割ニ中ヲ）繰て込（コミ）くるめに覆ひ、縄を以て本殿ニ懸置候、是ハ所謂奉納太刀ニ而、人之用候物ニハ有之間敷覺候、一振ハ古代之錺太刀ト覺敷、赤銅作陣太刀様ニ而、身ハいまだ刄を附ざる（銜カ）打卸し（ひさびミ）、頭ハ環付、鐔ハ皮四枚合て、覆輪懸漆塗ニ候ヲ、鼠之かおり候哉、大體如略圖ノ如クニ御座候、



柄之巻方都而之形様、拾（集）古十種ニ相見候古刀之作風ニ御座候得共、悉ク朽爛致し有之候、

社地ハ山上ニ而宜敷、石階凡二百段、社木森々ト物古り、誠ニ式内共可謂社柄ニ候、

但、中山神社タル謂由申傳而已、確證更ニ無之候得共、橋田村ヲ始メ、同郡寺本、五百瀬、四十九等之

（黄村在之）、尻上村、（宮古舊之山村在之）、大澤村、菅澤村、（尻上村之舊田地を云々、）四谷村五村之惣鎮守ニ而、右社ヲ大澤村、四谷村等ニ而も、内鎮守ニ摸し祭候、神主樽田氏舊家ニ而、分家七軒有之、新津町神主、朝日村神主、矢代田村神主、臼井村神主、木津村神主、割野村神主等、皆分家にて、同敷樽田氏ニ而聊相違無之、且四谷村樽田山葉院と申修驗も、同敷分家之由申之、

一同村天神宮を式内宇都良波志神社之由書上候得共、證據も無之、社地柄も更ニ式内トも相見不申、廣き越後國ニ於而、纔五十六座之式社、一村ニ幷びて二社（座）ニ候儀も無覺束なく（存り）候、依而愚考候處、山王社も宇都良波志神社ニ可在之哉、橋田ト申地名も聊縁由有之候哉被存候事、

一尻上村多賀祇社之儀元牛頭天王社ニ而、舊キ社號等ニも無之、唯山上ニ鎮座故、右樣改號致し候旨、神主自由出雲申之、（右樣勝手次第ニ改號致し候儀、實ニ奇怪候事、）

一同村禪宗正音寺ニ而、山上ニ祭置候山神社取拂候趣、神職へ可相渡哉之旨、庄屋彌兵衛幷老僧へ申諭候處、取拂、樹木植立度由、老僧之申旨ニ相任候事、

一千原村鎮守山王社末社稻荷社内之狐形今取除候事、

一四谷村山王社地内石地藏令取除候事、

一町屋村鎮守住吉社地内梵字付候廿三夜塔え、外地へ移させ、湯殿山梵字塔寒念佛塔え、同村十王堂之地へ可引移旨申聞候事、

付、庚申え丸石而已故、防塞（サヘ）神と改可祭（然之）旨申論候事、

一能代村若宮社内三階塔之額幷沙門某拆記し候旗取除方、神主二常變人へ申聞候事、

一同村鎮守諏訪社神體、焔魔羅王同樣之冠、混淆之形ニ付、神鏡ヲ改可祭旨申論候事

五月十九日

一今泉村鎮守山王社地内ニ、神主之新墓有之、誠以猥ヶ間敷儀ニ付、他へ移し、地ヲ清むへき旨申聞候事、

且又社地ニ並而寺地之火葬場有之、境界ヲ立、火葬之煙社内へ立入間敷樣可致旨、庄屋平藏へ申論候事、

一能代村百姓安左衛門、私ニ狐稻荷社ヲ建立致し、旗等立置、參物賽錢ヲ貪ル風聞有之ニ付、同人幷庄屋惣吉諸共呼立、理解申聞候え、兼而當春

御布告も有之通、百姓之身分ニ而有間敷次第ニ候間、右社取拂、以来人寄セヶ間敷儀不致様申付候處、庄屋請合、以後急度心付、右體之儀堅ク致間敷旨相答候事、

付、よつて祈禱之先年中近邊之修驗共、右稲荷社ニ而執行致し候事も有之候得共、百姓安左衛門え、初穂等ヲ貪り候ニも無之、其筋ニ携り候儀ニも無之趣も分明ニ相分り候事、

一 菅出村石上神明宮之儀

古来ゟ然稱し来り、額面ニも石上神明宮ト書来候趣申之、

左候へハ祭神高皇産靈神不相當ニ候、別段言傳も無之哉之旨相尋候處、

神主高内播磨、村役人等答云、日神(ママ)ニ、昔社地之大樹有之、其下ニ石ヲ置而神ト祭候故、右様相唱へ候旨申傳候得共、憶成事トも難定候、或又石上神宮之擬敗とも申候へ共、唯今ニ社内伊勢之御祓ヲ神體ト祭候由申之、

大和國石上神宮ヲ擬候ハヽ、布都之御魂神ヲ可祭、石ヲ以而神體ト祭候儀、本説ならハ、道祖神、八街彦、姫神三座ヲ可祭、又ハ伊勢之御祓而已ヲ祭而も可然歟之旨申論候事、

一 熊野村熊野社内御現堂之額を書改、阿彌陀佛石碑梵字之碑七基ハ外地へ移し、[illegible]

師堂道も、社地外ゟ通行可致樣理解申諭候事、

一菅出村朝熊社之儀

菅名嶽之中段ニ而、一里半程之山上ニ在之、元ハ虚空藏ニ而、伊勢朝熊之摸遷ニ有之候ヲ、不動堂村大行院持之分、菅出村神職高内播磨へ、表向ハ相渡置、内分ハ相渡不申候儀、不都合ニ付、不動堂村庄屋ゟ修驗へ理解申諭させ、書上帳之通、神主奉幣可致樣申聞候事、付、祭神等之儀も、委敷社人へ教授致し候事、

一大倉村鎭守稻荷社神像、狐ニ乘候佛天ニ付、取除方申聞候事、

一不動堂村火結社ハ、元不動堂ニ而、往昔ゟ鎭守ト祭來候由、村役人申之、奥殿ヲ作り替、額面書改、種々之佛具ヲ取除、淸潔ニ祭り可然旨申聞候事、

右社之儀、實ハ佛堂ニ可致理ニ而、其趣申諭候處、左候而ハ、村方鎭守無之、一同力ヲ失ひ、歎息之樣子庄屋申出候ニ付、右之通申諭候、此邊山里邊鄙ニ而、不動ヲ即神ト心得、鳥居も立置、注連等も神々敷致し置候得ハ、强而愚情ニ難背次第も有之候事、

付、乙子社祭神香具土神と可改、書上帳之通ニ而ハ、祭神と社號と同神異名ニ而、不都合之由も申諭候事、

一水戸野村

白山社内權現堂之額二面ヲ始メ、色々混淆之儀取直し方申論候、殊ニ神體ハ蛇ヲ鐵鉢ニ入候佛像ニ付、鰐口共引上可申處、一同種々歎き候ニ付、河内村庄屋清作ニ預ケ、鰐口ハ鈴ニ鑄改、佛像ハ燒拂、鏡ヲ掛改候様申聞候事、但水戸野村ハ當今庄屋休役ニ無故、

右白山社ハ、元東光院ト云修驗持之處、其子十才程成ヲ當東人ト改名、復飾致させ、其身ハ元形修驗ニ而同居致居候故、右等之不都合有之、且社人ト修驗同居ハ、即混淆ニ而不都合之旨も理解ニ及候處、近々神分可仕旨返答致し候得共東光院ハ至而佛神偏屈之者ニ而、實ニ困り入候事、

一同村神明稻荷兩社地内飯イ綱ツナ狐ヲ祭候有之小祠取除ろせ候事、小祠中ニ有之狐形有之、

五月廿日

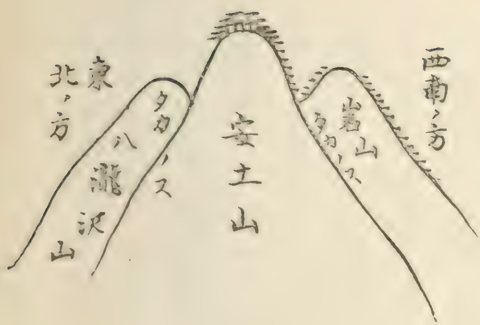
一河内村諏訪社神體、大石ニ付、由來相尋候得共、不分明之由申之、若道祖神八街彦姫神ヲ祭候を、後世諏訪社號ニ改候賦、後按之爲記之、

一暮坪村藥寺日之宮社之儀、祭神相尋候得共、未詳由申之、西四ヶ町村、分田村等ニ属在之小祠合併致置し由、

一笹目村鎭守赤城明神之儀、祭神不分明之旨相尋候ニ付、是ハ上野國式内之大社赤城神社ヲ摸し候儀故、赤城大神ト祭り而可然旨相答候事、上杉川村鎭守も右同斷之事、

一小面谷村安土社折居社之儀

安土社ハ安土山ト申山之絶頂ニ在之、村ゟ一里餘、一昔ゟ山神ヲ祭り、旱魃ニ雨ヲ祈るニ靈驗有之、依而河内谷中十二ケ村ニ而祭之、右高山容易ニ難登故、近く折居ト申地ニ勸請仕候ヲ、折居社ト唱候由申之、



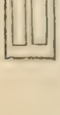
右山上社ハ、昔ゟ女人參詣不致例ニ而、多人數登山致し候得ハ、必雲霧起り雨降候、山上之平原凡百七八十歩、古木繁茂、豐作之歳ハ村中登山、御酒ヲ捧ケ宴會仕候由旨も申之、左右之山之[illegible]ニ鬼ノ畫ヲ掛候、

一千見谷村枝郷門原村鎭守十二社之神像、蛇體人面ニ而、



如斯形ニ候間、可取除旨申聞候事、

付、末社中ニ不動堂有之分も、混淆ニ付、可取除旨、庄屋淺右衞門へ申付候事、　不動神體ト



等し此如形ヲ石ヽ彫付置候事、是ハ雛之形歟、
一同村枝村桑澤鎮守十二社、末社ニ卯馬大權現ト申有之、如何成神ヲ祭候哉、相尋候處、村老云、佛家ニ所謂しやう塚之老婆之旨申、依而取除らせ候事、
一夏針村鎮守神明宮社地内不動堂有之、依而不動佛像元三大師木像ハ燒拂、石地藏ハ最寄寺院へ相渡し、堂ハ可取拂旨申聞候處、村役人等河内村庄屋清作ニ相賴ミ、本堂ハ取潰し、拜殿ハ神明宮之拜殿ニ相用度、佛像ハ不殘最寄寺院へ相渡度旨申出候ニ付、佛像ヲ清作ニ預ケ、願之通無相違可取計旨申聞候事、此堂之者佛當ニ付、思情ニヨリ不殘取除、有之通取計申候事、

五月廿五日

一桑山村鎮守天滿宮社前之鰐口取除、鈴ニ可懸替旨申論候事、
一小浮村鎮守稻荷社内狐を納候馬形甚多ク見苦敷候ニ付、可取除旨申論候事、
一同村蓮地藤から馬村、右之狐稻荷小祠、近來靈驗有之、參詣群聚之風聞有之、右社狐之像ハ取除、以後異說相立申間敷旨申論候事、
且、稻荷大神ハ五穀を掌給ふ御神にてまし〳〵、殊ニ目前之靈驗等有之神にてましま

はゞる譯も申諭候事、

一布目島島兩村鎭守諏訪稻荷兩社內之狐像之額面等、其外紛敷物令取除候事、

五月廿六日

一岡田村鎭守神明宮社地寺地墓場等、打續甚タ見苦敷候間、柴垣等ニ而境堺ヲ可立旨申諭候事、

一大關村鎭守神明宮地藏堂墓地等ト地續ニ付、柴垣ヲ結、境堺ヲ可立旨申諭候事、

一新興野村神明宮社內、小鰐口ヲ鈴ニ可掛改旨申諭候事、
同社背ニ湯棺桶其外葬道具有之分、外地へ可取除旨申付候事、

一卷ケ花村鎭守神明宮川缺ニ付、百姓屋敷隅へ祭置候分不都合ニ付、一村同樣入交居候北村鎭守八幡宮へ假ニ安置致し置、追而社地可相定旨申諭候事、
右八幡宮社地內、念佛石塔ヲ社地ならびの空地へ可引移旨申諭候事、

五月廿七日

一加瀨島村鎭守諏訪社之神體、例之混淆像ニ付、可取除申聞候事、

一寺社新村神明宮本殿内ニ同字之梵字付候札數枚有之候分、剝取セ候事、
同末社稻荷社内狐形之額數多有之分、令取除候事、
一下里村鎭守神明山祇兩社地續キ之地藏庚申佛像等有之分、混淆之姿ニ相見候間、
芝垣等ヲ以而、可立境堺旨申論候事、
同末社稻荷社狐形額等令取除候事、
一小川原村鎭守諏訪社之神像、混淆之姿ニ付可取除旨、百姓代齋藤次へ申聞候事、

五月廿八日

一水原町神明宮神體、混淆之姿ニ相見候ニ付、神鏡ヲ即神體ト致し、像ハ可取除旨申
諭候事、
一同町諏訪社神體臺座、佛具同樣ニ付、嶋臺御擣等ニ改メ可然旨申論候事、
一同町八幡宮御像臺座も、右同樣御擣可然旨申論候事、
一下諏訪社之神像、混淆之姿ニ付、廚子共相除キ、神鏡ヲ神體ト祭り可然旨申聞候事、
一下條村大神社地ニ、社人之墓地引續キ有之分不都合ニ付、壇ヲ掘リ上堤ヲ築キ、境
界可相立旨申聞候事、

一同所つるや稻荷社、(實ハ元狐ヲ祭リ百姓持、)當春迄より祈禱其外奇怪之所業有之ニ付、兼而理解申聞置候通、此節ハ鳥居取除キ、社ハ小祠ニ改めさせ、人よせヶ間敷儀ハ申ニ不及、一切猥ヶハ敷儀無之旨、庄屋忠五郎請合申之候事、

一天神堂村天神御像之臺座、佛具ニ付、褥ニ改メ、且社人祝詞座も佛樣ニ付、圓座歟荒薦歟、六角緣之莚等可然旨申諭候事、(復飾神主)天澤龍之進

一天神堂村神明神像、混淆之姿ニ候間、取除方申聞候事、

一沖山村鎭守八幡宮末社稻荷之社內狐形二箇、流水ニ令投候事、

一高田新田鎭守熊野、社地內觀音石塔、早々可除旨申付候事、

一船居村復飾大久珠樹儀、父之修驗僧(不動院)と同居致し、混淆佛ヲ家內ニ祭置由風聞有之、依而相尋候處、相違無之候ニ付、門口之梵字札幷神殿內役小角之佛像二軀燒拂、又僧ハ祝髮之上同居可然旨、組頭仁惣太ヲ呼立候上、委細申諭候事、

一籠田豆田兩村之鎭守、神明宮社地內庚申供養石塔江(マヽ)筋向之空地へ可引移旨申諭候事、

付、同社內ヲ始メ、今日取調候村々之社々、凡香爐等之佛具不入置社ハ無之、悉ク取除らせ候事、

五月廿九日

一中嶋村鎮守十二社地内庚申塔石佛二軀共、別地之耕作ニ差支無之地(堤隅)へ可引移旨、庄屋佐兵衛申聞候事、

一浦新田村鎮守稲荷神像、混淆ニ付、狐形四箇共取除方申聞候事、

一熊居村鎮守熊野社地内観音塔、庚申塔、念佛塔可取除旨申付候事、

一熊居村末社天王社地内梵字之湯殿山塔幷卒土婆等可取除申付候事、

一寺社村稲荷社内狐形四箇令取除候事、

一山本新田鎮守社地大乗經塔、混淆之姿ニ相見候ニ付、外地耕作之差支不相成處へ可引移旨申諭候事、

一福井村末社火産靈命之神體、不動佛像同様ニ付、可取除旨申聞候事、

一大實村鎮守山王社神體、閻魔羅王同様之冠ヲ頂候混淆像ニ付、可取除旨申聞候事、

一扶ヶ嶋村鎮守十二社地寺地ト引續キ不都合ニ付、杉垣等ヲ構ヘ、境堺可相立旨申諭候事、

付、禪宗圓福寺持庚申塔堂社前ニ有之、混淆之形容ニ付、寺門之方へ可引移旨申聞

候事、

五月晦日

一次郎丸村便蓮佛堂內ニ、神鏡鈴等懸置、混淆致居候儀ハ勿論其外不宜風說も有之候ニ付、取調候處、鈴十五口、神鏡一面有之、右ハ引上、庄屋乙松へ預ケ、水原御役所へ狀ヲ添差出させ遂、且又神佛混淆緣起之板木ヲ廢し、以後一切差出間敷旨、禪宗光顯寺和尙へ理解申諭候事、

一村杉村諏訪宮社內大日之石像取除方申付候事、

但、同村儀ハ悉ク大寶村之枝鄕ニて候得共、民家大分有之、內鎭守社可有之理ニ而、右諏訪社、往昔ゟ祭來候處、万一鎭守社書上仕候而ハ、別村ニ可相成哉抔恐候而、大寶村庄屋庄七神社書上帳ニ、當社書載與不申候由歎願す、右社地廣ク、社木も相應ニ宜敷候、大寶村庄屋ハ、淨土眞宗ニ而佛癖故、猶々有體之不慈愛有之候事、

付、佛面堂ヲ神社ニ書上候分、書上帳取調可申事、

一出湯村稻荷社梵字之幣串令取除候事、

一湯澤村虛空藏地內ニ、須賀社ヲ祭、鳥居等建置候分、混淆ニ付、鎭守地內へ引移可然

旨申諭候事、

一粟屋村入口ニ、大樹寺ト記し候大石塔建置、其村悉皆寺領之容ニも相見、且鎮守八幡宮之入口ニも有之、旁如何敷候間、寺門之入口に引移し可然旨、寄進人へ申諭候事、

一女堂村須賀社地續キニ、墓石塔有之、社地へ行ニも墓へ行ニも同道ニ而、不都合ニ付、道を別ニ可致樣申諭候事、

一上壹歩村熊野社、寺地ゟ往來致し不都合ニ付、道ヲ別ケ候樣申諭候事、

一小栗山村稻荷社地内、大日石像他へ可引移旨申聞候事、

一塚之目村鎮守若宮八幡宮神體、佛像ニ付取除方申聞候事、且庚申佛塔も、他之地に便宜ニ可引移旨申聞候事、

一堤村中一同、[illegible]一向宗門而已ニ而、鎮守社無之ヲ幸ニ致居候趣ニ付、理解申諭し、神州之神民として、一向佛ヲ而已奉祭し、神恩ヲ不思も不宜儀、以來箇國驛祭禮之砌、庄屋も箇岡中故、同時ニ祭候共、或最寄隣村之鎮守社ヲ、共ニ祭候共、便宜次第可致旨申諭候事、

一村岡村庄屋　稻荷社ヲ奉祭し、百姓之分として、自身神官之如ク心得、神社拜禮之

者之帳記ニ、苗字ヲ付、印形相添、且　禁官正一位稻荷大明神抔書記し相渡候ニ付、實ニ　御免之正一位ニ候哉之旨相尋候處、全ク左樣ニも無之候得共、追而御願申上、右之通御免ニ相成度存込候か、　禁官正一位ト書記申、候旨申之、右等甚タ不埒之次第、以來決而致間敷、神官同樣之姓名等も決而致間敷、且狐之憑(ヨリ)祈禱抔惡風聞も有之、都而紛敷所業無之樣、理解申諭候處、恐入厚ク承知仕候事、

右稻荷社も、全ク宮下鈴木久光奉幣人ニ付、同人へも紛敷義無之樣申諭候事、

六月朔日

一野村鎭守三社之內、八幡大菩薩ト記し置候額面可書改旨申聞候事、

一飯島新田稻荷社狐形二ツ、取除方申聞候事、

六月二日

一紫雲寺新田內宮吉新田鎭守愛宕之社地ヲ借り、彌勒佛銅像ヲ建置、(石之臺座覆屋根等有之、隨分大物ニ有之、)昨ニ石地藏抔有之分、社地後之庵之藍(卵)塔場へ可引移旨、申諭候事、(卵塔場誤略ス)

一稲荷岡新田稲荷神像、狐ニ乗飛行之佛體ニ付、狐形二幷千疋狐之額共可取除旨申付候事、

右社本ハ日蓮宗要行寺奉幣ニ而經仕來故、如斯撰ケ間敷候事、

一右之稲荷社背（ママ）要行寺ニ候處、寺地内ニ鈴幣等掛置候社相見候ニ付、問尋候處、元ハ三十番神社、今ハ鬼子母神堂ト改候由申之、但寺内ニも同斷鈴御鏡掛置混淆之姿ニ相見候間、幣束二本、金之緒七八本ハ今取拂、神鏡貳面鈴二口ハ引上ケ庄屋孫衛ニ預ケ、便宜之序ヲ以、水原御役所ニ可差出旨申聞ケ、書状相渡し候事、

一古田、富嶋、稲岡、中澤四村鎮守神明宮、神像五重塔倫（輪）ヲ頂キ、佛體ニ相見候間、可取除旨申聞候事、

付、右社昨朔日ち祭禮ニ而幟ヲ立置候處、庵寺の前ニ而、地藏庚申其外佛塔數多有之、甚タ不都合至極ニ付、相改メ、庵寺地ハ寺地、神社ハ神社ニ通路ヲ相分ち可申旨申諭候事、（以下略之）

一北濱田新田鎮守稲荷社梵字木札、佛語幷蓮華座書候之紙札等爲取除候事、

一宮川新田鎮守神明社地内大乘妙典供養之石塔、外地耕作ニ不障場へ可引移旨申聞候事、

一竹嶋新田村稻荷社内狐形令取除候事、

六月三日

一濁川村鎭守神明、諏訪、熊野三社神像混淆之處、取直し致させ、中にも神明宮ハ五重佛塔ヲ頂キ候佛像ニ付、可取除旨申聞候事、

同所金刀比羅神像混淆之處、取直し方申聞候事、

一江口村神明宮神像五重塔ヲ頂キ候混淆姿ニ付、取除可申旨申聞候事、

付、其外鎭守八幡宮、諏訪上下〆三社之神像も、混淆之處、令取直候事、且山王神像ハ、六手之佛體ニ付、先日中ニ取除キ候由申之、唯今ハ神鏡幣束而已有之候事、

六月四日

一茅渟山村鎭守神明宮神像ハ、五階塔ヲ頂候混淆、諏訪神像ハ焔魔王同樣之衣冠ニ付、取除、神鏡ヲ以而神體ト可祭旨申聞候事、

一庚村鎭守神明宮御像五塔ヲ戴頂候ニ付、可取除旨申聞候事、

一舞潟村鎭守諏訪宮社神體、一ハ僧形之木像、一ハ石塔之頭ト相見候ニ付、可取除旨申

開候事、

同村末社稲荷社内之狐形二箇為取除候事、

一吉田新田鎮守熊野三社神體、一ミ頭ニ五階之塔ヲ載(戴)き、左右ミ婦魔同様之衣冠ニ付、厨子共令取除、神鏡ヲ以而神體ト可祭旨申諭候事、

六月五日

一五野上村鎮守諏訪社神體、婦魔同様之衣冠混淆之姿ニ付、令取除、神鏡も可改旨、庄屋佐(兵脱カ)衛へ申付候事、

一同村稲荷神體狐ニ乗候佛像ニ付、狐形二箇共令取除、神鏡ヲ以而神體ト可祭旨申開候事、

一鎌谷村鎮守諏訪社神像婦魔同様之神體付、在来之神鏡ヲ則神體ト可祭旨申付候事、

一赤澤村鎮守神明宮五重塔ヲ頂候混淆之神體ニ付、令取除、其外鍔ヶ間數所ヲ取直し方申諭候事、

一蓮藤村八幡宮社地内地藏石佛、他之耕作ニ無差障場所へ為引移、并混淆ヶ間敷處ヲ令取直候事、

一松崎村神明社地內石地藏堂、外地耕作ニ不障場へ引移し候樣申付候事、
一川崎村末社鎭火社三寶荒神之額、可直改旨申聞候事、
一下山村鎭守諏訪社神體、焰魔王之衣冠同樣ニ付、可取除旨申付候事、

六月六日

一小瀨村鎭守神明宮五階之塔ヲ戴候混淆神像ニ付、令取除、神鏡ヲ以而神體ト可祭旨申諭候事、
一曾和村鎭守神明宮神像、右同斷之事、
一新通村神明宮右同斷之事、
一同村宗形社辯財天之額、書改方申付候事、
一小針村神明宮佛塔ヲ頂き候混淆像ニ付、令取除、在來之神鏡ヲ則神體ト可祭旨申聞候事、
一市左衞門與野村鎭守、神明宮右同斷之事、
一靑山村神明宮神體、右同斷之事、
付、末社稻荷社中、狐形二箇取除方申付候事、

一關屋村鎭守神明宮、頭ニ五倫〔輪〕之塔ヲ載候混淆像ニ付、令取除、且末社稻荷神像白狐ニ乘、觀音佛同樣之衣冠ニ付、狐形二箇共取除候樣申付候事、

古志郡大島庄藏王權現の神佛分離

〔社寺取調類纂〕八七　古志郡藏王權現由緒ニ付別當靈宜品々申立書留（越後國水原町藏）

脇之町局ゟ差出候藏王村安禪寺願書之寫

當國古志郡大嶋庄惣鎭守金峯山藏王權現神佛判然、當　御局へ可申上旨、二月十四日、於新潟府御役所被仰渡、則左に奉申上候、

當山之義は、往昔和州吉野山を摸し、藏王權現勸請鎭座之由申傳候義者、兼而奉申上候通御座候、金峯山藏王權現之名は、佛家之稱ニて、役小角神佛修合之邊ゟ、其顯德を標し、奉崇候ゟ起り候義ニ御座候、今般御一新ニ付、權現之號御廢止ニ相成候得は、素之金峯山ニ鎭座之御神ニ候得者、金峯神社ニ相違無之義と奉存候、其上當社之儀者、從來當所之鎭守と崇來、殊ニ舊幕府朱印之表ニも、藏王權現社領と有之上者、是亦神祇之證と奉存候、

一當山末社四社王神祭來ル笠置八座之儀ハ、全ク佛像ニ候間、以來神鏡ニ鑄改申度奉存候、右者神佛判然之旨有難奉申上候、已上、

明治二巳年

三月十日

當國古志郡 藏王權現別當

安禪寺

脇之町 御民政局

御役人衆中

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

乍恐以書附奉願上候

安禪寺亮寛事改名

安禪寺

正親

同弟子詮妙房亮貞事改名

養子安禪寺

大炊

右者今般

王政御一新ニ付、藏王社神祇之儀ニ御決定被成下、就上者、拙僧義、兼而從
天朝被　仰出候御趣意之通、復飾改名神主職被仰付被下置候樣奉願上候、然上者
天祚無窮皇國安寧之祈禱、彌可奉抽丹誠候間、何卒出格寬大之以
御慈悲、右願之通被
仰付被下置候ハヽ、重々難有仕合奉存候、已上、

明治二巳年三月　藏王權現別當　安禪寺

臨野町
御民政局
御役人衆中

右壹通

乍恐書附を以奉願上候

東光千手院堯達事改名　西山靜馬

同　眞學院[illegible]改名

淺井　要人

同　智明院留主居眞善房義侃改名

本庄　賴母

右者今般

皇國御一新ニ付、藏王社神祇御決定被成下候上者、衆徒三箇院儀茂、兼而從

天朝被　仰出候御趣意之通、復飾改名、神職被　仰付被下置候樣奉願上候、然上ハ

天祚永久皇國安寧之奉懇祈候、且今般被仰出候御掟制堅爲相守、社務永續爲仕度奉

存候、右願之通被

仰付被下置候ハヽ難有仕合奉存候、已上、

明治二巳年

當國古志郡
藏王權現別當

三月　安禪寺

脇之町
御民政局

御役人衆中

右已上三通

脇之町局ゟ差出候安禪寺一件願書寫

當國古志郡大島庄金峯山藏王權現神佛判然當御局へ可申上旨、二月十四日於　新潟府御役所被仰渡、則左ニ奉申上候、

當山之儀者、往昔和州吉野郡金峯山を摸し、藏王權現勸請安置申傳候儀者、兼而奉申上候通御座候、藏王權現と稱し候者、全ク金剛藏明王大權示現之略語ニ而、本躰者眞言蜜說大悲胎藏界曼陀羅中金剛部所攝之忿怒形ニ御座候、且權現と號候も、前件佛敎ニ原き候略語ニ御座候、勿論金剛藏明王之儀者、全ク佛部ニて、素ゟ神ニ者無御座候、既ニ文祿度幷慶長度堀左衛門督之檢地帳共藏王堂領と書記有之候、且舊幕朱印拾通之內寬初慶安度藏王權現領と被書記、其後寬文度藏王權現社領と始て書下ケニ相成候得共、自然神佛混淆之時節ニ付、權現と唱邊ゟ、社之一字相加り候義ニも可有之哉、且又當所ニおゐて、鎭守と崇來候者、衆魔降伏諸求圓滿之利益尊信致候ニて、權現と唱候故、只今ニ至り候而者、衆人一途ニ神祇と心得候樣相成申候、是亦神佛混淆之上ゟ來候儀と奉存候、今般

御一新ニ付、神佛混淆無之樣、深重之以　御趣意被　仰出候御儀ニ付、卒爾之儀申上候而者、奉恐入候間、其旨比叡山へ相屆候處、當時輪王寺宮去五月東叡山事件後

從
天朝、台門一宗取締被爲蒙
仰有之、妙法院宮、青蓮院宮、梶井宮右三御門跡へも被相伺候處、藏王權現者、和州吉
野山と同然之事ニ而、勿論佛部ニ相違無之間、其旨當御局始新潟府御役所へ明白
可申上と之事ニ御座候、右者神佛判然之旨有躰奉申上候、已上、

明治二年巳四月二日

當國古志郡
藏王權現別當
安禪寺

脇之町
御民政局
御役人衆中

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

別紙を以奉申上候

一當山四社天神之儀相傳迄ニて、祭神不群(詳カ)候得共、正頭と稱候四座者、(ハ實アルカ)笠置と唱候八
座之儀者、全佛像ニ御座候、右者先般王神祭事之儀ニ付御沙汰之次第茂有之候間、有
躰取調此段奉申上候、已上、

明治二巳年四月二日

安禪寺

臨之町ニ御呉被下候歟ヵ

御役人衆中

乍恐書附を以奉願上候

當國吉志郡鎭王權現別當安禪寺奉申上候、去月十日奉差上候當山鎭王權現神佛引

然之儀、取調不行屆之儀申立、重々奉恐入候、何卒出格之以垂憐、今般奉差上候別紙書

面と御引替御下被成下置度奉願上候、且其節相添奉差上候願書貳通、幷右寫書共、是

亦御下ヶ被成下候様奉願上候、右願之通被　仰付被下置候ハヽ難有仕合奉存候、已

上

明治二巳年四月二日

當國吉志郡

鎭王權現別當

安禪寺

臨之町

御役人衆中

（朱書）
「安禪寺一件ニ付三院家ゟ添翰之寫」

一簡致啓上候、然者
其府內藏王安禪寺藏王權現之儀者、全ク金剛藏明王大權示現之略語ニて、本体者
眞言密說胎藏界曼荼羅中金剛部所攝之忿怒形ニて御座候、尤權現と相唱候も、是
亦佛經ニ原き候事ニ御座候間、藏王明王之儀者、素ゟ佛像ニて、神躰ニ者無御座候、
依之舊來輪王寺宮御支配之處、同宮今日之御次第ニ付、一宗御取締三
御門跡へ被
仰出候ニ付而者、右藏王安禪寺、是迄之通相續之儀萬端
御心添被成遣候樣、此段厚御願被成度如斯御座候、恐惶謹言、

梶井宮院家
大觀心院大僧都
名判

三月十日

青蓮院宮院家
寶光明院大僧都
名判

妙法院宮院家

久遠成陸大僧都

名判

御名

已上臨之町局ゟ差出ニ付落着ノ寫

安禪寺へ御達書寫

安禪寺

其方儀奉仕之神佛を不辨、危急之願方致し、職務不相立、不届ニ付、社料三百石被召上候事、

四月　越後府

安禪寺

格別之以寛典、爲佛供料年々五十石宛、御藏米ニて下賜候事、

四月　越後府

安禪寺

其方儀奉仕之神佛を不辨、麁忽之願方致し、職務不相立、不屆ニ付、隱居申付候事、

四月　越後府

口上ニて申渡之寫

安禪寺

後住之儀者追而其最寄民政局へ可願出事

右之通四月九日御達相成候事、

右安禪寺一件ニ付膓之町局へ相達候寫

別紙藏王安禪寺へ達書寫三通相廻候間、同寺是迄進退致來候地面幷右へ關係之書類共不殘被請取、已來其局支配可被致、爲其申達候也、

四月九日　越後府

膓之町局へ

脇之町局ヵ藏王安禪寺歎願ニ付來翰寫

別紙藏王安禪寺ヵ願出候ニ付、御評議之上、宜敷御取計被成下度候也、

四月十四日　脇野町局

本府判事

御中

右安禪寺歎願書寫

古志郡藏王安禪寺役僧眞善坊奉願上候、先別當藏王安禪寺眞寛代、神佛判然之儀ニ付、俄忽之致願立、不相之旨を以、今般其身隱居、藏王權現三百石被召上、爲佛供料御藏米ニて年々五十石ツヽ被下置候旨、水原於　御本府被仰渡、奉敬承候得共、門前藏王町之儀者、舊幕府朱印之外ニて、往古ヵ全ク藏王堂境內御除地之由ニ御座候間、此分ハ何卒出格之以御慈悲、是迄之通被成下置候樣、偏ニ奉願上候、已上、

明治二巳年四月

藏王安禪寺役僧　眞善房

差添同寺役人　小出銀次郎

脇野町
御民政局
御役人様

附ケ札

藏王町之儀、縦境內ニ候共、取放候條、其旨可相心得者也、

脇之町局へ返翰寫

別紙藏王安禪寺ゟ差出候書面附札之上返達候間、安禪寺へ可被差戻候也、

四月十六日　本　府

脇之町局へ

越後國古志郡大嶋庄惣鎮守
金峯山藏王大權現由緒

別當天台宗
安　禪　寺

藏王權現領
御朱印地
一高三百石

衆徒　三徳院

末寺　壹徳院

社家　三　軒

右由緒之儀ハ、當國之地理北方ニ瘠し、雲霧深閉、毎歳冬十月ゟ二月春分之節ニ至る迄ハ、晝夜朦朧として日月之光を見る事少く、時として時雨霰雪不降事稀也、風土ニ而、此陰氣ニ得便、惡神魍魅妖怪人倫を惱(悩)し、國民此害を怖、常ニ憂之、於朝廷茂、深御憐之有而、

仁王四十一代

元明天皇之御宇和銅元年戊申夏四月、依

勅詔、大和國吉野山を摸し、當國古志郡高波庄橡尾溪楡原之地ニ勸請鎮座、于今同所分村岩野原ニ舊跡有之候、當山之儀者、最初ゟ吉野之末山と申ニ者無之、當境茂金峯山安禪寺と山號寺號賜之、全く大和國芳野と同樣被仰付、往昔從

朝廷許多之御符被下置、一山學頭別當衆徒惣而百貳拾坊有之候由申傳候、其後古志郡大嶋庄當地に移之候由申傳候得共、何等之事緣ニ而移轉候哉、年間時代慶長度堂舍炎上舊記燒亡仕由來相分不申候、

一藏王權現之儀者、仁王三十九代
天武天皇之御宇白鳳十二年辛未春正月八日、役小角始而大和國金峯山に攀登、所感得之尊躰、行者自ら栢楠之靈木を以彫之、八角之堂を造立し、安置之、唯今大峯山上之本堂ニ而候、
其後仁王四十四代
聖武天王之御宇行基菩薩權現之像三軀彫刻安置之、今吉野山麓之本堂ニ而御座候、

一當山權現者、吉野山藏王權現と全無二無別之尊躰ニ御座候、

一年中四度祭式之儀者、正月七日弓始与相稱、前殿ニおゐて惡魔降伏怨敵退散、天祚永久國家靜謐之祈願畢而、衆徒社家列立、壹手ツヽ的射仕候、但右古例之義者、四大明王大悲本誓之弓箭を以、衆魔降伏鎭護國家之表示ニ御座候、

一三月十五日神輿渡於旅所、別當衆徒法供養社家祝詞祈願畢而、神樂奏之、還幸、但山

伏壹人法螺を吹、先進行列之中大錫杖斧等有之候、右法螺ハ佛家轉法輪降魔之表相ニ御座候、

一六月十五日流鏑馬祭禮之儀者、長治年中黒鳥兵衛叛逆之節、鴨次郎義綱朝敵退治之蒙　勅命、發向之砌、當山に懇祈いたし、於神前流鏑馬執行有之、首尾好討手之遂成功候ニ始り、未兆之惡魔怨敵退散、國家攘災　天祚永久天下泰平之爲御祈精、爾來受領之國司、此吉例を慕ひ、毎歳執行有之候由申傳候、且又中古鎌倉武將以來、時之領主執行之、近代者上杉輝虎侯、同景勝侯、堀左衛門督秀治侯、同越後守忠俊侯、松平上總介忠輝侯、堀丹後守直寄侯等、毎歳祭馬十二疋長柄百筋、其外警衛之士卒被差出候、且元和四年戊午牧野飛驒守忠成侯長岡入部以來、代々祭馬五疋長柄貳拾筋物頭兩人、組子百人ツヽ警固被差出之、去卯年六月迄、古格之通、毎歳無怠慢連綿執行仕來候、將亦流鏑馬射手之儀者、樋口ト相稱、四良丸村富八郎、草生津村十太夫役之、同日長岡城下拾八箇町ハ屋臺餝物等出之、

一藏王權現四王子笠置祭事

上條殿十月十八日
中條殿同　廿一日
下條殿同　廿六日　右四座
川西殿十一月朔日

御宿ゟ、如次當人夫婦供奉いたし、藏王堂に歸座、別當本地之祕法修之、衆徒一同助咒、社家祓祝詞役之、但此四座正敷本地之佛體ニ御座候、

一同斷 四王子正頭祭事
上條殿十一月五日
中條殿同六日
下條殿同七日
川西殿同八日
右同斷

藏王本堂に還座、別當衆徒法華八講勤之、社家者祓祝詞舞役之、但此四座祭神不詳、三俣之鉾を以、神躰と崇來候、右鉾込ニ金剛藏王大權現第一王子等と古來ゟ刻付候趣、舊記相見候、改躰之節、差定表も同樣御座候、然ル上者何迄ニも權現之使者眷屬部所攝ニ相違無之義と奉存候、且同座安置仕候笠置ゟ推而見る時ハ、四大明王本地佛ニ相當、此四大明王金剛界曼荼羅中ニ者、四隅神と相唱候、右神躰三戟鉾三鈷杵ハ金剛部三摩耶形と是亦相應仕候、且村々巡行候發端之年間時代舊記燒亡ニ付申上兼候、

一同斷 四王子通名之事
第一之王子稱上條殿
第二之王子稱中條殿
第三之王子稱下條殿
第四之王子稱川西殿
右

上條殿等と相唱候者、信濃川東之村々巡行之三座を如次相唱、信濃川西之方村々巡行之壹座、川西殿と世俗稱倣ひ候迄之儀ニ御座候、

一（當山本社）又倉大行事神躰三面忿怒形ニ而、三躰合行之口傳ニ御座候、且十一月五日ゟ八日迄、東堂内陣を大峯之山上ニ擬し、外陣者麓之本堂を表し、山麓四王子倶時ニ祭之義ニ御座候、前書山上山麓兩壇之習幷四王子祭奠之譯、僧分ニ而者、伽藍法相傳と申事有之、是迄輪王寺宮ゟ別當職被仰付候得者、先住後住面受口決仕候、大切之深秘ニ相心得、他ニ洩し候事、堅く禁之誡之、仍而別當之外衆徒社家共も右表示祭奠之譯等一切辨知無之事ニ候、此度由緒御尋ニ付、相傳之儘奉申上候、

一毎歳十一月七日夜子之刻、四王子明年之御宿割於神前籤を以相定、同九日卯刻遷座仕候、其節相渡候差文如左、

差定　　衆調頭　　養光坊

明年御八講頭番之事

第一日　　上條　　四郎丸村

第二日　　中條　　中澤村

第三日　　下條　　鵜貝村

第四日　　河西　　槇木山村

右守差部旨無怠慢令勤仕者也、仍而如件、

催使三十八所

院主大法師

慶長拾八丑年　　俣倉大行事

十一月八日　　別當

一明年之於御宿榊立釜淸之式

十一月十　日上條殿
同　十一日中條殿
同　十二日下條殿
同　十五日川西殿

有之衆徒壹人出勤勸請鎮座之法條(修カ)之、藏王社家三人宮内社家貳人釜淸メ祓湯立舞等役之、且宮内村社家貳人出勤仕候て、慶長度迄藏王領ニ付、其後長岡牧野家所領ニ屬候得共、右由緒を以三月六月兩度、祭禮幷王子祭奠に出勤仕候、

但正頭笠置共、藏王本堂ゟ王子迄之節、御宿當人夫ゟ淨衣ニ木綿蔓をさし、妻者綿帽子被之、却而邊土ニ古之風躰相殘り上代偲敷事ニ而御座候、

一秋葉權現（藏王權現末社）

此權現者、當山衆徒三尺坊僧正不動行法修之、延暦二癸亥年十月廿四日癸亥之日亥之刻行成就、降魔之異相を現し、飛行迅速神變自在を得、此時若稱我名ニ、聲ニ從ひ、火災盡難除之と、自ら被誓言、依之秋葉權現、此地造營安鎭、衆徒般若院を以別當ニ定、藏王權現大嶋庄に遷座之後も、別當外供僧十貳坊橡尾檜原ニ相殘り居候處、天文廿辛亥年三月二日、上杉家所領之節、別當始坊中不殘被沒收、秋葉權現ニ橡尾常安寺に附屬被申候、已來于今別當相勤罷在候、且同社祭禮每歳三月廿四日五月廿四日兩度共、常安寺ゟ藏王安禪寺に申出、當山社家共差遣、神事執行爲仕候、去寛保三癸亥二月、舊幕府寺社奉行山名因幡守勤役中、遠州秋葉と橡尾秋葉と本末之論有之、出訴ニ相成、其節當山に御尋有之、右之由緒申上候處、其趣意を以、御捌ニ相成候、但橡尾秋葉者三尺坊行法成就之地、遠州秋葉者出生之地ニ而、兩所ニ祭之、寛保度以來、遠州之秋葉者今根元と相唱、橡尾秋葉社者古來之根元と被仰渡候、

一朱塗鳥居　壹基

一（鳥居外）下馬札　同

一殺生禁斷製（制）札　三本　境内仁王門内壹ヶ所
同南之方信濃川岸壹ヶ所
同北之方同川岸字下嶋壹ヶ所

右者往古ゟ牧野家至迄、屬不屬ニ不拘、時之領主任先蹤被建之、朽損之節者其旨申立候得ハ、被再營修補候、

一境內信濃川通川欠難澁有之候節々、是迄舊幕府ヘ右之段願上候得ハ國役御普請被成下候、

一牧野家ゟ是迄鎭守之儀ニ付、境內川欠土手築立其外重立候普請人夫多分入用有之、當領限ニ而行屆兼候節々、其旨申立候得ハ、領中ゟ人夫差出加勢給候、

一社領高石之儀、往古之儀者、舊記燒失相分兼候、文祿三午年九月、藏王領村々高石差出帳左之通、

藏王御神領之覺

一六石四斗八升　藏王堂東町裏地

一貳拾四石八斗八升　堀口門前町

一六拾九石三斗三升　新保村

一百七拾五石六斗五升　河崎村之內

右之內四郞丸村新町村中澤村此外川崩

一五拾八石三斗貳升　中澤村

一六石七斗三升　長藏高畠之内
一拾貳石七斗貳升　宮内村之内
一四拾六石六升　堀金村
一八拾五石八斗八升　小曾禰村
一三拾石壹斗壹升　龜貝村
一拾五石六斗八升　稻葉村之内
一四拾八石四斗四升　桂澤村之内
一六拾五石五斗貳升　矢田村
一三拾六石三斗　吉岡村
一八石六斗八升　福島村
一四石五斗五升　片貝
一拾五石五斗八升　藤井村
一拾四石六斗四升四合　富島村之内
右村十八村
惣都合七百貳拾五石六斗八升

此外

横山村　本貳石五斗　見出三石五斗

新村　本貳石　見出三石五斗

芹河村　本貳斗見出三斗　本壹石六斗内壹石貳斗

右之通御座候、

一慶長貳丁酉年九月御検地左之通、

桂澤村　古志郡藏王分　本三拾八石八斗九升　見出三拾壹石五斗六升

片貝村　同分　本四石五斗五升　見出七石七斗五升

中澤村　同分　本六拾八石貳斗五升　見出拾九石貳斗五升

鉢伏村　同分　本三石八斗　見出貳石七斗

長倉村　同分

本見出 三石四斗 貳石八斗　同分

本見出 七石五斗 六石四斗　同分

本見出 三石五斗 壹石九斗五升　同分

本見出 貳拾貳石六斗 九石四斗　同分

本見出 三石八斗四升 拾石三斗五升　同分

本見出 五拾九石八斗五升 拾六石六斗六升　同分

本見出 拾九石六斗九升 七石四斗

門前屋敷

本見出 拾九石三斗四升 [illegible]石八斗

上條村

宮内村

四郎丸村

忩町

河崎村

堀江村之内

新保村　同分　本七拾壹石貳斗八升　見出四拾石七斗壹升

龜貝村　同分　本六拾壹石六斗三升　見出四拾壹石三斗貳升

富嶋村　同分　本貳拾壹石四斗八升　見出貳拾八石七斗

福嶋村　同分　本五石四斗　見出三石三斗五升

稻葉村　同分　本八石六斗八升　見出拾石貳斗五升

吉岡村　同分　本四石七斗五升　見出貳石七斗五升

頸城郡

矢田村　同分　本四拾壹石六斗壹升　見出貳拾四石六斗四升

苅羽郡同分　　藤井村
本田 七拾五石三斗五升七合
見出 三拾五石貳斗貳升

同分川西　　芹川村
本田 拾四石八斗

同分　　柳嶋
本田 壹石八斗
見出 壹石五斗

本符也
本田 貳石五斗
見出 三石五斗

是者新保村之内ゟ所分也、

合六拾四石五斗六升
見出 合三拾九石六斗九升

都合百四石貳斗五升者　　但田畑本見出共也、

本田 合五百九拾九石九斗四升
見出 合三百貳拾壹石六斗五升
右之惣高 都合九百貳拾壹石五斗九升者　　但本見出共也、

右之通御渡候、

一當山之儀者、慶長度迄者、別當之外一山行願坊、東住坊、松本坊、實藏坊、法泉坊、中道坊、月性坊、大喜坊、妙法坊、威勝坊、圓頓坊、玉藏坊、藤本坊、玉林坊、善住坊、性藏坊、義德坊、禪林坊、万善坊、學林坊、以上貳拾坊、此外社人拾樂寺、戶之內、笛吹、新太夫、惣之一都合五軒有之候。

一東照宮天下一統之後、右領分不殘被沒收、境內九町四方（但中ニ信濃川有之、）除地被下候、但天明度東叡山へ寺錄（祿）分限書上帳之面ニ、境內九町四方与書記有之、右除地畧付書類所持不仕候得共、舊幕府大猷院殿代慶安元年四月廿四日

越後國古志郡藏王權現領

百　石　寺寶村之內

百四拾石　攝對屋村之內

六　拾　石　堀金村之內

都合三百石被下之候、右朱印表ニ境內書加ニ相成候以來、境內共全朱印地と相心得罷在候、且又右三ヶ村其外當時雨池と稱候小村有之候、是者全く寺寶村新田ニ而、慶安後追々荒野開作仕候村方ニ付、朱印表ニ者右村名無御座候、

但、右朱印被下候由來ハ、上杉謙信候養子景虎實（マヽ）景勝、父謙信滅後、不和ニ相成、兄

弟兵を交、其節當所栖吉城主本庄美作守慶秀、嫡子精七郎慶俊、景虎隨從、椽尾之
城沒落之節、本庄父子打死、精七郎女子壹人男子壹人有之、郎等國上國上寺を賴
隱之、後堀丹後守直寄候之養女と成、東照宮に三代之間老女役勤之、此人常々生
國之鎭守藏王領被沒收候事を憂ひ、幕府に被相歎候處、多年忠勤之功勞も有之、
仍而速ニ被仰出候由、後勤仕を辭了、
東叡山御室開基久遠壽准三宮爲戒師薙髮稱妙德院、藏王之地ニ住居、沒後四郎
丸村呂福寺垣內に葬之、于今影供米安禪寺ゟ每歲送之、男子壹人者成長後、藏王
領目代賦之、堀丹後守長岡入部之砌被相雇、長岡住居、猶藏王目代兼務、其後代々
長岡町檢斷役相勤候、當時之草間茂一郎、至右子孫ニ御座候、

一高四拾石餘　　三十八村

右者、元和四年七月廿八日長岡元城主牧野飛驒守ゟ、藏王權現に被致寄附候、

一藏王堂藏王社稱之事、往古者必藏王堂と而已舊記ニ相見候、舊幕府ゟ寬文度御書
替被下候朱印之表ニ、藏王權現社領与御認メニ相成候以來藏王社与稱候事ニ相
成候、

右者、今般當山由緒御尋ニ付奉申上候、

（附箋）
『當國古志郡藏王安禪寺隱居病氣ニ付代同寺衆徒千手院』

越後國古志郡藏王權現別當
金峯山靜觀院安禪寺代
同寺衆徒　千手院

明治二巳年
七月

上條王神巡行市々凡

土合村	草生津村
左近村	千手町村
四郎丸村	宮内村
宮原村	溝　村
曲方村	赤川庄右衛門古新田
上條村	今井村
大町村	高畑村
表町	裏町

上田町　　　柳原町

中條王神巡行市々凡

長倉村　　　中澤村

谷内村　　　川崎村

栖吉村　　　野崎村

新町村　　　吳服町

關東町　　　桶屋町

蒔田町　　　鍛冶町

下條王神巡行村方凡

福島村　　　下條村

彌次右衛門新田　　　中村

宮重村　　　龜貝村

永田村　　　小曾根村

新保村　　　筒場村

河西王神巡行村方凡

堺村　高瀨村
五本柳村　寺嶋村
小澤村　三ッ郷屋村
田屋村　上柳村
下柳村　鼠嶋村
宮關村　藤澤村
荻野村　蓮潟村
槇山村　巻嶋村
槇下村　芥川村
三宮村　高野村
大荒戸村　川袋村
李崎村　成澤村

藏王權現別當
安禪寺起元調帳

藏王別當之事

一和銅元年、當國古志郡高波庄橡尾溪楡原之地に、藏王權現勸請鎭座之比、一山學頭別當衆徒惣而百貳拾坊有之由申傳に候、

一延暦二年、同山衆徒三尺坊不動行法成就之後、秋葉權現を祭り、同山般若院秋葉權現別當に定メ、其頃に坊中有之候得者、別當も可有之儀に奉存候、

一藏王權現橡尾溪楡原之地ゟ、大嶋庄之地に、何年頃に遷宮に相成候哉、年月相分り不申候、當山現在之梵鐘之銘に、

鑄改

越後國古志郡大嶋庄

藏王大權現鐘

享德四年乙亥四月二日

願主　別當權律師惠實

右年暦取調候處、足利成氏之時代に相當り、凡四百十五年餘に候、當山別當古ゟ有之儀證顯然仕候、

一慶長度檢地帳表に、藏王別當と認メ記し有之候、

一慶長度會津上杉侯藩中之内ニ可有之哉、佐藤五郎兵衛と申人、藏王別當ゟ借米證文、右本證今ニ別當ニ有之、寫左之通り、

借用申御米之事

一合參石者　　但本分也

右來秋中會津ニて相濟可申、若無沙汰申候ハヽ、こ大せ申ろつそをめしおあれ可申者也、仍而如件、

慶長三年　　佐藤五郎兵衛印

三月十二日　　重　信判

藏王

御別當様

右之通取調奉申上候、以上、

明治二巳年

七月

藏王安禪寺

衆徒千手院印

當山末社幷安禪寺内宮由緒

藏王權現境内

奥之院一宇

右者、藏王權現鎭座本堂安置之像と同樣ニ御座候、

同

二王門

右者、靈跡金剛安置爲伽藍守護勸請仕候義ニ御座候、

又倉大行事

右者、三面忿怒形ニ御座候、天明度之舊記ニ者、藏王權現拜殿之内ニ安置有之候由、舊習相見候、

其後何頃相移候哉、當寺山王社ニ安置有之候、

秋葉權現

右者、經暦度、當山衆徒三尺坊不動之行法悉地成就降臨之異相を現し候奏ニ候、

是も天明度迄者奥之院内ニ安置有之候由、舊習相見候、其後何頃相移候哉、當時

え山王社ニ鎭座有之候、

安禪寺居屋敷構土手

山王社一宇

右者、是迄天台擁護之神ト稱、比叡上坂本之例ニ倣ひ、一宗之寺院、何迚も勸請之(山カ)いたし、殊之外尊信仕事ニ御座候、當山之儀者、何比勸請仕候哉、年間相分不申候

稻荷

右者、天女形ニ而、右手ニ鍵を持、左之手ニ寶珠を揭、通途稻荷之神躰ト者異候、右山王社內ニ同座有之候、

八幡宮

右者、當山元目代門田伊豫ト申者、與板藩ゟ養子ニ來、同人在所鎭守ニ而信仰いたし、山王社傍ニ幣帛收建、祭拜いたし候由、其後同人義、從舊幕府御沙汰之次第有之、退山仕候得共、猶崇來候幣帛相殘居候儀ニ而、夫故近來迄祭禮法樂等一切無之處、亮寬代東叡山へ申立、當山末社之列ニ加、八月十五日外末社幷祭禮執行仕候、是亦山王社內同座ニ御座候、

安禪寺構堀之內

辯天堂一宇

右者、宇賀神將、貧(マヽ)蝦降伏之像ニ御座候、何比安置候哉年間相分不申候、

安禪寺屋(居カ)屋敷構土手

正善靈神之祠

右者、當山所縁妙德院之靈魂、去ル萬延二年亮寛代祭候義ニ御座候、

右件々御尋ニ付奉申上候、

當國古志郡藏(王脱カ)
安禪寺代
衆徒　千手院

明治二巳年
七月

藏王衆徒社家起元取調書上帳

藏王社家起元等之義御尋ニ付奉申上候

一 給米九俵弐斗
　同畑壹町三反餘　海津出雲

一 同米五俵五升
　同畑壹町百三拾六歩　十樂寺石見

一同米五俵五升
　同畑三千八拾歩　川上壹岐
　　外ニ五俵、是ハ寛文七寅年ゟ境内見廻役申付候ニ付、別段遣之、

一當境内社人之名目起元相分兼候得共、慶長度檢地帳配當帳等之表ニ、社人

十樂寺
戸之内
笛吹
新太夫
惣之一

都合五軒相見申候、社人と申候者、所謂神部ニ而、社家与ハ格別ニ身分相下り、驅役之分際と奉存候、

一先年出雲義、代々上席之旨申出、石見、壹岐と相爭ひ、長々東叡山役院に願出候ニ付、取調ニ相成、役院方ニ當山年中行事天和年中書上候舊記ヲ以、去ル文久元酉年十月、社家呼立之上、長官之儀者、先官上座と（裁）被許相濟申候、

一社家圓名等之儀者、正徳五年七月、元境内川欠ニ相成、當時之場所に遷座之節、彼等

之先祖共骨折候ニ付、時之目代今井真右衛門申立ニ仍而、蔵王堂別當東叡山惠恩院ゟ、日光御門主江懇願致し、右爲賞美、國名烏帽子狩衣著用始而許容ニ相成、其後只今ニ至迄、代々國名等願之節者、別當へ願出、別當ゟ御門主江願上ケ、御許容之令旨申受、別當ゟ社家江相達候、且亦神前ニ而相用ひ候烏帽子狩衣刺貫中啓等見苦敷相成候得者、別當ゟ新調致し來候事、

一當山社家之儀者、社傳と相唱ひ、勤行向一切白川吉田之御支配不受候得共、國名烏帽子狩衣願之節、東叡山輪王寺宮ゟ被下候御令旨之表ニ、両部神道之旨云々と御書下ケ有之候、

一勤行席別當内陣本擅(壇)登高座衆徒内陣厚疊ニ著座、社家者外陣格子戸外薄縁敷ニ著座、勤行仕來候事、

一養子願幷實子養子家督願、何れも是迄別當江願出、別當限り申付候事、

一實子養子共、社役見習之儀、是迄別當江願出、別當之許容を以、初而出勤いたし候事、

一出生並隱忌服等別當江相屆候事、

一年始五節句朔望廿八日別當江罷出候事、

一近村江靜事ニ而相廻、又ハ親類方江罷越、一泊致し候ニも、是迄別當江相屆候事、

王子掛之事

一上條王子 下條王子 川西王子　十樂寺

一中條王子　海津

但、三軒之内川上ニ者掛り無之候、

右者御尋ニ付、取調奉申上候、

明治二巳年七月

古志郡藏王 安禪寺代 衆徒 千手院

衆徒之事

一給米貳拾貳俵貳斗 給畑壹町步　教學院

一同米貳拾貳俵貳斗 同畑貳反貳百步　千手院

一同米貳拾貳俵貳斗 同畑千貳百八拾步　智妙院

一當山衆徒之儀者、藏王權現榛尾溪楡原之地ゟ、大嶋庄ニ遷座之砌、坊中相移候と相

見ヘ、慶長度檢地帳配當帳表ニも衆徒貳拾坊顯然ニ書記し有之、寶永年中迄者、今時之衆徒三ヶ院之外、坊之名兩三ヶ寺相見申候、且王神御改躰等、全く衆徒之掛ニ而、既ニ寛永六巳年、上條王神御流御改躰之差定ニ、衆徒千手院名前書記し有之候、

一四社王子古來ゟ坊中ニ而掛りを定メ、專ら扱來候、寛永年中三ヶ院ニ相改り候、爾來左之通り、

一上條王子　教學院

一中條王子　智妙院

一下條王子　千手院

一川西王子　別當所執事代　教學院

一寶永二酉年五月廿九日、中條王子御流御改躰開眼供養畢、掛寺ニ而尊像奉遷、屋根ニ端籬を構、榊を立、注連を引き、十一月迄祭來候古例ニ御座候、

一正頭當置王子共、頭送之節掛り衆徒外陣唐戸際迄出迎、神躰を受取、内陣へ安置仕候儀ニ御座候、

一十一月九日、四王子遷座ニ相成候節、明年八講之差定掛り、衆徒ゟ頭人ニ渡し來申

候、

一前件王子祭事之儀、年々十月十八日還座ゟ、十一月迁行迄者、都而掛り衆徒專ら取扱候事ニ御座候、迁座先頭人宅御宿留中ハ、掛り社家ニ而專ら取扱來候儀ニ御座候、

右者御尋ニ付、取調奉申上候、以上、

古志郡藏王
安禪寺代
衆徒千手院㊞

明治二巳年
七月

右之如く雙方より種々之書取出て、己か引々に論する故、何れか是とも決定しあさく、いさや藏王之境內又は堂舍之形秘密乃箱とやらんをも熟覽して、禰宜法子（師）等か言立さる事乃徵しともあるへきにならハ、爭を定るれ助けにもなりなんと、長官に申したるを、宜となるにそ、七月廿二日、西潟八雲、杉本東作、水原を立、蒸茂に而一宿、廿三日長岡へ著到、廿四日禰宜法子等を案內して、藏王境內を見廻るに、前に鳥居門二基なるはかりハ神社に似てはなきと、二王門てふものゟ內、藏王堂奧

の院など云ふのハ、凡而佛樣ニ而、神の道ニ叶へる事も一ツとして見當らず、内々陣とう云ところニ、白木造り之厨子ありて、其内秘密の箱といふものあるまゝ鑿金槌もて粗破り見るニ、中ニも佛像一軀、幣壹本ありて、何も秘め置べきところもあらず、されど、すべてハ幣を用ゆるを見れハ、最初より神ニ混合せるものと思ハれたり、其箱の横板に書記したる文を左ニ擧、

〔二〕天台冠首輪王寺准后之宮、當社御修復之時、任古來之秘傳而、被令此一宇於新造、而安置乎非躰所也、然る所以、爲於後代、堅不可開見之秘事也、

于時正徳三癸巳年　衆徒衆長　敎學院

六月廿三日　道海

奉行御目代

今井貞右衛門尉

乘恒

右あさきものニ而、つたなきことかぎりなし、さて王神てふものを見るよ、禰宜等ゟ言上せる如くまて、神事にも似さるとものあり、故一二ツ禰宜等ニ詰て聞けるとの

あるよし、言解んとて出しける文書を左に記してけり、

乍恐以書附奉申上候

一當社內々陣ニ奉祭候少彥名命神躰者、從往昔開見無之、依而秘事、寬永以來東叡山附屬与罷成候而も、矢張古來之任秘傳、堅不可開見旨、制禁之箱書有之候處、去辰夏中、安禪寺亮寬壹人を開見不苦旨ニ而、社領雨池村百姓又右衞門与申者、近年山伏よ相成候者を以て、亮寬神託伺候由而、竊ニ致開見候趣、專ら噂有之候得共、深秘之神躰ニ候へを、猥之取計を相成間敷与存居候處、當四月十八日、十樂寺石見脇野町御局に御添簡願与して罷出候處、安禪寺儀、內々陣白木之箱致開見候處、佛像有之候由、同人申与被仰聞候ニ付、石見大ニ驚き申上候を、亮寬壹人私ニ致開見候段、難得其意旨申候處、安田杢樣被開（仰賦カ）候ニを、當節之事ニ候得を、不致開見を相成間敷与被申候故、石見申上候者、御時節柄ニ付不得止事義ニ候いゝ、何之上社中立會開見可仕筈之處、密ニ壹人致開見候を、彌以風說通り、如何之取計有之候儀与奉存候、然處今般被爲在御出役御見分ニ付、私共幷詮明房、法威房共立會、御箱改見候處、箱書有之候上通り之釘一面ニ鐵槌之打目有之、其外新き釘も相見候ニ付、私共不審之旨申上候、夫ゟ御箱之內開見ニ相成候處、神躰御幣一本、外ニ鑄物之藏王權現一躰

御座候へ共、夫ニ添候木之古き釘跡數ヶ所有之候木ヲ削添有之、如何ニも不審千萬之義与奉存候、

一吉志部之中ニ、毎歳神行有之候、皇神者祭神大地主神ニ二柱之女神、合せ四方ニ奉祭候、其元ッ社之則宇奈貝志神社ニ御座候處、中昔より兩部習合世ニ行れ、右祭事ニ法華八講被執行候處、追々佛門盛大ニ相成、式社之神威次第ニ衰へ、文祿之度ニ至り、別當惠運与申僧、右社權(現)令改造、俣倉大行事与釋門之稱號を唱ひ、前殿ニ奉安置之、其後遂ニ星霜を經、寛政年中山王社再建之節、恐多くも社内之片端ニ奉移之候而、又倉大行神与假額ヲ奉掛候、如此數百年間轉變及衰廢候得共、神事之每歳十月霜月數ヶ度其、于今古傳之通り、和幣神酒御年之鮭を獻、神祇一派之勤行連綿仕候義ニ御座候、然處去辰十月廿八日、長岡御局ゟ御用ニ付罷出候處、御判事南部彦助様、渡邊儀左衛門様より被仰聞候ニも、此度
皇神巡行之儀、市郷より鬼神之恐も有之ニ付、已後新社造立之上、御神事執行仕度段願出候ニ付、自今迁行相止メ、新社ニ而祭候様被仰聞候ニ付、往古ゟ之祭奠今更相止候而も、神靈之程如何可有御座哉、且も薄祿之私共、累代之收納ニ相離き、家族取續方難澁至極之旨申上候處、御祭之料并社修理料共、市郷ゟ可爲差出旨被仰聞

候ニ付、御所置之段敬承仕罷在候處、不計も御神事休滯ニ相成、加之當今之御次第ニ付、不得止事歎願仕候處、此度御自分御出役被成下、難有奉存候、然ル處祭事發端之古書類有之候ハヽ、卽日可差上旨被仰聞、奉畏候へ共、先般出府之砌申上候通、元和之頃、社頭炎上、舊記燒亡仕、古書類等無御座、依之寬延天明度之祝詞五通、幷ニ六月流鏑馬祭禮略圖壹枚、皇神巡行在町覺書一枚奉差上候間、宜御賢察奉仰候、今日被仰聞候ニて、全く皇神は神共佛共不相見給せ之義与見へ候間、ケ樣之事ニて、双方共相止可然哉与被仰聞候得共、御矛御榊を齋ひ神躰与奉祭候義者、當社而已ニ無之、旣ニ紀州於日前國懸神社茂御矛御榊を齋ひ、神靈代与被祭候趣承り、且伏見稻荷之神靈代も榊ニ和幣を取著被祭候義ニて、上代より神州之御遺風与奉存候、乍恐方今御改正ニ付而ハ、諸國大小之神社流弊御一洗被仰出候段、拜承仕候、何卒當社之義も舊弊御改革之上、古典ニ復し、祭祀相立、神威光輝仕候樣宜御沙汰奉戴仕度、偏ニ奉祈願候、恐惶謹言、

古志郡
宇奈具志神社

明治二巳年七月廿四日　禰宜　川上壹岐印

十樂寺右見印
海津淡路印
海津出雲印

越後府
社寺御懸り
御役人様

乍恐以書附奉願上候

當月廿四日爲社殿御見分西潟八雲様、杉本東作様御出役被成下候ニ付、願書幷ニ六月流鏑馬祭禮之略圖等奉差上候處、即日御預ニ相成、難有仕合奉存候、右ハ毎歳從長岡城主神馬被獻之、町中ゟ傘鉾十八差出し候賑ひ之御祭ニ候處、不計も此度之事件ニ依而、恆例之御祭禮相止ミ、當社之神職ハ不及申、上長岡宮内村神職永井金吾、長部志津摩、四良丸村射手役樋口富八郎、草生津村射手役樋口重大夫等、爲夫ヶ宗様ニ相離レ、必至与當惑仕候、乍恐
御復古御改正ニ付而ハ、神祇祭奠被爲在御崇敬候様傳承仕候、何卒

御寛大之御憐恵を以、常例之通り鎮守御祭禮執行被仰付被成下度奉願上候、右願之通、御聞濟被成下候ハヽ、神(官カ)宮等射手役不及申、氏子一同難有仕合ニ奉存候、誠恐謹言、

古志郡
長岡宮内村
六所明神々主
長部志津摩印

右同所
一王神々主
永井金太印
東京出府ニ付志津摩代印

同郡
宇奈具志神社神主
川上壹岐印
十樂寺石見印
海津淡路

明治二巳年七月

海津出雲

越後府
社寺御掛
御役人様

乍恐以書附奉願上候

一先達而御出役御見分被成下置候ニ付、御願書奉差上候處、西潟八雲様ゟ、海津淡路、十樂寺石見へ被御聞候者、宇奈具志神社之旨申立ニ候得共、古志小千谷迄入江ニして、長岡之邊ニ式内之社可有之筈無之様御不審ニ候得共、寛治年中、三郎兵衛信庸ゟ圖ニも、粗相見へ候通、東之山手ゟ、戌亥之方へ成出たる地高之所ニ而、大嶋庄与申候、式御撰之頃者、其已前ニ候得共、蒲原郡之内ニも、式社數多御座候、古志郡之義も、蒲原沼垂与違ひ、格別地高ある所ニて、長岡与申號も、後之名ニも候得共、岡与云事、高き處を指たる義与奉存候、社地者勿論度々相變り候義ニ而、當時社殿ニ延寶八年皇神祭式之額有之、其時代ゟら、唯今之社地ニ無御座候得者、巨細之所者相分兼候得共、宇奈具志神社も、古志郡ニ相違無御座奉存候、

一私共家筋之義ハ、白川吉田之配下ニも無之、東叡山宮樣御內ニ而、元來神職之家無之哉之御不審有之候得共、先達而も申上候通り當社之義ハ、東叡山不立已前之神職ニ而、古傳之祭事于今連綿仕候、古來相傳之義ハ、當社耳ニ無御座、信州戶隱ニも栗田大膳与申神職有之、別當衆徒も有之、且又上州榛名ニも社職數多有之、別當衆徒も有之、僧分ハ東叡山配下ニ候得共、神職ハ何レも白川吉田之許狀不取受、社傳舊例之神職ニ御座候、當社之義も、右同樣以社傳累代祭祀勤行仕來候義ニ御座候、然處今般神佛判然被仰出、僧侶之方ハ、先般御所置被仰渡濟ニ相成候得共、神祇之方、于今不奉蒙別ヶ仰、社職一同當惑難澁罷在候、何卒格別之以

御憐愍、前件次第被爲聞召分、乍恐

御寶祚御萬歲之祭祀斷絕不仕樣、神社相當之御所置被仰付被成下度、偏ニ奉歎願候、

已上

古志郡

宇奈具志神社惣代

海津出雲印

明治二巳年八月

越後府

社寺御掛

御役人様

藏王社人中口取調書

藏王社人中口

宇奈具志神社々傳秘說

越國古志縣爾毎歲御巡行座坐須皇神者、昔時古志乃八邦遠作給志大地主神爾座坐氏、神靈乎日約爾齋祀奉、

判云、古志縣の稱古今の書籍に未例を不見、縣い古代朝廷の御畠なる地に限りさる稱にて、即御高田（ミアガタ）の謂也、

古志乃八邦遠作給志云々、

是れ出雲風土記に越八國とも、一書これ越八郷ともありて、越國に住所の暴惡神の名にして、八千矛神是を平げ給へり、然るを此社傳に、八邦ヲ作ルと云へる

は誤也、上古は越前か加賀、能登、越中、越後、出羽半國、松前地まで皆一國にて、すべてを越國と云し也、いろでろ越八邦を作ると云事あらむ、矛鏡等を以而、神體と祭る事、上代より諸社に例多し、但、元ハ依り物なるを、神の御魂の留り給ふを以而、則神體と崇め奉るなり、

賣神二柱座半須、一柱者須世理比賣命、一柱者沼河比賣命爾座豆、何母神靈者桑木爾和幣乎取垂豆齋祭也、

列云、右二柱の比賣神の御事、實に古傳なりや信じ難し、本書ならは能見て考ふべし、但賢木に和幣を取垂候は、神祇に奉るにて、神躰と思ふは甚誤なり、矛鏡は上古より御靈代に祭る事、上に云るが如し、然るに今其神鏡は佛像を模樣せるは、中古より僧等に混合せられたるなり、

社人等、自注云、二柱ノ比賣神、一柱充一歳替ニ夫神ノ所へ神留座テ、互ニ一年隔ニ相成リ給ハ、何成由ニ歟、唯古ヨリ祭傳シマヽナリ云々、

上條、中條、下條、河西四座王神、年々十一月爾至氏本宮爾還幸座須、其本宮止稱祭神社者、式之神名記爾、宇奈具志神社云是也、王神歳毎四方爾巡座乎、古與利公民日茂呂岐建豆齋祀神事波云々、

神主等自注云、宇奈具志ノコ、ウハ發語、ナグシハナコシノ儀ニテ、和ノ意、八千矛神ニ二柱ノ姫神副坐テ和シ給フ社ノ稱ナリ云々、

判云、和訓を宇奈冝志と云る古語聞も不及、殊ニ四座の王神の本社を宇奈具志神社と申ては事不得心、其故ハ式内の神社ハ恐多くも朝廷神祇官において、御祭遊さるゝ社なるを、何ぞ村々の土民百姓の家々を巡行し奉る事あらむ、

但藏王社も、後ニ少彦名神を祭ると云ハ、社人等が臆說にて、是ぞ上古は宇奈具志神社ならむも知べからず、名高き神社の佛に混合せられざる例擧而數ふべからず、

皇神乎奉遷時、其頭人淨衣乎裝比、木綿鬘乎冠利、妻與姿同淨衣乎裝從侍氐、本宮爾奉遷氐、大前爾新薦曳延倍集侍弖、品々之供物禮自利乃幣爾御年魚乎獻、神官等雛形捧持聽弖、中略神官及頭人末廣取持舞躍志、下略

神官等自注ニ云、頭人ヲ今當人ト書ク、妻ヲ伊達子ト云ヒ、姿ヲ脇伊達子ト云、此稱ノ緣由未詳、但妻姿相副ハ二柱ノ女神ニ因テ歟、

種々乃供物者、神酒八木香掛餅五色幣御年魚(ミトシウヲ)ハ鮭背腸麻筒、

雛形ハ又形代トモ云、割云、雛形ハ人形ヲ少ク物セル名ナリ、釋日本紀人形ハ蓋マ素鳴尊身代之儀ナリ、神祇式曰、大祓御贖物鐵人形二枚、和名抄祭祀具土偶人木偶人、

其后和銅元戊申年、大地主命之因神託而、少毘古那命齋祀奉　此神ニ今藏王權現混合セリ、

割云、右實ハ和銅年中神託坐ニ而、少御神を祭せる慥成證據なきや、信用し難き事也、

以來年毎四度之神祭嚴重、取別十一月之神祭者、從神代之遺風當而、祭所之頭人三年貫中日茂呂岐立立弖喪不弔食乎忌氐禁鳥獸肉鷄卵云々、手自御饌ヲ炊、種々供物乎獻弖、今猶祭傳來者也、

毎歳四度之祭事

一正月七日　弓始神事

寺僧中口云、天祚永久國家靜寧之祈願、後衆徒社家列立一手充的射仕候、

一三月十五日　神輿渡御

寺僧中口云、於旅所別當衆徒法供養、社家祝詞祈願、畢而神樂奏之還幸、

一六月十五日　流鏑馬執行

社人申口云、神官并射手入者申ニ不及、警馬警衛士卒下部ニ至迄、八日ヨリ一七日齋、十五日申上刻、神官奉幣、祝詞譯於呂志、宮巡式アリ、神馬供養之神官等乘馬、次射人樋口兩人乘馬、南所之的射之、而神殿奉納騎馬畢退下、○別ニ流鏑矢馬祭式略圖差出申候、

出勤神職　宮内村 永井金太　長部志津摩

射手役　園馬丸村 樋口富八郎　葦生津村 樋口重太夫

一十一月王神祭

社人申口見上件、

寺備申口云、十月頃ヵ何町何某何村誰某ト有得ニシテ、忌服無之、祭祀首尾能可相勤器量ヲ撰ミ、十一月六日夜御鬮筥ニ入、神前ニ備置、七日ノ後夜ニ、任神慮御鬮ヲ上ケ、御鬮ノ次第ヲ大幔ニ書記シ、八日ノ朝何村何某ト讀上ケ、九日ノ早朝ニ其村々ヘ御幸奉成候、御幸ノ御守致シ候者ヲ、差夫ト唱ヘテ、（寺院ノ[illegible]寺ト唱[illegible]）一皇神ニ二人充ノ役人有之候、右ノ當人方ニテハ、御幸相成候ヘバ、榊立釜清メト申祭禮有之、衆徒一人出勤、勸請鎭座之法修之、社家釜清メ湯立舞等勤之、

一笠置祭式（上楚原十月十八日　中柞原十月廿一日　下柞原村廿六日　河内原十一月朔日）

右者、當年諸處ノ御宿當人ヨリ本座へ歸座ノ祭禮、別當衆徒本地供修之、社家祝詞勤之、

一正頭四座祭式 上條殿十一月五日 中條殿同六日 下條殿同七日 河西殿同八日

右同斷、藏王ニ歸座別當衆徒法華八講執行、社家祓詞舞勤之、

右四座者三朕ノ鉾ヲ以テ神體ト崇來候、又笠置ト唱へ候八座ハ、全ク佛像ニ御座候、降三世　軍荼利　大威德　金剛夜叉　四大明王ノ本地佛ト同躰云々、

藏王權現寺僧申口取調書

藏王權現寺僧申口

越後國古志郡大嶋庄惣鎮守

金峰山藏王權現由緒書

別當天台宗 安禪寺 衆徒三ケ院 末寺一ケ寺

御朱印地 一高三百石　社家　三軒

右者

元明天皇和銅元年戊申四月、依

勅詔大和國吉野山ニ致摸し、當國吉志郡高波庄橡尾谷楡原之地に勸請、于今同所分村岩野原村ニ舊跡有之、但吉野之末山与申號無之、當山も金峰山安禪寺与山號寺號賜之、忝く大和國吉野与同樣被仰付、往昔百餘坊有之候由申傳候、其後吉志郡大嶋庄當地へ移之候得共、何等之事緣ニ而、移轉候哉、年間時代慶長度堂舍炎上舊記燒亡仕、由來相分不申候、

今按右

元明天皇御世實ニ依

勅詔勸請致し候證據慥ニ候哉、若無之候ハヽ、元神社之地を混合致候も難計候、

第一之王子　稱　上條殿

第二之王子　稱　中條殿

第三之王子　稱　下條殿

第四之王子　稱　川西殿

一四王子通名

上中下條殿与唱候者、信濃川東之村々巡行之三座を流ニ隨而之稱、又一座ハ信濃川西之方之村々巡行故川西殿与世俗唱做ひ候迄之儀ニ御座候、

但、此四座祭神未詳、三條之鉾を以而神躰与崇來候、右鉾之込ニ金剛藏王大權現第

一之王子等与古來より刻附候趣、舊記相見候、改躰之節差定表も同樣ニ御座候、然上ハ何れも權現之使者眷屬部所攝ニ相違無之儀与奉存候、且同座安置仕候笠置ゟ推而見る時ハ、四大明王本地佛ニ相當、此四大明王金剛界曼荼羅中ニ者、四隅神与相唱申候、右神躰三戟鉾三鈷杵ハ金剛部三摩耶形与、是又相應仕候、且村々巡行御發端之年間時代舊記燒亡ニ付申上兼候、右四座祭祀之砌ハ、別當本地之祕法修之、衆徒一同助呪又法花八講勤之、社家ハ祓祝詞舞等役之、左候得ハ、此四座正敷本地之佛躰ニ御座候、

右等之事元來混肴(淆)論を不待、

藏王衆徒社家取調書

一給米九俵貳斗 同畑一町三反餘　海津出雲

一同米五俵五升 同畑一町百卅六歩　十樂寺石見

一同米五俵五升 同畑三千八拾歩　川上壹岐

外ニ五俵、是ハ寛文七寅年ゟ境內見廻役申付候ニ付別段遣之、

一當境內社人之名目起元相分兼候得共、慶長度檢地帳配當帳之表ニ社人、

十樂寺
戸之内
笛吹
新太夫
惣之一

都合五軒相見申候、社人与申候者、所謂神部ニ而、社家与ハ格別ニ身分相下り、驅役之分際与奉存候、

(附箋)一神戸の百姓こそハ驅役せらるゝ者なれ、祝社人神部共其社の神事に仕奉るものにてさる賤しきものにあらす」

一先年出雲義代々上席之旨申出、石見壹岐与相爭ひ、長々東叡山役院へ願出候ニ付、取調ニ相成、役院方ニ當山年中行事、天和年中書上候舊記ヲ以而、去ル文久元酉年十月、社家呼立之上、長官之義ハ先官上座与(裁)裁許相濟申候、

一社家國名等之義ハ、正德五年七月、元境內川欠ニ相成、當時之場所へ遷座之節、彼等之先祖共骨折候ニ付、時之日代今井貞右衛門申立ニ依而、藏王雜別當東叡山惠恩院方、日光御門主へ懇願致し、右爲賞美、國名烏帽子狩衣著用、始而許容ニ相成、其後

只今ニ至迄、代々國名等願之節ハ、別當ゟ御門主へ願出御許容之令旨申請、別當ゟ社家へ相達候、且亦神前ニ而相用候烏帽子狩衣刺貫中啓等見苦敷相成候得ハ、別當ゟ新調致來候事、

一當山社家之義ハ、社傳与相唱ひ、勤行向一切白河吉田之御支配不請候得共、國名烏帽子狩衣願之節、東叡山輪王寺宮ゟ被下候御令旨之表ニ、兩部神道之旨云々与御書下ケ有之候、

一勤行席別當內陣本檀(壇)登高座衆徒內陣厚疊ニ著座、社家ハ外陣格子戶外薄緣敷ニ著座、勤行仕來候事、

一養子願幷實子養子家督願、何レも是迄別當へ願出別當限申付候事、

一實子養子共、社役見習之義、是迄別當へ願出、許容之後初而出勤致候事、

一出生産穢忌服等別當へ相屆候事、

神官等申口

私共家筋之義者、白川吉田之配下ニも無之、東叡山宮樣御內ニ而、元來神職之家筋ニ無之哉之御不審有之候得共、兼而申上候通り、當社之義ハ、東叡山不立已前之神職ニ而、古傳之祭事、于今連綿仕候、古來之相傳之義ハ、當社耳ニ無御座、信州戶隱ニ

も粟田大膳与申神職有之、別當衆徒も有之、且又上州榛名ニも社職數多有之、別當衆徒も有之、僧分ハ東叡山配下ニ候得共、神職ハ何れも白川吉田之許狀不取請舊例之神職ニ御座候、當社之義も、右同樣以社傳累代祭祀勤行仕來候義ニ御座候、

（附箋）「烏帽子狩衣料貫等、別當より神官へ新調之事ハ、中古佛家の威權强く、社家衰微のありさまあやしむにたらず、

勤行席内外陣の差別、養子家督願、其他諸届ヶの事も、威權別當に歸して有之候砌ハ、さもあるへき事にて、是又論ずるにたらず、諸社に此例おほき事なり」

藏王取調愚按

謹而愚按仕候處、中古佛道盛ニ世ニ行ハれ、大小之神社混合せられざるハなく、或ハ神宮寺又ハ本地堂ヲ建立し、甚しきハ佛地ト成果候も不少、吉野之藏王ハ、吉野水分神社ニましく〵、愛宕神社ハ火神之荒魂ニ座ますを、勝軍地藏抔稱し、其外加賀ハ白山神社、能登ハ伊須流伎神社、上野ハ榛名神社、下野ハ二荒神社、出羽ハ月山神社等、皆延喜式神名帳ニ載られ候重き神社なるを、悉く佛地之如く罷成候、此藏王も必其類ニ而、元ハ名高き社地ニ御座候ハむを混合仕候儀ト奉存候、

社人共ヵ申立候由緒書之義ハ、件々相辨候通、此節新ニ作立候儀ト相見ヘ候得共、寺家ヵ之申口ト取合セ差考候處、上古ハ神社ト覺候證據左之通御座候、

一矛鉾ヲ以而皇神の神躰と仕ル事、

但、佛像等之模樣ハ、後之混合ト奉存候、

一榊を立和幣を垂而祭り候事、

一皇神御宿之當人榊立御釜清めの祭仕候事、

付、皇神御宿之間ハ、神木ヲ立テ、両隣向ハ家迄注連引渡し、堅ク汚不淨ヲ忌謹候事、

幷當人不弔喪事、

一皇神を本社へ送返し奉り候節、當人淨衣ヲ著し、木綿鬘ヲ付ケ、其妻妾も淨衣ヲ裝ひ候事、

其節種々ハ供物中ニ、神酒八木五色幣鮭同ク背腸(さワタ)麻筒(ナケ)御座候、若元ヵ佛ニ御座候ハヽ魚肉ハ供ヘ申間敷候、

一鳥獸之肉及鷄卵ヲ禁じ候者、加賀之白山、陸奥磐梯神社、當國彌彦神社等之上代ヵ之例ト同じく御座候事、

一弓始流鏑馬之神事、大社ニ數多備御座候事、

附、當社流鏑馬之神事ニも、其下部迄一七日潔齋仕候事、

一蠶王之本社若くハ宇奈具志神社ニ御座候も難計候、（寄り）本地堂ハ本社の儀に御座候而、是迄混合之蠶王之儀に准神、但社人共も彼四座產神ヲ宇奈具志神社成由成申候得共、是も決而誤ト奉存候、傳之宇奈具志神社之明證御座候迄、去ばらく大通主少彦名神社として、大嶋庄惣社ニ祭らせられ可然哉ニ奉存候、

但、右之社號も無覺束候得共、神官等之申立候儘ニ御座候、是上古の神號審ならざる故ニ御座候、尤只今上古之祭神詳ならずとて、猥ニ社地ト覺候ところを潰し候ハむハ、神明へ對し恐入候義ト奉存候、

一總て寺院之佛像も、混合わ之品ニ而、古代之物ニ可有之候得共、其秘密宮ときのミ古き時代ニ定め候ニも有之間敷、三百年以來之物ト奉存候、且其中ニ幣束御座候上も、悉皆佛トも難定奉存候、

一神社新造營入費も、是迄王神巡行之村々わ寄附致させ、巡村之義も、御廢止可然ト奉存候、且元わ其村々之願所ニ候得共、是迄別當社人等聞入不申候由、兼而承及候、

付、新社之義、隣寺之花麗ヲ禁じ、造立方も何間四方ト申處も御定メ御下知爲

有られ可然哉ニ奉存候、

一社地之義、神門ゟ神門之間、可然哉ニ奉存候、

一神鏡矛共是迄物ヲ廢し、新ニ清淨潔齋鑄改勿論ニ奉存候、

藏王境內ニ在來候小祠之御處置

一奥之院藏王　但、混合之本地佛像

右院ハ御廢し、佛像ハ藏王本堂ニ相納候而可然ト奉存候、

一又倉大行事　混合佛

山王社ゟ取出し、藏王堂へ相納可然ト奉存候、

一秋葉權現

右同斷、

一稻荷

右ハ、謂所（所謂）陀耆尼天之佛像ニ候得ハ、御廢止或ハ藏王本堂ニ相納可然ト奉存候、

以上、

一八幡宮　山王社　是ハ日枝社ト改號勿論ニ奉存候、

右兩社ハ新社地へ引移し、大地主少彦名神社之攝社なるべくト奉存候、恐惶謹言、

〔社寺取調類纂〕四七七

柏崎縣伺中社號之儀ハ、其御官見込之通リ、相應之社號相改候テ可然候得共、祭神不分明ト申事ハ、縣之伺面トハ大ニ齟齬シ、旣ニ神祇ト決候旨御達ニ相成候上ハ、祭神不分明ト申譯ハ無之筈、若祭神不分明ナレハ、神祇トハ確定シガタカルベキ次第ニ付、明細御取調ニテ、御廻答可有之候也、

明治二年十二月廿五日　辨官

神祇官

御中

柏崎縣伺藏王權現之義、根元吉野藏王權現勸請之由、右吉野ハ高名之地ニテ、御一新以來取調之上、旣ニ神社ニ相違無之、祭神ハ不相分候得共、本所神社タルニ依テ神祇ト淮シ、社號之義ハ相當相改可然旨見込相考候、仍テ此段申進候也、

但シ、式内名神大社祭神不相分向々、幾百千モ有之、古來祭神不分ハ不分ニシテ、崇敬被爲在候御趣意、今更申迄モ無之事ト存候也、

明治二年十二月廿六日　　　神祇官

辨官

御中

先達テ相伺候柏崎縣管轄藏王村藏王社々料役收之儀云々、今般神祇官ヨリ、別紙之通下札相成候趣、同縣ヨリ申出候ニ付、爲御心得右寫御廻致候間、至急御商議御下知振御申越有之度、此段申進候也、

明治二年二月十七日　　　民部省

辨官

御中

柏崎縣管轄古志郡之内藏王村藏王社社料之儀、十二月中、同縣ヨリ伺出候ニ付、右ハ元越後府ニヲイテ一旦社料沒收イタシ候廉モ有之、旁辨官へ相伺候處、今般別紙之通御下知相成候、然ルニ先達テ御寺(官カ)ヨリ、社頭之處如從來相爲候樣被及御附紙候趣、左ニテハ區々ニ亙候故、以來地方關係之條件ハ、當省へ御打合有之度、今後柏崎縣伺

豐王社料之儀ハ辨官御下知ニ因リ、附紙可致、御官御附紙第三ヶ條御取消有之度、此段及御懸合候也、

二月廿二日　　民部省

神祇官

御中

辨官附箋

柏崎縣中立之義、前當之不東ハ可咎、朱印地沒收之譯ハ無之、何レ一體之社寺祿制相立候迄之處ハ、從前之高之百石、縣之米廩米ヲ以可相渡置候事、

〔朱書〕

「柏崎縣管轄豐王社料之儀ニ付、御掛合之趣致承知候、則當官附紙第三ヶ條取消候間此段御承知有之度、仍テ及御報候也、

二月廿二日　　神祇官

民部省

御中」

當縣管内藏王村藏王權現區別之儀伺書、當正月中差出候處、其後御附紙之上御下渡相成、然ル處右社料之儀ニ付、民部省ヨリ御掛合有之候由ニテ、則御官ヨリ御答書、同省ヨリ御下ヶ渡ニハ、當官附紙第三ヶ條取消ト有之候得共、當縣ヘハ更ニ御沙汰無御座、且何等之譯ニテ御取消相成候哉、御伺申上候也、

三月　　柏崎縣

神祇官

（朱書）「附紙」

別紙民部省懸合之通ニ候間可被得其意候事」

昨冬越後國古志郡藏王權現神佛區別之義ニ付、相伺候處、藏王權現之儀ハ、神祇決ニ付、神祭候樣御附札ヲ以御達之趣致承知候、然處右藏王社素々吉野同樣之儀候得ハ、祭神幷社號等如何相心得可申哉、御指圖被下度、此段相伺申候也、

三月廿八日　　柏崎縣廳

神祇官

御中

當縣管内吉志郡藏王村藏王權現神佛區別之儀ニ付、元水原縣ニテ取調書類差出置候處、去ル巳年十一月中御下ケ願之上、尙於當縣ニ再取調之上、去午正月中伺書相添差出申候、右書類之内取調度儀御座候ニ付、暫時御貸下被下候樣相願候、取調濟ミ之上ハ早々返上仕候、此段御聞屆可被下候、以上、

柏崎縣

明治四年四月十日　岡倉少屬

神祇官

御役所

越後國吉志郡安禪寺藏王權現者、大和國吉野山金剛藏王尊ト同躰ニテ、身ニ袈裟ヲ纏ヒ、右之手ニ三貼(鈷)杵ヲ握リ打勢ヲ爲シ、左之手力印ヲ結ヒ、腰ヲ押シ、右足虚空ヲ踏ミ、天魔ヲ降伏シ、左之足地ニ蹴テ、魑魅ヲ鎭靜スル等、種々表職有之、全躰佛法中、秘密全剛藏王大菩薩之尊像、則別紙寫之通ニ御座候、然ル處住持亮寬心得違致シ、專ラ神躰之旨申立、越後府ヨリ復飾願上、其後本山ヘ罷出、何等之理リモ不致、只々芳野山之事實ヲ相尋、安禪寺ハ依然ト被立置候樣願度旨申出候ニ付、本山　有之儘申聞、猶彼

府御知事ヘ三門室ヨリ一書御願入ニ相成候處、別當之身トシテ、其本尊ヲモ不辨段不屆之旨嚴敷御呵之上、隱居被仰付、寺領三百石、當分御預リ、佛供米トシテ現米五十石被下之候旨、被仰渡有之候趣之處、昨冬以來又々如何相心得候哉、竊ニ柏崎縣ヘ内願立候趣ニテ、去三月二日別紙之通、縣廳ヨリ御申渡之趣屆來申候、前件之通判然之佛像ヲモ不相辨而已ナラズ、自分幷弟子迄還俗ヲ願候ヨリ、度々不正之嘆願致候段不當之至ニ御座候、依之右亮寛師弟者管領ヨリ急度相糺可申候ヘ共、彼縣廳ニヲイテ如何御聞取ニ相成有之哉ト深恐入候間、其筋宜御取調被爲下、公明至當之御裁段(斷カ)(被脱カ)仰付候樣奉仰願候、以上、

明治二年六月十七日　　三門室執事

檀那院大僧都

辨官

御傳達所

其縣都(管カ)下藏王權現之儀ニ付、別紙之通檀那院ヨリ申出候間、御取調之上、委細御申出可有之、依テ別紙寫相添、此段御達申入候也、

明治二年六月廿日　　　　　　　　　　辨官

柏崎縣

當縣(管カ)下藏王權現之儀ニ付、別紙之通檢那許ヨリ願出候間、取調委細可申出旨承知仕候、右ハ當作由緒取調、神佛區別之儀、神祇官ヨリ相伺候處、芳野藏王院ニ神祇ト相決候上ハ、可爲神祭旨御指圖ニ付、其段申達、尤其節ヨリ別當安禪寺復飾奉仕相願候得共、吉野初神靈御改之上聞屆度、未タ其儘ニ差置申候、依テ別紙更返上候也、

明治二年七月　　　　　　　　　　柏崎縣

辨官

御中

二月二日於柏崎縣達之寫

齋明賦

藏王權現ハ神祇ニ相決候間、神祭奉仕之事、

一　佛躰并佛器類等取除可申事、

右三通大島富藏王權現ヘ達候寫

一別當幷衆徒復飾之上、神職可願出カ、又ハ社外ヘ退散可致哉、兩樣之內勝手次第可申出事、

一社領其外　事何分之所置申達迄、是迄之通相心得社務取扱可申事、

三月

右之通御座候、

當縣管內古志郡藏王社神祇ニ御決シニ付、是迄在來之佛躰佛器類取除候樣申達候、然處藏王權現神像之由ニテ、別紙繪形差出候、元來大和國芳野金峯山藏王社之神躰如何樣ニテ、即今御靈代如何樣被爲在候哉、明細拜承之上、及差圖、前條神躰未決ヨリ、是迄之社家共議論ヲ生シ、社中不穩候間、至急御取調御差圖有之度、尙亦先般相伺置候社號之儀モ同樣御下知有之度、此段相伺候也、

明治二年五月　柏崎縣廳

神祇官

御中

附紙
畫像ハ佛躰ニ付可廢却、藏王權現神號之儀ハ、奈良縣ヘ問合置候ニ付、返答次第可

申達候事、

五月十九日封狀ニテ達ス、

昨冬越後國吉志郡藏王權現神佛區別之儀ニ付相伺候處、藏王權現之儀ハ、神祇御決ニ付、神祭候樣御附札ヲ以御達之趣致承知候、然處、右藏王社素々芳野同樣之儀候得ハ、祭神幷社號等如何相心得可申哉、御差圖被下度、伺書當三月中差出候處、奈良縣ヘ御問合之上、御下知御座候樣被仰聞候得共、今以御沙汰無御座、依テ至急御下知可被成下、此段奉伺上候也、

柏崎縣

明治二年七月　岡倉少屬

神祇官

御役所

昨冬越後國吉志郡藏王權現神佛區別之儀ニ付相伺候處、藏王權現之儀ハ、神祇御決ニ付、神祭候樣御附札ヲ以御達之趣致承知候、然ル處、右藏王社素々芳野同樣之儀候

得ハ、祭神并社號等如何相心得可申哉、御差圖被下度、伺書當三月中差出候處、奈良縣ヘ御問合之上、御下知御座候樣被仰聞候得共、今以御沙汰無御座、依テ至急御下知可被成下、此段奉伺候也、

柏崎縣

明治二（三）年閏十月　岡倉少屬

神祇官

御役所

當縣管内吉志部藏王權現神佛區別之儀、先般水原縣ヨリ別紙取調書ヲ以相伺候末、猶當縣於テモ相伺候、右藏王權現者、大和國吉野之御處分神祇ニ御決候儀ニ候ハヽ、從來之佛器等相除、大地主神ト合祀勿論之事ニ候、又佛ト御決ニ候ハヽ、禰宜共中立之通區別シテ、大地主神初三柱之神ヲ以、宇奈具志之神社地所ヲ撰ヒ、更ニ御再興、幣帛并總テ之神器相修可然、尤宇奈具志ハ素々何レ之神ヲ相祀候儀ニハ（ヤカ）、職務外之儀承知不致、昔大地主神初三柱之神ヲ祀リ候儀ニ無之候ハヽ、更ニ相當之社號ヲ賜、是迄之通、近傍村々產神ニ被差置、禰宜并津出雲初三人之者共ヘ神勤爲致度、就テ

一旦當之社領朱印地三百石ハ、當巳四月中元縣後府ヨリ別當寶嚴寺申立方不屆之
次第有之ニ付、當時別段之通ニ候得共、必竟別當之不束、神佛ニ責ハ無之筈ニ付、右
判然區別被仰付候上ハ、改テ相當御下渡ニ相成候樣相考候、依テ水原縣ヨリ之伺書
等、猶又相添、此段相伺候、右御所分無之候テハ、既ニ租稅收納方ニ差支居候儀ニ付、至
急御評議之程相願候也、

十二月　　　　　　　　　　　柏崎縣

神祇官

御中

御附紙

一宇奈具志神社者、式社之儀ニ付、御在所之有無篤ト相糺可伺出事、

一藏王權現ハ、既ニ於吉野モ神社ト相成候ニ付、神號可爲勿論事、

一社領之所、舊ヲ如從來、社ヘ相附可申事、

一僧徒ヲ離職外之儀ト申事如何候事、

當縣管內古志郡藏王權現、當三月神祇ニ御決シ之旨御達ニ付、元別當祠官共ハ佛像
ヲ藏シ、神祭申渡候、元來右藏王ハ吉野同社之遷ニ付、藏王社號ハ如何相唱ヘ可申哉、

即今祭神何レノ神ニ被爲在候哉、明細拜承之上、夫々及差圖度、右神體未決ヨリ、是迄禰宜共議論ヲ生シ、不穩ニ付、至急御取調御差圖有之樣、度々神祇官ヘ相伺候得トモ、今以御差圖無之、依之別當復職(飾)神勤願幷禰宜共之所置、社領米渡方等、右御差圖ヲ請候上、夫々取計候心得ニテ、差扣置候處、最早月迫相成候間、至急何分之御下知被下候樣奉伺候、以上、

明治二年十二月十五日　柏崎縣

辨官

御中

柏崎縣藏王社之儀ニ付伺

祭神不分明タリモ、相應之社號ニ相改、別當復飾申付、外社家等夫々職務可申付事ト存候、仍テ本紙相添此段申進候也、

明治二年十二月廿三日　神祇官

辨官

御中

明治四年正月十七日

御附紙

祭神不分明ナリ共、相應之社號相改メ、別當復飾爲致、外社司夫々職務可申付事、

柏崎縣ヨリ藏王權現之儀伺、元來權現之號ハ神佛混淆ヨリ起リ候事ニ候、凡混淆ト云ハ、神社ニシテ佛事ヲ混シ候等ニテ、佛ヲ神トスルニ無之、故ニ權現之神社タル事判然ニ候、吉野藏王モ有之取調ニテ、神社ニ相成候事故、同縣ニ於テモ、相應之神號ニ相改候樣御達有之度存候、依テ本紙相添此段申進候也、

但シ、式內名神大社ニモ祭神不分明之分數多有之候也、

明治四年正月十三日　　神祇官

辨官

御中

先般歸道ニ有之候書面之內、別紙柏崎縣下藏王權現復飾之儀ハ、一旦神祇官ニ於テ

取調、同縣ヘ相達候末、猶樟那院ヨリ事故云々申立有之、然ル上ハ何レニモ藏王權現之灑觴篤ト取調之上ナラテハ、神カ佛カ畫一之見込難相立、付テハ最前神祇官ニ於テ、柏崎縣ヘ相達候手續モ有之、旁以一應書類同官ヘ御下ケ之上、神佛混淆之推判明了ニ相決、其正シキニ歸著致シ候テ、見込相立度、依之別紙書類相添、此段申進候也、

明治二年十一月晦日　民部省

辨官
　御中

追テ和洲（州）吉野山藏王權現之儀モ同樣ニ付、是又差進候間、一同取調之儀、神祇官ヘ御達相成候樣いタシ度候也、

越後國

古志郡藏王權現處置伺書

水原縣

古志郡大嶋庄惣鎭守金峯山藏王權現之儀、禰宜海津出雲、十樂寺右見、川上壹岐申立ニハ、延喜式神名帳宇奈具志神社之舊蹟、祭神ハ元來大地主神、（卽大國主神也）、須世理比賣命、

〔大國主神之荒魂之神也〕、因奈河比賣命〔大國主神所生子國之大神也〕、之三神ニ候處、和銅元年、大地主神之託宣ニ因テ、少毘古那命ヲ祀リ、凡テ四柱之鎮座ニ有之、藏王權現ハ右少毘古那之命混合之由申之、別當天台宗安寧寺衆徒申立ニハ、元明天皇和銅元年夏四月、依勅詔、大和國芳野山ヲ摸シ、吉志郡高渡庄栃尾漢檜原之地ヘ勧請鎮座、其後吉志郡大島庄ヘ移轉ス、其像ハ金剛藏王大權示現之略語ニテ、本躰ハ眞言密説大悲胎藏界曼陀羅中金剛部所攝之忿怒形ニ有之、元來佛地之由申之、右權現之境内見分候處、木立之様、鳥居二基ハ神社之如ク相見、其他二王門本堂奥之院等ハ、凡テ佛舍之構ヒニ相見、堂中内陣ト唱候處ニハ、藏王、不動、毘沙門之三軀ニテ、戸前ニハ大纛大幣有之、二間程前左右ニ間キ、四王神ト稱シテ、禰宜共由緒書中、國ノ如キ物都合八本有之、其中笠置王神ト稱ン候鏡之如キ物ニハ、別當申立之通、釋迦彌陀等之佛像(像)相見、内々陣ト申所ニハ、白木ノ厨子有之、其中秘筥ト唱ヒ、白木之筥壹ツ四面釘〆之、禰宜ハ少彦名命之御連代ニテ石躰之趣申之、別當ハ佛像之趣申傳候得共、體ニハ不相知由申之、則開拓シテ之ヲ見ルニ、壹尺餘之藏王佛一躰、赤紙之幣壹本有之、神佛混同之證ハ候得共、何レカ本ト申義不審候、右禰宜申立、藏王權現ヲ以宇奈具志神社之舊蹟ト爲事、又宇奈具志之轉社ハ、大地主神、須世理比賣命、因奈河比賣命ヲ齋候ト申事、其證據一向不相見候、朝廷

之正史、民間之野誌ニ至迄、其說無之候、若社官之舊記古老之傳說等有之候ハヽ、三才圖會、越後名寄、同野誌、其他神祇ニ關係之著述中、少シハ書記可有之處、片言不及之候得者、今日始テ之立說ト相聞候、且和銅元年大地主命託宣ニ因、少彥名命合祭、藏王權現ハ右ヘ混合ト申事、是又明徵無之候得ハ、惣テ禰宜申立社號祭神等之說一切難取用候、

但、禰宜共何故如此說ヲ相立候哉ト考候處、是迄王神之祭神ニハ、禰宜妻妾ヲ引供シ候儀有之、且王神之內正統ト稱候ハ男神、笠置ト稱候ハ女神之如クニテ、又正統一神ニ、笠置ハ二神有リ、自ラ妻妾之樣ニ相見候ニ付、大國主神正室ハ須世理比賣命ニ候處、越ノ國沼奈河比賣ニ結婚玉ヘシ事ヲ思付、先此王神ヲ大國主神、須世理比賣命、沼奈河比賣命三柱ト定メ、扨夫妻之神御中睦ヒ玉ヒ、宇奈カケ理鎮座抔ト古典ニ有之ヲ思付、宇ノ字ヲ發語トシテ省、奈具志之詞ハ和ノ字之意ナルヲ以テ、宇奈具志之神社ニ引付、則右社之舊跡ト相稱シ、扨又藏王ハ和銅元年勸請之傳說有之處、內々陣白木ノ秘密箱ニ納在モノハ、石躰ト申ヲ開傳、少彥名命ハ石ヲ以御魂代トスル謂レ有ニ思付、且ハ大國主命、少彥名命ト二柱並立シテ、國造リ玉フ古傳ニ託シ、遂ニ大國主之神託ニテ、和銅元年少彥名命ヲ齋ヒ、藏王佛ハ是ニ混合セ

ル樣ニ說成タル事ニ可有之相見候、然ルニ此藏王權現元來神社之アル處ヘ、佛徒ノ混合イタシ候儀ハ相違有之間敷、其故ハ皇國之義、欽明天皇以來神社ハ漸々衰ヒ、佛舍ハ追々盛ニ相成、行基ノ頃ヨリシテ、佛ヲ神ノ本地トシ、神ヲ佛ノ垂跡トシ、如何ナル明（名ニ）神大社ト雖モ、本地ヲ建誰候樣成行候次第故、神社變シテ佛寺トナリ、神宮變シテ佛閣トナリ候儀ハ、天下數多有之候得共、最初佛寺ニシテ、中古神社ニ變シ、又ハ佛寺ニ神祭ノ混同致候類ハ、百ニ一ツモ無之義ニ御座候、此藏王之祭事ニハ、御鏡瓊矛幣帛ヲ以神躰トシテ、魚肉ヲ用候祭事モ有之、其外正シク神事ト見候事許多相交、殊ニ禰宜之類迄附屬有之候上ハ、元來ハ神社ニシテ、中古佛地ニ相變シ、神器等ハ失ヒ候得共、神事之欠遺相見候義、相違無之候、雖然何ノ社何ノ神ニ混合イタシ候ト申事不相分、且藏王之檜原ニ安置之時ヨリ、旣ニ混合候モ不可知、兎ニ角明證無之候得共、藏王佛堂舍ハ、先是迄之通差置、別ニ地ヲ相シ、右神社ヲ合與、同所鳥居二基其外神具ハ皆夫ヘ移シ、禰宜海津出雲等ヲ被付置、藏米三拾俵程被宛行、神號一地主社ト相定、瓊矛御鏡幣帛ヲ安置シ候樣申付可然奉伺候、

但、此藏王ト申唱候ハ、古クヨリノ事ニ相見候得共、最初藏王佛安置以前ハ、別稱ト相見ヘ、夫ニ付考見候ニ、三才圖會ニハ坐上ニ相見、又元來藏王ト號候由申傳

モ有之、彼是見合候得ハ、初メ地主之神社アリシヲ、後ニ佛徒之附會シテ、蚫王抔申唱、遂ニハ藏王ト定、音便ニテ座上抔ト申候事モ可有之、何ニモセヨ、其始地主之神ニ相違無之候得ハ、今モ大嶋庄惣鎮守ト相成居候義ニ付、本又（マヽ）地主神社ト改號可仕奉存候、

九月　　　　水原縣

神祇官

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

古志郡藏王社改號之儀ニ付伺

古志郡藏王社之儀、并ニ郷社ト可致カ之伺、先般差出候處、追テ御指圖之旨御附紙ニ候得共、兼テ神祇ト御確定之上ハ、村社ニ列シ氏子ヲ附シ候儀ハ勿論差支有之間敷、然ル處守札等始メ、追テ御指圖ニテ先ツ藏王社ト相認メ可申カ、此段奉伺候、至急御差圖被下度候、以上、

明治五年二月廿八日　　　　柏崎縣

神祇省

御中

明治四年十一月廿五日

柏崎縣伺

第六條

吉志部藏王社之事、相應之社號被(可被カ)可相改旨、先般御達有之候處、根元吉野之社ニ尊照致度候ニ付、同社之稱號御改正ニ相成候ハヽ、承リ申度候事、

(朱書)「追テ可及沙汰事」

(之ニ對スル指令案ハ、大和吉野藏王堂ノ條ニアリ、分割ニ便ナラザルヲ以テ、コヽニハ載セズ、同條ヲ參照スベシ)

明治四年十一月十二日

同縣伺

第八條中ニ

鄕社ハ先ツ諏訪時羽然之式社ヲ撰ミ、鄕社ト定メ申候云々、

刈羽郡御堂村

三嶋神社

魚沼郡上鄕巷

魚沼神社

同郡川口村

川合神社

同郡大崎村

大前神社

古志郡妙見村古ハ三宅ト云シ由、

三宅神社

同郡藏王村

元藏王社但、式外ニハ候得共、現今之大社ヨリ相伺候、

三嶋郡上桐村

桐原石部神社

頸城郡菅原村

菅原神社

右ハ社ヲ以テ先ツ郷社ト相定、其他ハ追々檢査致相伺申度候、縣社之儀ハ三嶋神社

當縣之逕信ヨリ縣社ト相定申度候事、

（十三）一宮村社其他之通云々、且縣社之儀ハ、追テ可相達、三嶋神社之儀ハ、先郷社ニ可加置事、元藏王社之儀ハ、追テ及差圖候上可相定候事、

佐渡における修驗の廢滅

〔御一新法中記錄〕（法教院野見鏡融作　佐山本氏所藏）

此の書は、新潟縣佐渡國相川町の修驗光正山法教院第八世牛窪蘊覺（覺カ）翁の筆錄せるなり、法教院は慶長九年の創立にて、代々聖護院宮の直末として、佐渡鎮山の守護神を祀りて、其の別當たりき、翁は熱心なる修道者にて、修驗道の法儀に精通し、闔於佐渡奉行の歸信を得たる人なり、

此の書に據りて、佐渡修驗が、酷吏奥平參謀の慘法に遭ひ、一朝にして廢滅に歸したる状況を伺ひ見るべし、

本書は實に修驗史上唯一無二の資料として珍襲すべきものたり、嗚呼修驗を滅したる結果として、天理・大本等の邪類は、雨後の筍の如く、世道人心は日に惡化して復救濟すべからざるものあり、我が民衆的宗教として、尤も適切なる修驗道は、速に試

亡し終るか、

大正十五年五月初二　　　不肖弘善識

當院原由　　　八世齊賢誌

當院開基慶長九甲辰年冬十月、京都白川大藏院住弟法印賢教

御本山森御殿撿挍宮皇都白川聖護院村一乘寺聖護院

　御末派直院光正山金溪寺般若坊法教院

聖護院宮雄仁入道親王御代　法教院八世峯順坊齊賢代

　明治元戊辰年十一月廿一日、三派修驗宗廢止被申渡候、

其方共儀、今般還俗申付候間、以來法服法器等相廢シ、世俗同樣農業養蠶之働、入精可相勤、尤兵丈（十七）望モ候者、其志意可申立、品ニヨリ御採用可有之者也、

有被仰渡之趣、一同承知奉畏、依之御請一札差上申所如件、

　　御預所

明治元辰年十二月四日日延願不相叶、　　南山修驗

於石田御役所請印取之、　　連印

御代官

井上　大藏

慶長九甲辰年十月、園甚ヨリ明治元戊辰年迄二百六十五年、修驗宗ニ而相續也、

聖護院

今般修驗宗廢止之儀、別紙之通被仰出候條、此旨厚可相守事、

明治五壬申九月十五日

修驗宗之儀、自今被廢止、本山當山羽黒派共、從來之本寺所轄之儘、天台眞言之兩本宗ニ歸入被仰付候、條、各地方官ニ於テ、此旨相心得、管内之寺院ヘ可相達候事、

但シ、歸束之目的等無之ヲ以、歸俗出願之向ハ、始末具状之上、教部省ヘ可申出候事、

壬申九月　　太政官

一天台宗教導職者、三井寺管長圣乘院權少教正殿東京教部省ニ在留、

右之通聖護院殿御達有之候、

明治元年戊辰年十一月廿日

上包

呼出

久保藤十郎
天野孫太郎
井上大藏
大行院始

本文之寫し、
申渡儀有之間、明廿一日四つ時御役所へ可罷出候、以上、

辰十一月廿日

井上　大藏落印
天野孫太郎印
久保藤十郎印
大行院始
本山方修驗
觸頭

出屆之寫し、
乍恐書付を以奉申上候
拙僧義、今般御用御召出被仰、罷出申候、依之御屆奉申上候、以上、

明治元年　　　　　　　　　　　　　　　　　年番袈裟頭
　十一月廿一日　　　　　　　　　　　　　　當野平村
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　定　光　院
御奉行所

御請書之寫し、

差上申一札之事

一國中前在之寺院、いつ迄も其宗門本寺へ纏メ、當住一代者是迄之旦中諸用相勤、施物を請可申、其者病死候ハヽ、旦家者本寺に返し候事、

一前書本寺へ纏メ候上者、有來小寺者廢し候事、

但シ、本寺之内手狹ニ而、住職成兼候程ニ候得者、境内に手輕ニ造營候義者不苦事、

一寺院之内百姓持所田畑、買入又者請地等ニ相成、只今寺附ニ相成候者、不都合之筋ニ付、是迄取入之代錢を以返地爲致事、

一他國末之寺院も、其派ニ而守（而り）立候寺中に纏メ、自國にて一本寺之分ハ、先其儘可差

置事、

一社寺除米之儀、往古ゟ之引付を以、夫々御渡し相成來り候處、一筋一躰ニも無之、謂なき義ニ付、以來一圓御渡し無之事、

一社寺除地除畑除屋敷之義ハ、以來不（被脱カ）遊沒收候間、一寺限り歩畝取調可申上事、

右仰渡之趣承知奉畏候、仍而御請書差上申處如件、

　右御請書ニ付、日延不相叶ニ付、諸宗門並ニ年番定光院調印、

右仰渡之儀ニ付、同月廿八日四つ時惣法中會合、

御呼出し之寫し、

申渡義有之間、此差紙見屆次第、早々當役所江罷出可相屆もの也、

辰十二月二日　　相川御代官所

大願寺

大行院

蓮光寺

法教院

興禪寺
瑞仙寺
法然寺
眞如院
常德寺
敎壽院
大乘寺
安國肥前
總源寺

追而早々順達之故止りゟ可相返候事也、

二日ニ罷出候處、御役所引ニ相成候故、三日ニ罷出候處、御請書之寫し、

差上申御請一札之事

今般御國改御一新ニ而、願村ゟ外海府西濱通り澤腩（根カ）村迄、東西五十里、五十里在郷青野、山田、二宮、眞光寺共、合四十七ヶ村之義、當御代官井上大藏樣御支配被仰付、湊浦方

御役人社寺修驗等始メ、其所ニ住居之もの一同、御同人様被遊御支配候間、前々御觸面之趣、堅く相守、諸御願筋等も、都而當御役所へ申上、御差圖通り相守候事、

一、是迄社寺へ御除被置候田畑屋鋪等之儀、以後御年貢地ニ相立候間、差向當年分ゟ、御年貢米金之義、村々同様上納之積り相心得、御除地寄附方幷田畑位附取調へ、來ル五日迄ニ當役所へ差出可申事、

一、諸願筋ニ付、内願等ニ罷越候儀者、堅く不相成、其外年寄を以、音物等差贈り候儀者、一切仕間敷事、

右之趣、前書四拾七ヶ村社寺修驗等に、不洩様可申通旨被仰渡、承知奉畏候、仍而御請一札差上申處如件、

明治元辰年十二月　　諸寺院

連名

法教院印

御代官所

右之通り十一月二日御差紙ニ付、同三日調印仕候、

一土民を勸め、僧侶ニ度する事不可有之、

一俗家ニ至り、人を集メ、諸法勸化等不可有之、
一寺門へ人を集メ、追忌法談抔と唱へ、布告之儀不可有之、
一人之死躰者土葬用ゆへし、火葬ニ致さす事不可有之、但、僧侶穢多非人ハ火葬ニ申付候也、
一牌子墓表者、其もの生前之姓名を用ゆへし、戒名を授る事不可有之、
一金銀銅錫を以て、佛像佛器を造作之儀不可有之、
　但、木像といへとも、新規之造營停止事、
一淨土門徒當住之外、其子弟剃髪之儀不可有之、
一國中之寺院、其本寺へ一纒ニ相成候樣、兼而相達候處、于今無其儀族も相見、甚心得違ニ候、仍而來ル十日迄ニ、無間違本寺へ引移り可申候、尤火宅之僧、妻帶之ものハ、其所ニ急速相成難キ事情も相見候間、淨土門徒ハ來ル廿日迄ニ、相纒り可申候、右期限違背之僧侶者、可爲曲事候、
右條々御請候趣、一同承知奉畏候、依之御受一札差上申處如件、

諸寺院

連　名有之

修驗
山伏

其方共儀、今般還俗申付候間、以來法服法器等相廢し、世俗同樣農業養蠶之働入精可相勤、尤兵士望モ候ハヽ、其志意可申立、品ニより御採用可有之者也、

右被仰渡之趣、一同承知奉畏、依て御請一札差上申處如件、

御預り所
兩山修驗
連印

御代官
井上　大藏樣

十二月四日還俗申渡し請印有之候へ共、石田村御役所へ罷有候而、代印教學院仕候、

御達書之寫

德川內府從前御委任大政返上、將軍職辭退之兩條、今般被聞召候、抑癸丑以來、未曾有之國難、先帝頻年被惱

宸襟候御次第、衆庶之所知候、依之被決　叡慮、　王政復古國威挽回之御基被爲立候間、不論既往、更始一新、自今攝關幕府等廢絶、卽今假りニ總裁、議定、參與之三職を置レ、万機可被爲行、諸事　神武創業之始ニ原ツキ、搢紳武弁堂上地下之別ナク、至當ノ公儀ヲ竭シ、天下ト休戚ヲ同ク可被遊叡念ニ付、各勉勵舊來驕惰之御習(マヽ)ヲ洗ヒ、皇國之爲メ忠誠を可盡候事、

一內覽、　勅問御人數、國事御用掛り、議奏、武家傳奏、守護職、所司代、總テ被廢候事、

一太政官始近々可被爲興候間、其旨可被心得候事、

一朝〔廷カ〕定禮式近々御改正可被爲立候得とも、先攝籙門流之儀に止候事、

一舊弊御一洗ニ付、言路被洞開候間、見込有之向者、不拘貴賤、無忌憚可致獻言、且人財(才)登庸第一之御急務ニ候故、心當之仁有之候ハヽ、早々可有言上候事、

一近年物價格別騰貴、如何トモスベカラサル勢、富者ハ益富ヲ累ネ、貧者ハ益窘急ニ至り候趣、畢竟政令不正ヨリ所致、民ハ　王者之大寶、百事御一新之折柄、旁被惱宸襟候、智謀遠識救弊之策有之候ハヽ、無誰彼可申出候事、

有之通り御確定被　仰出候ニ付而者、六十餘州之大小藩ハ申ニ不及、陪從吏卒之末ニ至迄、御趣意厚く相心得候樣御沙汰ニ候事、

本文之通り從　禁廷被　仰出候ニ付、此段御末流一同江可相達旨ニ付、如此ニ候、
以上、

卯十二月

住心院殿役所
小嶋治部法眼印
小嶋紀伊法橋印
內藤兵部法橋印

年番役

正月七日

聖護院宮樣御還俗被遊候得共、修驗道者御變改無之、二月廿六日若王子殿も御俗躰ニ御變被成候、仍而御補任之表書相改候事、當節大坂ニ而、御軍海船之大將ニ被爲成候、

一早春以來
天下之政事御變革有之候ニ付、別紙御達書差被下候、謹而御請可被申、尤文面不分明ニ候へ共、其儀者追々可相分被存候、

一日本國中之神社御座有之候間、方一國内神職人ゟ彼是申出候節者、御本寺ゟ御沙汰ニ可相成よし被申聞、必自分之心得を以、猥りニ引合等ハ不可致候、委細ハ追而可及沙汰候、差懸り候所、心得ニ申入置候、此段法中一同にも可申通候、爲其如此ニ候、以上、

辰四月

住心院殿

役所

佐州

年番役

差上申一札の事

一國中前在之寺院、いつれも其宗門本寺に縄メ、當住一代者是迄之日申諸用相勤、施物を請可申、其者病死候いヽ、且家者本地へ歸し候事、

一前書本地へ縄メ候上者、有来小寺者廢し候事、
但シ、本地之内手狭ニ而、住職成兼候程ニ候得者、境内に手軽ニ建續候儀者不苦事、

一寺院之内百姓持所、田畑質入又者流地等ニ相成、只今寺附相成居候共、不都合之筋ニ付、衰寄取入之代錢を以返地爲致事、

一他國末之寺院も、其派ニ而重立候地中へ纏メ、自國ニ而一本寺之類ハ先其儘可差置事、

一社寺除米之義、往古ゟ之引付を以、夫々御渡し相成來り候處、一統一躰ニも無之、謂なき義ニ付、以來一圓御渡し無之事、

一社寺除地除畑除屋敷之義者、以來不遊(被脱カ)沒收候間、一寺限り歩畝所調可申上事、

右御渡之趣承知奉畏候、仍而御請書差上申處如件、

明治元年十一月廿一日

右御請調印

年番袈裟掛

當平村

定光院代

差上申一札之事

本山方修驗六拾八ヶ院之者共、今般一同還俗歸農被仰付候處、當野平村先定光院外

廿八ヶ院ハ、是迄
聖護院宮御直末之廉を以、御本寺へ對し、姓名御さし許之義奉願上候所、願之通り被
仰渡、一同難有承知奉畏候、仍而御受證文差上申所如件、

明治元年辰十二月十日

貳拾九ヶ院惣代
後山村
先大寶院
快光
同
川原田鹽屋町
先千手院
快宥

聽訟方
御役所

閏四月京都御觸寫

今般諸國大小之神社ニ於て、神佛混淆之儀者御廢止ニ相成候ニ付、別當社僧之輩ハ、還俗之上、神主社人等之稱號ニ相轉シ、神道を以勤仕可仕候、若又無據差支之者、且ハ佛教信仰（マヽ）而已還俗之義不得止之輩ハ、神勤相止立退可申候事、

但シ

還俗之者僧位僧官返上ハ勿論之上、官位之儀追而御沙汰可有之候間、當分之處、衣服ハ風折烏帽子ニ浄衣白差貫著用勤仕可致候事、

一、是迄神職相勤居候者モ、席順義、夫々相伺可申候、其節御取調御沙汰可有之候事、

佐渡國裁判所總督

閏四月

滋野井侍從殿

右閏四月十八日京都出書狀之寫し、

急廻章

佐々木　采殿

小嶋修理之進

大福院始

今般一同還俗ニ付、聖護院宮樣御直末之者共丈ケ、御本寺へ對し、姓名御差許奉悲願

候處、御備與を以、御開濟ニ相成、右ニ付昨十日御請書調印仕候、各々御承知可被成候、
就而者早急姓名取調へ、石田村御役所へ可差出旨被仰出候間、各々姓名取調へ之上、
來ル十三日四ツ時、先千手院方迄各出席可成（被脱カ）候、以上、

先大寶院事
佐々木　雲殿ゟ

先千手院事
小嶋修理之進

辰十二月十一日

先大福院
先教學院
先法教院
先常學院
先正詩院
先觀音院ニ代
先宗學院

右早々順達、止りより御返上可被成候、

○辰十二月十一日御改扣　前法教院所持

一まんちう佛具　壹面

内鈴者古鈴唐金也

一半鐘　壹口　拾壹貫八百目

一磬　壹口

一小磬　壹口

一錫杖　大壹振

一まんちう鈴　壹ッ

〆六品、五品壹貫三百六拾目

合拾參貫百六拾目

御改役　西川義一

御請書

本山方修驗六拾八ヶ院之者共儀、京都本山表ゟ達書も有之候ニ付、右書類奉差上、一同身命取繫相成候樣、御賢慮之程奉願候處、右本山表ゟ之達書者、當四月中之義ニ而、

其後太政官ゟ夫々御沙汰之次第も有之候間、右之書類を以、願之向ヘ難被及御沙汰候間、一同還俗、世俗同樣農業養蠶可相勵、尤明春ニ至り、取續き之義ハ御沙汰之次第も有之候間、其段可相心得旨被仰渡、一同承知奉畏候、仍而御受書差上申所如件、

明治元年辰年十二月八日

六十八ヶ院惣代

威德院

大寶院

定光院

聽訟方

御役所

乍恐書付を以御願奉申上候

本山方修驗六十八ヶ院之者共、今般一同還俗農業養蠶之働入精可相勤趣、壹人も違背之もの無御座候、右之内貳十九院之、是迄聖護院宮御直末ニ御座候間、御直末之廉を以、御本寺へ對し、姓名御差許被仰付被下置候樣奉願上候、右願之通り、御憐愍を以、御聞濟之程幾重ニも奉仰候、以上、

明治元年辰十二月

聖護院宮樣

先御直末廿九ヶ院惣代

川原田鹽屋町

先千手院

快有

同

後山村

先大寶院

快光

先年香製表頭
當平村
先定光院
敬官

御奉行所

差上申御請一札之事

一惠　一紡　一晧

右之三字

御諱ニ付名字等も御用申間敷、且刻本等ニて、圖盡可致事、

十二月

一御除地之儀者、村並斗代を以、當辰ゟ御年貢上納之事、

一寺社ニ而檢地御年貢納來り候地所并書附之田畑共、其社寺並ニ本寺ニ而所持不相成候、尤退寺歸農之上願出候ハヽ、取調へ之上所持可申付候事、

一社寺取壞ち候屋敷跡等ハ、田畑ニ爲切開、來巳ニ至り、檢地御高入之積り、尤墓所丈

ヶハ爲除候事、

一社寺之内檢地受候地所并堂塔取拂跡も、其住職之もの、歸農改名之故、右場所開作いたし度願之もの可申付、尤取拂跡之義ハ、夫々檢地請可致事、

但、歸農いたし候上ハ、舊來地附之田畑并百性(姓)持地を質流地ニ是迄請取置候分、其儘開作可致、寄附地之儀も、且家引渡之本寺ニ而、進退可致事、

一社人之義、以來神道祭爲相用、是迄之菩提寺ハ、離檀可致候事、

但、當國之儀、古學ニ開ヶ兼候ニ付、葬祭式之儀等も、先吉田家之規矩ニ爲隨可申事、

右之通り御取極相成候段、被仰渡、承知奉畏候、依之御請證文差上申處如件、

年月　寺々

御代官所

乍恐書付を以御屆奉申上候

今般聽訟方御役所ゟ、別紙之通り御願奉申上候處、御聞濟被下置候ニ付、姓名書上之通、書付を以此段御屆ヶ奉申上候、以上、

明治元年辰十二月

御直末廿九ヶ院内
相川六右衛門
元教學院義立事
宮城　勘吉
同一丁目
元大福院昌善事
小篠善之助
大間町
元正善院通賢事
大野森之助
大工町
元常學院長見事
織田　右京
同
元法教院齊賢事

〃　森　（二カ）精印

御代官所

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

乍恐書付を以奉申上候

本山方修驗六十八ヶ院惣代之もの奉申上候、今般被仰渡御主意之趣、法中一同逸々承知奉畏候、早速御請可申上筈之處、不覺悟ニて是迄延引仕候段、何とも奉恐入候、此段御憐愍を以御用捨被下置候樣奉願候、尤此度京都御本山表ゟ御達書も到來仕候間、右御賢覽ニ奉入候、然ル上者、御主意之趣、速ニ御請奉申上候、以後一同身命取繋キ被下置候樣奉仰候、依而乍恐此段奉申上候、以上、

本山方修驗六十八ヶ院惣代

明治元年辰十二月

川原田鹽屋町

千手院

快宥印

下矢馳村

梅本院　快廣印

武井村　威德院　快永印

相川　法敎院　靑賢印

畑方村　万福院　快光印

後山村　大寶院　快光印

年番寶號類

當野平村
定光院
教官印

御奉行所

右通り、十二月四日京都ゟ御下し候御狀相添、石田村御役所へ差上申候、

乍恐書付を以御届奉申上候

昨四日石田村御役所へ別紙之通り差上申候間、此段御届奉申上候、以上、

明治元年辰十二月　法教院
齊賢印

御代官所

右之通り、五日御代官所へ差上申候處、法服法器之廢し方可申出旨、被仰渡候付、
二三日日延相願申候、

乍恐書付を以御願奉申上候

作爲御末派本山方修驗六十八ヶ院惣代之もの奉申上候、前宣旨ヶ條之通り、今般御
一新ニ付、御主意之趣被仰出、依之本當南山共、御請仕候義ニ而、壹ヶ院も不殘皆々歸
俗仕候、右等之御主意ニ候へ者、少も宗派立行不申、此義者銘々共、如何ともを為ゐら
ほ、素ゟ貧賤難澁之族ニ而當惑仕候、左驗り今日之活計ニ可具手段無之候、併明春ニ
至り候へ者、身命取繋方之手段も可有之との御主意被仰出候、先此儀者兼有思召
と奉存候、扱又除宗門之義者、其筋〳〵ニ而、門末者本寺へ一統ニいきし、其方一代
ハ宗法是迄之通り相立申候、自國一本寺之義者、其講中並信徒ハ、其住御立置ニ相成
候、中ニハ門末与いへとも、多末之方者、其向觸頭申立候得者、門末之内守立候寺々貳
三ヶ寺も御居置、小寺之者ハ重立候方へ御預義ニ御座候、其宗派ニおゐてハ、壹ヶ院
も相立不申、一同歸俗被仰付、右ニ付、何者も院内ニ母妻子等ニ被歡、誠ニ以恐惶之義
罷成、以、實營も今日活計難儀當惑仕候、此段年罷御營奉之保護願上候、若御本寺之
爲無誰を以修驗道相立候様御取計被下置候ハヽ、一同之もの如何計歡喜ニ御威光
故と難有可奉存候、何卒御仁惠を以、我宗派相立候様、御滿ニも奉願上候、依之此段御
願奉申上候、以上、
一國本貳院中之儀、諸願等ニ、聖護院宮御直末与相認メ奉差上候義ハ、猶之虎之處ニ

かるとやら申喩も有之候ニ付、御直末ゟ奉申上候、依之直院中之者、苗字御免之儀奉願上候處、則御免有之、誠ニ御尊名之御威光を難有仕合奉存候也、

一、銘々共、本尊前飾り付之佛具、其外折重錫杖等之義ハ、御役所ゟ御出役樣被差遣、逸々ニ取調へ、不殘帳面ニ書記し、其上品之義ハ先々銘々へ暫時之間預ヶ置候間、紛失無之樣、大切ニ可致、追而沙汰ニ可及と被仰渡候也、

一、院々共歸俗被仰渡候ニ就而ハ、是迄頂戴之御補任之儀、如何いたし候而宜敷御座候哉、此段御伺奉申上候、

一、院々共御本寺御尊判附之引導御作法其外諸法諸經或ハ大般若抔致所持族も有之候、是等之類も如何いたして宜敷御座候哉、

一、神社別當之者、法中ニて拾ヶ院餘も御座候處、其內感德院、寶明院、觀行院〆三ヶ院ハ歸俗之上改名いたし、則神職人ニ被仰付候、其外餘院者未タ本領安堵不罷成候、是等之義も區々ニ相成申候、

一、宗法相立行候儀ニ御座候ハヽ、其御趣意被仰下、乍恐態々飛脚御差下し被（下脫カ）候而も不苦候、且又三ヶ院も上京致候而宜敷義も御座候ハヽ、右兩樣當國御役所へ御達書被下置候樣奉願上候、無左候而ハ、惣代之ものをして、上京致度候而も、御奉行所表他

國出御判之義も、何共難計奉存候間、若上京致候而萬難利之節ニ御座候ハヽ、両三人押上京可致旨、御召狀御差[illegible]下置候様奉願上候、尤當國御役所へも、卅三ヶ院御召出之趣御達書不被下候而者、此義迚も何共難被申上候間、是又御願奉申上候、有之趣御賢察被成下、何卒御仁惠之程奉仰候、第早速御運簡御差下し被置候様、幾重ニも御願奉申上候、以上、

明治元年辰十二月

佐州御末派
六十八ヶ院惣代
川原田鹽屋町
千手院
快宥印
國
後山村
大寶院
快光印
年番役

當之平村
定光院
敎官印

住心院殿
御役所

右之通り相認メ、去ル辰十二月十六日差出申候、其節之便り人之義者、京都室町出水上ル典藥寮御醫師中山豐後介家來淸五郎と申もの、主人之御用事ニ付、當門へ渡來之處、御用濟ニて歸京ニ付、右之者へ相賴ミ誂へ申候へ共、未タ御返簡御差下しも無之、途中之滯りニて、今以相屆不申候哉と奉存候間、亦候最前之通り如斯相認メ、別紙歎願書相添、飛脚同樣之便宜を以、御願奉申上候、何卒別紙書面之趣、御慈悲之御了簡、今便之者へ御遣し被下置候樣奉願上候、以上、

明治二巳年二月

住心院殿
御役所

乍恐書付を以奉願上候

往爲御末濟本山方修驗六拾八ヶ院惣代之もの、御歎奉申上候、今般奉差上候通り、調願數願書數ヶ條書壹冊、去十二月十六日相認メ、其節京都室町通り出水上ル中山豐後介宗案清五郎与申もの、當國へ渡來之處、歸京ニ付同人江賴入、歎願書別冊之通り差上候へとも、未タ何之無音信も、御返簡到來も無之、此儀使人之滯りニ而歟、又者如何之御儀ニ御座候哉も難計候故、再應別紙手續書相添、御歎奉申上候、去冬法中一同歸俗被仰渡候ニ付、先前方之職業者不被相勤、素方無緣困窮之院々共ニ其得と、當日之暮し方、何を以可其手段無之、既ニ去冬歸俗被仰付候節方、至于今無職居宜ニ候得者、元來貧窮之もの共故、最早活死いたし候計り之者も多く有之、別頒ニ御座候通り、其節之思召ニも、素者ニ不至も、一同身命取續方御沙汰之次第も可有之与之義ニ付、一同之上の誠ニ難有仕合ニ奉存、其上早春方、右之御沙汰も有之歟と、日々相待居候へ共、未タ何之御沙汰も無之、誠ニ以此義迚茂待遣ニ奉存居候、殊ニ何をも院内老母妻子等ニ至る迄、日を泣暮し、是迄之處修驗職之父母妻子ニ御座候得者、猶以旅末ニ及我以前者、從之、先代ゟまるもと職業ニ相帷有候義故、惧處もなく職前修行專一ニいたし、數百年來之間、有本寺御本尊之御影を蒙り、是迄者安心仕居候處、今般ニ一

同還俗被仰渡、是迄之職分ニ相放レ、何れも幼少之時ゟ、修驗道專一ニ修行いたし來り候故、外ニ家業ニ可相成儀等覺へ候ものも無之候得者、只今俄ニ何を以職業ニ可有附手段無之、既ニ上氣狂亂いたし候ものも有之、種々難儀至極之程者、難盡紙上ニ、有之段々乍恐御賢察被成下、何卒御本山之御威光を以、是迄之通り修驗道立行候樣奉願上候、依而惣代として、兩三ケ院も上京いたし、其上ニて御歎申上度奉存候ニ付、當春ニ至り、法中一同集會之上、惣代として、三ケ院上京之積り取究メ罷有候、其外除宗門ニ而も、夫々御本寺へ御伺ひ之旨ニ而、當國御役所表へ他國出御判願出候寺々も御座候へ共、一切上京之向ニ而も、出御判御聞濟無之、右ニ付諸宗一同、右之振合ニ御座候へ者、上京致度候而も不及是悲(非)ニ、誠ニ難儀當惑仕候折節、今度相川羽田町廻船人高野彦助と申もの、敦賀湊迄(商脱カ)賣用ニ參り候ニ付、態々之飛脚同樣ニ相頼ミ、便宜を以再願奉申上候、何卒右之者へ、我宗派立行候樣、御道筋被下置度奉願上候、若又惣代之もの兩三人も上京仕候而、都合宜敷義も御座候ハヽ、當國御役所へ差向御召狀御遣し不被下候而者、中々以自分共之願ニ而者、此節參謀役奧平謙助樣と申もの御在役ニ而、決而他國出御判御差留有之樣子ニ候間、此段御念之ため、奉申上候、若又上京不仕候共、御本山之御慈悲を以、宗派御立置被下候儀ニも御座候ハヽ、尚又一同如

何卒も帳簿有仕合ニ可奉存候間、此段太政官様へ御申立被下、其上太政官ゟ當國御役所へ差向、[illegible]殿簡御附可下置[illegible]候様、御取計之程幾重ニも奉願上候、右様ニ無之候而者、何分も御本寺ゟ之御達書而已ニてハ、右參謀方ニて諸事御採用無之樣子ニ御座候、万々一御本寺之御達書而已ニて、當國御役所ニおゐて御取上無御座候而者、其甲斐もなく、其外寺々共ニおゐても、猶又迷惑仕候間、是又御念之ため奉申上候、何分ニも宜敷御取計ひ之上、宗領相立置候樣、幾重ニも御憐愍之御沙汰ニ仰候、依之惣代之もの書付ヲ以再應御歎奉申上候、以上、

佐州御末派

六十八ヶ院惣代

相川壹丁目

大聖院

昌善

明治二年巳二月

同断

同大工町

法教院

同断
齊賢
川原田鹽屋町
千手院
快宥
同断
後山村
大寶院
快光
去辰年番役
當之平村
定光院
教官
住心院殿
御役所

年番下札ヲ以寺中上候

本文申上候通り、去十二月中、一同還俗被仰渡候ニ付、年番頭と申名目無之、右ニ付去辰年年番役定光院加印ニ而、御願奉申上候、此段左様御聞届被下候様奉願上候、去冬差出候書面未タ不相届候ハヽ、乍恐本文ニ御座候名前、其節之使人方へ御尋被下度候、是又御願奉申上候、今便之義も、極々急便之事故、取急キ候ニ當而何をも狂乱同様之始末ニ御座候故、文面之儀も不取調、混乱仕候儀者、御用捨偏ニ奉願上候、

一大寶院儀者、急便ニ付、道路不弁利ニ候故、千手院ニ而代印仕差上申候、以上、

巳二月十七日

為年頭之賀儀芳札相達令披見候、於京地御室内御静謐御超歳之御事候、大ニ為者共無異ニ加年候、其元御無異加壽之由、目出度存候、為御祝詞紙面之趣、聞及披露候間、此節如斯候、不具、

三月十三日

[illegible]

内藤兵部法橋

玄順（花押）

小嶋紀伊法橋
　春知（花押）
小嶋治部法眼
　春道（花押）

相川
　大福院

三月廿九日到來扣

再白、拙者とも別紙悦詞被申越、被入念候段忝存候、年賀儀一紙及返書候、將又舊冬已來狂惑之次第、巨細被申出候通、令承知候處、今以確定之返答難相成候間、別紙惣代連名を以申入候通、宜承引可有之候、早々以上、

年甫之賀儀旁細書到來、令披見候、彌御無異珍重存候、然ハ舊冬已來變革狂惑之次第、巨細被申定候通り、令承知候處、今以確定之返答難申入、則別紙惣代衆之返書差出候通り承知可有之候、呉々修驗道御廢止ハ無之候間、今暫安心ニて相見合可被居候、早々不具、

小嶋治部法眼

春道（花押）

三月

川原田

千手院

舊冬中山實泰歸國ニ付、被差登候歎願書帳面壹冊并書状とも、慥ニ相届早速披見候處、六十八ヶ院不殘農民ニ復帰被申付、法中一同狂惑之旨驚入、早速森御殿に差出し候處、則其段太政官に御申立有之、御歎願有之候處、其儘御落手ニ相成、其後御承知之御返答無之候間、春來度々伺出候得共、此節太政官到而御多繁之折柄故、今以何とも御沙汰無之候間、此方ゟ返事不致候所、今度高野彦助出京ニ付、為再願去年之歎願書再度被差出、委細書中之趣悉承知、一同難澁之段尤察入事ニ候、然處早春ニ至り、佐渡國知縣事御役所御廢止ニ相成候旨、官府日誌ニ御書出ニ成、御觸流しも有之候間、其內ニ者向後御確定之御沙汰を以、太政官ゟ御返答も可有之候間、夫迄之所ハ、此方ゟ何等之義も難申入候、尤修驗道之義、何國迄も御廢止ハ無之、在來の通無相違相續相叶候間、各安心ニ而差扣可罷在候、

此段飛脚彥助にも口上ニ能々爲申聞候間、承知可有之候、御用多ニ付當用返書如此候、以上、

住心院殿

巳三月　役所印

佐州六十八ヶ院

惣代

大福院

法教院

千手院

大寶院

定光院

公用急觸　寺社年寄役

神佛混淆不致樣御沙汰之向も有之候ニ付、是迄寺院僧職等ニ而別當いたし來候分、奉仕する所、彌正神ニ候得者、權現號等者相改、神名を稱し、社人相立、別當者廢し候事、

右之趣者出候條、觸へ之上来ル廿九日迄可申出もの也、

四月廿四日　　　　聽訟方役所

右之趣被仰出候間、各其旨相心得、右ニ心ある仁者、定日迄可被罷出儀ニ付、別當舞禰子又ハ地内鎮守たりとも、右上等有之雖者、来ル廿八日正四ツ時迄ニ印形持參出席ニて爲申合之上、願上候而可然与存候間、思入有之陸ニも、定日刻限迄ニ川原田元千手院まて無間違出席可被成候、以上、

巳四月廿五日　　　　寺社番

九ツ時出　　　　元寳光院

達書

佐州御末下中

壬申卯一箇ニ付而も、

神佛混淆之儀、御改正ニ付、宮社守護之僧侶者悉復飾歸俗被仰出候義、全而御趣意之通りニ候得共、就ま諸願道御廃止者無之候間、修行寺院之住職者、是迄之通相替ル儀者

無之、宮社ニおゐても、院内之鎮守小社等ニ至而者、御構ひも無之、無據分者、父子ニ而
神職修驗別職兩立之場所も有之事ニ候處、諸國之御政務都而府藩縣之差配ニ付、一
流内區々ニ相成候間、御一新之譯を以、向後諸國修驗一同之紀則
御確定之
御沙汰被成下度、且自身引導規則之儀も、法式通り改正之義御達被成下度旨、尤辰年
冬太政官に嚴重之御願伺書被差上候處、書面者御預り之儘、其後御下知無之候ニ付、
猶又當年三月
東京府に
御迁幸之節を以、御再願も有之候間、其内不遠、右之御下知必定被
仰出候間、其節早速否哉御確定之趣可申達候、夫迄之儀者、何等之義も一切難取計候
條、此段各相辨居、心得違無之樣、宜傳達可有之候、以上、

住心院殿

巳六月　役所印

佐渡國御末下六十八ヶ院

去辰年番

宝光院

惣代　千手院

同　大寶院

名字御免之儀御尋ニ付、明治二巳年十月十六日申出文面左之通り、

御調ニ付書付を以奉申上候

私共儀ハ、元本山方修驗ニ而、法中六拾八ヶ院御座候處、今般御一新ニ付、去辰年十二月一同還俗被 仰渡、然處其内私共貮拾九ヶ院之儀ハ、 聖護院宮御直末ニ御座候得者、其廉ニ對し、姓名御差許被下置候儀ニ御座候、右者今般御取調ニ付、連名書付を以奉申上候、以上、

明治二巳年十月　金丸村

歡性院始

相川

聽訟方
御役所

常學院

終

乍恐書付を以奉歎願上候

元本山方修驗六十八ヶ院惣代之もの御歎奉申上候、私共元法中いつれも無餘困窮
之族ニ而、表(奉カ)ゟ修驗道修行專一ニ相營ミ罷在候所、今般　御一新御主意ニ而、一同還
俗被　仰付、去冬以來難儀至極仕候、然ル處當六月中、從本山表御達書到來、修驗有(道カ)御
廢止無之、御法式之儀ハ、追而從　太政官御確定御下知次第可申達、先夫迄之處、安心
之旨ニて、相愼ミ可罷在旨被　仰越候、併前文申上候通、いつれも無餘困窮之者共故、
何を以今日之活計可養手段無之、既ニ渇命之場ニ及候樣之者も有之、誠ニ以當惑難
澁仕候間、乍恐御歎奉申上候、何卒出格之御儀を以、本山修驗道是迄、之通り、被　仰付
被下置候樣奉願上候、然ル上者、追而從　太政官御確定御下知被　仰出候上者、譬如
何樣之義ニ相成候共、少も違背申間敷候、尤先前之通り、年番袈裟頭被相立、御上表御
用辨ハ不及申上、一派法中不行席(跡カ)無之樣、爲申合、急度取締仕可申候間、先夫迄之處一
同難澁之者共、露命爲取繫候と被爲上思召、暫クニ而も御開濟被　仰付下置候樣偏

慈悲之御捨本仰候、依之元法中惣代之もの連印を以、此段御願奉申上候、以上、

右惣代願主

當之平村

元定光院事

金光定之助

川原田籠屋町

元千手院事

小泉　左京

相川大工町

元法敎院事

森　精一

明治二巳年十月

慈訴方

御役所

建言　佐州御末下中

本山修驗之內、朱印地除地舊襲連綿之別當社僧之輩者、斷然復飾可有之、領主附屬村方鎭守譜代附屬之小社守護者、別當とて次第も達候儀、且修驗一途相續之者、其職務祈願武技等可令勉勵、卽今時勢之動搖ニ泥ミ、無謂變職復飾有之輩者、兼而御布告之表ニ相振レ候間、急度復本可有之事、

一、修驗道作法、諸加持、地鎭、荒神供、屬星供、日月供幷古考等を從前之通執行、且自身葬祭之儀者、一派之宗則ニ候間、院內眷屬迄可執行事、

右事件之次第者、箇條書を以、兼而

朝廷ゟ被伺置、則書類悉御落掌之處、

大政御多端ニ付、今以御確定之御沙汰御延引ニ付、差向一派一同ゟ難及觸達、然ルニ月日相過候內ニハ、心得違之者有之哉ニ相聞候間、此段申通置候、何分何中之儀ニ付、前條之筋ニ拘り、神職方とり方今之形勢ニ托(カコツ)ケ、無謂一派之職務相妨、他宗方々自然異論ヶ間敷義等有之候ハヽ、早速其國々知縣事ゟ此次第申立、不遠御確定御沙汰被

仰出候節迄、今暫猶豫之義願出、必以卒忽之執計ひ不可有之者也、

法務

巳八月　御役所

佐渡國長年譜

定光院

同本山一派

修驗中

文面右之通りニ而再達、巳九月合二通、右二通共上書大福院名前、

七月十五日之襲章、九月十七日平井嶋と申人持參ニて、早速開封令披見候、秋冷之節彌御無異之由、珍重存候、然ハ毎度被申登候通り、其國元御政務之次第、修驗道御廢止ニも可被及之趣歎入候間、去辰年十一月中ゟ、

太政官ㇸ達而申立之趣、數願書御落手之處、今以其御返答無之、甚當惑候間、右御返答無之内ニ心得違いさし、變革之らの有之候てハ、不相濟候故、則新規御取建之法務御役所ゟ之御達書、先便兩度も差下し置候、今以不相屆候哉、度々同願之歎願被申登、令迷惑候、右御歎願之次第者、本山方計ニてハ無之、當山派へも同樣之事ニ而、本當両山修驗道御廢止ハ決而無之事ニ候、然ル處當年之宗旨人別帳等、農民一同ニ書出し候樣との御達方ハ、

太政官之御布告こも相背候事故、此儀者堅く御斷被申立、偏こ此上
本寺ゟ御達有之候節迄ハ、從前之通、宗門人別帳無相違取計可有之候、万一其儀不相
叶候節者、當年之宗門帳ハ御猶豫御延引可被願立候、尤
上ゟ之御下知御違背申儀ハ不相成候得共、何分本寺ゟ
朝廷へ伺中之儀こて、未何とも不相分候内こそ、乍恐御請難仕旨急度被申立可然存
候、右者
本山當山同樣之義こて、我意のミ申立候譯こてハ決而無之段、いつこ迄も可被申立
候、依之猶又別紙法務御役所之達書差下し申候、各院一同難澁之儀ハ、千萬察居候得
共、此外に可申達譯も無之候間、深厚此段承知可有之候、仍而卽報如此候、以上、

九月十八日　　小嶋空花院

春道

相川

大福院

〰〰〰〰〰〰

追而封中菓儀金壹朱到來甚痛入存候、遠路度々之書通、彼是失却、氣之毒こ存候間、返

却可申之處、左候てハ此方疎意ニ可被存候故、其譯ニ忝(儘カ)令收納候、吉田李ヘ之書狀相達、則受書差送候、何分本文之次第、能々被辨、此上本寺ゟ之御沙汰次第分明可相成候修驗道之義、日本國中御廢止候義ハ無之候事、安心可有之候事、

追而申入候、

禁帝(延)樣者、當年御越年被遊、先兩三年者御還幸も不爲在候よし內々承り、京中甚淋敷、方々恐惑申事ニ候、內々寺被申越候間、此段申入候事、此書狀夜中燈下ニて相認候間、麁略之段推見賴入事ニ候也、

佐渡縣

戶籍掛

□□□元大福院始

當巳年ゟ宗門人別帳今以不差出、調方差支候間、至急取調來ル十三日迄急度可差出候也、

巳十一月十日　戶籍掛

佐渡縣

太政官之御布告ニも相背候事故、此儀者堅く御斷被申立、偏ニ此上
本寺ゟ御達有之候節迄ハ、從前之通、宗門人別帳無相違取計可有之候、万一其儀不相
叶候節者、當年之宗門帳ハ御猶豫御延引可被願立候、尤
上ゟ之御下知御違背申儀ハ不相成候得共、何分本寺ゟ
朝廷に伺中之儀ニて、未何とも不相分候内ニ而、乍恐御請難仕旨急度被申立可然存
候、右者
本山當山同樣之義ニて、我意のミ申立候譯ニてハ決而無之段、いつこ迄も可被申立
候、依之猶又別紙法務御役所之達書差下し申候、各院一同難澁之儀ハ、千萬察居候得
共、此外に可申達譯も無之候間、深厚此段承知可有之候、仍而卽報如此候、以上、

九月十八日　　小嶋空花院

春道

相川

大福院

追而封中菓儀金壹朱到來甚痛入存候、遠路度々之書通、彼是失却、氣之毒ニ存候間、返

歸可申之處、左候てハ此方疎意ニ可被存候故、其譯(儘カ)ニ乍令收納候、吉田杢へ之書狀相達、則受書差送候、何分本文之次第、能々被辨、此上本寺ゟ之御沙汰次第分明可相成候、修驗道之義、日本國中御廢止候義ハ無之候事、安心可有之候事、

追而申入候、

禁(廷)帝樣者、當年御越年被遊、先爾三年者御遷幸も不爲在候よし內々承り、京中甚淋敷、方々恐惑申事ニ候、內々尋被申越候間、此段申入候事、此書狀夜中燈下ニて相認候間、麁略之段推見有之事ニ候也、

佐渡縣
戸籍掛
□□□元大福院始

當巳年ゟ宗門人別帳今以不差出、調方差支候間、至急取調來ル十三日迄急度可差出候也、

巳十一月十日　戸籍掛

佐渡縣

元大福院
同西善院
同教學院
同常學院
同法教院

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

乍恐書付を以奉願上候

本山方修驗豐田村圓壽院、本覺院奉申上候、拙僧共自身引導之儀ニ付、元菩提寺同村大光寺ゟ離旦之儀示談を遂ケ、去々巳年其段御屆之上、俗人家内ハ同寺旦那、其餘者自身引導宗門帳上納仕候處、去午年に至り、大光寺本寺蓮花峯寺申付ケ向有之、同年宗門印形致兼候趣、大光寺申斷、當年之儀も同樣、既昨年中度々大光寺へ御利解奉願上候處、御取用ひ無御座、乍去一旦離旦證札をも取置、御役所表事濟之上、俗人之外ハ自身引導宗門帳上納仕候義之所、元通り可立戻樣も無御座、無據猶懸合中、大光寺落印ニ而、宗門帳差上、昨今兩年御差延奉願上候處、今般宗門帳御掛り樣方、御沙汰御座候へ共、何分右之始末ニ而埒明不申、不得止事、宗掟之通、院內不殘直引導ニ仕度、今般

御願奉申上候處、右一件去午五月中願出之節、大光寺示談之義者格別、於御役所ニ被及御沙汰ニ筋無之旨、被仰渡、御書面御下之上、此段其節御請一札をも差上、又候右趣願出候儀、心得違ひ之旨、御糺之趣奉承知候而ハ、今般御願申上候段、恐多奉存候へ共、御當國修驗遠國波濤を隔、いつ迄も無縁貧窮之者共、殊天台宗聖護院宮樣年々御末派ニ、先前住職之上、無縁貧苦ニ迫、都度々々御本山表へも罷出不申、依之御宗族都而不辨ニ而、自國眞言宗寺院之引導を受來候處、先年御本山役僧巡行之節、俗家同樣之始末及聞、以之外之儀、早々宗掟之通り、自身引導之儀ニ改替可申、院内俗人ハ不辨とも、僧侶之身分他宗之引導を受候儀、本山へハ勿論、奉對　御公儀表に、恐入候次第ニ付、菩提寺と致候寺院へ遂示談、御本山宗掟ニ相叶候樣可仕旨申渡有之、依之銘々右無據始末申談、遂離旦、乍恐御役所表迄御聞濟ニ相成候處、蓮花峯寺於末寺ニハ決而離旦不相成趣申出候由ニ候得共、同寺存意難心得奉存候儀ハ、既ニ同寺末頭大久保村眞福寺末大聖寺旦那ニ相成來候ハ、本山方修驗同村大行院、後山村大寶院とも近來前段之始末遂示談、及離旦ニ、當時自身引導ニ罷成居候處、右兩院ニハ不拘、拙院共兩院へ而已故障申懸り候儀、難心得、眞言宗檀林國分寺弘仁寺末ニも、本山方修驗旦家有之候得共、宗旨違ひ之儀とも勘辨之上、いつ迄も離旦いふし異候儀ニ而、於拙

僧共ニ、同宗門ニ御座候へハ、内々いつきとも對談之向可有之哉ニ候へとも、宗旨違ひニ而、是迄之趣眞言宗之葬を受候義ニ而ハ、後々於本山ニ、いろ樣之論議ニ可及哉、其砌拙僧共銘々も被召出候樣成行候而ハ、無祿之院跡忽相潰候儀、誠心極々難儀之次第ニ付、恐をも不相辨御願申上候儀ニ而、仝大光寺相手取、先對談及違變候始末、日安を以御糺明御願申上度奉存候へ共、御時節柄奉對御上恐入、且ハ困窮之兩院、雜費を始、僧行之身分澁難事申出候段、御賢慮之程重々恐多、差扣候へ共、去午八月中、本山方之達書も有之、旁以當惑仕候ニ付、右達書ニ隨ひ、江戸表役寺へ罷出候共、今一應本山表へ罷出相伺、其上江戸役寺へ罷越候共、いつきも宗旨違ひ之引導受候儀、聢と決し兼、當惑仕候間、何卒出格之御憐愍を以、右之段々御憐察之上、拙僧共兩人本山表へ前段之譯柄篤と相伺決心仕度、左も無御座候半而ハ、前文之通、宗旨違ひ之御作法等、更ニ不相辨、往々之處難計極難儀相迫候間、何分本山表伺候迄、兩院宗門帳落印之儘、御差置被下置候樣、幾重ニも御仁恵奉願上候、然上ハ早速御願申上、彼表へ罷登可申候間、此段御慈察之上、愚昧之僧とも、是迄不行屆儀とも御糺御容免之上、右之段御調濟奉願上候、右者御糺ニ付、乍恐書付を以奉願上候、已上、

一去月晦日、井伊掃部殿事御役御免、
當月朔日、久世大和守殿事御老中、
一去月十八日、年號改元、爲萬延之旨被仰出候、
右之趣相觸候間、各承知被(可カ)被成候、以上、

萬延元閏三月　　　　　年番万福院代

此觸四月十九日朝五ッ時教學院ゟ請取、同刻常學院へ相送ル、

乍恐書付を以再應御願申上候

本山方修驗竹田村長善院御願奉申上候、當卯揃院内宗門帳上納ニ付、是迄通り住職人幷妻弟子筋之ものハ修驗道、其外祖母そめ、昨年出生娘かん義ハ眞野村上光院頭判申入候處、同寺他國出ニ付、院代同村大德坊義揃院妻守子鹿嶋相加へ不申候而と、調印致兼候旨、新規之義申之、宗門帳上納ニ差支、無據其段御歎申上候處、同寺御召出、双方示談可致旨御利解被仰聞、難有奉存、則同寺へ調印之義申談候得共、矢張先格ニ振レ候と而已申居合(取繕カ)不申、右ハ揃院先住代十九ヶ年以前、嘉永二酉年修驗夫婦幷弟子筋之者ハ、永々離旦致貫、右以來十八ヶ年無故障濟來候義、眼前之的證と奉存、勿

論是迄妻等之頭判申受候義無御座候ニ付、其段色々申談候得共、更ニ取合呉不申、難義當惑仕候付、甚以御賢慮奉恐入候得共、御歎奉申上候、何卒出格之御儀を以、右之段々御慈察被下置、其寺住職之者、昨年まて年來無故障調印致來候義、厚く勘辨之故、當年ニ限り院代ニ而右樣不差綺候樣、御利解被仰聞被下置候樣、奉願上候、幾重ニも御仁惠奉仰候、以上、

慶應三卯年四月

願主　長善院
　　　　隆　長

請　大工町
　　法教院
　　　　齊　賢

御奉行所

乍恐書付を以再應奉願上候

竹田村長善院奉申上候、今般拙院ゟ眞野村上光院々代同村大德坊へ懸り、院内宗門帳調印之義ニ付、御願申上、同寺御召出、夫々御利解被仰聞、難有奉存候、然處此節ニ至り、右大德坊義、拙院先住ゟ住職人之外ハ、都而上光院頭判を可受との證札差入有之由申聞候得共、右ハ甚タ不都合之申立と奉存候義ハ、愈前書證札通り之對談ニ候ハ、十九年以前離旦之節ゟ、住職人之外ハ同寺頭判可仕筈ニ候處、昨年迄、拙院所持對談證札御座候故ハ、無故障住職人夫婦弟子筋之者ハ、上光院ニおゐて無子細濟來候義ニ而、上光院ニおゐて何等之ゑか、拙院ゟ住職人限りとの證札取置候義ニ候哉、一向得其意ヲ全候樣奉存、尤右樣之證札等差入候抔申義ハ、先住ゟ申置も無之、此節始而大德坊より承知仕候義ニ而、乍恐同寺幷上光院住職人ニ而、昨年迄聊故障無御座義ニ候處、畢竟他國出留守中院代之大德坊、彼是差縺候義、餘り徒被成心底と奉存、時節柄漢族之混雜、難義當惑仕候間、何卒出格之御儀を以、十九ヶ年以前離旦之節ゟ、昨年迄年々請來候義ニ而、大德坊申立、證札眞僞御賢察之上、同寺義前書僧侶不似合之義不申出、實意ニ立戻り、早速調印致呉候樣、御利解被

竹田村

仰聞被下置候樣奉願上候、幾重ニも御威光奉仰候、依之乍恐此段奉願上候、以上、

慶應三卯年五月

長善院

隆長

差添

大工町

法教院

齋賢

御奉行所

乍恐書付を(以脱カ)奉願上候

本山寺修驗竹田村長善院看主隆長御願奉申上候、當宗之義ハ元來三井流天台宗修驗道之作法を以、自身引導ハ不及申ニ、妻子眷屬俗家之もの迄引導葬祭仕候宗掟ニ御座候處、御當國之義ハ、從來之仕癖ニ泥ミ、一派多分他宗引導受候義如何之旨、度々本山表ゟ達書到來、依之追々菩提所へ示談之上、院內不殘、又ハ其身幷妻弟子等離旦致貰、修驗引導仕、拙院先住官立義も、十九年以前嘉永二酉年菩提所眞野村眞言宗上光院へ對談之上、院內夫婦弟子筋之分も永離旦致貰、依之昨年迄剛母そめ而已同寺

頭判ヲ受、無故障宗門帳上納仕、同年娘かん出生ニ付、當年ハ同人共兩人之頭判同寺住持俊圓出ニ付、院代同村大德坊へ申入候處、檀僧妻守子龜鶴ヲ書入不申候而ハ、一圓調印相成間敷と申之、右ハ先年ゟ對談通り、夫婦弟子筋之分ハ、修驗宗引導之義故障無御座候處、當年ニ限り如何之趣意御座候哉、院代大德坊彼是差拒、色々申談候而も、調印致呉不申、當惑仕候ニ付、甚以奉恐入候得共、宗門帳上納差支ニ付、不得止事御願奉申上候、何卒格別之御憐を以、右大德坊御召出、昨年迄年來無故障調印致候義、右住術法不申義、調印致候處、御糺解被仰聞被下置候樣奉願上候、以上

卯四月

願主

竹田村

長善院右主

隆長

請

法教院

齊賢

乍恐書付を以奉願上候

市中木山方修驗五ヶ院御願奉申上候、拙僧共いつれも無祿困窮ニ而、少々御座候祈願旦家并托鉢修行等を以、取凌來申候、尤諸宗寺院と相違ひ、毎月清須間歩不動堂に一同登山仕、諸金銀山永續繁榮之御祈禱相勤來候ニ付、

御奉行水野藤右衛門御在勤中、壹ヶ院に壹ヶ月ニ五斗宛之別御通ひを以、御拂米買請被仰付被下度段御歎奉申上候所、願通りニ者御繰合無之間、壹ヶ年ニ一ヶ院に五石つゝ買請被仰付、無住地退轉ニも可及院跡、ヶ成ニ立直り、偏ニ御仁惠之御蔭一同難有奉存候所、其後御拂米五石宛之內、貳石五斗御減石被仰付候ニ付、其節種々御歎奉申上候所、暫時之御繰合之趣御利解被仰聞候ニ付、指扣罷在候處、去戌年違作ニ而、在町手詰り、祈願旦家ハ勿論、日々之托鉢施行等も無御座、必至と難義ニ迫り、先年漸御仁慮ニ而立直し候院跡、又候退轉同樣ニも可及樣相成行、別而此節者、店方買米拂底ニ而、銘々院內厄介取凌方無御座、難義至極仕候ニ付、不得止事御歎奉申上候、何卒格別之御憐愍を以、壹ヶ院に貳石つゝ御据立米御拂被仰付被下置候樣奉願上候、尤御代錢之儀者、御下知次第上納可仕候間、一同御救として、右願之通御据立米買請被仰付被下候樣、偏ニ御願奉申上候、以上、

嘉永四亥年　　市中本山方修驗

八月　　正大教法常

御奉行所

御請書寫

本山方修驗之儀、自身引導可取行旨、元祿享保度以來、度々本山京都住心院ゟ申來候處、等閑ニ打過候段、心得違ニ付、向後堅く法式可相守旨、去秋改而達書差越候間、其段本願并處、菩提寺江對談之上、否可申上旨被御渡候ニ付、夫々及掛合候所、修驗六十八ヶ院、菩提寺四十七ヶ寺之內、三ヶ寺ハ得心いたし、殘四十四ヶ寺對談難相調候間、御奉行所ニおゐて御利解被仰聞候歟、又者雖且可致旨御觸流被成下候樣願上候所、一派引導之義、當隱并跡相續可致者ハ、不苦候得共、宗判受來候菩提寺へ示談之上得心無之候而ハ難相成、尤御奉行所ゟ被仰付候筋ニハ無之候間、寺檀納得之分者、一派引導被聞濟候旨被仰渡、奉畏候、仍而御請書如件、

弘化五申年三月六日　　本山方修驗惣代

大工町

法　敎　院

乍恐書付を以奉願上候

本山方修驗法敎院御願奉申上候、來巳四月朔日ゟ同七日迄、日數七日、宗祖神變大菩薩千百五拾遠忌引越爲法要与、天下安全五穀豐饒金銀山繁榮之爲メ、法樂相勤申度奉存候間、何卒右之段御聞濟奉願上候、且又右ニ付、羽田町札之辻ゟ建札差出度奉存候間、被仰付被下置候樣仕度、此段偏奉願上候、以上、

願主當年番袈裟頭
大工町
法　敎　院
請大間町
正　善　院
相川法中惣代
常　學　院

天保十五辰年十二月

御奉行所

乍恐書付を以奉願上候

豐田村本學院、圓壽院兩院義、眞言宗同村大光寺旦那ニ御座候所、修驗之分ハ及離旦、其外院内之ものハ、是迄之通頭判請義ニ及對談、則去巳二月中、修驗ハ離旦狀取之、同年ゟ修驗之外院内之もの宗門帳而已、旦那寺調印請差上候義ニ御座候、然所當年院内宗門帳へ加印申入候所、本寺より差留メニ付、調印いたし兼候旨申斷、夫々及掛合候へ共、何分承引不仕、納方ニ差支候間、右兩院之内之分旦那寺落印ニ而奉差上候間何卒大光寺御呼出、調印可致樣、御利解被成下置候樣、此段偏奉願上候、以上、

安政五午年三月

本山方修驗

豐田村

本學院代彙

同村

圓壽院

快慶

請

大工町
法教院
峯順

御奉行所

此願書同四月六日下ル、

乍恐再應書付を以御歎奉申上候

豐田村本山方修驗本學院、圓壽院奉申上候、拙院共天台宗京都聖護院宮樣御末派之處、遠國無緣貧窮之院跡故、先代之者宗法宗意(をカ)にも不相辨、眞言宗同村大光寺旦那に相成、住持人之者迄、右眞言宗之引導を受來候處、去ル弘化四未年、本山聖護院宮樣ゟ被仰下候儀ハ、修驗道之儀ハ、肉食妻帶之上、重々俗家祈願等之參情(マヽ)を以、當日を相送り候故、自然と俗家之風俗泥、別而佐劦之儀ハ、波濤を隔、小國之儀に付、連々家法を亂し、他宗之引導等を受候儀に成行、以之外心得違に付、賴寺へ申入、天台宗へ復し、宗法之通、自身引導修行可致、尤院内男女俗人之儀者、相對次第、院主二代之僧ハ、天台宗法系を不繼候半而ハ二流に相成、其分に離差置次第に候間、得と相辨、宗意に相叶ひ候

樣可仕旨御申譯有之候ニ付、此段其砌御役所にも申上、眞言宗本寺へ御聲掛とも被下置候段難有奉存、夫々銘々願寺へ有之段願合候處、追々離旦いたし呉候寺院有之、拙院共儀も、大光寺先住代天台眞言二流ニ相成、離壇之旨願合候處、離旦致呉候ニ付、其段去巳年春、御役所へ申上、昨年宗門帳も住持二代之儀ハ、天台宗自身引導、其外院内俗人之儀ハ、是迄通眞言宗大光寺旦那ニ取極、宗門帳差上、當年之儀も同樣ニ御座候處、大光寺當住本寺蓮花峯寺申渡ニ付、先前通り住持人迄眞言宗ニ不相成儀ニ而、宗門帳印形不仕段申斷候ニ付、無據先達而此段御歎申上、大光寺へ御利解奉願候處、其後拙僧共御呼出之上、大光寺當住ゟ離旦狀又候不取置候半而ハ、天台宗自身引導宗門旨取用間敷抔申、前書拙僧とも願書御下ニ相成、何とも當惑仕候ニ付、引退、大光寺へ再應達示談候處、本寺申付向有之候ニ付、承引難致旨申斷、取合不申、左候迚、先住代相對之上離旦いたし、天台宗へ立戻、御本山聖護院宮樣御宗意ニも相叶ひ候樣罷成候處、又候眞言宗へ改宗仕候儀ニ而ハ、二流ニ相成、本山表ゟいか樣申來候哉難計、無餘貧窮之寺院、誠以難儀至極仕候間、不得止事、此段御歎奉申上候、何卒格別之御憐愍を以、院内俗人宗門帳大光寺調印仕候樣、御利解被仰渡被下置候樣奉願上候、乍恐拙院共ニ不斷、是迄通り願寺離旦之上、自身引導天台宗ニ立戻、御法中御回候處、是等へ

も相響、其迄離且いさし候分、不用立儀こ成行候而ハ、本山表へも勿論、法中一同へ對し、難相立、進退當惑仕候間、幾重こも御仁惠奉仰候、依之乍恐再應書付を以御歎奉申上候、以上、

安政五午年五月

豐田村
本山方修驗
本學院
寛敎

同村
願主
圓壽院
快慶

請
大工町
法敎院
孝順

御奉行所

文久二壬戌年五月廿九日、銀津稲荷殿再建御遷宮相勤、

但シ、銀津稲荷屋敷之義、古代より大工町富田九右衛門持所ニ御座候間、對談之故、稲荷屋敷を貰い請、大工町名主啓助殿、次助町中使殿へ、右相斷り、承知之故、銀津山に再建、御遷宮相勤申候、

法敎院

峯　順代

同月同日

大工町

大工三旬　増五郎

一

金貳朱　大工町　富田九右衛門

金壹朱　次助町　彦兵衛

牛窪金溪翁小傳

金溪翁法諱は齊賢、字は子省、金溪は其の號、一に物外老人と號し、峰順房と稱す、法號は驗乘金剛、文政三年八月、佐渡の國武井村玉置家に生る、考、諱は快教、兩院共に本山方修驗にて、聖護院宮に直隷せり、年甫めて十歲、相川町法教院倖榮翁の螟子となる、嘉永三年七月、聖護院宮森御殿に於て、入壇灌頂を受く、阿闍梨二品雄仁法親王御直授あらせらる、同じく七年二月、和州葛城山に於ける夷狄退攘天下太平の御祈禱に參勤し、褒狀を受く、聖護院宮の嚴命に應じて參籠したるなりき、安政六年十月、佐渡奉行岡松伊豫守の歸信を受け、祈攘驗あり、奉行の二子松尾余吉亦微行して加持を受くること數回、此の外奉行の室に詣りて、修法加持し、物を賜はること十數度に及べり、爾後文久三年西丸御留守居に轉ずる迄、每月翁の祈攘を乞へりとぞ、

翁は明治維新、修驗道廢止と共に歸俗して、森精一と更めしが、同じく十年天台宗に歸し、東京淺草寺唯我教正の徒弟となり、明くる年、赤松管長より教導職試補申付けられ、同じく十八年、大椙比叡山座主より權律師に補せらる、

翁修驗道の再興獨立を計り、寢食を忘れて、奔走到らざる所なかりしが、遂に同じく廿六年十二月十二日、恨を呑んで病沒す、年七十、

翁、幼より老ゝに至るまで、修驗道に於ける秘法儀軌の相承に心を勞し、苟くも法儀ゝ精通すと聞けば、遠く山川を跋渉して、其の秘軌を受けたり、是を以て終生東奔西走、其の相傳したる秘法の切紙等頗る多し、大正八年京都帝國大學教授文學博士松本文三郎氏が「日本大藏經」を編纂するや、翁の輯錄せしものを、其の修驗道章疏中に編入されたり、

翁、書を堀口松庵ゝ學びて、能書の譽高く、又梵書に巧みなりき、嘗て祈禱の御札を配布するや、吏人相集りて、其の能筆を嘆稱すといへり、鐘銘一篇其の文藻を見るべし、

翁、壯時精を病みて打臥すこと月餘、其の全快時に、

今迄の罪も報ひもふるひ出し是から愚痴のおこり氣もなし

御一新修驗道御廢しゝ成ける時、

山伏をやめてもしよくの持前に吹々通す朝夕のかい

びく〳〵にうばとく道をうばいとり天龍夜叉がけんを立てたり

嘗て別墅を營みて、靜觀舍といふ、園松奉行の臣荒木四郎が贈りたる岩瀨肥後守の題額より取りたるなり、宜春亭椿顯命じて一瓢舍といひ、記を作りて寄せらる、有田錢谷亦「金澤鶴渕雜記」を著して、

主人金溪翁好讀書、善誹(俳)歌、頃者囑余曰、有此好風景、而未有之記、常憾焉、子其爲我記之、

云々、翁常に風流の君子と文雅の交をむしゝかば、其の寄贈ゝ係る詩歌少からざりしが、今や散逸して傳はるもの稀なり、

風間槐蔭拙稿「先考金溪道士年譜略」に跋して、

先大人日道服烏巾、修法道龕前、有間輙灌花於園、品茗於室、如無他思者、時嫣然拊予背曰、好漢勤學毋倦、成業可必、自力愛重、其言藹如、動感不異承於怙恃、

といへるものは、其の晩年悠々自適の狀を敍したるなり、

大正十五季春月　不肖弘善敬撰

廢寺佛具法器類、四丁目銅錢鑄立場ゟ差出候樣、此間中御觸之趣承知可有之候、然所鑄立場補理中に付、材木町御番所脇木戸內まて請取候間、廢寺の分計り、早々取纒(めカ)ひ、來る十五日より同廿日迄の內、朝五ッ時より八つ時迄に、無間違可差出候、以上、

巳三月　銅錢鑄立掛

彈誓寺　常德寺

玉泉寺　南善院
本典寺　常學院
法然寺　總源寺
蓮光寺　大乘寺

追而一宗限申合、不洩樣いたし度候、

覺

相川法敎院

一唐銅七貫五百拾匁

右請取候、

巳　　　　　　　相川

三月廿二日　　鑄錢所印

此の請取證は七貫五百拾匁とあれど、明治元年十二月御改役西川儀一とあるものに據れば、合計拾叁貫百六拾目とあり、されは吾家の佛具類は、數回に渡りて、鑄錢所へ運搬せしなるべく、此の證書は當時交附されたる中の一葉なるべし、

丹波日吉神社の神佛分離

「丹波日吉神社考」（京畿社寺考所收　岩橋小彌太氏著）

日吉神社(丹波北桑田郡周山村大字矢代)は村内矢代(矢代中)、西矢代(矢代西)、漆谷、淺江四邑の産土の神である。祭神は其の名の示す如く、日吉山王二十一社であつて、他に攝社に月讀尊社一座、末社に山神(大山祇命)一座、大原野神社、水神(罔象女命)各一座、(相殿)戎社、(事代主命)大黑社(大國主命)各一座、(相殿)八幡神社一座、祇園神社一座、天滿神社一座がある。攝社の月讀尊社は、其崇敬特に篤く、本社に亞ぎ、又本社と同じ簀屋の内に鎭座せられ、もと虚空藏大菩薩と稱せられたが、明治初年の神佛分離の令によつて、今の名に改められたものである、

往時本社には、神宮寺があつて、社務は概ね其の別當の經營する所であつた、寺は妙樂寺と稱し、俗に宮寺又は神宮寺と呼ばれ、古老の說によると、もと幕末の頃までは、寺域は本社正殿の西側にあつて、中に本堂、左右に二坊を配置してあつたといふ、本堂には藥師如來の像を安置してゐる、蓋し比叡山に於ける根本中堂を擬したも

のであらう、左側の子坊を東坊といひ、右の方のを西ノ坊といふ、其の跡は萱林と稱せられ、平坦な荒蕪地となつて、今もなほあるが、本堂及び東ノ坊の跡は、其の後開墾せられて田となつた、現在の萱林は東西合せて一段九畝二十四歩あつて、なほ往時の寺域を髣髴せしめてゐる、

此の妙樂寺は、幕末に至つて退轉し、本社參道鳥居内北側なる狹い空地――當時の參道は南方の山麓を通じてゐたので、二度の變遷があつて今日の參道となつた、されば當時參道の北側は、今日よりは遙に廣かつたのである、――に移轉したが、間もなく神佛分離の令によつて、明治七年の頃、遂に破却せられ、神宮寺の遺材は、船井郡廣瀨に、本尊は隣村宇津村に、梵鐘は京都に轉賣せられ、其鐘樓は今村内吉富尋常小學校の井戸屋形となり、其の巨大な井戸屋形としては極めて異樣な構造に、見る人を驚かせてゐる、

又社前を流れてゐる小溪矢代川の對岸山麓に、向坊といふ小字地がある、別段に何等の口碑もないけれども、恐らくもと本村の三昧で、本寺の子坊のあつた所であらう、今なほ墓石が累々としてゐる、

本社の鎮座及び其の後の沿革については、徴すべき資料が散逸して、今では其の詳細を知ることは出來ない、本社の記錄は、往時社僧の保管する所であつて、神宮寺にあり、神佛分離の令せられた時、偶々太政復古、舊物打破の革新的な新思想が、此の山間の村落をも訪れたから、邑人は徹底的な廢佛を企て、玉石共に燬くの結果となり、其の爲めに本社の記錄も亦悉く失はれることゝなつた、併しながら今日僅に殘つてゐる文獻や什器によつて、辛うじて其の往事を察知することが出來る、今その僅に殘つてゐるものは、(中略)

二　隨身像二對四軀

共に室町時代になつた木像であつて、彩色が施されてゐる、內一對には、臀部と脚部との裏面に、左記の墨銘がある、左の隨身には、

奉造立門
守本地光世
音菩薩
右趣者天下泰
平干戈不起福

壽增長者也
長藤二九月吉
願主緣上等達白敬……（以上胴部の裏）
丹州桑田
郡八代村……………（以上臀部の裏）
右の隨身には、
奉造立
門守本地
勢至菩薩
右趣者當庄
除災與樂者也
長藤二九月日
願主釋等達白敬……（以上胴部の裏）
丹州桑田
郡八代鄕……………（以上臀部の裏）

とある、これによつて、本社にもと隨身像を置くべき樓門のあつたことを知るべく、其の樓門の守護として、此の像を寄進したものであらう、其の隨身の本地を觀音勢至としたのは頗る注意すべきである、これは門の左右にある隨身から、如來の脇士を聯想し、三尊佛では阿彌陀如來が一番普通であるから、又直ぐ觀音勢至を聯想したものであらう、別段に深い敎理的の意味がある譯でもなく、又本社の祭神の本地が阿彌陀如來であることを示してゐるのでもあるまいけれども、當時の俗信の一端を知るべき資料として、興味深いものがある、そして施主の土岐等遠は、此の地方に勢力を張つてゐた土岐氏の一族であらう、隣邑宇津鄕に據つて、後年山國の禁裡御料其の他の近鄕を掠略し、織田信長に抵抗した宇津氏の出身も、亦土岐氏であることを思へば、同氏が早くから丹波の一隅に雄視してゐたことが察せられる、當庄といふのは、此の八代鄕を含んでゐる庄園であつて、恐らく神護寺領吉富庄であつたらう、此の等遠が凡下の農夫でなかつたことは言を俟たないが、彼が庄園の除災興樂を祈願してゐる所から見れば、其の庄の地頭か、或は地頭代の樣な位地に居つたものらしく、又一庄の安寧を特に當社に恃むものは、往時本社が庄內の崇敬を鳩めてゐたことが明である、（中略）

大般若經六百卷

此の大般若經は、竪約一尺餘、藍表紙、折本仕立の寫經であるが、其の筆蹟の優秀なのは、實に罕に觀る所であつて、各卷悉く同一人の筆ではないが、概ね時代を同じくし、延喜か、或は晩くも天暦を降らざる頃のものである、其の王朝盛時の古寫である所が、既に頗る貴重である上に、一卷の散逸なく、克く舊を保つてゐるのは、實に稀な類を見ないことである、此の經は、其の書寫の後、屢々修理又は少許の補寫をしてゐる、六百卷の内、數卷の奥書に、其の事を記してゐるが、其の奥書は同時に本經と本社との關係をも語つてゐる、卽ち、

(第四百卷奥書)

寛文十三年癸丑卯月上旬修覆之、

(第八卷奥書)

□□□司源朝臣助孝

卿依□□此所知行　飛鳥宮大般若經奉令修理、

願爲現世當生之悉地成就、

文治三季七月二十三日

……………

天文十二季十二月吉日　別當

慶嚴

法眼

(第三十卷奥書)

此御經根本當所八代村之也、大永年中仁、世木村木住江雖賣渡、其後當所依不成存間々、天文十一年仁買返者也、則富貴(繁)昌也、

天文十六年正月十五日札ヲ書時付置候事、

(第九十六卷々頭(口))

奉加修理飛鳥宮大般若經　□□吉助

(第百三十七卷奥書)

大永五年乙酉十月二十五日修覆之、

(第百四十七卷奥書)

大永五年十月吉日　木住村常住本也、

とある、そして此の六百卷は、二個の經櫃に納められて居つて、其の經櫃の蓋の裏に

も、

丹波桑田郡八代妙樂寺常住□

于時天文十一壬寅年十二月吉日　敬白

と記してある、第八卷の奥書によると、此の經はもと飛鳥宮の大般若經であつたのである、此の奥書は、何故か墨で消してあつて、辛うじて判讀して、なほ第一行の最初の二三字及び第二行の聊依の下の一二字を明にすることが出來ない、第一行の缺字は、多分地名を示してゐる文字であつて、司の上の字は郡字か又は莊字などであらう、たゞ最初の一字は、草冠と木扁とを認めることが出來るが、それだけでは其の地名を充當することは困難である、源助孝は、此の地の郡司か若しくは莊司などであつて、飛鳥宮所在地の領主たる緣によつて、文治三年この大般若經修理の勸進に應じたもので、第九十六の卷首に見えてゐる吉助も、同樣に勸進に應じたものであらう、飛鳥宮といふのは今日では、其の宮又鎭座の地も明にすることが出來ず、其の領主の源助孝といふ人のことについても知ることが出來ない、事によれば、本社がもと飛鳥宮と呼ばれたのではないかと考へられないこともないが、其の奥書を墨で消してある所は、此の經卷が飛鳥宮から他の手に移つた時、新主の爲めに不都合

な文字として削られたものと考へられるから、文治三年の當時に、此經が本社にあつたと速斷することは出來ない、然るに第三十卷の奥書に據るに、大永以前には、既に矢代村にあつたことは明で、此の時故あつて、隣村世木村木作に轉賣せられたのである、第百三十七卷、第百四十七卷の奥書によれば、大永五年十月に、木作に於いて、此の經を修理してゐるから、其の前に矢代村より木作の手に移つたものであらう、其の後矢代村の事情が存ずるまゝならざるにより、買返すことが出來ず、天文十一年に至つて、漸く其の宿志を遂げたのである、經櫃は此の際新調したものであらう、箱書に見えてゐる八代妙樂寺は卽ち本社の神宮寺であつて、第八卷の奥書なる慶嚴法眼は同寺の別當である、

古老の言によると、神佛分離以前、本社の祭禮には、社僧は廣前に於いて、此の大般若經六百卷を轉讀した、本社はまた竈神として、遠近の崇敬が篤く、其の祈禱として、社前で此の經を轉讀し、其の御札は郡内の諸村を始め、遠く南桑及び船井の兩郡まで普及した、其の神札を印刷した版木は、今日まで殘つて居つて、長さ約九寸の板に、

奉轉讀大般若經六百軸家内安全祈所

の十六字を刻し、裏に

般若板禰宜彫之

と書いてある、其の彫刻の年記は明ではない、

以上列擧した僅な而も零細な資料のみでは、本社の沿革を徴するに不十分であるのはいふまでもないが、併ながら、其の往時に於いて、相當に觀るべき規模の宮殿堂舎を具へ、有力なる豪族の崇敬を蒐めてゐたことは推察するに難くはない、

抑も矢代其の他の三邑は、和名抄の郡郷の部に、何等記載する所がないから、平安朝の盛時に於いては、まだ顯著な村落を造つてゐなかつたらしく思はれる、然るに其の時代の末に、高邑宇津郷が源義朝の所領であつて、平治の亂後、これに神吉、八代、熊田、志深、淵部の諸邑を併せて、吉富庄といひ、藤原成親がそれを傳領した、矢代郷の名が、始めて此の時に至つて顯はれたのである、後本庄は後白河法皇の法華堂に寄進せられ、壽永年間源頼朝平氏追討の功により、且つ父義朝の舊領であつたから、庄内寺社領を賞賜せられ、頼朝はそれを再び神護寺に寄せた、神護寺の文覺は、更に法皇に申請して吉富庄一圓の寄進を受けた、爾來矢代其の他の諸邑は、吉富庄内にあつて、久しく神護寺領として、遂に庄園の絶滅に至るまで、改動なく、絶滅後もなほ吉富の庄名は、永く此の地にとゞまつて今日に及んでゐる、

本社の起源は杳として知ることが出來ない、矢代鄕の發達が前記の通りであるから、其の起源が甚しく溯り得るものでないことはいふまでもないが、平安朝時代の末期に於いては、旣に一鄕の產土神が鎭座してあつたことは想像せられる、思ふに本鄕の位置が山間にあつて、鄕民は山林を以て其の主要なる生計の資として居つたらう、本社の祭日の中、春冬の山の口祭が、大祭として重要な位置にあることから思へば、夙くから山神が、同時に一鄕の鎭守として祀られてゐたことがあつたかも知れない、

然し日吉神社の勸請が、本社の社歷に重大な意義を有つものであることはいふまでもない、其の時代及び勸請の事情は、また明確にすることは出來ないが、叡山の鎭守たる山王が、延曆寺の勢力と共に、次第に其の威を增し、長曆三年に二十一社の列に數へられ、各社の位階も年と共に累進し、殊に平安朝の最末期に至つて、世の歸敬を受けること最も篤く、後白河上皇は、京都の東山に新日吉を勸請せられ、平家一族も山王を以て氏神と定める樣になつた、本社に於ける日吉神社勸請の時代も、此の日吉信仰の思想の、天下に汪（橫カ）溢してゐた時に求むべきであらう、そして本社例祭の重要神事なる田樂は、山王二十一社に奉納する意味のものであつて、それが又鎌

倉時代以後のものと見ることが出來ないとすれば、本社の勸請も相當に古い時代に溯り得るであらう、

前揭隨身像の墨銘によつて、本社が吉富庄に於ける崇敬の中心であつたことが知られる、又其の地に勢力を張つてゐた武士の信仰を鳩めてゐたことも明に推測せられる、もとより山間の隘地であつて、廣大な平地に乏しい地方であるから、境域の大は望まれないが、隨身像を置くべき樓門のあつたことから思へば、本社の規模輪奐の觀るべきものがあつたことが偲ばれる、殊に三宇の子坊を有する神宮寺を伴つてゐたのは、本社の神威の宏大なのを察しなければならぬ、又能面、獅子頭、鬼面等の殘つてゐることから、往時の祭禮の盛大なことも察すべきである、

土岐等達が隨身像を寄進したのは、長祿二年であつて、其の頃は應仁以前で、室町時代の地方の擾亂もまだ左程甚しくなかつた時である、然るに大永年間に及び、大般若經六百卷も遂に他村に轉賣しなければならない樣になつた、これは蓋し一亂の後、此の地方の紛擾が其の極に達し、莊園も漸く衰微に赴いたからであらう、其の後邑人の努力によつて此の經卷は再び本主の手に還つたけれども、戰國時代を經、莊園の顚倒するに至つて、本社も亦昔日の盛大を看ることが出來なくなつたこと

と思はれるけれども、徳川時代以降に於いても、なほ多數の攝末社が祀られ、又神宮寺も舊のまゝに、本堂の他に二字の子坊があつた、これを維持し、其の住僧を扶持するだけでも、決して僅少な財力では堪へる所ではない、幕末には神田約二段と宮山二町あつたが、これでは到底社寺の維持には事足りない、必ず更に多少の資財があつたであらう、此の神田は維新の際喪失したが、宮山は國有に編入せられることを恐れて、區有林として今に存してゐる、

本社は、前述の如く吉富庄內の篤き崇敬を受けてゐたから、本社の崇敬者は、單に現在の四邑の住民のみにとゞまらず、隣村宇津村に釣燈爐(籠カ)を寄進した岡本康方の如きがあるのは、以て往時に於ける庄內崇敬の樣子を偲ぶことが出來る、又本社の大般若經轉讀の神札は、郡內はもとより、遠く船井南桑の兩郡の地方に頒布せられ、現在に於いても、郡內宇津、神吉、細野、山國及び船井郡世木、五箇莊等の村民より、篤き歸敬を受けてゐる、以て本社がたゞに四邑の產土社であるばかりでないことを知るべきである、

丹後久美濱縣村々近傍の寺院へ埋葬の件

[太政類典] 第一編第百三十五巻　教法　葬儀僧尼

四年

久美濱縣管内村々近傍ノ寺院ヘ埋葬ヲ許ス、

久美濱縣伺　辨官宛

他村ニ舊來ノ寺院有之候處、遠隔ノ不便利、埋葬ノ冗費等相嵩候難澁ヨリ、居村ノ寺院ヲ以、更ニ檀方ニ致旨、去ル庚午年十月中、管轄内ヨリ申立有之、相糺候所、同宗同派ノ寺院ニテ、故障等申立候者有之候共、詰リ人民ノ自由ヲ妨候申分ニ付、其節縣廳ニ於テ聞置、夫々達置候處、其後ニ至リ、舊寺院ヨリ難澁相唱、本寺相續方ニモ相拘候抔申立候得共、願ニ依テ、神葬祭御聞届モ有之候折柄、同宗同派寺替ノ儀ハ、銘々ノ自由ニ任セ可然、殊ニ前書聞届候ハ、舊參事取扱中ニハ候得共、縣廳書下ケヲ以聞届候趣、即今相動候樣ニテハ、御體裁ニモ拘リ候間、此末本寺本山ヨリ彼是苦〔旦リ〕情申立候共、取上ケ不申心得ニ御座候、右ニテ相振レ候儀ハ無之候哉、此條相伺候也、

四年四月十四日

(朱書)『伺ノ通』

但馬出石藩寺院合併の件

〔太政類典〕第一編第百三十四卷　教法　寺院三

三年

出石藩管内寺院合併處分

智恩院門跡家來願留守官傳達所宛

但馬國

出石藩管轄

昌念寺

高德寺

如來寺

稱名寺（院カ）

心光寺

右ハ五ケ寺昌念寺ヘ合併、高德寺初四ケ寺堂宇廢棄取拂ノ儀、出石藩ヨリ太政官ヘ

伺ノ上、別紙ノ通被申付候ヘ共、同所寺院ノ外宗門ノ僧徒數息仕、全被爲於朝廷廢佛ノ御沙汰ハ不被爲在儀心得違不仕樣、宗門ノ僧徒ヘモ從前說諭申渡、何レモ難有奉感佩罷在候處、今度右樣寺門取拂ニ相成、全廢寺ニハ無御座候ヘ共、同樣ニ相心得、追々右ノ通押移、陰ニ廢佛廢寺可相成ト恐懼及混雜候ニ付、精々教諭仕居候、就中本願寺宗、日蓮宗寺院ハ從前ノ通於藩被建置候趣、何卒右兩宗同樣御仁恤ヲ以、右五ケ寺共在來ノ通被建置被下候ハヽ、宗門ノ僧徒ハ勿論、於當門跡モ如何計可奉感佩候、此段只管奉歎願候、仍テ五ケ寺ヨリ差出候書面相添、奉願候、以上、三年[illegible]三月十八日

留守官ヘ達辨官

先般寺院合併ノ儀ニ付、智恩院ヨリ差出候書面幷御添書ノ趣モ有之候間、出石藩ヘ相尋候處、別紙ノ通申出候、趣意柄如何ニモ尤モノ儀ニ付、右ノ旨ヲ以御說諭御差戻シ可有之、依之紙面三通御返却、此段申入候也、三年五月十八日

出石藩公用人上申辨官傳達所宛

寺院合併ノ儀ハ、兼テ奉伺候通、故障無之候ハヽ不苦趣蒙　御沙汰候ニ付、於合併ノ儀ニハ、藩治幷宗門ニ於テ故障ノ筋無之、又民情ニモ差障リ無之ニ付、先以別紙ノ通小院貧寺ノ分合併申付、最一向宗ノ儀ハ取調追々合併可申付取計ノ儀ニ御座候、然

ルニ猶豫願等差出候者有之候ヘ共、右聞届居候ヘハ銘々勝手申出、時日遷延時機ヲ失、變革モ難仕、合併ノ儀ハ窮民ノ一害ヲ除キ、堂塔無用ノ冗費ヲ省キ、下民ノ爲筋ト存込候ニ付、右ノ通取計候儀ニ御座候、御尋ニ付此段奉申上候、以上、月日欠

出石藩公用人上申

禪宗　頂成寺
　　　正眼寺
　　　勝福寺

右宗鏡寺へ合併仕申候、

禪宗　誓願寺

右見性寺へ合併仕申候、

淨土宗　如來寺
　　　　高德寺
　　　　稱名寺
　　　　心光院

右昌念寺へ合併仕申候、

法華宗　　　　　　　　　　　　　　　　堂重院

右本高寺ヘ合併仕申候、

眞言宗　　　　　　　　　　　　　　西林寺

　　　　　　　　　　　　　　　　　智明院

右志明院ヘ合併仕申候、

右ノ通合併申付候、以上、五月

昌念寺願伺其後可處

如來寺

高德寺

稱名寺（心光寺觸リ一）

右四ヶ寺共御直末ニ御座候處、今般被仰出候合寺ノ儀奉畏候ヘ共、御綸旨各寺ヘ下リ候寺柄御座候間、先一應惣本山ヘ相達不申候テハ、會頭役不相立候故、此段　御聞濟被爲成下、日限御請ノ儀暫時御猶豫偏奉願上候、以上、三十二月十五日

御綸旨相下リ候寺柄ニ付、太政官ヘ御伺ノ上被仰付候儀ニ有之、且ハ管内寺院ハ前藩縣ノ管轄ニ候間、數（本ノ）下山ヘハ既ニ叢ノ御達ニ被成置候ニ付、被　仰出ノ道

至急合併可致候事、

智恩院へ通達出石藩

但馬國

出石町

如來寺

高德寺

心光寺（院カ）

稱名寺

右共御末四ヶ寺ノ儀、今般　太政官へ伺ノ上、合寺ニ可致旨被　仰出候ニ付、出石町昌念寺へ合併申付候間、此段及御通達候也、三年二月廿二日

寺院ハ不耕不織ニテ、巨多僧徒ヲ養ヒ、巨多堂塔有之候付、巨多財幣ヲ費シ、追々農商致困苦候付、太政官へ御伺相成候處、合寺可致旨被　仰出候間、別紙書通當晦日迄ニ至急合寺可致候事、

如來寺

高德寺

心光寺（院カ）

稱名寺

右円念寺へ合併可致候事、

知明院

西林寺

右光明寺へ合併可致候事、

願成寺

正眼寺

勝福寺

右宗鏡寺へ合併可致候事、

誓願寺

右見性寺へ合併可致候事、

金重寺（院カ）

右本高寺へ合併可致候事、

右ノ通被　仰出候間、其旨可相心得者也、

伯耆大山寺寺祿幷僧侶處分の件

〔社寺取調類纂〕四九四　（受）明治七年六月三十日　（回）同上　（濟）七月七日　（丞）三島　（議）相場
庶政・（補）宍戸　（出仕）土持　（課）社寺、考證

鳥取縣ヨリ管下伯耆國汗入郡大山寺寺祿幷僧侶處分之義ニ付窺
右ハ本年三月中、同縣ヨリ伺出、下ヶ札之通、御指令相成候上ハ、寺祿公收ハ當然ノ義ニ有之、且僧侶資產ノ儀ハ、別段御指揮モ難相成筋ト被存候、仍テ御指令案取調相伺申候、
下ヶ日（札カ）
明治七年三月四日
御指令寫
伺之趣聞屆候條、大山寺ノ號廢絕、佛像佛具取除方等、實地處分ノ見込巨細取調、早々可伺出事、
指令案

書面寺祿ノ儀ハ、內務省ヘ可申立候事、
但、大山寺々號廢絕ノ上ハ、僧侶身分之儀、同宗寺院ヘ入寺、又ハ歸俗爲致候共、本人任情願取扱可申事、

再案

書面之趣ハ、大山寺ヲ以大神山神社ト復古改正之儀ニ付、寺祿ハ即同社ニ可屬儀ノ筋ト可相心得、僧侶中神勤望ノ者ハ、同社等外常雇等之名目ヲ以、社職ノ內ニ而雇入置不苦、其他ハ同宗寺院ヘ入寺、又ハ改業爲致候共、銘々任情願取扱可申事、

伯耆國汗入郡大山寺祿處分之儀ニ付伺、

管下伯耆國汗入郡大山（寺脱カ下同ジ）所分方ノ義、追々相伺、御指令ノ旨致承知候、然ニ右大山ニ在來各種ノ物品ハ、神屬佛屬ヲ檢査取分ケ可申候得共、寺祿ノ儀ハ、即今神佛ノ區分相立候上ハ、如何取扱可申哉、從來大山寺ニ隸スル僧侶共、右祿米ヲ目的ニ生活致居候事故、一時之ヲ廢除スル時ハ、別ニ資產モ無之者ニ付、忽凍餓可迫ハ必然ニ候處、即今ニ於テハ、幸未六月中御達之意ニモ雖（難アラン）引樣存候ニ付、右寺祿幷僧侶資產ノ義所分方、至急御指令相成度、此段相伺候也、

明治七年六月卅日　鳥取縣權令三吉周亮

教部大輔宍戸璣殿

（朱書）「書面之趣ハ、大山寺ヲ以、大神山神社ト復古改正之儀ニ付、寺祿ハ卽同社ニ可屬義ノ筋ト可相心得、僧侶中神勤望ノ者ハ、同社等外常雇等ノ名目ヲ以、社祿之内ニテ雇入置不苦、其他ハ同宗寺院ヘ入寺又ハ改業爲致候ヵ、銘々任情願取扱可申事、

明治七年七月七日」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

伯耆國大山寺領三千石事幷山林境内諸役等、如近代有來不可有相違者也、

慶長十五年四月廿八日　台德院様御黑印

當寺

西樂院

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

定

一學文勤行不可有怠慢事、

一大山寺領三千石幷山林境内萬可爲西樂院次第事、

一知行依多少住坊可擇其人事、

一縦雖爲先規、於惡儀ハ隨時宜可改之事、

一致一列公事沙汰不可申出事、

右、可守此旨者也、仍如件、

慶長十九年三月十三日

台徳院殿

御黒印

西樂院

定

一學文勤行不可有懈怠事、

一大山寺領三千石事幷山林境内諸式可爲西樂院次第之事、

一依寺領多少住坊可撰其仁事、

一縦雖爲先規、於惡儀ハ隨時宜可改之事、

一企一列公事沙汰不可申出事、

右、薫以相守慶長十九年三月十三日先判之旨之狀如件、

元和三年九月五日　台徳院様御朱印

西樂院

伯耆國大山寺領三千石事并山林境內諸役等、如近代有來、慶長十五年四月廿八日、同十九年三月十三日先判ノ上ハ、永不可有相違者、可抽國家安泰精誠之狀如件、

寬永十三年十一月九日　大猷院様御朱印

西樂院

伯耆國大山寺領汗入郡ノ內五ヶ村會見郡ノ內九ヶ村、日野郡ノ內四ヶ村、都合三千石事、并山林境內諸役等免除、慶長十五年四月廿八日、同十九年三月十三日、寬永十三年十一月九日先判之旨進止、永不可有相違者、可抽國家安全懇祈者也、如件、

寬文五年七月十一日　嚴有院様御朱印

右御朱印御代々被成下、東叡山寶藏入置所、元祿十一年九月炎上ノ節、御朱印悉燒失候、就夫日光御門跡依御願、當御代々ノ御朱印ノ御書直被下之、御代々之御朱印モ爲後證寫之、可相渡被仰出付而、書記各加判形下置之者也、

元祿十四年十二月九日

阿部飛驒守正喬判

永井伊賀守直敬判

松平日向守重賢判

青山播磨守幸督判

鳥取縣々郷村社區別帳云々

第九十七區鄉社兼

（伯耆）國幣小社

大神山神社　氏子戸數百五十五戸　會見郡尾高村鎭座

村社

伯耆大山寺支配引當寺社ノ件

御崎社	氏子無之 同郡同村之叢座	同上神官受持
中間社	〃 同郡中間村	〃
泉社	〃 同郡泉村	〃
岡成社	〃 同郡岡成村	〃
北野社	〃 同郡福万村	〃
中原社	〃 同郡石州府村	〃
下河原社	〃 同郡下河原村	〃
福岡社	〃 同郡福岡村	〃
赤岩社	〃 同郡上細見村	祠掌 高橋茱
細見社	〃 同郡吉定村	〃
岸本社	〃 同郡岸本村	〃
日下社	〃 同郡日下村	〃

伯耆大山寺本坊西樂院舊藏の畫幅

鷲尾順敬

元伯耆大山寺本坊西樂院所藏の寒山拾得の大畫幅が、今鳥取縣安濃郡制寛村大字制寛の圓光寺住職某氏に藏せられてゐる、その大畫幅の添狀一通に依り、來歴が知らるゝのである、卽ち次の如くである、

兆殿司筆紙本寒山拾得　雙幅

傳日光宮拜領品

右者伯州大山寺本坊西樂院（明治維新ニ、日光[illegible]）藏品之處、明治維新、同院廢寺之際、西樂院藏品ハ、悉ク山内住侶一般抽籤分配トナリ、其當時前記ノ軸物ハ、學頭從嶝院前田實心坊（[illegible]）當籤、爾來同師ノ珍藏セラルヽ所ナリシモ、明治三十八年實心師遷化ノ際、遺言ニテ小衲附與セラレタリシニ、特別ノ懇望ニヨリ、貴下ニ讓與候也、

大正八年四月八日

實心附法

實光 印 印

一村實惠殿

津和野藩神道興起葬祭改法

〔津和野御屆書〕

　　為神道興起施行仕候條々

一古來之名社を重んし、無謂新社を止め候事、

　但、新社といへとも、一たひ勸請之神祇ニ付、永代尊崇可仕樣、夫々村里之大社へ合併仕候事、

一古法之祭式を興し、近世之俗祭儀を禁し、神職之ものを相勵候事、

不正之社號を改、并社内佛像安置を相禁し候事、

　但、祇園之社號八坂ト相改、文字彌榮、其他其權現之神名等不正ニ候間、相改申候、

一神道即人之大道ニして、忽せに致さへうらさる旨を相示し候事、

右者、中古之流弊を改め、人々淳朴を重んし候樣仕度、佛寺をも合廢等仕、只管皇國之御國體を辨へ候樣仕度奉存候より之儀ニ御座候、尤も惣而一時ニ改革難仕儀者、漸を以相施し候樣仕置候儀ニ御座候事、

一葬祭改法仕候條々

喪祭之儀者、人道之爲重事ニ付、實意を專らとし、血縁之近きものを以祭主と致し、新喪靈祭共法を相定候事、

但、別卷之如く、靈祭喪儀共、其要を録抄仕せ、古來之舊制を斟酌仕候而相應し申候、

一祭式之儀も、其次第を重んし、祝詞祭文等、成丈古法を用ゐ、供饌玉串等之多少を分ち、祭之輕重相定め候事、

但、主家之儀者、主人始家老役人諸士以下迄、上下倶之ニ相祭候法を相定、諸士以下之儀ハ、其分限を以、凡ニ相定め申候、

右者、人々實意を重んし候樣仕度く、何分中古風之祭法まては、君父之大祭をも、無樣之僧侶ニ相委ね、約り料物之多寡を以、其輕重も相立候姿、哀戚至誠之場合も相違仕候故、前段之通相究申候、併是迄之世法も御座候故、難改輩々ハ寺法をも相用せ候而施行仕候事ニ御座候事、

附帶靈祭要録一冊、喪儀要録一冊、略祭文案一冊、合三卷、

右去慶應三年丁卯六月以來、施行之仕候、此段御屆申上候、以上、

津和野侍從家來

慶應四年二月　渡邊儀右衞門

靈祭要錄

一先靈を祭るにも、墓所を以て本とすへし、然れ共、毎日の拜禮又備物なせも、墓所へ致しかたき事なれハ、居宅中に靈屋を設け、注連を引て位牌を祭り、毎朝神明を拜するより、引續て是を拜すへし、若シ身に穢ありて、神明を拜する事ハ欠くといへ共、此先靈を祭る事も欠くへからす、故に神明と同棚にまつらす、別に靈屋を設くへき也、又先靈代々の中にも、父母も殊更にしたしく祭るへし、すへて祭るやうハ、其身の分限と、家の貧富にもよる事なれも、一樣にいひかたし、併士以下の處にては、日々食する物の清き品を備へ、時にとりて珍らしきもの杯あらは可備之、

一祭りを重くする時も、式をたてゝ祭るへし、是又上中下ミ身分によりて差別あるへき也、先家臣ある人ハ、夫れをして役にあて、主人祭主となりて其勤を專とし、祭文をよミ、又人々拔立ならハせて、供物を進らせ、祭主これを備へ畢て、拜禮まも次

串を立て、玉串をさせ相備へ、あつく霊を祭ふへし、又尚もあら格家まては、家内并来
會せ并親族の婦女あとに取運いさせて、備物なといさゝし、祭文玉串なと形はかりの
事までも取行ひ、實意祭を勤むへし、玉串と云は、榊の枝まぬさを取付たる也、さる
比あらぬときは、杉の木までも宜し、又小竹にぬさを取付ても備ふる也、何れも拝
を拝時、是れを机の上に置て、手を拍ちて拝むとなすは、此時こゝろ〳〵に種々
のもの備ふると杯も有之也、

一先祖并祖父母父母の日柄は、毎に事をつゝしみ、遊宴漁猟杯最も慎むへし、世ま祥
忌日といふ二代々の祭日まは、殊更謹慎恭敬を盡し、墓参り菓子花葉の備なと怠る
へからぬは、儀なと成丈心汝盡して奉るへし、

一春秋雨度ゝ、代々の霊をあつく祭るへし、正月元旦二日三日、七月朔日二日三日を
以てをへし、尤右年頭まは、皆神明をまつるとなれは、夫に准し、飾物杯いゝし、神
酒洗米等備ふへし、七月まは此神明をまつる式なきにより、先霊汝まつる一ト筋
なれを、殊更に心を盡をへし、家あはくれ位牌を別席に出して、時の品々又霊をも
比のまりて迎へて、諸先霊を合せ祭るへき事也、この外毎月朔日或は五節句或は
年越し杯皆心をこめて可祭之、是ミ推其身の祝ひと汝いたさをりなれは、身祥ト

たる父母先靈不祭しては、不叶譯也、また元服、婚姻、昇進、代替り、年賀等、身に吉禮於行ふ時は臨時に先靈を祭るへし。

一年祭左之如し、

一周祭

三年祭

五年祭

十年祭

二十年祭

三十年祭

四十年祭

五十年祭

右五十年以後は、五十年毎にまつるなり、此日を殊更に其靈をおもひろへしまつる譯なり、祭文も其おもふ心を言つゝけ、又奉るものゝ品々なと、細かに述ふへき也、又あれ式を立て祭るへきと也、

一常は拜ミやうは、「懸まくも恐こき何々の靈乃大御前」と言て、手を二ツ拍ち、頭を下

けて拝むへし、又年頭五節句、朔日望と、別段ニ神酒備物いたし候共、右乃如く言續けて、今日乃祭貸受させ給へと言て後、二乃手を拍て拜むへし、此外重き祭ヶ抔儀を時ハ、必ず祭文有へし、

但、祭文ハかな書ニして、婦女子まても、よミ候様作り置ても宜し、是土ハ動によりて祭日宿にあらぬ事もあれハなり、

一、もへて祭乃器ハ、清潔を尊ふ事故、白木を用るとなれハ、實ハ其家乃有無ニよるとなれハ、有来りし器を清めて、用ゐても宜し、然れも銘々酒食乃器、聊麁なる器用ゐて、其費を祭器ニ用ゐ事も、何の子細もなき事なるへし、

一、備へ物とてものによることなから、餘り長くたくは不宜、匂ひを生する物抔ハ、別て乃事也、花葉ハ草木何ニても苦しからは、然し悪臭あるものハ用ゐた、まゝ香氣たきて、悪臭をさらしむるとあれとも、霊前にてハもちゐさ詮るし、

喪儀要録

一、死體を臥さしめん所ニ、先疊ニても薄縁ニても敷、其上に蒲團をしき、死體を臥せしめ、枕をは東ニし、面をミヘ向ハしめ、手足を撫つくろひ、其上ニ衣服を覆ひ、枕乃側

に脇差を置立、臨まて死體を清め、夫より枕上に机を設、洗米を土器に盛り、片木に居て備へ、（俗に枕飯とて、碗に盛て備ふる事あり、習俗なれは自意になすへし、）油火盞を燈すへし、扨後ち皆々一應之拜禮を成をへし、其臥をめし廻りへは、屏風を立廻し、（屏風を逆に立る事、習俗なれ共いはれなき事なれは、常の如く立へし、）其側に親族一兩人晝夜共離るへからす、

一葬地を撰はんには、先其土地の神をまつるへし、穢に觸さる人をして、其地を掃ひ清め、薦をしき、机をおき、神坐と定し、神酒を備へ、祭文をよみ、祭る作法有へし、其祭文は某の死體を此所に埋るよしを、土地の神に告て、地を借る趣を申也、また略しては、祭文に不及、兼て定置たる墓地あらは土地を祭らす、

一死體を沐浴せしむるには、夜に入て致すへし、十二時過ぬるを宜しとす、扨剪爪理髪（ひけそり）終りは、其身に盛服を著しめ、棺内に納へし、常に手馴の品々を棺内に添收め、事畢りなは、静に蓋をして、座敷に薦を敷、その上に移をへし、其側に榊一本を立、（棺前の作法濟て後、墓上にたつる料なり、）其前に机を設け、淨水一椀散米大麻を（木に麻苧を著付し物也、）備へ、左右に燈臺を置、（棺の前に燈臺を設け置事は、亡者の罪障を解散すへき爲の意得なり、我身の顔色を清る料にはあらす、）又供酒（酒菓子又は濃酒にも、）供饌（飯汁菜飯如常、）肴（干魚、生魚、）菓子の類其外存生の時、格別に好みたりし物を求て備ふへし、何にても備へぬといふ限りはなけれとも、總て家の有無に隨ふへき事肝要なり、また靈前に供

したる魚味蔬菓ゟ至るまで、下げたる物を、悉て食ふへし、私に魚味ゟ食ふ物杯喰へからさ、かへりて靈の實意を失ふ事なれハ、能々心をもちゐつへし、又臭氣を除く爲にハ、香を燒く事あれとも、靈前まてハ、必用ゐそ、草木の花までも臭香の花は用ゐさるへし、

一靈璽ハ何某の靈と定め、位牌を設け、祭の式あるへし、喪主の者祭主と成て、祭文を讀ミ、酒饌玉串等を備へ祭るなり、喪主は喪にまきれ、諸事に行届き申さぬ故に、親族の内又ハ組合の者を頼て、式者と定し、悉く夫に委ねて、執行ハしむへし、又靈璽ハ、實名諱名漢語名等随意たるへし、男女によりて其書様あり、

男 何某靈　　男子 何童靈

女 何某女靈　　女兒 何童女靈

長部資齋翁

健風道別武押別可美眞心靈神

故彌重郷一郎春通翁

堅石立所大人

右之類副名なり、

山崎闇齋諡

垂加

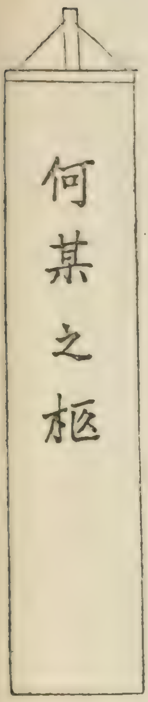
右漢語　　此類數多なり、

一出棺前饌を備へ、人々拜禮を成へし、祭文玉串抔あるへし、尤略し候へは、夫は不及、
但、喪禮定、出棺同日なれは、兩度は祭を合せ、一度に成もへし、又葬地に至ての祭式も、葬地まて其式出來あるまき分は、出棺前祭文をよミ、一同に致しても宜し、

一葬送の供は、其身存生之格に應して、御制あり、又貴きは賤きに同しく、賤は貴きり同しき事をえす也、今にも出されは、其家々乃有無を考へ、質素乃品を用ゐ、無益乃費有へからは、其用意をへき品々左に、

提灯

銘旌



杖

但、竹にて作り、柄を五寸計り紙にて包む、喪主の持料なり、

松明

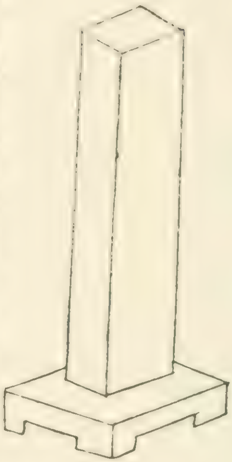
但、途中松明をたくと、本儀なれとも、今は提灯を燈き事と成たり、されと市中外にては、松明を用る也、

鳶

位牌

墓誌

但、假りに角木杭用ゐ、後石に改むへし、



水器

榊

注連縄并竿

夜燈

薪

葬地ニ至らは、薦抔敷、柩を中央ニ置、廻りに諸道具を立おき、喪主始親類并吊ひの者ニ至るまて、各蹲居せしむ、此時祭主起て、正面ニむかひ、手を拍拝ミて、祭文を読ミ、又手を拍拝ミて、本の坐ニ著へし、扨拝礼の仕様ハ、先身近き人より、順々に進ミて拝礼あるへし、其後柩を坑底に埋めて、（旗提灯抔も葬穴に入る、）其上ニ墓誌を角木ニしるして立へし、認方ハ、

何某之墓

何某女之墓

是ハ諡名ニても、俗名實名ニても宜し、何れも墓と記すへし、

但、親類の内より、便宜の所へ出て、弔之人へ挨拶有へし、

一墓所ハから角木抔中ニ立て、其側ニ榊を立へし、（此榊ハ家にて柩の前に立置し榊なり、）其前ニ水抔供し、又左右に花を供すへし、其四方ニ杭を立、葉付竹を立、注連を引めくらし置へし、

但、略し候へと、二本竹ニ注連を横ニ引ても宜し、

一葬送終りて、家に還られ、先霊（霊）檣を設、注連縄を引、神水を置、草木の花（造り花ハ不用、）を立、位牌を安置して、酒饌を供すへし、扨て喪ハ悲哀を本とすれと、其易らんよりは、寧い

ぞめとの語も有て、崇敬を盡して朝夕なつるへし、此後ハ五日目十日め、夫より十日／＼を節と定めて、五十ヶ日迄ニ祭あり、五十ヶ日ニ祭り終りたら、靈檀を撤し去りて、先靈と一同ニ合して祭へし、

年祭々文

謹而白(作久)何條何某實名今一年(或ハ幾年)干支月何々之靈何年乃御祭仕奉(止)今備奉神酒御饌(毛)初(尼)種々乃物共平(介)久安久(良介)受(玄曾)給(和)阿那畏(美)(文)阿那尊(ミ)(言)何々之靈等阿那愚比忍(可)(申)(々)

一惣而祭文ハ、其祭り之度每作り調へて、讀ミ可申若難しとも、左樣致ハ、難き時ハ有之文を取直し使而、よミ可申、さきに記し候分も有同樣之譯ニ候事、

靈璽定之祭文

謹而白(寡久)靈主何條何某實名哀(使)(可)痛(悲)(毛)(波)(今)父(正)生(限)何條何某實名乃(君)(母)(ニ)

烏乎(悼)(々)事無久今一年幾年干支月日乃過(志)世(乎)逝去(也)後世(樹)(木)從(仕)(給)(波)阿那(哀)(云)(々)

痛(惜)(悲)今(上)唯御心(乃)儘(生)(使)眞心(乎)靈(位)(里)事(有)(勤)(美)遺(乃)(志)(乎)(守)(里)大御(魂)(乎)(與)

皆而已也故其祭奉(留)御(靈)(乎)何々之(乃)靈(止)定奉(留)(事)(乎)(今)(世)(爾)(乃)御門(乃)常世(爾)、

乃常磐爾堅石爾吾家吾世袁守世給閇止謹而白須

又子孫弟何某等共爾謹而白須（これは有にても無にても宜し、）

葬地祭々文

此所袁宇斯佩坐須大神乃御前爾白左久今何條何某實名可奥墓所袁此所止定侍奴此狀乎平計久安久良計聞召世止奉留此御祭袁受左世給比長久久九平良爾令在賜倍止恐美恐美毛白須

出棺前祭文

謹而是乃柩乃御前爾白左久今定里乃隨雖有哀此宿袁送出志奉旦地名止云所爾藏米侍旦祭侍以故靈毛波志靈代爾留里坐天末長久奉留祭袁受左世給倍止白須

有葬地祭幷出棺前之祭文とも相略候儀も有之候事、

葬時祭文

謹而白左久喪主何條何某實名袁毛伎可痛可志毛伎何條何某實名乃君御神號何々之乃靈今月日刻歸骸袁此地名止云所爾藏米侍祭侍以此毛袁志千世爾八千世乃御住所止集里坐御靈毛波志天翔旦祭布所爾到里來里神乃御門乃常世邊乃常磐爾堅磐爾吾家吾世袁守世給閇止白須

名下書面何某等先■書面白■■にこれは有ても無ても宜し、

一　五十日百拝之祭ハ、年祭之祭文を取直し候而相誦ハ候へと申來候事、

於村呂我中　慶應三年

六月十日、是ヨリ先、社寺改正ノ旨趣ヲ論達シ、其舊弊ヲ釐革シ、大ニ神道ノ廢レタルヲ興シ、乃チ新設ノ社寺ヲ舊社寺ニ併セテ、永ク保存ノ法ヲ設ケ、神佛ノ混同ヲ禁ジ、別當社僧ノ輩ハ還俗セシメ、愚民迷信ノ弊ヲ斷チ、因テ以テ民費ヲ減ジ、墾田數町ヲ得、又同時ニ神葬式竝祭式ノ制定ヲ、福羽文三郎、大谷庄三郎ニ命ジ、二式成テ之ヲ藩内ニ頒ツ、當時ノ論達等ハ左ノ如シ、

社寺御改正御趣意書

此度、改正之大主意は、二百餘年（七）太平打續しよりして、漸々諸事相續に相成、古代質朴之風氣次第に衰、陸上一體獲弊相増、人心輕薄に成行、自然諸藩不穏形勢に押移り候に付、現に在りては、干戈相動、遂に　皇國紛亂の時勢と相成、從　天子庶人に至迄、其安する所を知らず、於當面ヲ、此儀存奉と打過候時は、人民塗炭之苦に陷り可申

は必然之義、實に不便之至、且永く保國家候義も難相成、日夜致苦慮、就ては斯る形勢に立至り候事とも致考案候に、今天運變革之時に可有之、仍ては事業手後れに不相成樣及處置、國家維持之策略可施機會に付、何分にも昇平之舊弊一洗、古代質朴之風俗に立戻り、人心を安し、社稷堅固に永續致度存念よりして、不得止事、今度及沙汰し也、右に付ては、萬事簡易に無之ては、永久難相成、勝手向取續も出來兼候は勿論之義、猶改正之次第においても、基本相立不申ては、諸事姑息に流れ、却て弊を釀し候樣成行、無益之處置に可相成、元來神代以來、連綿たる　皇國之事に候へは、第一に可致尊神は勿論之義、然るに後世私心よりして、猥に新社造營、漸々數多之儀に相成、自然手も屆兼、却て古代之神社は疎に相成居候類不少、及後年ては、如何樣之次第に可相成哉難計、就ては眞實之尊敬とは難申、約る處、失敬不信之至に付、奉對神慮不相濟次第、仍ては此度不得止事、近來取調候新社之義は合併致し、簡易にして、古來之神社一同に、永久祭事執行尊敬之實意相達度、仍て及其沙汰候、佛法之義は、元來中古異國より渡來致し、漸々相廣まりし事にて、當領寺院にても、御入國以後、餘程多分之增に相成、第一田畑を塞き、其上僧侶之心得違よりして、人民を令惑溺之場合にも立至り、國害共相成義、尚右樣多端に成行候よりして、寺院に

てゝ、諸事行屆兼、約る處、人民之疑惑と相成其弊ゟ敎示衰弱、差には於僧侶も、佛像回向は慎濟、寺塔之世話事務と可相成、左にては僧道之本意にも相叶間敷、且右佛法盛に相成よりして、一統尊神之道も取失ひ、自然輕蔑薄く成行事とも、眼前之義、即神國之本體相忘れ候道理、右樣之次第にては、難保社稷義に付、是又此度及轉法候、右根本よりして、諸事改正、永續之法則相立、人心厚く一致、國家維持致度存念に有之候、右主意及改正轉法之沙汰候也、　丁卯五月甲第二十六號

此度寺社方へも、御改正被仰出、神社寺院等合併被仰渡向も有之、就ては銘々宗旨敷外に建立之神社佛堂幷小祠等に至迄、當年中に取除可申候、

六月　　大目付

覺

御領内鎭座之神社に奉仕之社人共は、常例祭禮始、朝暮之參勤無怠相務、御上御武運長久、幷萬民幸福を祈念職分之者に候、然る處、御入國以來、數百年の星霜押移候内、自然と古來之風儀も相廃み、畏くも神寶に奉仕之大切成職掌も辨し兼、中には身上之不行跡、或は種々之奇說を唱へ、諸民を致誑惑、佛法にも劣り候所業も有之儀に相聞え、左に随ひ、來人も新社之建立抔、善事として、其鄕里病難有之節、猪鹿

田畑に障り候へは、直に其場所へ新に社を設け、種々の神靈を致勸請、猥に神社を致玩弄候風俗に相成行、當時御領分中、莫大之新社相増候に隨ひ、古來有名之社は、却て衰微に相成、社内之修覆も行屆兼、中には神體も雨露に曝し候社も有之、扨々苦々敷至に候、かゝる不敬も、畢竟不相應之社數より差起り候上、太平之世と違ひ、當時戰國同樣にて、猶此先き如何之變轉難量時勢にて、所詮是迄の行形にては、永く神靈尊敬之道も難相盡候、御上御崇敬之御社始、元和三年以後勸請之社は、古來之社へ御相殿に被爲遊、其分御領分組々村々迄、別紙之通被仰付候、然る上は、社殿も不及破壞樣、修覆も相屆き、祭禮始、神職之者朝暮之奉仕も行屆き、先永く尊敬相盡、無此上事に候、猶又神職之者、家子に至迄、神道祭に被仰付、其外諸事御取調之上、是迄之弊風御改革被仰出候間、難有御主意遵奉いたし、一入神道に心を集れ、舊習之拙を改、祭禮始、無益之費を省き、相成丈古風に復り、潔齋重と神事執行可致候、併下方の者に至候ては、自然斯る難有御趣意、却て取違、新社御相殿を始、如何に相考、兎角申合候樣之義、萬一も有之候ては不相濟義に付、譬は田畑に有來之社、外へ遷候共、神明之加護に替り候義無之、爲重社へ御相殿にて、永年尊敬相盡し候へは、却て加護も相增候義は勿論、神國何之不容易次第始、神職之者よりして懇々致說諭、

深く篤主意致貫徹候樣盡力有之、此上報國之心掛、肝要之事に候、以上、

羽田恒左衞門 寺三寺社

慶應三卯年六月

覺

數百年之太平打續候て、御領内寺院佛堂瀨々建立相增、當時にては、御領内不相應之數に相成、元來無檀之寺院にては、別て門徒之助勢無之ては、護仕相成兼候は必然に候、斯莫大之寺數にては、土地之疲弊人民之困窮にも立至り、加之當時戰國同樣にて、物價は倍及蹲躪候、旁所詮是迄之行形にては、一統は勿論、於御上も御手不被爲屆、約る處寺務も成じ、佛堂修補も心に不任、遂に貴重佛像雨露に曝候樣可成行に眼前之義に付、何卒多端之處を省き、先永く法燈崇敬之道相盡し候樣との御趣意にて、此度御取調之上、御上御菩提所始、諸宗法會等迄、夫々御轉法筋御出候、實に時勢旁不被爲得止御主意、篤と奉恐察、別精勤可有之、中には當分差支之筋可有之歟にも候へ共、約る處入費を除き、且寺院合併に隨て、門徒も相增候へは自分相互に永續可相成譯に付、是等之處、克々相考へ、寺用を節儉に取濟、御趣意篤重に相心得可申候、以上、 卯六月

奉行

寺院中

覺

一御入城以來、數百年之星霜相移候內、寺院幷佛堂共、漸々新に建立相增、卽今にては、御領分中莫大之寺數に相成候處、斯多端にては、土地之疲弊も不少時勢旁、於御上も、夫々御手不被爲行屆、一統も困窮之折柄に候へは、不得止事、御取調之上、煩多之廉を省き、左之通御轉法被仰出候間、御趣意篤と奉恐察、御沙汰之件々嚴重相心得可申候、

御轉法覺

一御領分中、所々に有之佛堂、總て本寺へ合併被仰付、本寺無之堂舍は、其最寄之寺院へ合併被仰付候間、佛像は勿論、當時滯在致させ候人柄共、其本寺へ引取可申事、尤本寺無之分は、出生所へ可差返候事、

但、元和二年以前建立之分は、合併之義、本寺住職之者可爲勝手事、尤建立年月不分明之分は、不殘合併前に同斷之事、

一御領分寺院住職之者、以後他領へ移轉不相成、尤是非致移轉度候はゝ、御聽屆は可被仰付候へ共、後住願不相成候事、

但、當時住職之者限り、當年中は、是迄之通移轉御聽屆被仰付候事、

一諸寺院共、爲對譯柄無之寺院は、二十ヶ月以上、無住に相成候へは、後住不相成候事、
一諸宗共、永々無住は（にカ）相成候へは、其本寺又は最寄同宗之寺院へ合併被仰付候事、
一御領内寺院へ住職之者は、御領内にて二十ヶ月滞留之者に無之ては、入院御免不被仰付候事、
一一向宗幷修驗共其外他宗にても、當時住職之者共、還俗之上御奉公願出候へは、御扶持被下置、被召抱候事、
一一向宗幷修驗共、以後他產之者にては、住職不相成候、尤無餘義譯柄有之候はゝ、此段願出之上、御詮議可被仰付候事、
一宗門改は、是迄之通、年々相改候へ共、寺印之儀は子午の年被仰付、尤委細其節可及沙汰候事、
一永明寺、光明寺之外、諸寺院に有之御先靈樣御位牌は、不殘御引上け被仰付候間、御城下は奉行所へ差出、在中は御代官所へ差出可申候事、
一總て寺院へ御寄附之御品は、其節限以後御修覆不被仰付候事、猶又御寄附御品之外、假に御紋付候儀不相成候事、
一向後金銀付之佛具、相調候儀被差止候事、

一諸宗法會之義、當時勢に付、左之通御定被仰付候事、
一永明寺之外、於禪家、江湖會、全く自力を以致執行候へば、是迄之通御免可被仰付候、尤江湖中、五則之外、多人數相集法會不相成候事、
一於諸寺院、一日供養始、種々之名目を相唱へ、多人數相集候所、右等之義一切被差留候、尤祖師幷先住年囘之節、法會相願候はゝ、御讃談之上御免可被仰付候事、
一向宗法會之義、左に、
一報恩講、十一月廿七日より廿八日迄、
一永代經隔年、
一祖師幷先住年囘、
右諸宗共、門徒之世話に不相成、住職之者、自力を以法會執行致度願出候はゝ、御讃談之上御免可被仰付候へ共、他領僧相招候義は勿論、其寺院住職之者之外、法話不相成候事、
一前條法會之外、俗家にては勿論、寺内にても、多人數相集、法談一切不相成候事、
一盆中棚經として、俗家へ罷越候儀、以來被差止候事、
一寺内及大破、普請取繕候節、又は寺用無據義有之、門徒共へ米錢助勢相頼度候はゝ

其段委細書付にして、伺出可受差圖候事、

一是迄大般若轉讀始、佛法祈念之獻札、往來之寺院有之候所、當時勢に付、獻札被差止候事、

一以來諸寺院にて差置候僧共、出入嚴重に可屆出候、初て差置候輩は、生國は勿論、師之名前迄、委細書付にして可屆出候事、

一當時勢に付、無印鑑、御廓内へ出入被差留候事、

但、御城下寺院へは、願出之上、兼て印鑑可相渡候、在中寺院之者、無據用向有之節は、願出之上可相渡候事、

一諸寺院、是迄拜借米銀、此度御轉法に付、格別之以御憐愍、不殘捨拂被仰付候事、

一諸寺院祠堂利米之義、從來付方百姓共、不容易難澁之趣に付、利米之内五朱方元入にして、米受取可申候事、

一御領内寺院僧侶共、本人始家子共、衣服万端別紙之通可相心得候事、

右之通此度御改革被仰出候間、御沙汰之件々、嚴重に相守可申、萬一心得違之輩於有之は、急度嚴科可申付もの也、

慶應三卯年六月　　　　奉行農　三寺社

さとし書

藩内一般へ

此たび御領分うちへおほせいだされし御改正と申は、年久しく、人もよろづのものも、世と共にうつりかはるにしたがひ、おのづから、物ごとむかしの心正直なる事はみなすたれて、何ごとも本をうしなひ、おもてばかりをかざるやうになりゆきしゆゑ、そのあしきことをあらため、むかしのよきならはしにたちかへり、むつまじくさき／＼までも、心やすく暮さるゝやうにとのおぼしめしにて、おそれおほくも、昨年よりあけくれ御心づかひ遊ばされ、御上御手もとをはじめたてまつり、御家中在方まちがたへも、これまでのあしきことをばあらため、よき正しきならはしに立かへるべきやうおほせいだされ、それよりして神のおやしろ、佛てらのことまで、御さたこれ有しなり、このやしろ寺のことは、とし久しくなにの御さたむきもなく、うつり來りしことゆゑ、わけてとりかざりのみおほく、まことよりうやまふ心はうすくなりゆきしにより、いまかく御せわこれある事なれども、下がたにて、何のわきまへもなきもの、また女子供は、あつきおぼしめしをもとりちがへ候事もあらんかなれば、まづそのもとのわけより、よく／＼ときさとし、しらせ申べし、さてこの日本といふ御國は、神のくにともいひて、神々様より、　天子様

の御さづかりあそばされし御國にて、おそれながら、いまの　天子様にも、まぎれもなき神の御すゑにあらせられ、　御血すぢも御つゞき遊ばされたる御事にて、まことに有難き御國ゆゑ、世界の内、ほかの國々おほきなかにも、ならびなき御國がらなり、かくありがたき御國にうまれ、その地に生ふる五こくをたべ、衣類を著、家をつくりて、あつさ寒さをもしのぎ、けふの日をやすやすとくらすも、みな神々の御めぐみと、御上のふかき御恩となれば、あさゆふわするゝことなく、こゝろすなほに、おのれ／＼がなすべきわざをおこたらずして、その御恩がへしをいたすべきことなり、また佛といふは、なかむかし、よその國よりわたり來たるものにて、もとこの御國のものにあらぬを、いま世のならはしとなりて、生けるうちは神につかへ、死にては佛につかへ、わが身も佛になるものゝやうにこゝろ得れ共、佛のみち、わたりきたらぬ前の人、おのれ／＼の先祖なども、何になりたるぞや、やはり死にて後までも、神につかへ、みな神になりて居らるゝことなれば、その本たるわけを、たれもよくよく考へしれば、第一に神々を大事にうやまはねばならぬ事なり、しかるに、今はその大事にいたしやうのちがひたることあり、まづ元和三年御當家樣、この御國へいらせられしころは、御領分のうちにても、わづか百あまりのや

しろかずにて、ひとむらふたむらに、ひとつぐらゐのことなれは、手もよくとゞき、だいじにすることも出來てよろしかりしを、いつとなく、あたらしき神のやしろ出來そひて、今は千あまりも増し、又佛の堂、てらのかずも、おなじやうにまし、ひとびと理もなきことばにまよひ、又ははやりにひかされやすきゆゑ、こゝへは、我も我もとあらそひまゐるかとおもへば、かしこへはひとりもまゐるものもなきやうになるなり、これも、まことの心よりいでぬことゆゑ、つゞきかね、いとさかんににぎはひしも、わづかの内に、おとろへさびしく成行やすく、そのうへとかく人はめづらしきをこのむよりして、あたらしき神ほとけてらなどは、さかえて、むかしよりあり來りて、そのところをまもりたまへる神の御やしろは、あるかなきかのやうになりゆきたるもの、かず多きなり、これらは、みな本をわすれたる事にて、神はよくすぢをたて、すなほにして、いつまでもおこたらぬ心をこそ、このませたまへば、何ほどいのりても、こゝろかたよりては、御ひきうけなく、ほかの神よりは、よろそかにいたす御とがめをうくるやうになるゆゑ、あさゆふ、いかやうにねがふとも、其かひなきのみならず、風水のうれひ、又はあしきやまひなど、さまざまのわざはひおこるは、まのあたりのことにて、ふかくおそるべきことならずや、なほち

かきこゝは、世の中ふだやかならず、つひに、昨夏はいくさなどはじまり、又ことのほかなる米のねあがり、それにつれて、よろづの物あたひも、たかくなりしゆゑ、さき〳〵きづかはしきをりからなれば、この御領分に、にあはぬあらたなる神の御やしろ佛の堂にては、とても御上の御手もとゞかせられず、下かたにては、なほさらのことにて、ゆくすゑは、神の御やしろをはじめ、ほとけの堂てらなど、やぶれはてゝ、まつたいなくも、神體佛ざうあめつゆにさらすやうなりゆかんこと、まことにおそれおほく、又いかほどの御とがめあらんもはかりがたきことなれば、あたらしき神は、むかしよりありきたりの鎮守神の御やしろへ、御あひでんになし、ほとけの堂小でらは、そのおなじ宗旨のてらへあつめ候へば、ふしんはじめ、よろづの事よくとゞき、いつまでもかはりなく、うやまふこゝろつくさるゝやうになり、人々も、あちらこちらへゆくとはちがひ、いくたびもまゐりやすく、神はいづくさでもまもりたまへば、その御あひでんになりたる一處の御やしろへまゐり、まことの心よりよく〳〵うやまへば、これまであなたこなたにありし神々をと、ふなだいじにいたすわけにあたり、かたよることなきやうになるゆゑ、ねがひ事もとゞきよく、神々様もよろこびおぼしめすより、いろ〳〵あしき事なきやう、御まもり

くださるゝからに、よき事おほくなり、もし、かぜ水など、又ははやりやまひ、そのほかよからぬ事ありとも、其わざはひにあはざるやうにと、御たすけあるべきなれば、おの／＼あんしんして、世をわたらるゝなり、かくまであつきおぼしめしにて、此たび御あらため遊ばされし事ゆゑ、いづれもありがたきことを、よく／＼かんがへしるべきなり、しかるうへは、何事もとりかざりなく、まことの心をさきとして、うちわとりしまり、こと少にして、神の道とほとけのみちとに、わかちあることをよく／＼わきまへ、御上をだいじにし、おのれおのれの先祖はじめを、おもんじ、ちゝはゝつまこ兄弟のなかむつまじく、友だちへも親しくまじはり、其身のはたらきおこたらずば、おのづから、其家ながく榮え、いとめでたき事どもにて、まことにこの御國の御幸はひ、此うへもなきことゞもなり、かくありてこそ、むかしのすなほなるよきならはしになりたりといはるゝことにて、いかほどか御上にも、御よろこびおぼしめさるべく、くれ／＼もおの／＼こゝろえちがひなく、おほせいだされの通りを、よく／＼まもり申すべきことなり、

慶應三年丁卯六月　　慶三寺社

政府

霊祭式

一先霊は霊廟を以本とし、第居宅にをいても、祭の日柄、忌日、春秋の祭、年祭等、恭敬をつくし祭式可致事、

一祭式は軽重其分限、且其霊に寄り候事に候へども、先供饌神酒洗米、其外供物等いたし、祭文を読、玉串を供へ、拝礼可致候事、

　但、祭主は其家の主人相勤、供饌供物等は、祭主并家内親族等相集り候もの、式を立候て取行候事、

一、春秋之祭は、正月元日、二日、三日、七月朔日、二日、三日、尤秋の祭を重く致し候事、

　但、祭式は分限に應じ、軽重可有之候事、

一年祭左之通、

一周祭　三年祭　五年祭　十年祭　二十年祭　三十年祭　四十年祭　五十年祭

右五十年以後は五十年毎に相祭候事、

　但、祭式は、分限に應じ、前に同断、猶右に付、先霊佛事之義も、其檀寺へ掛合、右之年

割に相轉可申事、

（中略、寶祭要覽、喪儀要録ヲ載セタリ、津和野御屆書ニ同ジ）

方今不穩時勢に候へは、小藩別て人心淳朴にして、不一致ては、國家維持不相成様成行、眼前天幕へ之勤務難出來、忠孝之道不相立と、不堪苦心之至、就ては、諸事致改正度、追々及轉法之所置候處、人道之重なる葬祭に候へば、先務之義、然るに、是迄も人々相成丈、心を用ゐ度存念には有之候へとも、父母死すれば、直に寺院へ遣し、他人へ相任候故、自然親族より心を盡し候事は薄く相成、其上佛法之爲、不任心之義も數々有之、遂には薄情之姿にも立至り、歎敷次第、右様に成行候も、佛道之所爲にも無之、只他人へ任、我思儘、十分に心を盡候事不相成候よりして、漸々弊風を釀候義にて、實に基本より、右之次第に相成候ては、自然其心諸事に押及候譯にて、當節柄、別て人心之動搖にも相成、約る所社稷安危にも相拘り候事に付、其本たる所よりして、轉法、人情厚く相成候様致度候、然るに佛葬祭之儀は、兼て天下之御法度も有之候事故、敢違背候義は勿論無之に付、以後其死後、檀寺より先血脈香刺引導を受、位牌相納置、參詣、且年忌之節、佛事執行、尚仕來之檀役致し候事等は、是迄之法立置、其餘於自宅は、銘々實意を以、一途に孝道相盡候を事要として相祭、葬送之義も、

同樣之心を以、只至孝之道より丁寧に埋葬、墓誌を建、夫を主とし、不絶參詣誠心を以相祭候事にて、別に設候建置、聊も無之候に付、素より宗旨等可有樣無之、只人道當然之義是則本邦古代正直なる道にて、人たる者之本心正道也、就ては、假に本葬祭と名附候事にて、元來別種名目有之事にては無之、他人も不假、各厚く心を盡し候迄の事に候、於寺院も、俗人先靈を思へはこそ、位牌差置、祭方相賴候、故是迄僧侶立行候事に可有之候、此度も宗門相應候譯に無之、只居宅葬地之祭方而已相轉候事にて、天下之大法に而論、佛法を捨候譯に無之候へば、於僧侶も、十分には有之間敷候へ共、勝拜有之度候、元來人間に分限を以可守を守、可勤を勤候事なれば、國家を治る身にては、經持專務に付、無餘義、此度及轉法候次第、俗人之身にては、人情厚く家を齊へ、勤仕專要に候へば、孝道第一之靈祭に心を盡し候義、僧侶之身にては、佛法を守り、諸佛に仕へ、厚く相祭り候義肝要と致し候は、其之義、元來皆佛應寺等之主意には其之儀、就ては此度改革に付、諸事巨細之義迄、及渉法候へ共、佛道之差障も、又は僧侶之差支と相成、必竟難立行程之、實に無餘義譯有之候へは、俗家之障りに不相成義は相轉、寛大之取計可申積に有之候間、於僧侶は、其趣意簡易にし、永く傳標を守直、法會修行を專務にして、俗家葬祭之義は、天下之大法に不障迄にし

て、差置可申候、約る所領內之人民安すへき所に安んじ、國家平穩に致永續候樣にとの主意に有之候事、中第二十九號は

御國家永久御維持之爲、今般諸藩御改正被仰出候に付ては、其基本たる敬神之道を立て、人心淳朴に相成候義、專要之事に候へども、第一人道之重たる葬祭よりして、正道に至らずては、諸事の御規則も相立かね、遂に御政道之差障りとも可相成義に付、此度御先靈樣、御尊敬之爲、御葬祭式等神國之法に基き、被遊御改正度被爲在思召候處、佛葬祭之儀は、天下之掟も有之候へは、彼是思召通にも不被令爲、去ながら、此儘荏苒と被爲打過候時は、無益之御入費增長のみならず、人心惑を生じ、皇國固有之心魂を昧まし、義氣相撓み候樣成行候ては、差當り外夷覬覦之時節、旁終に彼が術中に陷り、否く異風に移轉し、御國家之大害を釀し候次第に可立至は必然之儀と、彼是深遠之御英斷を以、寺院へ御投向諸事格別御減略に相成、御宗門始、諸庵目丈被殘置候て、向後神道御興起之以御趣意、御葬祭式可被遊御改革旨、被仰出候條、此段承知可有之候、略

此度、神道御興起之大主意は、先般御主意書拜見被仰付、猶別紙之通、向後御葬祭式等可被遊御改革旨被仰出、就ては御家中においても、葬祭轉法之義、兼て天下之掟

も有之、寺院御沙汰には難被爲及候へども、銘々御主意に倣ひ、葬祭之儀相改度向は、願出候はゞ、御免之儀可被仰付、委細之義は大目付中より可及沙汰候間、猶是厚き御主意之程被奉恐察、心得違無之義、肝要之事に候、

御内存書

此度神道起興之主意を以、葬祭式改革に及び候、深意は元来神慮においても、天下平穏にして、萬民を永く安んぜしめんと、人をして治め給ふ事故、人々之を要奉りて、身の分限に應じ、御國の爲に力を盡し不申ては、相濟ます、仍ては天神地祇を拜するのみを、敬神とは申がたくと、我等においても、不及ながら、社稷に心を委ね、御先祖様始厚く崇敬し、祭事永續、國家安穏維持致してこそ、神慮にも叶ひ、神の道とも可被申、然るに是迄之法にては、眞に心を盡し候事も相成がたきに付、實は他人の手をからず、我等と藩中と、倶々に實意を以相祭り度、然る上は、この〱御先靈様へ忠勤之子孫なれば、嘸々御歡びに可被爲思召、我らに於ても深く滿足也、何卒一統にて、銘々先祖以來、御鴻恩を蒙り奉り候其報恩とおもひくれ、藩中一和し、倶に永久祭事執行致度存念に候也、

六月　茲監

隆季敬

津和野藩の佛寺廢合僧侶還俗并喪祭神佛併用の件

〔復古記〕七十四　明治元年閏四月十七日

○議定龜井茲監、封内衰頽ノ佛寺ヲ廢合シ、釋侶ノ還俗ヲ許シ、及ヒ喪祭ノ儀、神佛ヲ并用セント請フ、之ヲ聽ス、

一微祿或ハ無檀ニテ難立行寺院ハ、本寺ヘ取結度事、
一無住之寺院ハ、堂舍取除ケ地所引拂度事、
一歸俗望之僧侶ハ、隨意ニ還俗爲致度事、
一僧侶還俗之上ハ、人材ニ寄、仕官ヲモ爲致度事、
一自國庶民ニ至迄、志次第、葬祭之式ハ佛法ヲ相轉シ、古典ニ基キ、神道ニ爲致、邪宗調之儀ハ、役方ニテ嚴重ニ爲取糺度事、

右之通奉伺候、以上、

閏四月十七日　津和野侍從

辨事

御中

○批紙

五ヶ條共伺之通

向井[illegible]家記
[illegible]居記

隱岐國寺院再興の件

〔社寺取調類纂〕　四九四　(受)明治五年十一月十八日　(同)同廿日　(済)一月七日　(議)野間對有　(輔)黒田　(出仕)高木、三田　(課)寺務

鳥取縣管下隱岐國寺院廢毀相成居候儀ニ付伺、

指令案

伺之趣聞屆候條、廢寺名詳細調書ヲ以、更ニ可屆出候事、

但、跡地所分之儀ハ、總テ大藏省ヘ可申立候事、

隱岐國寺院之儀ハ廢毀相成居候ニ付伺、

今般御達ニ相成候寺院本末一派明細取調之儀、隱岐國出張所ヘ相達候處、同國之儀ハ、去ル巳年一圓寺佛廢毀仕、今日ニ至リ現在スルモノ一寺モ無之、既ニ舊濱田縣ニ於テ、別紙之通奉伺候趣ニ有之候、右ハ其儘滅寺ニ致シ候共、今更容易ニ再興ハ難相成模樣ニ相見候間、同國之儀ハ、斷然無寺院ニ可被仰付哉、此段奉伺候也、

明治五年十一月九日

鳥取縣權參事　河野通

鳥取縣參事　關義臣

大木敎部卿殿

「朱書」伺之趣聞屆候條、廢寺名詳細調書ヲ以、更ニ可屆出候事、

但、跡地所分之儀ハ、總テ大藏省ヘ可申立候事、

明治六年一月七日」

隱岐國歸俗之儀ニ付舊濱田縣ヨリ先達テ差出候書面寫シ四通

管内隱岐國之儀者、遠海之孤嶋ニテ、内地ト格別之風儀モ有之候上、帝陵モ被爲在、崇神之志厚ク、近來僧侶之身持等不宜所ヨリ、自然佛法ヲ相厭ヒ居、然處過ル辰年、御一新之節、祭政一致之御政度御復古之御布告拜聞、國民共感激、皇國之民タル者、神明之外可奉信者無之事ト相心得、佛祭ヲ忌、神祭ニ相改度願出、聞屆等モ相濟候處、豈圖ランヤ、爾後愚頑之者共、朝廷之御深意ヲ誤認メ、全ク廢佛ト相心得、其時機ヲ得タル思ヲナシ、竟ニ一島擧テ諸寺院ニ迫リ、本尊佛像等ヲ幽閉シ、僧侶ヲ說得シテ、歸農歸商等爲致候間、偶々宗風護持之志有之僧ハ、島中ヲ脫シ、本寺本山ニ罷登リ、全島一旦佛寺及廢毀躰ニ相成、右ニ付テハ、先權知事ニ於テモ、餘程致痛心、島民共ヘモ懇々加說諭候得共、何分數多之人心固執難相革、兎角時日相移候内、本山ヨリ歎願之趣ヲ以、辨事官刑法官ヨリ[illegible]ニ付、島民共ヨリ差出候書面ヲ以、及御答置、其後京都彈

亙幕ヨリモ、御尋問ノ次第モ御座候由、舊冬信寛奉命後モ、引續及吟味候得共、急ニ島民之氣方相改候樣モ無之、其內當節ニテハ、右諸宗本寺本山等ヨリモ、縣廳ヘ相迫リ、是迄之宗々ニテ、寺數減少相成候テモ、再興被下度之趣、歎願申出、實ニ甚之次第ニハ相聞候、併ナカラ素ヨリ人心之歸伏（依カ下同ジ）不歸依ヨリシテ興廢ハ有之儀、全島相厭ヒ居候ヲ、押テ聊爾ニ再建之儀申付候ハヽ、一島之騷動ト相成ハ眼前之儀ト被相考、其上歸伏布施物ヲ以テ相立候寺院ニテ、檀家不平有之候テハ、永續之見留無之哉ニ付、右出願向ヘ（請）ヽ、內々之趣（各カ）入ニ申諭、願書先相預リ置、其內彼ノ島詰少參事出濱之儀申遣シ、罷出候上、全島之人氣配等承合、樣子次第、信寛儀モ渡海、現在之人氣搜索仕、愈全島相厭ヒ候事ニモ候得ハ、手段無之候得共、若島民ノ中ニモ、佛法再興懇願之者モ有之候得ハ、（本寺本山）本山申出之通、減寺ニ被仰付候テモ、再興可被仰付哉ト奉存、（候）因テハ此際之模樣ニ寄リ、詮議詰之上、双方願書取揃、尙信寛愚見ヲモ相付伺出、御裁斷ヲ仰可申候得共、其內方今有形之處、先御屆仕候間、御開置可被下候、以上、

明治四年五月（廿八日）　濱田縣權知事　佐藤信寛

辨官御中（傍註ハ太政類典ニ據ル。）

隱岐國之儀、元來僧侶之驕奢不如法ヨリシテ、郡中公文年寄ヲ始、頭立心アル島民共、佛寺之下風ニ付、葬祭ヲ營ムコヲ相厭ヒ、過ル長年萬機御維新祭政一致之御體裁ヲ相窺ヒ、過激之餘、一旦舉而全島之寺院ヲ廢却シ、葬祭モ總テ神式ニ依リ、鄙數之改ハ諸々氏齋神職ニテ之ヲ取扱ヒ、忠利去秋渡海後、兩島村々巡廻候處、諸寺院中、本尊法具ハ申スニ不及、路傍之石佛木像ニ至ル迄、大小悉ク毀チ盡シ、僧侶之儀モ、七十餘人之内五十三人ハ、疾ク還俗シテ農籍ニ入、其餘ハ出國行脚ト成、更ニ再興ニヘキ形勢トハ相見ヘ不申、何分其儘差置キ難ク、追々之次第ヲモ相伺度心得ニテ、先寺院之御免除高并持來之田畑作得米等、皆總已後之所置振リ、巨細可達出段申達シ、地調中、富五月下旬各寺諸山ヨリノ使僧、本縣廳ニ迫リ、頻リニ再建之歎訴ニ及候旨、書札到來ニ付、御布告之書類取揃ヘ、六月十日ヨリ出船、同十四日著縣、前件之行形演達シ、使僧中ヘモ應接ノ央、去月朔日島前美田村其他再興志望之者共、大勢騷キ立候由、僧侶ヨリ相聞キ、種々申出モ有之候得共、在島役局ヨリ一報知無之、如何之儀哉ト疑惑ヲ生シ、事實探索、同月廿四日濱田ヲ辭シテ當月六日歸島、不取敢彼之支分局詰中野權少屬并別吏日高之者共呼寄セ、騷集之次第、其ニ事情ヲ相尋候處、全ク巷路之風說ヨリ、前途全アル者六七名、村々一致之氣配ヲ相闘ニ詐偽ニテ、使ヒヲ聞モ、右之者共ニ不參之向

ハ、其在所ヘ押寄スヘキナド、虛喝ヲ以テ相唱ナイ候ニ付、島前二郡十三村ノ内ニテ四五村ハ、前後ノ勘辨モナク、打驚ノマヽ出會候得共、素ヨリ願首(頭カ)タル者一人モ無之、徒ラニ時日ヲ經、詮ナキヿニ思ヒ、工(苦カ)情ヲ云者多ク、遂七八村ハ、最早三ケ年モ廢絕之寺院、今復再復之願達ハ不都合、無益ノ至、假令ヒ彼ノ方ヨリ卒爾ニ押寄スルト雖モ、此儀ハ同意難相成申合、少シモ關係セス、依テ會首之者共ニモ、殆ト困却之折柄、各村々役ヨリ說諭ヲ得、速ニ退散シ、愈佛寺再興荷擔者無之儀ヲ眞知スル而已ナラス、徒黨ラシク多勢ヲ招集候段、深ク後悔シテ、謝リ入候ニ付、強テ譴責ヲモ不加、唯最初發語之者一人、村内ニテ愼居候樣申付相成タル趣、顚末逐一承知致シ候、畢竟海濤遠隔之土地柄、在濱使僧之聞取リト、實際之振合ハ意味相違之儀有之、現今之場ニテハ、一派一寺之舊復タリトモ行屆候民信ニ無御座、不得止廢絕之御聞置被成下ヨリ外有之間敷、忠利ニ於テハ、見据申候、勿論朝裁ニ不渉、人氣ニ乘シ、自己ニテ廢毀ニ至ル既往之罪科ハ、夫々可被仰附ト奉存候間、彼此可然御清評相願候儀ニ御座候也、

隱岐出張

明治四年八月　　少參事　岡本忠利

濱田本廳

御中

御尋問ニ付御答奉申上口上之覺

當國廢寺毀佛一條ニ付、今般南島四郡、小前末々ニ至迄、歸依不歸依之情實不差包可申出旨、一同奉承知候、當國之義、中古以來天下一統之風習ニ隨ヒ、其法ヲ信向致シ、既ニ百ケ寺之御免除地ヲモ拜戴仕、寄附田畑モ不少差出、僧侶之崇敬等倶ニ不異、然ル處、時世之變遷ニ隨、民情モ自然ニ推移、抑佛教ハ大（一六）義ヲ素リ、僧侶輩モ徒ニ素餐ヲ致ス而已ナラス、偏ニ恣邪態ヲ逞シテ、却テ人情ヲ惑亂シ、恣情淫美（驕ヵ）ヲ釀成シ、恐ナカラ御教化ヲ妨ルノ至害之異端ト見込、御大政復古之機會ニ乘シ、一昨巳年ヨリ國中人別改之儀モ、神社ニテ相改、葬祭等モ斷然神儀ニ依リ、小前末々ニ至迄、人心一途歸順仕ル情實ニ御座候、爲一再復之取沙汰等於有之ハ、乍民心之疑惑ヲ作シ、終ニハ島中紛擾（一七）不容易混亂ニ立至ランモ難計奉存候、此段乍恐深ク御洞察被爲在、向後廢寺毀佛之生直難儀仕候樣、一同奉仰候、誠恐誠惶敬白、

隱岐國四郡各村

年寄中

公文中

明治四年六月　　百武拾壹名

當國中寺院之佛像、或ハ燒捨或ハ打毀候段、如何之子細ニ候哉之旨、去六月御尋問被爲在、一應口上書奉差上候處、猶此度嚴敷御糺問ニ付、事實詳悉奉申上候處、元來當國民情神道ヲ尊信シ、佛道ハ五倫ヲ紊リ政教ヲ妨ルノ邪道ニテ、僧侶之義モ、專檀家之施物ヲ貪取、徒ニ素餐ヲ致ス而已ナラス、驕放ヲ極候ヲ惜ミ、何卒佛法破滅之機會ハ無之哉ト、兼テ憤滿〔懣カ〕罷在候處、御太政復古萬機御一新之折柄、幸之時ト心得、各宗ニ有之佛像ハ不口〔殘カ〕中、國中寺院之佛像過半燒捨、間ニハ寺內幽隱之處ヘ投入、田畑之義ハ其村々ニテ取締人相付、作得之米麥ハ勿論、銅造之佛器等、總ニ預リ置申候、右樣之事態ニ御座候得ハ、僧侶モ多分歸俗願出候ニ付、歸俗爲致、右田畑作得之內ヲ以、口糧ヲ養候分差遣、飢餓ニ不及樣仕、强テ歸俗申渡候者ハ、一人モ無御座候得共、自然ト國中廢佛之姿ニ相成候ニ付テハ、右之情實、其御筋ヘ伺出、奉請御下知、處置可仕義、當然ニ御座候處、人氣ニ乘シ、手荒之取計ニ及候段、今更一統考當リ、何共恐縮之至奉存候、此段御再問ニ付、事實明白奉言上候間、此上ハ可然樣御上裁奉仰候、誠恐誠惶謹白、

公文中

六十名

明治三年八月

三、受 明治七年一月廿一日 （出）同上 （濟）同上二月二日 （差）五島 （宛）尾越書記 （指）宍戸、黒田 （出仕）鈴木、足立 （綴）同寺

島取縣伺

隱岐全島神道歸依ニ付、僧侶（各リ）後敎宗敎導職渋出差留度、別紙伺出之趣、地方便宜ニ任セ、御聞濟相成、左之通御指令、幷神道諸宗管長ヘ御達相成可然哉、

指令按

伺之通、

達按

神道諸宗管長

今般島取縣ヨリ別紙之通伺出候ニ付、則聞届候條、爲心得此旨相達候事、

年 月 日 輔

隱岐國教導之儀ニ付伺

當縣管内隱岐國之儀者、先年全島擧テ佛氏之宗門ヲ離レ、一般ニ神道ニ歸依シ、人民其崇奉スル所一途ニ出候ヨリ、信背ニ由テ派黨ヲ起シ候等之弊害更ニ無御座候處、近來七宗之教正及代理等、追々各地方へ派出、大ニ教導ヲ加へ候ニ付テハ、右隱岐へモ渡リ可申、教義之事一般之儀ニハ候得共、今更僧侶共、其法ヲ以テ教導ヲ加へ、小島寡少之人民、其信向スル所異同ヲ生シ候樣相成候テハ、教化之道モ如何可有之哉、甚不都合ト奉存候、右ニ付向後假令教導トイヘトモ、僧侶之教導ハ一切差留申度相伺候也、

明治七年一月廿日　　鳥取縣參事　三吉周亮

教部大輔宍戸璣殿

（朱書）「伺之通、

明治七年二月二日」

（受）明治七年　（回）三月廿七日　（丞）三島　（議）河口寛　（輔）宍戸、黒田　（出仕）鈴木、兒玉　（記）社寺

眞宗管長ヨリ鳥取縣下派出之儀ニ付伺

別紙願書數言之御指令ニテ疑團氷解致候譯ニハ難相成候ニ付、左之通口達ニテ可然哉、

口達案

鳥取縣下隱岐國廢寺之儀ハ、人民敎法ノ爭ヲ生シ、粗暴之所業ニ渉リ、惣代之者ヨリ、願書之趣有之、元濱田縣ニ於テ、其處分ニ及候儀ニテ、當一月鳥取縣下各宗敎導職派出差留度段伺出候ハ、再縣下騷擾ノ憂無之樣致候儀ニ付聞屆候、右ハ神道各宗共、人民之信向ニ被任候趣旨ニテ、卽統轄保護之道ニ有之候事、

東本願寺役者長遊界始三名之者ヨリ、別紙之通申出候、右者如何指揮可致哉、同人共疑團氷解仕候樣、判然之御指令被成下度、此段相伺候也、

眞宗管長
本願寺住職
大敎正大谷光尊

七年三月廿日

敎部大輔宍戸璣殿

本年二月鳥取縣管下門末へ布教者指遣シ候ニ付、役者ヲ以同縣へ掛合候處、別紙寫之通、本省之御指令ヲ以、隱岐國布教之義被相斷候ニ付、左之件々奉伺候、

一隱岐國義ハ、先年全島擧テ佛氏之宗門ヲ離レ、一般ニ神道ニ歸依シ云々、右ハ忌佛者之偏論ニ出テ、人民之情實ニ無之樣相見候、其故ハ、同國中信佛之向ヨリ、悲歎哀訴之苦情ヲ告テ來リ候者、時々有之、擧國佛氏之宗門ヲ離レ、一般神道歸依ト申義ハ不確實哉ニ奉存候、然ルニ僧侶之敎導差留之義ハ、御許可相成候ハ、云何ニ御座候哉、

一其崇奉スル所一途ニ出ル樣、信背ニ由テ派黨ヲ起シ候等之弊害云々、有多宗有之ヨリ、弊害ヲ生シ候義ニ御座候得ハ、已ニ內地神道之外七宗有之ヲ、統轄保護被爲在候ハ、何之爲ニ御座候哉、內地之多宗ハ、之ヲ統轄保護被爲在、同國ノミ派黨之弊害ヲ生スルト云ヲ以、僧侶入國布敎御許可無之ハ、云何ニ御座候哉、

一同國人民神道ノミヲ崇奉スルモ、僧侶入國布敎、人民之ヲ信スルモ、信不信共ニ人民之自由ニ有之、政家之被咎候義ニテハ無之、內地既ニ信佛ヲ被許候上ハ、同國之人民之信佛モ何之妨モ有之間敷候、若僧侶同國ニ入ルヲ許シ給ハス、人民亦佛敎

ヲ信スルヲ許シ給ハズハ、儒教ヲ信スルハ國憲ニ觸ルヽトセン歟、若國憲ヲ觸ルヽナラハ、何故ニ内地ハ儒教ヲ信スルヲ許シ給フヤ、此義ハ云何ニ御座候哉、

一、人民其信向スル所異同ヲ生シ云々、右ハ各教所尊之躰ヲ以見ヲ立ル也、若所尊之躰一ナラサレハ不都合ト申義ニ候得ハ、内地既ニ神道七宗ノ別有之、亦不都合ト可謂歟、然ルヲ合議作立被成候御省モ、亦不都合ト可謂歟、是教家之見ト大ニ相違致シ候、今體神道七宗所教各異ニ候得共、人民ヲシテ三條之御趣意ヲ奉戴セシムルハ同一也、是今頑固之民ト雖、其歸向之教法ニ因テ、終ニ三條之御趣意ヲ辨知スルニ可至候、若教法各異ヲ非トシ、歸向之教ヲ開クヲ不得、偏ニ一教ヲ以强テ信セシメントス〔ル脱カ〕時ハ、畢竟其教ヲ不信ノミナラス、終ニ三條之御趣意迄奉戴セサルニ至ル儀ニ奉存候、然ニ僧侶入國布教ヲ御許可無之ハ、云何ニ御座候哉、

右奉伺候間、何卒至急御指令奉願上候也、

東本願寺役者

永順寺前住職

明治七年三月四日

石川舜台 印

法融寺住職

篠塚不著印

萬德寺住職

長遊界印

管長

大敎正大谷光尊殿

播磨小野藩寺院合併伺

〔太政類典〕第一編第百三十四巻教法寺院三

四年四月四日

東京府下麻布櫻田町妙善妙祝兩寺合併

小野藩伺辨官宛

麻布櫻田町ニ有之候妙善、妙祝ノ兩寺ハ、私祖先ノ開基ニ御座候處、右妙祝寺義、近來堂宇共外トモ追々損所出來、當今殊ニ及大破候得共、平常手當方ハ勿論、修理難行屆御座候ニ付、素意ニハ無御座候得共、不得止事情御座候間、右妙善寺ヘ合寺爲仕度奉存候、不苦義御座候哉、此段奉伺候、以上、三年十一月二十九日附

同藩願辨官宛

麻布櫻田町ニ有之候妙善、妙祝ノ兩寺ノ内、妙祝寺堂宇追々及大破候ニ付、右妙善寺ヘ合併爲仕度段、舊臘奉伺置候處、其後合併ノ儀ニ付テハ、本寺法類幷寺檀トモ故障有無詳細相糺、調書ヲ以テ可伺出御布告ノ趣耳承仕候付、今般妙善、妙祝兩寺

ノ請書、并本寺法類檀下トモ、故障無御座候段、證書差出申候ニ付、本書ノ儘差出奉伺候、不苦候御座候ハヽ、何卒至急御指揮被成下候樣、此段奉願候、以上、四年二月三日

（朱書）「書面妙善、妙祝ノ兩寺合併ノ義被聞屆候條、東京府ヘ可申立事、四年四月四日」

奉差上一札ノ事

一今般合寺被仰出、委細承知候、此段御請奉申上候、以上、

明治四辛未年正月

妙祝寺日實
妙善寺日敬

一柳樣
御家令御中

差上申一札ノ事

一麻布櫻田町ニ有之候妙善、妙祝ノ兩寺トモ、其御藩知事樣御祖先御開基ノ義ニ付テハ、右妙祝寺近來堂宇追々及大破、不被爲得止、今般妙善寺ヘ合併被成候段、妙善

妙祝両寺ヘ御申達被成候ニ付テハ、私トモヘ為御念、異存無之哉、御寺ノ趣承知仕
候、先般御藩制被仰出候付、同宗ノ両寺御開基ト一作中、両寺ノ御修理被為行届
御主意御尤至極ニ奉存候間、法類一同其他檀家ニ於テモ、毛頭故障申者無御座候、
此段為後年證書奉差上置候處、依テ如件、

明治四辛未正月

檀家總代
赤坂田町五丁目
梅田五郎兵衛

法類總代
麻布谷町
妙像寺

小野御藩
一柳様
御家令御中

前書ノ通相違無御座候依之加印仕候、

播磨小野藩寺院合併伺

牛込原町

幸國寺

美作津山藩廢寺の件

〔太政類典〕第一編第百三十四卷教法寺院三

津山藩上中辨官宛

管内寺院廢止之分取調差出候樣、去午十一月中御達御座候ニ付、則別冊差出申候、

以上、四年四月廿二日
（別冊欠）

岡山藩神社取調上申

〔太政類典〕第一編第百廿二卷　教法　神社一

池田侍從家來　澤井宇兵衞上申辨事宛

去春來神社ノ儀御布令ノ趣、奉畏候、則有無廉々左ニ奉申上候、

一勅祭ノ神社云々、

勅祭ノ神社、御宸翰勅額等無御座候、

一佛像ヲ以云々、

佛像ヲ以神體トイタシ、或ハ本地抔ト唱、佛具ヲ以神前ニ掛候類、從來無御座候、

一佛像ヲ社前ニ掛云々、且社人僧侶不相善云々、

神佛混淆ノ儀、社人僧侶ノ爭等無御座候、

一神職家内ニ至迄神葬云々、

寛文中改法以來、神職家族ニ至迄、神葬ニ仕居申候、

一延喜式神名帳ニ書載云々、

神名帳ニ書載ノ神社衰替斷絶ノ向モ御座候間、此節取調中ニ御座候、

一大小ノ神社社家ヘ爲御布告、相應ノ社家共觸頭被仰付候間、一郡ニテ一兩人程、人撰書付差出候上ニテ、御治定可被仰出旨御達御座候處、弊藩於テハ、兼テ左ノ通夫々申付置候間、此度更ニ人撰不仕候、二年二月廿六日書役

社方總頭　見垣左衞門

同大頭　岡　越後

同　中山縫殿之介

同　前川　左仲

同組頭御野郡　今村酒造介

同上道郡　藤井　和泉

同　坪田織之輔

同邑久郡　兒仁井主水

同　片桐右膳

同　高原環

同　出射左近

同和氣郡　川崎豐後

同　那須傳

同

松末　隼太

同磐利(梨)郡

中村　佐渡

同赤坂郡

岩戸覺之助

同

難波　金吾

同津高郡

土井左兵衛

同

首　左近

同

大守　石見

同

荒木右兵衛

同兒島郡

同　三宅　修理
同　筒井杢之允
同備中　西山愛之輔
同　阿部　圖書
同　小鄉　播磨
同　水子守衛之輔

以上

同上同上

一神社混淆ノ社號ハ、神社帳朱書ノ通、改號可被仰付哉、則神社帳十四册相添差出申候、

一諸社遷宮幷神幸神事等ノ儀、是迄ノ通取計不苦候哉、

一神拜式等ノ儀ハ、如何相心得可申哉、

一東照宮社號幷祭祀等ノ儀、如何相心得可申哉、

一新田地へ新ニ神社造立ノ儀ハ、如何可有御座哉、

一社家宗門御改ノ儀ハ、如何相心得可申哉、

一社家位階ノ儀、是迄ノ通可被仰付哉、且出願等ノ儀ハ、如何相心得可申哉、

一社家職號ノ儀、是迄社務ト相唱候分ハ、大宮司ト相改、祠宮神職ト相唱候分ハ、神主ト相改候テハ如何可有御座哉、

一神子禮日幷神樂作法ノ儀ハ、是迄ノ通ニテ不苦候哉、

右ノ件々奉伺度、神社掛リノ者上京仕候間、此段宜御指揮被成下候樣、奉希上候、以上、

二年二月廿六日

同上口上

一寺院鎭守所々ニ御座候へ共、神號ヲ借リ、佛像或本地抔ノ類、佛具ヲ以相祭リ居申儀ニ付、神事ニ係リ候祭器等ハ、一切拵除爲致申候、

一右ノ外此節取調居申儀ハ、追々可奉伺候間、此段全テ御届申上置候、以上、二年二月廿六日

倉敷縣百姓離檀神葬祭願の件

〔太政類典〕第一編　第百三十五卷　教法　葬儀僧尼

倉敷縣伺　葬官宛

當縣支配所備中國窪屋郡倉敷村百姓林源介外兩人ヨリ、別紙寫之通願出候、右願面ノ通承屆不苦候哉、且向後支配下ヨリ追々右樣願出候者有之候節ハ、當縣限リ承屆置可然哉、此段御伺申上候、以上、四年三月日缺

(朱書)「伺之趣、神葬祭相用度旨、追々願出候ハヽ、離檀爲差出候上可聞屆事、」

乍恐以書付奉願上候

窪屋郡倉敷村百姓源介外兩人奉申上候、大政御復古ニ付、先般神佛混淆不相成旨御布告、難有拜承仕罷在候、然ル上ハ私共ニテモ、乍卑賤　皇國ノ御民、其所由相極候得ハ、乍恐神明ノ遠裔ニ相違有之間敷候處、佛法盛ニ被行候テヨリ、各々祖先ノ靈、佛家ノ奴隷相成、久敷歎息仕居候折節、御一新ノ際會ニ御座候間、向後佛法宗門相離レ、本來御國風ノ葬祭ニ仕、祖先ノ汚辱ヲモ相清申度候、何卒此段御聞濟被爲下候ハヽ、實

二生々世々ノ鴻仁恤難有奉存候、以上、

明治四年辛未二月

貞右衛門

正太郎

源介

倉敷縣

御廳

右之通奉願上候ニ付、連印仕差上申候、以上、

庄屋 大橋平藏

年寄 大原幸三郎

山口藩自葬祭許可屆

〔太政類典〕第一編 第百三十五卷 教法 葬儀僧尼

山口藩伺辨官宛

當藩士族其外、自葬祭志願ノ者ハ可差許ト奉存候、此段御屆仕置候、以上、四年七月藩

防長兩國の寺院廢合の件

〔勤王護法錄〕（擇信上人）明治三庚午歲

閏十月九日

一夜陰下間宮恩房來告示候、末寺合廢之儀、防長兩國の處、莊嚴寺へ、今日申談、先東京周旋方鐵然默雷方へ參り、事情開陳、其上可報知、尙鐵然默雷二僧の內、上京にて可申出樣、今日申渡云々、

白峯寺事件歎願書

〔社寺取調類纂〕一三〇

（受）明治七年十一月廿八日　（回）同廿八日　（済）十二月二日　（議）二見正則　（動）宍戸、黒田

（出仕）細木、丸山、三浦、岡田、錦織

眞言宗管長中教正日野霊瑞ヨリ伺名東縣管下白峰寺事件寺并陵掌別立候件

指令案

書面之趣地方官ヘ可爲申立候事、

別紙名東縣下白峰寺云々事件ニ付、該縣取締善通寺住職佐伯旭雅外二名ヨリ申出之次第、取糺候處、實ニ不得止事實ニ付、歎願書面之通、廢寺不相成、末世相續出来候樣、御處分被成下度、此段共ニ奉願候也、

明治七年十一月

眞言宗管長
中教正日野　霊瑞

教部大輔宍戸璣殿

（朱書）「書面之趣地方廳へ可爲申立候事、

明治七年十二月二日」

白峯寺事件ニ付歎願

名東縣管下第十九大區一小區讃岐國阿野郡青海村白峯寺住職松山惠日、右ハ先般以愚札申上候跡、其後住職被免、唯陵掌ニ被付、即今ノ形勢ニテハ、白峯寺無住、追々廢寺ノ樣ニ、縣廳ヨリ太政官幷ニ教部省へ御伺ニ相成候哉ト愚推仕候、抑白峯寺義ハ、弘法大師ノ開基、四國八十八ケ所靈場ノ内ニ御座候、若廢寺ニ相成候テハ、一宗ノ衰替ニモ相成、歎ケ敷奉存候間、泉涌寺等ノ類例ニ準シ、寺幷ニ陵掌ト別立ニ相成、住職モ早々相付候樣、御本省へ御歎願被下度奉存候也、

明治七年十一月十三日

隨願寺住職　八輪　光榮

大護寺住職　秋篠　實淺

善通寺住職

佐竹　亘雄

異言局

御中

高松藩離檀處置伺

「太政類典」一　第一編第百三十五巻　教法　宗教四

高松藩伺　辨官宛

神葬祭執行仕候者、舊來ノ檀那寺離旦仕度願出候者御座候ハヽ、承置不苦儀ニ御座候哉、此段奉伺候、以上、三年十一月八日

（朱書）「故障ノ筋無之候ハヽ、不苦候事、」

石鐵山に於ける神佛分離

〔社寺取調類纂〕四七七

當藩管内氷見村前神寺別當仕候石鐵山藏王權現之儀ハ、往古ヨリ兩部習合ニ御座候處、今般奉戴朝旨、神佛分別方精々取調候處、天正之兵火ニ、同寺舊記悉ク燒失、更ニ確證無之、唯役小角開山之儀ハ、口碑ニ相傳リ、僧灼然上仙住止山頂精進練行等之儀、文德實錄ニモ相見、且現在目的ト仕候彌山安置之藏王權現ハ、佛躰ニ相違無御座、旁現在之實跡ヲ以、佛躰ト取極御届申上候儀ニ御座候、然ルニ、右藏王權現之儀ハ、元小松藩ニモ奉祀仕來候處、今般同藩ニテハ、神ト取極、御届申上、且別當横峯寺トモ復飾爲致候由、右ハ双方御届方齟齬仕、第一一致御趣意ニモ相碍リ、且ハ高山靈場之儀ニ付、一旦御届申上候儀ニハ御座候得共、何卒以朝裁神佛引分被仰付被下候樣仕度旨、申付越候、此段奉願候、以上、

明治二年四月廿九日　西條藩公用人

岡　八郎

辨官
御傳達所

（朱書）「附紙
神社ト相定可申事」

全テ御布令之御趣意ニ基キ、當藩管內石鐵山藏王權現奉祀之儀ニ付、先般別紙之通リ、朝裁奉伺候處、御上紙之通〔被カ〕へ仰出奉畏候、然ル上ハ現今彌山ニ安置仕有之藏王權現ハ、的然佛像ニ相違無御座候ニ付、斷然取除ケ、且從來常住ト唱へ建置候堂宇等破却仕、〔純〕雜一之神道ヲ以、祭式仕度奉存候、就テハ右高山之神靈ヲ崇敬之石鐵神社ト相唱へ可申哉、又ハ何レカ之神戶ヲ勸請仕可申哉、重キ神祇之儀ニ付、管見ヲ以取究メ候儀ハ奉恐入候間、再應奉伺、且藏王權現之儀ハ、純一佛名ニ相改、向寄之地へ安置爲仕置可申哉、此段モ可奉伺旨申付越候、此段奉願候、以上、

西條藩公用人
德永　義史

明治二年八月八日

辨官

御傳達所

元西條藩石鐵山藏王權現改稱之儀伺差出候ニ付、御問合ニ候所、右ハ石鐵神社ト相稱シ可然、在來權現之像ハ、別ニ不及祭祀事ト存候、右件過日從内田少辨殿福羽少副ヘ御欠（掛カ）合之儀モ有之ニ付、此段御回答申進候也、

明治二（三カ）年閏十月廿五日　　神祇官

辨官

御中

〔社寺取調類纂〕五一二

縣社石鎚神社之儀ニ付伺

當縣々社石鎚神社ハ、四刕最大ノ高山ニシテ、平地ヨリ殆ント九里ノ登リヲ經テ、頂上ニ小銅社ヲ安置ス、舊暦五月下旬ニ至リ、積雪全ク消スルヲ待タサンハ、得テ登ルヘカラス、故ニ五月廿五日ヨリ六月朔日迄ヲ期シテ、衆庶絡繹相攀ツ、其他常ニ到ルヲ得ス、故ニ所在便宜ニ就キ、遙拜所三所ヲ設ク、其一ハ、嶺前神寺、平地ノ去ル三里、山上字常住ト申所ニアリ、秋冬

（[illegible]）其二、横峯寺、（[illegible]）其三、里前神寺、（新居郡氷見村ニアリ、[illegible]西條[illegible]）共ニ僧侶ノ奉祀ニ有之候處、神佛混淆取分ニ付、去ル庚午年、元藩ニヨリ、相伺候節、神社タルヘキノ御指令ニテ、奥前神寺ハ、里前神寺ノ前住大伸、横峯寺現住某、共ニ復飾シテ奉祀ス、然ルニ里前神寺現住大律復飾ヲ背ンセス、故ニ靈スル所ノ遙拜所ヲ藏王菩薩トシ寺名ヲ存ス、且西條藩ヨリ相伺候節、在來ノ權現像ハ、祭祀ニ及ハスト御指令有之候銅像ヲ、再ヒ寺持ノ山上ニ安置シ、從前頂上鎮座ノ姿ニ摸擬シ、示（爾カ）來ノ期日ヲ以テ祭祀候ニ付、諸人右錢權現下山ト相心得、爭テ之ヲ渴仰ス、故ニ頂上常住横峯寺其名アリテ實ナキカ如シ、殊ニ一个ノ山靈ヲ神佛二途ニ涉リテ祭祀スル、甚タ謂レナキ次第、大躰御趣意ニ相悖リ、恐縮之至リニ付、何分ノ所（マヽ）致之處遷延候中、引渡之際ニ至リ候旨、舊石鐵縣ヨリ巨細申遣リ之次第モ有之、依テ元七等出仕西園寺公成始外官員共及檢査候處、其條相違モ無之ニ付、僧侶ハ復飾之儀ハ說諭候得共、更ニ肯ンシ申サス、然ル處寺院昨春悉皆燒亡ニ及ヒ候ニ付、再建候ハヽ、別ニ地ヲ占メ可申ハ至當ニ候得共、方今桑門ノ景況ヲ察スルニ、重ネテ一伽藍地ヲ創造スル時ニアラス、幸ヒ末庵藏王院ハ無檀無住ニシテ、目今賢流集ニ付、此方ヘ移住可致旨、區戸長ヲ以テ申諭候處、其旨了承シ、同寺檀徒連署願出候間、承屆、右權現像ハ御指令ノ

通、祭祀相止メ、封印ノ上、區戶長へ相預、一先事濟ニ相成候、其後寺僧及檀中共ヨリ銅像下ケ渡之儀願出候得共、左候而ハ、又々衆庶取惑ヒ候ハ必然之儀ニ付、難承屆、兵迚別紙繪圖ノ如キ銅像ニ付、(圖ハ見エズ)神靈へ所轄中付候モ如何敷、最早斷然銷却可申哉、右御屆旁圖相相(衍カ)添、相伺候、可然御詮議奉仰候也、

明治六年十一月廿六日　愛媛縣參事江木康直代理

愛媛縣權參事大久保親彦

敎部大輔宍戶璣殿

(朱書)「伺之通、

明治六年十二月廿二日」

(受)明治六年十二月十日　(回)同上　(濟)同廿二日　(承)三島　(議)川原塚茂太郎　(編)黒田

(出仕)鈴木　(課)社寺考證

愛媛縣ヨリ右鐵神社有之佛像銷却之儀伺指令案、

伺之通、

議案　相場兼致　田村義實

本文見込箋至當ニ候ヘ共、如此ノ類尚各國ニ往々有之、本文ノ銅佛破却致候以上ハ、此類一般破却セサルヲ得ス、將タ伺出レハ、之ヲ處分シテ破却セシメ、伺出サレハ默許スレハ、偏頗ニ渉ラン、畢竟里前神寺住職ナルモノ、復飾ヲ拒ミ、況ヤ銅佛ヲ私有シ、糊口安逸セント試スルノ策意ヨリ如此再生ノ所分ヲ願シ、不都合ニ付、今後同寺下附之儀ハ斷然差止メ、外同宗寺院ヘ附授爲致候ハヽ、神佛ノ區域判然シ、從テ土地人民希望ニ任セ參詣爲致候共、不苦儀ト存候、

指令案左之通ニテハ如何

書面銅佛之儀ハ、外同宗寺院ヘ引渡可申事、

但、信仰ノ者參詣爲致候儀ハ、可爲勝手事、

（朱書）下ケ紙　　小中村清矩

藏王菩薩ト稱シ、寺院ニ安置セハ、神社ノ紛ルヽ事モナカルヘシ、依而同意ス、

（朱書）下ケ紙　　尾越蕃輔

但書削之如何、

再議　　小栗憲一

指令案ハ附紙ノ見込ノ如シ、外ニ全國内猶此類多カルヘシ、已ニ小倉縣英彦山ニハ金像ノ佛高九尺餘ナルモノ三躰有之、近來戸長共毀テ以テ學校ノ費ト爲ン事ヲ謀ル由承候、方今文明各國共、是等ノ古物ハ相存シ、後世徵古ノ一端ニ相殘シ置度ニ付、一般御布達ニ相成、右樣疎暴野蠻ノ弊習无之樣致度、仍而、

布達案　　府縣へ

官國幣其他古社等ニ於テ、金佛、銅佛像等現在往々銷却ノ儀相聞へ、文明ノ國風ニ背馳候儀ニ付、右現存ノ類ハ、早急取調、近隣寺院へ引渡、其旨可申出事、

三議　　嶋田　蕃根

銅像ノ圖ヲ見ルニ、藏王菩薩ニ紛レ无之、里前神寺ニ奉祀スル至當ト云フヘシ、古來神社ナル石鐵神社ヲ藏王菩薩トスルハ、神佛合習ナリ、權現ト唱へ曖昧タル像ナレハ祭祀セシメスシテ然ルヘシ、彼像ハ宛然タル佛像ナルヲ封印スルハ、偏僻者ノ私論ト云ヘシ、

指令案

書面銅像ハ里前神寺ヘ〔寄託カ〕致安置事、

但、後寺燒亡ニ付、齋王陵ヘ引移候儀ハ不苦候事、

四議　　奥宮正由

卿等既ニ神官僧侶ヲ以テ教導ト爲ス、則強テ排佛セントスルハ公論ニ非サルニ似タリ、此等ノ議宜ク用ヒサルヘカラス、錯卿ノ令宜ニ下スヘキニ非ス、況ヤ古来万民ノ信スル所、且久シク由緒正キモノヲヤ、徒ニ古器ヲ損スルノミニ非ス、大ニ民情ヲ騒カスモノアリ、是僕偏ノ説ニ非ス、薄衆之議ナルカ、要スルニ只公平ニ歸スルノミ、因テ指令ハ張紙ノ通ニシテ可ナルヘキカ、

（朱書）「下ケ紙」

神寺ノ稱ハ、方今不都合ナルヘシ、　　小中邨清矩

（朱書）「下ケ紙」

神寺云々ハ、小中邨氏ノ說ノ如シ、然レトモ、神寺ト云フハ古ノ神宮寺ナルヘケレハ、　　栗田寛

コノ緣起ニヨリテ、石鐵神社ノ故實ノ考ヘ知ラルヽ事モアラン、因テハ神寺ノ號ハ勿論廢サセ、其緣起ヲハ指出サシムル樣、御指令アリタキ事也、

五議　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　足立　正聲

諸課評論自ラ公平ニハ相聞候得共、其實地弊害有之、衆庶ノ迷惑ニ至リ候ノミナラス、其根本タル石鐵神社ノ興廢ニ關係致候趣ニ付、縣官ノ處置自ラ得其宜、他ノ妄意武斷廢佛毀釋ノ所爲ニ及者ト同日之論ニ非ラス、且其銅像ナル者モ敢テ可惜程（ノ）ニ物ニ不相見候得ハ、何之通御聞屆被成候方可然存候、

十二月十八日

伊豫新谷藩合寺伺

〔太政類典〕第一編　第百三十四卷　敎法　寺院三

新谷藩伺　辨官宛

藩內市鄕ノ在寺、不苦儀ニ候ヘハ、追々寄寺仕、無益ノ弊費相除キ度、御差支モ無御座

儀ヘハ、前條ノ通取計度（落カ）段奉伺候、以上、三年十二月十七日藩

（朱書）「人民ノ適宜ニ出テ、本寺法類ニ故障無之、僧侶授産ノ方法モ相立候ハヽ、見込ノ趣、其時々伺ノ上、可致處置事、」

伊豫新谷藩神葬祭伺并神祇官意見

〔太政類典〕第一編第百三十五巻 教法 葬儀僧尼

新谷藩伺神祇官宛

自今藩知事ヲ始、士族卒庶民ニ至ル迄、神葬祭ノ儀望向ハ、勝手祭式爲行度奉存候、此段奉伺候、以上、四年正月二十七日藩

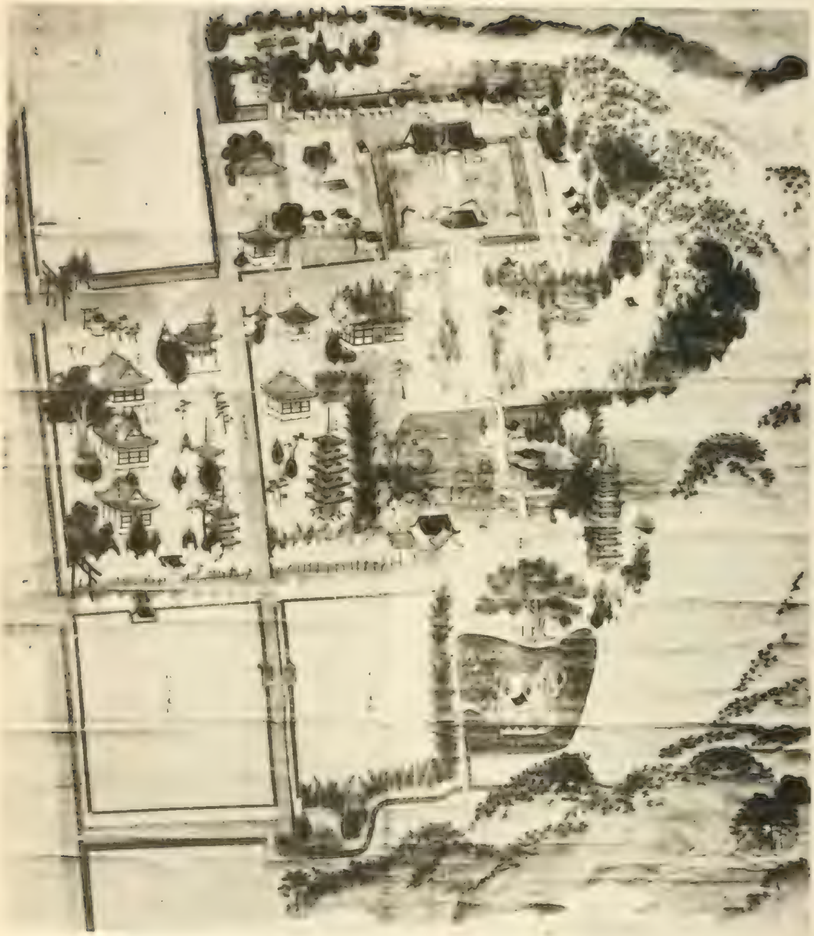
神祇官意見神官宛

新谷藩ヨリ神葬祭ノ儀伺、右ハ一定御規則相立候迄ハ、藩ニテ郡宗改ノ假規則相立候上、取計可申樣御達有之度存候也、四年正月三十日

太宰府神社の神佛分離

伊東尾四郎氏報

太宰府神社は、筑前筑紫郡太宰府町にある、藩政時代の社領二千石、其の內奉仕せる主なるものゝ祿高を示すと、
五別當　大鳥居五百石　小鳥居二百石　御供屋三十石　執行坊二十三石　浦之坊二十石
三宮司　滿盛院三十五石　勾當坊二十八石　撿按坊二十七石
三　綱　上座坊四十石　寺司坊八石　都維那坊五石
原八坊　座主華臺坊四十石　六度寺二十三石　石築地坊二十三石　常修坊十五石　十境坊八石　寂門坊五石　眞寂坊四石　明星坊三石
原八坊は僧侶で讀經する、五別當、三宮司、三綱は讀經はせぬが何れも圓頂で神事を掌る、
太宰府神社に古圖が二つある、一は製作の年代が詳でないが、大分古いもので、一は



維新頃のものらしい、前者には九重塔や五重塔や三重塔がある、これを後者と對照比較すると、諸建物の狀況が大に異つた所がある、二者共に寫眞版にした、此二圖を熟覽すると、昔の太宰府神社の狀況がよく判る、

享和年間尾張の菱屋平七が「筑紫紀行」にも佛堂佛像の事を記してゐる、

南方の中島には二重の塔あり、境内に觀世音を安置す、かくて仁王門に入れは神馬厩、歌會所、御供所、寶藏、文庫あり、…又聖德太子堂、一切經藏、今尾宮、三十三體觀世音堂、四天王堂、小太郎左近社、今宮などの前を經て、樓門に至る、…東の方に八角の二重の塔あり、…内に唐金の香爐有、…さて和泉殿、…寶滿宮、高良大明神、宰相殿、…理趣院、本尊十一面觀世音を安置す、新羅大明神、荒人堂、安養院、本尊阿彌陀如來を安置す、貴布禰大明神、若宮社、山王權現社、御靈大明神、人麿大明神、藤大夫社、…櫛田大明神、西法華堂、此堂には大威德明王を安置す、脇立には普賢菩薩、文殊菩薩を安置す、東法華堂、毘沙門を安置す、…大神宮、法性坊、玉尊、尼尊、柳尊、…楓宮、福部大明神、…老松大明神、…大講堂、藥師如來を安置す、此藥師佛いにしへ安樂寺の本尊なり、

今日太宰府神社で佛寺關係のもの現存せるもの凡左の通り、

(一)双輪塔　現物を視ると上部には享和二年、下部には弘化四年の文字がある、こ

れは一旦博多の人の手に渡つたが、明治二十二年に再建したものらしい、

(二)波羅密院(陀り)心經を刻した銅塔　天保庚子十二月廿五日釆山上村樗太壽薰沐拜書とあり、

(三)雲　版　奉寄進安樂寺文治三年八月の文字がある、

(四)大鰐口　奉寄進安樂寺天滿宮御寶前、留守大鳥居權別當法印信寛、願主筑紫上野介豐臣朝臣廣門などの文字がある、雲版もこれも寶物館に納めてある、

もと太宰府にあつた佛寺關係のもので、現今太宰府以外の地に散在して居るものは、左の通、

(一)本殿にあつた觀音像　今朝倉郡甘木町安長寺にある、直徑四尺七寸もある圓き金屬製のもので、其の中程に佛像がある、

(二)鐘樓にあつた鐘　今觀世音寺にある、此鐘はもと觀世音寺にあつたもので、後に鐘樓に置かれてゐたが、神佛分離の際、再び觀世音寺に移されたのである、



三)仁王門にあつた仁王　今は觀世音寺に移されて現存して居る、
四)華臺坊にあつた十二尊天像　今嘉穂郡飯塚町太養院に十二體悉く存してゐる、これは明治二年九月に太養院から三拾兩を出してゐる、

太宰府神社の佛像、佛具、一切經、袈裟の類は肥前田代の天本茂左衛門が巧妙に請ひ受けて持ち去つた、

太宰府の廢佛棄釋の時にも、福岡縣から祝部秀麿が出張した、然るに太宰府に於ては、前述の如く佛像佛具類の多くは、田代の天本茂左衛門が請ひ受けて持去つたから、大袈裟の破壞は無くして、終了したやうである、

本稿は松王路信充、不老繁雄、宮垣暢丸、島田寅次郎、高城玄龍諸氏に負ふ所が多い、

太宰府天滿宮に於ける廢佛

天滿宮の御本宮筑前國太宰府天滿宮の御神體は、道眞公の木像でなく、明治初年迄は確に菅公自筆の法華經八巻であつたさうな、此の法華經八巻は菅公左遷の後太宰府で三年間一室に垂れ籠めて、日頃信ずる法華經八巻を寫した、其の經文が菅公

歿後御神體として祭られて天滿宮が建てられたので、菅公が心血を注いだ眞筆は、千年以上の長い年月、天滿宮に神體として保管されて居たのである、然るに明治初年神道說が盛んな時、天滿宮の坊主が故意に之を燒棄てゝしまつた、從來天滿宮の宮司は菅家の血統を引いたものに限るとの習慣律があつたので、當時の宮司は菅家の流れを汲む五條家の人であつたが、世に阿るため、從來僧態で居たのを還俗し、神體が法華經八卷である事を知つて、それは怪しからぬ、天滿宮は神樣であるに、法華經を神體として居るなどは、以ての外と謂つて之を火中に投じて燒いて仕舞つたのである、以上は大內青巒居士の談話であるが、法華經八卷を火中に投じた事實は、明治十七年居士が太宰府で佛敎演說をした時、當時七十餘歲で隱居して居た宮司が、青巒居士に面會を求めて、世の中が坊主を攻擊するのを憚つた私の輕擧から、むざ〳〵國寶を火中に投じたのは、誠に申譯のない次第ですと、淚ながら懺悔したと云ふ、何はしかれ有名なる太宰府の神體が、遠く維新の昔に燒かれて居るとは、今更に驚かるゝ事實である、（明治四十四年六月七日鷺城新聞）

竈門神社の神佛分離

伊東尾四郎氏報

竈門神社は筑前筑紫郡寶滿山にある、寶滿山は修驗の山で、座主楞伽院の外二十五坊あつた、二十五坊は左の通、

南坊　倉富坊　東院坊　岩本坊　修藏坊　仲谷坊　尾崎坊　新坊　鳥居坊
道場坊　淨喜坊　井本坊　大谷坊　福壽坊　經藏坊　福泉坊　松林坊　榮門坊　龜石坊　奥坊　歡明坊　吉祥坊　福藏坊　寂光坊　財德坊

社領五拾石、建築は藩主行ひ、二の鳥居の附近には講堂、鐘撞堂、行者堂等があつた、講堂には十一面觀音、毘沙門天等を、行者堂には役行者の像を安置し、又藥師堂、護摩堂、法華堂、九輪塔等もあつた、明治四年坊廢せらるゝ際は、坊中二派に分れ、改革派即ち廢佛派は座主楞伽院が首領で、九坊これに屬し、守舊派即ち奉佛派は龜石坊等十六坊がこれに屬した、然るに縣から祝部秀麿が出張して廢佛棄釋を行ふに及び、奉佛派は之に抵抗するを得ず、破壞せらるゝまゝに任せた、

寶滿の廢佛棄釋は隨分徹底的に行はれたものらしい、

木像や佛具は火をつけて燒いた、太宰府から石工の谷川藤七といふを作ひ來り石に刻した梵字などは鑿を以て削り去らしめた、又五百羅漢の如きは、これを谷底に突落し、或はこれを割りなどした、

鏡や金佛は、これを地金で博多の金物師礒野に賣つた、下宮の祇園社には火をかけた、これは佛像を安置して居たからであらう、此の如く破壞は完全に行はれたが、しかし破壞を行ふ前に、佛像佛具など寄附者の手に返せるものは返した、例へば大般若經は四三島の酒屋の寄進であつたから、其處へ返したといふやうに、

五百羅漢は、成程首の無いのや顏面の無くなつたのや、胴が二つに折れたのやが澤山ある、しかし間には完全なものが無いではない、一の鳥居は今も存して居るが、これには座主平石坊法印弘有の文字がある、又一の鳥居の傍には一字一石塔もある、これ等は谷川の鑿の見舞を受けて居らぬ、

本稿は木村卯平氏及大閤重美氏母堂の談話に負ふ所が多い、



英彦山と小倉藩不和の件

〔復古記〕九十一

元年五月廿四日

小倉藩、英彦山ノ僧徒ト相善カラス、是日諭シテ其舊ニ復セシム、

　小倉藩ヘ達

英彦山之儀、近年其藩ト故障有之、難澁之趣ニ候所、方今御一新之際ニ候間、總テ舊ニ復シ候樣取計可申旨御沙汰候事、五月廿四日 小笠原忠忱家記

　英彦山僧徒願

　　謹白

今度追御趣奉恐入候得共、英彦山之義ハ、昔時

嵯峨天皇ノ御宇、

勅願之命ヲ蒙リ、守護不入ノ山ニシテ、四方七里ノ神領ヲ以テ、法務相勤仕居候處、

其後中古ヨリ神領ヲ削ラレシ傳來、豐前國役トシテ、國主ヘ高千百石寄附有來、

諸坊中ハ十方檀那ノ施物ヲ以テ、年々法務關如ナク、相勤
御所ヘ幣符獻上致來候處、癸亥ノ春ニ至リ、
勅命ヲ以テ敵國降伏ノ祈念被　仰出候ニ付、弘安年間ノ舊例モ有之、謹テ遂修行、
座主ヲ始、勤
王相唱候處、其頃ハ小笠原ニモ、臺場築キ有之候ニ付、弊山ヨリモ志ヲ寄セ、些少ナカラ夫錢ヲ以テ手傳致シ候得共、其後同藩モ鎖港談判ノ義ハ、幕府ノ指揮有之迄ハ、猥リニ攘夷致シ間鋪旨達シニ及ヒ候處、弊山ニ於テハ
勅命降リシ上ハ、小笠原ノ處置ヲ待ヘキニ非スト、勤王ノ國ヲ相慕ヒ、志ヲ立ント欲ル處ニ、長州ノ藩兩士登山ニ相成、座主ヲ始、役々ノ者ヘ應接有テ、當山ニ於テモ、敵國降伏ノ修行有之候段、承知致候、自藩ニモ專勤
王ヲ相唱候間、以來ハ協心盡力可致トノ義ニ付、微力トハ申ナカラ、長州家ヲ欣慕致シ、使僧ヲ以テ乞合ニ相成、數輩罷越居候處、無程　七卿樣御下向被遊候ニ付、御伺申上候テ、京師形勢逐一拜承仕、直ニ此趣キヲ座主ヘ申入候處、早速
天機爲御伺、上京致盡力可仕候ト、發駕用意央、霜月始小笠原ノ兵五百騎計、不日襲來シテ、言語ノ猥藉、（此間脱アリ）　靈元天皇御宸筆ノ額乘打致シ、拔鎗砲ニハ切火繩ヲ掛ケ、夜

中辻々ニハ篝火ヲ焚キ、何ノ間答モ無ク、殿中ヲ取卷キ、座主へ應接有テ曰、小笠原大膳大夫使ナリ、小倉表ニオキテ、御警衛致シ候間、卽刻御下向可有之ト之義ニ付、役僧ヨリ如何ノ趣意ニテ、其方ニ警衛被下候ヤト尋問仕候處、委細ハ下向ノ上沙汰ニ及ヒ可申ト計ニテ、其未明ヨリ觀晃院殿始座主簾中各三方并ニ役僧家中呼ヒ下シ、小倉藩ノ上、右三方ハ本陣ニテ、番頭ヨリ十六士警衛役僧家中別宿ニテ、警固三人ツヽ相付、翌日ヨリ調子有之候趣ニハ、英彦山ニオキテ不容易義相企テ、因難ニモ可及、攘夷ノ義ハ當々(ニリ)タル將軍ノ有ル事ヲ知ラサルヤ、英彦山微力ノ法中覆轍ヲ損リテ動王トハ何事ソヤ、長州ト此方ノ隔心有ルヲ知ラサルヤ、彼國ニ同意トハ國敵抔ト申立、數度ノ調子有之候得共、勤王ノ爲盡力致シ候ヨリ外ニ申出ル筋聊無之ト相答候處、理非相付カサルヨリ、嫌疑之筋有之ニ付、入牢申付ルトテ、無實ノ罪ヲ誣ヒ、終ニ役僧家中數輩幽囚致候、座主下向ノ跡ハ、抜刀ニテ殿中ニ踏入、間毎々ニ封印致シ、幽囚ノ者ノ宅モ又同然、家族ハ親戚ニ引渡シ、兵士一備滯山シテ、第一御所獻上御親戚樣へモ通相止メ、且山中ニ粮米ノ道ヲ斷チ、二ヶ月餘諸國へ出入

ヲ差留、誠ニ困窮ニ及シ、其砌一山ノ僧侶ヲ呼集メ、此度座主ヲ始、其外取締メ申付置候、以後ハ小笠原ニ附屬不致候得ハ、同樣取締可申付ト、手詰ノ究問ニ及ヒ、不得已隨心ノ一書ヲ出シ、其レヨリ少々粮米ヲ山内ニ配當致シ、同十二月巖瑠坊、教觀坊上京仕、弊山ノ荷物宰領致シ下リ居候處、伏見ニオキテ兩人ヲ逮捕シ、荷物ヲ押ヘ取リ、其身柄未タ相知レ不申候、翌子十月、諸藩小倉ヘ出張ノ砌、座主ヘ當時歸山有テ愼可有之旨沙汰相成、直ニ歸山致サレ候、去寅八月落城ノ節、獄邊ヲ狼藉シテ、弊山ヨリ幽囚ノ者ヲ斷首シ、城炎上ニ及ヒシヨリ、狼狽シテ散亂、橋本良什其難ヲ免レテ長州ニ罷在候、又卯ノ八月長州家ヨリ使者ヲ以テ、小笠原ヘ乞合ニ相成、第

一

御所獻上之義ヲ始メ、數ケ條詰問ニ及ヒ候處、獻上義ハ以前ノ通ニ英彦山ニ沙汰可致、餘事ハ國法モ有之候故、サシ免シ難ク（キカ）旨答ニ及ヒ、同十一月、座主ニハ表向歸山ノ沙汰ヲ致ス、去寅八月獄ヲ免レシ兩家ヲ潰シ、家中一統永ノ暇ヲ申付ケ、是迄座主ヘ千百石ノ内、寅ノ年ヨリ三分一ニ減スル、亥年以來ノ行キカヽリヲ以テ、當今ニ至リ同藩ヨリ兩士登山シテ住居ヲ構ヘ、領内同然ノ處置ヲ致シ、且潔齋ノ地ニオキテ諸獵ヲ恣ニシ、

勅願ノ基本モ相立難ク、誠ニ嘆息ノ至ニ奉存候、然ルニ方今

王政御一新ノ御事件ニ付、弊山モ往古ノ通、御直政被仰付候得ハ、従来ノ赤心貫徹

仕度奉存候、何卒御仁恵之思召ヲ以テ復舊仕候樣、

御沙汰之程伏テ奉嘆願候、恐惶拜啓、

豐前國英彦山

慶應四戊辰年閏四月廿三日

橋本坊印

如藏坊印

辨事

御役所

批紙

總テ舊ニ復シ候樣、此度小倉藩へ

御沙汰ニ相成候事、五月廿四日（行政官記）

小笠原豐千代丸留守居入江宗記伺

英彦山之儀、近年當藩ト故障有之、雖謹之趣ニ候所、方今

御一新之際ニ候間、總テ舊ニ復シ候樣取計可申旨、　御沙汰之趣奉畏候、右當藩ト故

障之儀ハ癸亥以來ニ御座候間、總テ舊ニ復シ候樣ト之御儀ハ、諸事癸亥以前ニ復シ候儀ト相心得可然哉、此段奉伺候、以上、五月廿七日

批紙

可爲伺之通候事、五月三十日〇行政官記 小笠原忠怳家記

同上丹村六兵衞上申

英彥山之儀、近年當藩ト故障有之、難澁之趣ニ候之處、方今御一新之際ニ候間、總テ舊ニ復シ候樣、取計可申旨御沙汰之趣、先般被仰出候付、右當藩ト故障之義ハ、癸亥以來ニ御座候間、總テ舊ニ復シ候樣トノ御儀ハ、諸事癸亥以前ニ復シ候之儀ト相心得可然哉之段奉伺候處、可爲伺之通旨御書取ヲ以、被仰渡奉畏候段、在所表ヘ申遣候處、癸亥年之一件ニ付、脫山致シ居候者、且親類預等之者モ、當春大赦ニ付、總テ舊復仕、當時領地モ相減居、且莫大之失費有之候末、家中扶助等モ行屆兼、僅ニ飢渴ヲ凌候迄之次第ニ候得共、彥山渡方之儀ハ、左之通相渡來、猶又當春ハ座主院ヘ三拾石、坊中ヘ五拾石爲扶助相渡、家中渡方ニ比候得ハ、別格之儀ニテ其外何モ近年故障ト申程之義ハ無之旨、在所表ヨリ申越候間、此段申上置候、以上、

八月廿三日

英彦山渡方

寅年變動後、

高千石歩渡正味　三百石

外ニ豐前坊へ、

高百石歩渡正味　三拾五石

前々ハ左之通相渡候、

高千石歩渡正味　百八拾六石

外ニ豐前坊へ、

高百石歩渡正味　三拾五石

右之通、當秋ヨリ復舊之筈ニ御座候事、行政官記 小笠原忠忱家記

小笠原豐千代丸請書

英彦山ノ義、近年當藩ト故障有之、雖然ノ趣ニ候處、方今御一新ノ際ニ候間、總テ舊ニ復シ候樣、取計可申旨御書付ヲ以テ、其許差置候家來ノ者へ被仰渡候段、申越奉畏候、此段御請申上候、以上、元年六月廿三日

小笠原豐千代丸內　丹村六兵衛願

豐千代丸領內田川郡英彥山靈仙寺座主、今般爲僧官返上登京仕候付而ハ、身柄如何被仰付候哉不奉存候得トモ、其儘領內ヘ被差置候御義ニ御座候ヘハ、同山ノ義ハ、舊來土地人民共、弊藩ノ管轄ニ候間、是迄ノ通リ都テ差圖ニ隨ヒ、附屬ニ被差置候樣被成下度、右ハ一藩ノ人心ニ關係仕候義ニ付、乍恐前以申上置候、最同山舊來取扱ノ件々、概略別紙ノ通御座候、萬一附屬ヲ離レ候義モ候ハヽ、被仰渡候以前、何卒一應私共ヘ被仰聞被下度奉願候、以上、元年九月七日

小笠原豐千代丸內　丹村六兵衛上申

豐千代丸領內田川郡英彥山靈仙寺ノ義ハ、寬永年中右近將監領知被仰付候以來、知行千石、內室ヘ同百石ノ判物遣シ、都テ藩法ニ隨ヒ、附屬ニ罷在候義ハ、今日ニ至ルマデ相替候義無御座候、最寬永以前細川家領地ノ節ヨリ、知行高判物等ノ儀受繼候義ニ御座候、舊幕府ヨリ領內巡見使被差下候節モ、右山內巡見有之候義、餘ノ郡地ト相替候義無御座候、幷舊幕府ヨリ布告ノ件々モ、弊藩寺社役ノ者ヨリ爲相達候、郡中人別帳差出候節モ、山中僧俗男女、前々ヨリ田川郡人別ニ御座候、宗門改ノ節モ、座主ヨリ改場所ヘ、證文差出候、山內竹木座主入用ノ節ハ伺出候上、差圖ヲ以テ伐リ方爲致

候、其外座主禁京ヲ始メ、使出緣組等、都テ前以テ願書、差圖ヲ以テ進退爲致候義、前格ニ候、右ニ付同山ハ領内ノ土地ニテ、人員ハ則郡中ノ人別ニ御座候、右取扱ノ概略如斯御座候、猶委細ノ義ハ、御沙汰次第可申上候、以上、元年九月七日

小笠原豐千代丸内 丹村六兵衛伺

英彦山神職、此度神祇官御直支配被仰付旨、御達ノ趣奉畏候、然ル處、右ハ從來御直官ニ御座候間、是迄ノ通リ相心得候義ニ御座候、且又領内ニ罷在候ニ付テハ、同山ノ儀ハ、舊來弊藩ノ管轄別紙ノ通リ御座候付、土地人員都テ是迄ノ通リ取扱候心得ニ御座候、右ノ件々猶奉伺候、以上、元年十月廿日

小笠原豐千代丸内 丹村六兵衛伺

元年十一月三日、小倉藩公議人丹村六兵衛神祇官ヘ出頭ニ付、青山稲吉ヨリ口達

此度執奏被廢候付、並ノ社家ハ府藩縣ノ支配ニテ、大社ノ向ハ當官支配ニ相成候、彦山ハ則其内ニテ、全ク小倉ノ手ヲ離レ候トノ旨申候付、然ラハ右ノ山ハ是迄弊藩ノ管轄ニ候處、此度ハ無故創地ニ相當リ、且又右山ハ弊藩ノ土地人民ノ事、確證モ段々有之候段申述候處、彦山ヨリハ左様ニ不申出候ノ旨、確證有之候ハヽ、書出可申、彦山ヘモ官ヨリ相尋可申段申聞候事、

小笠原豐千代丸内 丹村六兵衛願神祇官宛

豐千代丸領內田川郡英彦山靈仙寺座主、今般爲僧官返上登京仕候ニ付テハ、身柄如何被仰出候哉不奉存候得共、其儘領內へ被差置候御義ニ御座候ハヽ、同山ノ義ハ舊來土地人民共、弊藩ノ管轄ニ候間、是迄ノ通都テ差圖ニ隨ヒ、附屬ニ被差置候樣被成下度、右ハ一藩ノ人心ニ關係仕候義ニ付、乍恐前以申上置候、最同山舊來取扱ノ件々、概略別紙ノ通リ御座候間、萬一附屬ヲ離レ候義モ候ハヽ、被仰渡候以前、何卒一應私共へ被仰聞被下度奉願候段、取扱概略書ニ相添、書面ヲ以テ、去九月七日辨事御役所へ差出置候義ニ御座候、

一英彦山ノ義ハ、田川郡中ノ山ニテ、同郡ハ一圓山河不殘豐千代丸領知ニシテ、素ヨリ同山ハ豐千代丸管轄ニ御座候、別ニ同山ハ寺院領ニ無之、其證ハ舊幕府ヨリ朱印無之處明證ニ御座候、右ノ通ニ付、寬永年中弊藩右近將監へ被仰付候以來、知行千石、內方へ同百石ノ判物遣シ、都テ藩法ニ隨ヒ、附屬罷在候、依之、數代ノ撫育ニ預リ、座主始メ山中僧侶男女共、領內ノ者ニ付、領主ノ附屬ニ相違無之段、山中末々マテ一統相心得候旨、申出候義ハ、別紙證書ノ通リニ御座候、右ニ付、同山吉凶共外非常ノ義ニ付テハ、相當ノ扶助イタシ來候、就中一昨寅年弊藩變動後ハ、闔藩必支ノ衰弊ニテ、家中從類上下ノ無差別、面扶持ニテ凌候中ニモ、同山ノ義ハ、當時配札等

ニモ請可有之ト存、以前通リ渡リ方イタシ遣シ、又此度上京ニ付テモ、願立ノ金子調達遣シ、旁累代ノ恩義モ不少候、然ニ右上京以前、何レノ堂上方何レノ藩トカ依頼厖事等仕候趣、如何敷風聞有之候折柄、七月中急ニ出立仕候、其節ノ始末、是迄ト違ヒ弊藩ヲ輕蔑イタシ候義モ有之、藩中ニ於テモ、甚タ如何ニ存候得トモ、願事依頼事等ノ風聞ノ義ニ付、其儘差置候、何レ上京ノ上ハ、何様ノ願仕、何様ノ被仰渡可有御座哉ト奉存候付、同山附屬ヲ離レ、領内ニ被差置、藩法ヲモ不守候様相成候テハ、一藩ノ人民如何義出來モ難計、人心ニ關係仕候次第ヲ以テ、乍恐前廉ヨリ辨事御役所ヘ、書面ヲ以テ申上置候處、此度同山神職神祇官御直支配被仰付候旨被仰達候間、同山身柄ノ義ハ、從前御直支配ノ義ニ付、矢張是迄ノ通リ取扱候心得ニ御座候旨奉伺候處、今般全附屬ヲ離レ、山ハ同山ノ所領ノ様相成候段拜承、誠以奉驚入候、同山領外ニ相成候テハ、於豐千代丸、無故削地ニ相當、實以當惑ノ至ニ御座候、扱又同山ハ、領境ニ屏立シ、南方ノ一方ヲ擁塞仕、兵防ニ於テ天然墻壁ニ御座候ニ付、領外ニ相成候テハ、全南方ノ堅固ヲ失ヒ、不容易義ニ候間、既ニ御沙汰相成候義ヲ押テ申上候モ奉恐入候得トモ、於弊藩、右ノ條件ニ付、猶委細同山取扱ノ次第幷附紙ノ證書等書類差上候間、今一應御詮議被成下候様、此段奉願候、以上、元年十一月七日

別紙

享保十九年彦山へ靈元法皇英彦山ト被下候勅額御下向ノ義ニ付、京都町奉行所へ、彦山役僧被召呼候付、寺社奉行荒木治太夫儀、役僧寂圓坊、賢秀坊召連候處、兩奉行御列座ニテ、右僧共へ被仰渡候ハ、此度勅額御下向ノ義ニ付、領主へモ委細相伺不申、其上座主自分トシテ、中國筋へ公義同前ノ觸書差出候義、不屆至極ニ思召、御叱リ、是迄ノ事ヲ戾シ、領主へ伺、仰ヲ蒙リ候樣、巨細被仰渡候、

一右ニ付先手物頭早川九太夫義、京都へ差登、五月十五日著京、同十八日勅額奉請取之、小倉へ罷歸、同六月十九日、彦山銅鳥居へ勅額奉掛之候、

一右勅額ノ義ニ付、從公議被仰出候趣、京都御役々ヨリ、弊藩へ被申達候ニ付、寺社奉行犬甘九左衛門、郡代小畑半之丞、大目付澁田見治右衛門義、彦山へ差向、座主有譽へ遠慮愼申付、講明院、西ノ坊、橋本坊、總石坊、尾谷仁右衛門等役義召放シ、閉門申付、寂圓坊、賢秀坊、此節在京ニ付、歸山ノ上右同斷申付候事、

一安政三辰年、寺院梵鐘取上ノ義被仰出候節モ、英彦山ハ一本立寺院ニ候得トモ、弊藩附屬ノ義ヲ以テ、梵鐘於弊藩取扱申候事、

右兩條共、弊藩ノ附屬ニ罷在候處ニテ、都テ取扱仕候義、筆記ニ記之候、彦山附屬ニ關

係仕候義ニ付、申上置候、

本文焚書一件ノ儀、左ノ通リ彦山ヨリ證書差出候、

一筆啓達イタシ候、然ハ一山ノ義、御領内附属ニ相違無之旨、重々一統相心得居候ニ付、別紙書付差出候條、宜シク御執計頼存候、恐々謹言、

英彦山座主權僧正

十二月朔日　教有花押

香坂七郎右衛門殿

野納茂路ノ義、先祖以來御領主様御代々御撫育被下置、御判物ノ通リ、知行致頂戴、諸事論御下知、隨致相續罷在難有存候、且山中一統數代重御國恩、拙者身柄始メ一山上下僧侶（俗カ）男女共、豐前小倉御領内ノ者ニ御座候付、御領主様御附屬ニ相違無御座段ハ、諸坊中末々ニテ承知仕候、尚向後彌心得違不仕、御領法堅ク相守候樣可致候、此段宜シク御執達頼存候、以上、

安政三辰年十二月朔日　英彦山座主權僧正

香坂七郎右衛門殿

小笠原豐千代丸同役中宛

弊藩領內英彥山神職、此度神祇官御直支配被仰付候旨被仰達候間、右身柄ノ義ハ、從前御直支配ノ義ニ付、矢張是迄ノ通リ相心得、於弊藩モ是迄ノ通リ取扱候心得ニ御座候旨、神祇御官ヘ奉伺候處、今般全附屬ヲ離レ、山ハ同山ノ所領ノ樣ニ相成候段、同御官ヨリ承リ候間、同山ハ舊來ヨリ弊藩ノ管轄ニテ、確證モ段々御座候、然ルニ此度領外ニ相成候テハ、無故シテ側地ニ相當リ、甚タ當惑仕候段申出候處、然ラハ其確證辨事官ヘ可差出旨被申聞候付、則別紙ノ通リ確證差出候間、去九月七日差出置候願書ニ照合、御承知被下度奉存候、扨又同山ハ領境ニ屛立シ、南ノ一方ヲ擁塞仕、兵防天然ノ墻壁ニ御座候間、領外ニ相成候テハ、全南方ノ堅固ヲ失ヒ、一藩ノ人心ニモ關係仕、不容易義ニ候間、既ニ御沙汰ニ相成候義ヲ重テ申上候モ奉恐入候得トモ、於弊藩ハ、別紙ノ條件ニ付、今一應御詮議被成下候樣奉願候、以上、（元年十一月十二日、別紙確證書ハ前ノ神祇官ヘ差出ノ分ト同文ニ付略ス、）

小笠原豐千代丸公用人　高田淺之助上申　辨事宛

舊職英彥山ヨリ、日田御縣ヘ使者差立、弊藩領內ヨリ米穀雜物ニ至迄、一切積登差留、一山飢渴ニ及候間、御憐愍ノ義歎願仕、依之御縣役人同山ヘ被差登、御見糺ノ上、米百石被差遣、且又同山ヨリハ御直支配ト申出候處、矢張弊藩ヨリモ抱持ノ段御聞込相

成、御縣ヨリ御支配難被致、此末如何哉、右邊御伺相成候趣、御縣御役人ヨリ承知仕候、右ハ先般英彥山神職被仰付候砌、繫藩取扱心得ノ義、神祇官へ相伺置候處、御差圖御座候マテハ、是マテノ仕來ハ相止、其儘ニ致シ置候樣、同御官ヨリ被仰聞候、依之同山ノ義ハ、追テ從朝廷、何分ノ御沙汰可有御座哉ニ付、各郡ヨリ、右山中ハ米穀ハ勿論、其他些少ノ品タリ𪜈、其筋へ伺出、差圖ヲ受、差登候樣、郡手(中カ)ニテ相觸候儀ニテ、決テ積登差留候趣意ニハ無御座候處、右ハ山中ニテモ、色々ノ風聞有之、且下方モ趣意合取違へ候義モ可有之哉ニ付、猶又早速郡中へ爲相觸、米穀雜物等ハ聊差支無之差登リ候道ニ相運居候、最米穀等領內タリ共、隣郡へ出納ノ節差圖ヲ受取計候義ハ、兼テノ藩法ニ御座候、前條御縣御役人登山被致候節ハ、最早右差支無之相觸候處ニ御座候樣奉存候、右ノ次第ニ候得トモ、如何樣ノ御聞込可相成哉ニ付、此段奉申上置候、以上、

小笠原豐千代丸公用人 高田淺之助願 辨官宛

豐千代丸領內英彥山神職神祇官御直支配被仰付候段、御沙汰相成候付、去十月廿九日、別紙ノ通神祇御官へ奉伺置候處、今般各藩領內ニ有之候社寺、勅祭ノ神社勅願ノ寺院共、土地人民支配心得ノ義被仰出候、右ニ付、同山取扱ノ次第、別紙伺面ノ通リ、都テ以前通リ相心得候テ可宜義ニ御座候哉、猶又奉伺候、何卒早々御差圖被成下候樣

奉願候、以上、二年正月十七日

小笠原豊千代丸内　丹村六兵衛　伺神祇官宛

英彦山神職、此度神祇官御直支配被仰付候旨、御達ノ旨奉畏候、然ル處、右ハ從來御直管ニ御座候間、是迄ノ通リ相心得候儀ニ御座候、且又領内ニ罷在候ニ付テハ、同山ノ義、舊來弊藩ノ管轄、別紙ノ通リ御座候ニ付、土地人員都テ是迄ノ通リ取扱候心得ニ御座候、右ノ件々猶奉伺候、以上、二年十月廿九日

小笠原豊千代丸内　丹村六兵衛上申

豊千代丸領内豊前國田川郡英彦山ノ義ハ、寛永年中右近將監領地被仰付候以來、知行千石、内室ヘ同百石ノ判物遣シ、都テ藩法ニ隨ヒ、附屬罷在候、最附屬ニ付テハ自判ノ證書有之候、右ハ寛永以前、細川家領地ノ節ヨリ、知行高判物等ノ義受繼候義ニ御座候、舊幕府ヨリ領内巡見使被差下候ノ節、右山内巡見有之候儀、餘ノ郡地ト相替候義無御座候、幷舊幕ヨリ布告ノ件々モ、弊藩寺社役ノ者ヨリ爲相達候、郡中人別帳差出候節モ、山中僧俗男女前々ヨリ田川郡人別ニ御座候、宗門改ノ節モ座主ヨリ改場ヘ證文差出候、山内竹木座主入用ノ節モ、申出、差圖ヲ以テ伐方爲致候、其外座主登京ヲ始メ、他出緣組等都テ前以願出、差圖ヲ以テ進退爲致候前格ニ候、右ニ付、同山ハ領

内ノ土地ニテ、人員ハ則郡中ノ人、別ニ有之候、右取扱ノ梗略如此御座候、猶御沙汰次第可申上候、以上、二年十月廿九日

小笠原幹千代丸公用人　高田茂之助願書草稿

幹千代丸領内英彦山神領、神祇官御直支配被仰付候趣、御沙汰相成候付、同山取扱ノ次第、書取ヲ以テ、先月十七日奉伺置候處、今以爲何御沙汰無御座、右ハ一藩人民共ニ篤ト相心得居不申候テハ不相成候義ニ付、再應奉伺候、恐入候得トモ、何卒早々御沙汰被成下候樣奉歎願候、以上、二年二月三日

二年二月十四日、公用人ヲ神祇官ヘ喚出シ、彦山稲官ノ具、先達テ伺ニ付候處、英彦山一件、右ハトテモ猶々申出有之、當官御評決相成ニ付、刑法官ニテ御裁判相成候間、何レ同官ヨリ御沙汰可有之旨口達ス、

英彦山救有願書草稿

弊山ハ豊前、豊後、筑前三國ニ跨リ、太古大己貴、思湍津、市杵島姫ノ三柱ノ女神ヲ卒テ、出雲國ヨリ香山北ノ岳ニ鎮座シ玉ヒ、山ノ麓ヲ視、同ク宜ク穀ヲ生スヘキ地ナリト、始テ馬把ト云物ヲ製作シ、山野ヲ開テ田畠トナシ、山ノ南ヨリ流レ出ル水ヲ落合タルヲ引テ、田ニ灌キタル處ヲ落合村ト云ヒ、田ヲ増タル所ヲ増田ト云ヒ、田ヲ添タルヲ添田村ト云ヒ、是ヨリ文第聞キテ、豊前田川郡是ナリ、依之弊山毎年二月十五日ニ

御田種子蒔ノ祭ハ是ナリ、

天津神ノ御子天恩(忍)穗耳尊天降リマシテヨリ、大己貴北兵ヲ捧奉リテヨリ、此山ノ太神ト稱シ玉フナリ、太神ノ幸魂八角三尺六寸ノ如眞石ノ上ニ天降鎭坐玉フ故、日ノ子ノ山ト名ケシハ、是ヨリ起リ、其時ニ佩シ大刀ヲ頭槌ト申テ、弊山ノ御神體ナリ、人王十代崇神天皇己酉ノ年水晶石ノ光ヲ放テ、大和國瑞離(籬)ノ宮ヲ照ス、天皇怪テ光ノ出ル地ヲ見ヨト詔シテ、御使ヲ築柴(筑紫)ニ下サレ、日子ノ山靈神ニ幣帛擎テ祭シレ玉ヘリ、神功皇后三韓御征伐ノ時、御兜ヲ製シ、御凱陣ノ上、其御兜ヲ納タマフ、二面ノ御兜ト申シ奉ル也、今ニ傳來候、文武天皇大寶元年辛丑ノ春、役小角舉(峯)登リ三季ノ入峯ヲ修歷シ、相續シテ今ニ失墜不仕候、聖武天皇天平十二庚辰年、神託ニヨリ勅使藤原清足ヲ遣シテ、十二ノ社ニ奉幣シ玉ヒ、天下泰平ノ御祈禱有テ、十二宇ノ社檀(壇)ヲ再建シ日供ヲ備ヘ玉フナリ、孝謙天皇天平勝寶元乙丑年七月廿三日、年分ノ度ハ壹人ヲ賜ヘリ、是勅宣度祭ノ權輿ナリ、今ニ無恙勤來候、嵯峨天皇弘仁十己亥年、法蓮勅喚ニ應シ、內庭ニ入、玉體ヲ加持シ、御不豫立所ニ御平愈マシマシテ、天皇詔シテ曰、昔テ聞、法蓮ハ邦家ノ寶、亦是僧中ノ仙也ト、是ヲモ(庭ヲトニ)日ノ子ノ字ヲ改テ彥トナシ、靈山ヲ革テ靈仙トスヘシトナリ、四境七里ヲ神領守護不入十方檀越ノ宣旨ヲ賜ヒテ、御願寺ト爲

ワレ、天下國家ノ御祈願所トシテ、金襴ノ袈裟ヲ賜ヒ、修驗別本山壹仙寺職（寺主カ）ニ任シ、永宣旨印玉ヒシヨリ、今ニ大高堂ノ別當預ノ衆徒三千八百坊、官位補任セラル、專ニ（ラ）寶祚長久一天昇平ノ祈禱ヲ修シ、卷數ノ一枝ヲ以テ朝廷ニ獻上ス、是御祈禱獻上ノ始メニ候、爾來無間與奉獻上候、後奈良天皇天文十六年（マヽ）丁未年、勅使持明院基孝朝臣ヲ以テ、御宸筆ノ紺紙金泥ノ心經ヲ奉納爲セ玉ヲ、其後天子御代々御卽位ノ御時、御撫物ノ加持ノ綸命候、上古日子ノ山ト稱シ候得トモ、弘仁天皇勅アリテ、彦字ニ換サセ玉ヒ、享保十四年靈元天皇叡覽オハシマシテ、緣記（起）御上覽遊ハサセラレ、英ノ字ヲ加ヘ玉ヒ、英彦山三大字ノ勅額ヲ賜ヒケルヲ、一ノ鳥居ニ奉掛ル、元德二年庚申四月十五日、後伏見天皇ノ皇子長助親王ヲ奉招請、神領ノ內筑前國黑川村御殿ヲ令結爲住玉ヒ、正慶二丙子年九月廿九日授戒シ、助有法親王中興俗體座主ノ宮ト奉稱也、嫡子靜有仕大僧正累代大僧正拜任仕候、敎有マナニ十七代苗胤連綿トシテ罷在候、嘉永三亥年三月四日權僧正拜任、追々大僧正任官モ奉願上候處今般朝政御一新ニ付、神祭復古ノ御盛典被爲行候樣御沙汰奉蒙候、連ニ敎有始メ闔山ノ衆徒還俗爲致候、爲向來眞實仕候處、來ル廿七日御卽位ノ御禮式拜承仕候、古來ヨリ御撫物中受、御寶祚延長專奉祈度候間、此段宜御執成奉願候、依テ神祭職號等ノ義、如何相稱候テ可然

哉、總テ御指揮奉願候、最山中佛像佛具ノ義ハ、御沙汰拜承ノ節、直樣取片付申候、神號ハ英彦山大權現ト奉稱來候、大權現ノ三字ハ、宜御改革被下度奉願候、右四方七里ノ神領モ、應神以來天正慶長ノ頃、戰國ニ爲蠶食、僅殘地モ筑前中納言秀秋、毛利壹岐守吉長ニ奪ハレ、其後細川忠興公豐前入國ノ砌、高千百石、田川郡落合村ニテ寄附被致、其後肥後轉國ノ上、同國ニテモ高百石寄附ニ相成、小笠原(氏脱カ)小倉入城シテヨリ、細川公ノ引續ヲ以テ、右高寄附ニ相成、其條如今、八百ノ坊中十方ノ施物ノミニテ相續、上下必至困窮極ニ至候、尚癸丑年間ヨリ癸亥ニ至リテ、御宸慮被爲在候趣、微力ナカラ、遙ニ不堪悲憤罷在候テ、抑癸亥ノ年勤王正義相唱候處、小笠原氏ニ爲蔽遮、往年慶長四己亥年豐前小倉城主毛利壹岐守吉長、弊山欲領候得トモ、古來ヨリ守護不入由故、其下知ヲ不受、終ニ確執ニ及ヒ、翌五年庚子十月廿一日ニ、大坂城ニテ對決イタシ、弊山理運ニ相成、古來ノ通リ守護不入十方檀那タルヘキ五ヶ條ノ制紙被下、矢張癸亥年來小笠原氏トノ確執モ一機ニ出テ候、委細ノ義ハ、當春橋本坊、如藏坊ヨリ書取ヲ以テ奉歎願候處、總テ舊復候樣、御書下札被仰付難有奉存候、向後諸般蒙御直政、將又積年ノ微忠貫徹仕奉感戴候、以來皇國ノ御爲メ、勉力仕度奉存候間、何卒右ノ件々御賢覽被爲下、宜シク御差圖奉願候、以上、元年九月廿五日

英彦山教有内阿部蒙逸外貳名願神祇官宛

弊山義、去秋奉蒙御直支配、尚舊冬御政務等ノ義、最寄府縣ニ關係可仕旨御沙汰ニ相成候處、將又今度各藩領内ニ有之候勅祭ノ神社、且知行所、村々役人共進退共、總テ其藩ヨリ可取計旨御沙汰ニ相成奉畏候、然ル處、弊山義ハ、豐前、豐後、筑前ノ三州ニ跨、往古嵯峨天皇被爲在御叡願、守護不入ノ地ニテ、豐前領主ノ封内ニハ曾無御座候、神領ノ儀ハ、應仁以來隣國ニ爲蠶食、方今英彦山城内ハ神職且主人家來ノ者計ニテ、知行所ト申テハ、更ニ無御座候、天皇御餘光ヲ以テ、當主人教有迄五十三代、何方ヘモ關係不仕、山務相續仕來候、其證據奉備御高覽候間、御賢覈ヲ以テ、乍恐舊冬御沙汰ニ相成候通リ、最寄日田縣ニ關係仕候樣奉歎願候、

一慶長四年豐前小倉城主毛利壹岐守長吉（吉長）、弊山ヲ欲領候處、守護不入ノ旨ヲ以テ不肯、終ニ確執ニ及、翌五年大坂城ニテ致戰決（對）、理運左ノ制紙被下候寫、

條々

九州彦山

一當山ノ事被任先規ノ旨、守護不入、可爲十方檀那事、

一山中竹木地方ヨリ不可伐採事、

一於當山内鹿狩不可仕候事、

一當寺中ヨリ逐電ノ輩、不可抱置候事、

一諸國ヨリ勸進物ノ俵子不相留事、

右堅被仰出候間、於違犯ノ輩ハ、速ニ可被處嚴科者也、仍執達如件、

慶長五年三月五日

長束大藏大輔判

增田右衛門尉判

德善院判

一小笠原氏豐前入國ノ後、延寶七年ニ至リ、彦山ハ境界爭論ニ及、同藩古老二木則人、寺社奉行遠藤權兵衛、目付伊藤次郎兵衛、中目付三谷五右衛門、彦山役人ト立合之上、致見分、境内古來之通リ致定軌候、

一享保三戌年小笠原氏ノ領地ト彦山トノ境界見分ニ付、舊幕寺社奉行土井伊豫守殿ヨリ來翰ノ寫、

別紙書附差越候間、被得其意、滯無之樣可被致候、(其實カ)爲申達候、恐惶謹言、

十二月十三日　土井伊豫守利意花押

別紙寫

豊前國田川郡下毛郡堺彦山、今般見分有之筈ニ御座候間、依之、峯七郎右衛門手代罷越候間、案內等差出、無滯見分有之候樣可被致候、

戌十二月

一文久三年小笠原氏ト彦山ト境界双方役人立合ノ上見分イタシ候、

一是迄守護不入ノ境界ニテ、同氏領地ニ無御座候故、境界爭論、且舊幕ヨリ境目等見分有之候、

右ノ件々御洞察被成下候樣奉希候、如今同藩ニ附屬ノ樣ニ御座候得トモ、去ル癸亥年間勤王一國ニ相響候砌、主人始メ從人家中小倉表ニ幽閉、且殺〔二字〕代等イタシ、手詰ノ詰問ヲ以テ爲拔付屬候以來、一山諸族ニ相苦ミ、既ニ腐朽ニ欲及候處、去昨春王政復古ノ秋値遇御寵典、御直支配且最寄ノ府縣ニ可致關係旨奉蒙御沙汰、一山倒掛ノ苦ヲ解キ、與テ奉歡載候、今更寄附等ノ義ニテ關係仕候テハ、實ニ悲泣ニ堪兼候間、右寄附來相違イタシ候トモ、往古御寄願ノ基本不錯樣、婦女子ニ至マテ決定仕候間、何卒舊冬御沙汰ノ通リ、最寄日田縣ヘ關係仕候樣、方撰御執掌ノ御央ヲ不省、深ク奉恐入

候へトモ、危急存亡ノ秋ニ御座候間、御垂愍被成下、御執成ノ程奉哀訴歎願(候脱カ)、恐惶敬白、

阿部　蒙逸
鷹羽狂三郎
高根　正也

英彦山高千穗内
高根正也取調書

一慶長四年、豊前小倉城主毛利壹岐守吉長、彦山欲領處、守護不入ノ旨ヲ以テ不背、終ニ諍執ニ及、翌五年大坂城ニテ致對決、彦山得理運、左之通リ別紙被下候寫、

條々　九州彦山

一當山ノ事、被任先規ノ旨、守護不入爲十方檀那事、
一山中ノ竹木他方ヨリ不可伐採事、
一於當山内鹿狩不可仕候事、
一從當寺中逐電ノ輩不可抱置候事、
一諸國ヨリ勸進物ノ俵子不相留候事、
右堅被仰出候間、於違犯ノ輩ハ遂ニ可被處嚴科者也、依テ執達如件、

慶長五年三月五日　長束大藏大輔判

増田右衛門尉判
徳　善　院判

一小笠原氏小倉入道ノ後、彦山境内ト同氏領地トノ界見分左之通、
一延寶七未九月、彦山、落合、津野三ヶ所境見分定輸書左之通リ、
一南方嶺幅東峠ノ大道ヲ境ニ可致事、
　但ニ、道ハ落合ニ付事、
一嶺幅山ノ下ハ川切ニ境ノ事、
一其南道ハ鹿枝川落合ノ出茶屋ノ上方、道ノ傍ニ大石田所積ノ踏石ヲ限リ、其向五ツノ小山ヲ半分シテ、小松竹ヨリ右ノ大石ヘ見渡、境ニ可仕事、
一中尾通リテハ右ノ五ツ山ヨリ北ニ打越、其下方ニ有之候古作ノ田畑ヲ、頂ヨリ中岸ヲ流尾嶋ヲ見渡、赤松小林堆迄境ニ可相定候、小二川ノ谷頭勢道ヲ境ニ可仕事、
　但、赤松小林ハ彦山ニ付事、
一小二川谷頭ハ赤割山ノ東方、深キ谷ヲカキリ境目道境ニ定、嶺坂行間塚迄見渡境目相定事、
　但、此行間塚ハ彦山、落合、津野三方ノ境目ナリ、

右之通落合村ノ境也、
一行屋塚ヨリ彥山落合、津野境目ノ前ヨリ定來事、
一童子峠ノ下御狩山ノ上道ヨリ、一本杉小島越ノ道筋、櫻木峠ノ道切ニ、古來ヨリ津野村ノ內ナリ、櫻木峠ハ下毛郡彥山津野村三方境目ニ候事、
但シ、道ノ分ハ津野村ノ內ナリ、
右ノ通リ田川郡ヨリ、下毛郡落合、津野兩村ノ境目、延寶七年小笠原領地ト彥山ノ境、同藩古老二木則入、寺社奉行遠藤權兵衛、目附伊藤六郞右衛門、中目付三谷五右衛門出張ニテ、境定執仕候、
但、幣山ノ役々立合、右ノ通リ定執兩村ノ庄屋共申渡ナリ、
一享保三戌十二月、彥山ヨリ田川郡下毛郡境目見分ニ付、江府寺社奉行土井伊豫守殿ヨリ來狀ノ寫、
別紙差越候間、被得其意、滯無之樣ニ可被致候、爲其申達候、恐惶謹言、
十二月十三日　土井伊豫守利意
彥山座主
別紙之寫

豐前國（田川郡）境彦山、今般見分有之筈ニ付、依之室七郎左衛門手代可罷越候間、案内
等差出無滯見分有之樣可被致候、

戊十二月

一文久三年ニモ小笠原氏ノ領地ト彦山ノ境、双方立合ノ上ニテ見分仕候事、
有之通境界定執仕候、對弊山境内ノ圖面ヲ以テ、奉備高覽候、御洞察被下候樣奉希候、

諸國ヨリ寄附并神領物ノ扣

一慶長年間細川忠興公豐前小倉入城ノ砌、彦山ハ勅願寺詞可爲十方檀那、ヨリテ爲
國家安全、深信仰有リテ、封内落合村ニテ、座主院ヘ高千石、内室ノ方ヘ百石被致寄
附、判物ノ寫左ノ通、

判物之寫

（上書）彦山靈仙寺年行中　　越中守藤原　忠興

豐前國於田川郡落合村千石、爲座主ノ寺領令寄附訖、永可有知行者也、仍狀如件、

慶長六年十月十一日　　越中守忠興判

彦山座主

年行中

上書
彦山座主　　越中守たゝ興

ゐんきよふの御ろさへ

豐前田川郡之内、おち合村においても、百石進之候、なかく御知行有へきもの也、

慶長六年十月　　越中守たゝ興判

彦山座主のゐんきよ

後室れ御あさへ

一同氏二代目忠利公右同斷、然テ後、肥後國ヘ轉國ニ相成候砌、同國玉名郡鶴村ト申處ニ於テ、百石丈寄附ニ相成、當慶順公迄無相違寄附ニ相成申候、

來狀之寫左之通

一筆致啓達候、於其御山、爲御祈禱料、故細川忠利以來代々附來候知行百石之事、不相替從當越中守慶順モ致寄附、依代替此段可相達旨被申付候付而如斯御座候、恐々頓首、

五月十五日　　長岡與三郎

三淵志津摩

朽木　内匠

大木　舍人
長岡　監物
長岡　佐渡

英彦山座主御房

御同宿御中

一寛永年間小笠原忠眞公入國ノ砌、細川公ノ引續ヲ以テ、於落合村、右(一)ノ通リ寄附ニ相成判物ノ寫、

(上書)彦山靈仙寺え　行中　右近大夫(忠)源忠政朝臣

豐前國田川郡於落合村内千石令寄附、永可有寺知行者也仍狀如件

寛永十年二月十五日　右近大夫源忠政朝臣判

彦山靈仙寺

(上書)彦山座主の衆中ノ御たゝきへ

執行中　右近大夫忠政

豐前國田川郡ノ内ニおゐて、百石先規のとく相違なく寺知行有へきもの也、

寛永十年酉十二月日　　右近大輔たゝ政判

彦山座主

御女中の御ちこへ

一小笠原忠眞公代ニ至リ、落合村ニテ寄附相違シテ、藏米トナリ、内室ノ百石ハ從之容文ニテ、現米ノ寄附無之、現米ニテ只今百八十六石丈ニ相減候、

一享保(和)二年忠苗公、豐前房社ヘ願解有之候テ、百石寄附ニ相成候、判物寫左ノ通リ、

豐前房社ヘ爲願解、今度高百石令寄附候畢(訖)、永不可有相違之狀如件、

享保(和)二壬戌年十二月廿二日　　右近將監源忠苗判

英彦山靈仙寺

座主御房

右之通リ、細川公ノ引續ヲ以テ、寄附ニ相成、最地方ハ相違致、藏米ニテ二判物ノ惣高現石ニシテ貳百貳拾壹石收納ニ相成候處、寅年戰爭ノ砌ハ、其三分一ニ相減シ、其辰冬ヨリ元之通リ相成申候、

一諸國ヨリ寄附神地等ハ數々有之候得トモ、一々書載不仕候、

巳三月四日

刑法官へ掛合 神祇官

豊前國英彦山小倉藩ト爭論ノ義、昨年來於當官取扱候處、双方共追々申張候事故、別紙ノ通リ書類相添、其御官へ御廻シ申入候、可然御取計可給候也、二年三月五日

小倉藩豊千代丸家來用人 高田淺之助願書寫

豊千代丸領内田川郡英彦山ノ義ハ、從前々、舊幕府朱印モ無之、土地人民共弊藩管轄ニ御座候處、昨年十月同山神職義、神祇官御直支配ニ被仰付候段御沙汰ニ付テハ、其後取扱心得方奉伺、且前々ヨリノ確證書類モ差上置候處、當正月御布令被爲在候、各藩領内ニ有之候勅祭領ノ社寺等、土地人民支配ノ義、其藩々ニテ可取計件々、其外政務ニ關係致シ候儀ハ、悉皆藩ニ於テ指揮可致、至府藩縣同一治ノ御趣意奉體認、彼我ノ別ナク、可取扱旨御沙汰ノ處、領内ノ儀ニ付、英彦山神職へ相達候處、別紙寫ノ通リ差響申越候ニ付、右御布令ノ趣、早々同山神職へ御沙汰御達候樣仕度、若又英彦山ニ限リ御布令ト相違ノ儀モ御座候ハヽ、早々取扱方御沙汰被成下候樣奉願候、以上、二年三月四日、六月十二日神祇官ヘ返翰答書同文ニ付略ス、

英彦山執行同答

御状致拜誦候、然ハ昨日御出達ノ御觸達拜見仕候、弊山義、去秋御直支配被仰付候砌、

總テ勅納（マヽ）ノ義ハ、京師開次役へ御達被仰付候、乍併此節ノ儀ハ、重キ御趣意柄ニ候得トモ、御支配違ノ義ニ付、朝廷へ奉伺、御返報可申候間、左樣御承知可被成候、恐惶謹言、

二年二月五日

小笠原豐千代丸内　丹村六兵衛　上申辨事宛

豐千代丸領內田川郡英彥山靈仙寺ノ義ハ、寛永年中右近將監領知被仰付候以來、知行千石、內室へ同石（百石カ）ノ判物遣シ、都テ藩法ニ隨ヒ、附屬ニ罷在候義ハ、今日ニ至候迄相替候義無御座候、最寛永以前、細川家領知ノ節ヨリ、知行高判物等受繼遣シ候義ニ御座候、舊幕府ヨリ、領內巡見使被差下候節モ、右山內巡見有之候ノ義、餘ノ郡地ト相替候義無御座候、并舊幕府ヨリ布告ノ件々モ、弊藩社寺役ノ者ヨリ爲相達候、郡中人別帳差出候節モ、山中僧俗男女、悉々ヨリ田川郡人別ニ御座候、宗門改ノ節モ、座主ヨリ改場へ證文差出候、山內ノ竹木座主入用ノ節ハ伺出候上、差圖ヲ以テ伐力爲致候、其外座主參京ヲ始メ、他出緣組等、都テ前以テ願出、差圖ヲ以テ進退爲致候義、前格ニ候、右ニ付同山ハ領內ノ土地ニテ、人員ハ則郡中ノ人別ニ御座候、右取扱概略如此御座候、猶委細ノ義ハ御沙汰次第可申上候、以上、二年九月七日

小笠原豐千代丸内　丹村六兵衛　願辨事宛

豐千代丸領内田川郡英彦山留仙寺座主、今般為僧侶召返上登京仕候付テハ、身柄如何被仰出候哉不奉存候得トモ、其儘領内ニ被差置御儀ニ御座候ハヽ、同山ノ義ハ旧來ヨリ土着人民トモ繁藩ノ管轄ニ候間、是迄ノ通リ都テ差図ニ随ヒ、隣境ニ被差置候様被成下度、右ハ一萬ノ人心ニ関係仕候義ニ付、年來前以テ申上置候最同山旧來取扱ノ件モ、概略御聞届ノ通リ御座候、萬一附属ヲ離レ候儀モ候ハヽ、遂御審議以前、何卒一應私共ヘ被仰聞置下度奉願候、以上、三年九月七日

三年九月十五日、留守居ヲ呼出（今ハ川人ヲ呼出、英彦山一件ニ付、福田ノ件モ、既ニ東京刑法官ヨリ當藩ヘ達付キアリシ件、既ニ相違モ無之、可有之旨口達ス、）

香春藩願書写

豐前國英彦山ハ、從來當藩ノ管轄地ニ御座候處、昨夏以來意外ノ儀差起申候、其節豐升今日迄ノ手續委細申上度候得トモ、繁文相省キ申候、約ル處ハ、朝廷ニ於テ南諭ノ御取扱ニ相成候得共、更角御取調子（マヽ、下同ジ）ノ儀ニ不相運、日月相移、當夏ニ至リ、双方共可致登京等御沙汰相下リ、則登京ノ上、七月中旬於京師刑法官御取調子相始メ候、其節當藩存込ノ趣理粗申上候處、彦山ノ者先日ヨリ東京ヘ参リ居候付、御調子ノ義ハ實御遂引且ニ東京ニテ御調子ニモ可相成哉ノ段、同御官ヨリ被仰聞候間、當藩ヨリモ東京ヘ罷出度段、伺濟之上早速當人東京ヘ罷出、刑部省ヘ御調子ノ義相伺候處、即當所

ニテハ御調子無之段被仰聞候間、壹人又京師へ罷出、其趣刑法官へ申出候處、去九月御同所彈正臺ニテ双方御取調子相始リ候、其節彥山ヨリモ、壹人罷出候處、右壹人ニテハ御受仕難ク、此義通達ノ者兩人東京へ罷出居候付、呼寄候上、御受可仕旨、同人申上候由、然ル處右彥山ノ兩人義ハ、當夏御調子ニ付京師へ御呼寄ノ節、一旦登京仕候得トモ、官邊へモ不奉伺、京師ヲ拔テ東京へ罷出、今以登京不仕程ノ事故、此儘差置候ハ、急ニ登京仕候義無覺束愚考仕候、抑萬邦共敬正大無上ト奉仰候彈正臺ノ御調子若緩怠ニ相成候テハ、下情放縱御政體モ相立間敷、於當藩モ昨夏以來ヨリ、今日ニ至リ、長延ニ相成候義、當惑罷在候間、右彥山ノ者兩人へ、至急京師ニ罷出、御調子ヲ可受旨御沙汰被下候樣奉願候、且又當藩ノ情實貫徹不仕處ヨリ、御捌是迄遷延候義モ可有御座哉ト、別紙相認メ差出シ候間、御高覽被下候樣是亦奉願候、以上、二年十月十九日

下ケ紙

伺濟ニテ、東下スルヤセサルヤ、此藩ノ論スヘキ處ニアラス、

此邊ノ文躰甚タ心得カタシ、

此別紙ハ昨年來於京都追々差出候願書寫ニ御座候、

香春藩伺彈正臺覺

豊前國英彦山ハ、從來弊藩ノ管轄地ニ御座候處、昨年來意外ノ義差起、弊藩管轄ヲ離レ候樣相成、左候テハ無故制地同樣ニ相成候段、歎敷次第ニ付、度々願出、且證據書類モ最前差上置候付、相當申候、當九月於御當官、御糺問ノ上、彦山ヨリ出京ノ者ヘ御沙汰ノ趣ハ拜承仕候得トモ、今以テ同山ヨリ東京ヘ罷出居候者上京不仕、於弊藩ハ御取調ニ付、同月以來在所表ヨリ呼登候者滯京罷在候處、於彦山ハ猶東京ヘ滯在仕候ハ、何分ノ義ニ御座候哉、最於東京モ先月十九日御當官幷辨官ヘ別紙ノ通リ願書差上候段御申越候ノ間、此段申上候、御多端ノ御中奉恐入候得トモ、何卒御威光ヲ以テ、早々御呼寄御明斷被仰付被下度、猶又偏ニ奉懇願候、以上、二年十一月五日

香春藩伺明正年

當藩從來管轄地英彦山義、昨年夏以來、當藩ト意外ノ義差起、竟ニ於朝廷兩訴ノ御取扱ニ相成、去九月京師彈正臺ニテ、雙方御調御座候處、同山ノ者ハ、壹人ニ付御請難仕、此義遁逃ノ者兩人東京ニ參居候ニ付、呼寄御請可仕旨、同山ノ者申上候由、其後月數モ相立候得トモ、右兩人今以御當所ニ滯留仕、登京ノ樣子更ニ無之候、元右兩人義ハ、當年東京彈正臺ニ當藩ト双方御呼掛ニテ、御調御座候節、御官ヘモ不奉伺、京師ヲ抜テ、歸當所ヘ罷出、其儘滯留、今以テ登京不仕程ノ者ニ候故、此儘被差置候テハ、遂日

相立候共、登京仕間敷候、抑萬民畏敬正大無上ト奉仰候彈正臺ノ御謂ニ掛リ、如右自儘放縱ノ振舞仕候者ヲ、其儘被差置候テハ第一御政體相立間敷、於當藩モ、昨年秋以來曖昧ト今日迄相運候義、甚以テ當惑罷在候間、何卒右御當所ニ滯留仕居候彦山ノ兩人へ、早々登京御調ヲ可受旨、御沙汰被下度、此段奉願候、以上、二年十一月七日

小倉藩千代丸公用人　丹村六兵衛　伺辨事宛

弊藩領內英彦山神職、此度神祇官御直支配被仰付候間、右身柄ノ義ハ、從前御直管ノ義ニ付、矢張是迄ノ通リ相心得、於弊藩モ是迄ノ通リ取扱候心得ニ御座候旨、神祇御官へ奉伺候處、今般苓附島ヲ離レ、山ハ同山ノ所領ノ樣ニ相成候段、同御官ヨリ承候間、同山ハ舊來ヨリ、弊藩ノ管轄ニテ、確證モ段々御座候、然ルニ此度領外ニ相成候テハ、無故シテ側地ニ相當リ、甚タ當惑仕候段申述候處、然ラハ其確證辨事官へ可差出旨被申聞候付、則別紙ノ通リ確證差出シ候間、去九月七日差出置候願書ニ照會（ナリ）御承知被下度奉存候、猶又同山ハ領境ニ屏立シ、南ノ一方ヲ擁塞仕、兵防天然ノ墻壁ニ御座候間、領外ニ相成候テハ、忽ク南方ノ堅固ヲ失ヒ、一藩ノ人心ニモ關係仕、不容易義候間、旣ニ御沙汰ニ相成候義ヲ、重テ申上候義奉恐入候得トモ、於弊藩ハ、別紙ノ條件ニ付、今一應御評議被成下候樣奉願候、以上、二年十一月十二日

英彦山ハ弊藩ノ附屬ニ候據證見出、

英彦山ハ田川郡中ノ山ニテ、同郡ハ山河共一圓、豐千代丸領內ニ御座候付、同山ハ豐千代丸管轄ハ勿論ニ御座候、依之同山ヘハ舊幕府ヨリノ朱印モ無御座候事、

一同山座主院始領內ノ者ニ御座候ニ付、附屬ニ相違無御座候間、證書別紙ノ通御座候、

一弊藩附屬ノ取扱郡方寺社方ニテ仕來、別紙ノ通御座候事、

一舊幕府ヨリ領內巡見使ノ節、山內巡見等ノ郡地ト相替候義無御座候事、

一座主院始メ宗門ノ義、弊藩ヨリ相改候事、

一人別帳差出シ候儀、山中一統田川郡ノ人別ニ御座候事、

一萬端御觸面都テ弊藩ヨリ相達候事、

一山內ノ竹木、座主院始自分伐リ方イタシ候義不相成、伺出差圖ヲ以テ伐リ方爲致候事、

一諸勸進下知候節モ弊藩ヘ御達ノ上差掛候事、

一變籍取上ケノ節モ弊藩ニテ取扱候事、

右ノ外重疊ノ證據ハ、尤モ別紙別紙〔冊カ〕ニテ御承知被下度奉存候、以上、

十一月十日

豐前國英彥山ハ、當藩ノ附屬ニ相違無之、且管轄ヲ離候條理無之、確證概略左之通、

一豐千代丸先祖右近將監受封ノ節、領地目錄ノ內、田川郡一圓ト有之候處、英彥山ハ田川郡ノ山ニ候事、靈元法皇ヨリ彥山ニ英ノ字ヲ賜候節ニモ、豐前國彥山ト有之、其外豐前國彥山ト言事ハ、諸書記有之事ニテ、世人ノ普ク知ル所ニ候、且又繪圖ヲ以テ照シ候ヘハ明白ニ相分申候、

一同山ハ社領ニモ寺領ニモ無之證據ハ、舊幕府ヨリノ朱印無之事、

但シ、同山ニ御壁書トテ、守護不入十方檀那ト言書面持傳居候得トモ、是ハ慶長五年豐臣氏時代ノ事ニ候、此時代ノ事ヲ擧用候者、諸方ニモ何程カ可有之、豐千代丸管轄中ニモ右樣ノ社寺段々有之候得トモ、唯今ニテハ、總テ當藩ノ支配ニ相成申候、豐千代丸先祖受封以來ハ、同山義全管轄ニ相違無御座候、當節ニ至リ、管轄ヲ離レ候テハ、藩壁險要ノ地ヲ無故シテ被削地候義ニテ、當惑不大形、條理モ不相立義ト勘考仕候、

一寬永年中受封以來、座主ヘ知行千石、內方ヘ百石遣シ、座主旅行吉凶其外致扶助來候事、不可枚擧、昨年座主天氣伺、僧位僧官爲返上登京イタシ候節迄モ、金子調達遣

シ候事、
一同山ハ田川郡ノ內、津野、落合兩村地先出合ニ候、依之、制札ハ前々ヨリ本村ニ有之、彥山ニハ無之候事、
一人別改ノ節、同山人員不殘田川郡中ノ人別ニテ差出來候事、
一宗門改ノ節、宗旨證文當藩ヘ相納候事、
一年始家督入部任官歸邑等ノ節、何モ爲祝詞座主致登城候事、
一座主、院養子并內方緣組其外緣付等ノ節、前方當藩ヘ願出來候事、
一座主、上京參府又ハ他行何モ願出來候事、
一當藩助成又ハ心附等遣シ候節、家中始メ祿地寺院夫々割合ヲ以テ遣シ候故、座主知行千石ノ割合ヲ以テ遣シ候事、
一巡見上使ノ節、山內ニテモ大庄屋小庄屋案內致シ、同山ヨリモ役僧罷出候事、
一靈元法皇勅額ヲ賜候節、當藩ニ奉請取、銅ノ鳥居ニ奉掛候事、
但、右山僧徒ヨリ、直ニ可奉請取致手段候次第不條理ニ付、京都御役々ヨリ、御達ノ通リ、座主ハ遠慮愼、役僧ノ面々ハ閉門、當藩ヨリ申付候事、
一同山ハ當藩ノ附屬ニ相違無之段、座主印形付證文有之候事、

一梵鐘ヲ兵器ニ可鑄立旨勅書下候節、同山ノ梵鐘當藩ニテ取扱候事、

一同山竹木致伐方候節、當藩ニ願出、郡方ノ差圖ノ上致伐方候事、

此外證據數々有之候得トモ、先格五ヶ條ヲ擧ケ、餘ハ略之申候、

前條申述候通リ、當藩版圖中ノ山ニ無相違ノ義、確乎トシテ、更ニ可疑儀ニ無之、猶又當正月、勅祭勅願ノ社寺共、藩々ニテ可致支配旨御布告御座候上ハ、當藩ニテ可致支配義當然ニ候處、右樣ニ不相運、兎角當藩ヨリ申上候義貫徹不致、昨辰ノ秋ヨリ當節ニ至候迄、彼是ト相遲申候、畢竟當藩ハ正直ヲ旨トシテ、御尋御座候節、委細可申上ト、前段ノヶ條夫々不申上候處、朝廷御多端ノ折柄、彥山ヨリ申上候片口御信用ニ相成候義ト、乍恐愚考仕候、是レ以テ、御最ノ義ニ奉存候、元來同山ノ古記錄寫書、大抵ハ當藩ニ納居候處、同山ハ當藩ノ版圖外ノ山ト可相成證據更ニ無御座候、然ルニ同山ヨリ證據差出居候由、何樣ノ義ヲ申述候哉、甚疑敷義ニ御座候、世間風說ヲ承リ候ニ、總テ虛說ヲ稱ヘ居候、何分當藩ニモ御尋ニ相成候得ハ、明白ニ可申解ト存込罷在候得トモ、是マテ其儀ニ不相運段、心外ノ次第ニ候、又風說ニ、當藩ヨリ同山ヲ苛酷ニ取扱候義相聞候得トモ、甚以表裏ノ次第ニ候、當藩城廓自燒後、一藩飢渴ニ迫リ候內ヨリモ、同山ヘハ平常ヨリモ扶助ヲ增シ、昨秋座主登京ノ節迄モ、旅費ノ金子調達遣シ候

義ニテ、萬事御推察可被下候、虚説ノ甚シキニ至テハ、當藩ヨリ同山ノ通道ヲ差留候段、申觸候、甚以テ意外ノ事ニ候、昨年當藩改革ノ節、取調ノ義有テ、隣國ハ勿論、村ヨリ村ヘモ米穀出入差留候事、暫時有之候、其後直ニ融通相開候得トモ、同山ヨリハ更ニ米穀ヲ買入不申候、些細ノ事ヲ巨大ニ申候ハ、何樣トモ可申拵候得トモ、當藩ヨリ申處ハ、天地神明ニ誓ヒ、片言モ虚説ハ不申述候、又或ハ同山ト確執抔言事、甚以テ切歯ノ次第ニ候、版圖中ノ人員ト心得、扶助イタシ來リ候者、何ソ確執ト申儀可有之哉、山中ニテ異議ヲ企候者、纔四五人ニ過間敷ト勘考仕候、當藩ニ於テハ、更ニ異存無之、昨秋迄不相替致扶助來候事、明白ニ御座候、唯今ニテモ、以前ノ姿ニ相成候得ハ、一役不眠、一人ヲ不懸、不相替加扶助候心得ニ御座候、只藩壁險要ノ地ヲ無故被削地候テハ、甚々當惑ノ儀ニ付、順道ヲ以テ以前通リニ被成下候心願ノ外無他事候、是迄彼是ト差縺レ、貴方御取調ノ段々不相運候處、此節西京彈正臺ニテ御取調被下候由、誠以難有仕(次)事ニ奉存候、乍併於御當所モ、情實不貫徹候テハ叶間敷ト、乍恐不憚忌諱前條書綴リ、備高覧候、只恨ラクハ、魔毫不能盡心事故間(候カ)、猶此上御詰問被下候樣奉懇願候、以上、

弊藩寺社方ニテ英彦山取扱

覺

一例年二月十四日十五日、松倉祭禮執行、閏月有之年ハ三月二日三日、小松會神事執行仕候付、其節爲賑小見セ物興行仕候得ハ、役筋ヘ屆出候、若亦歌舞妓芝居興行仕候得ハ、前方願出役筋取次、願濟ノ上仕候事、

一宗門改ノ節ハ、田川郡香春町ニ於テ、宗門奉行出張所ヘ、座主院ヨリ使僧ヲ以テ、宗旨證文相納候事、

一舊幕府ヨリ、人別相改候節、人別帳使僧ヲ以テ、田川郡奉行ヘ差出候、彼役筋ヘハ寫帳面ヲ以テ屆出候事、

一主人在邑中、年始幷家督入部任官歸邑等ノ節、何レモ爲祝詞、座主院登城、對面被致候事、

一座主院、隱居座主職相續ノ節、主人在邑中ニ候得ハ、致登城對面被致候事、

一座主院、養子幷内方緣組其外緣付等ノ節、前方願出役筋取次願濟ノ上取組仕候事、

一座主院、上京參府又ハ心附等遣シ候節、家中始祿地寺院夫々割合ヲ以テ遣シ候付、座主院知行千石ノ割遣候ノ事、

一肥前侯ヨリ、寄附山内ノ諸社普請ノ節、同家役々幷諸職人入込候ヘハ、役筋ヘ屆出

候事、
一山内非常ノ儀有之候節ハ、使僧又ハ飛札ヲ以テ、相ヶ出候、其次第ニ寄リ役筋ヘヨリ
役々差立候事、
一両幕府ヨリノ觸面ハ勿論、其外總テ觸達等座主院(ヨリカ)ヘ役筋ヘ相達候事、
一山内上下取締リ方役筋兼テ相心得居候事、
一座主院不行屆有之候節、遠慮慎主人ヨリ被申付候義モ御座候事、
一一山僧幷坊中心得違有之候得ハ、相糺シ候上、相當ノ咎被申付候事、
右ノ通リ英彦山座主院取扱、是迄ノ運来ニ御座候、諸寺院ト軽重ハ御座候得トモ、領
内諸寺院一統ノ儀ト相心得候處、寺社方ニテ兼テ申出候義、書取差上申候、以上、
但シ、此外取扱ノ定額御座候得トモ、附属ノ確證ニ關係不仕候間、相略候儀ニ御座
候、
英彦山座主　教有書翰在中七郎右衛門宛
一筆致啓達候、然ハ一山ノ儀御領内御附属ニ相違無之旨、兼々一統相心得居候ニ付、
別紙書付差出候條、宜御執計賴存候、恐々謹言、二年十月朔日
安達巳之英彦山座主ヨリ差出候書付

覺

野副院跡ノ儀、先祖以來御領主樣御代々御撫育被下置、御判物ノ通リ、知行致頂戴、諸事隨御下知、院跡致相續、難有奉存候、且一山中一統數代蒙御國恩、野副身柄始メ、一山上下僧俗男女共、豐前小倉御領內ノ者ニ御座候付、御領主樣御附屬ニ相違無御座段ハ、諸坊中末々迄承知仕候、猶向後心得違不仕、御領法堅相守候樣可致候、此段宜シク御執達賴存候、以上、

安政三辰年十二月朔日　英彥山座主權僧正印

香坂七郎右衞門殿

享保十九年寅年英彥山ヘ勅額被下置候節ノ一件、安政三辰年梵鐘御取上ノ節一件、

享保十九年、彥山ヘ靈元法皇英彥山ト被下候勅額御下向ノ儀ニ付、京都町御奉行所ヘ彥山役僧被召呼候付、寺社奉行荒木治太夫儀、役僧寂圓坊、賢秀坊召連候處、兩奉行御列座ニテ、右僧共ヘ被仰渡候ハ、此度勅額御下向ノ義ニ付、領主ニモ委細相伺不申、其上座（主脫カ）自分トシテ、中國路筋ヘ公義同前ノ觸書差出候義、不屆至極ニ思食、御叱リ、右御下リノ一卷、是迄ノ事ヲ戾シ、領主ヘ伺、仰ヲ承リ候樣、巨細被仰渡候、

一右ニ付、先手物頭早川九太夫儀、京都へ差登、五月十五日著京、同十八日勅額奉請取之、小倉へ罷歸リ、同六月十九日彦山銅鳥居へ勅額奉掛之候、

一右勅額ノ義ニ付、從公儀被仰出候趣、京都御役々ヨリ、弊藩へ被申達候付、寺社奉行犬甘九左衛門、郡代小畑半之丞、大目附諸田見治右衛門儀、彦山へ被差向、座主有譽へ遠慮愼被申付、講明院、西ノ坊、橋本坊、龜石坊、尾谷仁右衛門等役義召放シ、閉門申付、寶圓坊、實秀坊、此節在京ニ付、歸山ノ上右同斷被申付候事、

一嘉永三辰年、寺院梵鐘取上儀被仰出候節モ、英彦山ハ一本立寺院ニ候得トモ、弊藩附屬ノ義ヲ以テ、梵鐘於弊藩取扱申候事、

右兩件共、弊藩ノ附屬ニ罷在候處ニテ、都テ取扱仕候義、筆記ニ有之候、彦山附屬ニ關係仕候義ニ付、申上置候、

　弊藩郡方ニテ英彦山取扱

覺

一英彦山ノ儀ハ、田川郡ノ内ニテ、津野、落合兩村地先出合ニ御座候、依之、御制札ハ右兩村ノ本村ニ有之、彦山へハ無御座候事、

一人別改ノ節、同山人別不殘田川郡人別ノ内ニテ、舊幕府へ差出申候、

一舊幕府ヨリ巡見使ノ節、案内ノ義、彦山境内タリトモ、大庄屋小庄屋共、案内仕候、境内ハ、同山ヨリモ役僧罷出、案内仕候、主人廻郡ノ節モ、同樣御座候事、

一主人用方竹木、於同山内勝手次第伐方仕候、同山入用竹木伐方ノ義ハ、山奉行役ヲ以テ願有之候得ハ、役筋差圖ノ上、伐リ方爲仕候、最渡シ方ノ節ハ、山奉行見分ノ上竹木渡シ方仕候事、

一地所ニ拘リ候願筋ノ義ハ、役筋ヘ願出有之候得ハ、寺社立合ノ上及差圖候事、

一例年二月松會ノ節、郡方役ニ山内爲締方差出候事、

一座主院知行米、麓村ニテ爲替渡ノ義、代官役ヲ以テ願相聞候得ハ、代官役ヘ差圖ノ上、其方角ニテ取計候事、

一座主院小倉ヘ罷出、歸山ノ節、入用人馬願相聞候得ハ、郡方役所ヨリ宿繼證文相渡候事、

一同山火災等有之節ハ、田川郡最寄村方ヨリ、繩竹ノ類相渡サセ、假家等爲取建、次第ニ寄候テハ、救米銀等差遣シ候義モ御座候事、

右ノ通英彦山座主院取扱、是マテノ運ヒニ御座候旨、郡方ニテ僉テ申出候義、書取差上申候、以上、

豊前國企救、田川、京都、仲津、筑城五郡幷上毛郡ノ内貳拾九ヶ村、高拾五萬石目錄別紙、在事、充行之(訖)畢、依代々之例、領知ノ状如件、

御判

小倉侍從殿へ

目錄

豊前國

企救郡一圓　九拾五ヶ村

高三萬千九百八拾壹石壹斗九升七合

田川郡一圓　六拾三ヶ村

高三萬九千五百七拾三石六斗九升七合

京都郡一圓　六拾六ヶ村

高貳萬貳千貳百貳拾貳石七斗三升七合

仲津郡一圓　七拾四ヶ村

高貳萬七千六百四拾貳石三斗四升五合

筑城郡一圓　三拾九ヶ村

高壹萬五千五百五拾六石七斗九合

上毛郡之内　貳拾九ヶ村

東上村　東下村　小祝村
土佐井村之内　西女枝村　尻高村
矢方村　赤熊村　四郎丸村
河内村　鳥越村　大村
青畑村　大西村之内　才尾村
山内村　大河内村　下河内村
岩屋村　篠瀬村　鳥井畑村
八屋村　川底村　藥師寺村
河原田村　沓川村　三毛門村
狹間村　永久村

都合拾五萬石

右、今度被差上郡村ノ帳面相改、及上聞所被成下御判也、此儀兩人奉行依被仰付執達
如件、

天明八年三月八日　　青山大膳亮
幸完判
松平右京亮
輝和判

小笠原左京大夫殿

英彦山総代鷹羽匡一、阿部豪逸訴狀彈正臺宛

奉仕英彦山社ハ、嵯峨天皇勅封ノ境内ニテ、神領ノ義ハ、天正以前隣國ニ被蠶食、當此時四海沸騰ノ折柄ニ御座候間、天路峰擯奉訴ニ不知方（マヽ）々罷過、如今僅ニ三里四方ノ神境ハ、他方ヨリ無差配保護仕來候、小笠原氏ヘハ、細川氏引續ノ寄附地モ有之、殊ニ境地相接候間、疲弊ノ末法中ノ微力ニ難及事件ハ、依賴仕候儀モ有之候處、安政三年梵鐘御引上一件、且又文久三年確執ヨリ、領地同樣ノ擧動被成候ニ付テハ、愈尺寸ノ神境モ無御座候樣罷成候、決テ自己ノ遺恨ヲ（マヽ）ミ奉願候義ニハ無御座候、實ニ嵯峨天皇勅封ノ御趣意モ斷絶仕、將又今日迄奉仕天祖忍穗耳尊赫々神威奉戰慄候、縱モ今般御維新ノ御聖時ニ奉値遇、積年ノ枉冤御伸白被成下候樣、別紙除地確證ヲ以テ奉訴候、御裁斷ヲ以テ、舊冬御沙汰之通リ、最寄日田縣ヘ關係仕候樣奉歎願候、今更

小笠原藩ニ管轄仕候テハ、一山離心解體ノ端ト相成候哉モ難計候間、此段高千穗從五位始メ、闔山ノ社中共、萬揆御執掌ノ御央不省奉哀訴候、恐惶敬白、二年十月廿七日

鷹羽　匡一

阿部　豪逸

勅封英彦山考證

去明治元戊辰年八月、當山座主教有拜戴復飾ノ令、僧位官爲返上登京仕、奉蒙神祇官御直支配、定札壁札境內掲示ノ御沙汰、天顏拜被仰付、難有歸山仕候、然ル處當春以來、舊幕府ノ處置御採用被爲在候ニ付、再度御糺被爲遊候旨、奉畏候、則古今ノ大概其確證書取ヲ以テ申上候、

一嵯峨天皇御宇、四方七里ノ社領賜リ候以來、守護不入ノ山路ニ御座候處、應仁以後、隣國ニ被爲割據、國々紛々タル戰國無所訴快（マヽ）ニ罷過、如今僅ニ三里四方ノ境地ヲ保護仕候、然ルニ今日迄勅封ノ社地御引上ケノ御沙汰、曾テ無御座候、依之地子反別無之、租稅等何方ニモ上納不仕候、

一慶長五年、豊前國企救、田川兩郡ノ領主毛利壹岐守、以兵勅封ノ神領略取ノ勢ニ相臨候ニ付、其狀見捘家康公御裁斷ヲ以テ、古來ノ通リ山內ノ處置等他方ヨリ構ヒ

無之候条、被仰付、左ノ條ノ御書出被下置候、其寫、

條々　　　　　　　　　　　　　　　　　　　九州彦山

一當山ノ事被(マヽ)先規ノ旨、守護不入可爲十方檀那事、

一山中ノ竹木他方ヨリ不可伐採事、

一於當山内違背不往之事、

一從當寺中逐電ノ輩不可抱置事、

一諸國ヨリ勸進物ノ様子不相留事、

右堅被仰出畢、若於違犯ノ輩ハ、達ニ可被處重科者也、仍執達如件、

慶長五年三月五日　　　　　長束大藏大輔

増田右衛門尉

徳　善　院判

一寛永年中、細川氏豐前國小倉城主ノ時、爲國役、於田川郡落合村千石有ノ地被致寄附候、同氏肥後入國後、於南ノ門百石ノ地ヲ被致寄附候、此百石于今相違無御座候、

一小笠原氏豐前入國ニ相成、細川氏ノ例ヲ以テ、千石有ノ地被致寄附候、右兩氏ノ寄

附ハ、領內ノ譯ニテハ無之候、其領內外ノ義ハ、此書取始末照應御閲覽被仰付可被下候、

一聖護(院脱カ)御門主ト、弊山本末ノ異論相起リ候時、双方ヨリ幕府ニ訟出候處、元祿九年弊山直道ニ被仰付、御書出被下置候、此時モ直訟仕候、小笠原氏ヨリ取次等ノ義曾テ無御座候、御書出左ノ通ニ御座候、

覺

聖護院御門跡ト、豐前國彦山末山異論ノ事、今般遂糺明ノ處、彦山ハ從先規、別山無紛候條、向後法式等如有來不可有相違者也、

元祿九丙子年三月廿七日　本　紀伊判
戸　能登判
永　伊賀判

豐前國
彦山座主

一享保四年、舊幕府ヨリ弊山御檢分御座候由ニ付、寺社奉行土井伊豫守殿ヨリ、座主ニ直書到來、翌年七月豐後日田郡兼勤代官室七郎左衛門殿手代野口元右衛門幷

川小平太被致登山、境等徹悉ニ御見分ニ相成、繪圖面御持歸リ被成實、豫州致來館

左之通、

別紙書付差越候間、被得其意、滯無之樣ニ可被致候、爲其申達候、恐惶謹言、

十二月十三日　　土井伊豫守在判

彥山座主

別紙切紙ノ寫

豐前國田川郡下毛郡境彥山今度見分有之筈ニ候、依之室七郎左衛門手代可罷越候間、案內

等並用意可見分有之樣可被致候、

戌十二月

但シ、彥山ハ筑前、豐前、豐後三國ニ相蟠リ候山ニ御座候得ハ、從往古郡名ヲ唱來

不申候、此度寺社奉行來翰モ、豐前國田川郡下毛郡境彥山ト御座候得ハ、彥山古來ヨリ

申傳ヘト、相背合仕候樣奉存候、此段御高慮被仰付可被下候、

一享保十七年、九州大饑饉ニ付、其國其領カキリ穀留ニ相成、彥山殆垂饑死候間、役僧

橋本坊ヲ以テ、江府ヘ糧道ノ歎願仕候處、隣郷日田郡代官增田太兵衛殿ニ御申付

ニ相成、同郡ヨリ穀物運輸ノ道御開キ被仰付、一山饑餓ヲ相免候、

一寛政二庚戌年、天下ノ借貸御改ニ付、觸達有之候間、使僧金光坊ヲ以テ、幕府ニ直納奉願候處、聞濟ニ相成、乃帳面直納仕候、

一天保四癸巳年、除地新地御改ニ付、舊幕府御勘定所役人小林藤之助、御普請方直井彌六、岡野雄之助九州下向ニ相成、日田郡代鹽谷大四郎殿ヨリ御達ニ相成候間、役僧泉有坊御請トシテ罷出、古來ヨリ除地ノ書取ヲ以テ申上候、其寫幷鹽谷大四郎殿來翰ノ寫、左ノ通リニ御座候、

英彦山派本山

英彦山靈仙寺

高三千石

山內（東西三里餘 南北三里餘）除地

右英彦山ノ義、往古ハ寺領十貳萬石御座候處、大友家押領、其後毛利壹岐守ヨリ度々亂妨有之、山內彌難澁仕候處、慶長五年東照宮伏見御在城ノ節、奉願、御政道被成下、其後引續寺領等ノ義可奉願候處、山內彌衰微仕候折柄ニテ、其儘ニ押移、當時ニテハ無祿十方檀那ノ施物ヲ以テ相續仕候、勿論前書ノ高幷山內除地ニテ僧坊五百軒、俗家六十軒住居、山中ノ義ハ古來之通リ諸事彦山ニテ取計來申候、以上、

天保四巳六月

英彦山靈仙寺

御勘定所

同年十一月五日
鹽谷大四郎殿書狀

一筆致啓上候、愈御靜謐被成御法務珍重奉存候、然ハ貴山除地御伺出ノ趣、御勘定所ヘ御届申候處、舊來ノ通リ除地御聞届ニ相成候、此段得御意候、恐惶謹言、

十一月五日　鹽谷大四郎判

英彦山座主
　　備前正様

一靈元天皇英彦山ヲ深御信仰被爲在、英ノ一字ヲ賜リ、英彦山ニ大字ノ御額頂戴仕候、享保十九年御額面御下向ノ時、役僧宣圓坊、賢秀坊ニ、御額文字并御院宣共、傳奏ヨリ御下ケ渡ニ相成候、京都江府夫々手數相整候處、小笠原氏種々故障申出候由、其時ノ次第、甚以テ不平ノ事ニ奉存候、古來ヨリ座主代々天顏拜、幕府御目見等ノ節、小笠原氏ノ執奏壹度モ曾テ無御座候、此譯ハ書取ノ内ニ散布仕候、其節ケ樣被備其儀ニ、春慕鶴習慣ノ不相當ヨリ如此被押倒候、年去院宣御額面ハ、小笠原氏ニ御渡ニ不相成候、宣圓坊御請申上、歸山ノ上、同坊ヨリ直ニ座主ニ差上申候、

一安政三辰年北藤輝引上ケノ節、日田郡代池田岩之丞殿ヨリ、直達ニ相成候、御請ト

シテ、役僧大謙院罷出候、其時ノ達書呼出ノ書狀所持仕候、

一梵鐘引上御達一件ニ付、日田郡代ニ御請書迄差出、又小笠原氏ヨリ達シニ相成、且ツ領內附屬ノ一書相認メ差出候段、役僧大謙院奸佞ノ計ニ候、和漢奸臣賣國ノ例不可勝數、御審察奉希候、

一座主代々參府ノ手扣、且御老中ノ書翰、加之巡見上使ニ差出候書物等、所持仕候、

一明治元辰年ヨリ、小笠原氏糧道ヲ壅塞イタシ、山內甚タ相苦申候ニ付、日田縣知事松方從五位殿ニ、米穀拜借奉願候、且糧道御開被下候間、御蔭ヲ以テ今日迄饑餓ヲ相免候、

一明治元辰ノ春、橋本坊、如藏坊爲致上京、去ル文久三癸亥年來ノ事ハ、書取ヲ以テ奉願候處、總テ復舊ノ御書下ケ頂戴仕候、

一明治元辰八月、高千穗從五位上京仕候節、神祇官ヨリ、

一神祇官御直支配ノ事、

一定札覺札五枚境內揭示ノ事、

一境內山野開闢ノ事、

一文武修練ノ事、

右四ヶ條奉蒙御沙汰候、

一社領從沒收以來、無祿同樣ノ山ト相成候間、十方檀那ノ御寄出申請、隣國ハ勿論、遠國マテ追祿還恃仕來候、依之、小笠原氏ハ同國ト云ヒ、殊ニ境地ヲ接シ候得ハ、彼ハ大我ハ小、自然ト曖昧ノ中ヨリ、領內ノ樣ニ相心得被成候ト奉存候、將又西邊ノ諸藩鍋島、細川兩家ハ、最彥山信仰被成候ニ付、時々懇願ノ義モ御座候得トモ、國ヲ隔候得ハ、是迄不和ノ事モ無之候、小笠原氏トハ折節矛楯ノ事モ出來仕候、就中文久三亥年、尊王攘夷ノ大義ニ付、長州藩ト通好候處、小笠原氏抱憤恚、座主始メ役僧共外若干人召捕幽囚イタシ、追々獄中ニテ病死仕候者モ數多御座候、其後寅年小倉城炎上ノ節、六人斷頭被成候、亥年ヨリ辰年迄ノ間、彥山八方ニ構番所、絕粮道止行人酷罰苛政、其苦辛難盡短筆候間、概略申上候、

一天明二年ニ御祈禱獻上仕候、是勅願所ノ大綱目ニ御座候處、去ル亥年ヨリ寅年迄、四年ノ間、小笠原氏ニ被差止、山中擧テ不堪悲憤罷在候得トモ、實ニ弱不可敵强ノ勢、此一端ヲ以テ萬縷御辨明可被下候、猶此外領內臣下同樣取計數多御座候得トモ、全勅封押領ノ處置振ニ御座候哉ト奉存候、前件ノ次第何ソ私ノ遺恨ヲ挾ミ申上候譯ニテハ無之、天人ヲシテ言シムルト、天正以來餘殘ノ社地全相爽候テハ、神

威赫々、實ニ奉恐怖候ニ付、此儘屈伏難致形勢ニ罷成候間、何卒從來ノ枉寃御伸白奉祈候、伏テ冀クハ、去ル辰ノ冬神祇官ヨリ御沙汰ノ通リ、最寄府縣ニ附屬仕度奉存候、サテ豐後日田縣ハ、彦山ノ最寄ニ御座候間、同縣ニ管轄被仰付、勅封ノ社地無恙保護仕候得ハ、可奉慰神慮候故、盡言ノ義恐ヲモ不顧、書取ヲ以テ申上候、以上、

巳十月廿七日

當山住吉ヨリ寄進大願主之事

肥前大守鍋島肥前守樣ヨリ永代御寄進左ノ通、

上宮御本社

神殿一宇

拜殿一宇

白山大行事社

神殿一宇

中宮社

神殿一宇

拜殿一宇

下宮社
神殿一宇
拝殿一宇
高作神社
神殿一宇
拝殿一宇
壹銅神門
二石神門
三木神門
告時鐘樓大一宇
肥後大守細川越中守様ヨリ元和年中御寄進左ノ通リ。當今小笠原侯ヨリ修復、
地主北山社
神殿一宇
拝殿一宇
御靈廟殿

大社一宇

豐後日田御郡代鹽谷大四郎殿、同豐後守殿ヨリ御寄進、

神功皇后社一宇

一切經藏一宇

同國日田郡千原幸右衛門寄進、

玉垂神社

神殿一宇

神樂殿一宇

同境内勅封御祈禱料地諸國ニ有之、（天正年間兵亂被犯、十六村ニ相縮リ、已前八）筑前ノ内六ヶ村有之、左ノ村々、

白米田畠屋敷共ニ四拾三町五反三畝九歩　黒川村

三百三拾九石貳斗六升九合大豆六石　佛　村

（田畠屋敷共廿五町三反　白米三拾三石七斗貳升八合）　佐田村

（都合三拾九町九反五畝二歩　白米三百拾貳石七斗）　福井村

（都合四拾貳町壹反九畝拾五歩　白米三百六十五石五斗壹升五合）　室（寶）珠山村

腰原村　都合三拾八町二反三畝[illegible]歩　白米三百十五石壹斗[illegible]升[illegible]合

菱野村　都合弐拾五町壹反三畝廿三歩　白米百六十七石三斗七升[illegible]合

白木村　都合弐拾壹町七反四畝十七歩　白米九拾四石三斗七升五合

都合白米千六百三十三石貳斗三升六合

豐前國内九ヶ村有之左ノ村々、

落合村　五町

増田村　六町

野田村　三拾町

鶴澤村　八町

處光村　八町

境村　四拾町

津野村　八町

伊奈原村　六町

山國見倉惠村　弐拾五町

以前ハ筑前國上座郡ニ領山座御檢地目錄

合黑川、腰原、福井三ヶ村

一田畠百貳拾三町貳反大廿歩

内田數八十四町九反八拾歩

白米六百四拾四石六升九合七勺

内田十町八反小當分荒年々否共ニ

白米六十石四斗八升四合

又内田貳町壹反三百歩

白米貳拾三石五斗七升壹合

御神殿諸發免ニ除之、

定殘現田數七拾壹町九反廿歩

白米五百六拾四石壹斗三合貳勺定

一畠三十八町三反半

錢三十三貫八百七十文

内畠貳町四反六十歩　散使　子屋敷共ニ除之、

白米古錢四貫七百九拾九文

定殘リ畠數三十五町五反小

錢貳拾九貫六十四文但、壹貫五拾壹反宛之、

合米百四拾三石七斗九升八合貳勺定

天正十七年己丑十一月十日　　深野平右衛門尉

別紙目錄ノ寫

筑前國上座郡ノ內、

黑川村　北志ノ村　白木村　寶珠山村　腰原村

豐前國田川郡ノ內、

落合村　釜田村　野田村　添摩村　成光村　福光村　津野村

同中津郡ノ內、

伊良原村

同下毛郡ノ內、山國里替地村

細川侯御證文寫

豐前國(上)以田川郡內落合村千石、爲座主ノ寺領令寄附訖(訖)、永可有知行者也、仍狀如件、

慶長六年十月十一日　　越中守忠興判

彦山靈仙寺

奉行中

豐前國田川郡ノ內落合村ニ於テ、百石進之候、志ふく御知行有へきもの也、

慶長七年十二月廿三日　越中守忠興判

彦山座主之ゐんきよ

後室ノ御あさへ

筑前長政公御墨附寫

爲彦山御社領、於筑前國上座郡黑川村內、三百石令寄進所ナリ、仍狀如件、

慶長七年十二月廿三日　黑田甲斐守長政判

彦山座主御坊

肥後大守細川越中守樣ヨリ御寄附地、左ノ通リ、同國於南關村ノ內、

一現米　百石　院室

豐前大守小笠原侯ヨリ、御寄附米左ノ通、

一米　千石　院室

一同　百石　高住社神納

是ハ東方分書留有已ニ御座候、

一同　　　　　百石

薩州大守様ヨリ御寄附木(マヽ)田地、

一米　　　　　六十石　　　　　　　　　　政所へ

肥前大守鍋島肥前守様ヨリ御寄附地、

一同　　　　　五十石　　　　　　　　　　黑川へ

同松浦壹岐守様ヨリ御寄附地、

一同　　　　　貳拾石　　　　　　　　　　立石へ

一(コノ間脱アラン)享保五年室七郎左衛門手代彦山境檢分之事、

右ハ年月一ヶ年相違仕候得トモ、享保四亥年舊幕府役人室七郎左衛門出張ノ舊記御座候、定テ手代等モ召連候儀ト奉存候、是ハ長崎表ヘ相圖ノ烽火場出來ニ相成、右請繼ノ烽火場、國々高山ニ築立ニ相成、郡中ニモ立(意カ)山始メ三ヶ所造築ニ付、右爲見分、同人罷越候々ノ者立合候舊記有之、境界見分トシテ、罷越候義承知不仕候、最翠享保五子年二月烽火試トシテ、焚方イタシ候義モ書記ニ御座候、

一享保十七年九州飢饉ノ節ノ事、

右ハ飢饉ノ節、郡中疫癘流行ニテ、病死餓死四萬人餘ニ及候義ニ付、彦山ヨリ其節

日田縣へ依賴仕候義モ可有之奉存候、最當藩ヨリ扶助ノ儀記錄無御座候ニ付、其節ノ義ハ難申上候得トモ、其餘當時ニ至ルマテ臨時扶助之仕候義ハ、度々ノ義ニ御座候、

一天保四年鹽谷大四郞ヨリ除地云々聞屆之事、

右ハ天保四巳年、西國郡代鹽谷大四郞、勘定吟味役小林藤之助、海岸新開可相成場所爲見分、當藩京都郡苅田浦、上毛郡小祝浦へ出張ニ相成申候、其節鹽谷大四郞ヨリ彥山除地ノ證書相渡候ハヽ、當藩へモ沙汰可有之ノ處、左樣ノ儀ハ無御座候、最同山其頃日田縣へ罷出、除地等ノ義、自分トシテ願出候事共ニ候歟、一切承知不仕候、右年間ヨリ除地ニ相成居候ハ、（脫アルカ）安政三辰年梵鐘ヲ兵器ニ可鑄立旨勅命下リ候節、彥山ハ當藩へ附屬有無ノ義、西國郡代池田岩之丞ヨリ被相尋候節、手達有之、彥山座主ヨリ附屬ニ相違無之段、證書差出候付、池田岩之丞へ其段申立候處、同山梵鐘ハ當藩ニテ可取扱旨、寺社奉行安藤對馬守ヨリ、差圖相成候段、岩之丞ヨリ通達ニ相成申候、

右ノ通リ御座候、此段御請奉申上候、以上、十二月

三浦　治

土岐勘四郞

彈正臺上申

英彦山香春藩爭訟ノ事件、取糺候處、別紙勘問ノ通リニ御座候間、尙遂探索候處、彦山ノ申立條理相立候樣被存候、乍併香春藩ニ於テモ、不得止情實モ有之趣ニ付、至當ノ御處置有之度、依テ別紙勘問書相添、此段申上候也、三年六月九日

此末三年六月廿二日、英彦山自今日田縣御付旨、神祇官日田縣豊津藩へ御達アリ、教法神社ノ部ニ載、

志津野豊外貳名答書彈正臺宛

一三里四方地税何方ヘモ不納云々之事、

右ハ彦山境界三里四方ノ内、租税三拾石餘モ有之候由申出候趣ニ候得トモ、是マテ承知不仕候、竹木等ハ藩主ヨリ勝手ニ伐リ取候義ハ、勿論ニ御座候、山内入用ノ節ハ、願出候得ハ、其筋役人差遣、見分ノ上極印ヲ以テ伐取方差免候先規ニ御座候、且山内不毛ノ地墾田私有イタシ候義モ可有之候得共、表立水帳等モ無之、境ケ樣ノ儀ハ、餘郡中ニモ數々有之事ニテ、土民トモ自分懃先ヲ以テ開拓排イタシ候義ハ、强テ檢税ニ及ヒ不申候、

一元祿九年十二月本伯耆、戸能登、永伊賀ヨリ書下ノ文書之事、

右ハ元祿九子年榮護院御門跡ト、彦山ト、末山異論ノ事御座候處、元來彦山ハ格合有

之、御直官ニ相成申候樣、兼テ承知仕候、右ノ節、當藩取扱振ハ如何樣ノ運ヒニ相濟候哉、舊記類無之ニ付承知不仕候、且法務筋ノ儀ハ、元ヨリ關係不仕候、外寺院タリ共同樣ノ儀ニ御座候、最彥山自分繼目謁見等ニテ、舊幕府ヘ參仕ノ節等ハ、諸事藩主ヨリ取扱仕來候儀ニ御座候、

志津野寬外貳名答書　彈正臺宛

一三里四方地税何方ヘモ不納云々ノ事、

右ハ彥山境界三里四方ノ内、租税三拾石餘モ有之候由申出候趣ニ候得トモ、是マテ承知不仕候、竹木等ハ藩主ヨリ勝手ニ伐取候義ハ勿論ニ御座候、山内入用ノ節ハ、願出候得ハ、其筋役人差遣シ、見分ノ上極印ヲ以テ、伐取方差免候先規ニ御座候、且山内不毛ノ地墾田私有イタシ候儀モ可有之候得トモ、表立水帳等モ有(マヽ)之、最ケ樣ノ義ハ餘郡中ニモ數々有之事ニテ、士民トモ自分鍬先ヲ以テ開拓排イタシ候義ハ、強テ檢税ニ及ヒ不申候、

此ケ條

租税三拾石モ有之儀ハ承知不仕、但竹木等ハ勝手ニ伐取候云々申答候得トモ、竹木伐取ハ論スルニ足ラス候得ハ、不問之、唯三里四方ノ境内ト云ヒ、數百軒ノ僧俗

住居ト云ヒ、三拾石ノ田畑ト云ヒ、中々小ナル義ニハ無之候、然ルニイカニ山谷トハ申モノヽ、屋敷年貢田畑ノ租税、一モ納メ不來候ハ、其藩ヨリ何程申張候トモ、除地ニ相違無之候、又其藩申立ノ田川郡一圓ハ、元領地ニテ、卽チ彦山ハ田川ノ郡內ニ候得ハ、タトヘハ社寺ノ牀下ノ上ニモ、吾舊封土ニ有之候云々申張候得トモ、タトヒ元封土ニ致セ、カヽル古ヨリ現存ノ尊キ神社ノ下土迄、吾封土ニ有之云々トハ心得違ノ申分ナレハ、不足論候、況ヤ彦山ハ田川郡ノミナラス、豐前、豐後、筑後三ケ國ニ跨リ候山ニテ、昔ヨリ田川郡彦山ト申唱ヘ候事モ無之候得ハ、田川郡一圓ノ內トハ難申、又決シテ神社マテ封土トハ難申候、箇樣ニ被申聞候得ハ、山ハ何國ヘ跨リ候トモ、人別ハ藩ニテ取扱候ト可申張候ヘ𪜈、コレハ追々ノ成リ行キニテ、何レノ藩ニモ有之事、人別書ヲ取扱候トテ、領分ト申ニキマリ候事モ無之、況ヤ田川郡ガ二ケ國迄ニ出張居候理モ無之、旁以決テ彼山其藩ノ元封土トハ難申候事、

一元祿九年十二月本伯耆、戸能登、永伊賀ヨリ書下ノ文書ノ事、

有ハ元祿九子年聖護院御門跡ト、彦山ト、末山異論ノ事御座候處、元來彦山ハ格合有之、御直官ニ相成申候樣當テ承知仕候、有ノ節當藩取扱振ハ如何樣ノ運ヒニ相濟候哉、舊記類無之ニ付承知不仕候、且法務筋ノ義ハ、元ヨリ關係不仕候、外寺院タリ𪜈同

樣ノ義ニ御座候、最彥山自分繼目謁見等ニテ、舊幕府ヘ參仕ノ節等ハ、諸事藩主ヨリ取扱仕來候義ニ御座候、

此ヶ條

答出候聖護院云々ノ義ハ、元祿九年三月ノ一件ニテ、御尋ノ筋トハ相違イタシ候、御尋ノ義ハ、同年冬ノ事ニテ、彥山ヨリ山格ヲ御立被下度、幕府ヘ願出候處、其十二月十四日、御書下ヶ有之、御文中ニ從先規勅封ノ御祈禱所候條云々有之候、左候得ハ、此義ハ其藩承知不致義ト相見ヘ候得ハ、其藩ヨリ彼是異論ハ不可立候、此文ヲ以テ見候得ハ、勅封ノ除地無紛候、

一享保五年室七郎左衞門手代彥山境檢分ノ事、

右ハ年月一ヶ年相違仕候得トモ、享保四亥年舊幕府役人室七郎左衞門出張ノ舊記御座候、定テ手代等モ召連候義ト奉存候、是ハ長崎表ヘ相圖ノ烽火場出來ニ相成、郡中ニモ彥山始メ三ヶ所造築ニ付、右爲見分、同人罷越、役々ノ者立合候舊記有之、境界見分トシテ、罷越候義承知不仕候、最翌享保五年二月烽火試トシテ焚方イタシ候義モ、書記ニ御座候、

此ヶ條（朱書）「答方御尋ノ主意ト不相叶候」

寺社奉行ノ來簡ニ、豊前國（田川郡下毛郡）境彦山、今度見分云々有之候ヘハ、何ノ爲メニ參リ候トモ、土地見分ニハ相違無之候、此文中ニ（田川郡下毛郡）境ト有之候、コレ田川郡内ノミナラサル條紛無之候、

一享保十七年九州飢饉ノ節ノ事、

右ハ飢饉ノ節、郡中疫癘流行旁ニテ、病死餓死四萬人餘ニ及ヒ候義ニ付、彦山ヨリ其筋日田縣ヘ依賴仕候義モ可有之奉存候、最當藩ヨリ扶助ノ儀記錄無御座候ニ付、其節ノ義ハ難申上候得トモ、其餘當時ニ至ル迄臨時扶助之仕候義ハ、度々ノ義ニ御座候、

此ケ條

當時領内如何樣ノ困窮イタシ候トモ、彦山モ吾領內ト心得居候ハヽ、ヨシヤ救方屆キ不申トモ、同山ヨリ役僧ヲ以テ、江戸ヘ願出候迄モ無之、其藩ヨリ願出取次遣シ候歟、又ハ日田ノ代官所ヘ救米ヲ賴ミ遣シ可申處、其儀無之段ハ、全ク他人取扱ニテ、領主ノ取計ヒニアラス、此義答方不相立候、

一天保四年鹽谷大四郎ヨリ除地云々聞屆之事、

右ハ天保四巳年、西國郡代鹽谷大四郎、勘定吟味役小林藤之助、海岸新開可相成場所

爲見分、當藩京都（郡脱カ）刈田浦、上毛郡小祝浦へ出張ニ相成申候、其節鹽谷大四郎ヨリ、彦山除地ノ證書相渡候ハヽ、當藩ヘモ沙汰可有之處、左樣ノ義ハ無御座候、最同山其頃日田縣ヘ罷出、除地等ノ義、自分トシテ願出候事共ニ候歟、一切承知不仕候、右年間ヨリ、除地ニ相成居候ハヽ、安政三辰年梵鐘ヲ兵器ニ可鑄立旨勅命下リ候節、彦山ハ當縣ヘ附屬有無ノ義、西國郡代池田岩之丞ヨリ被相尋候節、手違有之、彦山座主ヨリ附屬ニ相違無之段、證書差出候付、池田岩之丞ヘ其段申立候處、同山梵鐘ハ當藩ニテ可取扱旨、寺社奉行安藤對馬守ヨリ、差圖相成候ノ段、岩之丞ヨリ通達ニ相成、全ク附屬ノ義ニ付、除地等ノ儀承知不仕候、

此ケ條

當時除地新地見分ノ節、彦山ヨリ高三拾石、山内四方三里ノ事、除地云々、御勘定所ヘ屆出候處、鹽谷大四郎ヨリ、答書有之、除地聞屆ニ相成候證據有之候得ハ、除地ノ義ハ今更申迄モ無之候、其節其藩ヘ沙汰無之ハ、卽チ領内ニアラサル一證トモ可申、又同山ヨリ自分トシテ願出聞屆ニ相成候ニ致シ候テモ、已ニ除地聞屆相濟、數十年ヲ歷候上ハ、其藩ヨリ今更彼此難申候、右ノ通リニ候得ハ、此ケ條モ答不相立候、

最安政三年以來ノ事、答ニ相成候得トモ、此以後ノ事ハ御取上ニ不相成候、

右ノ通リ御座候、此段御請奉申上候、以上、十二月

右五ケ條、眼目ノ御尋ニ候處、夫々皆ノ論不相立候、左候ハヽ、決テ其藩領内ニハ無之事分明ニ候、タヾ々々進々ノ成リ行キヲ以テ、附屬管轄同樣ニ致來候儀ニ有之候、已ニ領分ニ無之、附屬同樣ノ由ニ有之候上ハ、朝廷ヨリ改テ、何方ヘ御附被遣候トモ、其藩ヨリ更ニ彼是申上候筋ハ無之筈ニ候、朝廷ヨリハ彦山其藩ノ領内ニモ無之儀、且御都合被為在、御直支配ニ被仰付候儀ニ候得ハ、タトヘ其藩々轄運上不當内ニ候共、彼是願出候筈ニハ無之、況ヤ藩籍奉還後ニ於テヲヤ、然ルヲ彦山他向ヘ管轄被仰付候テハ、藩ノ制馭向樣ニ相成候抔申立候得トモ、ソレハ大ナル違ヒト可申候ヘハ、能度自分ニ省フメ、〔反省〕違ヒヲ解キ可申候、且又彼山ヲ失ヒ候得ハ、南方ノ要害ヲ失フ云々申立候得トモ、其藩近來彼山ノ人望ヲ失ヒ候上ハ、イツレ山中人々ノ心ト申モノ底志和タト申理モ無之候得ハ、地利ハ人和ニシカス云々ノ古語モ有之事、コレモ其藩ノ違ヒニ付、速ヒヲ解キ可申候、

〔甲書〕コレニテ人望ヲ失ヒ候事決テ無之ト申張候ハヽ、例ノ書付ヲ讀聞セ可申候、

大抵右ノ通ニテ出入可申ト奉存候、

（朱書）『下ケ札』

「寺ノ牀下ノ土モ領地云々ハ、志津野肇、高田作衞兩人申立候口上也、
又三捨石云々ト申事聞屆ニ相成居候上ハ、鍬先ヲ以テ開拓ヲ私有地トハ決テ難
申候、」

彈正臺へ掛合辨官

豐津藩
志津野　肇
三浦　治
土岐勘四郎

英彥山
吉田　八雲
阿部　豪逸

右之者共、最早歸帆イタシ候哉、否御申越可有之候也、三年六月廿三日

彈正臺回答辨官宛

本文五人ノ者、先達テ勘問口書相濟候節、歸國申渡シ候義ニ御座候、此段御答申進候

也、三年六月廿六日

香春藩神葬祭處分

〔太政類典〕第一編 第百三十五卷 教法 葬儀僧尼

元年六月十九日

香春藩神葬祭等處分

香春藩伺辨事宛

今般御一新ニ付、家中其外百姓町人等、向後神葬祭致度志願之者有之、其趣願出候者差免候而不苦候哉、又者其度々相伺可申上儀ニ御座候哉、此段豊千代丸申付越候間、奉伺候、以上、元年六月十八日

（朱書）邪宗門ニ無之候、篤與見留ル上者、差免候而不苦候事、元年六月十九日

但、追而可届出事、」

香春藩神佛分離についての伺

〔太政類典〕第一編　第百三十一卷　教法　神官

香春藩伺辨事宛

今般御一新ニ付、執奏家御廢止相成候處、從前吉田家ヘ屬シ候豐千代丸領內社人共、以來心得方、其他神佛混淆之者共御立分ケ之儀ニ付而者、還俗神勤仕候付、心得方之儀夫々伺出候、依之別紙之通在所表ヨリ申越候付、此段奉伺候、以上、元年十一月十九日

(朱書)「諸侯」

豐千代丸領中社人共、以來家督繼目登京之上、繼目裁許狀幷神主號神道傳授衣冠著服等願立之儀如何心得可申哉之事、

(朱書)「十一月廿五日御附札、神職共繼目之儀、其藩之印鑑ヲ以願出候得者、許狀相渡候事、」

(朱書)「一神道傳授与申儀無之事、」

一是迄大宮司號幷官位等蒙　勅許候者、以後代替之節、猶亦蒙　勅許度、願立候者ハ、

其神社ニ應シ、願之通相叶候筋ニ可有御座哉之事、

但、願出之趣在所所〔マヽ〕表、其筋役人共ヨリ添簡差出候歟、又者在京公用人共ヨリ願

出候哉之事、

〔[illegible]〕無位之神職ハ淨衣白之差貫風折烏帽子可爲著用事」

〔[illegible]〕申出之通、依社格　御沙汰有之候事、

但、添簡之儀者、都合次第何レニテモ不苦候事」

一聖護院御門跡末來菩提山座主并末派修驗共、

一三寶院御門跡末吉祥寺并支配下修驗共、

右者、神佛混淆ニ付、修驗道相止、何レモ還俗、神職ニ罷成可申候付テハ、其本山々々

之御振合、何分共ニ相成候哉、右違臣仕僧位僧官返上仕候上ハ、是迄ノ御振合見合

ヲ以、夫々相當之格合相立候樣、可被　仰付候哉之事、

但、修驗道者御廢止ニ不相成候ニ御座候ハヽ、境内ニ神社有之向者、如何可仕哉

之事、

〔[illegible]〕重キ僧位僧官有之分、式社格ニヨリ可被及御沙汰候事、

但、神社奉仕之修驗者、復飾勿論之事」

右還俗神勤ニ相成候ハヽ、身柄進退ハ、神祇御官へ願出、其餘者是迄之通、領主ヨリ都而支配可仕儀ト奉存候、且又神勤式衣冠等之儀、神祇御官ヨリ御免許可有御座哉之事、

（朱書）「勅祭大社神祇官直支配之外者、申出之通、可相心得候事、」

一神勤式衣冠等之儀ハ、前條附帋之通可相心得事、

一右吉祥寺支配下修驗共還俗仕神勤而已相成候而者、僅之堂宇ニ住居仕、祈檀等モ無數、生活之道無之ニ付、神佛共務方相止度段願出候者ハ、願之通領主ヨリ申付、本山表ヘハ其段御届等ニテ、可相濟儀ニ候哉之事、

（朱書）「奉仕之社其儘ニ而、復飾被仰付候儀ニ有之、生活之道無之与（ハ脱カ）不都合之事ニ候、」

一青蓮院御門跡御配下盲僧共、是迄竈祓等仕來、神佛混淆之宗體ニ御座候處、以來何分ニ可被仰付哉、右宗體御廢止トモ相成候而者、以後僧共生活之道ヲ失ヒ、歎敷次第ニ御座候、如何可仕哉之事、

（朱書）「盲僧廢止之御布告者無之事、

但、竈祓等神佛混淆之儀者可差止事、」

一東照宮社別當延命寺之儀者、東叡山末院家格ニ而、領内台宗觸頭ニ御座候、是亦外

ニ御振合可有御座哉之事、
（朱書）「復飾神勤可仕事」
右之通夫々伺出申候、以上、
十一月十九日　小笠原豊千代丸公用人
丹村六兵衛

豊津藩祭葬式伺

「太政類典」第一編　第百三十五巻　教法　葬儀僧尼

豊津藩伺辨官宛

今般葬祭典、別帳ノ通執行仕度、此段奉伺候、以上、三年十月二十五日藩

（朱書）「伺ノ通、三年十二月十八日」

同上同上

祭葬式、明細書ヲ以、過日奉伺候處、今日迄何ノ御沙汰無御座、先般取行候テ宜御座候哉ノ段、御當官ヘ奉伺候節、取行候テ不苦旨御沙汰御座候ニ付、於藩地、過般取行居候、尚後如何相心得候テ宜御座候哉、奉伺候、以上、三年閏十月二十九日

同上同上

祭葬式、明細書ヲ以、奉伺候處、今日迄何ノ御沙汰無御座候ヘトモ、一昨辰年六月十八日、於京州(都カ)奉伺候處、別紙寫御下紙ノ通リ、大原左馬頭樣御出座ノ上、御沙汰ニ付、於藩地取行居候向モ有之ニ付、爾後如何相心得候テ可然哉、奉伺候、以上、三年十二月十日

別紙

今般

御一新ニ付、家中其外百姓町人等、向後神葬祭致度志願ノ者有之、其趣願出候者、差免候テ不苦候哉、又ハ其度々相伺可申儀ニ御座候哉、此段豐千代丸申付越候間奉伺候。

以上、

小笠原豐千代丸内
入江　宗記

辨官
御中

(朱書)「邪宗門ニ無之儀、確(懇)ト見留候上ハ、差免候テ不苦候事、
但、追テ可屆出事、」

宇佐宮菩薩號廢止并復飾社僧等の件

〔太政類典〕第一編第百廿三巻　教法　神社二

二年六月

宇佐宮神領増進處分、幷菩薩號廢止祝詞ヲ以テ告ケラル、

神祇官伺辨官宛

宇佐宮大宮司願ノ趣、無餘儀筋ニ付、神領御増進有之度存候、菩薩號御廢止之儀モ、以宣命可被告筋ニ候得共、大宮司以祝詞奉奏候而モ可然歟ニ相考候、猶御評議可給候也、二年二月五日　神祇

辨官伺神祇官宛

當時天下未全御平定ト申御事ニモ無之候故、神領御寄附御行屆不被爲在候御事ニハ候得共、格別ノ御宮柄故、先ツ從來ニ而モ御嚴飾被爲在候樣有之度候、

一大菩薩號御廢止ノ儀、被告候一條、去年八幡ノ御振合取調ノ處、社務以祝詞奉奏候御事ニ候間、於宇佐モ御同樣ニテ可然儀ト相考候事、二年二月十八日

大菩薩號廢止ノ儀、以祝詞被告候事、

現米千石御寄附可相成御評議御座候得共、他御差響ニモ相成候間、會計官ヘ篤ト聞合候上可申上候事」

奉願口上ノ覺

一我宇佐宮ノ儀、古來天朝御敬神ノ聖慮格別被爲盡候、就中聖武天皇、天平年中、三國七郡ノ御神領御寄附被爲遊、其外前後ノ封田、諸史ニ散見不遑枚擧候、武將政權ヲ執ルノ後迄モ、數多ノ神領有之候處、元龜天正大友氏亂暴以來、宮殿燒亡、神領沒取、舊幕府創業後モ、石淸水ニハ數千石ノ御寄附ニ相成候得共、其根元タル我神宮ニハ纔之神領御寄附ニ相成、現在ノ本社末社六十餘宇、神官四百餘人、年中祭祀二十餘度、加之三年一度ノ參朝、七年一度ノ入府、或ハ宿驛等ノ入費、千石ノ稅ニテ引足候儀ニ無御座、尤從前有來ノ宮講金銀ヲ以取繼キ候得共、何モ行屆兼、罷(疲)弊日々ニ甚敷、神官悉ク農耕又ハ乞徒ノ業ヲ以、露命ヲ繋クニ至ル、衣食足テ禮節ヲ知ノ習ニテ、祭祀文武ノ道ヲ知ル者壹人モ無之、祭祀ヲ過(モ脫カ)半廢絕ニ及ヒ、守衞ノ武官モ、虛名ノミニテ、一匹夫ノ無禮モ拒ム能ハサル勢ニ立至候處、昨春朝政復古御一新以來、先非ヲ悔悟シ、文武ヲ習練シ、內ハ神宮ヲ守リ、外ハ國家ニ報セントスル者、凡貳百餘人、妻子ノ衣帶モ沽却シ、其費ニ充シ(レカ)共、其用不給、

今已ニ覇業ニ及ントス、方今大典御回復ノ砌、御祖先タル御宮祭祀不秩シテハ、古来神宮御設被爲遊候甲斐モ不被爲在候、神官文武ノ道ヲ不知、宮門ノ守衛スラ不備、万一非常ノ節、宮庭ヲ汚シ奉リ候者有之候テハ、乍恐御敬神ノ御祭典ニ缺ナシト謂フヘカラス、且又祭祀ハ大政ノ本ニシテ、國家安泰外夷降伏ノ御祈ハ、今日ノ急務ニ候、依テ祭祀ノ供給、文武習練ノ用度、社頭相應ニ御寄附被仰下候ハヽ、一社一同天朝御敬神御追考ノ聖慮服膺仕リ、祭祀宮殿悉ク古ニ復シ、其外習文講武ノ道益相開キ、神官ハ勿論近國ノ愚民ニ至迄、神人君臣ノ大綱辨別致サセ、皇化宣布ノ一助ニモ相成候樣、身命ヲ抛テ盡力可仕候、當今天朝ニ於テモ、御用頻ノ砌、前條ノ次第申上深奉恐入候得共、伊勢、杵築、賀茂、春日、石清水、其外勅祭ノ大社ニテ、我神宮ノ如ク小地衰廢ノ社ハ無之、實ニ燃眉切迫ノ窮、固一片ノ赤心自ラ禁スル能ハス、何卒區々ノ微衷御垂憐被下置、右願ノ通被仰付候樣、一社擧テ奉懇願候、

一我神宮大菩薩號ノ儀ハ、聖武天皇ノ御願ニテ、御贈リ被爲遊候得ハ、已ニ去ル文久甲子年佐使ノ宣命ニモ、大菩薩號被爲記候間、今般右佛號及ヒ其外混淆ノ儀御廢止被爲遊候ニ就テハ、更ニ宣命ヲ以、右ノ旨神前ヘ被爲告候樣、奉願度候、且昔

通御布告ノ儀ニテハ、乍恐神慮如何ト奉存候間、此臨辭(マヽ)別テ奉願候、誠恐誠惶謹言、

明治二年　豐前國
宇佐宮大宮司代
己巳正月日　池永備中守

神祇御役所

菩薩號廢止ノ儀、以祝詞被告候事、

西京神祇官へ問合東京神祇官

宇佐宮俵米御獻備之儀、輔相ヨリ別紙ノ通リ被下知候ニ付、會計官へ打合候處、尚又別紙ノ通申來候ニ付、又候輔相へ相伺候處、無餘儀事ニ付、其趣申諭置候樣被申候間、願書御戻シ申入候、可然御取計可有之候、

一同宮菩薩廢止ノ儀モ、別紙ノ通リ下知有之候間、八幡ノ振ニ御取計有之候樣存候也、

會計官意見

御宮柄御神領御増進ノ儀、相見候得共、費用多端、會計ノ目的未相定、今暫クノ處、見

合相成方可有之事、二年五月七日

長崎府へ達 民部官

別紙類ノ趣、無餘儀相聞候ニ付、仮米ニテモ御救備可相成處、當今會計方ノ御目的モ未相立候故、追テ御沙汰有之候迄、程能御處置可給候、依テ本紙へ附紙ノ上御返申入候也、二年六月十四日

「太政類典」第一編 第百三十一巻 教法 神官

二年三月

長崎縣下宇佐宮社僧復飾ノ末、高野山ヘ脱走、其處分ヲ長崎縣ニ委任ス、

長崎府伺 辨事宛

今般宇佐宮社家田染河内守出崎、別紙寫ノ通リ相届、尚高野山ヨリ豊前國中眞言一派ノ寺院ヘ布告書寫ヲモ相添、差出候ニ付、昨年閏四月、諸國大小ノ神社ニ於テ神佛混淆ノ儀御廢止ニ付、別當社僧ノ輩還俗ノ上、神道ヲ以相勤可申旨、府藩縣ヘ御布令有之候上ハ、神社奉仕ノ僧侶ハ、御趣意奉躰認、皆悉還俗、神主ヲ以相勤候ハ勿論ノ儀、兎角蓄髪ニ混ミ、本寺本山ノ布告ヲ待、因循ニ打過候躰ノ者モ有得共、追

々奉伺候通リ、夫々御差圖ノ趣ヲ以、當府管轄ノ地ニ、所在ノ別當社僧修驗共ニ御布令ノ御趣意加說諭候處、各遵奉還俗願出候ニ付、一同願ノ通還俗申付候義ハ、昨年十一月御屆仕、尙天草郡修驗共ヨリハ、昨冬還俗願出候得共、住心院ヨリ、修驗共ヘ布告書差越、其爲ニ還俗ノ修驗トモ、大ニ疑惑ヲ生シ候間、其砌奉伺候處、當府ヨリ申出ノ趣、至當ニ付、住心院ヘハ、乾度被及御沙汰候、尙此上精々疑惑不生樣取計可申、尤住心院重臣ヨリ末派ヘ申達ノ儀ハ、早々引戻可申管ノ旨、御附紙ヲ以御差圖被成下、其書正月下旬相達候ニ付、願ノ通リ、還俗申付候得共、未タ還俗改名屆出不申候間、相屆次第、早速御屆仕候心得ニ御座候、右住心院及高野山等ヨリ、其末寺末派ヘ曖昧ノ布告差廻候振合ニテ、此後諸本寺本山ヨリ混淆曖昧ノ布告於有之ハ、向々疑惑ヲ生シ候ハ顯然、遂ニハ異論混雜ヲモ可引出、既ニ隣國諸藩等ニテ未タ斷然不致向モ有之哉ニ相聞、右ハ畢竟舊幕府中ヨリノ舊弊ニテ、從宮門跡、種々面倒ノ引合有之、大ニ避之候處置不少、其爲ニ因循致居候歟モ難計、依之高野山ヘモ速ニ御沙汰有之、神社奉仕ノ僧侶ハ、御布告遵奉、斷然還俗神道ヲ以相勤、佛天ニ仕候僧侶ハ素ヨリ、神道御廢止ノ儀ニハ無之候ニ付、佛法ヲ以相勤、神佛混淆御廢止ノ御趣意判然相貫候樣、無之候テハ、御趣意ヲ誤候者出來、朝命ニ奉戾候暴動ニ

立至リ可申哉モ難計、既ニ宇佐社僧大乘院儀モ、昨夏御布令承知乍仕、高野山ヨリ一派ノ寺院ヘ仁王經轉讀ノ布告達來候ヨリ、忽社僧等疑惑ヲ生シ候ニ付、爲聞合高野ヘ脱走、依之同社僧眞乘坊惠璿事還俗眞上鹿丸、元弟子光乘事還俗眞上勝馬ヲ爲呼迎差遣候處、大乘院ハ高野山神祇掛ヘ願筋有之趣ヲ以不罷歸、加之豐前國中一派ヘノ觸書ヲモ相違、旁一層相惑、還俗ノ勝馬モ再ヒ僧形ニ復シ、以ノ外心得違ニ付、大乘院儀ハ再應呼返シ、飛脚差立爲及應接、此上ニモ我意申張不罷歸節ハ、不得止事件ニ付、昨年伺濟ノ通、神勤差止爲立退候處分ニ准シ、宇佐歸住差止、勝馬儀ハ社家共ヨリ反覆說諭爲加、尚不相用候ハ、當府ヘ呼出、精々懇諭候テモ、强情申募候ハ、是又同樣申付候外無之候得共、相成丈說諭改心爲仕度、眞實佛門歸依還俗難澁ノ趣ニモ相聞候（ハ、カ）ハ、望ノ寺院ヘ差遣候方ニテモ可仕、追テ治定ノ上御屆ノ心得ニ候得共、先一應此段申上置候、以上、二年三月三日別紙次

長崎府伺濟事完

宇佐

兩大宮司

總社家中

昨年高野山へ罷越候共御宮社僧大乘院爲呼返、元社僧眞乘坊惠塔寺還俗眞上度丸、元弟子光乘事還俗眞上勝馬爲差登候處、大乘院儀高野山神祇掛へ願筋有之候間歸國難出來旨相答候段、右勝馬歸國ノ上申出、尙高野山觸書ノ由ニテ、書面差出、且同人儀一旦還俗ノ身分ニテ、再僧形ニ復シ、更ニ相憚候躰モ無之事件中立ノ趣、右ハ大乘院幷勝馬共ニ心得違ニテ、別當社僧ハ勿論、修驗者共ニ候トモ、神社奉仕ノ分ハ、還俗ノ上神道ヲ以爲相勤可申旨、太政官へ伺ノ御指圖モ有之、旁神佛混淆御廢止ノ御趣意奉體認、昨年御布告ノ通還俗致シ候上ハ、疑惑ヲ不生、神勤勉勵可致、若シ無據筋有之、還俗難遂又ハ佛法歸依等ニテ、還俗難相成者ハ、是又御布令ノ通リ神勤相止、立退候外無之、畢竟神佛混淆不相成樣可致ハ勿論ニ付、佛式へ仕候者ハ佛道ヲ以相勤候筈ニ候間、高野山ヨリ豐前國中ニ所在ノ眞言一派、佛式へ仕候者共へノ觸文ニモ可有之、夫等ノ區別精々申諭、得心貫シ候ハ、（ハ、ヵ）頓テ請書調印爲致、眞言（上ヵ）度丸へ奥書調印申付可差遣候、自然疏忽ヲ不用、尙不得心ノ儀申立候ハヽ、右勝馬ニ還俗社家ノ内壹人差添、當府へ可罷出候、

一還俗ノ者共、元本山へ關係無之儀ハ勿論ニテ、既ニ太政官ヨリ御差圖ノ儀モ有

之儀ニ付、一同共旨可相心得候事、

一大乘院儀早々歸國可致旨、尚又至急呼返ノ飛脚差立、返答ノ趣當府ヘ可申聞事、

二年三月

一不動明王　壹體

一不動明王　木像壹體

一仁王　木像壹體

一喚鐘　壹口

一時鐘　壹口

一大般若　拾貳箱

一大般若經　百卷

一書經三問一答講經　壹卷

一同間者經　壹卷

一法華經　貳卷

一錫杖　壹

一常香盤　壹

一講臺　壹

一脇机　壹脚

一禮盤　壹

右ノ通、佛像ハ宇佐寺院大樂寺大善寺ヘ證文取之預ヶ置、佛具ハ社職共ヘ證文取之預ヶ置申候、右之分如何取計可申哉、此段奉伺候、以上、二年三月四日

（朱書）「其府ノ見込ヲ以可然可取計事、」

〔社寺取調類纂〕八九　（上奏歎訴條標）宇佐宮社僧惣代大樂院

謹奉歎訴條々

一宇佐宮両大門外有室経藏、神職共猥ニ取毀候事、

一伽藍所彌勒寺本尊極樂寺江賣拂候事、

一金堂藥師如來尊像幷日光月光尊像、不動明王、愛染明王、二王門尊像取出、大善寺江賣拂候事、

一二王門尊像足下ニ御座候書附寫、

當社中興由來之事

世所ニ及亂乎、外道伴天連之威、而於國家於郡、領主ニ守佐神社佛閣如有無、雖細川越中守參議源朝臣忠興公、乗大閣輪現寄官身、守佐神社佛閣悉再興之頃、信補之畢僧與東寺釋由玄清法印令開善事、

元和五年己未二月吉曜日奉行菅原和泉守

永勝院嶋拿法印書之

右爲邪法退治再建之尊像取毀候、當今ノ時節、如何ニモ悲傷至極ニ奉存候事、

一同所一切經寶藏取毀、木崎村西光寺江賣拂候事、

一同所鎮守祇園社御躰取出持去候事、

一池ノ島大武堂取毀、本尊阿彌陀如來賣拂候事、

一藥師御許由來日不動明王日是村江賣拂候事、

右者本ヨリ人皇四十五代聖武天皇神龜年中依八幡宮之託宣、勅願草創之靈場、本朝佛閣之最初也、然更八幡宮社頭トハ別境ニテ、社内ニテハ無御座候處、先般取計向可有出候様、御布令ニ任セ、社僧還代トメ揚僧伺出候得共ニテ、當時長崎府御役方御出張之前以、御重圖ト申立、破佛滅暴之

所業仕候由申來候、有形奉言上候、實ニ　天朝之命令ニ違背仕、不顧神慮ヲ、不相濟儀ト深ク奉恐怖候、幾重ニモ不忍歎激次第、篤ト御沙分ケ、御憐愍ヲ以大宮司始神職共屹度御取締被　仰付、伽藍所御立置、永續勤仕、寶祚遠長鎭護國家之懇祈奉抽丹誠度、尚先帝之叡旨深重之由緒不亡樣、御仁恤之御取計、偏ニ奉仰願候、以上、

元治（明カ）二年　宇佐宮社僧惣代

巳三月廿二日　大乘院

神傳(印)

神祇官

御役所

國玉神社の神佛分離

伊東尾四郎氏報

國玉神社は豐前築上郡求菩提山にある、求菩提山は修驗の山で、求菩提山雜記に



祀せる堂社は左の通、

上宮　鎮護靈神　白山大權現　高祖堂　下宮　北山殿　山王廿一社　多寶塔

本尊釋迦如來　鬼神本社　講堂　本尊彌陀如來　藥師如來　觀世音菩薩

十二神將　三十番神　兼名菩薩　經藏　鐘樓　食堂　不動院　淨殿　山門

金毘羅宮　愛宕社　次郎坊社　毘沙門社

諸坊は左の通、

西之坊　習禪坊　當秀坊　當達坊　賢秀坊　玉祥坊　成圓坊　賴德坊　秀本坊　安養坊　善泉坊　門文坊　西尾坊　光明坊　玉藏坊　傳秀坊　般若坊　岩屋坊　上石坊　橋本坊　寶藏坊　大門口坊　守靜坊　正學坊　福乘坊　福壽坊　能覺坊　境森坊　什現坊　融覺坊　淨寶坊　寶泉坊　東光坊　常本坊　普藏坊　乘學坊　正善坊　海藏坊　善陽坊　柏之坊　善住坊　峯之坊　南界坊　宮本坊　法藏坊　行泉坊　行光坊　淨蓮坊　圓滿坊　眞龍坊　林光坊　道場坊　梅之坊　寶園坊　圓行坊

神佛分離の時、石佛石碑類は、谷に突落されたが、木佛は岩窟内に隠されて、この岩窟は古墳の石槨で、今も存して居る、しかし佛像の中には、他處に移されたものもあ

る、一例を擧げると、十一面觀音像の如きは、隣郡京都郡に移されて居るらしい、
祭事は正月八日に鬼會、二月廿八九日に松會があつたが、今も鬼會松會は行はれて居る、

國玉神社には、佛に關する遺物の現存せるものが少くない、

(一)銅版法華經　縱七寸橫六寸の銅版に法華經が細字で刻してある、それが總計三十三枚あつて、それを容れる箱も金屬製で、全體を提げると、非常に重い、銅版經には康治の年號がある、これは明治三十九年に國寶に指定されて居る、

(二)經筒　保延、久安などの年號のあるものが存して居る、

(三)木像大小數十　前述の如く、神佛分離當時古墳石槨內に隱せしものを、今は鬼神社の後方に保存してある、寫眞は卽ち其の中の一部分を撮影したもの、

(四)石佛三十三體觀音　安淨寺といふ葬を掌る寺にあつたのたから、破壞せられず安全に殘つて居る、今の社務所は安淨寺のあつた所にあるから、社務所の傍に觀音像が並んで居る、

(五)多聞天像、不動尊像　今社務所附近の小堂內に置かれて居る、

本稿は廣澤應知氏に負ふ所が多い、



大分縣より寺院境内神社等についての伺

〔社寺取調類纂〕四九三

伺

一寺院境内ヘ、從前ヨリ寺鎭守ト稱シ、一社建立致居候向モ有之、右ハ不苦候哉、

一法華宗各寺境内ヘ一社ヲ建立シ、加藤肥州ノ靈牌ヲ置、僧侶讀經等致シ、人民ヘ參拜爲致候義ハ、御差支無之哉、

一神官共肉食之儀ハ不苦哉、又肉食致候得ハ、幾日トカ神拜可憚義ニ候哉、

一神官喪中除服被申付候節ハ、神勤不苦候哉、

右條々、賢成爲心得奉伺置候也、

西寒多神社權禰宜

大分縣等外一等出仕

加藤　賢虔

明治九年一月廿三日

教部大輔宍戸璣殿

大分縣管內無檀無住廢寺處分伺

〔社寺取調類纂〕一四九一　(受)明治六年三月十三日　(回)三月十四日　(濟)同廿八日　(丞)三島
(議)澄川拙三　(局)宍戸、黒田　(出仕)鈴木　(課)社寺

大分縣管內無檀無住廢寺處分伺

無檀無住廢寺ニ付伺

一諸寺院中、總テ本寺本山ヲ除之外、無檀ニシテ無住之向者、自今總テ廢止云々、御達相成候處、右者從來無檀ニシテ無住之寺院而已廢止候御趣意ニ候哉、又ハ無檀之分ハ、自今後住僧隱居死亡轉住等之節、跡住職不申付、漸ヲ以悉皆被廢止候ハヽ、家族之者如何處分可致哉、

一當管內ニ於テ、本願寺ノ道場又ハ出張所等有之、有檀有住之向ハ、其儘差置可申哉、且又管內中ニ而、一寺ノ檀家隔地ニ有之、不便宜ニ付、道場出張所等相立、代々住僧ニテ家族有之、或ハ本寺弟子ノ內ヨリ、輪番等ニテ差置來候分、如何處分可致哉、

一無檀無住之末寺庵室塔中等ニテ、本(寺脱カ)ヨリ弟子ヲ以、看坊看住等差遣居候分、幷家族有之分共、本寺合併可致哉、

一無住ニシテ檀家貳三軒或ハ十五六軒位有之分者、本寺或ハ最寄法類へ合併致シ不苦候哉、

一跡地所置之儀ハ、總テ大藏省へ可伺出旨御達相成候處、無檀家之小寺小庵ニシテ、本堂等モ無之、其實ハ町家並或ハ農家同樣之居宅ニテ、元修驗之如キ祖先來居住致シ來候テ、家族等モ有之向、當今ニ至、糊口ノ目的ヲ立、居住ノ儘、農商ニ歸入致度旨願出候分、如何處分可致哉、

一教部省第十四號、僧侶ノ歸俗出願之向ハ、其都度々々可伺出旨、御達有之候處、當節ノ振合ニテハ、無檀幷檀家少ノ寺庵、將來營生ノ目的無之、歸俗願出候節、下方差支無之候得共、伺ヲ經ス廢寺申付可然哉、

右無檀無住之向被廢止候儀、御達相成候ニ付、應書ヲ以テ奉伺候條、早々御指揮被下度候也、

明治六年一月廿八日

大分縣權參事 𠮷原源太郎

大分縣權令 森下景端

教部卿大木喬任殿
教部大輔宍戸璣殿

（朱書）
「第一條
無檀無住ニシテ、永續之目的無之者ハ、本寺法類等取糺シ、始末具狀之上、廢止ハ勿論ニ候エトモ、無檀之分、住僧隱居死亡等之節、跡住職不申付、漸次ヲ以廢止候儀ハ不相成候事、

第二條
從前之儘差置可申候事、

第三第四ケ條
本寺幷檀家故障等無取糺シ之上、宗名寺名等委詳調書ヲ以、合併之義更ニ可伺出候事、

第五ケ條
跡地處分之義ハ、總テ大藏省ヘ可申出候事、

第六ケ條

廢寺之義ハ從前之通リ伺出之上、處分可致候事、

明治六年三月廿八日〕

(受)明治六年五月十三日　(回)同月十四日　(書)同月十九日　(丞)三島　(課)河口寛　補宍戸、黒田　(出仕)鈴木

(課)社寺

大分縣ヨリ無禄無住之寺院之儀ニ付伺

寺院無禄無住廢寺ニ付不審之廉々、別紙ヲ以テ相伺候條、(書力)至急御指揮被下度候也、

明治六年五月十三日　　大分縣權參事津原源太郎

教部大輔宍戸璣殿

(朱書)「第一條、

合併之見込候ハヽ、委細具状ヲ以テ可伺出事、

第二條

可爲從前之通事、

第三條

其都度具状ヲ以テ可伺出事、

第五條

大藏省へ可伺出事、」

寺院無檀無住廢寺ニ付、左之廉々伺、

無檀無住之末寺庵室等ニテ、本寺ヨリ弟子ヲ以テ看坊看住等ニ差遣居候分、本寺合併可致哉之事、本願寺出張所、且又管轄內ニテ、本寺檀家隔地ニ有之、不便宜ヲ以テ、道場出張所等相立、代々住僧ニテ家族等有之、或ハ本寺弟子ノ內ヨリ、輪番等ニテ差遣候分、如何處分可致哉之事、

無住ニシテ、檀家二三軒或ハ十四五軒位有之分タリトモ、其儘差置可申哉之事、

小寺小庵ニテ、本堂モ無之、町家並或ハ農家同樣之向、居住之儘歸農商致シ度旨願出候ハヽ、御許可可相成哉之事、

廢寺跡年貢地之分ハ、地主へ御渡シ相成候歟、別ニ可伺哉之事、

右相伺候也、

明治六年五月十三日

長崎における神佛分離

「長崎市史」地誌編　總說

明治元年には神佛判別の令が下り、社僧の別當職たるを禁じ、還俗するものを歸正と云ひ、宮門跡の歸飾を命じ、八省の上に神祇官を置き、明治二年に至りては宣敎師を置きて大敎宣布の任を之に委ね、同三年正月には全く政敎一致の制を明にして大敎宣布の詔を下し給ふに至つた、

是に於て藩によりては斷然廢佛毀釋を實施した所もあつて、彼の薩摩藩の若きは其の一であつたが、長崎ではそれほど極端では無かつたけれども、神佛混淆は嚴禁せられ、其結果として、八幡町大覺寺は八幡神社、八坂町現應寺は八坂神社、島野平願成寺は愛宕神社、優馬場威福寺は天滿宮、無凡山の神宮寺は金毘羅神社と改稱せられ、その住僧は還俗して神職となつた、そして本蓮寺、長照寺等に於て番神堂に天照大神を祭りしは、之を改めて三光尊或は觀世音を本尊とせしめ、市内に散在する石佛や石塔場は殆ど悉くこれを附近の寺院に集め、寺内に祀られたる鎭守神社は、

悉く之を境外に奉祀せしめ、神佛を混淆する勿らしめた、現今諸寺院の周圍に排列されて居る石佛はこの時各所から蒐集したもので、市內に散在する稲荷社天滿宮等の中には寺院の鎭守社であつたものがある、

〔長崎市史〕地誌編　佛寺部下　廢寺

一寄合町玉泉院　天台宗　明治初年に至り、純一の神社となり、玉泉神社と改稱された、

一今博多町大行寺　天台宗　同斷、天滿宮と稱す、

一丸山町如意輪寺　眞言宗　明治維新に至り、寺院を廢し、神社となり、保食大神を祭神とし、大崎神社と改稱された、

一今籠町不動院南光寺　眞言宗　明治元年寺を廢し、天滿神社と改稱された、

一銅座町楞嚴院、眞言宗　同斷、銅座稲荷社と稱す、

一竹ノ久保町　能滿院萬福寺　眞言宗　同斷、淵神社と改稱す、

一浦上山里村里鄕字長尾觀音院圓福寺、眞言宗　同斷、日吉神社と改稱し、大國主命、大山咋命、大年神を祭神とす、

（本書ニハコノ外明治維新ノ頃廢寺トナリタルモノ多クヲ載セタリ、今省略ス、）

新義眞言宗本山より日向寺院へ觸狀

日野巖氏報

「御觸 日州 新義眞言宗諸寺院中」

神佛混淆御廢止ニ付、別當社僧之向、本山幷本寺ゟ無伺、勝手ニ歸俗致候向茂有之哉ニ相聞、甚無謂事ニ候條、向後吃（屹）度本寺本山ゟ伺之上可致候、且無據復飾之向者、佛像佛具等類（〔種〕之）而佛門ニ相用ヒ候品々、其本寺へ相納候樣、是亦本寺諸林ヨリ可申付候事、

右之通相心得、門末亦門（マヽ）末迄無洩介被相觸候、以上、

巳四月

智山集議 中印

豐山集議 中印

佐土原 黑貫寺

鵜戸山

談義所

右御觸之趣奉得其意、依之銘々御請印形仕奉差上候、以上、

（宮崎郡都於郡村字黒貫、新義眞言宗黒貫寺藏）

仁和寺門跡より日向寺院へ觸狀

日野巖氏報

日向國院室兼帶寺院外ニ添翰一通之寫

一御新政神佛御引分之儀ニ付而者、朝廷に御伺之次第茂有之候間、輕卒之進退有之間敷、尙モ一宗一大事ニ候へハ、厚遂集議、心得違無之樣可被致候事、

一近來他ヨリ惣（雜）說ヲ申觸シ、諸寺院之危窮不少、如何ト苦心致シ候向茂有之趣、以之外之事ニ候、先達而相觸候通リ、從朝廷如舊

御門跡ヲ被爲定候上ハ、是迄之通相心得、僧侶（之カ）ニ執律致勉勵、國家鎭護之奉祈可爲專一候事、

右之通被　仰出、仍申觸候也、

明治二巳年

十一月

橋本　敬之 印

小幡正六位 御用他行不能加印

吉田正六位

日向國

院室兼帯寺院中

前書之通被仰出候ニ付而者、院室殘席等閑之寺院者、御寺令指支、且御新政之折柄、御本山之御趣意茂不相心得、自儘之所業有之候而者、終ニ佛法衰微之基ニ成行、歎ヶ敷次第ニ候間、早々殘席出願可有之候事、

一、近來當山内或ハ他山寺院之添簡ヲ以、當御所御使僧抔ト唱ヘ、諸寺院之不顧難澁、僧侶罷越、猥致逗留候趣、無謂事ニ候、當御所御用ニ而、諸寺院ヘ指圖之節ハ、役方添簡持參勿論ニ候、其儀無之者ハ、僧侶ニ不拘、何レ之添簡ヲ以罷越候共、決而不及取扱候、併絶而申募候ハヽ、早々當御所ヘ可申出、指當リ至急之儀ニ候ハヽ、其最寄支配所ヘ可申出候事、

右之條々敬承之上、別紙寺院號之下ヘ、實名奉印ヲ加ヘ、請取渡シ之月日刻付ヲ相記

不拘筆次、隨順早々廻來觸留ヨリ返上可有之候、以上、

明治二巳年十一月

香山從六位印

久富從六位印

矢守從六位御用他行（不能カ）能加印

若林從六位右同

日向國

院室兼帶寺院中

添書

當御所御紋是迄十六葉菊ニ候處、今度十五葉菊ニ貳（匂カ）勺引、御治定被仰出候間、此段被相心得、從來御紋附之品渡置候寺院ハ、自今前願之通可被相渡候事、

巳十一月

東諸縣郡高岡町松尾山本永寺の廢寺

日野巖氏報

（上略）この上人の像（日蓮上人像）こそ、明治二年の某月某日、他の佛像佛具とともに取りおろされて、本永寺の庭さきに積まれ、出張の吏員火を放つて今や危く焼却されんとした時、赤裸々の一巨漢、突然門を排して躍り入り、猛火の中より上人の像を奪ひて、人々の騒ぐ間に、何地へか逃げ去つた、それより十餘年、本永寺の再興さるゝに及び曩きに奪ひ去られた上人の像は、何人かの手に由つて復安し、これを以て今の本尊としたのであると。（下略）（宮崎縣史蹟調査第五輯、第六七頁、昭和二年二月）

兒湯郡妻町國分寺に於ける廢佛

「木喰上人研究」柳宗悦氏著　大正十四年三月發行

是等の佛（木喰上人彫刻の五智如來のこと）を勸請するために、上人が建立した伽藍は如何なるものであつたであらう、今は一つの柱もなく只礎石のみが昔を語つて居る、凡ては明治初年の頃（四年廢佛毀釋の際、無智な者の犠牲になつた、（上人の作で此所にあつたものはこればかりではない）、目撃者は今もその建物が實に堅牢なものであつた事を語る、幾何の建物が彼によつて建立されたかは知る由がない、

だが、本堂の大きさは臺石によつてほゞ察する事が出來る、間口は六間、奥行は五間、堂は東面して建てられてあつた、臺座から光背まで二丈近くの佛像を安置するのであるから、棟高きは云ふまでもない、屋根は瓦葺、内部の柱や横木には幾多の浮彫があつたであらう、幾枚かの扁額や施主の名札も堂内に並べてあつたにちがひない、彼が建立した最大な建築であつたであらうし、又此建立に於て程難儀を嘗めた場合はなかつたであらう、併し、愚かな皮淺な思想のために、凡ては無益なる破壞を受けた、難行苦行のうちに生れた堂も、僅か九十年の歳月を出ないのに、地上から奪はれてしまつた、今も吉野林平氏はその折の事を記憶する、一日寺の方に恐ろしい音響く爲め、父の袂にすがつて見に行つたと云ふ、嘗ては祖先が祈願をこめて上人を助け、建立の喜を見た村の古刹は今無智な者のために毀されてゐるのである、村の者共は默して此所置を受けねばならぬ、或者は槍を以て佛の眼をついたと云ふ、或者は嘲り乍ら佛の體を打つた、篤信な者達の眼には血の涙があつたであらう、併し、佛天の所罰逃れ難く、毀ちし者、或は眼を失ひ或者は遂に狂ひ、その子孫に榮える者は一人もなかつたと云はれる、それ以來村の者は上人の怒を恐れて居る、寺前に立つ銀杏の老木がその枝を風に折られても誰も手を觸れる者がない、靈木は不淨

な者の手を許さないからである、

併し、幸にも佛のみは僅かな傷を受けたのみで終つた、雨に晒される五體は一時村内の仙光寺に遷された、國分寺跡に新に小堂を設け、再び舊の位置に戻したのは今から三十餘年前であつたといはれる、その後嵐のために再度その堂は倒れて了つた、止むなく廢寺であつた照明寺の建物を運んで又同じ位置に建てた、現存するものはその建物である、

日向延岡藩修驗廢止の件

「太政類典」第一編 第百三十三巻 教法 寺院二

三年九月

延岡藩管内ノ修驗ヲ廢ス、

延岡藩伺 辨官宛

神佛混淆御取調之儀、一昨年御沙汰御座候節、社附修驗之分、神職ニ相轉、或ハ下社家等申付候ヘトモ、奉仕之神社無之分ハ、先ツ其儘ニ差置候處、其流弊ニ至テハ、更

角民家ヘ配札或ハ加持祈禱等ヲ以テ、愚民ヲ迷候儀不少、右ハ治教之妨トモ相成候ニ付、修驗道ノ義ハ、支配地中總テ廢止仕度、此段奉伺候、以上、三年九月三十日藩

（朱書）伺之通不苦候事、

日向佐土原藩寺院廢絕の件

〔太政類典〕第一編第百三十四卷　教法　寺院三

四年六月

佐土原藩管内一宗一寺存置ノ分ヲ渾テ廢ス、

佐土原藩伺辨官宛

西京
淨土宗智恩院末
日向國佐土原藩
高月院
住持　立堂

山城國

新義眞言宗報恩院末
御室御所圓勸院永隆室兼帶
右同

黒貫寺

住持　得　善

西京
眞言宗隨心寺末
右同

大光寺

住持　賢　晨

越前國福井蓮常寺
曹洞宗永平寺末
右同

大安寺

住持　全　孝

西京
日蓮宗本能寺
[illegible]國[illegible]
本[illegible]寺[illegible]末

右同
吉祥寺
住持　日昇

西京
淨土宗本願寺末
右同
崇稱寺
住持　了順

蓮光寺
住持　觀界

相模國藤澤時宗
清淨光寺末
右同
光照寺
住持　信好

右先般藩内寺院ヘ、一宗一ケ寺宛相殘、合併申付置候處、右殘置候寺院廢止ノ儀ニ付、藩中檀家一同聊故障無之候間、都テ廢止仕度、此段奉伺候、以上、同年六月二十五日藩

民部省意見辨官宛

別紙佐土原藩ヨリ伺出候部内寺院廢絶ノ義、取調候處、寺院納得ニ出候ハ、更ニ將來ノ事故モ有之間敷候間、左ノ通御指圖相成可然ト存シ候、依之伺書返進、此段申進候

巳四年六月

御指圖案

書面廢寺ノ義、將來ノ事故無之上ハ、伺ノ通可取計、尤住僧生活ノ方法夫々授與可致事、

佐土原吉祥寺及其末寺の神佛分離幷廢寺

日野巖氏報

神社奉行所

吉祥寺江

末寺并小僧之内、老僧病身ニ而托鉢出來兼候向茂有之候ハヽ、書付明廿六日九時迄之内可差出候、以上、

正月廿五日

神社奉行ゟ　　　　　　　　吉祥寺

右今般

御一新ニ付、從前之知行高返上候樣可申渡事、

但、右末寺ゟ茂同斷之事、

二月　　　　　　　　知政所

吉祥寺

城山寺借判

天福寺借判

右、明晦日御用之儀有之候間、四時假知政所ゟ可罷出候、尤病氣候ハヽ代僧可差出候、

二月廿九日

口上覺

黄檗流岐山寺無住ニ御座候處、寄而寺番罷在候通、一僧ヘ住職奉願含ニ御座候處、此度願寺被仰書奉畏候、然處他宗一ヶ寺境取建被置候付而ハ、近頃恐多申上事御座候ヘ共、同様黄檗流一ヶ寺取建被置通、一僧に住職被仰付被下候ハヽ、難有奉存候、此段御内意奉歎願候、何卒願之通被仰付被下候ハヽ、黄檗流通一僧ハ勿論、至拙僧冥加至極奉存候、可然御取成御申上可被下候様奉願上候、以上、

岐山寺僧何

三月四日　　　　　　　　　　　吉祥寺

神社

御奉行所

[illegible]

不被及御沙汰候事、

元岐山寺より之願書御ゐニ不相成候間、左様相心得可有之候、

三月十一日　　　　　　　　　　神社奉行所

吉祥寺

尚願書差返候、

天福寺

右家作御買揚ニ相成候段、知政所ゟ被仰渡候條、左樣相心得可有之候、

三月十二日　神社奉行所

吉祥寺

急

御用之儀有之候間、明廿一日四時當役所へ罷出可有之候、以上、

三月廿日　元市井局

急

吉祥寺

尙御用向有之候節ハ書（マヽ）々會計局ゟ差出可申候、

社寺御用向、當分之間會計局ニ而取扱ニ相成ニ付、毎日八時迄之內、該向伺屆等差出可有之候、

三月十七日　神社奉行所

吉祥寺ゑ

此節知行高返上ニ付、名寄帳目錄差出ニ相成候樣、知政所ゟ御沙汰ニ候間、今日七時大光寺ㇾ出役可致候間、御朱印擬有寺ㇾ持出シ可有之候、此旨可相心得候、以上、

尙城山寺、天福寺も同斷、

三月十九日　　神社奉行所

吉祥寺大念

民事局史生

市井掛
神社掛

野間口傳
森　與三太
伊々尾慶三

右之通被仰付候間、如無可相心得候、以上、

三月廿五日　　民事局

上田嶋
急き吉祥寺

御用之儀有之候間、唯今青木源之丞宅へ罷出可被下候、已上、
五月十三日戌之下刻限

寺社方係

吉祥寺大急

朝五時ゟ　自得寺に
晝時ゟ　大光寺
大光寺に　吉祥寺
　　　　　野田丹彥
九時持出　崇福寺

右之通、來ル廿二日御朱印櫃入付之品、虫干トシテ差越申候間、如毎相心得可有之候、
此段申達候、已上、

六月十五日　　　　　　　　　　　御用人

畑壹反五畦拾三歩
　内八畦

右者城山寺役料内書之通相渡来、先年ハ三人ニ而相勤、近年ハ壹人ニ而相勤、別而致太儀、且三代以前ゟ引續相勤候ニ付、右本行之通源彌相勤中御心附被成下候は、往々爲ニ茂相成、猶又引受萬端都合可然奉存候、何卒願之通被仰付被下候は丶、誠ニ難有仕合奉存候、以上、

六月十九日　　　　　　　吉祥寺

掛
横目衆

森與三太、青木源太方ニ、神社奉行副役被仰付候間、如毎可相心得候、以上、

六月十八日　　　　　　　神社奉行所

吉祥寺江

本借判相加居候栽山寺畳并障子枚數取調、明後六日四時、當役所ニ申出可有之候、

七月四日　　營膳（繕）所

吉祥寺
急

一昨日相達置候知行現米收納高調書、明朝迄差出可有之候、以上、

七月五日

猶々、天福寺、栽山寺同樣候、

吉祥寺　急　　寺院掛

戶口取調之儀付御用候間、明後十（六カ）日四時、當局ニ可罷出候也、

八月四日　　民事局

上田嶋吉祥寺
急

本寺本末寺檀當住各境内等ニ至迄、明細書可差出旨、朝廷ゟ御沙汰ニ付、則取調明二
日正四時、當局江出頭可致、此段申達候、
但、巨細之儀承候間御答致候者、可罷出事、
九月初日　民事局
社寺掛
上田嶋
吉祥寺
急キ

此節御用人御廢止相成、寺院掛山口市郎二殿江被仰付候、左樣相心得可有之候、以上、
十月四日　寺社掛
横目
吉祥寺大急

内々用之義有之候間、大光寺役僧同道ニ而、矢中青木源太宅江罷出可有之候、

十月五日　寺社方係

吉祥寺大念

先達而現收納米差出候樣相觸置候處、尙巳年減米相成分差出無之向茂間々有之候儀付、自然減米相成候人々者、銘々致吟味、書付を以、近達(マヽ)ゟ與、御支配下ニハ支配所ニ可差出、差々(マヽ)而有役々ゟ取調嗚嘘(マヽ)民事奉行所ニ致持來、是迄差出置候書付ニ、内書致萬事民事奉行可御差圖事、

十月八日

右之通御沙汰ニ相成候間、直ニ民事奉行所ニ可差出候、

城山寺、天福寺同斷、

明日內意伺出有之候ニ付、御用之義有之候間、拙宅ニ罷出可有之候、以上、

十月廿日　青木源太

吉祥寺

藩中之面々知行内地浮免共、現收納米高取調、書付を以、明後五日迄民事奉行所江可申出事、

一藩中檢地門田并畦山者勿論、都而知行所江有之候山林竹木伐取候儀、兼而相觸置候通、停止之、尤無據節者、山奉行所江申出可伺差圖候事、

十月

知政所

明廿六日四時、御用之義有之候間、青木源太宅江(可脱カ)罷出候、此段申達候、以上、

十二月廿五日

神社奉行所

城山寺借羽

吉祥寺

其寺并城山寺之諸堂宇作內、上中下何程數內土間有無疊古莚等、巨細ニ取調、明後十九日迄之內、神社奉行宅江可差出候、

十二月十七日

神社奉行所

吉祥寺江

日蓮宗八品門流

京都三條通寺町上ル
本能寺

攝州尼ヶ崎西山末
本興寺

日州那珂上田島村
吉祥寺
住持職　日升

境內壹反四畦

一、旦家七拾五軒

一、元朱印地除地山林等無之、

差出シ

一、瓦談(葺)ニ而壹棟
數貳間半ニ而三尺宛廻り內緣
佛檀(壇)降下三尺
降玄關　五尺

但シ敷三尺
上之間　六疊
但シ下疊
傳間八疊敷
但シ拾枚敷
次二間　六疊
但下ニ疊
一、臺所　出降しニ而貳間
敷壹敷土間
但、疊二疊下ニ疊
右之通御座候、以上、
巳十二月十八日　天福寺
神社奉行へ　天福寺

右今般
御一新ニ付、從前之知行高返上候樣可申渡事、
但、右末寺ニ茂同斷之事、
二月　　　知政所

(參考)
惠日山吉祥寺
天正六年島津以久種子島ヨリ佐土原ニ移封ノ節、以久ニ隨從シ來リシ種子島慈遠寺ノ住職寶正院日種上人ノ開基ナリ、以久ノ命ニヨリ、寶塔山ノ麓ニ本勝寺(吉祥寺ノ初名)ヲ建立ス、後、天和年中、大通院日聞上人ノ時、地ヲ現地吉祥山ニトシ、移轉再建シ、惠日山吉祥寺ト改稱シ、同時ニ鎭守鬼子母神ヲ別堂ニ勸請ス、榮玉山日昇ノ時ニ至リ御一新トナリ、寺地寺領ヲ奉還ス、丁丑ノ役ニヨリ、一層頽廢セルモ、後再興ス、
寶珠山城山寺
本尊觀音ハモト城西水地ノ茅堂ニアリ、大守忠興水地ニ狩シ鷹ヲ失フ、卽チコ

ノ堂ニ驚ノ平安ヲ祈リテ効アリ、之ヲ得、依リテコノ地ニ小堂ヲ創建シ、觀音(茅堂ニアリシ)ヲ安置ス、元祿六年十月、大寺惟久、伊集院、山口兩氏ニ命ジテ再興セシム、同十二年黃檗山ノ末寺トナリ、特ニ請フテ木庵和尚ヲ開山トス、

東海山天福寺

開山ハ大機和尚ナリ、寶永七年閏月二十七日、鶴林和尚ノ時黃檗山ノ末寺トナル、

飫肥藩管內普化宗僧侶托鉢禁止の件

〔太政類典〕第一編　第百三十五卷　教法　葬儀　僧尼

四年七月五日
飫肥藩管內普化宗僧侶ノ托鉢ヲ停メント乞フ、

飫肥藩伺　辨官宛

普化宗僧侶共、從前管內吹笛順行致シ、僻遠ノ地士民共、應對モ不束成處ヨリ、自然及爭論候事抔モ有之候ニ付、御維新前迄ハ、普化宗役寺へ年々納金致シ、同寺ヨリノ證書申請ケ、管內村々ニ取締棒(榜)不相立、順行差留來候處、當節ト相成候テハ、納金等致シ候筋ハ不相成儀ト存候、乍併此儘差置候テハ、僧侶トモ、管內村々へ入込、農務ノ妨トモ相成候ニ付、以來普化宗僧侶共順行差留不苦哉、此段奉伺候、以上、四年七月五日藩 指令欠

宮崎縣廢寺再興の件

〔社寺取調類纂〕四九九

（受）明治七年四月廿七日（回）同上（済）五月五日（本）三島（議）田村義實（專）宍戸、黒田
（出仕）鈴木、是立（主）社寺

宮崎縣伺廢寺再興願之件

右逐一調査仕候處、廢寺再興之儀ハ不容易儀ニ付、御許允無之方可然存候、

指令按

書面廢寺再興之儀難聞屆候、尤佛道執心ニテ僧業相遂度志願之者ハ、當省本年達書第五號ニ照準シ、可致處分候事、

但、南禪寺住職權大教正畠山可庭ヘ、別紙之通相達候條、此旨可心得置事、

南禪寺住職
權大教正畠山　可庭

達按

昨六年九月中、宮崎縣下巡回之節、自他之末寺廢寺再興之願書、自分名宛ヲ以、爲差出、同縣ヘ及掛合候ヘ共、是廣規ニ相戾リ、不都合之事ニ候條、向後右等不束之儀無之樣、屹度可相心得、此旨相達候事、

年　月　日　　輔

寺院再興願進達副書

舊藩政中相廢候當縣管下舊寺院再興之儀、去癸酉九月、權大敎正南禪寺住職畠山可庭巡囘之節願出候趣ニテ、同人ヨリ差出候付、精微ニ爲致探索候處、各區戶長ヨリ別紙情實書差出候通、相違無之候付、爲御見合相添致進達候間、何分至急御指令有之度、此段相伺候也、

明治七年一月十九日　　宮崎縣參事福山健偉

敎部大輔宍戶璣殿

朱書）書面廢寺再興之儀、難聞屆候、尤佛道執心ニテ僧業相遂度志願之者ハ、當省本年達書第五號ニ照準シ、可致處分候事、

但、南禪寺住職權大敎正畠山可庭ヘ、別紙之通相達候條、此旨可心得置事、

明治七年五月二日」

當區內舊寺院元寺番共ヨリ、寺院再興之願書差出候ニ付、厚々取調差出候樣御達ニ

付、別紙之通取調差上申候也、

明治六年十月十八日

第四大區長

武藤東四郎印

舊江上庵龍興寺右住共寺院復舊之儀出願仕候ニ付、御規則ニ照準シ、吟味之廉左之通、

舊江上庵之分

一土地人民佛祭信向ニハ在之候ヘ共、宗旨義ハ歸依無之候事、

一寺院復舊之儀ハ、宗旨ヨリ說論誘導致候儀ニテ、全糊口安逸ヲ謀之徒ニ有之候事、

一舊檀中之者佛信向之儀、當分在來之寺院ニテ差闕無之候事、

一寺院復舊ニ就テハ、費用課出不都、素ヨリ貢夫ノミニテ、天下一般地方官費用之献課タニ至難之人民ニ付、害失不尠候事、

一宗旨義意ヲ不弁状之事、

一舊江上庵之儀ハ、舊藩時中歸寺願出候ニ付、當僧ハ本寺ニ歸籍寺院ハ伺濟之上廢寺中付、地所建物ハ、本寺ニ寄與在之候分ニ候事、

舊龍興寺之分

一土地人民佛祭信向ニハ在之候ヘ共、良穩義ハ歸依無之候事、
一寺院復舊之義ハ、良穩ヨリ說諭誘導致、且檀中惣代岩切利七義ハ、同伴不致、剩大木長次郎義ハ淨土宗檀中之者ニ候處、日役ニ被雇、佐土原マテ差越候者ニテ、素ヨリ願意等承知不致候ニ付、押印不致候趣、就テハ舊檀中惣代二名謀書謀判之罪ハ勿論、糊口安逸ヲ謀之徒ニシテ、官ヲ欺之罪不尠候事、
一舊檀中之者、佛信向ノ義、當分在來之寺院ニテ差閊無之候事、
一寺院復舊ニ就テハ、費用之課出不尠、素ヨリ貧民ノミニテ、天下一般地方官費用之徵課タニ至難之人民ニテ害失不尠候事、
一良穩義ハ兼テ不行跡之事、
一舊龍興寺之始末舊江上庵ニ同シ、
右之通相違無御座候也、

明治六年九月廿四日　　二小區戶長
橫尾　烔 印

今般寺院再興願書之義ニ付、御達之趣奉畏候、即吟味仕候處、全土地人民一同信向ト申譯ニ無之、舊住職共ヨリ、舊檀下之者ヘ相頼、願書連印爲致候趣ニテ、舊檀中ニテモ逐一ニ存候譯ニ無之候ヘハ、歸依ノ人民相崇ミ、葬祭等差支候筋有之間敷、且ツ村社祠官給料等ヘ課出ヲ致兼候義ニ付、都農神社ノ神官中ニテ、更ニ民給ヲ不受、祭典等世話致候位ニ御座候ヘハ、此上寺院ニ付、民費ニ課出候テハ、自然ト貧困ニ立至リ、就テハ學校教導等之道モ立兼、自ラ教化之障碍ヲ生スル萌芽ト可相成、殊ニ舊住職宜容秤ハ、諸人所知之不行狀ニテ、舊藩中那珂郡福島ヘ左遷被致候人物ニ付、人民ヲ教育スヘキノ場ニ据置候ハヽ、不行狀ヲ戒ムルノ道不相立候哉ニ奉存候、舊德泉寺速[文明ノ一]水義ハ歸俗之砌、舊寺ヲ以家宅ニ被成下置候處、此節小學校設立御布達ニ付、居宅之内學校用相詰有之候處、仕合之折柄ト相考、貢拂度心願之趣、同人ヨリ申出候、就テハ舊寺復興ハ、全ク萬一御聞濟ニモ相成候ハヽ、糊口之一助ト相考候處ヨリ相企候ニ相違無之哉ニ被存候、且又舊德壽庵之儀ハ、既ニ買取候約束ニテ、明家ニ致有之候處、右宜容方近隣ノ者ヘ相頼、私ニ居住仕候由、此節承リ及候、右之庵追々費用支給之目的相立次第、學校ニ仕度内談仕居候家屋ニ付、追テ巨細取調可申上含ニ御座候間、何レモ御聞濟無之樣仕度奉存候也、

第四大區七小區
副戸長
緒方　是茂印
平島　重綱印
戸長
內野　重厚印

明治六年十月

宮崎縣參事福山　健偉殿

當區內舊寺院再興之儀ニ付、取調之廉々被仰出候間、別紙之通取調、差上申候也、

清武副區長
崎田　豐印
同區長
平間　直三印

明治六年九月廿八日

宮崎縣
庶務課

御中

一土地人民一同信向ノ儀ハ、從前眞宗歸向ノ如ク、中心ヨリ只管固守イタシ候趣ニハ無之候、

一寺院復舊ノ儀ハ、舊住僧ヨリ全ク御趣意ニ戻リ誘導イタシ候儀ニハ無之、舊檀中肝煎ノ者ヘ、人々ノ歸依ニテ、葬祭等ノ儀、神佛ノ間其心ニ任セ候樣、舊檀中ヘモ御趣意不取失通達イタシ呉候樣示談有之候由、就テハ此節寺院再建相成候ハヽ、以來祖先ノ靈ト同所ニ參(祭カ)候事故、葬祭等ハ舊寺院相賴度申談シ、尤中ニハ神道一派ニ相極候モノモ有之候、

一佛葬祭歸依ノ人民相祟(崇カ)ミ、當分在來ノ寺院ニテハ差閊候儀ハ決テ無之、寺院ノ儀ハ、舊藩制中既ニ被廢、一般神葬祭ニ相歸シ候、尤眞宗ハ存在イタシ候得共、佛事執行等被差止置候故、此節ニイタリ、葬祭ニ差閊候譯ハ無之候、

一寺院ノ復舊民費課出ハ勿論ニ候得ハ、利害得失ノ次第説諭イタシ候得共、從前寺院ノ如ク、貪婪ノ儀無之、適宜ノ課出等ハ不苦、萬一過當ノ催促抔有之時ハ、相離レ可申候、

一舊住職別紙人名、當區內ニハ護國寺、瑞雲寺、阿彌陀寺ノ三寺ニテ、行狀ハ何ソ惡シキ儀ハ無之、何レモ有志ノ者ニテ、護國寺河野諫、瑞雲寺安田滿也ハ十四級試補ニテ、小教學院ヘモ出院イタシ、阿彌陀寺黑田元瑞ハ志ハ有之由ニ候ヘ共、最早四十有餘ニテ、寺モ元ヨリ檀家少ク、再建ノ儀ハ決シテ無之趣、

一舊寺院跡地所ハ、元來税地ニテ、舊住職居宅ニ相成、堂宇ハ元檀中ヨリ寄附イタシ候ニ付、其儘住僧ヘ相與ヘ候、建物等ハ廢寺ノ節本山ヨリ夫々始末相成候、

添　書

別紙歎願書差出候寺院、舊藩中廢寺ニ相成居、歎ケ敷次第、當節御布告之趣ニテハ、有住有檀ノ寺院ハ被建置可然儀、試驗モ候處、淺學ニハ候得共、有志ノ旨、向後宗學研究之願心相見候間、可相成候ハヽ、寺號舊復被仰付度、且心得違ニテ、一端還俗候者共、緇流ニ歸籍爲致度候間、御聽ニ於テ牴牾之筋無之候ハヽ、此段御聞屆ニ相成候樣及依賴候也、

禪宗本山南禪寺住職

明治六年九月　權大教正畠山　可庭印

宮崎縣參事福山　健偉殿

作恐以書付奉歎願候

拙寺儀、舊知事公菩提所ニテ、內京妙心寺直末龍雲寺住職之者ニ御座候處、同制中廢寺被申付寔ニ以殘懷ノ次第、乍併佛法湮滅之期到來乎ト慈腸[illegible]仕、不得止事、實家ヘ引取歸俗仕、其後總持寺末舊太平寺其末福原尾村舊德壽庵ヲ借受居住罷在候、然處大教院教導職細川千巖殿、當境眞宗稱專寺ヘ派出相成、說教之節、教義ニ有志之者ハ檢查有之旨承リ候ニ付、速ニ出頭仕奉願候處、御試驗被成下難有奉存候、其後宮崎郡檍田町小教學院ヘ出頭仕、學業仕度段願出置候、猶又今般南禪寺大教正、第五大區御受持爲寺院取調當境ヘ御派出被成下、法幸不斜、奉大謝候、扨天下大小之寺院ハ、擁衆庶ヲ教誨スヘキ教院ト被仰出候御趣意モ有之、元私儀龍雲寺末舊圓通寺ヨリ本寺ヘ轉住ニ歸寺候得ハ、同寺元檀中之者共歸依致畏、右舊德壽庵檀中ト熟議之上、幸御維新御寬典之聖慮被爲有候折柄、兩檀中之者共、私ヲ申受、舊圓通寺號ヲ以テ一寺再立仕度段申出候、尤同寺宗屋敷ハ、舊藩廢寺之節邊樣ニ相成候間、是ヲ舊復奉願譯ニテハ無之、當時舊德壽庵ヲ取用、不遑之內、堂宇創立仕度、兩檀中之者共志願ニ御座候、固ヨ

リ細川殿始小教學院御幹事方ヘハ、前件之次第口上ヲ以歎願申出置候間、何卒出格之御法愛ヲ以テ、篤ト御汲取之上、緇流舊復願之通御許容被成下度、伏テ奉拜願候、左候得ハ、猶又於小教學院ニ、從前之遊惰ヲ一洗シ、粉骨碎身修業仕、聊タリモ布教傳道之部內ニ至リ、地方ノ風化ヲ賛ケ、御政治之裨益ニ相成候樣相心得、天朝之御鴻恩ハ不及申ニ、佛祖之法恩萬分一ヲモ奉報酬度心願之至御座候、依之、兩檀中爲惣代、二人宛召連罷出、連印ヲ以乍恐奉歎願候、願之通御免被成下候ハヽ、生々世々ノ御厚恩重疊難有奉存候、右之段御聞屆之上ハ、御縣廳表宜敷御取成之程奉願上候也、

明治六年九月

第四大區兒湯郡
高鍋村
舊龍雲寺住職
德淵　宜容（花押）
同都濃町
舊圓通寺檀中惣代
稅田　忠次　印
河野　甚平　印

同郡原尾村
舊德壽庵檀中惣代
長吉　岩吉 印
河野治五郎 印

南禪寺大教正
御隨從御中

乍恐以書付奉歎願候

拙者共儀當關中勝寺檀中付、實以難念心外之次第、乍併佛法衰頽之到來乎ト愁悃仕、不得止事、歸俗罷在候、然處今般南禪寺大教正、第五大區御受持爲寺院御取調當縣へ御出張被成下、布法幸甚、不肖共ニ於テモ、大慶不過之、就テハ舊寺歸俗之者ニ而モ、私義有志ノ者ハ、歸依在有之趣、承リ候ニ付、不取敢指出仕度間、歸試驗被成下度奉願上候、抑天下大小之寺院都テ余慶ヲ被爲ニ而ノ廢院ト被仰渡置尊重モ有之次第、依之、本寺禪師御宣教之要索ヲ以、歸法ニ被成下、舊寺復住被仰付度、此ヲ奉希上候、尤各寺舊檀中之者共、固ヨリ復寺志願之折柄、幸之御時節ニ付、一統同意仕、歸依之上、寄附

代二人宛召連罷出、連印ヲ以奉歎願候、何卒出格之御法愛ヲ以、願之通御免被成候上ハ、宮崎郡柏田町小教學院へ入熟（塾）奉願、從前之遊惰ヲ一洗シ、粉骨碎身修業仕、聊タリトモ布教傳道之部内ニ至リ、地方之風化ヲ贊ケ、御政治之裨益ニ相成候樣相心得、天朝ノ御鴻恩ハ不及申ニ、佛祖ノ法恩萬分一ニテモ奉報酬度志願之至ニ御座候間、幾重ニモ奉歎願候、右之段御聞屆之上ハ、御縣廳表宜敷御取成之程奉願上候也、

第四大區兒湯郡蚊口浦
舊江上庵看住
岡本　宗豐（花押）
同檀中惣代
岡本　元吉　印
長友　捨吉　印
同區同郡同所
舊龍興寺看住
鈴木　良穩（花押）
同檀中惣代

岩切　利七　印

大木長次郎　印

同區同郡名貫村

舊德泉寺住職

犬童　文明（花押）

同檀中惣代

河野喜次郎　印

永友與次郎　印

第三大區兒湯郡穗北村

舊福壽寺看住

吉野　釋海　印

同檀中惣代

桐山熊次郎　印

川口芳丘郎　印

明治六年九月

南禪寺大教正

御隨徒（從）御中

奉歎願覺

拙寺共舊藩制中、合寺廢院被申付、實以殘念心外之次第、乍併佛法破滅之基乎ト愁腸仕、不得止事歸俗罷在候、然處先般教部省御官員巡國ニテ、當御縣下ヘ御出張ニ相成、一寺住職ハ勿論庵住徒弟且歸俗ノ者タリモ、教義ニ有志之者ハ罷出候樣御布達ニ付、速ニ出頭仕候處、太田村舊善柄寺ニ於テ御試檢被成下、難有奉存候、就テハ縣下ヘ小教學院ヲ設ルノ垂語有之、依テ諸宗一同合議一決ノ上、柏田町舊直純寺ヲ以、假小教學院ト相設度段、御縣廳ヘ御掛合ノ上、確定相成、去ル六月廿六日開院、各自學業勉强罷在候處、猶又今般南禪寺大教正、五大區禪三派御受持爲取調、當境ヘモ御派出被成下、奉法幸、御試驗之程奉願候、抜天下大小ノ寺院ハ、抑衆庶ヲ教誨スルノ教院ト被仰出候御趣意モ有之候次第、不肖共ニ於テモ、大慶之至、依之、御維新御寬典之聖慮ヲ以、緇流ニ被成下、舊寺復住被仰付被下度、伏テ奉希候、尤各寺舊檀中之者共、固ヨリ復寺志願ノ折柄、幸之御時節ニ付、信仰之者共一同熟談仕、爲惣代二人宛連印ヲ以奉歎願候、何卒出格ノ御法愛ヲ以テ、願之通御免可被成下候、然上ハ猶又從前ノ遊惰ヲ一

洗シ、小數學院ニ於テ粉骨碎身修業仕、聊タリトモ布教傳道ノ部内ニ至リ、地方之風化ヲ賛ケ、御政治ノ裨益ニ相成候樣相心得、天朝之御鴻恩ハ不及申ニ、佛祖ノ法恩萬一ニテモ奉報酬度志願之至ニ御座候間、幾重ニモ奉歎願候、右之段御聞届之上ハ、御縣廳表宜敷御取成之程、奉願上候也、

明治六年酉九月

第一大區那珂郡吉村

舊正光寺住職

池田　韓雄（花押）

野中平五郎㊞

石川虎五郎㊞

同區同郡吉村

舊明星寺看住

清水　文亮（花押）

清水彦太郎㊞

清水　久市㊞

同區同郡江田村

舊龍泉寺看住
加藤　天洲（花押）
同檀中
中原新三郎印
中原吉平次印
同區宮崎郡金崎村
舊朝倉寺住職
野田　文量（花押）
同檀中
原　庄九郎印
湯地　利市印
同區諸縣郡森永村
舊大乘寺住職
稻澤　大眞（花押）
同檀中

岩切　平藏 印

後藤喜惣次 印

第三大區那珂郡上田島村

舊松巖寺住職

河村　眞梁（花押）

舊檀中

荒川德次郎 印

大田　茂吉 印

第一大區那珂郡島內村

舊泰翁寺看住

宮崎　宜昭（花押）

同檀中

伊崎　藤太 印

同區同郡吉村

舊海藏寺住職

大野　大隆（花押）

同檀中

矢野三郎次　印

清水久次郎　印

同區同郡新別府村

舊大通寺住職

落合　泰禪（花押）

同檀中

戸高　貞吉　印

濟藤　武作　印

第六大區那珂郡恒久村

舊瑞雲寺住職

安田　天珠（花押）

同檀中

樹圓清太郎

高妻　想平

同區同郡同村

舊護國寺住職

河野　祖元（花押）

同檀中

松崎市太郎　印

岩切庄太郎

第一大區宮崎郡太田村

舊善栖寺住職

岩切　良雲（花押）

湯淺　久吉

清水八十八

同區同郡大塚村

舊多寶寺住職

七里　魯雄（花押）

黑木　庄作印

第六大區那珂郡加納村
舊阿彌陀寺住職

黑田　元瑞（花押）

南禪寺大教正
御隨徒（從）御中

記

第三大區那珂郡野久尾村舊天昌寺舊住職

海印　如月

同區兒湯郡三納村舊淨（マヽ）寺舊住職

分明　知海

同區同郡花園村舊松原寺舊看坊

大雲　秀山

同區同郡加勢村舊加福寺舊住職

同區那珂郡上田島町舊金柏寺
同區兒湯郡右松村舊宗光寺

（六）右五ヶ寺拙寺配末寺院ニ御座候處、去午ノ春、舊藩制度ノ折柄、廢寺被仰付、歎息不少候ヘ共、無是非次第ト奉存居候處、何卒今般御法愛ヲ以、右ノ寺院舊復御許容被成下度、尚亦宗光寺舊住職泰寛徒弟德道歸農仕居候處、當夏泰寛儀死去仕候、依之拙寺會下雖有補茶僧ヘ、看坊ニテモ爲仕度儀奉歎願之候、何卒前件之次第、御賢慮ヲ以御許容之程被下候半者、生々世々難有奉存候、仍テ歎願書如件、

第三大區兒湯郡都於郡村
曹洞派大安寺住職
堅元　奎善（花押）

明治六年九月
南禪寺大教正
御隨徒御中

記

去ル庚午十二月舊延岡藩支配之節、合寺被申付候處、其寺へ移轉候へハ、寺跡ハ御取揚ニ相成樣子承、左候へハ殘念至極ト奉存候テ、無據皈農ニ移居候、漸々寺跡境内ハ勿論、本堂庫下共取留、露命ヲ相繼キ居候處、當六月教部省御官員木下靖殿御下向ニ相成、於宮崎御試檢モ有之候節、御沙汰無之ニ付、其節試檢ニモ相洩、其後隣寺ヨリ爲知被下、早速舊檀中ト談合仕、教義之志願ニテ、柏田町小教學院へ入門仕、御說教拜聽、習學仕居候處、舊曆盆前故、立皈本尊佛ヲ合寺ヨリ御迎遷坐仕、小教學院御幹事請待仕、九月一日ニ說教修行相濟候處、今般南禪寺大教正大和尚、五大區御受持ニ相成、禪三派合廢ノ寺院御取締被下候儀難有奉存候、付テハ拙寺モ舊寺號先年通ニ相成儀ニ候ヘハ、私儀モ緇流ニ舊復仕度奉存候、左候得ハ舊檀中一統先年通ニ皈依仕ト申儀ニ付、右之段偏ニ奉歎願候、御免許モ無之事ニ候得ハ、說教所成共、御立置之處、御願奉申上候、前件之次第御聞屆被成下候上ハ、御縣廳表へ御取成之程奉願上候也、

宮崎縣下兒湯郡淸水村

舊淸水寺住職

淸水　泰興（花押）

明治六年酉九月七日

舊檀中惣代

黒木傳次郎 印

同　八代　重藏 印

同　八代清五郎 印

謹上

大教正南禪寺大和尚

御隨從御中

拙寺境曾舊松岩寺再立之儀、今般入縣權大教正ヘ願出候旨趣、宮崎縣ニ於テ被爲及聞召、段々被仰渡之趣拜承仕候、依之、左之通取調ヘ呈上候條、件々御照察御免許奉願候、

一 右間作川村眞樂事、皓ト古稀不遠、且學德ハ微ニシテ說諭誘導スルノ要務ハ勞苦スト雖トモ住職十有九年ヲ積、第一如法堅固ニ相守リ、拙寺ヘ合併隨從シテ、檀中皈依信向シ、疎意ノ者ナク、因テ別紙願書通、再任仕セタク、且復舊ニ付テハ、民費課

出ニ關係スルノ御懸念ハ左モ有ヘキ御事ナカラ、廣瀬地轉移ノ祠門且火燒所外ニ本堂瓦ノ分、役場取揚ニ相成跡、其儘立居、本尊幷諸佛安置建具等、都テ當寺ヘ締リ置、加之擔寺家作之内、取細メ付與スヘキ一宇モ有之、亦世俗絶家ヲ與スニ等シ、誰カ悦ハサル者アラン、依テ檀中ノ者共、先祖ノ妙慮自我憂歡ノ人情ナキニアラス、然レハ何ソ多少ニ拘ハラス、各其志ニヨリ寄附寄進等モアルヘシ、旁以テ民費ヲ貪ラサルノ方向ヲ用ヒ可申候、

一寺跡ハ小石交リニテ、草倒(刈カ)リモ輙スカラサル地所、殊ニ大山ノ陰ニテ、農地ニモ相ナラス、然モ舊寺復開ニ至ラハ、往來ノ傍ラ故、說諭聽聞ノ便利宜ク、不招シテ來リ、不思シテ入ル者多カラン、左スレハ、恰モ良湊ニ回船ノ出入スルカ如ク、自然ト加益ノ基止(トカ)ナラン、就テハ當寺ヨリモ時々出張リ、眞梁年邁ヲタスケ、教誨ノ詮相立候樣仕度御座候、

一當寺舊末島之内秦翁寺檀中ヨリモ、別紙ノ通願出、舊ノ王先祖代々ノ靈牌寺、又ハ諸民入交リ、殊ニ村中カ往來筋ニモ有之、說諭第一ノ要所ニ付テ、是亦復舊奉願候、看護僧ハ擔寺弟子宮崎宜照ト申者、追々學業相進ミ、自然ト說教ノ器ニ至ルナラン、於是其教ヲ施シ、聊モ其續(績カ)シアルトキハ、聖旨奉戴ノ事、理ニ協ヒ可申奉存候、寺跡

ノ儀ハ、堂一宇檀中猪崎藤太家ヨリノ建立タルニ依テ、彼方ヘ始末相成、門ハ檀中ヨリ取毀、宗作ノミ以前ノ通現存シ、舊住職ハ還俗シ、他家養子ニ入申候、
右之段々開化ノ御趣意ニ基キ、奉願候、乍憚今後所詮之（四）種意深ク御洞察被下、可然御處裁被仰付被下候ハ、（六）萬々難有仕合奉存候、此等之旨宜御取成被仰上可被下儀奉賴候、以上、

大光寺住職

荒川　勇機　印

癸酉十月

宮崎縣參事福山　健偉殿

乍恐奉願上候口上覺

松岩寺儀、此程御廢ニ付テハ、御本尊始靈牌等都テ御寺ヘ御引渡、御回向等厚御執行被下置、先祖之冥福可爲滿悦事ニハ御座候ヘトモ、以前ノ通復興御免被仰付被下候樣奉願度御座候、左候テ、舊住川村眞梁儀再住被仰付候ハ、檀中歸依信向ノ者勿論、第一大路ノ傍ニテ、御諭告聽聞便利之場所、旁開化追途ノ基本ト奉恐察候、右等之趣ヲ以、何卒願之通被仰付被下候ハ、（六、）檀下一同難有仕合奉存候、此旨宜御取成被仰上可

被下儀奉賴候、以上、

舊松岩寺權中
惣代
太田　茂吉印
荒川德次郎印

九月

宮崎縣參事福山　健偉殿

口上覺

佐土原大光寺末泰翁寺事、廢寺相成居候處、先般於帝都、教部省御創立被爲在、教導師迄巡國相成候付テハ、復舊願立之寺院モ段々有之趣承申候、右ニ付テハ、舊主御先代ヨリノ御位牌寺、殊諸民入交リ之場所ニモ有之、教導所無御座候テハ、人材生育之基礎難相立、彼是苦慮仕候、依之、復建奉願之候、左候ハ以前ノ通、朝夕勤行者勿論、追々御說諭聽承、開化ノ御趣意最適候樣成立可申ト、一同難有仕合奉存候、此旨宜御取成被仰上可被下儀奉賴候、以上、

島之內

舊秦翁寺檀中

惣代

猪崎　藤太㊞

九月

宮崎縣參事福山　健偉殿

壹岐島淨土宗寺院再興の件

〔太政類典〕第二編　第二百六十八卷　第四類　教法十九　寺院二

九月八日〔六年〕(朱書)

長崎縣管下淨土宗元專念寺ヲ再興ス、

　教部省伺

長崎縣管下淨土宗元專念寺再興之儀、元檀家并檀頭等ヨリ願出候ニ付、其段同縣ヨリ申出候、右事實篤ト熟考致候處、葬地遠隔難澁ノ儀尤ニ相聞、去迚改宗爲致候モ、人民情(請カ)從不得止次第、夫是地方官ニ於テモ差許度趣ニ有之、右ハ一旦合併濟之處、再興ハ不容易事件ニ候ヘ共、前件之次第ニ付、御聞届相成候樣致度、依テ同縣ヨリ差出候書類相添、此段相伺候間、御指揮有之度候也、八月廿九日　教部

(朱書)「伺之通、九月八日」

　長崎縣伺　教部省宛

當縣管內壹岐島鄉之浦淨土宗元專念寺再興之儀ニ付、別紙ノ通願出取調申候處、右ハ平戸舊縣中廢寺取計門徒之者共、同宗平戸誓願寺ヘ合併申付相成候趣、然ル

處平戸壹岐之間、海上十三里餘モ有之、葬祭等懸隔致居候テハ、門徒中難澁之趣無相違相聞候ニ付、願之通專念寺再興御差許相成度、此段別紙添相伺候也。（十二月廿九日裁可）

檀家總代願

私共檀寺淨土宗專念寺、去ル未年御廢止ニ相成、平戸晉願寺ヘ合併被命、就テハ早速同寺ヘ附屬可仕筈ノ處、隔遠之場所ニ付、時々之葬祭行屆不申、依之禪宗ヘ附屬可仕心得ニ御座候ヘ共、先祖代々淨土宗之儀ニ付、何分改宗仕兼、元住僧ヘ葬祭相頼罷在中候、社寺御趣意相背候姿奉恐入候ヘ共、一國一寺ノ淨土宗之儀ニ付、此上奉恐入候ヘ共、歎願之悲ヲ以存寺被命被下置候樣奉歎願候、左候ヘハ、御恩ヲ以淨土一宗相立、一統難有奉存候、此段御聞達奉願候、以上。（四月日闕、戸長並ニ惣代[illegible]一寺ノ法用ヲ以[illegible]、今省ク、）

長崎縣權參事宛

當縣管內壹岐國淨土宗元專念寺、舊縣中廢寺取計有之候處、此節再興之儀、門徒中ヨリ願出候ニ付、先般相伺置候處、本寺ノ願書差出候樣御達ニ付、別紙差出候也。（六月九日裁可）

知恩院住職大澤亮由願（長崎縣宛）

第七十八大區一小區武生水村　元專念寺

右ハ明治四年辛未十月、舊藩政中廢寺之御處分ニ付、檀中ヨリ歎願仕候得共、何等之御沙汰モ無之、空ク過來候、然ルニ方今教部省御創立之砌ニ付、過日檀中ヨリ歎願仕候通、壹岐國淨土宗一箇寺之場所柄ニ付、何卒檀中歎願之通再興御許容可被下奉願候、左候ヘハ三章説教等一際盡力精々爲仕度奉存候、格別之御仁惠ヲ以、寺號再興之程奉悃願候、以上、七月廿日教部

庶務課議案

別紙教部省伺、長崎縣管下壹岐島廢寺再興之儀及審議候處、右ハ舊藩之砌、一村一寺ト相究、强テ致處分候儀トハ相見候得共、一旦廢合相濟候上ハ、葬祭等合併之寺ヘ相賴候ハ當然之儀ニテ、今日ニ相成、宗派ニ致拘泥候譯無之、絶島蒙昧ノ民心差當リ迷惑ノ趣ニハ相聞候ヘモ、地方官并教導職共、右等之苦情不申出候樣、兼々注意説諭可致、若此節再興御容相成候ハヽ、以後廢合之檀家ヨリ、苦情申出候箇所、陸續相起リ候モ難圖、却テ教則之主意モ立兼可申候間、伺之趣ハ御許可不相成方可然哉、依之御指令案取調、此段相伺候也、八月三十一日教部

指令案

伺之趣難被及　御沙汰事、庶務課議案、御採用ナク、教部省伺之通、御裁決相成、

琉球に於ける神佛分離

秋山謙藏氏報

明治維新後、内地に於て神佛分離の令が出た頃、琉球は未だその表面を支那に内面を薩摩に屬して、苦しくも生き伸びた近世三百年の慘めな姿をその儘に傳へて居たのであつた、

然るに明治十二年三月十一日、太政大臣三條實美の名に於て發せられた廢藩置縣の令は、琉球國をして沖繩縣としての新しい生活に入らしむるものであつた、この時内地に於ては既に神佛分離は着々として實行せられてゐたのであるが、琉球に於ては、その政治上の變革が餘りに大であり、諸般の設備も未だ整はない時であつたから、その後暫くは、尚從來の通り何等法規の適用もなく、その制度も總て舊慣例の儘に取扱はれたのである、

琉球に於ける神佛分離は政治、宗教及社會上の特別な事情の爲に、内地に於けるそれとはいさゝか趣を異にするものである、然し明治維新史上に於ける琉球の非

常に重大なる地位を考へるとき、この問題も亦大いに興味あるものと云ふを得るであらう、

琉球には古來八社といふものがあつた、それは

波上宮　護國寺（波上山　三光院）
沖　宮　臨海寺（沖山　潮樂院）
識名宮　神應寺（姑射山）
普天間宮　神宮寺（普天間山）
末吉宮　遍照寺（大慶山萬壽寺、末吉山）
八幡宮　神德寺（高明山）
天久宮　聖現寺（天久山）
金武宮　觀音寺（金武山）

で、これ等は八幡宮の外何れも熊野權現を祭り、寺はすべて眞言宗に屬し、神社の別當寺として社務を掌つたものである、その中波上宮は那覇にある關係上八社の中最も上位を占め、太夫、内侍、權祝部、宮童等を置いて奉仕せしめ、沖宮以下には單に内侍、祝部、宮童を置き、護國寺は五十石、臨海寺は三十石、他の六寺は十二石宛を給せら

れてゐた、

然るに明治二十三年、諸般の設備も漸く整つたので、知事丸岡莞爾氏の時に至り、波上宮以下八社總て分離する事となり、波上宮の如きは、社格を上げる爲に護國寺の境內迄も皆社領となし奏請の結果、同年一月二十七日、官幣小社に列せられ、同時に熊野權現を廢し、祭神として伊弉冊尊、速玉男尊、事解男尊と改め、その三神體を宮內省より遷し、萬事舊慣を撤去して、宮司、禰宜、主典を置きて奉仕せしめ、その維持費は專ら國庫の供進金と基本金の利子及其他の社入金を以てする事となつた、然しこの事は、琉球人をして彼等の神を廢し、內地の神を遷したものと誤解せしめ、その信仰上に一大變化を來した、神宮以下七社は總て無格社となり、神職としては各社に社掌一名、雇二名乃至三名を置き、基本金利子と社入金を以て維持し、それ等の任免は、置縣後も舊慣のまゝ縣にて司掌し、且その役俸及社殿の營繕は國庫の支辨を仰ぐ事となつた、

一方護國寺以下八ヶ寺は、總て官寺となり、營繕費は國庫の負擔に屬し、寺祿俸米等を大藏省より給せられ、住職は特年輪交代の制を執り、その任免は縣に於て司る事となつた、

其他、臨濟宗の寺院も大分あり、その中官寺には安國寺、慈眼院、照太寺、公寺には祥雲寺、桃林寺、私寺には、圓覺寺、崇元寺、天王寺、天界寺等があつたが、置縣後維持困難の爲、尙侯爵家管理の下にある圓覺寺、崇天寺以外は多く荒廢に歸した、

この他、きこゑ大君を中心とする琉球神道も、同じくこの時處分せられたのであるが、これは、神佛分離とは全く事情が違ふから略する事とする、

次の調書は置縣前琉球藩につきて色々調べたものゝ中、寺社關係の實狀を示すものとして興味あるものである、

「琉球藩諸調書」

公寺　首里當藏村に有之、

一役知百石　禪宗　圓覺寺

物成三十二石餘
境内千八十坪餘

住職　要宗　長老

一俸祿五石宛　黑堂坊主　東谷　西堂

一役知拾貳石　物成三石餘

高坊主　德温　西堂

法堂住職　眞定　長老

公寺　同同村に有之　天王寺

一役知五拾石　物成拾六石餘　[illegible]内[illegible]百坪餘　同

住職　得元　長老

照堂坊主　道元　西堂

一俸祿五石

公寺　同金城村に有之　天界寺

一役知三拾石　物成九石餘　[illegible]内[illegible]千八十[illegible]餘　同

住職　了道　長老

公寺　　泊村に有之
一役知三拾石　　同　崇元寺　住職　瑚堂　長老
物成九石餘
境内地千二百三十坪餘

公寺　　浦添村間切仲間村境内
一役知拾貳石　　同　龍福寺　住職　透雲　長老
物成三石餘
境内地五百坪餘

公寺　　首里寒水川村に有之
一役知拾貳石　　同　安國寺　住職　大貫　長老
物成三石餘
境内地五百坪餘

公寺　　同　立岸村に有之
一役知拾貳石　　同　慈眼院
物成三石餘
境内地四百坪餘

住職 祖道長老

公寺　伊江島

一役知拾貳石　物成三石餘 境内地百坪餘　同　照泰寺

住職 丹山長老

公寺　宮古島

一合力粟拾石　所向同　祥雲寺

境内地百九拾坪餘

住職 栢州長老

公寺　八重山嶋

一合力米拾石　所向同　龜林寺

境内地四百坪餘

住職 朗門長老

嶋寺

一境内地千百坪餘　同　東禪寺

一、一ヶ月米壹斗三升五合　隱居紫衣　清仁長老
一、一ヶ月同九升　同宿一人
一、一ヶ月麥九升　下人一人

脇寺　首里當藏村に有之
一境內地四百坪餘　同　蓮華院
一、一ヶ月米壹斗三升五合　隱居　圓山長老
一、一ヶ月同九升　同宿一人
一、一ヶ月麥九升　下人一人

脇寺　同同村に有之
一境內地百坪餘　同　慈光寺
一、一ヶ月米一斗三升五合　隱居紫衣　開雲長老
一、一ヶ月同九升　同宿一人

一、一ヶ月麥九升　下人二人

脇寺　同内金城村に有之

一境内地百坪餘　同　西來院

隱居業衣

一、一ヶ月米壹斗三升五合　虎隱　長老

一、一ヶ月同九升　同宿一人

一、一ヶ月麥九升　下人一人

脇寺　同當藏村に有之

一境内地六百坪餘　同　興禪寺

隱居業衣

一、一ヶ月米壹斗三升五合　祖山　長老

一、一ヶ月同九升　同宿一人

一、一ヶ月麥九升　下人一人

脇寺　同同村に有之

一境内地貳百坪餘　同　廣德寺

一、一ヶ月米壹斗三升五合　隱居紫衣　活仁　長老

一、一ヶ月同九升　同宿　一人

一、一ヶ月麥九升　下人　一人

脇寺　同同村に有之

一境內地三百坪餘　同　元中寺

一、一ヶ月米壹斗三升五合　隱居紫衣　玉仙　長老

一、一ヶ月同九升　同宿　一人

一、一ヶ月麥九升　下人　一人

脇寺

一境內地百八拾坪餘　同　洪濟寺

一、一ヶ月米壹斗三升五合　紫衣　道音　長老

一、一ヶ月同九升　同宿　一人

一、一ヶ月麥九升　下人一　人

臨寺　首里當蔵村に有之

一境内地八百坪餘　同　建善寺

當分天界寺住職　了道　長老

臨寺　同汀志良次村に有之

一境内地四百坪餘　同　桃昌院

當分天王寺住職　得元　長老

一境内地四百坪餘　同　萬松院

當分崇元寺住職　瑞堂　長老

臨寺　同内金城村に有之

一境内地百九拾坪餘　柴雲軒

當分龍福寺住職

透雲　長老

脇寺
一境內地百坪餘　同　西原間切石嶺村境內
智福寺　柏州　長老　當分祥雲寺住職

脇寺
一境內地千五百坪餘　同　久米村に有之
長壽寺　黄衣　洞州　長老
一、一ヶ月米壹斗三升五合

脇寺
一境內地五百坪餘　同　首里當藏村に有之
伍德院　紫掛落　梁山　長老
一、一ヶ月米壹斗三升五合

脇寺
一境內地三百坪餘　同　久米村に有之
盛光寺

一、一ヶ月米壹斗三升五合　黄衣　古岩　長老

一、一ヶ月麥九升　下人　一　人

一、一ヶ月壹人ニ付壹斗三升五合宛　黄衣　二　人

一、一ヶ月米貳斗七升

一、一ヶ月壹人ニ付九升宛　下人　二　人

一、一ヶ月麥壹斗八升

壹人ニ付壹斗三升五合宛　黄衣皆　拾九人

一、一ヶ月米貳石五斗六升五合

公寺　那覇若狹町村へ有之

一役知五拾石（物成拾六石餘　境内[illegible]四百坪[illegible]）　眞言宗　護國寺

住職　覺眞　法印

一俸祿五石　脇寄　盛濟　西堂

公寺　同西村に有之
一役知三拾石（物成九石餘 境内地貳百坪餘）　同　臨海寺
住職　石逢　法印

公寺　眞和志間切識名村境内
一役知拾貳石（物成三百石餘 境内地千百坪餘）　神應寺
盛庭　座主

公寺　宜野灣間切普天間村境内
一役知拾貳石（物成三石餘 境内地千三百坪餘）　同　神宮寺
住職　石祐　法印

公寺　西原間切末吉村境内
一役知拾貳石（物成三石餘 境内地四百坪餘）　同　遍照寺
住職　盛海　法印

公寺

眞和志間切安里村境内

一役知拾貳石

物成三石餘
境内畠三百坪餘

同　神德寺

住職　盛宣　法印

公寺

同間切天久村境内

一役知拾貳石

物成三石餘
境内地千百坪餘

同　聖現寺

住職　眞啓　座主

公寺

金武間切金武村境内

一役知拾貳石

物成三石餘
境内地五百坪餘

同　觀音寺

住職　盛山　座主

臨寺

那覇泉山に有之

一境内地九百坪餘

同　龍渡寺

住持　紫衣

一、一ヶ月米壹斗三升五合　盛長座主

一、一ヶ月同九升　同宿一人

一、一ヶ月麥九升　下人一人

脇寺　久米村へ有之

一境內地貳百坪餘　同　仙壽院

隱居紫衣 盛章座主

一、一ヶ月米壹斗三升五合

一、一ヶ月同九升　同宿一人

一、一ヶ月麥九升　下人一人

脇寺　同若狹町村に有之

一境內地貳百坪餘　同　海藏院

隱居紫衣 盛重座主

一、一ヶ月米壹斗三升五合

一、一ヶ月同九升　同宿一人

一、一ヶ月麥九升　下人一人

脇寺　久米村に有之

一境内地九百坪餘　同　善興寺

當分臨海寺住職　石逢　法印

脇寺　那覇若狭町村に有之

一境内地五百坪餘　護道院

黄衣　頼源　座主

一、一ヶ月米壹斗三升五合

脇寺　久米村に有之

一境内地千百坪餘　同　西福寺

當分聖現寺住職　眞啓　座主

脇寺　同村に有之

一境内地五百坪餘　同　金剛寺

當分神宮寺住職

石祐　法印

脇寺

一境内地三百坪餘　同　東龍寺

當分護國寺住職　覺眞　法印

一、一ヶ月米壹斗三升五合　黄衣僧　一人

一、一ヶ月麥九升　下人　一人

那覇若狭町村に有之

一波之上宮

一俸祿五石　大夫　與儀筑登之親雲上

一同　壹石宛　權祝部　與儀筑登之親雲上

同　又吉筑登之親雲上

一同　貳石　内侍　眞蒲戸

一同　一俵　宮童　一人

那覇西村に有之

一沖宮

一俸祿三石　祀部　饒平名筑登之親雲上

一同壹石五斗　内侍　眞滿

一同壹俵　宮童　一人

宜野灣間切普天間村境内

一普天間

一俸祿貳石　祀部　山里筑登之親雲上

一壹石五斗　内侍　眞牛

一同壹俵　宮童　一人

眞和志間切識名村境内

一識名宮

一侍祿貳石　祀部　屋嘉比筑登之親雲上

一同壹石五斗　内侍　眞牛

一同壹俵　宮童　一人

西原間切末吉村境內

一末吉宮

一俸祿貳石　祀部　上江州筑登之親雲上

一同　壹石五合　內侍　眞嘉戸

一同　壹俵　宮童　一人

眞和志間切安里村境內

一八幡宮

一俸祿貳石　祀部　山田筑登之親雲上

一同壹石五斗　內侍　眞嘉戸

一同壹俵　宮童　一人

眞和志間切天久村境內

一天久宮

一俸祿貳石　祀部　饒平名筑登之親雲上

一同壹石五斗　內侍　眞牛

一同壹俵　宮童　一人

（昭和二年四月調査報告）

檀那寺より檀家離檀

〔諸家秘聞集〕一

安永九子年六月、松平越中守様御領分檀家之者、附届不致候ニ付、旦那寺ゟ離旦申掛候ニ付、旦家ゟ力(マヽ)詫譯付不申付内、家内ニ病死之者有之候、伺書、御附札左之通、

一檀那寺へ對し、旦家之者附届等不致候而、古來從公儀被仰出候御掟を以、從旦那寺旦家之者致離旦候、然處當宗門改差出前ニ付、從旦家一通相斷候趣ニ候得共、承引無之、然上者外寺へ相賴度候間、送り給候樣申候處、外寺相願、其寺より挨拶有之次第、送り可差出由ニ而、譯付不申内、旦家家内病死之者有之、取置差支、右假埋ニ致置候、尤在中之手前持地之内ニ葬候事故、假埋ニ申付、町方抔者寺院之外葬候所も無御座候、當分假旦那寺賴度願出候得共、前文之通故、難申付候、右體離旦之儀、公儀御裁許如何被仰付候哉、御内々相伺度、別紙を以被仰下候樣奉願候、以上、

六月　松平越中守家來

日下部武右衛門

御附札

旦那寺へ對し、附屆不致候ハヽ、可致離旦旨、旦那寺申懸之義ニも候得共、公儀ゟ被仰出候御掟等之儀ニも不及承候、奉行所ニ而右體之出入有之候得ハ、吟味中、宗門改無差支樣可取計旨、寺社奉行衆ゟ本寺觸頭へ申渡有之義も御座候、於御私領之儀、右ニ准し御取計も可有之哉、當人計ニ御懸意體村方之差支茂候ハヽ、双方御吟味有之、旦那寺同心候ハヽ、村役人差添、奉行所へ勝手次第出訴致候樣御申渡、添使者を以、御差出候方と存候、御一領之出入ニ而も、私領ニ而も、不相濟、御斷有之候へハ、奉行所ニ而取上、目安裏判差出候事ニ御座候、離旦出入ハ、度々有之候得共、吟味次第裁許有之候故、吟味無之内、裁許之義相知不申候由、

子六月

社人の離檀神葬祭執行

〔諸家祕聞集〕三

天明五年巳正月、寺社御奉行阿部備中守樣ゟ伺左之通、

松平若狹守領分信州松本社人共之儀、何レ茂旦那寺有之、毎年宗門改之節、右旦那寺受判仕來候、然處、此度領分社人之内、旦那寺相對を以、宗門を離、京都吉田御家へ相願、家内共、神祇道之執行ニ相成度、依之、吉田御家へ之添狀之儀、松本役所ニ願出候、此度之儀ハ、旦那寺相對を以、離旦之儀ニ御座候得共(者カ)、故障之儀も有之間敷候得共、領分之社人共、神祇道之執行相成候儀、勝手之筋ニ而、以來右躰之儀追々願出、旦那寺ニ而得心無之候得ハ、悉及出入可申候、右躰之儀ハ、前々ゟ無之、新規之儀ニ御難候得ハ、差押申度奉存候、然とも、吉田御家ゟ御沙汰も有之、旦那寺茂承知之上、相願候得ハ、承届之筋ニ御座候哉、此段御問合申上候、以上、

松平若狹守家來

倉光半左衛門

御附札

吉田家ゟ自身葬祭免許狀受候へハ、當人幷嫡子ハ寺院之宗門を離、葬祭執行候義ニ候、外家内ハ旦那寺宗門を離候義ハ不相成義ニ候、

神職の離檀願

〔諸家総聞集〕五

天明八申年八月十八日、寺社奉行松平肥前守樣へ問合、九月廿八日御附札濟、
阿部兵部少輔領分上總國天羽郡木村ニ罷在候神職杉山賀（加脱カ）守と申者、願出候ハ、代々吉田家支配神職家ニ而御座候得共、是迄同國同郡數馬村大龜寺旦家ニ御座候處、當年ゟ宗門人別帳別紙仕、加賀守神道一派を相立、大龜寺旦家と相離候而、吉田家役人ゟ、邪宗ニ而無之受合之書付差出、宗旨改受申度旨、相願候付、右之通申付候而も不苦候哉、左候得ハ、大龜寺奥印除之儀難相成旨申候、依之遂吟味候所、別紙書付之通御座候、右兩樣申付方之儀如何取計可申哉、御內々御問合申上候樣、兵部少輔申付候、以上、

八月十八日　阿部兵部少輔內

白井源次右衞門

書面加賀守義、神道一派を相立、吉田家ニ而宗旨改受候儀、其身ハ勝手次第、其外家內俗男女之者ハ、前々之通、大龜寺宗判を受、旦家相離義容易ニ

御附札

難相成筋と存候、

申九月

神職の神道葬祭

〔徳川禁令考〕第五帙 巻四十二 葬儀

寛政三亥年

新規神道葬祭之儀

新規神道葬祭ニ付、藤堂和泉守より、寺社奉行松平右京亮江問合挨拶、

御書面神職之者、吉田家より新ニ葬祭之儀免許受候ハヽ、其身并忰ハ寺院之宗判を離れ、葬祭取計候儀者不苦候得共、家内之ものハ前々之通之儀ニ候間、離檀と申筋ニハ無之、檀家相離候儀者、容易ニ難成筋と存候、以上、

肥前鹿島行成村琴路大權現社人と社僧の軋轢

〔諸家祕聞集〕七

(寛政五年)丑四月廿六日、寺社奉行立花出雲守樣へ伺書差出、御附札、

鍋嶋備前守領分肥前國鹿嶋之内、藤津郡行成村と申所へ、琴路大權現と申候神社有之候、右社内へ、年々霜月二番卯日祭禮之節、村中幷近村ゟも相集、氏子中相企、致狂言候節、同郡大殿分村と申所へ、蓮巖院と申眞言宗有之、右寺僧とも致見物候場所拜殿内へ少計明置申義ニ御座候、尤誰相氣遣候と申儀も無之候、然處、四年巳前見物人多く、右之場所相塞候付、寺僧方ゟ申出候ハ、蓮巖院見物所之儀ハ、社人方ゟ取繕差出候事之由、社人ニ申聞候處、社人共申候ハ、蓮巖院見物所、社人方ゟ取繕候と申候儀無之旨相答候ニ付、互ニ爭論ニ相成候末、又々蓮巖院ゟ申懸候ハ、右琴路大權現ハ、兩部ニ而、宮司ハ蓮巖院ニ而候由申候故、社人共相集、色々致詮義候得共、蓮巖院義宮司之勤方致候義、何れも覺不申、依之、右行成村ハ不及申、近村之老人共迄相集、致詮義候而も、八九十年以來、宮司勤方蓮巖院取計候と申義覺候者無之候故、

社人共ゟ、蓮嚴院へ宮司之勤方爲致候儀不相叶旨申聞、左候而蓮嚴院より、宮司作法相勤候年月日承候處、蓮嚴院ニ而も、數年打絶、右年數以來相勤候義ハ覺無之由申候、尤蓮嚴院義、專古キ書付ニ、宮司と申儀書載有之旨申出、右書付差出候へ共、素より本寺ゟ之書付ニも無之、又ハ領主ゟ相渡候書付ニも無之、蓮嚴院ニ而百年程前住職之僧、纔之一紙末寺等之書載致置候末ニ、琴路大權現之宮司蓮嚴院と書載有之候計ニ而、專自分之樣ニ相見申候、然とも右書付を憑成義と相心得、本寺本家松平肥前守領分小城郡川上山實相院と申眞言宗ニ而、百年以前書出置候旨申、且（御）小室御所ニ而茂、實相院ゟ書出置候由申候而、双方申募、備前守方へ訴出候、右ニ付色々致詮義候得共、領主へも證據ニ相成候書付も無御座候、乍然縦宮司ニ而茂、八九十年餘も宮司之勤方相捨置、此節蓮嚴院ゟ相願候共、右數年打捨候儀、甚非禮之仕方ニ候而ハ、古例ニ相復候義不叶旨申聞候而も不苦儀ニ御座候哉、又ハ右數年打捨置候而も、此節南部ニ申付候節御座候哉、且又古例何分有之候而も、八九十年來唯一ニ而相濟候儀ニ候而ハ、是迄致來候通可仕旨、領主ゟ急度申付候而も宜御座候哉、御定法も可有御座哉ニ奉存候付、御聞合仕候、何卒御附札を以、御差圖被下候樣仕度奉存候、以上、

四月廿六日　　鍋嶋備前守家來
　　愛野次郎八

御附札

書面蓮嚴院ゟ差出候書付、琴路大權現と有之趣、認有之候へとも、自己ニ而仕立置候書面ニ而候ハヽ、取用ニ不相成、其上宮司之勤方數年致中絶候段、蓮嚴院申立候上ハ、旁宮司之儀ハ難立趣意も相聞候へ共、祭禮之節仕來ニ而、氏子共取計候狂言を、蓮嚴院見物所ハ、右社拜殿内へ別段仕立置候趣ニ候、然ル上ハ、右社全蓮嚴院不差綺と申道理ニも不相聞、何故祭禮之節蓮嚴院狂言見物所等仕立置候哉、且社人共方ニ而、唯一と申立候も證據等有之候哉、右等之儀始末幷證據拵ハ勿論、申口迚も巨細ニ吟味、詰り候趣不承候而ハ、何れ共難及御挨拶候、

丑五月

修驗の自身引導

〔諸家祕聞集〕七

（寛政五年）
丑五月廿二日、寺社奉行脇坂淡路守様へ相伺候處、六月廿七日御附札相濟、
對馬守領分內ニ罷在候修驗者自身引導之儀、傳授受候者ハ、當人幷印形宗判改之
節相除、一判ニ仕度旨願出候節ハ、本山又ハ觸頭より自身引導と申付請、領分役所
ゟ差出候得ハ、是迄開濟遣候得ハ、且那寺ニ而自身引導相成不申趣申、相障候節ハ、
且那寺へ領分役所ゟ致除判候樣申付候而茂不苦儀御座候哉、右爾樣御問合申上
候、以上、

五月廿一日

松平對馬守家來

鈴木角右衛門

御附札

修驗自身引導之儀、當職幷跡相續之惣領ハ、一派引導等可然義ニ付、本山
ニ而茂差免候段無相違候ハヽ、菩提寺得と利解御申聞、其上ニ而も納得
不致候ハヽ、其節尙又御問合候樣存候、

丑六月

神祇道證文神葬祭願

〔諸家祕聞集〕七

(寛政五年)丑十一月朔日、左之問合書幷別紙壹通、寺社奉行板倉周防守樣へ持參、寺社役植原市右衛門へ出合、差出候處、同十二月七日御附札相濟、被成御渡候、

伊勢守領分中、神職之者共、是迄寺院宗門附ニ而御座候處、以來神祇道證文印形ニ而相濟候樣、尤葬送も神祇道ニ而取行度旨、別紙之通願出候、然ル處、領分中右躰之類無之候得共、神道葬祭傳授受候神主ハ、親當人嫡子之分、引導燒香ハ勿論、宗判等除候之類、外々ニ而有之哉ニ及承候、領分之儀も願之通承屆候而不苦儀御座候哉、且代々寺院宗門附ニ而相續致來候神職、新規ニ神道葬祭傳授之儀、吉田家へ願出度旨申出候節も、承屆、吉田家御家來迄、在所家來ゟ添翰致、差遣、右傳授爲受候而も可然儀御座候哉、又ハ右之分ハ難相成、糺之上先祖之內葬祭傳授請候者之家筋計承屆候筋ニ可有御座候哉、但願出候節、寺院を相糺、故障茂無御座候間、承屆候而添簡差出可申哉、又ハ相願候上ハ、寺院を相糺候ニ不及、添簡差出候而も不苦儀ニ御座候哉、此段御問合申上候、以上、

十一月朔日　阿部伊勢守家來

海鹽庄兵衛

御附札　書面神道葬祭之儀、當職幷嫡子ハ、吉田家ゟ免許受候分ハ、自分葬祭之儀ハ、寺檀納得之上ハ各別、容易ニ難成筋と存候、

神職家族神葬願

〔諸家祕聞集〕十二

享和二戌年二月晦日、寺社奉行松平周防守樣ニ伺、三月廿五日御附札、

上野國甘樂郡小幡村赤城大明神ニ、神職堀江大和儀、代々自身神葬祭執行、妻子等ハ同國同郡東村曹洞宗寶積寺檀那御座候處、祖母儀、家之娘ニ而、殊明神宮再建之節、格別出情仕候儀も有之、旁以致病死候節ハ、神葬祭執行之積り、祖父相模申置候間、右之段寶積寺へ懸合候處、相對ニ而ハ難相成旨申候趣を以、申出候、祖母義も同樣ニ相願、吉田家ゟ不□手□免狀を以取置候由、改宗と申義ニハ無之、祖父之遺言も有之、祖母壹人之儀ニ候間、大和願之通、神葬爲執行候之樣ニ寶積寺ニ申付候而

も、不苦筋可有御座候哉、又ハ相對ハ格別、申付候筋ハ無御座候哉、此段奉伺候、以上、

二月晦日　　松平宮内少輔家來

飯野孫八郎

御附札

書面堀江大和儀ハ、代々神道葬祭いたし候共、妻子ハ寶積寺檀家ニ而、引導燒香受來候、然ニ同寺不承知之上ハ、旁大和祖母神葬祭ニ致候義ハ難成筋ニ存候、

戌三月

因伯兩州神職神葬祭願

〔神道宗門諸國類例書〕

神道宗門諸國類例

生田秀之助

一寛永廿年、寛文五年、耶宗門御嚴重御改之節、伊勢神宮之禰宜より、公儀へ差出し候文言、

今度切支丹御改ニ付、神宮禰宜權官中幷ニ妻子致穿鑿候處、切支丹無御座候、

但、定宗門及佛道誡儀者、背神道之古法、神慮いかゝこ御座候間、相定不申候、

誓文略

一加賀樣御領分之社家一統、古來ゟ宗門御改と申儀無御座、古風之通り、自身葬祭今以取營居申候、

一奧州會津樣御領分、神道宗門被成御立、匪毀樣神道宗門ニ而、御家中町在共ニ、神道歸依之輩、神道宗門ニ元付申度旨、願出し候得者、早速御聞届被成候、頭判幷ニ弔年忌等、氏神之神主古法之通り勤之候、

一備前樣御領分、神職神葬祭者、新太郎光政卿御代、寛文年中御上ゟ被仰付候由承申候、其節之葉增別紙ニ相見へ申候、

一紀州樣御領分、自身葬祭之、勢州松坂笠因筑前守、自子祓倉大和守最初ニ而、夫々ゟ達ニ被仰附候、其節吉田殿御家老中ゟ、紀州樣寺社御奉行へ、被差向候御證狀文言、其御領分、伊勢國飯高郡松坂四五百森八幡宮等、兩社之神主笠因筑前守家內

一統、宗門御改之節、證文之事申斷候、抑爲神職者、奉仕神明、殊ニ帶神祇管領之許狀上者、各以切支丹邪宗之徒ニ無之候條、有御改之節、神職之事濟候樣、宜可預御取計候、以上、

卯ノ九月　　鈴鹿出羽守 名乗判
鈴鹿筑前守 同斷
鈴鹿土佐守 同斷

丹波傳四郎殿
大嶋民右衛門殿

右之節、宗門請合寺へ被仰渡候者、神主誰儀、是迄宗門寺手形取差し候樣被仰付置候得共、今般吉田家證狀ヲ以、宗門御改事濟候ニ付、向後寺院之不及證印ニ候と被仰渡候、是より、紀州神職追々願出し、御聞屆被仰付候由、只今ハ神道宗門、多分可有御座候、

一勢州桑名神職一圓、自身葬祭相濟居申候、
　松平下總守樣被仰付候
一同州龜山神職一圓相濟居申候、
一但州村岡領神職一圓相濟申候、
一同州豐岡領ニ自身葬祭御座候、
一作州勝北郡梶並横山左馬之助數代、自身葬祭英田郡ゟ大庭郡之邊ニも多く御座

候、

一越後國溝口駒之介樣御領分、

一武州秩父郡、

一同州榛澤郡、

一同州多摩郡、

一江戸龜戸、

一甲斐都留郡、　十年計前、

一攝州西成郡、　八年前、

一伊豫今治領、　七八年前、

一信州松代領一圓、

一常陸水戸領一圓、

水戸樣御領內神職者、備前樣御同樣御上ゟ被仰付候由、

一防長兩國之神職一圓近頃神葬祭、御上ゟ被仰付候由傳承仕候得共、國人直ニ承不申、被仰渡振、樣ニ存不申候、右者秀雄年平等承及候所ニ御座候、其外國々御領分、神職不殘、又者一國ニ而五七人、亦一社之神官何十人と、神葬祭ニ被仰付候儀、六拾餘

州御料御私領數多可有御座候、

吉田殿に相尋候得者、諸國之例、明白相分可申候、

右神葬祭と申候者、宗門御改、吉田殿御證狀ヲ以相濟、佛法來朝以前之古法を以取行候、當時御兩國之社家も、且那寺天竺之法式相濟候上、神職打寄、神國之作法を取行、相葬候ハ、則御本所御傳授ニ而、神國之貴風、天朝之古法ニ御座候、

一慶長元和御治世之始、諸國之神職とも、數百年之亂世ニ困窮仕、有歟無歟ニ零落仕候而、神社も悉及衰微候處、切支丹御嚴重ニ御改ニ付、漸太平ニ相成候ヲ、難有奉存候許ニ而、何之思慮も無之、只俗家同樣、佛宗ニ不元付候而者不相成事と取惑ひ候方、伊勢加州抔之如く、申立候了簡も無御座、俗並之佛宗ニ元付候事と被察候、其段御治世相續御公儀ヲ奉始、御大名方、神社御崇敬、神職迄も次第ニ御取立被爲下候に付而ハ、寛文五年、神社御條目ニ、諸社之禰宜神主共、專學神祇道、其所崇敬之神躰、愈可存之と被爲載候御趣意、深自得仕候而ハ、諸國神職共、神國根元なる神社ニ年仕、他邦之佛宗ニ元附、寺院之證印を取候儀、右御條目之御趣意ニ相振、不本意之至と心附、追々願出し候處、其筋御聞糺之上、尤之次第ニ被思召、右諸國神道宗門、夫々御聞濟被仰付候儀ニ御座候、

一當御兩國、神職とも神葬祭奉願候者、明和元年永江右門、伊福部豊後守、大島隼人、御兩國神職之願ヲ引受、願書差出し申候、

一文化二年、御兩國神職追願申上候、

一切支丹、悲田宗、不受不施者、御法度之儀奉畏候、神職之面々者、從往古奉仕神明、殊帶神祇管領吉田殿御截（裁）狀、代々神職相續仕、邪宗之徒ニ而無御座候儀も不及申上候、依之、吉田殿江相願、神葬祭次第請込申、邪宗ニ無之者ニ、吉田殿ゟ御國元へ宗門請合證狀被遣向候様、相願可申候間、此旨御聞濟被成申、神職家内男女一統、自今宗旨御改之節、自身一判ニ而御聞濟被下置候様奉願候、其他國類例等之儀者、先達而吉田殿ゟ以御使、京都御屋敷迄被御入候様承及申候、當件之趣、格別之思召ヲ以、願之通り御聞届被下置候者、神社御條目之御趣意ニ茂相當、神職一統難有可奉存候、此段奉願候、以上、

文化二年丑五月

因伯郡之社家中

右之通り追願申上、吉田殿ニも同樣、

一御本所ゟ、京都御屋敷迄、以使者ヲ以御頼度々、並ニ御本所御老中ゟ、御國方御家老中樣江書面を以、御頼度々御座候、

一其後御本所御用人鈴鹿諫女爲御使者、御國ゟ被差遣、寺社御奉行所ニ而、御使被相勤候、其節、

松平因幡守樣ゟ

吉田二位殿口狀

薄暗(マヽ)之節ニ御座候處、愈御安全被成御座、日出度被存候、將亦御兩國神職共、神道葬祭一件、先達而已來御賴被申入候通り御座候ニ付、御取調被遣候儀と被存候、兼而被申入候通り、右一件者、神職共誠ニ多年之願望御座候故、縱日許狀爲願致上祭候葬、段々相歎申候間、何卒速ニ御聞濟被遣候樣被願度候、每々同事被申候儀、氣毒ニ存候得共、神職道之本意を存、相歎候儀等、果ニ茂難承置、猶亦御賴被申入候間、何分早々御聞濟被遣候樣、御賴被申入候、以上、

御家老樣方ゟ

一筆致啓達候、然者御兩國社家宗門之儀、是迄之趣ニ而ハ、職分非本意、一統歎敷候ニ存候ニ付、何卒向後之儀ハ、當家之請合ヲ以、御取計事濟候樣ニ被仰付度、社家一統願望之旨、先達而其御役所ゟ願出置候旨ニ御座候、都而爲神職者、代々仕神社候職分ニ候得者、專神祇道を相守候外者無御座候、邪宗之徒ニ無之儀勿論之事ニ御座

候得ハ、國々所々社家難不少儀ニ御座候間、御評儀之上、右社家一統願意相調候樣、
宜御沙汰可被下候、右御賴可得御意如斯ニ御座候、恐惶謹言、

十二月

鈴鹿筑前守

鈴鹿下野守

鈴鹿丹波守

荒尾近江樣

乾　甲斐樣

荒尾千葉之助樣

荒尾修理樣

閏月十九日、上山六之丞殿御使者被受候、殿樣ニハ二位殿御修行、御武運御長久之
守護札、綿包幷御手綱被差上候、御家老樣方ニハ茂、綿包御神札幷鷹之緒被差進候、
右鈴鹿陳女、旅宿滯留ニ而、段々御催促有之候處、陳女旅宿伊福部大藏宅迄、寺社御
奉行被罷越候、
御返答口上書、御長文と承申候、肝要之所ハ、神職共願之趣、此節江戸表掛合中ニ付、
掛渡り相濟候ハヽ、御本所ヘ、其段御達し、其上ニ而神職共ニハ可被仰渡旨之御口上

と承申候、右者飯田秀雄幼年之時より、承及存居候處迄ニ御座候、猶委鋪儀者、寺社御奉(ヤク)(役カ)所御記錄ニ記し可有之候、

一諸國願振之儀者、御料者御代官御添書ヲ以、當人江戸大寺社所ゟ願出し候、御私領御領分神葬之願意ハ、御領主方ゟ御願達ニ相成り候義御座候由、又御格式ニ依而、御領分神職之願、御國方ニ而御聞屆之上、江戸表へ其段御達しニ而相濟候御國義御座候由承及申候、以上、

修驗自身葬祭伺

〔德川禁令考〕第五帙卷四十二　葬儀

文政二卯年七月

修驗自身葬祭之事

松平越前守御預所越後國蒲原郡塚野目村修驗伺

土居紀伊守

御書面之趣令承知候、松平越中守御預所役人伺書等致一覽候所、塚野目村修驗相願候旨、鳳閣寺よりも申越、右ニ付支配所幷所役人ニおゐても、故障筋無之、自身葬祭之儀菩提寺得心ニ候ハヽ不苦候得共、元來修驗中絶之上、素一社之別當をも不相勤、除地も無之候ハヽ、院號相名乘候儀、一體之內ニ候ハヽ格別宗門帳其外是迄之通可取扱旨御差圖有之候方と存候、被差越候伺書、其外も書類令返却候、

水野左近將監

神職家內神葬祭の事伺

〔德川禁令考〕二帙五 卷四十二 葬儀

文政二卯年十一月

神道葬祭之事

小堀中務伺、和州當麻村新宮明神神主石見儀家內一同、御書面土屋讃岐守御先役之節、御掛合之趣令承知候、小堀中務伺書をも令一覽候所、石見儀、家內一同神道葬祭之儀檀寺院差支無之旨、斷狀差出、吉田家よりも免許請、村役人共も差支無之之由、

石見願書に致與印候共、家內一同ハ難成筋ニ付、石見幷跡相續可致、忰正流之者ハ神道葬祭之積極樂院宗判相除、妻其外家內之者ハ仕來通、同院宗判引導燒香請、宗門帳之儀ハ、是迄通相心得、且石見苗字之儀、支配役所ハ勿論、其外迄も、是迄之通心得候樣、石見に可申渡旨、中務に御差圖有之方と存候、以上、

十一月　松平伯耆守

以上引書地方公裁錄

諸國神職神葬願

〔神道〕岩つゝし　全　河野省三氏所藏

岩つゝし

見る人れなき山陰のいそ躑躅
いはねハまらしそあれはくとも

夫吾國ハ　諾冊二神の造り給へる國にして、此神矛を投給ふて、一ツれ島を得給ふ、これ磤馭盧島といふ、夫よりあまたれ州(クニ)、日神月神万物を生給ふ、よりて　皇國

ハ　日は本津國にましませハ、今さら云にハ及ざねとも、中古より近き世となりて、儒佛の二敎世にたこたされ、　皇國も漢土の風にならひ、或ハ天竺の方便を用てハ、神佛同躰にて、佛を本地とし、　神を垂跡と申奉りしかハ、數百年の間、これになづむ人多し、いとも尊き天照大御神の生れまし〳〵給ふ　神代より、數多の歷代をふるとも、御囊灑用の流れたえせぬ皇統を、吳太伯の末なといひて、　皇國も漢さまにいひなせし人なと有しときゝしか、かゝる人〳〵にハ、皇國のかしこき米の徳を、いかでか　神明も食せ置せたみんや、彼漢土にてハ、官人にさへ、粟なとたまはりたるとなん、旣に當清の國ハ、韃靼より奪とりて、帝王となり、明王末孫ハ、今いつこにありなんや、かゝるつさなき國の末下にはたくへきか、恐らく　日は御子は本國にて、稻穀の早熟し、異國にすくれて多みれは、祿(祿下同ジ)ハ米を以て定め、皆下〳〵迄、上米を給ハりける、五穀ハ云に及ざれ、海河魚、甘菜、辛菜、海藻等は類まて、多に滿ぬれハ、禾實獸肉等を食せをしても事たりぬるハ、　神國神妙と知へし、夫をも辨へすして、鷄鹿牛肉の類を、皇國にても近頃食せる者あり、可恐可忌、まして　神詣てする人〳〵杯ハ、心得有へし、　皇國ハ　天子を初奉り、萬民に至るまて、皆た〳〵に出自日正しき神孫なれハ、からにも汚穢に觸ざるやうにするへし、さきて神職の人〳〵なとハ、可愼の第一

あり、釋迦ハ世ニ餘れる物を食し、樹下石上の住居と有ゝるを、今時の僧尼官祿のすくれさる寺の住持を望み、又詑(托)鉢する雲水ニ錢白米を與ふれハ、これをうけ、皮麥を與ふれハこれを辭する者あり、　神明ニさへ獻し奉りし米麥といへる程のかしこき五穀を辨まへさる者を、傳客坏と稱し、釋迦ハ意ニかなふや、職原抄ニも日本ハ神國なるかゆへニ、　神祇官を以て太政官乃上ニ置と有ゝれハ、すへて　神社を上ニ書へき神國の書法なるを、近頃ハ寺堂の類を上ニ書載、　神社を跡ニ認ゝる記錄等もあれとも、　神國神明の子孫ゝる事を不知して、異國の風を學ひしハ恐へきの甚しきなり、儒道ハ　人皇十六代　應神天皇の御宇ニ渡り來り、佛道ハ　人皇三十代　欽明天皇十三年ニ、百濟國より佛像經卷を獻そ、故ニ傳心大祓ニも、此時ニ及て、神明清淨の國汚穢(ケガレ)て　皇道既ニ衰へ、邪曲の末法行そる、加之聖德太子ハ、蘇我馬子と相議(ハカリ)りそ、潛ニ　崇峻帝及皇子を弑し奉り、女主　推子(古)帝を立て、萬機を恣ニし、佛法を弘めしかハ、　神明これを惡ミ給ふや、內裏燒亡、　天皇瘡の病を愁させ給ひ、國中疫癘流行、死亡者數をしらす、剩保元平治の大亂おこりてより、數百年の星霜をふるうちニハ、逆臣交〳〵出し後、小(織)田豐臣の兩公、　禁裏御所を初奉り、諸　神社を御造營、續て　東照　御宮いよ〳〵ます〳〵王道を起し立て、闕たるを補ひ廢れた

るを拾ひ、残るかたなく御成就ありし御高徳は、日本はさらなり、外國迄も静謐となさせ給ふ、此　御宮、傳道を信せ給はさるや、元和年に至りて、七旬有餘の御壽すきて、駿州久能山に御葬の砌、吉田會右衛御下向なさせられ、御導師まて、神道葬祭に執行ひましませしゆへ、佛葬を用ひ給はさるを以て知へし、むかしより、御代は日〳〵に榮え、御連綿乃御家〳〵は、月〳〵に彌増、およそたかりける御代に、切支丹わたり來り、萬民邪欲に迷ひ、ことに天草の騷動より、日本國中切支丹宗門御禁制諸寺へ御付有しかは、農工商は云に及はす、社家に至迄、寺院印形を乞ことゝなりぬ、此時公命をうけ奉らさるは、伊勢兩宮乃宮人とかや、さるかしこき　大御神に仕へ奉る宮人、いかてか切支丹の邪法にいられんや、諸社なるへし、依て願はくは、日本國中　公命以て、神道葬祭に仰付られなは、生そは　神明の恩澤を蒙り、死ては上天の　神國にかへりてん、　公恩を忘れ奉らさるものなり、近くは國學に志の人〳〵には、伊勢に本居宣長といへる人、漢學を斥して、皇國の尊きをさとせり、つゝいて本居太平は、紀伊公へ召れ、和歌山住居にて、祿を給はりけるとかや、江都には、塙撿挍保己一　公命をうけたまはりて、諸國の古書等をよませ、群書類從といへる前代未曾有の大部を撰し、

皇都には玉田永教　神祇管領の仰せをうけ給はりて、諸國を廻り、貴賤不辨の者

ふ至迄、　神明の尊きよとをさとさしむ、かゝる人〳〵の世まいてぬるも、御盛德のすくれてかしこき御代とこそ申ものなれ、まことに時いさりぬるや、寛政乃頃より、文化文政ま至りて、諸國の神職神道葬祭を願出しらは、御開濟有こそいと有かさかりなれ、別て會津領なとれ、神職まかきらさるよしきゝぬ、中まも信州伊那郡赤須村美(ヒ)女森(ショノモリ)神主小町谷常陸といへる人、神道葬祭ま執行いさしたく(き)よし申談せしら、寺いさくさゝえしを、寺社御奉行所へ願ひいてしかは、脇坂侯の御裁許をもて、神道葬祭式御開濟ありしれ、有かさかりける御事なり、神國なるかゆへま、上代ま立歸り、かしこらりなる御代ま、猥須さる神職ありて、まれまれ勝手ま佛檀(壇下同ジ)を傍りありしれ、いと忌〳〵敷ととなり、そやく壞て佛も檀も海川へ流し、家の内を祓ひきよめ、其かそりふ靈社靈札等を祭るへし、予ら近村の鳴海といへる驛ま、俗家まさへ靈社を勸請し、先祖祭のせつい、其所の神主を招請する人ともあり、況神職ふおゐてをや、　伊勢兩　宮い、僧尼い云ま及そ(ば)、佛具數珠等持參の輩さへ、參　宮を禁制するを以て知るへし、かくとさとさい、みな人の諸ことこたへて、君つゝしいそねいそらぬ人まても、日本心ま立かへり、めてたき御代い千世萬代をいくめくり、御武運長き榮久を、其宮〳〵乃神〳〵ま仕へつらふる宮人い、祈り奉らんとを旀かふものなりと、しか云、

附錄

諸國乃神職寛政の頃より、追々神道葬祭式ゝ相なりし國〳〵、さゝおよふゝまかせ、書ましるしぬれハ、其國主領主等乃官錄勝劣前後遲速等を罪するとあられ、

御料之內　甲斐國中一統

紀州御領

加州領　備前國中一統

會津領一統　南部領一統

津輕領一統　小倉領一統

二本松領　松代領

松本領　桑名領

美作國

此外諸國依數多（アマタニヨツテ）略之畢、見る人心あられ、書加へゑまへりしと書誌しぬる、文政六乃年春やよひあられよき日ゝあなれ、尾張國星崎青山守胤

〔寺社役叢枚〕

神職神葬祭伺

〔徳川禁令考〕第五帙 卷四十二　葬儀

文政九戌年 寺社奉行掛　伊奈半左衛門出

武州新大瀧村熊野權現神主宮川但馬神道葬祭之儀伺

書面宮川但馬儀、家内一統神道葬祭之儀、吉田家より許狀受、菩提所本福寺無住ニ付、檀帯龍泉寺雅擅得心ニ候得共、家內一統葬祭難成事ニ付、但馬倅跡相續可致正流之ものハ神道葬祭之積、菩提寺宗判相除、妻共外家內之もの共ハ、仕來之通、同寺宗判引導燒香可受旨申渡、且支配役所ニハ不申立、吉田家許狀殊ニ有吟味中一先歸村申付候所、村役人にも不沙汰ニ、他國出致し、差紙受候節不參致し候儀、治郎左衛門儀、彌治郎ハ、但馬他國出致し候儀ハ不存候得共、同人儀支配役所より呼出差紙請候節、左門より年承、同人任賴、但馬病氣ニ而出府いたし兼候旨、左門供ニ支配役所に一旦相達之儀申立候段、一同不埒ニ付、但馬ハ押込、彌次郎ハ過料錢三貫文、左門ハ急度叱り置、證文取之差出、但馬押込者、日數五十日相立候ハヽ、不及伺被差

免、過料錢ハ三日之內、其方役所江取立、御勘定所江可被相伺候、神道葬祭之儀ハ、寺社奉行中江掛合之上申達候、以上、

戌八月

修驗家內一統自身引導

〔德川禁令考〕第五帙 卷四十二 葬儀

文政十亥年 石州出水直掛 還竪之助伺

但州石橋村修驗大乘院家內共一統引導之儀伺

書面當山修驗大乘院觀應子家內不殘一統引導之儀、容易ニ難成筋ニ候得共、菩提寺示談納得之上、於村方も一同故障之筋無之上ハ、願之通承屆、證文取之、可被差出候、右者寺社奉行中江掛合之上、申達候、以上、

亥七月

神職自葬祭

〔德川禁令考〕第五帙卷四十二　葬儀

年號闕丑五月
榊原主計頭掛　右花孫三郎出

越後國矢越村神主伊勢自分葬祭之儀伺

書面伊勢幷同人親刑部儀、自分葬祭之儀ニ付、免狀吉田家より傳授受之段無相違、宗判請來候觀音寺共得心之上、一札差出候上、願之通承屆證文取之、可被差出候、右ハ寺社奉行中に掛合之上申達候、以上、

丑五月

修驗家內自葬祭の例

〔德川禁令考〕第五帙卷四十二　葬儀

年號闕寅四月

修驗自身葬祭寺内迄相濟候例之事

上州利根郡下津村本山修驗三寶院儀、前々より其身幷弟子ハ手前致滅罪、妻子ハ私領同郡月夜野村眞言宗壽命院引導受來候所、川越ニ而差支有之候間、以來寺内不殘手前滅罪いたし、宗門人別帳を除、壽命院印形を除、一判を以差出度旨、壽命院加印之願書差出候間、奉行所ゟ伺候所、左之通御下知、

信濃印

書面三寶院寺内滅罪、幷宗門帳自分印形之儀、雙方得心之上差印を以願之通可被申付候、尤寺社奉行中ゟ掛合之上申達候、以上、

寅四月

此例異例ニ付、見合ニ記置、尤神主ニても下總國猿島郡猫實村松崎播磨寺内不殘自身葬祭、文化年中相濟候例有之、

引書 [illegible]

社家神葬祭菩提寺故障につき伺

〔德川禁令考〕第五帙 卷四十二　葬儀

天保三辰年　内藤隼人正掛　松本六左衛門出

備後國上松村社家翁淡路神道葬祭伺

書面翁淡路神道葬祭之儀、菩提寺松源院より故障申立候上ハ、一件書物相添、月番寺社奉行に可差出候、右寺社奉行掛合之上申達候、以上、

辰九月

神職神葬祭願手續

〔德川禁令考〕第五帙 卷四十二　葬儀

天保五午年四月　内藤隼人正掛　多羅尾靱負出

勢州鹽濱村外三ヶ村神職之もの神祇道葬祭之儀伺

書面近江外三人儀、其身并神職相續可致、悴共外神子職之もの共等、神道葬祭之儀、

諸々善養寺得心致し、村方ニおゐても、故障筋無之上ハ、葬祭之義、吉田家に申立候段承届、追而免許相濟願出候ハヽ、其節可被伺候、右ハ寺社奉行中ニも掛合之上申達候、以上、

年十一月　　　　　　　　　　　内藤隼人正

以上引書○類例秘録

神職家內神葬祭社僧復飾等の件

〔太政類典〕第一編　第百三十一巻　教法　神官

二年六月十日

神職神葬祭、社僧復飾ノ御趣意、管轄ニテ注意、幷神職舊目復飾神主等ノ稱號願出方、及神社取調方等處分、

一神職ノ者、家內ニ至迄神葬祭、社僧別當復飾等ノ儀、昨年御布告相成候上ハ、出願ニ不及筈ニ候處、今以願書差出候向モ有之候間、府藩縣ニテ、兼テ御布令ノ趣意行屆候樣可致事、

但、社僧別當復飾ノ上、其所部ノ府藩縣ヨリ取糺メ神祇官ヘ可屆出事、

一神職舊目幷別當社僧復飾致シ、神主社人等ノ稱號、其府藩縣ニテ取糺ノ上、押印副書ヲ以神祇官ヘ可願出事、

但、差向出京難澁之向ハ、兼テ布告ノ通リ可相心得事、

一神職ノ者、諸願伺等、府藩縣ニテ篤ト取糺、副書面ニ、其事柄具ニ可書載事、

一先達テ布告有之候延喜式神名帳ニ所載諸國大小ノ神社、幷ニ式外ニテモ大社ノ

分、並ハ即今府藩縣間近ニテ崇敬ノ神社等精シク可申出事、
一諸國神社、勅願所ノ分、由緒社傳御奉納ノ品等、巨細取調可差出事、
右之通ニ候間此旨相達候事、

復飾僧侶位階宣下につき僧侶官位相當調の件

〔太政類典〕第一編第百三十五巻 教法 葬儀僧尼

三年二月

僧侶官位相當

(管見) 制度調局へ掛合神祇官

復飾僧侶位階宣下ノ見麗候ニ入用間、是迄ノ官位ヘ僧官相當ノ事、并當今其僧官ヘ代リノ位階宣下ノ儀、素官ヘ其位ト申處、御見込承リ度候間、御取調ニ預度候也、

三年二月廿日

制度局回答神祇官宛

被仰越ノ條件正ニ承知仕候、何レ取調御答ニ及ヒ候也、三年二月廿日

制度局回答神祇官宛

復飾ノ僧位ヲ以テ、官位ニ相當ハ見競ハ理ニ不叶ト存候、元來大社アリ、小社アリ、淫祀アリ、神殿大ニシテ大社アリ、依テ社相當ノ名義ヲ以テ官位許容可然ト存候、

三年二月廿二日

制度局上申神祇官宛

過日被仰越候僧官ノ義、別紙ノ通リ候間、宜シク御承知可被下候也、三年二月廿二日

		位階ニ準レハ
法印位	大僧正	正四位
	僧正	
	權僧正	從四位
法眼位	大僧都	
	權大僧都	正五位
	少僧都	從五位
	權少僧都	
法橋（位）印	律師	正六位

一權律師　從六位

僧位ハ以上三階ニテ、以下ハ凡僧、

午二月　制度局

神職織目新補別當復飾等地方にて允許の事

〔太政類典〕第一編第百三十一卷　教法　神官

三年二月廿九日

神職織目新補別當復飾等、神祇官支配之外、地方ニテ允許ノ上、屆出シム、

布告

一諸國大小ノ神社神職織目、同新補別當社僧復飾神勤等、是迄神祇官ヘ願出、許狀受來リ候處、追テ一定ノ御規則被仰出候マテ、同官支配ノ外ハ、地方官ニテ聞濟置、取束ネ可屆出事、

但、本文御達不相達以前出京イタシ候向ハ、夫々地方官ヘ添書イタシ可差戻

事、節條

度會縣伺 辨官宛

去ル二月御達相成候諸國大小ノ神社神職叢目同新補別當社僧復飾神勤等ノ事、追テ御規則被仰出候迄ハ、神祇官直支配ノ外ハ、地方官ニテ聞濟置、取束可届出ノ旨、右神祇官直支配ト申者、何レノ社々ニ御座候哉、心得不申候ニ付、乍御面倒御示教被下度候也、三月

勅祭

伊勢兩宮　石清水
加茂下上　大原野
吉田　八坂
松尾　北野
平野　稻荷
梅宮　武州氷川
春日

直支配

日吉　　住吉
熱田　　杵築
宇佐　　阿蘇
（太）大宰府　　豐前英彦山
金刀比羅　　日前國懸
熊野三山　　三輪
大倭　　龍田
石上　　廣瀬
攝津廣田　　諏訪
戸隱　　鹿島
香取　　出雲日御崎
出羽熊野　　白峯
[illegible]倉野
東京十二社

日枝　　根津
芝神明　　神田
白山　　龜戸
品川貴船　　富岡八幡
王子　　赤坂氷川
府中六所　　鷲宮

神祇官へ掛合 辨官

神社御官直支配ノ儀、別紙ノ通、度會縣ヨリ伺出候間、御取調御答有之度候也、三年四月七日 各縣

同回答 辨官宛

昨日御達相成候當御直支配神社ノ分、別紙ノ通ニ有之候、依之、度會縣ノ伺相濟、御回答及候也、三年四月八日

淸崎藩伺 辨官宛

神職繼目幷復飾神勤等ノ願、追テ一定ノ御規則被仰出候迄、神祇官直支配之外、地

方官ニテ開濟置、取束御届可申上旨、兼テ御布告有之候ニ付、既ニ置之輩開濟置候段、御届申上候、右御規則被　仰出候迄、藩之小印章ヲ以、假許狀相渡置、可然御座候哉、此段奉伺候、以上、（四年二月十三日）

〔朱書〕伺之通、（四年二月廿日）」

神祇官立見（辨官宛）

清崎藩ヨリ神職體目并復飾之者ヘ、假許狀相渡置可然哉之伺、右ハ御規則相立候迄、藩ヶ見込通、取扱可然樣存候、仍テ本書相添、此段申進候也、（四年二月十九日）

福山藩伺（辨官宛）

神職之通、神職之者共ヨリ願出候ニ付、開濟置申候、尤先代御下渡之御許狀寫相添奉差上候間、御許狀御下ヶ被成下度、奉願候、以上、（同年四月十五日）

〔朱書〕（付箋）昨昨御布告之通相心得可申、許狀下ヶ渡ノ儀ハ、追テ御規則相立候上、可及沙汰事、（四年六月三日）

神祇官立見（辨官宛）

昨春御布告之通可相心得、許狀下ヶ渡之儀、追テ御規則相立候上、可及沙汰事、

右見込申進候、依テ神職ヨリ差出候願書扣、幷先代許狀寫共致返却候也、四年五月廿日

同上

神官之儀、定員等一般之規則、近々御布告可有之ニ付、其ニテ取計可申事、

右見込申進候也、四年五月廿日

福山藩伺　辨官宛

一神職ノ者壹人ニテ手廻リ兼候儀御座候ニ付、追テ跡職相讓候悴へ、神勤爲仕、兩人ニテ奉仕致度旨願出候ハ、承リ置、取束御届仕候而可然儀ニ御座候哉、又ハ官職願爲差出、承リ置、御届仕候テ不苦儀ニ御座候哉、

一神職共神勤不仕、宮社へ官職無之者、神主ト相唱、神勤仕候向數々御座候ニ付、差向ノ處禁止仕置申候、然ル處、右ノ中其宮社へ從來由緒有之、神勤仕居、右由緒正敷者官職仕度旨願出候ハ、承置、取束御届仕不苦儀ニ御座候哉、尤正敷由緒無之者共ハ、追テ更ニ神勤差留候心得ニ御座候、

右之條奉伺候、以上、四年四月十五日

（朱書）神官ノ儀、定員等一般ノ規則、近日御布告可有之ニ付、其上可取計事、

太政官より本願寺外三ヶ寺へ達幷
北國門徒中檄文

〔太政類典〕第一編 第百三十四巻 教法 寺院三

元年六月二十二日

神祇官再興神佛判別處分ハ、排佛ニ非ル旨ヲ、本願寺外三ヶ寺ノ門末ヘ教諭セシム、

本願寺　東本願寺

興正寺　佛光寺

へ達

先般神祇官御再興、神佛判然ノ御處分被爲在候ハ、專孝敬ヲ在天祖宗ニツクサセラルヽタメニテ、今更宗門ヲ褒貶セラルヽニアラス、然ルニ賊徒訛言ヲ以テ、朝廷排佛毀釋コレツトムナト申觸シ、下民ヲ煽惑動（[illegible]カ）搖セシムル由、素ヨリ彼等ハ、斯好生至仁億兆一視ノ叡慮ヲ奉戴セサルノミナラス、則宗門ノ法敵トモ謂ツヘシ、仍テ教旨說諭、便宜ヲ以民心安堵、方向相定、作業相勵可申樣、門末教育可致旨御沙汰候事（九月十七日依[illegible]修寺ニモ達ス、）

北國より出たる檄文

このたひ關東へ軍勢發向いたし候事、是より天下のみたれと相成、佛法すいびいさすべく哉と、悲歎かきりなく候、其譯ハ、今度天子を掠め、奸邪むほんを企、德川家をほろぼし、天下をうばひとるけいりやくにて、實にゆゝしき大事ニ候、もとより薩長ハ、佛法ニ信仰これなく、ことさら淨土眞宗をひほういたし、異國人より、きりしたん邪法をうけつぎ候佛敵ニまきれこれなく候、それに一味いたし候ものハ、皆々佛敵ニて、たとへ今生にて一旦榮ありと雖、阿鼻地獄の罪人也、萬一奸邪の薩勢國ニはびこり、佛法破滅ニ及び、きりしたん宗門世ニひろまり、日本國中魔道ニ落入候はゞ、其時に至り、歎かなしむ共、其かひさらにあるへからす、昔開山親鸞聖人をはじめ奉り、御代々の善智識方、佛法の爲ニハ身命を惜たまはす、顯如聖人ハ御自身ニ忍辱ろ鎧をめさせられ、彌陀の利劒をもつて、佛敵を降伏あらせられ候例もこれあり、今日佛恩報謝のため、身命をなげうつべき時來れり、依て門徒中心をあはせ、佛敵と見かけ候はゞ、二念なく取り可申候、萬一佛敵のために命をうしなひ候とも、淨土の引接さらにうたかひあるべからざるものなり、

四月　　　　　　　　　門徒中

法華宗三十番神其他神祇稱號混用等の禁

「太政類典」第一編第百三十三巻　教法　寺院二

元年十月十八日

法華宗三十番神其他神祇ノ稱號混用ヲ禁ス、

法華宗京都十六本寺

頂妙寺　　立本寺
本隆寺　　妙蓮寺
本法寺　　妙顯寺
妙覺寺　　本滿寺
本禪寺　　妙傳寺
寂光寺　　妙泉寺
要法寺　　妙滿寺

本能寺　本國寺へ達

王政御復古更始維新之折柄（中略、本文ハ神佛分離史料上巻八五頁ニ收メタルモノニ同ジ）

無本寺　洛東岡崎村

滿願寺

諸國本寺之分

遠州見附驛　玄妙寺

駿州富士山大宮　久遠寺

駿州上野　大石寺

駿州上野　妙蓮寺

同　北野　本門寺

同　岡宮　光長寺

同　岩本　實宗（相）寺

同　沓之谷郷之内貞松　蓮永寺

甲州身延山　久遠寺

同　小室　妙法寺

同　大野
本遠寺
豆州玉澤
妙法華寺
相州片瀬龍口
龍口寺
武州池上
本門寺
同　平賀
本土寺
房州小湊
誕生寺
上總興津
妙覺寺
同　小西檀林

同　休息山
立正寺
同　伊東
佛現寺
同　鎌倉日（比）企谷
妙本寺
同　直間
弘法寺
同　新造
妙顯寺
同　東條小松原
鏡忍寺
同　藻原
妙光寺
同　鷲巢

正法寺

下總中村檀林
日本寺

常州水戸
久昌寺

能登瀧谷
妙成寺

越後蒲原郡
本成寺

同　塚原
根本寺

紀州若山
報恩寺

攝州尼崎
本興寺

鷲山寺

同　中山
法華經寺

奥州會津若松
妙法寺

越後村田
妙法寺

佐渡阿佛
妙宣寺

泉州堺
妙國寺

同
養珠寺

藝州廣島
國前寺

肥前松尾山

勝光寺

右同文各通誌但、官ニ實相寺ヲ院ニ作ル、長崎府管轄之分ハ從同府達、

修驗道は都て佛徒と認む

〔太政類典〕第一編　第百三十三巻　教法　寺院二

三年六月廿九日

修驗道ハ都テ佛徒ト爲ス、

神祇官伺　辨官宛

修驗道ノ儀、毎々藩縣ヨリ伺出候ニ付テハ、第一兩部習合身分ノ名ニ付、右修驗之當道ヲ、當官ノ指揮致スヘキ儀ニ無之ハ勿論ニ候得共、兩部分別ノ儀ハ、御一新以來、當官ノ法則ニ有之候處、右之差圖難相成儀ニテハ、神佛取分ノ御趣意更ニ不相立、右修驗ノ儀ニ付テハ、於當官、礑ト行詰リ候事ニ付、修驗道ノ者御所置ノ儀兼テ伺置度候也、三年六月廿七日

（朱書）「醍醐三寶院初、追々引導式自宗門專務願出被差許候儀ニ付、都而佛徒ト可心得候事、三年六月廿九日」

府藩縣管内寺院廢合を屆出でしむ

〔太政類典〕第一編第百三十四卷　教法　寺院三

三年十一月二十八日

府藩縣管内寺院廢合ノ分、詳細屆出シム、尤境内除地山林等處置方ハ調査伺出シム、

布告

府藩縣ニ於テ管内寺院廢止或ハ合併致候分、寺號宗派本末等取調、早々可屆出、尤境内除地山林等所置方之儀ハ、見込相立、反別其外詳細取調可伺出事、（憲法類編第十五冊第一篇國法部第十卷教法同文）

兩本願寺へ諸國末寺門徒の者徵召するを停めしむ

〔太政類典〕第一編第百三十五卷 敎法 雜僧尼

三年十二月八日

兩本願寺ニ諸國末寺門徒ノ者ヲ私ニ徵召スルヲ停ム、

東本願寺へ達

諸國末寺幷門徒之者、私ニ出京申付候趣、以之外之事ニ候、自今末寺幷門徒之者無據事柄有之、呼寄候節ハ、前以其段地方官へ可申通、地方官聞濟無之、勝手ニ呼寄候儀不相成候條、此旨相達候事、誌

兩本願寺へ達

諸國末寺幷門徒之者へ、出京申付候儀ニ付、別紙之通東本願寺へ御沙汰相成候條、爲心得此旨相達候事、(憲法類編第十五冊第一篇敎法部第十卷敎法同文)

寺院寮の設置

〔憲法類編〕第十五　第一編國法部　第十卷教法

○寺院寮被置宗規僧風御釐正ノ事

第五十二　（明三、十二）庚午十二月廿四日御布告

今般寺院寮被置、追々御改正筋被仰出候條、於各管廳、區々ノ處置致間敷事、

但、無祿無檀ノ寺院合併等、自今本寺法類寺檀共故障有無詳細相糺シ、調ヘ書ヲ以テ可伺出事、

第五十三　庚午十二月廿六日御布告

今般本寺本山ヘ別紙之通御沙汰相成候條、各管轄之諸寺院ヘ不洩樣可相達候事、

別紙

近世寺院之宗規日々紊亂シテ、本寺本山ト唱フルモノ、或ハ積德持戒之念慮ナク、門地僭大ニ押移リ、隨テ末派之僧侶ニ至リ、糊口安逸ヲ貪ルノミナラス、甚シキハ政敎ヲ害スルノ徒有之趣、今般寺院寮設ケラレ、宗規僧風ヲ御釐正相成候條、今後銘々自反僧律ヲ守リ、文明維新之御主意ヲ奉體可致旨被仰出候事、

東本願寺外三ヶ寺へ寺院廢合の趣意についての沙汰

〔太政類典〕第一編 第百三十四卷 教法 寺院三

四年三月十八日

東本願寺外三ヶ寺ニ、廢合等ノ上意ヲ門末ヘ說諭セシム、

東本願寺　錦織寺

專修寺　佛光寺へ達各通

今般諸縣中立之趣、曾テ被仰出候御旨意ニ相觸シ候、素ヨリ排佛之儀ニハ無之、殊ニ府縣中無籍無檀之寺院ニテ、其本寺法類及ヒ寺檀共故障無之候ヲ、廢毀合併並候儀、總テ伺出、朝裁ヲ可請旨御沙汰相成候條、篤ト御旨意ヲ奉シ、門末之者共疑惑ヲ不生樣、說諭可致事、

京都府へ達

別紙之通、東本願寺外三ヶ寺へ御沙汰相成候條、夫々可相達事、（[illegible]第十五冊　[illegible]第十冊）

〔參看 教法 同文〕

教部省の設置

〔憲法類編〕第四　第一篇國法部　第一卷三官制

○教部省ヘ可差出願伺屆等ノ事

第三百六　壬申（明治五年）三月廿三日第九十三號御布告

今般教部省被置候ニ付テハ、左ノ件々願伺屆等、總テ同省ヘ可差出事、

一社寺廢立及祠官僧徒等級格式等ノ事、

一新ニ祠官ヲ置キ、僧尼ヲ度スル事、

一教義ニ關スル著書出版免許ノ事、

一教徒ヲ集會シ、教義ヲ講説シ、及講社ヲ結フ者ニ、免許ノ事、

一教義上ノ訴訟ヲ判決スル事、

社寺合併等は伺出でしむ

〔憲法類編〕第十四　第一篇國法部　第九卷祭典

○社寺合併等可伺出ノ事

第二百六　壬申三月廿八日第百四號御布告

自今社寺ヲ合併シ、及其所屬ノ地ニ關渉スル處分ハ、各地方官ニ於テ其事由ヲ明細取調、教部省へ可伺出事、

第二百七　壬申四月九日第百十六號御布告

第百四號御布告、更ニ左ノ通被改候條、此旨相達候事、

自今諸社及寺院合併等ノ儀ハ、各地方官ニ於テ、其事由ヲ明細取調、教部省へ可伺出事、

地方官へ社寺廢合の趣意布達の件

「社寺取調類纂」一〇六七

（受）明治五年　（自）[illegible]月廿七日　（了）六月十日　（綴）[illegible]　（差）[illegible]　（係）[illegible]

（出）（住）三河[illegible]

社寺廢合之儀ニ付正院へ伺案

社寺廢立之儀ニ就テハ、當三月中第百四號之公布有之候處、往々地方官ニ於テハ、其主旨ヲ誤解シ、専ラ廢合ヲ而已主張勸誘致シ、區々之取計等モ有之哉ニテ、僧侶中疑惑不少趣ニ相聞候ニ付、更ニ左之通布達致度、依而案書取調、此段相伺候間、速ニ御決議有之度候也、

壬申六月七日

輔

卿

正院

御中

布達案

神社寺院合併等之儀者、事由明細取調、教部省へ可相伺旨、第百四號布告有之候、右者強而合併可致トノ御旨意ニ者無之、從來氏子等モ無之、社殿頽敗シ、或ハ無檀無住ニテ堂宇破壞シ、又ハ小社小寺ニ付、永久取續之目途無之分ハ、諸般故障之有無取糺シ、廢合

之適宜ヲ斟酌シ、詳悉調書ヲ以テ、當省ヘ可伺出事ニ候條、各地方廳區々之所分無之
樣可致候事、

壬申六月十日

教部省（憲法類編第十四編第一類法制部第九卷ニ同文）

（朱書）
〔別紙本願寺光常其外ヨリ之具狀書、爲御見合附屬候事、

右六月十七日、正院ヘ御伺相成候處、八月二日御聞屆可相成旨、別紙伺ニ有之通御沙汰相成候事、

下ケ札〔評議ニノ　門脇

教部省權判官、試補ヲ被爲定、廣ク教導職ノ者ヲ撰出サレ候ハ、僧侶ノ人民ニ於テ、
朝旨ヲ遵奉シ、上敬神愛國ノ旨ヲ知ラシメ、下遊惰ヲ勸マレ、知識ヲ開カシメント
ノ御趣意ト奉存候、然處邊隅ニ於テハ、右御趣意ヲ傳ヘス、社寺廃合取調ヘ申出サス
ナト、教部省ノ判斷ヲ待リ候趣有之、依之ノ風聞有之、痛心仕候、殊ニ僧侶ハ
朝旨貫徹シ、僧侶ハ權レ、上下ハ差ナク御取締相立候マテ、各宗管長トノ取調ヘ、府縣ニ

於テ無之樣仕度奉存候、尤教則三條之御趣意貫徹シ、御基礎相立候上ハ、闔國一樣社寺合廢等御改正勿論ノ儀ト奉存候、別紙愛知縣布告寫等奉入　御覽候、以上、

壬申五月

權少教正專修寺　圓祀

新前大僧正東本願寺　光瑩

權少教正本願寺　光尊

教部省

御中

愛知縣布告寫

從來社寺之向主願等致シ、其名跡而已ヲ存シ、本社本寺或ハ同派之内ニテ兼攝致シ居候向モ有之、右樣之向者不及申、其他之分モ、便宜ヲ斟酌合併致シ不苦候間、申合見込之趣、可申立候事、

壬申五月

愛知縣廳

無檀無住の寺院廢止の件

〔太政類典〕第二編 第二百六十七巻 教法十八 寺院一

十一月八日〔五年〕（朱書）

第三百三十四號（朱書）

諸寺院中總本寺本山ヲ除ノ外、無檀ニシテ無住ノ向ハ、自今渾テ被廢止候條、各地方官ニ於テ、夫々廢寺處分ノ上、宗名寺號共詳悉取調、教部省ヘ可届出候事、

但、佛像什器等ハ、本寺法類ノ内、最寄寺院ヘ合附爲致、堂宇建物ノ儀ハ、最初營造ノ次第ヲ詳ニシ、官營ハ公收シ、私造ハ其人民ニ可相任、官私ノ別不分明ノ向ハ、適宜ニ取計ヒ、難取計儀ノ分ハ、總テ大藏省ヘ可伺出候事、（[illegible]）

教部省伺

諸宗寺院ノ内、無檀ニシテ無住ノ向等、多クハ他寺ヨリ兼務シ、或ハ其地方村持ト相成居、後住撰擧繼續等ノ目途無之ハ勿論、既ニ堂宇頽敗シ、土地ノミ存候向モ有之趣ニ相聞ヘ、右ハ廢寺ノ今日ニ當リ、從前ノ儘差置候テハ、名實顯然不都合ノ

筋ニ付、總本寺本山ヲ除ノ外、右等總テ廢絶被仰出度、仍公布案取調、此段相伺候條
速ニ御評決有之度候也、十月廿九日

（朱書）「伺ノ趣布告相成候事、十一月七日」

大藏省へ下問

教部省伺諸宗寺院ノ内無檀無住ノ向廢絶被仰出度儀、右御下問相成候條、意見早
々可被申出候也、十一月晦日

同省答議

教部省伺無檀無住ノ寺院廢絶ノ儀ニ付、御下問ノ趣致承知候、右ハ最前當省へ照
會ノ次第有之、御回答及候儀ニテ、本文ノ旨意悉皆遵存無之候、仍テ別冊進達、此段
御回報申進候也、十一月五日

無檀有住の寺院無住となるものゝ廢寺處分の件

「太政類典」第二編第二百六十七巻第四類　教法十八　寺院一

二月三日（朱書）六年

無檀有住之寺院、無住トナルモノ、上請ヲ經テ廢止スヘキ旨ヲ令ス、

教部省伺

諸寺院中總本寺本山ヲ除クノ外、無檀ニシテ無住ノ向ハ、渾テ從廢止候段、壬申第三百三十四號ノ通リ御布告相成候處、今後無檀ニシテ有住ノ寺院等、自然無住ト相成候節ニ至リ、右公布ニ基キ、地方官限リ廢止取計候テハ、不都合ノ儀モ有之候條、當省ヨリ別紙ノ通布達仕度、布達案相添、此段相伺候間、至急御評決有之度候也、

一月廿四日 （朱書）教部

（朱書）伺之通、二月三日

同省布達

（教部省第十三號）無住ニシテ無檀ノ寺院廢止ノ儀ニ付、壬申第三百三十四號ノ通御布告相成候處、無檀ニシテ有住ノ向ハ、今後無住ト相成、永續ノ目途無之節トモ、廢止ノ儀ハ、當省壬申第六號布達ノ通、其状ヲ以伺ノ上可致處分候事、二月四日 教部（朱書）六年

寺院廢合出願に本寺法類檀家の添書を付けしむ

〔太政類典〕第二編第二百六十七卷　第四類　教法十八　寺院一

八月三十一日　六年（朱書）

寺院廢合等本寺及法類檀家ヨリ添書ヲ以出願セシム、

教部省屆

寺院廢合之儀ニ付テハ、末派ノ僧侶或ハ私議ヲ以廢合等願出、儘不都合ノ次第モ有之候ニ付、今般別紙ノ通、各府縣ヘ及布達候條、此段御屆ニ及候也、八月三十一日

教部

教部省布達府縣宛

第二十八號（朱書）

寺院中永續ノ目途無之趣ヲ以テ、適宜廢合等、其寺院ヨリ各管轄廳ヘ願出候者儘有之、右ハ法類檀家熟議ノ上、本寺ノ添書ヲ以テ可申出處、或ハ法類等ノ私議ヲ以テ直ニ出願候向モ有之哉ニ相聞ヘ、不都合ノ次第ニ候、自今所轄本寺ハ勿論、法類檀家等ヨリ、添書無之分ハ取揚不相成候條、此旨布告候事、八月三十一日教部（第二憲法類紀

第十四冊第一儀制部第十巻教法部宗、但八月三十日トアリ。）

教部省布達前編完

第五十二號（朱書）

五年八月當省第十四號達書、六年八月第廿八號布達ヘ、左之但書追加候條、此旨相達候事、

但、無住ノ儀、本寺本山ノ掌管勿論ニ候條、觸頭法頭或ハ執事取締等ヨリ添書候共、總テ本山代務ト相心得可申、尤法類連署之儀ハ、可爲從前之通候事、（朱書）八上

十二月十三日

寺院廢合跡地并堂宇建物處分規則

〔太政類典〕第二編　第二百六十七巻　教法十八　寺院一

八月九日（朱書）八五

寺院廢合跡地并堂宇建物處分規則ヲ定ム、

內務省伺

寺院廢合跡地并建物處分ノ儀ニ付、地方官ヨリ時々稟議ノ趣モ有之候處、右一定ノ規則相立置候事ナク、不都合ニ付、今般教部省ヘモ協議、別紙條款取立書ノ通

リ、處分可及ト存候、尤何等格別ノ事故アル分ニ限リ、其都度經伺ノ上、取計可申ト存候ヘトモ、今其概例ヲ擧ケ、見込相立、相伺候間、至急仰御指揮候也、六月四日

（朱書）
「伺之趣聞屆候事、」

（朱書）
「但、規則條款別紙ノ通リ改正可致候事、八月九日」

第一節　廢寺　無檀　無住

一　堂宇建物最初官營ハ公收シ、私造ナレハ其人民ノ處分ニ任セ、寺院幷先住ノ僧侶資金ニテ建造セシモノ、及ヒ其他ハ官沒スベシ、

一　境内地等ハ從來人民ノ名受ニテ、且貢租ヲ納メ來リ候者ハ其者ヘ下渡シ、寺院ノ名受トナリタルカ、先住僧侶ノ買得セシモノ、及ヒ其他ハ官沒スベシ、

一　若シ田畑山林等アリテ、朱黑印地除地ハ勿論、寺院ノ名受ニ候ヘハ官沒スベシ、

一　右田畑山林等、寺院幷ニ先住僧侶買得地ナレハ、官沒スベシ、

一　開墾ノ田畑。若シ寺院幷ニ先住僧侶ノ資金ヲ以テ開墾セシモノナレバ官沒スベシ、

一　人民ヨリ寄附地アレハ、卽寺附ノモノユヘ官沒、併シ寄附人ノ子孫再ヒ所有ヲ欲スレハ、相當代價ニテ拂下ベシ、

第二節　廢寺　有住　無檀

壬申第三百三十四號公布ニ據レハ、無檀無住ト有之候ヘモ、萬一

有住無檀ノ廢寺セル時ノ處分、

一 堂宇建物萬一住僧ノ私造ナレハ、其モノヘ下渡スベシ、

一 境內地等ハ住僧ノ買得地ナレハ下渡スベシ、

一 田畑住僧ノ資金ニテ買得又ハ開墾セシモノハ、其者ヘ下渡シ、山林モ同ク買得ナレハ、同斷其他第一節ニ異ナラス、

第三節　合寺　無檀　無住

一 堂宇建物創制官費ハ公收シ、私造ハ其者處分ニ任セ、寺院幷先住僧侶ノ資金ニテ建リタルモノナレハ、合スル處ノ寺ヘ附シ、官私ノ別不分明ナレハ、又合スル處ノ寺院ヘ附スベシ、

一 境內地等ニ人民ノ名受ニテ、且貢租納來リ候モノナレハ、其者ヘ下渡シ、寺院ノ名受トモ、先住僧侶買得ノ確證アレハ、合スル所ノ寺ヘ附スベシ、

一 若シ田畑山林等アリテ、元祠寺院幷先住僧侶ノ買得カ、開墾ノ確證アレハ、合スル處ノ寺ヘ附スベシ、

但シ、山林ハ開墾ト云フヿナシ、萬一自費ニテ苗木植付等ノ確證アレハ、立木ノミ、合スル所ノ寺ヘ下渡スベシ、

一　人民ヨリ寄附地アレハ、合スル所ノ寺ヘ附スベシ、

第四節　合寺　有住　無檀

一　大略第三節ト異ナルヿナカルベシ、但、建物境内地田畑山林等、萬一住僧ノ資金ニテ、建造幷買得開墾等ノ確證アレハ、其住僧ノ意ニ任スベシ、

第五節　合寺　有檀　無檀(住カ)

一　是又大略第三節ト異ナルヿナカルベシ、但、建物檀中等ノ私費造營幷境内地田畑山林等、檀中ニテ私費開墾或ハ買得シ、地租ヲ納メ來リ候モノナレハ、其合スヘキ本寺法類等ト示談ニ任スベシ、

別紙

(朱書)
○印第一節

廢寺　無檀　無住

一　堂宇建物ハ、壬申第三百三十四號達書ノ旨モ有之ニ付、最初官營ハ公收シ、私造ハ其人民ノ處分ニ任スベシ、尤寺院幷先住僧侶ノ資金ヲ以テ、建造セシモノ及ヒ

私造ノ確證ナキモノハ官沒スヘシ、

但、佛像什器處分ハ、本文第三百三十四號達書ノ通リタルヘシ、

一 境内地ノ内、從前人民ノ名受ニテ貢租ヲ納メ來リシモノハ、其モノヘ下ケ渡シ、寺院ノ名受カ、先住僧侶ノ買得カ、其他民有ノ確證ナキモノハ都テ官沒スヘシ、

一 朱黑印地、除地田畑山林等ノ内、寺院ノ名受地ハ勿論、村方百姓等ミノ田畑等アリテ、寺院ノ名受トナリタルカ、又ハ先住僧侶ノ買得セシモノハ官沒スヘシ、

但、寺院幷先住僧侶ノ貲金ヲ以テ開墾セシ證跡アルモノト雖モ官沒スヘシ、

一 人民ヨリ寄附ノ田畑アリテ、貢租作德共該寺ニ於テ處務致シ來レルモノハ、卽チ寺附ノ地面ニヘ官沒スヘシ、然シ寄附人ノ子孫再ヒ其所有ヲ欲セハ、相當代價ヲ以テ拂下ヘシ、

但、寄附セシ次第ニヨリ、別段ノ契約アルハ此限ニアラス、

第二節

廢寺　有住　無檀

一 現住職自己ノ田畑ニ係ルモノヘ、外ハ、第一節及ヒ第四節ニ照準シテ處分スヘシ、

第三節

合寺　無檀　無住

一 堂宇建物ハ、最初官營ハ公收シ、私造ハ其人民ノ處分ニ任カスベシ、尤寺院幷先住僧侶ノ資金ヲ以テ建造セシモノ、及ヒ官私ノ別不分明ノモノハ、合スル所ノ寺院ニ附スベシ、

一 境内地ノ内人民ノ名受ニテ、貢租ヲ納メ來リシモノハ、其者ヘ下渡シ、寺院ノ名受カ、先住僧侶ノ買得或ハ開墾ノ確證アルモノハ、合スル所ノ寺院ニ附スヘシ、（確證ナケレハ官渡スベシ、）但シ、萬一除税地ノ山林ニ於テ、先住僧侶自費ヲ以テ、苗木植付等ノ確證アレハ、立木ノミ合スル所ノ寺院ヘ下渡スベシ、

一 人民ヨリ寄附ノ地アレハ、合スル處ノ寺附ニ附スベシ、

第四節

合寺　有住　無檀

一 第三節ニ同シ、但シ、建物境内地田畑山林等ノ内、萬一現住職ノ資金ヲ以テ建造シ、或ハ買得開墾等ノ確證アレバ其者ノ意ニ任スベシ、

第五節　合寺　有檀　無住

一　第三節ニ同ヲ但シ、建物ハ檀中等ノ私費ヲ以テ造營セシモノ、及ヒ境內地田畑山林等檀中ノ私費ヲ以テ買得シテ、地租ヲ納メ來リシモノ、或ハ開墾セシモノハ、其合スベキ寺院幷法類等トノ協議ニ任カスベシ、

大藏省部兩省ヘ達[illegible]

別紙內務省伺廢合寺院跡地處分ノ儀、案書ノ通及指令候條、此旨爲心得相達候事、

八月九日

內務課議按內史本課回覽

別紙內務省伺廢合寺院跡地等處分ノ件、右ハ一定規則相立置候儀ニ可然、仍テ規則擬按實際差支無之樣、再三同省ヘ照會ヲ遂ケ、別紙案稿印ノ通リ調査致シ候、右ニテ御聞置、左ノ通リ御指令相成可然哉、御高裁候也、七月廿九日

九月七日（大藏省達）

廢合寺院跡地幷建物處分規則ヲ定ム、

寺院跡地及建物處分規則

內務省布達府縣へ

乙第百十三號(朱書)
廢寺院處分ノ儀ニ付、壬申第三百三十四號御達ノ趣モ有之候處、自今廢合寺院跡地幷建物處分規則別紙ノ通相定候條、右規則ニ照準取調可申出、此旨相達候事。九月七日 內務

廢合寺院跡地幷建物處分規則(前出別紙ノ文ニ同ジ。)

寺院合併廢止處分の手續

〔太政類典〕第二編 第二百六十七卷 第四類 教法十八 寺院一

十月二十七日(朱書)八年

使府縣へ達

(朱書)
第百八十五號

寺院合併廢止等ノ儀ニ付、明治五年四月第百十六號、同十一月第三百三十四號達ノ旨モ候處、自今無檀無住ノ向ハ、各管廳ニ於テ取調、其他ハ寺檀出願ノ上、孰レモ教部省へ伺出、處分可致、此旨更ニ相達(候條カ)事、

教部省伺

寺院合併廢止等ノ儀ハ、明治五年百十六號同三百三十四號御達ノ趣有之候處、府縣各地方ニ於テ、處分方一定致シ兼候ニ付、右御達書ノ旨ニ從ヒ、處規相立、當省ヨリ相達シ置候ヘ共、到底右兩度公達ノ旨趣ニ泥ミ、往々處分不都合不少、元來寺院ハ寺檀共有物ニテ、廢合共一途寺檀ノ所願ニ任セ、決テ抑制可致條理無之、依テ更ニ左ノ通リ御達相成候樣致シ度、乃草按相添、仰御指揮候也。十月十五日 教部

「(元按)伺之趣第百八十五號ヲ以相達候事。十月廿七日」

內務省ヘ達

別紙教部省伺寺院合併廢止等處分ノ儀、朱書ノ通及指令候條、此旨爲心得相達候事。十月三十日

第二科議按 (本局照會)

別紙教部省伺、寺院廢合ノ儀、右ハ實際處分上不都合有之趣ニ付、申請ノ通、許可相成可然哉、御指令按取調、此段相伺候也。十月十八日 (議案)

教部省布達(第號)

(達書第四十五號元按)

寺院合併廢止等ノ儀ニ付、本年百八十五號公達ノ趣候處、實合出願ノ節、本寺法類

添書方ノ儀ハ、六年當省第二十八號達書ノ通タルヘシ、此旨爲心得相達候事、

十一月五日

教部

雜說

隨時新談

禿氏祐祥氏報

小本一冊、紙數十七枚、平假名十行二十字詰。

此書は隨時新談の表題を逐號的に[illegible]したるものにして何人の筆に成りしかを詳にせざるも、明治[illegible]と同時に[illegible]せる人士の手に出でしものと思はる。今紹介せんとする所は第三號までにして、第四號以下は世に出でしや否を知らず。[illegible]を識者に何人にも[illegible]に就きて、[illegible]ありしも、第三號には[illegible]二ヶ所ありて、一は神[illegible]しつゝある僧侶を[illegible]す。

隨時新談第一號

○官省常て予に聞て云く、此度王政復古　神武創業の始に基せられ、諸事御一新、祭政一致の御制度、御回復遊させられ候に付て、先佛法は御廢止の事に決定致し候、ま

に付ては國中の寺は殘らずつぶれ申すべし、此義如何料簡し給ふやと、予是に答て曰く、何にも其よふに心配には及ばざる事なりと、又信者曰く、自分の寺のつぶれ候をもかまわず、心配には及ばずと申は狂亂の沙汰なるべしと云ふ、予又答て曰く、少しも狂亂の沙汰にあらず、順道を申すなり、若し不審あらば何樣にも聞ふべしと云ふ、信者の曰く、然らば深く承らんと、云々、

問、何宗に限らずけさころもを著用し經文を誦みて、日月を相過候は偏に令法久住の爲にあらずや、

答、今世の僧たるもの、けさころもを著用いたし、經文を誦て世を渡り候事は、實に令法久住の爲には相違なけれども、是に付て了簡あり、故如何となれば、中古以來けさころもを著用いたし、佛法弘通年來いたし候事は、昔も夫々の祖師方　王樣の御免しを蒙りて、國中に弘通せしことなれば、自己の事にあらず、然るに此度　神武創業の始に基かせられ候とありて、格別御改革遊ばされて、佛法のなき時分の通りに御直し遊ばされ候事なれば、其御觸書の通りに、向後相心得て、佛法弘通を止る計りの事なり、外には何にも子細は是れなき事なり、我等ごときの僧が佛法を傳ひて、法をして久しく世に絶やさぬよふにと申すも、是れも我等が自己に申すことにはあら

ず、元来昔の　王様の御歸依によりて、久しく此の佛法を日本國に絶さぬようにと仰せ付られし故に、其通りを守り傳えしものなれば、只今の　王様が佛法を御廢止遊はされて、是迄は大切であつたが、是からは佛法はいらないから、止めて忘れて仕舞と仰せ付られたらは、直に止めければ誠に相すまぬことなり、依て止めてしまふと、世界中の坊主が残らす大願があいだと云ふものだが、亦左様いたせば何にか外の役を仰せ付らるるか、左もなければ何になりと外の渡世を致す計りの事なり、今迄久住と云ふて忘れぬよふに、大切に覺えて傳え候て御歸依の内のことなり、其の　王様が御歸依遊はされぬよふになりし上は、もはや今迄久住と云ふ事にはかまい申しにて候間、在家の信者も　王様の御不信仰なる佛法を信心すれば實におしき事に候間、今ほら　王様の仰せの通りに佛法を信心する事は御止めなされし方が順道にてこれあるべきなり、

問、此度　王様に於ては、佛法御歸依遊はされず候に付、國中え御廢止の趣き御觸出しに相成候とも、夫に付ては、諸寺、當山共に何れも格別人氣の空寺方もあれは、内願の上やうさめ申て、無怪ず是迄の通り佛法御歸依遊ばされ候よう相成まうな者と存ず、此義如何、

答、聞の趣き専ら其意あるべき事なれども、夫れは通例の料簡と申す者なり、又入魂の公家方へ相願内願などは百萬度致し候とも御聞濟には相成まじくと存候、其故如何となれば、一國の　王たる御方が一應御決心の上仰せ出されし事を、臣下のいさめによりて、御止め遊ばされ候事は、とても相成まじく事に候、若し臣下のいさめによりて御止め遊ばされ候樣なる事なれば、最初より仰せ出されないはずの事に候、尤も必ず臣下の御いさめは御聞きなされないときまりたる事もなき事なれども、此度はとても御聞なされまじく事に候、左なく候ては　王政が相立申まじく候、夫より遙下の武士でさいも、武士に二言なしと申くらいの事に候、況や上もなき御方に於てをや、一應仰せ出されし事を、臣下より御いさめ申上たとても、二言の仰せのあるきづかゑは是なき事なれば、内願御いさめなどと申はとても及ばぬ事なり、依て御綱の趣きは有難く御請いたして、仰せの通り唯一神道に仰付られ下し置れ候よふと相願候方、誠に結構なることに候、左候て時をまちおとなしく、一統におちつきて仰せの通り守り居り候得ば、末には又如何遊ばされ候やも計り難き事に候、都て佛弟子たるものは、人氣にさからはず、何事も程よく取なし候が本來の持前にて候、能々此旨を觀念ありたき事に候、僧俗ともに佛法の大海に心を澄し候者は、何

なる小さき事もあなどらず、何なる大きなるものにも怖れぬ所が持前なれば、還俗でも唯一神道になれでも、決して毛の先程も心配せず、元より究竟の深理に至りては、一切法皆是佛法と了達す、十方法界の有ゆる諸法悉く佛法なれば、彼此の差別をせずして、唯一神道の法も卽ち佛法なりと了達すれば、其の實は絶待の妙法なり、是れに違ふものは凡夫、是れに悟るものは卽ち神とも聖人とも佛とも申す、倶に皆大善人なり、國異なるが故に天竺にては佛と申し、支那にては聖人と申し、我國にては神と申す、名異にして體は一の善人なれば、所用更に違ふ事なし、依て此三何れにても、一つ非ぬれば三つの意に叶ふ、必ず一方に執著して、佛法を廢止すと思ふべからず、唯一神道繁昌なれば、卽ち佛法も繁昌なり、只少し見掛けが違ふ云ふの事也、必ず迷ふ事なかれ、然れば專ら佛の一法に執著して御上の御趣意に背けば、卽ち佛意にも背くなり、

臨時新談第二號

問、年來佛法を弘通し、大恩を蒙りながら、此度御上の御趣意に隨ひ還俗して、唯一神道に歸依すれば佛道に背くと云事如何、

答、佛の大恩を蒙りし故に佛意に背かざるよふと存じ、退て案ずるに我等如きの凡夫が、西方の極樂世界に生れんと欲はんものは、當に三福を修すべしと說き給ふ、其の第一が父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修すとありて、三福を修す事が、第一が孝養父母とあるからは、先づ國に取りては　王樣は下萬民の親なれば、やはり世界中の僧にも親なり、然るに此度其親が佛法はいらぬものだから止ろと申すを、強情にいやだと申せば、親の意に背く道理なり、依て親の意に背けば不孝になる、さうして見ると、強情に信心しても世界で道にかけた事をなせしものは、彌陀如來も極樂えは御連れ成されず候なり、是れは早く申して見れば、親に不孝をするものは人の姿と云ふぶんの事にて、全くは人にあらず、畜生も同樣なりと云へり、故に此の世の人にさいもなれぬものが、夫より上の佛になろふと申ても、夫れはとてもできる氣遣はなき事なれ(脱アラン)を信厚して極樂え往生だの、題目唱えて成佛をと望むものも、先此世の人間の道を立て、夫からでなければ成佛の道は得られぬなり、是の故に佛も父母の大恩を報ぜんが爲に父母恩重經を說き給へり、依て親に孝養するの一方を貫く時は、其人現世には安穩にして、後生は極樂なる事疑ひなし、さて其親に孝養を盡さんと欲するには、先我身を修める事が第一なり、假令親に侮

日美きものを喰せておくとも、我身を修めざれば是を不孝となす、故如何となれば、親程子を思ふものはなければ、子の身修らざれば親の方にては安心する事なし、故に孝に似ても終には不孝になるなり、依て親に孝を盡さんと欲するものは、兎も角も親に安心させるように心掛け申すべし、左すれば孝道全く具足するなり、然るに今は日本中の親たる所の國王の御趣意なれば、何れにても背かず御世の通り承伏して、　宸襟を安んぜさせられ候よふに、片時も早く致すが　王様え對し奉りての孝養なれば、此義に於て佛法を信ずるものは、何宗に限らず、心得違ひ是れなきように致したき事に候なり、斯の如くなれば自然と佛の御意にもかない申べきなり、

問、此度佛法御廢止同様の御觸に候得ば、是れが全く佛法の亡びる時至りしものか如何、

答、此度の御趣面にては、在家の信者などは成程佛法の亡びる時至りしやと思ふも尤もなれども、夫は佛法を信厚しても其の了解を得ざるものゝ申す事なり、故如何となれば、法は本より常にありて別にはやるものにもあらず、夫とすたれたのはやりたのと申すは、皆人の妄想よりして見る所にて、何れにしても、たれが自用にもならぬ所が法なり、依て何から何までも、よく〳〵づして書れたる日蓮上人も、南無妙法

蓮華經の法の字計りはくづし給はずと云へり、其通りにてどうしてもくづすことのできないのが法なり、夫を凡夫は迷の方より見るが故に、法がくづれたりと思ふなり、今の信者が法がすたれたりと思ふは、夫れは間違なり、法の廢れたるにはあらず、修行の人が廢れたるものなり、若人ありて佛法を彌々つぶしたりと申すものあれば、譬ば日輪に向て石を投て、其石日輪にはなか／＼あたらざれども、投たる當人は能く日輪にあたれりと思ふが如し、本來生ぜず滅せざる所の佛法を、暫く信厚の人でも世界に少なくなると、もはや佛法が廢れたりと云へ、亦は日本中に一人も佛法を信ずるものがなきようになれば、丸切佛法は根絶やしに成りしと思ふべき事なれども、夫れが凡夫の淺ましき所なり、佛法は法界に遍滿して三世の諸佛が護持し給ふなれば、大丈夫失ふきづかひは是なきなり、今日の凡夫は其わけを知らざる故に、佛法が御廢止になれば、つぶれると思ふて居る事は、譬ば、眼病の人が晴天に虚空より花がふると見るが如し、全く虚空より花がふるにはあらず、我眼病の故なり、依て佛法の亡びる時と申す事は決して是なき事なれば、若も亡びる時至しと思ふ事あれば、夫は凡夫の妄想よりして、左樣に思ふものなり、全く佛法は三世の諸佛が護持し給ふ、故につぶれると申事是なき趣き決定せり、然るに我等は又神國の神民

なれば、其の道を貴みて、有りがたき　王意に隨ふ方が順なれば、其の順道に趣きて、何事も御觸の通り速に御請致すが結構なる事に存じ候なり、元來昔し　勅命で佛法を弘通し、　勅命で寺ができたるものなれば、又此度は　勅命で佛法が御廢止になりて、　勅命で寺がつぶれる事にて、何から何まで　勅命の事なれば、少しも恨なしと存ずるなり、依て在家の信者も其通りにて、昔の先祖が昔の　王樣の　勅命によりて佛法を信厚して、今に及ぶまで永年相續すれども、又今の　王樣の勅命によりて佛法信厚を止れば更に私しなし、誠にどこからどこまでも、　勅命なれば、恨みなしと申す所が實に神國の貴き所なれども、此の通りに思ひ切て佛法を信ずる事を止るは出來難き事なれども、夫を忍んで唯一神道を信心する樣になれば、是が佛法で申さば忍辱の行と申して功德廣大なり、云々、

鶴峰新談第三章

一同年來神儒佛三道にて治め來り候所、此度僧に還俗仰せ付られ、唯一神道となし給ふ事は何故にて有るべきぞ、此義如何、

答年來神儒佛三道にて治め來り候所、此度僧に還俗仰せ付られ、唯一神道となし給

ふ事は何故にて有べきや、此義如何と云ふの間を承て、幼學の下僧默止するに忍びず、聊か危辯を以て酬答を成し申さんとなれば、夫れ今諸宗の僧たるもの佛弟子となりて居れども、皆是人は神道の人なり、其故如何となれば、先我國開闢の始め、天神七代の内、第七代目、二た柱の神天下り給へて、おのころじまにて、男神は左にめぐり、女神は右にめぐり給へて、先女神始て言ばあかしてのり給はく、汝おにはいかなる所ありやと、男神答てのり給はく、我體には肉のあまれる所四寸ありと、女神又言あかしてのり給はく、我體には肉の足らざる所四寸ありと、爰に於て夫婦となりて一子を生給へども、骨なしの御子故に、うつろの船にのせて海に流し給ふ、次に又本の如くめぐり給へて、此度は男神先に言葉をあかし和合し給へて生給へし御子を天照皇太神宮と申し奉る、夫より段々子々孫々繁昌して、地神五代を過て　神武天皇に至りて、始て王城と申す事を始め給へてより、次第に國開け人多く相成候に付、

神武天皇の御跡御相續の御代々を王と定め、其外の諸人を皆臣と定め給へしより、後次第に繁榮に付て、夫々の職をわけて、第一に御先祖御代々へ獻備物を捧げ祭り奉る役を神主とも禰宜とも申しける、今の神道と申すもの是なり、今の神道者は多くは自分計りが神道にて、僧及び士農工商の四民には神道にては是れなく、別の者

のよふに申すもの甚だ多し、是迄りの甚だしきなり、我国に於て行事に限らず行はれ候諸道諸藝悉く皆神道なり、一つとして神のなし給はざる道は是れなく、大神宮の產子多分に相成候に付、祭祠[祀カ下同ジ]の役を申付られたる子もあり、今の神道者是なり、士の役を申し付られたる子もあり、今の武士是なり、農の役を申し付られたる子もあり、今の百姓是なり、工の役を申し付られたる子もあり、今の職人是なり、商の役を申し付られたる子もあり、今の町人是なり、然るに中古以来佛法御競依の　王ありて、深く佛法を御信厚あらせられ、國民の内にて相へ傳へ執行致すべしと仰せ付られ候によりて、年來弘通いたし來り候事なれば、何れも其源を論ずる時は、一として神道の行にあらざる事なく、一として　王の命にあらざる事なし、更に私を以て行ふの家業ならんや、此師の　御上は佛法を嫌へ給ひて廢せられ候得ども、此佛法元來天竺の法なれども、是も日本に傳來して、　王樣が御自分のものとして御信厚ありて、其法を失はざるように、民に番を仰せ付られしものに候、　儒道とても其通りにて先　王樣の御信厚によりて、唐より儒書御取よせなされ候て、是は國家のために相成べくと思召されてより國に儒者と申ものを拵へて、是に番を申付られたるものなれば、何れも皆同樣なる依て今の　王樣は皆祭祠を命ぜられ候所のものにて、

今の世に唯一神道と稱し候ものを深く御信厚にて、國中の寺院に還俗を仰せ付られ、廢佛して　神武創業の始めに基せられ候上は、元より我等は何れにても　王樣に隨ふべきの民なれば、速に永年仰せ付置れ候所の佛法の番人を止めて還俗して、今の　王樣の仰せの通り唯一神道にならねば道にかけ申すべく候なり、とは申せども、愚僧初め年來染りし事を直に改めて、唯一神道になると申す事は、誠に難き事なれども、夫を思へ切て　王意に隨へ候を廣大の功德となす事で候、故に法華の分別功德品には能く是の經を持ち、兼て布施を行じ戒を持ち辱を忍ぶ事精進にして一心なれば、智慧も其德も最も勝れて無量無邊なり、譬ば虛空の東西南北四維上下の無量無邊なるが如し、是の人の功德に亦復是の如しとありて、明かに辱めを堪忍するものゝ功德を說き給ふ、何れの佛か是を信ぜざらんや、其の外諸經に廣く堪忍の功德を說き給へども、爰に略するのみ、但し此度僧一統に還俗仰せ付られ、唯一神道となし給ふ事は、深き御料簡在せられて、中古の御所致を悉く御廢止遊ばされて、

神武創業の始に基せられたるものなれば、自他宗の僧侶一統其の旨を深く思察し候へ、誠に有り難き事にはあらざる歟と、云々、

附

小僧云く、なんぼ功徳が廣大じやとて、おらは其よふにだまつては居られないへと申すに、老僧云く、夫だから小僧だ、爾ゆる寺の小僧に天狗八人と申すから、成程まけてだまつて居られないのは尤もじやなれども、其天狗が少しづつ修行するといつとれたか知れないように獨りとれ爾人とれすると、終には八人の天狗が皆とれてしまふと、夫からはけんかを仕掛られてもおこらぬよふになると、寺の小僧に天狗八人と云ふ名がとれて、終にはよき人なりと讃られるよふになると申す所が、取も直さず神とも聖人とも佛とも申すなり、何んと在家の同行衆、此噺しがわかりましたかねと、云々、

但し、此噺しの中に、小僧と申すは在家の信者を譬へて申し、老僧と申すは化導の善知識を譬へ、八人の天狗と申は煩悩を譬へたり、

神祇官建言

「江東雜筆」四 高砂山町正陰著作録

神祇官ヨリ建言寫

門脇神祇大祐建白

方今國家之大難、邪敎一條之儀ニ有之、一昨年來諸藩御預之邪徒、先般御下問之上、先說諭一般ニ御治定相成居候事ニ御座候處、倩中外之形勢ヲ考察仕候ニ、御一新以來、復古之勢ニ付而者、千歳固著之佛法、自廢棄之姿ト相成、隨而浮屠氏之不平人心ヲ動シ候ニ付、愚夫愚婦ノ痴情、佛法廢絕ト相成候而者、骨肉之愛著、死後ヲ弔ヒ、後世ヲ營候事等、自今有之間敷抔、不滿之心ヲ生シ候ヲ機會トシ、所謂水就下流之勢ニ乘シ、敎毒ヲ逞シ候ニ於而者、吾全國一般邪宗ニ陷候者必然之理ニ付、以是邪徒之大著眼ト仕候ハン事、巨火ニ擧而如視ニ御座候、橫濱以下諸港、追々邪敎傳習之形勢、別而蝦夷開拓地等之義、頃ニ不堪聞、於政府者、素ヨリ御承知之通ニ御座候、剩近來外國人頻ニ小兒買求、赤子之心反覆セサラシメン之術ヲ以、敎師ト仕立、駸々吾正民ヲ驅盡サント企候、深謀不可測知、此儘ニ而者、今年ヨリ來年、來年ヨリ三來年、滋蔓如何共不可爲ト奉存候、是等之儀、區々之管見、今更申上候迄モ無之、疾ヨリ朝廷深キ思召モ被爲在候義、昨夏御改正之砌、本官百官之首上ニ被爲置、祭政一致之御趣意ヲ體シ、終ニ宣敎使被爲建、尙政府ニ於而モ、一致戮力之場ニ進ミ、御配慮有之事ニ者御座候得共、兎角名實闇然ス可カラサル譯ニモ立至難ク候哉、祭政之體裁區別之姿ト相見、動スレハ

舊來之流弊、今維新之實効難相舉、加樣ニ而者、御趣意之末如何可有之哉ト奉伺候事ニ御座候、抑

皇道ヲ興起シ、國體ヲ維持候者、未禁遏ノ嚴制モ不相立、唯説諭一端而已ニ御座候而、如何之大難ヲ引請、本教ヲ宣布シ國體ヲ保候者、正ニ本官其路ニ相當候哉ニ御座候、然ニ當時之如、太政區別ニ有之、前件之大事ニ當候者、實ニ一髮千鈞ヲ挽カ如ク、所詮萬一ヲ關係見込更ニ無之、前途痛拔至極之事ニ御座候、何分國家之御大事、方今邪教之一事ニ有之候ニ付而者、祭政一致之御趣意、名實合體、神州之大本確定不拔之實迹相顯候樣、一段之廟議有之度、就而者先般御沙汰ニ出候御委任條之件ニ、先一箇之本根御確定之上、夫是本官之見込ヲモ御任用被爲在度、當今之急務實以不容易、須臾モ難被閣義ト奉存候ニ付、此段建言仕候、誠惶頓首云々、

八月日　　　　　神祇大祐平重綾謹上

御國體之本根者、敬神ニ有之儀、既ニ祭政一致之古儀ニ被爲復、神祇官百官最上ニ被建置候ニ而、顯然之事ニ候、然ルニ於而者、當官過當之大任事業不舉、唯徒ニ形而已ヲ存候儀、恐懼之至ニ不堪、加之頃年邪教蔓延之形勢相見、實以御國體ニ於テ不容易事ニ候、附テハ速ニ虚花之陋習一洗敬神之實効相立候儀、時勢必至之御急ニ有之候

處、

廟堂ニ於テ眞ニ祭政一致之御規模確然不被相立候而ハ、諸事虚文ニ渉リ、上下億兆信否甚無覺束、別而邪教焦眉之急、保全之前途痛案至極ニ御座候處、此砌門脇大祐建言之趣、元ヨリ官中一同符合之儀ニ付、前件之事御汲取被下、只管御體成敗之御大事、何分之

廟議偏ニ奉仰候也、

忠能　中山

資訓　白川

美静　福羽

隨光　北小路

重綾　門脇

延胤　平田

述信　小野

允信　遠藤

嚴雄　荻原

秀實　　大谷

別紙之通昨三日其筋に申立候間、爲御心得及廻達候也、

庚午

九月四日　　本官受付

明治維新神佛分離史料續編卷下終

明治維新 神佛分離史料總目錄

山城

大和

河内

和泉

攝津

伊勢

尾張

三河

遠江

駿河

伊豆

相模

武　藏

安房

上總

下總

常陸

近江

美濃

飛驒

信濃

上野

下　野

磐城

岩代

陸中

陸奥

羽前

羽後

若狹

越前

加賀

能登

越中

越後

佐渡

丹波

丹後

但馬

伯耆

出雲

石見

隱岐

播磨

美作

紀伊

阿波

讃岐

伊豫

土佐

筑前

筑後

豐前

豐後

肥前

日向

薩摩

壹岐

琉球

總說

神佛分離史料の編纂を了へて

辻善之助

神佛分離史料の編纂について、村上先生より命を蒙つたのは、大正九年の春の事であつた。爾來今日に至るまで、正に十年、こゝに正編續編合せて五卷、無慮五千七百頁の編纂を了ふることを得たのは、實に村上先生勸勵の賜物であり、また鷲尾順敬君協力の結果であると共に、各地方の神佛分離并に廢佛について調査報告を寄與せられた諸君の御蔭によるものである。謹で感謝の意を表する。

さて神佛分離の一般狀況については、既に上卷卷頭に於て、神佛分離の概觀と題して敍述しておいたのであるが、その後廢佛に對する政府の態度并に僧侶の覺醒について、之に關する材料も數百頁を集め得たので、之を揭載し併せて後跋の意味を以て、これについての愚見を錄載する積りで、既にその原稿も作り了へたのであつたが、豫定の頁數を越ゆること多きによつて、遺憾ながら割愛し、別に何等かの機會に於て、小著の内に收めて發表することゝした。讀者諸君の惡しからず諒解せられんことを乞ふ。

上田芳一郎
谷森淳子
鷲尾順敬
辻善之助
校

昭和四年七月五日印刷
昭和四年七月十日發行

明治維新 神佛分離史料續編奥付

定價 金貳拾四圓 全二卷

版權所有 不許複製

編者 村上專精
辻善之助
鷲尾順敬

發行者 東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社東方書院
右代表 三井晶史

印刷者 東京市芝區芝浦町二丁目三番地
長尾文雄

發行所 東京市下谷區上野櫻木町五十番地
電話下谷四二五九番
振替東京六八六壹壹番
株式會社 東方書院

（日進舍印刷・眞貝製本）

MA BOOK STORE
島書店
京・神田

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03033 9964